

NIHONGO
日本語
教師と学習者のための
文型辞典
BUNKEI ZITEN

【グループ・ジャマシイ 編著】
砂川有里子(代表)／駒田聡／下田美津子／鈴木睦
筒井佐代／蓮沼昭子／ベケシュ・アンドレイ／森本順子





くろしお出版

はじめに

皆さんはどんな時に辞典を使いますか。どんな漢字を書くのか分からないとき、意味が分からない名詞や動詞に出合ったとき、国語辞典は大変役にたちます。「うっかり」と「つい」の違いが知りたいときには、類義語辞典を引けば分かります。しかし、いままでの辞典では引けないこともたくさんあります。たとえば、「せっかく」という語が、「せっかく…からには」「せっかく…けれども」などの形で使われたときには、それぞれどのような意味を表すのか、「…にしてからが」「…にしたところで」などが、どのような発想で用いられるのか、「…ともかぎらない」「…わけではない」「…にちがいない」などの形式が文にどのような意味を添えるのか、といったようなことがらは、これまでの辞典では十分な扱いを受けてきませんでした。

この辞典では、文型を文や節の意味・機能・用法にかかわる形式という広い枠組みで捉え、それらが場面や文脈の中でどのように使われるのか分かるように記述することを試みました。これまでの辞典ではなかなか調べられなかったことばを調べたいときやこれまでの辞典ではなかなか得られなかった情報を得たいときに、この辞典は威力を発揮します。

この辞典には、『中・上級日本語教科書文型索引』(砂川有里子他編)と国際交流基金・日本国際教育協会による日本語能力試験1・2級レベルの出題基準サンプル「文法的な機能語の類」に収められた文型のすべてに新聞・雑誌・小説・シナリオなどから集めた文型を加えた3000項目の表現が収録されています。中級レベル以上の日本語学習者に問題となる文型をかなり網羅的に集めることができたと言えるでしょう。外国語として日本語を学ぶ人にも分かるように、平明簡潔な表現を心がけたほか、以下のような点に留意しました。

(1) 用例によって使い方が分かるよう、できるだけ多くの作例を用意した。
(2) 常用漢字以外の漢字は使用しないよう努め、用例の漢字にはルビをふった。
(3) 間違いやすい点にも留意してもらうために、必要に応じて解説中に誤用例を提示した。

（4）文型の構造・文型の使用場面・類義表現との使い分けなど、日本語学習に役立つことがらをできるかぎり取り上げた。
（5）「なんて言ったっけ」の「っけ」や「できっこない」の「っこない」など、話しことば特有の表現も積極的に取り上げた。
（6）調べたい項目を見つけやすくするために、「50音順索引」「末尾語逆引き索引」「意味・機能別項目索引」の３種の索引を用意した。

この辞典の構想を立ててから、早くも８年の歳月が過ぎ去りました。気まぐれな編著者たちがこの仕事を成し遂げられたのは、多くの方々の支えと励ましのおかげです。とりわけ、休日返上と残業に明け暮れながらこの仕事に取り組んで下さったくろしお出版の福西敏宏さんがいなければ、この辞典は完成しなかったでしょう。三戸ゆみ子さん、佐藤陽子さんにも大変お世話になりました。阿部二郎さんをはじめとする編集協力者、そして折に触れて相談に乗って下さった友人・同僚たちに心から感謝いたします。

この辞典が、外国語として日本語を学ぶ方々、日本語の教師の皆さん、そして日本語の使い方に興味を持つ方々のお役に立つことを願ってやみません。

1998年２月

編著者一同

編著者：グループ・ジャマシイ
砂川有里子(代表)　駒田聡　下田美津子　鈴木睦　筒井佐代
蓮沼昭子　ベケシュ・アンドレイ　森本順子

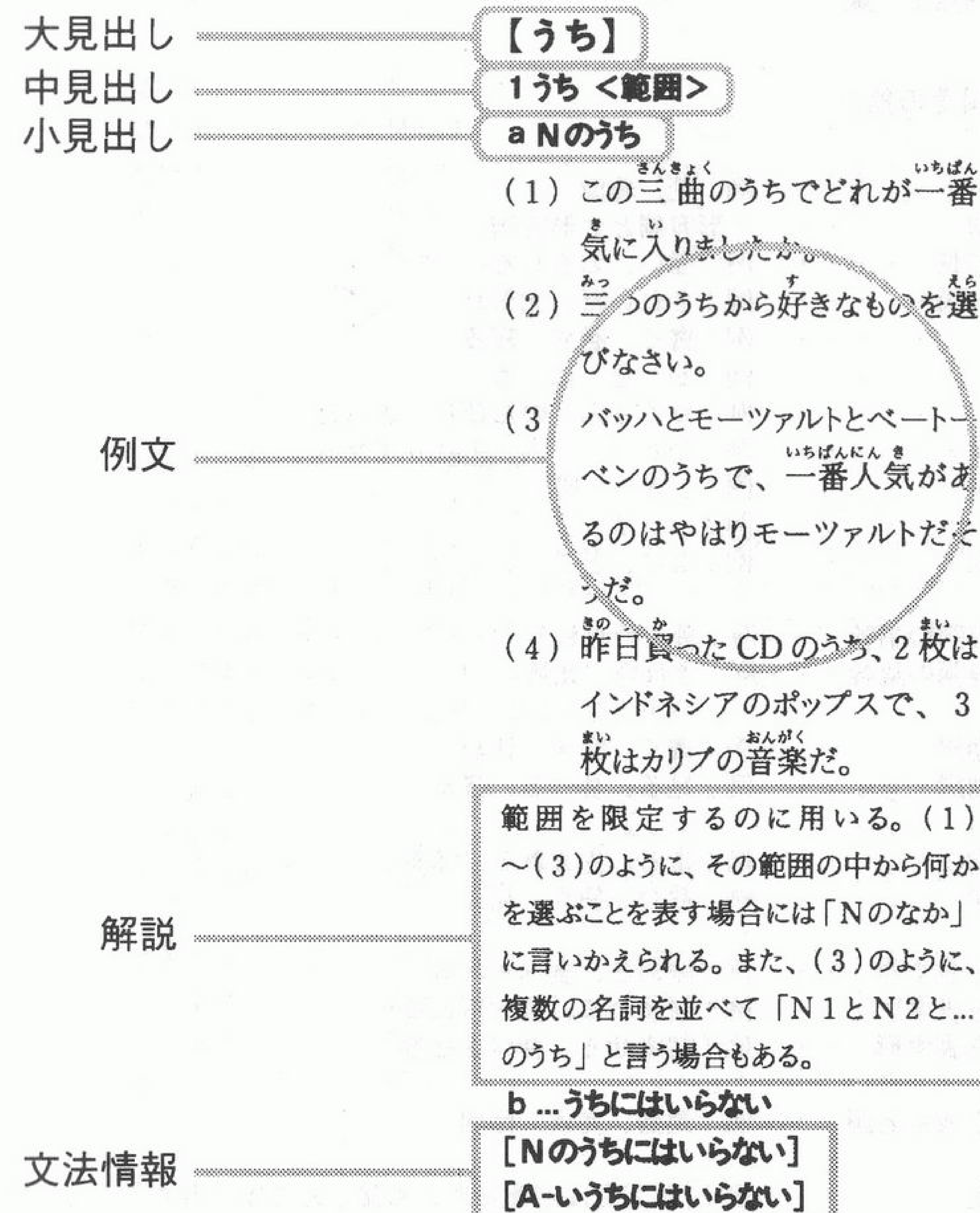
編集協力者：
阿部二郎　小野正樹　亀田千里　高木陽子　成瀬真理　守時なぎさ

凡例

この辞典の構成と使い方

1　見出しは「大見出し」「中見出し」「小見出し」の三つからなっています。下の例に示すように、中見出しには「１，２，３」、小見出しには「ａ，ｂ，ｃ」の記号が付いています。

2　文法的な情報は、中見出しと小見出しに記号を用いて示しました。見出しに文法記号を使うと煩雑になりすぎる場合は、［　］内に示してあります。



3 大見出しの配列は50音順です。中見出し、小見出しはその限りではありません。

4 「てはいけない」「とする」などの複合化の進んだ形式は、そのままの形で見出しを立てました。国語辞典では「いけない」「する」を引くのが普通ですが、この辞典では「てはいけない」「とする」のもとに記述してあります。「いけない」「する」からもたどれるようになっていますので、とりあえず、思いついた形を引いてみて下さい。

5 巻末に「50音順索引」と、「末尾語逆引き索引」、また付録として「意味・機能別項目索引」が付いています。探したい項目が見つけにくい場合、あるいは、意味や機能を手掛りにして表現形式を知りたい場合や末尾の形式から検索したい場合にご利用ください。

文法用語一覧

<品詞その他>

名詞・・・・・・・ 例：花、希望
形容詞・・・・・・ イ形容詞とナ形容詞
イ形容詞・・・・・ 例：暑い、おもしろい
ナ形容詞・・・・・ 例：きれいだ、元気だ
動詞・・・・・・・ 例：書く、話す、寝る
助詞・・・・・・・ 例：が、を、は、も
副詞・・・・・・・ 例：たくさん、のんびり、きっと
数量詞・・・・・・ 例：ひとつ、一人、１００グラム
助数詞・・・・・・ 例：…人、…冊、
数詞・・・・・・・ 例：１　２　３
疑問詞・・・・・・ 例：なに、どこ、いくつ

イ形容詞の語幹・・・例：暑、おもしろ
ナ形容詞の語幹・・・例：きれい、元気

五段動詞・・・・・ 例：書く、話す、休む
一段動詞・・・・・ 例：見る、食べる、寝る

自動詞・・・・・・ 例：走る、生まれる、降る
他動詞・・・・・・ 例：飲む、使う、見る

可能を表す形・・・ 例：読める、食べられる
受身を表す形・・・ 例：読まれる、食べられる
使役を表す形・・・ 例：読ませる、食べさせる

動作を表す名詞・・ 例：運動、完成、修理

動作主・・・・・・ 例：「お父さんが叱った／お父さんに叱られた」の「お父さん」

<文体と活用形>

（１）普通体

	名詞＋だ	ナ形容詞	イ形容詞
辞書形	休みだ	きれいだ	おもしろい
タ形	休みだった	きれいだった	おもしろかった
テ形	休みで	きれいで	おもしろくて
バ形	休みならば	きれいならば	おもしろければ
否定形	休みじゃない	きれいじゃない	おもしろくない
	休みではない	きれいではない	

	五段動詞	一段動詞	来る	する
辞書形	書く	見る	くる	する
連用形	書き	見	き	し
タ形	書いた	見た	きた	した
テ形	書いて	見て	きて	して
バ形	書けば	見れば	くれば	すれば
否定形	書かない	見ない	こない	しない
命令形	書け	見ろ	こい	しろ
意向形	書こう	見よう	こよう	しよう

（２）丁寧体

	名詞＋です	ナ形容詞	イ形容詞
デス形	休みです	きれいです	おもしろいです
タ形	休みでした	きれいでした	おもしろかったです
否定形	休みじゃないです	きれいじゃないです	おもしろくないです
	休みじゃありません	きれいじゃありません	おもしろくありません
	休みではないです	きれいではないです	
	休みではありません	きれいではありません	

	五段動詞	一段動詞	来る	する
マス形	書きます	見ます	きます	します
タ形	書きました	見ました	きました	しました
テ形	書きまして	見まして	きまして	しまして
否定形	書きません	見ません	きません	しません
命令形	書きなさい	見なさい	きなさい	しなさい
意向形	書きましょう	見ましょう	きましょう	しましょう

記号一覧

＜文法関連の記号＞

（1）名詞

N・・・・・・　名詞句・・・・・・　例：花、人、希望、きのう会った人、人に会ったこと

（2）ナ形容詞

Na・・・・・　ナ形容詞の語幹・・・　例：きれい、静か、元気

（3）イ形容詞

A　・・・・　普通体のイ形容詞・・　例：暑い、暑くない、暑かった
例えば「Aそうだ」は「暑いそうだ、暑くないそうだ、暑かったそうだ」などを表す。

A-　・・・・　イ形容詞の語幹・・・　例：暑、おもしろ、楽し
例えば「A-そうだ」は「暑そうだ、おもしろそうだ、楽しそうだ」などを表す。

A-い・・・・　イ形容詞の辞書形・・　例：暑い、おもしろい、楽しい

A-く・・・・　イ形容詞のク形・・・　例：暑く、おもしろく、楽しく

A-くない・・　イ形容詞の否定形・・　例：暑くない、おもしろくない、楽しくない

A-くて・・・　イ形容詞のテ形・・・　例：暑くて、おもしろくて、楽しくて

A-かった・・　イ形容詞のタ形・・・　例：暑かった、おもしろかった、楽しかった

A-かろう・・　イ形容詞の推量形・・　例：暑かろう、おもしろかろう、楽しかろう

A-かったろう・・イ形容詞の過去推量形・・・
例：暑かったろう、おもしろかったろう、楽しかったろう

A-ければ・・　イ形容詞のバ形・・・　例：暑ければ、おもしろければ、楽しければ

（4）動詞

V　・・・・　普通体の動詞・・・・　例：書く、書かない、書いた
例えば「Vそうだ」は「書くそうだ、書かないそうだ、書いたそうだ」などを表す。

R-・・・・・　動詞の連用形（動詞のマス形から「マス」を除いた形）・・・
例：書き、読み、見、来、し
例えば「R-そうだ」は「書きそうだ、来そうだ、しそうだ」などを表す。

V-る・・・・　動詞の辞書形・・・　例：書く、読む、見る、来る、する

V-た・・・・　動詞のタ形・・・・　例：書いた、読んだ、見た、来た、した

V-たろう・・　動詞の過去推量形・・　例：書いたろう、読んだろう、見たろう、来たろう、したろう

V-ない・・・　動詞の否定形・・・　例：書かない、読まない、見ない、来ない、しない

V-て・・・・　動詞のテ形・・・・　例：書いて、読んで、見て、来て、して

V-ば・・・・　動詞のバ形・・・・　例：書けば、読めば、見れば、来れば、すれば

V-よう・・・　動詞の意向形・・・　例：書こう、読もう、見よう、来よう、しよう

V-れる・・・　可能を表す形・・・　例：書ける、読める、見られる、来られる、できる

V-られる・・　受身を表す形・・　例：書かれる、読まれる、見られる、来られる、される

V-させる・・　使役を表す形・・・　例：書かせる、読ませる、見させる、来させる、させる

＜その他の記号＞

／・・・・・・「または」の意味。
例：[N／Naになる] は「[Nになる] または [Naになる]」、[V-たあと に／で] は「[V-たあとに] または [V-たあとで]」を示す。

（　）・・・・「あってもなくてもよい」の意味。
例：「それゆえ（に）」は「それゆえ」「それゆえに」どちらも可能。

《　》・・・・　用例が使用される場面や状況を示す。
例：《手紙》まずはご報告まで。

[　]・・・・　文型の文法情報を示す。
例：[あまりV-ない]

＜　＞・・・・文型の意味や機能を示す。
例：…みたいだ＜推量＞、V-てくれない（か）＜依頼＞

(例)・・・・　解説中の用例を示す。

(誤)・・・・　間違った用例であることを示す。

(正)・・・・　正しい用例であることを示す。

→　・・・・参照してほしい項目を示す。

下付き数字・・同形の大見出しが二つ以上ある場合に用いる。
例【のに$_1$】【のに$_2$】

日本語文型辞典

【あいだ】

1 Nのあいだ

a Nのあいだ <空間>

（1）ステレオと本棚の間にテレビを置いた。
（2）古本を買ったら、ページの間に1万円札がはさまっていた。
（3）大阪までの間のどこかで駅弁を買って食べよう。

二つの場所・物にはさまれた空間を表す。両方を示す場合は（1）のように「NとNのあいだ」を使う。

b Nのあいだ <関係>

（1）最近二人の間はうまくいっていないようだ。
（2）そのホテルは安くて清潔なので、旅行者たちの間で人気がある。
（3）二つの事件の間にはなにか関係があるらしい。

「複数の人やことがらの関係の中で」という意味を表す。そこでの状態や動作、そこで起こる出来事などを述べるのに用いる。

2 あいだ <時間>

a …あいだ

[Nのあいだ]
[A-いあいだ]
[V-ている/V-る　あいだ]

（1）彼は会議の間ずっといねむりをしていた。
（2）彼女が戻ってくるまでの間、喫茶店で本を読むことにした。
（3）一生懸命泳いでいる間はいやなことも忘れてしまう。
（4）子供が小さい間は、なかなか夫婦での外出ができなかった。
（5）友子は、大阪にいる間は元気だったが、東京に引っ越したとたんに体をこわしてしまった。
（6）私たちがお茶の用意をする間、彼らは緊張して一言もしゃべらずに座っていた。

ある状態、動作が続いている期間を表す。後にはその期間中継続する状態や並行して起こっている動作を表す文が続く。後の文の述語は、動作を表す動詞の場合は「V-ている」「V-つづける」など継続の意味を表す形になる。

（誤）私が勉強している間、弟は遊んだ。
（正）私が勉強している間、弟は遊んでいた。

過去のことについて言う場合は「V-ていた/A-かった　あいだ」の形も用いられる。

（例）彼はドイツに留学していた間、スウェーデン人の女の子と一緒に生活していたらしい。

b …あいだに

[Nのあいだに]
[Naなあいだに]
[A-いあいだに]
[V-ている/V-る　あいだに]

（1）留守の間にどろぼうが入った。
（2）4時から5時までの間に一度電話をください。
（3）家族がみんな寝ている間に家を出ることにした。
（4）リサが日本にいる間に一緒に旅行したかったのだが、残念ながらできなかった。
（5）私がてんぷらを揚げる間に、母はおひたしと酢の物と味噌汁まで作ってしまった。
（6）あそこも日本人旅行者が少ない間に行っておかないと、きっとすぐに開発されて日本人だらけになるだろう。
（7）祖母が元気な間にいろいろ話を聞いておこう。

ある状態・動作が続いている期間を表す。後にはその時間内に行われる動作、起こる事態などを表す文が続く。後の文の述語は動詞で、「…する」「…しはじめる」「…になる」など、継続を表さない形になる。

（誤）授業の間にずっとおしゃべりをしていた。
（正）授業の間に3回質問をした。

過去のことを言う場合は「…たあいだに」の形も用いられる。（5）のように、前と後ろの動作主が異なる場合は、二人が同時に並行して動作を行うという意味になる。

【あいまって】

→【とあいまって】

【あえて】

1 あえて

（1）私はあえてみなさんに規則の見直しを提案したいと思います。
（2）誰も助けてくれないかもしれないが、それでもあえてこの計画は実行に移したいと思う。
（3）恥を忍んであえてお聞きしますが、今のお話のポイントは何だったのでしょうか。
（4）反感を買うのを承知であえて言いたいのは、彼らにこの仕事を任せるのはリスクが大きいということだ。
（5）これができるのはあなたしかいないから、負担をかけることはわかっていても、あえてお願いしているのです。

「言う/提案する/お願いする」などの発言を表す動詞や「やる/実行する」などの動詞を伴って、「そうすることは他の人の反感を買ったり困難や危険を伴ったりするが、それでも自分はそうしたい、そうするべきだ」という意味を表す。自分の意見を強く述べたり自分の考えを打ち出したりするのに用いられる。

2 あえてV-ば

（1）反対されるのを承知であえて言えば、こんな計画は百害あって一利なしだ。
（2）少々言いにくいことなのです

が、あえて言わせていただければ、お宅のお子さんは他の学校に変わられた方がいいのではないかと思うのですが。

（3）この映画はあまりストーリー性がないのだが、あえて説明すれば、二組のカップルがあちらこちらを旅して回り、行く先々で事件が起こるというものだ。

（4）まだこのプロジェクトの方針は漠然としているのだが、あえて言うとすれば、環境破壊が進んでいる地域に対して、民間の援助によってそれを食い止めようというものだ。

「言う／お話しする／説明する」など発言を表す動詞を伴って、反論・批判を覚悟の上で発言したいとき、また、的確な表現が見つからない場合、その前置きとして用いる。

3 あえて…ない

（1）そのやり方にあえて反対はしないが、不満は残っている。

（2）相手が偉い先生だからといって、あえてへりくだる必要もない。

（3）親に反対されてまで、あえて彼と結婚しようとは思わない。

（4）みんなに嫌がられてまで、あえて自分の方針を押し通すこともないじゃないか。

「する必要もない／することもない／しようとは思わない」などの表現を続けて、そういうことをすると他の人に反対されたり反感を買ったりするので、わざわざそういう危険なことをしようとは思わない、あるいは、すべきでない、という意味を表す。

【あがる】

1 R-あがる ＜上方向＞

（1）彼は立ち上がってあたりを見回した。

（2）妹は帰ってくるなり階段を一気にかけ上がって、自分の部屋に飛び込んだ。

（3）彼女はライバルを押しのけて、スターの座にのしあがった。

（4）政治学の先生はひたいがはげ上がっている。

（5）冬休みにみんなで温泉に行こうという計画が持ち上がった。

（6）ツアーの申し込み人数が少なすぎるので、家族連れで参加できることにしたら、人数が倍以上にふくれ上がって旅行会社は困っている。

（7）彼女はボーイフレンドにプロポーズされてすっかり舞い上がっている。

（8）自分がリーダーになればみんなついてくるに決まっているだって？ 思い上がるのもいい加

減にしろ。

動詞の連用形に付いて、上の方向への動作・移動、上の方向に向いている状態を表す。（5）〜（8）は、上の方向への意味での比喩的な表現。

2 R-あがる ＜極端な程度＞

（1）長い間雨が降らないので、湖も干上がってしまった。

（2）店員は男にピストルを突きつけられてふるえ上がった。

（3）ふだんほとんど叱らない先生をバカにしていた生徒は、タバコを吸っているのを見つかって大声でどなりつけられ、縮み上がっていた。

（4）その俳優は、たいして演技もうまくないのに周りの人たちにおだてられて、自分は誰よりも才能があるんだとのぼせ上がっている。

動詞の連用形に付いて動詞の事態が極端な程度にまで進むことを表す。限られた動詞にしか用いられない。

3 R-あがる ＜完成＞

（1）パンがおいしそうに焼きあがった。

（2）みんなの意見を取り入れて、とても満足のいく旅行プランができあがった。

（3）スパゲッティがゆであがったら、すばやくソースにからめます。

（4）注文していた年賀状が刷りあがってきた。

動詞の連用形に付いてその動作が完成されることを表す。「編む」「練る」「刷る」など、ものが作られることを表す他動詞に付くのが普通。自動詞の「できる」は例外である。

【あくまで】

1 あくまで（も）＜意志＞

（1）私はあくまでもこの方針を貫くつもりだ。

（2）国連はあくまでも平和的な解決に向けて話し合いを続ける考えです。

（3）彼はあくまでも知らぬ存ぜぬで押し通すつもりらしい。

（4）彼女があくまでいやだと言い張ったので、他の候補を探さなければならなくなった。

意志的な行為を表す動詞が続き、どんなに困難でも、いくら反対されても、思ったことをやろうという強い決意を表す。かたい表現。

2 あくまで（も）＜主張＞

（1）私が今申し上げたことはあくまでも試案ですので、そのおつもりで。

（2）それはあくまでも理想論に過ぎず、実現は不可能なのではないか。

（3）この家はあくまでも仮の住まい

で、ここに永住するつもりはない。

（4）断っておくが、彼とはあくまでも仕事の上の仲間でしかなく、それ以上の個人的なつきあいはいっさいしていないのだ。

あることがらについて、自分の信念を強く断定・主張する気持ちを表す。一般的に予想されること、あるいは聞き手の抱いている判断・信念・期待などを否定・修正するのに用いられることが多い。

3 あくまで(も) ＜強い程度＞

（1）空はあくまでも青く澄み渡り、砂浜はどこまでも白く続いていた。

（2）どんなに疲れている時でも、彼はあくまでも優しかった。

（3）あくまで広い見渡すかぎりの菜の花畑の中に、真っ赤な服を着た女の子が一人立っていた。

徹底的にそういう状態であることを表す。文学的な表現。

【あげく】

1 …あげく

[Nのあげく]

[V-たあげく]

（1）さんざん悩んだあげく、彼には手紙で謝ることにした。

（2）考えに考えたあげく、この家を売ることに決めた。

（3）弟は6年も大学に行って遊びほうけたあげくに、就職したくないと言い出した。

（4）それは、好きでもない上司の御機嫌を取ったり、家族に当たり散らしたりの大騒ぎをしたあげくの昇進であった。

（5）姉は籍を入れないだの一緒に住まないだのと言って親と対立し、すったもんだのあげくにようやく結婚した。

後ろに何らかの事態を表す表現を伴って、前で述べた状態が十分長く続いた後にそのような結末・解決・展開になったという意味を表す。その状態が続くことが精神的にかなりの負担になったり迷惑だったりするような場合が多い。（5）のように「あげくに」の形も使われる。名詞の前では（4）のように「あげくのN」となる。

2 あげくのはてに(は)

（1）部長はますます機嫌が悪くなり、あげくの果てには関係ない社員にまでどなり散らすようになった。

（2）彼女は我慢に我慢を重ねたあげくの果てに、私のところに相談に来た。

長い間ある状態が続き、それが限界に来たときにその結果として起こることを述べるのに用いる。良くない状態の場合が多い。

【あげる】

1 R-あげる ＜上方向＞

（1）男は大きな岩を軽々と持ち上げた。

（2）先生に漫画の本を取り上げられた。

（3）彼女が髪をかき上げる仕草を見ているのが好きだ。

（4）彼女はあたりかまわず声をはり上げて泣きわめいた。

（5）その土地は自治体が買い上げて大きな遊園地を作ることに決まった。

動詞の連用形に付いて、対象を上の方向へ移動させる動作であることを意味する。（4）（5）のように比喩的にも用いられる。

2 R-あげる ＜完成＞

（1）大事なお客さんが来るので、母は家中をぴかぴかにみがき上げた。

（2）彼は原稿用紙500枚の小説を一気に書き上げた。

（3）クリスマスまでに何とかセーターを編み上げてプレゼントしようと思っていたのに。

（4）刑事は犯人をロープで身動きできないようにしばり上げた。

（5）みんなで一晩中かかってまとめ上げたデータが何者かに盗まれた。

（6）この織物は草や木の根などを集めてきて染めた糸で丹念に織り上げたものだ。

（7）何年もかかって築き上げてきた信頼が、たった一度の過ちで崩れてしまった。

動詞の連用形に付いて、その行為を完全に最後まで達成することを表す。「書く」「編む」のような作成を表す動詞の場合は完成させる意味になる。努力してやりとげるという意味合いが含まれることが多い。

3 R-てあげる →【てあげる】

【あたかも】

[あたかもN(であるか)の　ようだ]

[あたかもN(であるか)の　ごとし]

[あたかもVかの　ようだ]

[あたかもVかの　ごとし]

（1）その日はあたかも春のような陽気だった。

（2）人生はあたかもはかなく消える夢のごときものである。

（3）彼は、あたかも自分が会の中心人物であるかのように振る舞っていた。

（4）彼女はいつも、あたかも目の前にその光景が浮かび上がってくるかのような話し方で、人々を魅了する。

（5）その人は、あたかもファッション

雑誌からそのまま抜け出してきたかのような最新流行のファッションで全身を飾って、パーティーに現れた。

（6）大火事がおさまると、街はあたかも空襲で焼き払われたかのごとく、ビルも家も跡形もなく燃え尽きてしまっていた。

ある状態を他の状態に例えて説明するのに用いられ、それが実際には違うがたいへんよく似ている様子であることを表す。くだけた話しことばではほとんど使われず、小説や書きことばで使われる。話しことばでは「まるで」を使う。「ごとし」は文語で、「ごとき」「ごとく」のように活用する。

【あっての】

［Nあってのｎ］

（1）学生あっての大学だ。学生が来なければ、いくらカリキュラムが素晴らしくても意味がない。

（2）私を見捨てないでください。あなたあっての私なんですから。

（3）お客あっての商売なんだから、まずお客さんのニーズに応えなければならないだろう。

「XあってのY」の形で、「XがあるからYも成り立つ」という意味を表す。「XがなければYは成り立たない」という含みをもつ。Xには人を表す名詞が用いられるのが普通。

【あと1】

1 あと ＜空間＞

［Nのあと］

［V-る／V-た　あと］

（1）みんな私の後についてきてください。

（2）彼が走っていく後を追いかけた。

（3）観光客が去ったあとには、お菓子の袋や空きかんが散らばっていた。

（4）チューリップを抜いたあとに見たこともない草が生えてきた。

空間的に、あるものの後ろという意味を表す。（4）は「抜いたその場所」の意味だが、2ｂの＜時間＞の用法と解釈することもできる。次の「…をあとにして」は慣用句で、「…を離れる」の意味。

（例）彼は、ふるさとの町を後にして、都会へ出ていった。

2 あと ＜時間＞

a …あと

［Nのあと］

［V-たあと］

（1）試験の後はいつも気分が落ち込む。

（2）今日は夕食の後、友達と花火をすることになっている。

（3）パーティーが終わったあとの部屋はとても散らかっていた。

（4）彼はアルバイトをやめたあと、特にすることもなくて毎日ぶらぶらしている。

（5）彼女は新しい上司についてひとしきり文句を言ったあとは、けろっとして何も不満がないかのように働いていた。

一つのことがらが終わった段階であることを表し、後ろにはその時の状態やその次に起こることがらが続く。

b …あと　（で／に）

［Nのあと　で／に］

［V-たあと　で／に］

（1）田中さんにはお世話になったから、引っ越しの後で改めてお礼にうかがおう。

（2）映画を見たあとでトルコ料理を食べに行きましょう。

（3）友達と旅行の約束をしてホテルも予約してしまったあとで、その日が実は出張だったことを思いだした。

（4）食事を済ませたあとに1時間ほど昼寝をした。

（5）みんなが帰ってしまったあとには、いつも寂しい気持ちにおそわれる。

（6）詳しい釈明を聞いた後にも、やっぱりおかしいという疑念は残っていた。

「そののちに」という意味を表す。時間の流れの中でことがらを順に追いかけて述べるのに用いる。

c V-たあとから

（1）募集を締め切ったあとから応募したいと言ってこられても困る。

（2）新製品の企画を提出したあとから、新しい企画は当分見合わせたいと上司に言われてがっかりした。

「あることがらがすんでしまってから」という意味で、そののちにそれをくつがえすようなことが起こることを述べるのに用いる。

【あと2】

1 あと

（1）料理はこのくらいあれば十分ですね。あと、飲み物はこれで足りますか。

（2）以上でだいたい分かったと思いますが、あと、何か質問はありませんか。

（3）A：メンバーはこれだけですね。

B：あ、あと、もしかしたら田中さんも来るかもしれないと言っていました。

文や節の頭に現れ、会話の中で、その状況に必要なことがらを思い出してつけ加えるときに用いる。

2 あと＋数量詞

（1）その仕事を片づけるにはあと3日で十分です。

（2）あと二人そろえば野球チームが作れる。

（3） あと10メートルでゴールインというところで、その選手は倒れてしまった。

（4） あと少しで終わりますので、待っていただけますか。

今の状態に一定の数量が加わることを表す。その数量が加われば、あることがらが成立するための条件が整うということを表す場合に用いる。それを逆に考えると、以下のように残りの数量を表すことになる。

(例) 卒業式まであと1週間だ。←あと1週間で卒業式だ。

(例) ビールはもうあと2本しかない。←あと2本でビールはなくなる。

(例) サラダがあと少し残っていますが、誰か食べませんか。←あと少しでサラダも終わりです。

【あとから】

（1） あとから文句を言われても困るので、何か言いたいことがある人は今のうちに出してください。

（2） 入学試験の合格通知が来たので喜んでいたら、あとからあれはまちがいだったという知らせがきて、がっくりした。

（3） ツアーに参加したいという人があとからあとから出てきて、調整するのに困った。

あることが一段落したり終わったりしたのに、またそれに関わること、それをくつがえすようなことが起こることを言うのに用いる。

【あとで】

（1） あとでまた電話します。

（2） あとで一緒に食事しませんか。

（3） A：おかあさん、お人形の首がとれちゃった。直してよ。
B：はいはい、あとでね。
A：あとじゃなくて今。
B：今忙しいんだから、ちょっと待ちなさい。

発話時より以後の時点を表す。（3）のように、今すぐしたくないことについて、断るのに用いられることもある。

【あとは…だけ】

（1） メンバーはほとんどそろって、あとは田中さんだけなのだが、なぜか予定の時刻を過ぎても現れる気配がない。

（2） 料理は全部できあがったし部屋も片づいたし、あとはみんなが来るのを待つばかりだ。

（3） コンサートのプログラムもとどこおりなく進み、あとは最後の難曲を残すのみとなった。

後ろに「だけ／のみ／ばかり」をともなって、あることがらが成立するための条件を表す。ほとんどの条件はそろっていて、残っている条件はわずかであることを表すのに用いる。

【あまり】

話しことばで強めるときには「あんまり」となる。

1 あまり／あんまり …ない

[あまり Na ではない]

[あまり A-くない]

[あまり V-ない]

（1） 今はあまりおなかがすいていないので、ケーキはいりません。

（2） 弟はあまり背が高くないので、女の子にもてない。

（3） このごろあんまり映画を見ていない。

（4） けさはあまりごはんを食べなかった。

（5） 今日はあんまりお金がないので、CDを買うのは今度にしよう。

後ろに否定の表現を伴って、程度が高くないことを表す。動詞に付く場合は、頻度が高くないことや量が多くないことを表す。

2 あまり／あんまり

a あまりに(も)
あんまり(にも)

（1） あまりにおかしくて涙が出た。

（2） ゆったりしたシャツは好きだが、これはあまりにも大きすぎる。

（3） ここのカレーはあまりにまずくて、とても食べられたものではない。

（4） その人の申し出はあまりにも急な話だったので、すぐにOKするのはためらわれた。

（5） 彼があまりに僕の失敗を笑うから、だんだん腹が立ってきてなぐってしまった。

形容詞に付くのがふつうだが（5）のように動詞に付くこともある。形容詞や動詞の表す程度が常識から考えて激しすぎることを表す。非難・マイナスの気持ちを表すことが多い。「…すぎる」が続くことも多い。また、後ろに「…て／ので／から」を伴って、程度が高すぎることから必然的に起こることがらや、そこから引き出される判断・結果などを述べることも多い。

b あまりのN　に／で

（1） あまりの驚きに声も出なかった。

（2） 海水浴に行ったが、あまりの人出でぐったり疲れてしまった。

（3） あまりの問題の複雑さに、解決策を考える気力もわかない。

（4） あまりの忙しさに、とうとう彼は体をこわして入院するはめになってしまった。

程度の意味を含む名詞に付いて、「その程度が高すぎるために」という意味を表す。後半にはそれが原因で必然的に起こる結果を述べる表現が続く。

（誤）あまりの宿題に頭が痛くなった。
（正）あまりの宿題の多さに頭が痛くなった。

c あまりに（も）…と
あんまり（にも）…と

（1）あまりボリュームを上げると隣の人が文句を言いに来るから気をつけてね。
（2）あまりに安いとかえって心配だ。
（3）大きいバッグは便利だけど、あまりにも大きいと、中身をたくさん入れすぎて重くなって持ち歩くのがいやになるから、適当な大きさにした方がいいだろう。

程度が高すぎることを述べる。後半にはそこから必然的に起こる結果を述べる表現が続く。

d …あまり（に）
[Nのあまり（に）]
[V-るあまり（に）]

（1）母は悲しみのあまり、病の床に就いてしまった。
（2）彼は驚きのあまりに、手に持っていたカップを落としてしまった。
（3）忙しさのあまり、友達に電話をしなければならないのをすっかり忘れていた。
（4）子供のことを心配するあまり、つい下宿に電話しては嫌がられてしまう。
（5）何とか逆転しようと焦るあまり、かえってミスをたくさん犯してしまった。
（6）彼女は彼のことを想うあまりに自分のことを犠牲にしてしまっている。

感情や状態を表す名詞や動詞に付いて、その程度が極端であることを表し、後半ではそのために起こってしまった良くない結果を述べる。

3 数量詞＋あまり

（1）その会の出席者は100名あまりだった。
（2）そこから5キロあまりの道のりを歩くだけの元気は残っていなかった。
（3）事故発生から2カ月あまりが経って、ようやく原因が突き止められた。

その数よりもいくらか多いことを表す。厳密な数には付かない。書きことば的。

（誤）ベーコンを235グラムあまり買った。
（正）ベーコンを200グラムあまり買った。

4 …なんてあんまりだ

→【あんまり】3

【あらためる】

[R-あらためる]

（1）この文章の内容を子供向けに書き改めてくださいませんか。

（2）その泥棒は自分のしたことを悔い改めて、まともな仕事についた。

動詞の連用形に付くが、付く動詞は限られている。元のものの欠点を直して、一から新しいものに変えることを表す。

【あるいは】

書きことば的な表現。あらたまった話しことばでも使われる。

1 あるいは

a N（か）あるいはN

（1）黒あるいは青のペンで記入してください。
（2）欠席する場合には、口頭かあるいは書面で届け出ること。
（3）このクラブの施設は、会員あるいはその家族に限り、使用することができます。
（4）応募は、25歳以上、あるいは20歳以上で、職業をお持ちの方に限ります。
（5）被害者は、包丁あるいは登山ナイフのようなもので殺害されたらしい。

「X（か）あるいはY」の形で使われて、「XかYのどちらか」という意味を表す。（1）（2）のように、「XでもYでもよいが、どちらか一方を選びなさい」という指示を与える場合によく使われる。また、（3）（4）のように条件を示す場合に使われて、「XかYのどちらかに当てはまればよい」という場合に使う。（4）の場合、XでもYでも、XY両方の条件に当てはまっていてもかまわない。（5）は、「XY二つの可能性があって、どちらかわからない」というような場合によく使われる。

似た表現に「XかY」「XまたはY」「XもしくはY」がある。日常の話しことばでは「XかY」が、よく使われる。

b …か、あるいは

（1）申し込み書類は、郵送するかあるいは事務所まで持参してください。
（2）A：福岡へは、どうやって行ったらいいですかね。
　　B：そうですね。新幹線で行くか、あるいは飛行機で行くか、でしょうね。
（3）社会人大学院に入学するためには、定職についているか、あるいは25歳以上であることが条件である。
（4）就職しようか、あるいは進学しようかと迷っている。
（5）A：被害者は、犯人は知らない男だと言っています。
　　B：本当に知らないか、あるいは知らないふりをしているか、どちらかだな。
（6）景気は数年で回復するのか、あるいは何十年もかかるのか、まったく予想できない。

「XかあるいはY」の形で使われて、「X

かＹのどちらか」という意味を表す。（1）（2）は、「ＸでもＹでもよいが、どちらか一方を選ぶ」場合の例。（3）は、「ＸかＹのどちらかの条件に当てはまれば、どちらでもよい」という場合で、ＸＹ両方に当てはまっていてもかまわない。（4）〜（6）は、「ＸＹ二つの可能性があって、どちらかわからない」場合の例である。

2 あるいは…かもしれない

（1）このぶんでは、明日はあるいは雪かもしれない。

（2）彼の言うことは、あるいは本当かもしれない。

（3）これで、手術は三度目だが、今回はあるいはだめかもしれない。

（4）もう何年も国には帰っていない。両親でも生きていれば、あるいは帰りたいと思ったかもしれないが、知った人もほとんどいない今は、特になつかしいとも思わない。

「あるいは…かもしれない」の形で使われて、話し手の推量を表す。「その可能性がある」という意味。似た表現に「ひょっとすると」「もしかすると」がある。

「あるいは…のだろう」「あるいは…と思われる」など、話し手の推量を表す他の表現とともに使われることもある。

3 あるいは…あるいは

（1）高校を卒業した学生たちは、あるいは進学し、あるいは就職し、それぞれの進路を歩み始める。

（2）美しかった街路樹も、あるいは横倒しになり、あるいは途中から二つに折れて、台風の威力のすさまじさを物語っている。

（3）風の音は、あるいは泣くが如く、あるいは呻くが如く、高く低く、一晩中谷間に響いた。

複数の状況を述べるのに用いる。

（1）（2）のように、「あるいは…し、あるいは…し」の形で使われて、「あるものは…、あるものは…」というように、複数のもののそれぞれの行動や状態を並べて述べる場合に使う。（3）は、「ある時は…、ある時は…」の意味。書きことばに使われるかたい表現で、日常の話しことばでは使わない。

【あるまじき…だ】

［ＮにあるまじきＮだ］

（1）業者から金品を受け取るなど公務員にあるまじきことだ。

（2）酒を飲んで車を運転するなど警察官にあるまじき行為だ。

（3）「胎児は人間じゃない」などとは、聖職者にあるまじき発言である。

職業や地位を表す名詞を受けて「…にあってはならないものである」という意味を表す。後ろには「こと」「行為」「発言」「態度」などの名詞が用いられて、ある人の言動が「Ｎに」で表されたその人の

資格・地位・立場にふさわしくないことを非難する場合に用いる。書きことば的なかたい表現。

【あれで】

1 あれで ＜プラス評価＞

（1）あの人はいつもきついことばかり言っていますが、あれでなかなか優しいところもあるんですよ。

（2）彼女、体は小さいけど、あれでけっこう体力はあるのよね。

（3）あのレストランって、一見汚くてまずそうに見えるけど、あれでなかなかいけるんですよ。

「なかなか」「けっこう」などの語と一緒に用いて、見かけと中身が違っていて思ったより評価できるという気持ちを表す。「あれで」の後に評価できることがらを述べる。話題の中に出てきた人やものをほめるときに用いる。

2 あれで ＜驚き＞

（1）あのコート、あれで４万なら安いものだ。

（2）え、彼女あれでスキー初めてなんですか。すごくうまいじゃないですか。

（3）今日の食堂の定食、あれでよく改善したって言えるよね。まるで豚のえさだよ。

（4）あの映画、あれで（も）アカデミー賞受賞してるんですか。ちょっとひどすぎると思いませんか。

「あの状態で…である／…という価値がある／…ができる」ことに対する軽い驚きを表す。（1）（2）のように肯定的な場合と（3）（4）のように否定的な場合がある。

【あれでも】

（1）あの人、患者の話を聞こうともしないで、あれでも医者なのですか。

（2）あれでも彼は手伝っているつもりらしいが、かえってじゃまだ。

（3）子供ならあれでも楽しめるのだろうが、大人にはあんなバカげたゲームはとても耐えられない。

（4）彼女、あれでもスキー初めてなんですよ。それにしてはうまいでしょ。

話し手、聞き手の知っている第三者の言動やものごと「あれ」について、それが自分の基準からはずれている、普通のものではないという気持ちを表す。そこから非難につながる場合も多い。後ろに疑問や推量の形を伴うことも多い。

【あんまり】

1 あんまり…ない

（1）このごろはあんまり映画を見て

いない。

（２）今日はあんまりお金がないのでCDを買うのは今度にしよう。

「あまり」を強調した言い方。話しことば的。

→【あまり】2

2 あんまり

（１）あんまりおかしくて涙が出た。

（２）あんまり暑いと何も考えられなくなる。

（３）英語が下手だと馬鹿にされるが、あんまり上手だとかえって嫌がられる。ほどほどにできるのがいいようだ。

「あまり」を強調した言い方。話しことば的。

→【あまり】2a【あまり】2c

3 …なんてあんまりだ

（１）誰も私のことを覚えていてくれなかったなんて、あんまりだ。

（２）A：君は明日から補欠だ。
B：ええっ、監督、それはあんまりですよ。もう一度チャンスをいただけませんか。

（３）A：あの人、何をやらせてもミスが多いのよね。この間は大事な書類を電車に置き忘れるし。あの人が辞めてくれれば、もっと何でもスムーズにいくのに。
B：そういう言い方ってあんまりじゃない。彼女まだ経験も浅いんだし、その割には頑張ってるじゃない。

（４）ある日突然解雇するなんて、あんまりと言えばあんまりだが、彼にもそうされるだけの理由があるのだ。

「なんて」の他に「って」「は」「とは」などが用いられることがある。前の話を受けて「それはひどい」という強い抗議の気持ちを表す。おもに話しことばで用いる。（４）は「あんまりといえばあんまりだ」で慣用句。

【いい】

1 いい

a いい ＜賞賛＞

（１）そのセーターいいですね。よく似合ってますよ。

（２）A：彼女、新婚旅行ギリシャだって。
B：へえ、いいなあ。

ほめたりうらやましがったりする時に用いる。「ね」や「なあ」を伴う。

b いい ＜断り＞

（１）A：もう一杯どうですか。
B：いえ、もういいです。

（２）A：ケーキがあるんだけど食べない？
B：いや、今はいい。

何かを差し出されたとき断るのに用いる。「けっこうです」と同じ。

c いい ＜注意を促す＞

（１）いいね、今言ったことは誰にもしゃべっちゃだめだよ。

（２）いい、よく見ててね。ここを押すとスイッチが切れるから、それからコンセントを抜いてね。

（３）いいか、よく聞け。これからは俺がこのグループのリーダーだ。

（４）このグラフを見てください。いいですか。これは2001年までの世界の人口増加を表したものです。

上昇調のイントネーションで発話される。命令や強い依頼をする前に相手の注意を促し、それが受け入れられる状態かどうかを確認するのに用いる。

d いいから／いいよ

（１）A：私があと3分早く着いていれば乗り遅れることもなかったのですが…。
B：もうそのことはいいから。それより今からどうしたらいいかを考えましょう。

（２）A：あ、タクシー1台来ました。どうぞ乗って下さい。次がいつ来るかもわかりませんし。
B：いや、いいからどうぞ先に乗ってください。そちらの方が遠いんですから。

（３）A：ねえ、そんな道に入って行って大丈夫なの？ 迷ったらどうするのよ。
B：いいからまかせとけって。こっちの方が近道なんだから。

（４）A：あ、数字の入力はそのキーじゃなくてこっちだよ。
B：いいから、黙っててよ。

（５）A：私がちゃんと財布を鞄の中にしまっておけば、とられたりはしなかったのよね。クレジットカードだって別のところに入れておくべきだった。ガイドブックにもそうしろって書いてあったし…。私が悪いのよ。
B：もういいよ。後悔したって始まらない。

相手の言ったことについて、「そんなことは言わなくて／考えなくていい」という意味を表す。相手にそれ以上そういうことを言わせない働きを持つ。相手の気持ちを軽くしたり慰めたり心配するなと言う場合（１）（２）（３）、さらに相手の気遣いがうるさいので黙ってほしいという場合（４）、いくらそういうことを言ってもどうしようもないという場合（５）などがある。「いいから」の形をとると、「気にしなくて／心配しなくていいから黙っていろ」という意味になり、相手の発話をやめさせる力がより強くなる。

2 …がいい

（1）悪いことばかり覚えて、お前なんか、そのうち警察に捕まるがいいよ。

（2）悪い奴らはみんな悪魔にとりつかれて死んでしまうがいい。

悪いことが起こるのを願う気持ちを表す。非難・悪口や呪いの言葉として用いられる。古めかしい言い方。

3 …ていい →【ていい】

4 …といい →【といい】

【いう】

尊敬語は「おっしゃる」、謙譲語は「申す」となる。

1 いう ＜発言＞

a …という

（1）みんなには行くと言ったが、やはり行きたくない。

（2）道子さんは「すぐに行きます」と言いました。

（3）道子さんはすぐに行くと言いました。

人の言ったことを引用して述べるのに用いる。引用の仕方には（2）のように言ったとおりの言葉を直接引用する場合と（1）や（3）のように間接的に引用する場合がある。間接的に引用するときは文体を普通体にする。発言内容を問う質問は「なんといいましたか」または「どういいましたか」となる。依頼や命令の文を間接的に引用する場合は「…ようにいう」となる。

→【いう】1d

b …といっている

（1）山下さんはまだ決められないと言っている。

（2）みんな、それはめでたいことだと言っている。

（3）A：この件について、当局はどう言っているのでしょうか。

B：原因の分析がすむまで詳しいことは述べられないと言っています。

（4）私は行きたくないと言っているのに、認めてもらえそうもない。

ある人の発言が現在でも有効であることを表す。三人称の発言を引用する場合が多いが、自分の発言の場合はそれが聞き入れてもらえないという状況があるのが普通である。

c …といわれている

（1）この泉の水を飲めば若返ると言われている。

（2）この映画は日本映画史上の最高傑作だと言われている。

（3）現在世界に数千万人の難民がいると言われている。

一般に流布している説や評判について述べるときに用いる。

d V-る／V-ない　ようにいう

（1）ここへ来るように言われました。

（2）木村さんにすぐ本を返すように言って下さい。

（3）もっと静かにするように言いましょう。

依頼や命令の文を間接的に引用する場合に用いる。

e Nをいう

（1）おじさんにお礼を言いなさい。

（2）友達にひどいことを言って嫌われてしまった。

「お礼」「嘘」「ひどいこと」などを受けて、発言を表す名詞。言葉によって表現することを表す。

f Nを…という

（1）彼はその子を妹だと言った。

（2）先生は私の意見を面白いと言ってくれた。

（3）あの人は私のことを馬鹿だと言った。

人やものについて、それに対する評価や関係を述べる。他者の発言を引用する場合に用いる。

2 …という ＜伝聞＞

（1）彼は卒業後郷里へ帰って母校の教師をしているという。

（2）その僧が去った後、その国は千年の間栄えたという。

（3）アイルランドに蛇がいないのはセントパトリックが追い払ったからだという。

（4）この島の人々は黒潮に乗って南方から渡ってきたのだという。

伝聞や言い伝えを表す表現。伝聞の意味になるのは「という」の形だけで、「といった」「といわない」などとすると単なる発言の意になってしまう。ひらがなで書くことが多い。

3 …という ＜名前＞

a NをNという

（1）あの人は名前を白山武彦といいます。

（2）あの船の名前は、なんといいますか。

（3）私は中山一と申します。どうぞよろしく。

（4）A：これは日本語でなんといいますか。

B：扇子といいます。

（5）A：すみませんが、お名前はなんとおっしゃいますか。

B：山田和雄といいます。

「XをYという」や「XはYという」の形で、Xの名前や呼び方を表すのに用いる。「なんといいますか」の「なんと」はくだけた話しことばでは「なんて」となることがある。漢字で「言う」と書いてもよい。（3）の「申す」は「いう」の謙譲語。（5）の「おっしゃる」は尊敬語。

b N(のこと)をNという

（1）A：国連のことを英語ではなんといいますか。

B：United Nations といいます。

（2）中国語では「さようなら」を「再見」といいます。

ある言葉を他の言葉で言いかえるのに

用いる。「…のことを」のほかに「…とは」や「…って」が用いられることもある。

(例) 国連って英語ではなんといいますか。

「…って」は話しことばで用いる。単なる言いかえでなく言葉の意味を説明したり定義を与えたりする場合には使えない。

(誤) 南風とは南から吹く風といいます。

(正) 南風とは南から吹く風のことです。

4 …というN →【という2】

5 …というか →【というか】

6 …ということ →【ということ】

7 …というと →【というと】

8 …というのは →【というのは】

9 …というものだ →【というものだ】

10 …というより →【というより】

11 …といったらありはしない →【といったらありはしない】【といったらありゃしない】

12 …といったらない →【といったらない】

13 …にいわせれば →【にいわせれば】

【いうまでもない】

1 …はいうまでもない

[Nはいうまでもない]

[N であるのはいうまでもない]

[Na であるのはいうまでもない]

[Na なのはいうまでもない]

[A/V のはいうまでもない]

(1) 全然学校に来なかった彼が卒業できなかったのは言うまでもない。

(2) 単位が足りなければ卒業できないのは言うまでもないが、足りていても卒業論文を書かなければ卒業できない。

(3) 仕事につけば収入は増えるが自由時間は少なくなるというのは言うまでもないことだ。

(4) 上司にも気に入られ仕事の成績も伸ばしている彼の次期昇進の可能性は言うまでもない。

(5) A:彼女、今度パリに出張だそうですよ。彼女ならフランス語も完ぺきだし交渉もうまいし、適任ですよね。

B:ええ、それはもう言うまでもないですよね。

常識から考えて当然のこと、わかりきったこと、誰もが認めていることであると認める気持ちを表す。

2 いうまでもないことだが

(1) 言うまでもないことだが、ツアー旅行で勝手な行動をとって何か問題が起こっても、それはその人自身の責任だ。

(2) 言うまでもないことですが、この計画はみなさんの御協力があって初めて成功するものです。

(3) 言うまでもないことだけど、結婚披露宴に白い服を着て行っ

てはいけないんだよ。

文頭に使われて、「もう分かっているはずのことなので言う必要はないが」という意味を表す。分かりきったことを確認するときの前おきとして用いられる。

3 いうまでもなく

(1) 言うまでもなく、私たちをとりまく環境はどんどん汚染されてきている。

(2) 私などが言うまでもなく、彼の芸術的な才能はこれまでの画家には不可能だった新しいものを生み出している。

(3) 日本は高齢化社会になりつつあるが、言うまでもなく国の対応は遅れており、国民は不満を感じている。

文や節の頭に用いて、「もう分かっているはずのことなので言う必要はないが」という意味を表す。分かりきったことを確認するときの前置きとして用いられる。文頭の場合は「言うまでもないことだが」で言いかえられる。

【いか】

1 数量詞+いか

(1) なるべく4人以下でグループを作ってください。

(2) 500グラム以下のパックは50円引きです。

(3) 3000円以下で何か記念品を買うとしたら、どんなものがあるでしょうか。

その数を含めてそれより下の数を表す。

2 Nいか

(1) 中学生以下は入場無料です。

(2) 中型以下の車ならこの道を通ることができる。

(3) B4サイズ以下のものでないとこの機械ではコピーできない。

順序や程度のある段階に位置するものを表す名詞を受けて、それを含めてそれより下に並ぶものを表す。

3 Nいかだ

(1) おまえはゴキブリ以下だ。

(2) そんなひどい仕打ちをするとは、あいつは人間以下だ。

(3) まったくあいつの頭ときたら小学生以下だ。

名詞が表すものよりも劣っているということを表す。非難したりののしったりするときに用いる。

4 Nいか+数量詞

(1) わが社では、社長以下約300人が全員一丸となって働いています。

(2) 山田キャプテン以下38名、全員そろいました。

(3) その企業グループは、A社以下12社で構成されている。

ある団体について説明するときに用いられ、ある代表者の統率のもとに形成され

たまとまったグループであるということを表す。Nが人の場合は、ふつう個人名でなく役職名で言うことが多い。書きことばや改まった話しことばとして用いられる。

5 いか

（1）以下同文。

（2）詳細は以下のとおりです。

文章やスピーチなどで、ここより後の部分という意味を表す。おもに書きことば。

【いがい】

1 …いがい

[Nいがい]

[V-る／V-た　いがい]

（1）来週のパーティーには、山田さん以外みんな行くそうです。

（2）これ以外で／にもっといい辞書はありませんか。

（3）温泉に行ってのんびりする以外にも、何かいい案があったら出してください。

（4）酔っぱらって転んで顔にけがをした以外は、今週は特に変わったこともなかった。

「…をのぞいて」「そのほかに」という意味を表す。

2 …いがいに…ない

[Nいがいに…ない]

[V-る／V-た　いがいに…ない]

（1）彼女以外にこの仕事を任せられる人はいない。

（2）単語は、自分で努力して覚える以外に、習得の方法はない。

（3）スーパーの店員に文句を言った以外には今日は誰とも一言も話さなかった。

「XいがいにYない」の形で、「YであるのはXだけだ」という意味を表す。…のほかに…ない。…しか…ない。

【いかなる】

「いかなる」の後には必ず名詞が来る。かたい書きことばに用いられる。話しことばでは「どんな」となることが多い。

1 いかなるN（＋助詞）も

（1）彼はいかなる困難にも負けないほど強い精神力の持ち主だった。

（2）いかなる罰則も暴走族の取り締まりには効を奏さなかった。

（3）この制御システムは、いかなる非常事態にも対応できるよう綿密に作られている。

（4）いかなる賞賛の言葉も彼女の前では嘘になってしまうほど、彼女はすばらしかった。

「Nのもっとも極端なもの」の意味。Nを強調して述語のことがらの確かさを強めるのに用いる。

2 いかなるNでも

（1）絵画というのは、いかなる作品でもそこに作者独自の視点が反映されているものだ。

（2）いかなる状況であれ、自分の

職務を離れるのは許されないことだ。

（3）それがいかなる方法であれ、それによって結果的に多くの人が助かるのならやってみるべきではなかろうか。

（4）いかなる意見であっても、出されたものは一応検討してみる必要があるだろう。

「いかなるNでも／Nであれ／Nであっても」の形で「Nであればどんなに極端なもの、普通でないものでも」の意味を表す。後半の文の前置きで、それによって後半の主張を強める。

3 いかなる…とも

[いかなるNであろうとも]

[いかなるN＋助詞＋V-ようとも]

（1）いかなる状況になろうとも、断固として戦い抜く決意だ。

（2）彼なら、いかなる環境におかれようとも自らの道を歩んで行くことができるであろう。

（3）いかなることがらが起きようとも、常に冷静に事態を判断する能力を身につけなければならない。

（4）いかなる役割であろうとも、与えられれば誠意を尽くして精いっぱいやるのが私たちの努めだ。

「どんな困難なこと、極端なこと、普通でないことでも」という意味。

【いかに】

書きことばで用いられる。話しことばでは「どんなに」となることが多い。

1 いかに…か

（1）この町がいかに暮らしやすいかは、住んでいる人の表情からもうかがわれる。

（2）この仕事がいかに精神的な苦労が多いかが、手伝ってみて初めて実感できた。

（3）あの人がいかにつきあいにくい人かおわかりいただけるだろうか。

（4）愛する夫を飛行機事故で失って、彼女がいかにつらい思いをしているか、想像しただけで胸が痛くなる。

「いかに」の後に形容詞や「V-やすい／V-にくい」などが続き、「どれほど…であるか」という意味を表す。程度がひじょうにはなはだしいという意味を含むことが多い。

2 いかに…ても

[いかにN／Na　でも]

[いかにA-くても]

[いかにV-ても]

（1）いかに工夫をこらしても、家族は私の料理には何の関心も示さない。

（2）いかに精巧なコンピュータでも、しょせん機械はただの機械

だ。

（3）いかに歌が上手でも、人をひきつける魅力がなければ歌手にはなれない。

（4）いかに頭がよくても体が弱くてはこの仕事はつとまらない。

「どれほど…でも」という意味を表し、その後の部分を強く主張する。

3 いかに…といっても

（1）いかに彼が有能だと言っても、こんな難題を一人で処理することは不可能だろう。

（2）いかに医療技術が進んだと言っても、治療して必ず回復するとは限らない。

（3）いかに彼女が多忙を極めていると言っても、電話1本をかける時間もないということはないだろう。

「…ということは事実として認めるが、それでも」という意味。後半は前半と矛盾することがらであり、前半を認めた上で後半を主張するのに用いる。

4 いかに…とはいえ

（1）いかに家賃が高いとはいえ、こんなに環境がいいのなら納得できるのではないか。

（2）いかに才能のある芸術家であるとはいえ、こんなに難解な作品ばかりでは一般の人には理解してはもらえないだろう。

（3）いかに国全体が豊かになってきたとはいえ、まだまだ今の生活水準に満足していない人も多いのである。

「いかに…といっても」と同じだが、いくらか文語的な表現。

5 いかに…ようと(も)

[いかに修飾句＋Nであろうと(も)]

[いかにNaであろうと(も)]

[いかにA-かろうと(も)]

[いかにV-ようと(も)]

（1）いかに便利な機械であろうと、それを使うことによって手で作る喜びが失われてしまうのだとしたら、使う意味はない。

（2）いかに困難であろうと、やってみれば何らかの解決策は見えてくるはずだ。

（3）いかにスポーツで体を鍛えようと、栄養のバランスが取れていなければ健康にはなれない。

（4）いかに環境保護に努めようと、ゴルフ場を作られてしまえば終わりだ。

（5）いかにみんなにほめられようと、しょせん素人の作品じゃないか。それにこんな値段つけるなんて信じられないよ。

（6）いかに仕事が苦しかろうとも決して文句を言わない。

「いかに…ても」と同じだが、いくらか文

語的な表現。

【いかにも】

1 いかにも …らしい／…そうだ

a いかにもNらしい

（1）今日はいかにも秋らしい天気だ。

（2）彼女はいつもいかにも教師らしい服装をしている。

（3）その家はいかにも旧家らしく、どっしりとした古めかしい作りだった。

「名詞＋らしい」を伴い、「そのものの典型的な特徴・性質がよく現れている、あるいはそのものにふさわしい様子である」という意味を表す。「いかにも」によって「らしい」の意味が強められている。

b いかにも…そうだ

[いかにもNaそうだ]

[いかにもA-そうだ]

（1）そのサンマはとれたてで、いかにもおいしそうだった。

（2）その映画はストーリーを聞くといかにもおもしろそうなのだが、配役が気に入らないので見に行く気が起きない。

（3）新しい電子レンジはいろいろな機能がついていかにも便利そうだ。

（4）サッカーの試合見物には母はいかにも行きたくなさそうな様子をしていたが、結局一番楽しんでいたのは母だった。

「形容詞の語幹＋そうだ」を伴い、「見たところ非常に…と思える」の意味を表す。「いかにも」によって「そうだ」の意味が強められている。

2 いかにも

（1）A：結局、この計画が成功するかしないかは、地域の住民の方々がどう反応するかにかかっているわけですね。

B：いかにもその通りです。ですから、予測がつかないと言っているのですよ。

（2）A：この指輪は特別に作らせたものでございますか。

B：いかにも。宝石のデザインでは右に出るものはいないという優れた職人に頼んだものだ。

「そうだ」「そのとおりだ」の意味。相手に同意するのに用いる。話しことばだが古めかしい表現。（2）は古めかしい男性的な言い方で、現在女性や若い男性はあまり使わない。

【いかん】

1 Nいかん

（1）これが成功するかどうかはみんなの努力いかんだ。

（2）環境破壊を食い止めることは、私達一人一人の心掛けい

かんだ。

（3）政治改革の実現は、連立政権の結束いかんにかかっている。

「あることがらが実現するかどうかはその内容・状態による」という意味を表す。…しだいだ。

2 Nいかんで

（1）客の出足いかんでは1週間で上映を打ち切られる可能性もある。

（2）あの人いかんで予算は何とでもなる。

（3）参加するかどうかはその日の体調いかんで決めさせていただきます。

「その内容・状態によって」という意味を表す。…しだいで。

【いくら】

1 いくら

a いくら ＜質問＞

（1）この本はいくらですか。

（2）東京まで片道いくらですか。

（3）この絵はいくらぐらいかなあ。

値段が不明であることを表し、値段を聞くのに用いる。

b いくら ＜不定＞

（1）いくらなら案内してもらってもいいとこちらから先に提示した。

（2）フリーマーケットに出す品物は、それぞれいくらで売るということを決めてこの書類に金額を書き込んでください。

（3）いくら持ってきてくれという形で注文しないと、後でまた頼まなければならなくなったりするから、個数を確認してください。

値段や数量が不定であることを表し、はっきりその数値が言えないときや言う必要のないときに用いる。

2 いくらでも

（1）ビールならまだいくらでもあるから、安心して飲んでください。

（2）これだけ暇ならいくらでも好きなことができる。

（3）あの人の代わりならいくらでもいるから、やめられても全然困らない。

（4）いくらでもいたいだけここにいてくれてかまわないよ。

限りがない様子を表す。「望めば望んだだけ」という意味。

3 いくらも…ない

（1）もうワインはいくらも残っていない。

（2）バスがでるまで時間はもういくらもない。

（3）駅までは歩いていくらもかからなかった。

（4）収入はいくらにもならないが、やることに意味がある。

数量がとても少ないという意味を表す。

4 いくら…ても

a いくら V-ても

（1）いくら練習してもうまくならない。

（2）いくら食べても太らない。

（3）彼はいくら誘っても一度もパーティーに顔を出してくれない。

（4）私がいくら「お祝いにはバラの花束をあげよう」と言っても、誰も賛成してくれなかった。

「どんなにたくさん／何度も／一生懸命…しても」の意味。程度を強調するのに用いる。

b いくら…といっても

[いくら Na だといっても]

[いくら A-いといっても]

（1）いくら給料がいいと言っても、残業がそんなに多いのでは就職するのはいやだ。

（2）いくら甘いものが好きだと言っても、一度におまんじゅうを3つは食べられない。

（3）いくらここの食べ物がまずいと言っても、生協食堂よりはましだろう。

「…であるということは認めるが、それでも」の意味。後の部分を強調して主張する。

c いくら…からといって(も)

（1）いくら淋しいからと言って、夜中の3時に友達に電話するなんて非常識だ。

（2）いくら体にいいからと言っても、毎日そればかり食べ続けていては病気になってしまう。

（3）いくら新しいのを買うからと言っても、何も古いのをすぐに捨ててしまうことはないんじゃないか。

「いくらXからといって(も)Y」で、「XだからYという結論になると思っているのだろうが、それはおかしい」という軽い非難の気持ちを表す。後にYに対する反論を伴う。たとえば(1)「X:淋しい」だから「Y:夜中に友達に電話する」のは「非常識だ」。

d いくら…からといっても

（1）いくら才能がないからと言っても、10年もピアノをやっていれば簡単な伴奏ぐらいはできるだろう。

（2）いくら不器用だからと言っても、それだけきれいにセーターが編めれば上出来だ。

（3）いくら私が料理がうまいからと言っても、プロとは違うんだからそういうこったものは作れませんよ。

4cと似ているが「XだからY」のYの部分が表れない形。「Xでも(Yという結論にはならず)Zだ」という意味で、Yに対する反論を述べる。たとえば(1)「X:ピアノの才能がない」でも「Y:ピアノがひ

けない」ことはなく「Z:簡単な伴奏はできるはずだ」。

eいくらなんでも

（1）そういう言い方はいくらなんでもひどすぎるよ。

（2）いくらなんでも、その服はお母さんには派手すぎないか。

（3）この料理はいくらなんでも辛すぎてとても食べられない。

副詞的な慣用句。「…すぎる」と共に用いられることが多い。「いろいろな事情を考慮に入れてみてもやはりおかしい／ふつうではない／常識の範囲を越えている」というような非難の気持ちを表す。

5 いくらV-たところで

（1）いくらがんばってみたところで結果的には同じことだ。

（2）いくら隠してみたところで、もうみんなにはばれているんだから仕方がないよ。

（3）いくらいいドレスを買ったところで、どうせ着ていくところがないんだから無駄になるだけだ。

（4）いくら話し合ったところで、彼らは自分の意見を変える気はないんだから、話し合うだけ無駄だ。

後ろに「同じだ／仕方がない／無駄だ」などの語が来て、「どんなに一生懸命…しても、その状態は変わらない」「一生懸命そういうことをするのは無駄だ」という意味を表す。4aの「いくら…ても」と似ているが、こちらはその行為の結果が無意味なのはすでにわかっているというあきらめの気持ちを伴う。「だからやめたほうがいい」というアドバイスに用いる。

【いけない】

→【てはいけない】
【なくてはいけない】
【なければ】2

【いご】

1 Nいご

（1）あの事件以後、そこを訪れる人はほとんどいなくなった。

（2）8時以後は外出禁止です。

ある出来事や時間を表す名詞を受けてその時点より後の時間を表す。

2 いご

（1）以後私達はこの問題に関しては手を引きます。

（2）以後この話はなかったことにしてください。

（3）以後よろしく。

「今から後」、「これから」という意味。

【いささか】

1 いささか

（1）今回の試験は前回に比べていささか難解すぎたように思う。

（2）みんなが自分勝手なことばかり言うので、いささか頭にきている。

（3）この部屋は事務所にするにはいささか狭すぎるのではないか。

「少し」、「いくらか」という意味。「かなり」「相当」の意味を婉曲にいう場合にも使われる。

2 いささかも…ない

（1）今回の事件には私はいささかも関係ございません。

（2）突然の知らせにも彼はいささかも動じなかった。

（3）彼女は自分に反対する人に対してはいささかも容赦しないので、みんなから恐れられている。

「少しも…ない」「まったく…ない」という意味を表す。

【いざしらず】

[Nはいざしらず]

（1）昔はいざしらず、今は会社を10も持つ大実業家だ。

（2）両親はいざしらず、我々は兄弟として妹の結婚を許すわけにはいかない。

（3）幼稚園の子供ならいざしらず、大学生にもなって洗濯もできないとは驚いた。

（4）暇なときだったらいざしらず、こんなに忙しいときに客に長居されてはたまらない。

（5）国内旅行ならいざしらず、海外旅行に行くとなると、準備も大変だ。

名詞を「は」「なら」「だったら」などで取り立てたものを受けて「…についてはどうだかわからないが／はともかくとして」という意味を表す。前後には「昔ー今」「幼稚園の子供ー大学生」「暇なときー忙しいとき」などのように、対比的なことがらが述べられ、後半のことがらが前半のことがらよりも程度や重要性の点で勝っていたり、特別な場合であるということを表すのに用いる。後半には驚きや「大変だ」といった意味の表現が続くことが多い。（1）は、慣用的な言い方で、「昔とはちがって」という意味。

【いじょう】

1 数量詞+いじょう

（1）体重が45キロ以上なら献血できる。

（2）65才以上の人は入場料がただになる。

（3）夏休みの間に食文化に関する本を3冊以上読んでレポートを書きなさい。

その数を含めてそれより多い数を表す。

2 いじょう　の／に

a …いじょうのN

[N／V　いじょうのN]

（1）自分の能力以上の仕事を与えられるのは悪いことではない。

(2) その薬は期待以上の効果をもたらした。

(3) 彼はみんなが期待している以上の働きをきっとしてくれる人だ。

(4) これ以上のことは今はお話しできません。

(5) 落ち込んでいる友達に対して、私には慰めの言葉をかける以上のことは何もしてあげられない。

(6) 新しく入ったアルバイトの学生は、命令された以上のことをやろうとしないのでほとんど役に立たない。

「名詞や動詞が表すものごとより程度の高いものごと」という意味を表す。そのことが上限であったのがそれ以上になるという場合(1)〜(3)や、そのことが上限なのでそれより上には行かないという場合(4)〜(6)がある。

b ...いじょうに

[N/V　いじょうに]

(1) あの人は噂以上におっちょこちょいだ。

(2) 試験の点は想像以上に悪かった。

(3) 彼女はタイの人なのに、日本人以上に日本の歴史について詳しい。

(4) そのレストランはみんなが言う以上にサービスも味も申し分なかった。

(5) 彼は思っていた以上に神経が細やかでよく気の付く人だった。

(6) ほかの人が練習する以上にやっているつもりなのに、全然ピアノが上達しないのはどういうわけだろう。

名詞や動詞に接続して、「...よりもっと」「...もかなりの程度だが、それよりもさらに」という意味を表す。

3 これ/それ/あれ　いじょう

a これいじょう＋修飾句＋Nは...ない

(1) これ以上わかりやすいテキストは、今のところない。

(2) あれ以上くだらない映画もめったにない。

(3) あの人以上に賢い人は日本中探してもいないだろう。

おもに「これ/それ/あれ」に付き、それによって指し示されているものが最も程度が高いという意味を表す。「一番...だ」。

b これいじょう...ば

(1) これ以上水かさが増すと大変なことになる。

(2) これ以上雨が降らなければ、畑の作物は全滅するだろう。

(3) それ以上努力してもおそらく何の成果もあがらないと思うよ。

(4) あんな忙しい生活をこれ以上続けたら、きっと彼は体をこわ

してしまうだろう。

(5) 明日の講演が今日の以上につまらないのなら、行くだけ時間の無駄だ。

(6) 今以上にいろいろ工夫して料理を作っても、誰もほめてくれなければつまらない。

「これいじょう」のほかに「それいじょう」「あれいじょう」、または「ば」のかわりに「と/たら/なら/ても」も用いる。「今の状態よりもっと高い程度であったら/であっても」という意味。「今でさえかなり高い程度であるのに」という意味が含まれることが多い。

c これいじょう V-て

(1) それ以上頑張ってどうなると言うのだ。

(2) 彼女、あんなに細いのに、あれ以上ダイエットしてどうするんだろう。

(3) あなた、これ以上お金をためて、いったい何に使おうって言うのよ。

おもに「これ/それ/あれ」に接続し、「今の状態よりもっと...する」という意味を表す。後ろに「どうなるのか/どうするのか/何をするのか/何になるのか」などを伴って、「そんなことをしても無意味だ、しかたがない」という意味を表すことが多い。

d これいじょう...は＋否定的表現

(1) お互いこれ以上争うのはやめましょうよ。

(2) もうこれ以上今のような忙しい生活には耐えられない。

(3) さすが田中さんだ。ほかの人にはあれ以上の発明はちょっとできないだろう。

(4) 雪もひどくなってきたし、もうこれ以上先へ進むのは危険だ。ここであきらめて下山しよう。

(5) A：もっと安くなりませんか。
B：もうこれ以上は勘弁してくださいよ。これでももうほとんどうちの方はもうけがないくらいなんですから。

おもに「これ/それ/あれ」に接続し、後ろに「できない/難しい/耐えられない/やめよう」などの否定的内容を表す表現を伴って、今の状態が最高の程度で、それより上の程度に進むことはできないという意味を表す。

4 Vいじょう(は)

(1) 絶対にできると言ってしまった以上、どんな失敗も許されない。

(2) 全員一致で選ばれてクラブの部長になる以上、みんなの信頼を裏切るようなことだけはしたくない。

(3) 大学をやめる以上、学歴に頼らないで生きていける力を自分で身につけなければならない。

（4）こういうことになってしまった以上、私が責任を取って辞めるしか解決策はないだろう。

（5）私に通訳がちゃんとつとまるかどうかわかりませんが、お引き受けした以上は精一杯の努力はするつもりです。

なんらかの責任や覚悟を伴う行為を表す動詞に付いて、「それをする／したという状況では」という意味を表す。後ろにはそれに伴う覚悟をし、責任を持たなければならないという決意・勧告・義務などの表現が続く。

5 いじょう

a いじょう(の)　＋数量詞／N

（1）田中、木村、山本、吉田、以上の4人はあとで私のところに来なさい。

（2）東京、大阪、京都、神戸、福岡、札幌、以上6つの都市が今回の調査対象となります。

（3）自分の長所、短所、自慢できること、今一番関心のあること、将来の夢、以上5点をはっきりさせて自己紹介文を書いてください。

（4）植物をむやみに採らないこと、火の後始末に気を付けること、トイレはきれいに使うこと、以上のことを必ず守ってキャンプしてください。

（5）発音はきれいか、言語表現は適切か、内容は興味を感じさせるか、訴えたいことははっきり伝わってくるか、以上のような点がスピーチの審査の時におもにポイントとなる。

いくつかの項目を並べあげ、それらをまとめる場合に用いる。

b いじょう

（1）作業が終わり次第、必ず報告に来ること。以上。

（2）次の品物を記念品として贈呈します。置き時計一つ、木製本棚二つ、百科事典全20巻一式。以上です。

「これで言うべきことはすべてだ」「終わり」の意味。事務的な書類や目録などの文書で使われることが多い。

【いずれ$_1$】

1 いずれ

（1）進学と就職といずれの道を選ぶのがいいか、自分でも決めかねている。

（2）「はい」「いいえ」「どちらでもない」のいずれかに○をつけてください。

二つ、またはそれ以上のうちのひとつという意味を表す「どちら」「どれ」の書きことば的な言い方。

2 いずれにしても

（1）山田は仕事の都合で遅れるとは言っていたが、いずれにしても来ることにはなっている。

（2）後遺症が出る可能性もあるが、いずれにしても回復に向かっていることだけは確かだ。

（3）彼が辞めるのがいいのかどうかはわからないが、いずれにしてもこのまま放っておくわけにはいかない。

（4）A：ここでついでにお昼ご飯食べましょうか。

B：そうですね。いずれにしても、どこかで食べておかなきゃならないんだし。

文や節の頭に現れて、「いろいろな可能性はあるが、どれを取ったとしてもとにかく」という意味を表す。「いずれにしても」の後に重点がおかれ、そのことは本当だ、確かだということを言うのに用いる。話しことばでも書きことばでも用いられる。改まった言い方では「いずれにしろ」「いずれにせよ」となる。「何にしても」に言いかえられる。

3 いずれにしろ

（1）やりたい仕事はいろいろあるが、いずれにしろこんな不況では希望する職にはつけそうもない。

（2）ちょっと来客があったりするかもしれませんが、いずれにしろこの日なら時間が取れるので大丈夫です。

（3）もっといい機種が出るまで待ってもいいけれど、いずれにしろいつかはパソコンを買わなければならないのなら、この機会に買ってしまったらどうか。

「いずれにしても」の改まった言い方。

4 いずれにせよ

（1）今日はこの問題にはもう触れませんが、いずれにせよ今後も考えていかなければならないとは思っています。

（2）今後誰にこのプロジェクトを任せるかは未定だが、いずれにせよ彼には降りてもらうことに決めた。

「いずれにしても」の改まった言い方。

5 いずれも

（1）ここにございます宝石類は、いずれも最高級品でございます。

（2）今日の講演会のお話はいずれも大変興味深いものでした。

「どちらも」「どれも」の改まった丁寧な言い方。

【いずれ$_2$】

（1）いずれまた近いうちにおうかがいします。

（2）今はよくわからなくても、いずれ大人になればわかる時がくるだろう。

（3）その事件については、いずれ警察の方から詳しい説明があることになっています。

（4）いずれこのあたりの山も開発が進んで、住宅地になってしまうだろう。

（5）円高もいずれ頭打ちになることは目に見えている。

今から先の未来のある時点を表す。それがいつかはわからないが、今の状況から考えると、そのことが起こる時が来るはずだというときに使う。書きことば的でかたい表現。

【いぜん$_1$】

（1）その問題はいぜん解決されないままになっている。

（2）裁判ざたになっているにも関わらず、彼は依然自分は何も知らないと言い張っている。

（3）ゴルフ場建設の工事は、依然として再開されていない。

あることがらの状態が長い間変わらない様子を表す。未だ(に)。書きことば的。「依然として」は慣用句。

【いぜん$_2$】

1 いぜん

（1）以前一度このホテルに泊まったことがある。

（2）彼女は以前の面影はまったくなく、やつれてしまっていた。

（3）以前から一度あなたとはゆっくりお話ししたいと思っていました。

（4）先生は以前にも増してお元気そうで、とても70才とは思えないほどだった。

「今よりかなり前」の意味。「前」より改まった表現。

2 Nいぜん <時点>

（1）彼は予定していたはずの3月31日以前に引っ越してしまったので、連絡がつかない。

（2）その地方では先週の大地震以前にも何度も小さな地震が起こっていた。

（3）彼の20才以前の作品には他の画家の影響が強く見られる。

（4）この間捕まった男は、それ以前にも何回も同じ手口で子供を誘拐していたらしい。

名詞が表す時より前の時点を表す。

3 V-るいぜん

（1）二人は結婚する以前から一緒に暮らしていた。

（2）彼は映画監督になる以前は画家だったらしい。

（3）家具を買う以前に、引っ越し先を決めなければ。

（4）新しい企画を始める以前に、今までのものをもう一度見直してみる必要もあるのではありませんか。

「ある出来事の前」の意味。ある程度長い期間の中で一定の段階を踏んで連続して起こることがらの時間関係を述べる場合に用いる。

（誤）私はいつも寝る以前に日記を書く。

4 Nいぜん <段階>

（1）そんなことは常識以前の問題だ。知らない方がおかしいのだ。

（2）挨拶がきちんとできるかどうかは、能力以前の話だ。いくら仕事ができても礼儀を知らないような人はお断りだ。

（3）受験者の動機や目的は面接以前の段階での調査項目だ。面接ではもっとほかのことを質問するべきだろう。

（4）まずコンセントを差し込んでから電源を入れるという、使い方以前の常識さえないような人にこの機械を任せるわけにはいかない。

名詞を受けて、それが表す段階にまで至っていないことを表す。普通なら当然達しているレベルに達していないという意味が含まれる。非常識なことがらに対する非難に用いられることが多い。

【いたって】

→【にいたる】3

【いたっては】

→【にいたる】4

【いたっても】

→【にいたる】5

【いたり】

［Nのいたり］

（1）このたび我が社の長年の社会奉仕活動に対して地域文化賞をいただきましたことは誠に光栄のいたりに存じます。

（2）このような後援会を開いてくださいまして、感激の至りです。

（3）お二人の晴れやかな門出をお祝いできて、ご同慶の至りです。

限られた名詞に付いて、あることのきわみ、最高の状態という意味を表す。かたい挨拶言葉として使われ、「非常に…である」の意味となる。また、次のように、「ものごとの行きつく結果」の意味で用いられることもある。

（例）彼があなたにずいぶん失礼なことを言ったようですが、若げのいたり（＝若さの結果としてのあやまち）と思って、ゆるしてやってください。

【いたる】

→【にいたる】

【いちがいに…ない】

（1）有機野菜が安全だといちがいには言えない。

（2）私の意見を一概にみんなに押しつけることはできない。

（3）外国人労働者はどんどん受け入れればいいとは一概に主張できない。

（4）彼はまちがっていると一概に非難することもできないのではないだろうか。

（5）彼の案にも利点はあるのだから、そんなことはやっても無駄だと一概に決めつけることはできないだろう。

後ろに「できない」「言えない」など可能性を否定する表現を伴って、「単純に／ほかのことをあまり考慮しないで／自分の都合で…することはできない」の意味を表す。他の条件、状況を考える必要があることを暗示する。

【いちど】

1 いちど　Vと／V-たら

（1）タイ料理は一度食べると病みつきになる。

（2）あの森は一度迷い込んだらなかなか外に出られないらしい。

（3）あの作家の小説は一度読み始めるとついつい最後まで一気に読んでしまう。

（4）一度いいワインの味を知ってしまうと、もう安物は飲めなくなる。

「あることを経験する／ある状態になると、もうその前の状態には戻れない」という意味を表す。

2 いちど　V-ば／V-たら

（1）こんなところは一度来ればたくさんだ。

（2）一度こういう苦労を経験しておけばもう安心だ。何があっても耐えられる。

（3）一度やり方がわかれば、後は応用がきく。

「一度あることを経験すれば／あることがわかれば、それで十分だ／似たようなことが起こっても何とかなる」という意味を表す。「二度やる必要はない」という含みがある。（3）のように後に続く状態を述べる場合は「いちどVと」で言いかえられる。

【いつか】

1 いつか

（1）本を読んでいる間にいつか眠り込んでしまったようだ。

（2）いつか雨はやみ、雲の間から日が射していた。

（3）動物園はいつか人影もまばらになり、閉園のアナウンスが流れていた。

「気がつかないうちに」「知らない間に」

の意味。書きことばで用いられることが多い。話しことばでは「いつのまにか」をよく用いる。文学的な言い方に「いつしか」がある。

2 いつか V-た

（1）いつか見た映画の中にもこんな台詞があった。

（2）彼とはいつかどこかであったことがあるような気がする。

（3）この道は前にいつか通ったことがあったね。

過去の出来事を表す文の中で用いて、はっきりいつとは特定できない過去のある時点を表す。

3 いつか(は)

（1）あいつもいつかはきっと自分の間違いに気づくだろう。

（2）がんばっていれば、いつかはだれかがこの努力を認めてくれるはずだ。

（3）いつか一度でいいから世界中を放浪してみたい。

（4）あの美術館へいつかは行こうと思いながら、全然行く暇がない。

未来の出来事を表す文の中で用いて、はっきりといつとは特定できない未来のある時点を表す。「…する」の他に、「…するはずだ／するだろう／したい／しよう」などの形が文末に来る。また「きっと／かならず」などの副詞を伴うことも多い。

4 いつかのN

（1）いつかのセールスマンがまた来た。

（2）彼はいつかの交通事故の後遺症がいまだにあって苦しんでいるそうだ。

（3）いつかの件はどうなりましたか。ほら、田村さんに仕事を頼んでみるって言っていたでしょ。

（4）いつかのあの人にもう一度会いたいなあ。

はっきりといつとは特定できない過去のある時点を表す。その時点に何かが起こったことが暗に示されるが、具体的に何が起こったかは文脈によって決まる。例えば「いつかのセールスマン」は「いつか来た／話をした／電話をかけてくれた」など、様々な可能性がある。

【いっこうに】

[いっこうに V-ない]

（1）30分待ったが、彼はいっこうに現れない。

（2）薬を飲んでいるが、熱はいっこうに下がる気配がない。

（3）毎日練習しているのに、いっこうに上手にならないのはどういうわけだろう。

（4）何度も手紙を出しているのに、彼女はいっこうに返事をよこさない。

「全然…ない」という意味で、否定の意

味を強調する。あることが起こるのを期待してなにかをし続けているにもかかわらず、それが起こりそうにないという状況で用いられ、それに対する苛立ちや不審感などの気持ちが伴う。かたい表現。

【いっさい】

[いっさいない]

[いっさい V-ない]

(1) 計画の変更はいっさいない。

(2) そのような事実はいっさいございません。

(3) なにか問題が起こっても、こちらはいっさい責任を持ちませんので、その点御了承ください。

(4) 詳しいことについての説明はいっさいなされなかった。

(5) 彼は料理にはいっさい手をつけず、お酒ばかり飲んでいた。

「一つも/少しも…ない」という意味で、否定の意味を強調する。「まったく…ない」「全然…ない」。書きことば的。

【いつしか】

(1) いつしかあたりは薄暗くなり、人影もまばらになっていた。

(2) 山もいつしか紅葉に染まり、秋が深まっていた。

(3) いつしか雨も止んで、空には虹がかかっていた。

(4) 去年まいた種がいつしか芽を出し、中にはつぼみをつけているものもあった。

「いつか」を強めて言ったもので、「いつのまにか」「気がつかないうちに」の意味を表す。書きことば的で文学作品の中などに用いられる。

→【いつか】1

【いっそ】

1 いっそ

(1) こんなにつらい思いをするくらいなら、いっそ離婚してしまいたい。

(2) 彼に見放されるくらいなら、いっそ死んでしまった方がましだ。

(3) 今の職場はストレスがたまるばかりだし、いっそ思い切って転職してしまおうか。

(4) そんなに住み心地が悪くて困っているのなら、いっそのこと引っ越したらどう。

(5) ステレオは修理に出しても修理代がかさむし、もうこうなったら、いっそのこと新しいのに買いかえた方がいいかもしれない。

文末に、意志(…よう)、欲求(…たい)、判断(…べきだ)、勧誘(…たらどうか)などの表現を用いて、問題のある状況で、「それを解決するためには思い切って大きく転換をはかることが必要だ」という気持ちを表す。(5)の「いっそのこと」は慣用句的。話しことば的だが、少々古めかしい表現。

2 よりいっそ(のこと)

[N/V よりいっそ(のこと)]

(1) 休職よりいっそ転職を考えてみたらどうですか。

(2) 彼に誘われるのを待っているより、いっそのこと自分から誘ってみたらいいんじゃないでしょうか。

(3) このステレオはもう古いし、3万も出して直すよりいっそ買いかえた方がいいかもしれない。

(4) 結果をあれこれ思い悩むより、いっそのこと行動に移してしまった方が気が楽になりますよ。

「XよりもいっそY」という形で、ある問題に直面した状況で、「Xはやめて思い切ってYにする」という気持ちを表す。文末には意志(…よう)、欲求(…たい)、判断(…べきだ)、勧誘(…たらどうか)などの表現が用いられる。

【いったい】

[いったい+疑問表現]

(1) いったい彼は生きているのだろうか。

(2) 祝日でもないのに、この人の多さはいったい何なのだ。

(3) いったい全体何が起こったのか、さっぱり見当がつかない。

(4) いったいあいつは今ごろどこで何をしているのだろう。

疑問表現の中で用いられ、わからないという気持ちを強く表す。「いったい全体」はより強い表現。

【いったらありはしない】

→【といったらありはしない】

【いったらない】

→【といったらない】

【いったん…と】

(1) 彼女はおしゃべりな人で、いったん話し出すと止まらない。

(2) いったんテレビゲームを始めると2時間ぐらいはすぐに経ってしまう。

(3) いったんこの段階まで回復すれば、後はもう大丈夫だ。

(4) このお菓子はいったんふたを開けるとすぐに湿ってしまうので、早く食べなければならない。

(5) いったんこんなゆとりのある生活に慣れてしまったら、もう前のような忙しい生活には戻れない。

「と」のかわりに「たら/ば」も用いる。ある状態に変化したりあることが始まったりすると、もう前の状態には戻らないという意味。

【いっぽう】

1 いっぽう

a V-る+いっぽう(で)

(1) 自分の仕事をこなす一方で、部下のめんどうも見なければならない。

(2) 彼は全面的に協力すると言う一方、こちらが何か頼んでも忙しいからと言って断ってくる。

(3) 彼女はお金に困っていると言う一方で、ずいぶん無駄遣いもしているらしい。

「あることを行うのと並行して」という意味で、後ろには、それとは別のことも行っているという表現が続く。

b いっぽうでは…たほうでは

(1) この映画は、一方では今年最高との高い評価を受けていながら、他方ではひどい出来だと言われている。

(2) 彼は、一方では女性の社会進出は喜ぶべきことだと言い、他方では女子社員は早く結婚して退職した方がいいと言う。

(3) 彼女は、一方ではボランティア活動は大事だと言っているが、他方では何かと理由をつけて参加するのを避けている。

(4) 政治に対する関心は、一方では高まっているものの、他方では腐敗しきった政府に対する諦めのムードがまん延している。

対立する二つのことがらを並べあげて述べるのに用いる。「いっぽうでは…が／のに／ながら／ものの」のような逆接の表現が続くことが多い。

c いっぽう

(1) 花子はみんなが帰ったあとも毎日残業していた。一方桃子は定時退社し、毎晩遊び回っていた。

(2) 日本では子供を生まない女性が増えている。一方アメリカでは、結婚しなくても子供はほしいという女性が増えている。

文や節の頭に用いて、前の文で述べられたことがらと対立することがらが次に続くことを表す。「その一方で」となることもある。

(例) 土地の値下がりは現状を見ると絶望的だが、その一方で期待できる点もないわけではない。

2 V-るいっぽうだ

(1) 事態は悪くなる一方だ。

(2) 父の病状は悪化する一方だった。

(3) 仕事は忙しくなる一方で、このままだといつかは倒れてしまいそうだ。

(4) 最近、円は値上がりする一方だ。

状況がある一定の方向へとどんどん進んでいって、止まらないことを表す。良くないことが多い。

【いない】

[数量詞+いない]

(1) 10人以内なら乗れます。

(2) おやつは500円以内で買いなさい。

(3) 10分以内に戻ってくるので、待っていてください。

(4) ここから2キロ以内でどこか広くて安いアパートはありませんか。

「その数を含めてその範囲の中」「その数が上限でそれを越えない範囲」の意味。

【いまごろ】

1 いまごろになって

(1) 注文していた本が、今ごろになってやっと届いた。

(2) 今ごろになってチケットを予約しようと思ってももう遅いよ。

「今」の意味だが、そのことがらの成立やその行為を行うのが遅すぎるという状況で用いる。

2 いまごろ V-ても／V-たところで

(1) 今ごろ佐藤さんに電話しても、もううちを出ているのではないだろうか。

(2) 君ねえ、今ごろ来ても遅いよ。もう仕事はすんでしまったよ。

(3) 今ごろがんばってみたところで、もう結果は変わらないだろう。

(4) 今ごろ行ってみたところで、もう食べ物も残っていないだろうし、行くのはよそう。

「いまごろになって」と同じで、今その行為を行っても遅すぎる、無駄だという意味を表す。

【いまさら】

1 いまさら

(1) もうその問題は解決済みなのに、今さらどうしようというのですか。

(2) 今さら何が言いたいのだ。

(3) 今さら謝ってももう遅いよ。

(4) 結婚して何を今さらという感じだが、私は来月から料理学校に通うことにした。

「今になって」の意味。もう終わったり解決したりしてしまっていることについて、終わった話をまた持ち出すときに用いる。相手がそれを問題にしたり蒸し返したりしたときに、非難するのに用いられることも多い。(4)の「何を今さら」は「そのことをする時期はもう終わってしまった」という気持ちを表す慣用句。

2 いまさら V-ても
いまさら V-たところで

(1) 今さら文句を言われてもどうしようもない。

（2）今さら勉強しても、試験にはとうてい間に合わない。

（3）今さらいやだと言ったところで、しなくてすむわけではない。

（4）今さら隠してみたところで、もうみんな知っているんだから、この場できちんと婚約発表したらどうだ。

「今…してももう遅い」という意味。今になって。否定の表現と呼応して「いまさら…ても…ない」となることが多い。

3 いまさらながら

（1）今さらながら彼の賢さには感心する。

（2）祖父が亡くなって1年たつが、今さらながらもっと長生きしてくれたらよかったのにと残念に思う。

（3）先生は本当に親身になって心配してくださったんだなあと、今さらながらありがたく思う。

（4）あいつは本当にいつもへまばかりしていてどうしようもない奴だったが、今度の事件で今さらながらあいつの馬鹿さ加減にあきれている。

後ろに「ありがたい」「残念だ」など、感情を表す表現を伴って、以前からある感情を抱いていたが、あることが起こったことで今また改めてその感情を抱いているという意味を表す。

4 いまさらのように

（1）そういえば昔はここでよく友達と鬼ごっこをしたなあと、今さらのようになつかしく思った。

（2）昔の写真を見ると、当時の苦労が今さらのことのように思い出される。

（3）母はお前も地元で就職すればよかったのにと、今さらのように言う。

後ろに「思う」「なつかしむ」「言う」などの表現を伴って、昔のこと、もう終わったこと、忘れてしまったことなどについての感情が今また改めてよみがえるという意味を表す。

（2）のように「今さらのことのように」ともいう。

【いまだ】

1 いまだに

（1）あの人いまだに病気で寝込んでるんだって。

（2）その喫茶店は客もめっきり減ってしまったが、いまだにがんばって経営を続けている。

（3）彼はいまだに大学のジャズ研究会に籍をおいて、活動を続けているそうだ。

（4）祖父が亡くなって7年もたつというのに、いまだに祖父宛の年賀状が何通か届く。

後ろに肯定表現を伴って、ふつうならもうそうではない状態になっているはずなのに、いまでもその状態が続いていることを表す。書きことば的。今でも。まだ。

2 いまだ(に)V-ない

（1）行方不明の二人の消息は未だにつかめていない。

（2）申し込んでから1ヶ月以上たつのに、未だに連絡が来ない。

（3）今回の催しはもう日程まで決まっているのに、内容については未だ何の具体案も出されていない。

（4）本来ならもうとっくに完成しているはずなのですが、工事は未だに中断されたままで、再開のめども立っていません。

後ろに否定表現を伴って、本当ならあることが起こっているはずなのに、現実にはまだ起こっていないという意味を表す。期待と現実のずれを表し「まだ」よりも意外な気持ちを強く表す。書きことば的。

【いまでこそ】

[いまでこそ …N／…Na だが]

[いまでこそ …A／…V が]

（1）二人は今でこそ円満に暮らしているが、結婚当初は毎日喧嘩が絶えなかった。

（2）今でこそこの仕事に全力を尽くしているが、以前は何度やめようと思ったかしれない。

（3）いまでこそ留学も珍しくないが、お父さんが子供の頃は、留学など夢のまた夢だった。

（4）今でこそ何度も海外旅行をすることも当たり前になっているが、つい10年ほど前までは、一生に一度新婚旅行で行くのがやっとという感じだった。

「現在はそのことがらは当然のこととして認められているが」という意味で、「以前はそんなことはまったくなく、正反対の状況だった」ということを表す表現が続く。

【いまに】

（1）あんなに働いていたら、あいつは今に過労で倒れるだろう。

（2）田中さんも今にすばらしい小説を書いてくれると信じています。

（3）見ていてごらんなさい。今にこの海も汚染されて魚もとれなくなりますよ。

（4）いたずらばかりしていると、今にひどい目に会うぞ。

（5）今に見ていろ。きっと大物になってみせる。

「そのうちに」の意味。近い将来あることが起こるという予想を確信を持って言うときに用いる。相手のことを言う場合は、励ましや忠告、警告になる。（5）は慣用句で、誰かに対しての挑戦の気持ちを表す。

【いまにも】

[いまにも V-そうだ]

(1) 今にも雨が降りそうだ。

(2) 彼女は今にも泣き出しそうな顔をしていた。

(3) 「助けてくれ」と彼は今にも死にそうな声を出した。

(4) 嵐はますます激しくなり、小さな船は今にも沈みそうに波にもまれていた。

あることが今すぐに実現しそうに見える様子を言う。かなり切迫した状況で用いる。

【いまや】

(1) 彼女は今や押しも押されもせぬ花形スターだ。

(2) 今や時代は物より心である。

(3) 5年前はこのワープロも最新機種だったが、今やこんなのは無用の長物だ。

(4) 昔は新婚旅行と言えばハワイだったが、今やトルコやエジプトも珍しくない。

「今では」の意味。過去と比較して、今はもうそういう古い状態・ことがらは終わってしまい、まったく違う新しい状況になっているのだということを言うのに用いる。

【いらい】

1 いらい

a Nいらい

(1) あれ以来彼女は姿を見せない。

(2) 先週以来ずっと会議続きで、くたくたに疲れきっている。

(3) 母は、去年の入院以来気弱になってしまった。

ある時点や出来事を表す名詞を受けて、その時からずっと今に至るまでという意味を表す。

b V-ていらい

(1) 夏休みに風邪で寝込んで以来、どうも体の調子が悪い。

(2) インドから帰ってきて以来、彼はまるで人が変わったようだ。

(3) スポーツクラブに通うようになって以来、毎日の生活に張りが出てきた。

(4) この家に引っ越して以来、毎日のようにいたずら電話がかかる。

過去にある出来事が起こってから、ずっと今に至るまでという意味を表す。近い過去については用いられない。

(誤) 弟は夕方うちに帰ってきて以来、部屋に閉じ込もったきりだ。

(正) 弟は先月イギリス出張から帰ってきて以来、忙しくて毎晩夜中まで帰ってこない。

c V-ていらいはじめて

(1) 引っ越してきて以来、初めて隣の人と言葉を交わした。

(2) 大学に入って以来、初めて図書館を利用した。

(3) この冬になって以来初めての寒波で、死者が6人も出た。

過去のある時点からずっと時間がたって初めてという意味を表す。

2 Nは、…いらいだ

[Nは、Nいらいだ]

[Nは、V-ていらいだ]

(1) お会いするのは、去年の9月以来ですね。

(2) 海外旅行はおととしトルコに行って以来だ。

(3) 数学の問題を解いたのは大学入試以来のことだから、もう何年ぶりになるだろうか。

(4) 郷里に帰るのは、7年前に祖父の法事に出た時以来なので、町はかなり様子が変っていた。

過去の時点や過去の出来事を表すことばを受けて、その時からずっと時間がたって久し振りであることを表す。

【いわば】

[いわば Nのような]

[いわば Vような]

(1) 彼女の家は石造りの洋館で、いわばドイツのお城のような造りだった。

(2) 多くの若者に慕われている彼は、いわば悩み多き人々を救済する神様だ。

(3) そんな商売に手を出すなんて、いわばお金をどぶに捨てるようなものだ。

(4) この小説は、いわば現代の源氏物語とでもいったような作品だ。

(5) コンピュータ・ネットワークは、いわば脳神経のように地球全土に張り巡らされていると言ってもいいだろう。

「言ってみれば」「たとえて言うならば」の意味。あることをわかりやすく説明するために、比喩的に例示するのに用いる。一般的にイメージしやすいよく知られたものやことがらを表す名詞や動詞が用いられる。書きことば的。(2)は「ような」が省略されている場合。(5)は述語に続く場合で「ように」が用いられている。

【いわゆる】

[いわゆるN]

(1) これがいわゆるエスニック料理というものですか。

(2) 彼女はいわゆる普通のOLで、役職につきたいなどとは考えたこともなかった。

(3) 彼も、いわゆるワールドミュージックのブームに乗って、世界的に売れるようになった歌手の一人だ。

(4) A:うちの大学、最近またアメ

リカの大学と姉妹校になったんです。これで8校目ですよ。

B：ああ、いわゆる「大学の国際化」というやつですね。そういうのが国際化だと思っている人が、まだたくさんいるんですねえ。

「一般的に…と言われている」という意味。あることをわかりやすく説明するために、一般的に使われている言葉を出すのに用いる。また(4)のように、その言い方・概念が話し手には好ましくないということを表す場合もある。

【うえ】

1 Nのうえで(は)

(1) 暦の上ではもう春だというのに、まだまだ寒い日が続いている。

(2) データの上では視聴率は急上昇しているが、周りの人に聞いても誰もそんな番組は知らないと言う。

(3) その公園は地図の上では近くてすぐ行けそうに見えるが、実は坂がたくさんあってかなり行きにくい場所なのだ。

(4) 間取りは図面の上でしか確認できなかったが、すぐにそのマンションを借りることに決めた。

データや地図など書き表せるものを表す名詞を受けて、「その情報によると」という意味を表す。

2 V-るうえで

(1) パソコンを買う上で注意しなければならないことは何ですか。

(2) このプロジェクトを進めていく上で障害となるのが、地元の住民の反対運動だ。

(3) 女性が結婚相手を選ぶ上での重要なポイントとして、「三高」ということが言われていた。

(4) 留学生を実際にホームステイさせる上で、おそらく今までに予想もしなかった問題がいろいろ出てくるものと思われますので、そのための相談窓口を設けました。

「何かをする場合／過程の中で」という意味。その場合や過程における問題点・注意点などについて述べるのに用いる。

3 V-たうえで

(1) では、担当の者と相談した上で、改めてご返事させていただきます。

(2) 一応ご両親にお話しなさった上で、ゆっくり考えていただいてけっこうです。

(3) 金を貸してやると言ったのは、お前がちゃんと職についてまともな生活に戻った上でのこと

だ。働かないで遊んでばかりいるやつに金を貸すわけにはいかない。

「動詞が表す行動をまず行って」という意味を表し、後ろには「その結果に基づいて次の行動をとる」という意味の表現が続く。

4 V-る／V-た うえは

(1) やると言ってしまったうえは、何がなんでもやらなければならない。

(2) 留学を決心した上は、少々のことがあっても一人で乗り越えていけるだけの強さを養ってほしい。

(3) みんなに期待されて出馬する上は、どんなことがあっても当選しなければならない。

(4) 他の仲間を押しのけてレギュラーメンバーになる上は、必ず得点してチームに貢献してみせる。

何らかの責任・覚悟を伴う行為を表すことばを受けて、「その行為を行う／行ったのだから」という意味を表す。後ろには、「それに基づいてそれに適した行動をしなければならない」という意味の表現が続く。「…からには」「…以上は」。改まった表現。

5 …うえ(に)

[Nであるうえに]
[Naなうえに]
[A／V　うえに]

(1) 今年は冷夏である上に台風の被害も大きくて、野菜は異常な高値を記録している。

(2) 彼女は、就職に失敗した上、つきあっていた人にもふられて、とても落ち込んでいた。

(3) その選手は日本記録も更新した上に銀メダルももらって、自分でも信じられないという顔をしていた。

(4) 彼は博士号を持っている上に教育経験も長い。周囲の信頼も厚く教師としては申し分のない人だ。

(5) その壁画は保存状態がいい上に図柄もこれまでにない大胆なもので、考古学者たちの注目の的となっている。

(6) 今年は冷夏であり、そのうえ台風の被害も大きくて、野菜は異常な高値を記録している。

(7) このあたりは閑静なうえに、駅にも近く住環境としては申し分ない。

ある状態・出来事があり、さらにそれ以上の状態・出来事が重なることを表す。名詞に付く場合は「Nである／だった／であった」の形になる。(6)の「そのうえ」は文や節の頭に用いられる。

【うち】

1 うち ＜範囲＞

a Nのうち

（1）この三曲のうちでどれが一番気に入りましたか。

（2）三つのうちから好きなものを選びなさい。

（3）バッハとモーツァルトとベートーベンのうちで、一番人気があるのはやはりモーツァルトだそうだ。

（4）昨日買ったCDのうち、2枚はインドネシアのポップスで、3枚はカリブの音楽だ。

範囲を限定するのに用いる。（1）〜（3）のように、その範囲の中から何かを選ぶことを表す場合には「Nのなか」に言いかえられる。また、（3）のように、複数の名詞を並べて「N1とN2と…のうち」と言う場合もある。

b …うちにはいらない

［Nのうちにはいらない］

［A-いうちにはいらない］

［Vうちにはいらない］

（1）通勤の行き帰りに駅まで歩くだけでは、運動するうちに入らない。

（2）5分やそこら漢字の練習をしたって、それではやったうちに入らない。

（3）ラーメンを作るのが得意だなんて、そんなの料理のうちに入らないよ。

（4）彼はきびしい教師だと評判だが、宿題を忘れた生徒を廊下に立たせるぐらいなら、特にきびしいうちには入らないと思う。

「その範囲には入らない、そのグループの中に入るとみなすには不十分だ」という意味を表す。

2 うち ＜時間＞

a …うちに

［Nのうちに］

［Naなうちに］

［A-いうちに］

（1）朝のうちに宿題をすませよう。

（2）朝のすずしいうちにジョギングに行った。

（3）ここ数日のうちには何とかします。

（4）ひまわりは留守のうちにかなり大きくなっていた。

（5）父親が元気なうちに、一度一緒に温泉にでも行こうと思う。

（6）電車が出るまでまだ少し時間があるから、今のうちに駅弁を買っておいたらどう?

ある期間続くことを表す表現と共に用いられて、「その状態が続く間に」「その時間以内に」という意味を表す。（6）の「今」は瞬間的な時点ではなく、「今の事態に何らかの変化が起こるまでの間」という一定の長さを持った時間を表している。

b V-ている／V-る うちに

（1）彼女は話しているうちに顔が真っ赤になった。

（2）手紙を書いているうちに、ふと彼が今日こっちに来ると言っていたことを思いだした。

（3）読み進むうちに次第に物語にのめり込んでいった。

「…している間に」という意味を表す。後ろには、出来事の生起や変化を表す表現が続く。「V-ている」の形の方が多く用いられるが、「V-るうちに」が使われることもある。

c V-ないうちに

（1）知らないうちに隣は引っ越していた。

（2）あれから10分もしないうちにまたいたずら電話がかかってきた。

（3）暗くならないうちに買い物に行ってこよう。

（4）お母さんが帰ってこないうちに急いでプレゼントを隠した。

「…しない状態が続いている間に」という意味を表す。（3）（4）のようにその状態がいずれ変化することがわかっている場合は、「V-る前に」と言いかえられる。

d V-るかV-ないうちに

（1）夕食に手をつけるかつけないうちに、ポケットベルで呼び出された。

（2）朝まだ目がさめるかさめないうちに、友達が迎えにきた。

（3）その手紙の最初の一行を読むか読まないうちに、もう何が書いてあるのかだいたい分かってしまった。

同じ動詞を繰り返して用いて、「なにかをし始めてまだほとんど時間がたっていない時に」という意味を表す。

e …うちは

［Nのうちは］

［Naなうちは］

［A-いうちは］

［V-る／V-ている うちは］

［V-ない うちは］

（1）明るいうちはこのあたりはにぎやかだが、夜になると人通りもなくなり、一人で歩くのは危ない。

（2）記憶力が衰えないうちは、何とか新しい外国語も勉強できるだろう。

（3）息子が大学生のうちは私も生きがいがあったが、就職して家から出て行ってしまってからは毎日がむなしい。

（4）父は働いているうちは若々しかったが、退職したとたんに老け込んでしまった。

（5）体が健康なうちは健康のありがたさに気づかないが、病気になってはじめてそれが分かる。

「ある状態が変わらないでまだ続いている間」という意味を表す。それが終わってからの状態と比較する場合に用いることが多い。

f …うちが

[Nのうちが]
[Na なうちが]
[A-いうちが]
[V-る／V-ている うちが]
[V-ていない うちが]

(1) 若いですねと言ってもらえるうちが花だ。
(2) 天体写真は雲が出ていないうちが勝負だ。
(3) どんなに苦労が多くつらい毎日でも、生きているうちが幸せなのであって、死んでしまったら元も子もない。
(4) いくら福祉施設が充実しても、やっぱり人生は体が丈夫なうちが楽しい。
(5) 人生、若いうちが花だ。

後に「花だ／勝負だ／いい／幸せだ」などの言葉を伴って、「ある状態が続いていて変わらない間がよい、大切だ、大事だ」という意味を表す。

g そのうち

→【そのうち】

【うる】

[R-うる]

(1) 彼が失敗するなんてありえない。
(2) それは彼女になしえた最大限の努力だったに違いない。
(3) その絵のすばらしさは、とても言葉で表しうるものではない。
(4) 確かに外国人労働者が増えればそういう問題も起こり得るだろう。
(5) 彼の自殺は誰もが予期し得なかったことだけに、そのショックは大きかった。
(6) 彼の仕事ぶりには失望の念を禁じ得ない。

動詞の連用形に付く。辞書形は「うる／える」どちらの形もあるが、マス形は「えます」否定形は「えない」タ形は「えた」のみ。「その行為を行うことができる、そのことがらが成立する可能性がある」という意味を表す。否定形は、「その行為を行うことはできない、そのことがらが成立する可能性はない」の意味。「書ける」「読める」などの可能を表す「V-れる」の場合は意志的な行為を表す動詞しか用いられないが、「うる」の場合は(1)(4)のように、意志のないものも用いられる。可能を表す「V-れる」とは違って、能力を表す場合には使えない。

(誤) 彼はフランス語が話しうる。
(正) 彼はフランス語が話せる。

一般的には書きことばだが、「ありえない」は日常会話にも用いられる。

【える】

(1) 21世紀には人が月で生活す

ることもありえるかもしれない。
(2) 私一人の力ではとてもなしえないことでした。

→【うる】

【お…いたす】

[お R-いたす]
[ご N いたす]

(1) お食事をお持ちいたしましょうか。
(2) お名前をお呼びいたしますので、それまでここでお待ちください。
(3) のちほどこちらから改めてご連絡いたします。
(4) それではレセプション会場の方へご案内いたします。
(5) 今回の件につきましては、皆様の納得の行くまでご説明いたしたいと存じます。

動詞の連用形や行為を表す漢語の名詞を用いる。(3)(4)(5)のように漢語の名詞とともに使う場合は「ごNいたす」の形が多い。「お…する」のよりへりくだった丁寧な言い方。おもにマス形で用いられる。

→【お…する】

【お…いただく】

[お R-いただく]
[ご N いただく]

(1) 今日は遠いところをわざわざお集まりいただきましてありがとうございます。
(2) ここにお名前とご住所をお書きいただいて、あちらの窓口へお出しください。
(3) お忙しいのにご連絡いただき、まことに恐縮しております。
(4) ご住職にご教示いただいた禅の心を、これからは生活の中で実践していきたいと思います。
(5) ≪案内状≫先生にはぜひご出席いただきたく、お知らせ申し上げます。

動詞の連用形や行為を表す漢語名詞を用いる。「ていただく」と同じ謙譲表現だが、より丁寧で改まった言い方。(3)(4)(5)の「連絡する」「教示する」「出席する」のように、行為を表す漢語名詞の場合は、「ごNいただく」の形が多いが、「電話する」については「お電話いただく」を用いる。

【お…ください】

→【お…くださる】

【お…くださる】

[お R-くださる]
[ご N くださる]

(1) 今日お話しくださる先生は、東西大学の山川先生です。
(2) 今日ご講演くださる先生は、東

西大学の山川先生です。

（3）お忙しいのにおいでくださって、本当にありがとうございます。

（4）大した料理ではございませんが、どうぞお召し上がりください。

動詞の連用形や行為を表す漢語名詞を用いる。「てくださる」と同じ尊敬表現だが、よりていねいで改まった言い方。（2）のように行為を表す漢語名詞とともに使う場合は「ごNくださる」の形が多いが「電話する」の場合は「お電話くださる」を用いる。（4）のように、「おR-ください」の形で、ていねいに人にものを勧めることができる。

【お…する】

［おR-する］

［ごNする］

（1）先生、お荷物をお持ちします。

（2）部長をお宅まで車でお送りした。

（3）ご注文の品をお届けしました。

（4）お部屋へご案内しましょう。

（5）あとでこちらからご連絡します。

動詞の連用形や行為を表す漢語名詞を用いる。謙譲表現で「自分が相手のためにある行為をする」という意味。（4）（5）のように漢語名詞とともに使う場合は「ごNする」の形が多いが、「電話する」の場合は「お電話する」を用いる。（1）のように「おR-します」の形で、自分が相手のために何かすることを申し出ることができる。「お…いたす」はさらに丁寧な言い方。

【お…です】

［おR-だ］

［ごNだ］

（1）林先生は信州に別荘をお持ちだそうですよ。

（2）今年の夏休みはどちらでお過ごしですか。

（3）昨日は大阪にお泊まりでしたか。

（4）≪ファーストフードの店で≫こちらでお召し上がりですか。

（5）原田部長は明日からご旅行で2週間いらっしゃらないそうです。

（6）お宅のご主人は本社にご栄転だそうですね。

動詞の連用形や行為を表す漢語名詞を用いる。（5）（6）のように行為を表す漢語名詞とともに使う場合は「ごNだ」の場合が多い。「お…になる」のような尊敬表現だが、語彙が限られて慣用化している。

【お…なさい】

→【なさい】

【お…なさる】

［おR-なさる］

［ごNなさる］

（1）あの先生がお話しなさったことは、多くの人たちにとって生きていく心の支えとなるだろう。

（2）ケニアへはいつご出発なさるんですか。

（3）今度あなたがその方達とお食事なさるときにでも、一度ご一緒させていただけるとうれしいのですが。

（4）どうぞ、お食べなさい。

（5）明子、自己紹介なさい。

動詞の連用形や行為を表す漢語名詞を用いる。「おR-になる」と同じ尊敬表現。「お話しなさる」「お食べなさる」のように動詞の連用形を用いる場合は、やや古めかしく感じられる。「おR-になる」の形を使うことの方が多い。（2）のように、漢語名詞とともに使う場合は「ごNなさる」の形が多い。（4）（5）のように「なさい」の形を用いると、丁寧な命令を表す。その場合、目上の人に対しては用いられない。

【お…になる】

［おR-になる］

［ごNになる］

（1）村田さんはもうお帰りになりました。

（2）このさし絵は山本さんご自身がお描きになったそうです。

（3）今度大阪においでになる時には、ぜひうちにお泊まりになってください。

（4）どうぞ、おかけになってください。

（5）野村先生は1972年に京都大学をご卒業になりました。

（6）ご家族の方は半額の会費ですべてのスポーツ施設をご利用になれます。

動詞の連用形や行為を表す漢語名詞を用いる。尊敬表現。（5）（6）のように漢語名詞とともに使う場合は「ごNになる」の形が多いが、語彙は限られている。（4）のように「てください」の形をとると、人にものを丁寧に勧める用法となる。

【お…ねがう】

［おR-ねがう］

［ごNねがう］

（1）明日うかがいたいと、山田さんにお伝え願えますか。

（2）来月のシンポジウムにご出席願いたいのですが、ご都合はいかがでしょうか。

（3）何か一言お話し願うことになるかもしれませんので、そのときはよろしくお願いします。

（4）係員の指示を守っていただけない場合は、ご退場願うこともあります。

（5）ご起立願います。

動詞の連用形や行為を表す漢語名詞を用いる。「…することをお願いする」「…してもらう」の意味で、(1)(2)のように「願えますか／願いたいのですが」など依頼の形で使うことが多い。(2)(4)(5)のように、漢語名詞とともに使う場合は「ごNねがう」の形が多い。改まった表現。

【おいそれと(は)…ない】

[おいそれと(は)V-れない]

(1) 子供を産んだばかりの母ネコにはおいそれとは近づけない。

(2) 君ならできるとおだてられても、あんな大役は責任も重いし、おいそれとは引き受けられない。

(3) 当時は大変な不景気で、大学を出たからといっておいそれと就職できるような時代ではなかった。

(4) お礼にと言ってお金を差し出されたが、何か下心がありそうなので、おいそれと受け取るわけにはいかなかった。

何かの理由があって簡単にすることはできないという意味を表す。文末には可能を表す「V-れる」の否定形など、その動作が不可能であることを意味する表現が用いられる。(3)のように「おいそれと…する」が名詞を修飾することもある。その場合も名詞の後には否定表現が続く。(4)は「V-るわけにはいかない」が不可能の意味を表す例。

【おいて】

(1) この研究分野の第1人者ということなら、加藤先生をおいてほかはないでしょう。

(2) 何をおいても期日には間に合わせなければならない。

→【をおいて】

【おうじて】

→【におうじて】

【おかげだ】

→【のは…だ】4

【おかげで】

[Nのおかげで]
[Na な／だった おかげで]
[Aおかげで]
[V-たおかげで]

(1) あなたのおかげで助かりました。

(2) 祖父は生まれつき体が丈夫なおかげで、年をとっても医者の世話にならずにすんでいる。

(3) あなたが来てくれたおかげで、楽しい会になりました。

(4) A：お子さんのけがはどうですか。
B：おかげさまで、だいぶ良くなりました。

(5) まったく、君に頼んだおかげでかえってややこしいことになってしまったじゃないか。

(6) 今年は夏が涼しかったおかげで冷房はほとんど使わずにすんだ。

原因・理由を表すが、それがよい結果を導くものである場合に用いる。悪い結果を導く場合には、「…せいで」となる。

(例) あなたのおかげで成功した。

(例) あなたのせいで失敗した。

相手の動作を表す場合は「V-てくれた／てもらったおかげで」の形になることが多い。(4)の「おかげさまで」は慣用的なあいさつ表現。また(5)のように皮肉の意味で使うこともある。

【おきに】

[数量詞＋おきに]

(1) 大学行きのバスは10分おきに出ている。

(2) この薬は2時間おきに飲んでください。

(3) この道路には10mおきにポプラが植えられている。

(4) このあたりは高級住宅街で、2軒おきぐらいに外車を持っている家がある。

(5) 映画館に入ると、座席は一つおきにしかあいていなかったので、友達とは離れて座ることになった。

おもに時間や距離を表す言葉について、「それだけの間をおいて」という意味を表す。(4)(5)は距離ではないが、一列に並んだものの場合、それが距離を表すような意味で用いられる。(1)～(3)のように、時間や距離の軸上の点を意味する場合は、「ごとに」と置きかえられる。ただし、1という数の場合は、次の例のように「おきに」を「ごとに」に変えると意味が変わる。

(例) 1年おきに大会が開かれる。(2年に1回)

(例) 1年ごとに大会が開かれる。(1年に1回)

【おそらく】

(1) おそらく彼はそのことを知っているだろう。

(2) 相手チームはおそらくこちらのことを何から何まで詳しく調べているだろう。

(3) 台風12号は、おそらく明日未明には紀伊半島南部に上陸するものと思われます。

(4) おそらくは首相も今回の事件に関わっているにちがいない。

後ろに「…だろう」「…にちがいない」などの推量を表す表現を伴って、話し手の推量を表す。かなり確実だと思っている場合に使う。(4)のように「おそらくは」とも言う。かたい表現。くだけた話しことばでは「たぶん」「きっと」の方が多く用いられる。

【おそれがある】

[Nのおそれがある]

[V-るおそれがある]

（1）今夜から明日にかけて津波の恐れがあるので、厳重に注意してください。

（2）再び噴火する恐れがあるため、警戒区域の住民に避難勧告が出された。

（3）親鳥に気付かれる恐れがあることから、撮影チームはそれ以上巣に近づくことをあきらめた。

（4）ハリケーンの被害が拡大する恐れが出てきたため、大統領は各国に緊急援助を求める予定である。

出来事が起こる可能性があることを表すが、望ましくないことの場合に限られる。同様の表現に「危険がある」「不安がある」などがある。書きことば的。ニュースや解説記事などによく用いられる。

【おなじ】

1 …とおなじ

[Nとおなじ]

[Vのとおなじ]

（1）このステレオはうちのと同じだ。

（2）この本はあの本と出版社が同じだ。

（3）この点で妥協することはすべてをあきらめるのと同じことだ。

（4）あの人が食べているのと同じものをください。

（5）ヒンディー語は英語と同じインド・ヨーロッパ語族の言語だ。

二つのものやことが等しいことを表す。

2 おなじV-る　なら／のだったら

（1）同じ買うなら、少々高くても長持ちするものの方がいい。

（2）久しぶりの旅行なんだから、同じ行くんだったら思い切って遠くに行きたいな。

（3）同じお金をかけるのなら、食べてなくなるものでなく、いつまでも使えるものにかける方が意味があると思う。

（4）A：一緒にフランス語か何か習いに行かない?

B：そうねえ、フランス語もいいけど、同じ習うんだったら人のやってないような言語の方がいいと思わない?

「同じ行為をする以上は」という意味。ある行為をするのにもいろいろなやり方や方法があり、そのうちでもっとも望ましいものを述べるのに用いる。どうせなら。せっかくなら。

【おぼえはない】

1 V-られるおぼえはない

（1）きみにそんなひどいことを言われる覚えはない。

（2）おまえになぐられる覚えはない。

（3）あなたのように冷たい人に「冷淡だ」などと非難される覚えはありません。

受身の「V-られる」に付く。相手の行為を述べて「あなたにそういう行為をされるようなことをした記憶はない」という意味を表す。相手に対する非難の気持ちが含まれる。

2 V-たおぼえはない

（1）彼があんなに怒るようなことを言った覚えはないんだけど。

（2）A：この間の1万円、早く返してもらえませんか。

B：何のことですか。私はあなたにお金を借りた覚えはありませんが、他の人と間違えているのではないですか。

（3）こちらは山田にいじめられた覚えはないのだが、山田は「いじめて悪かった」と謝ってきた。

「私にはそういう経験をした記憶はない」という意味。非難されて自分を正当化するような場合に用いられる。

【おまけに】

（1）あたりはすっかり暗くなり、おまけに雨まで降ってきた。

（2）友達の引っ越しを手伝いにいったら本人は風邪がひどくて重い荷物を運ばされ、おまけに掃除までやらされた。

（3）きのう、おばさんに映画に連れていってもらって、おまけに夕食までごちそうになった。

（4）彼は背が高くて、ハンサムでユーモアがあって、おまけに金持ちときては、女性にもてるわけだ。

（5）洋子はかわいいし、明るいし、おまけにやさしいから、だれにでも好かれる。

いくつかのことがらに加えて、同じようなことがらがもう一つつけ加わることを表す。「そのうえ」という意味。(1)(2)(3)の「おまけに・・・まで」は程度がより強まることを表す。話しことばのくだけた表現。

【おもう】

1 …とおもう

a …とおもう

（1）今日は雨が降ると思います。

（2）山田先生は来ないと思う。

（3）あの人のやり方はひどいと思います。

（4）彼の言ったことはうそだと思う。

（5）確か、机の上に置いたと思う。

（6）あなたには幸せになってほしいと思うから、あえてこういうきつい忠告をするのです。

（7）こんな忙しい会社にいつまでもいては過労死しかねないと思って、思いきって転職することにした。

節を受けて、それが話し手の主観的な判断・個人的な意見であることを表す。疑問文では、聞き手の個人的判断や意見を問う表現になる。「と思う／思います」のように辞書形・マス形で言い切る表現では、その主語はいつも話し手であり、第三者ではない。例えば、(2)では「思う」のは「私」であって、「山田さん」ではない。もし、思う主体が山田さんだということを表したければ「山田さんは(田中さんが来ない)と思っている」のように、「思っている」の形にしなければならない。ただし、「思う」が次の例のようにタ形をとる場合は、第三者の判断を表すことも可能となる。

(例) 山田さんは来ないと思った。

ここでは、「私は山田さんは来ないと思った」という解釈と「山田さんは(誰かが)来ないと思った」という解釈のどちらも可能である。

b …とおもっている

（1）私は自分のしたことが正しいと思っている。

（2）イギリスに留学してよかったと思っている。

（3）警察はあの男が犯人だと思っている。

（4）その実力で合格できると思っているの。

節を受けて、話し手、あるいは第三者がそのような意見や判断・信念をもっていることを表す。これを上のaの「思う」の場合と比べると、「思う」は、話し手がその場で下した判断という意味合いが強いのに対し、「思っている」は、以前から現在に到るまでそのような意見や信念を持っているといったニュアンスがある。また、(3)(4)のように、「思っている」は第三者の意見や判断を表せるという点でも、それができない「思う」とは異なる。

c …とおもわれる

（1）このままの状態では環境汚染は進む一方だと思われる。

（2）私にはこのことが正しいとは思われません。

「自発的にそのような判断が成り立つ」という意味を表し、自分の意見を独断ではなく客観的に述べたり、主張をやわらげたい場合に用いられる。論文や講義・講演など書きことば的な文章で多用される。「と」のかわりに「ように」を用い「ように思われる」となることもある。

2 …とはおもわなかった

（1）まさか今日あの人が来るとは思わなかった。

（2）こんな街中にこんな静かな公園があるとは思わなかった。

（3）独身寮の部屋は狭いとは聞いていたが、こんなに狭いとは思わなかった。

（4）いつも反抗的なお前がそんなに素直に謝るとは思わなかっ

たな。

（5）A：引っ越し先のおとなりが田中さんだなんて思ってもみませんでしたよ。奇遇ですね。

B：いや、ぼくも隣に越してくるのが君だとは思わなかったよ。

「そのことがらはまったく予想していなかった」という意味で、驚きの気持ちを含むことが多い。

3 R-たいとおもう

（1）アメリカに留学したいと思います。

（2）結婚式には是非参加したいと思っております。

（3）一流会社に就職したいと思っている。

（4）では、ご一緒に乾杯をしたいと存じます。

話し手の願望や欲求を表す「〜たい」に付いて、その直接的な言い方をやわらげて、丁寧な表現にする働きをもつ。さらに丁寧な表現では、(4)のように「存じます」を使うこともある。「〜たい(です)」と、そのまま言い切る表現は子供っぽい印象を与えるため、成人の改まった会話では不適切で、「思う」や「のだ」などを伴うのが普通である。

4 …おもう

[Naにおもう]

[A-くおもう]

（1）先生に指導していただけることになって、本当に幸せに思います。

（2）バスが全然来ないので、不思議に思って聞いてみたら、昨日からダイヤが変わったとのことだった。

（3）この度の突然のご逝去をまことに辛く悲しく思います。

（4）お会いできてうれしく思います。

（5）このような賞をいただくことができ、まことに光栄に存じます。

気持ち・感情を表すイ形容詞・ナ形容詞の連用形を受けて、話し手が「そのように感じる」という意味を表す。(2)(3)のように「XをYに(Yく)おもう」という形が用いられることもある。相手の感想を尋ねる場合は次のように「どう思う／思いますか」を使う。

(例) あの人についてどう思いますか。

5 V-ようとおもう

（1）今日はゆっくり休もうと思う。

（2）この仕事をやめようと思っている。

（3）A：夏休みはどうするつもりですか。

B：ヨーロッパを旅行しようと思っています。

（4）将来、どんな仕事をしようと思っているんですか。

動詞の意向形を受けて、話し手の予定や意志を表すのに用いる。疑問文では

聞き手の意志を問う表現になる。次の例のように、「と思う」が辞書形を受ける場合は、自分の予定が不確かだという意味になり、意志の表現としては誤りになる。

（例）私は来年アメリカに行くと思う。

6 …ようにおもう

[N／Na　であるようにおもう]

[A／V　ようにおもう]

（1）太田くんは内気なので、ウェイターの仕事は向いていないように思う。

（2）住民の多くが反対していることを考えると、マンションの建築は見合わせた方がいいように思う。

（3）この社員旅行のプランはちょっとゆとりがなさすぎるように思うのですが。こんなに短期間であちこち動き回っても疲れるだけではないでしょうか。

（4）≪上司に≫パソコンは一人に一台あった方が仕事の能率も上がるように思うのですが、購入するわけにはいきませんか。

（5）国民一人一人の幸せを考えることは首相としての当然の義務であるように思われますが、首相はいかがお考えでしょうか。

自分の意見を控えめに主張するのに用いる。相手が自分と異なる意見を持っている可能性がある場合や、相手にとって同意しにくい内容を持ち出す場合などによく使われる表現。さらに婉曲的にしたい場合は、「ように思われる」を用いる。

7 N（のこと）をおもう

（1）親が子供を思う気持ちは何にも変えられない。

（2）いつもあなたのことを思っている。

（3）試験のことを思うと心配で眠れない。

（4）母の優しさを思うと気持ちが安らぐ。

名詞や「名詞＋のこと」を受けて、それについて心を働かせることを表す。前にくることばの意味に応じて、「想像・回顧・心配・気兼ね・恋慕」などといった様々な意味を表す。

8 Nを…とおもう

[Nを　N／Na　だとおもう]

[Nを　A／V　とおもう]

（1）最初は保子さんを男の子だと思った。

（2）人々は私の考えを奇想天外だと思ったようだ。

（3）みんな、彼の提案を実現不可能だと思って相手にしなかった。

（4）彼女の横顔を美しいと思った。

（5）みんなが彼のことを死んだと思っていた。

（6）彼は自分のことを天才だと思っている。

あるものについての感想や印象や判断を述べるのに用いる。「Nを」の代わりに「Nが」を用いることもある。

（例）人々は私の考えが奇想天外だと思ったようだ。

（1）のようにあるものを別のものと取り違えて理解することを表すのにも用いられる。

【おもえば】

1 おもえば

（1）思えば、学生時代はみんな純粋だった。

（2）思えば、あのころはよくあなたと徹夜で議論しましたねえ。

（3）A：中島さん、あのころは毎日朝から晩までお酒飲んでましたよね。

B：ええ、思えば、よくもあのときアル中で死ななかったものですよね。もう体じゅうぼろぼろでしたからね。

（4）思えば、あのとき彼女に引き止められなければ、私はあの墜落した飛行機に乗って死んでいたのだ。彼女は命の恩人だ。

文頭に付いて、過去のことを回想していて改めて思い出したことを、懐かしさなどの気持ちを込めて述べるのに用いる。

2 いまからおもえば

（1）母は、私が下宿するのに猛反対したが、今から思えばその気持ちもわからなくもない。

（2）あのときは彼の運営方針に反発したが、今から思えば彼がああいう方針をとったことも理解できる。

（3）今から思えば、あのとき転職しておけばよかったとつくづく思います。当時は転職してもいい仕事ができるとは限らないと思ってしりごみしたのですけどね。

（4）今から思えば、あのとき結婚するのをやめてよかったと思う。婚約を破棄したときは、本当にこれでいいのかと思って、ものすごく不安だったが。

過去のことがらについて、「今そのことを考えてみると」という意味を表す。過去の時点と今では自分の知識や考え方などが変化しており、そのことがらに対しても別な見方ができるような場合に用いる。他人の行為について過去には理解できなかったことが今は理解できたり、自分が過去に行ったことについて過去に正しいと思った行為が今となっては間違いだったと思われたり、その逆だったりする。（1）は、「当時は母の反対の理由が理解できなかったが、今は理解できる」、（3）は、「当時は転職しない方がいいと判断したが、今考えてみると、転職しておけば今ごろもっといい仕事ができていただろうと思う」の意味。過去と現

在の違いを対比的に述べることも多い。「今から思うと」とも言える。

【おもったら】

[N／Na　だとおもったら]

[A／V　とおもったら]

（1）息子の姿が見えないと思ったら、押し入れの中で寝ていた。

（2）なんだか寒いと思ったら、窓が開いていたのか。

（3）めがねがないないと思ったら、こんなところに置き忘れていたよ。

（4）冷蔵庫においしそうなケーキがあると思ったら、お客さん用だった。

（5）最近上田さんが学校に来ないと思っていたら、交通事故で入院しているらしい。

（6）誰もいないのにうちに電気がついていると思ったら、弟が遊びに来て勝手に上がり込んでいたのだった。

節に付いて、そのことがら、その原因・理由がわからなくて変だと感じる気持ちを表す。後に、原因・理由・説明となることがらが続き、それがわかってやっと納得できたという気持ちが表される。（1）は、「息子の姿が見えないので変だと思ったが、押し入れの中で寝ているのを見つけて納得した」、（2）は「寒いので変だと思ったが、窓が開いているのに気づいて納得した」という意味。不可解な状態がずっと続いた場合は、（5）のように「と思っていたら」の形にもなる。

【および】

[NおよびN]

（1）会議終了後、名札およびアンケート用紙を回収します。

（2）この近辺ではとなりの児童公園および小学校の運動場が、災害が発生した場合の避難場所に指定されている。

（3）お祭りの前日および前前日は準備のため休業させていただきます。

（4）近隣住民から苦情のあったマンション内の騒音及びペットの問題が、次回の組合総会の議題となった。

（5）試験の日程及びレポートの提出期限については、追って掲示します。

同じようなことがらを続けて取り上げるのに用いる。「NとN」の意の書きことば的表現。

【おり】

1 おり(に)

[Nのおり(に)]

[V-る／V-た　おり(に)]

（1）前回の書類は今度の会議のおりにお渡しします。

（2）また何かのおりにでもお会いしましょう。

（3）今度お宅におうかがいするおりには、おいしいワインをお持ちします。

（4）仕事で札幌に行ったおりに、足をのばして小樽に寄ってみた。

（5）高校時代の恩師にお会いしたおり、先生のお書きになった本を見せていただいた。

「とき」「機会」の意味。改まったていねいな表現。

2 おりから

a おりから

[Aおりから]

[V-るおりから]

（1）残暑の続くおりから、お体には十分お気をつけください。

（2）冷え込みの厳しいおりから、お風邪など召されませんように。

「とき」「時節」の意味。おもに手紙文に用いる。気候が穏やかでないことを述べ、相手を気遣う言葉をその後に続ける。

b おりからのN

（1）山は嵐のような天候になり、小さな山小屋は、おりからの風にあおられて簡単に吹き飛んでしまった。

（2）最近、ホームレスの人が増えているが、おりからの寒波で凍死した人もいるそうだ。

（3）もともと女子の就職状況は男子より悪かったが、今年はおりからの不況でますます女性には不利になっている。

（4）海外旅行ブームがますます盛んになっているところへ、おりからの円高で、連休の海外旅行客は40万人を越えるそうだ。

「ちょうどそのようなときの～」という意味。「雨、風、嵐、寒さ」など悪天候に関わる名詞や「不況、不景気、円高」など社会状況を意味する名詞が主として用いられる。ある時から続いている状況が原因で、あることが起こったという場合に用いる。書きことば。

【か】

1 …か…か

[NかN(か)]

[Na か Na か]

[AかAか]

[VかVか]

（1）電車かバスで行くつもりだ。

（2）水曜か金曜の夜なら都合がいいのですが。

（3）ネクタイはこれかそれかどっちがいいだろう。

（4）進学か就職かで悩んでいる。

（5）その映画がおもしろいかおもしろくないかは見てみなければわからない。

（6）二次会は、カラオケに行くかもう少し飲むか、どっちがいいでしょうか。

（7）夏休みは、香港か台湾かシンガポールに行きたい。

（8）体が健康か不健康かは顔色で判断できることもある。

XとYのうちのどちらかひとつであることを表す。形容詞や動詞の場合は（5）や次の例のように否定の形とペアで使うこともできる。

（例）行くか行かないか決めてください。

また（7）のように2つ以上のものが列挙されることもある。

2 Nか+疑問詞+か

（1）プレゼントはコーヒーカップか何かにしよう。

（2）その仕事は内田さんか誰かに頼むつもりだ。

（3）夏休みは、北欧かどこか、涼しいところに行きたい。

（4）また来週かいつかお電話しましょうか。

選択肢の中の主なものとして例をあげるのに用いる。

3 …か…かで

［NかN（か）で］
［NaかNaかで］
［AかAかで］
［VかVかで］

（1）あの人の話は、たいてい自分の自慢話か仕事の愚痴かで、聞いているとうんざりする。

（2）あの人は毎晩飲み屋で飲んでいるかカラオケバーに行っているかで、電話してもほとんどつかまらない。

（3）最近の学生はアルバイトで忙しいかクラブ活動で疲れているかで、あまり家で勉強していないようだ。

（4）家賃が安い家は交通が不便か部屋がきたないかで、どこか欠点があるような場合が多い。

マイナスの意味を持つことを二つあげ、そのどちらかの状態であることを表す。後にはそれによって困ったりまずいことが起こったりすることを述べる。次のように「XかYかしていて」となることもある。

（例）彼はパーティーでもずっと飲むか食べるかしていて、全然他の人としゃべろうとしない。

4 …かどうか

［N／Na／A／V　かどうか］

（1）あの人が来るかどうか知っていますか。

（2）それが本物のパスポートかどうかはあやしい。

（3）その映画がおもしろいかどうかは見てみなければ分からない。

（4）このようなアドバイスが適切かどうかわかりませんが、お役に立てれば幸いです。

「…するか…しないか」「…か…でないか」の意味を表す。「はい」「いいえ」で答える選択疑問文を名詞の資格に変えて文の一部に埋め込むのに用いる。例えば（1）で「あの人は来ますか」という文を「あなたはそれを知っていますか」の「それ」の部分に入れかえたもの。後に「知らない／分からない／あやしい／自信がない／決める」などの語が続く。

5 …か…ないか

a …か…ないか

（1）行くか行かないか決めて下さい。

（2）面白いか面白くないか分からない。

→【か】1

b …か…ない（か）

［V-るか V-ない（か）］
［V-たか V-ない（か）］

（1）去年彼女に会ったのは、たしかゴールデンウィークに入るか入らないかの頃だったと思います。

（2）ベルが鳴り終わるか終わらないうちに、生徒達は外へ飛び出していった。

（3）聞こえるか聞こえないかぐらいの程度だが、このレコードには変なノイズが入っている。

（4）この銃は引き金に指が触れるか触れないかで弾が飛び出すので、慎重に扱う必要がある。

同じ動詞の肯定形と否定形を続け「…する」か「…しない」のどちらであるかよくわからないくらいの不明確で微妙な段階であることを表す。過去のことである場合は、（1）なら「入ったか入らないか」と言うこともできる。

6 疑問詞…か

（1）彼がいつ亡くなったか知っていますか。

（2）パーティーに誰を招待したか忘れてしまった。

（3）人生において重要なのは、何をやったかではなく、いかに生きたかということであろう。

（4）人類の将来は、地球環境をいかに守っていくかにかかっていると言っても過言ではない。

疑問詞を伴う疑問文を名詞の資格に変えて、他の文の一部に埋め込むのに用いる。例えば（1）で、「彼はいつ亡くなりましたか」という文を「あなたはそれを知っていますか」の「それ」の部分と入れかえたもの。「か」の前は述語の普通体を用いる。

7 疑問詞+か

a 疑問詞+か

（1）彼はどうも何かを隠しているらしい。

（2）誰かに道を聞こう。

（3）あの人にはいつか会ったことがある。

（4）郊外のどこかに安くて広い土地はないだろうか。

「なに・だれ・どこ・いつ」などの疑問詞に付いて、具体的にはっきりとはわからない、決まっていない、または言う必要のないものを表すのに用いられる。

b 何＋数量詞＋か／いくつか

（1）ビールなら冷蔵庫に何本かある。

（2）鉢植えをいくつか買ってきてベランダに置こう。

（3）男子学生を何人か呼んできて手伝ってもらえば、これくらいの荷物はすぐ運べる。

（4）いつかアフリカに何年か住んでみたい。それが私の夢だ。

「何本」「いくつ」などの不定の数量に「か」が付いて、はっきりした数量は言えないがあまり多くはないということを表す。

8 …からか／…せいか／…のか

（1）彼女は自分も留学経験があるからか、留学生の悩みの相談によくのってあげている。

（2）今日は風があるせいか、日差しが強いわりには涼しく感じられる。

（3）彼はそれを知っていたのか、私の話を聞いても特に驚いた様子はなかった。

（4）彼は家が本屋だからか、いろんな分野の本をよく読んでいるし、趣味で小説も書くらしい。

「Xからか、Y」などの形で、Yの理由をXだろうかと推量して述べるのに用いる。Yの方に重点がおかれている。「か」の部分は「からか・せいか・ためか・のか」などの理由を表す形になることが多い。例えば（1）では「今日は涼しく感じられる。おそらく風があるせいだろう」の意味。

9 …ことか →【ことか】

10 …どころか →【どころ】

11 …ばかりか →【ばかりか】

12 …ものか →【ものか】

【が$_1$】

1 Nが

（1）あの人が山本さんです。

（2）隣のうちには猫が3匹いる。

（3）あ、財布が落ちている。

（4）この本は表紙がきれいですね。

（5）私はジャズが好きです。

（6）外交官になるには語学力が必要だ。

（7）彼は10ヶ国語ができるらしい。

名詞に付いて、（1）（2）（3）（4）のようにその名詞が述語の動作や状態の主体であることを表したり、（5）（6）（7）のように述語の状態の対象であることを表したりする。「負けるが勝ち」のように、ことわざや慣用句などでは、名詞以外の語に付く場合もある。

2 NがNだから

（1）親が親だから、子供があんな

ふうに生意気になるのだ。

（2）もう時間が時間だし、今から行ってもあのレストランは閉まってるかもしれないよ。

（3）デパートをぶらぶら歩いていて、かわいいネックレスを見つけた。とても気に入ったのだが、なにしろ値段が値段だったので買うのはあきらめた。

（4）A：再就職しようと思ったけど、なかなかむずかしいわ。

B：そりゃ、年が年だもの。37の女なんか今どきどこも雇ってくれないわよ。

同じ名詞を繰り返し用いて、後には「だから」や「ので・し・だもの・もので」などの理由を表す言葉がくる。多くの場合、名詞の表すものに対するマイナス評価を意味し、そこから当然出てくる結果を述べるのに用いられる。（1）だと「子供に甘すぎる親だ」、（2）は「食事に行くには遅い時間だ」、（3）は「とても買えないような値段だ」、（4）は「再就職するには高すぎる年齢だ」の意味。

3 NがNだけに

（1）ここの料理は、素材が素材だけに味も格別だ。

（2）この店は味は大したことはないが、場所が場所だけにたいていいつも満員だ。

（3）この店はとても気に入っているのだが、場所が場所だけにそうしょっちゅうは来られないのが残念だ。

（4）その映画は戦時中の日本軍の侵略を扱ったもので、多くの評論家が絶賛している優れた作品だが、内容が内容だけに、一般的な娯楽映画と比べると興行成績は格段に悪かった。

（5）学長が収賄容疑で逮捕された。今までも小さな不祥事はあったが、マスコミには騒がれないよう注意してきた。しかし、今回はことがことだけに、マスコミの取材からは逃れられないだろう。

同じ名詞を繰り返し用いて「それが持っている性質から考えると当然」という意味を表す。後ろにはそこから当然のこととして導き出されることがらが述べられる。それがどういう性質を持つかということは、後半部分の記述内容が明らかにならないと分からない。例えば（1）は「味も格別だ」という記述から素材がよいものであることが分かる。しかし、「素材が素材だけに、大した料理はできやしない」となると、素材が悪いということになる。（2）は便利で人が集まりやすい場所、（3）は反対に、不便で来にくい場所という意味になる。（5）の「ことがことだけに」は慣用的な表現。この例の場合は「重大なことがらなので」という意味を表

す。

4 NがNなら…(が)

(1) 時代が時代なら、この本も売れたかもしれないが、今の時代では人間の生き方を問うような本は若い人には読まれない。

(2) 世が世ならあいつも出世できただろうに。

(3) 俺も大学が大学ならもう少しましな仕事にもつけたのだろうが、この大学ではせいぜいこの会社ぐらいがいいところだ。

同じ名詞を繰り返し用いて、「もしもそれにふさわしい状況であったら」と仮定する気持ちを表す。後ろには「…だろうが／だろうに／かもしれないが」などの表現が続き、そのあとに、実はそうではない現実のありさまが述べられる。(1)は「生き方を真剣に考える人が多くいるような時代なら」、(2)は「あいつを正しく評価してくれるような世なら」、(3)は「もっといい大学なら」というような意味。現実より都合のいい状態を仮定して「もしそうならこのような良い結果になるはずだ」ということを述べる。現実にはありえないことなので、願望がかなわない残念な気持ちや悔しさ、あきらめなどの気持ちが含まれる。

5 NがNならNもNだ

(1) この生徒はいつも教師に口答えばかりして困る。親もすぐ学校にどなりこんでくるし、まったく、親が親なら子も子だ。

(2) まったく、おじさんがおじさんなら、おばさんもおばさんだよ。おじさんが頑固なのはわかっているんだから、嘘でも「ごめんなさい」って言えば喧嘩なんかすぐにおさまるのに。

「NがNなら」の名詞と「NもNだ」の名詞は異なるが、関連性のあるもの。「どちらのNも同じくらいよくない」というマイナス評価を表す。(1)は「親も子もどちらも同じくらい問題だ」、(2)は「おじさんもおばさんも意地を張ってばかりでよくない」の意味。両方を非難する場合に使う。

6 V-たがさいご →【がさいご】

7 V-るがはやいか →【はやいか】

【が$_2$】

[N／Na だが]

[A／V が]

1 が <逆接>

(1) 彼は学生だが、私は社会人だ。

(2) 昨日は暑かったが、今日は急に涼しくなって風邪をひきそうだ。

(3) 今日の試合は、がんばったが負けてしまった。

(4) 種をまいたが、芽が一つも出なかった。

対立的な二つのことがらを結びつけるのに用いる。前半と後半の内容が対立したり、前半のことから予想される結果と反対のことが後半に述べられたりする。

2 が <前置き>

(1) 山田と申しますが、陽子さんいらっしゃいますか。

(2) 今日広田さんに会うんですが、何か伝えておくことはありますか。

(3) 先日お願いいたしました件ですが、引き受けていただくことはできませんでしょうか。

(4) 先月パソコンを買ったのですが、使い方がよくわからないので教えてほしいんですが。

質問、依頼、命令など、相手に働きかける行為をする前に、前置きとなることを述べるのに用いる。

3 が <言いよどみ>

(1) ≪コピーしている人に≫ あのう、ちょっと1枚だけコピーしたいんですが。

(2) すみませんが、ちょっとお先に失礼させていただきたいんですが。

(3) あのう、実は明日の会議に出られないんですが。

(4) この辞書に書いてること、間違っていると思うんですが。

言いにくいことや頼みにくいことなどを言う場合、文末に付けて表現を和らげる。

【かい】

1 かいが ある／ない

[Nのかいが ある／ない]

[V-たかいが ある／ない]

(1) 努力したかい(が)あって、無事合格することができた。

(2) コンクールで優勝できるなんて、一日も休まず練習したかいがあったね。

(3) 警官の懸命の説得のかいもなく、その男性は警官の顔をしばらくじっと見つめた後、屋上から飛び降りてしまったという。

(4) 今になってまったく違う意見を主張されたのでは、せっかくみんなが歩み寄って意見を調整したかいがなくなるじゃないか。

動作を表す動詞や行為を表す名詞に付いて、「その行為から期待される効果がある、その行為が報われる」という意味を表す。否定形では「努力が報われない／その効果がない」という意味になる。

2 R-がい

(1) やりがいのある仕事を求めて転職する。

(2) 仕事のほかに生きがいを見出せないような人生ではあまりにも寂しいではないか。

(3) もっと働きがいのある職場に移りたいと思うが、この不況では

転職もなかなかむずかしそうだ。

（4）こんなに喜んでもらえるのだったら、料理のしがいがある。

（5）一度失われた森林を元に戻すのは大変なことではあるが、そこに住む人たちの暮らしもかかっているだけに、苦労のしがいもあるというものだ。

動詞の連用形に付いて、その動作に価値がある、効果がある、報われることを表す。付く動詞は限られている。（4）（5）のように動作を達成することがむずかしかったり労力を必要としたりするような場合には、そういう苦労をすることに価値・意味があるという意味になる。

【かえって】

（1）親切で言ったつもりなのだが、かえって怒らせてしまったようだ。

（2）間に合うようにと思ってタクシーに乗ったのに、渋滞のせいでかえって遅くなってしまった。

（3）昨日買ったカーテンは少し派手すぎたかなと思っていたが、かえって部屋が明るくなってよかった。

（4）A：お見舞いに来てくれたお礼に、川井さんにはお菓子でも持って行こうか。
B：いや、そんなことをしたら、かえって向こうが気を遣うよ。

（5）A：この間はひどいことを言ってしまって、悪かった。
B：いや、かえって良かったよ。あれから君の言葉を思い出してぼくもいろいろ反省したんだ。

ある行為をすれば、当然ある結果が起こると予想される場合に、意図・予想とは逆の結果が生じる場合に使う。（1）は、「相手を気遣って言ったことが、予想とは逆に相手が怒るという結果になった」、（4）は、「お菓子を持っていけば喜ばれるという予想と逆に、相手が気を遣うということになる」、（5）は、「ひどいことを言ったので相手が傷ついたと思ったが、言われたことで逆に反省するいい機会になった」。常識からみて、一般的に予想されることと反対の結果になった場合に用いられる。その時限りの予想については使いにくい。

（誤）今日は雨が降ると思っていたが、かえっていい天気になった。

（正）今日は雨が降ると思っていたが、いい天気になった。

【かえる】

[R-かえる]

（1）次の文を否定文に書きかえなさい。

（2）次の駅で急行に乗りかえましょう。

（3）電球を新しいのと取りかえたら、部屋が見違えるように明るくなった。

（4）もらってきた花を花びんに生けてあった花と入れかえて玄関に飾った。

（5）家を建てかえたので、ついでに家具も全部買いかえた。

（6）名札をジャケットからシャツに付けかえた。

（7）彼はとても器用で、卓球をやっているとき、ラケットを左右に持ちかえながらプレイすることができる。

動詞の連用形に付いて、「変化する」「交換する」などの意味を表す。（1）（2）（5）は、Xを別なものYに変えるという意味。（3）（4）は、XとYを交換するという意味。（6）（7）は、Xの位置をYからZに移すという意味。他に「移しかえる・置きかえる・掛けかえる・植えかえる・張りかえる」などがある。

【がかり】

動詞「かかる」から派生した語。「時間／お金がかかる」の「費やされる」の意味、「医者にかかる」の「頼る」の意味、「雨がかかる」の「影響される」の意味、「仕事にかかる」の「始める」の意味などがある。

1 数量詞＋がかり

（1）グランドピアノを5人がかりでやっと運んだ。

（2）3日がかりで作り上げた巨大な雪だるまは、翌日のポカポカ陽気ですぐに溶けてしまった。

（3）5年がかりの調査の結果、その湖の生態系は壊れかかっていることがわかった。

（4）さすが横綱は体が大きくて力も強いので、高校生力士が3人がかりで向かっていってもまるで勝ち目はなかった。

「…人／日／時間」などの語に付いて、ある動作をするのにそれだけ多くの人数や時間がかかるということを表す。困難で労力のいる動作を表す表現が続く。

2 Nがかり

（1）彼女は30才にもなって、親がかりで留学した。

（2）男は「君はバラのように美しいね」などと、芝居がかりのせりふを吐いた。

（1）のように、「親に寄りかかる・世話になる」の意味で用いられる場合と、（2）のように「芝居のような性質を持っている・芝居に似た」の意味で用いられる場合がある。（1）のタイプは「親がかり」しかなく、（2）は他に「神がかり」があるが、きわめて限られた名詞にしか付かない。（2）は「Nがかっている／Nがかった」の形も用いられ、その場合は「青みがかった・左がかった」など他の語彙もある。

3 R-がかり

（1）広場でトランペットの練習をしていると、通りがかりの人が何人も足を止めて聞いていった。

（2）それは他の部署の企画だったが、担当者にいくらかアドバイスもしたので、行きがかり上しかたなく私も関わることになってしまった。

（1）は、「たまたま通った」の意。（2）は「行きがかり上」で「これまでの経緯、状況から」の意。慣用句的なもので、他の動詞にはつかない。

【がかる】

［NがかったN］

（1）川井さんは青みがかった紫色のとてもきれいなワンピースを着ていた。

（2）その絵は背景が赤みがかった空色で、まるで夕暮れの空のようだ。

（3）山本は考えることが左がかっている（＝左翼的だ）。

（4）あいつの行動はどこか芝居がかっていて、こっけいだ。

（5）その人は、村では神がかった存在として尊敬されおそれられている。

名詞に付いて、そのものがもつ性質をいくらか持っているという意味を表す。用いられる名詞の数はごく限られている。（3）のように「Nがかっている」の形で用いられることもある。

【かぎり】

1 かぎり

a かぎりが　ある／ない

（1）資源には限りがある。無駄遣いしてはいけない。

（2）限りある資源を大切にしよう。

（3）宇宙の広がりには限りがないように思える。それが魅力だ。

（4）宇宙には限りない魅力がある。

（5）ワープロには数限りない機種があるため、どれを選んだらいいのか、選択に困る。

時間・空間やものごとの程度・数量などの限界や限度があるという意味を表す。（2）（4）は名詞を修飾するときの形で、慣用句。「限りのある／ない」とも言う。（5）「数限りない」も慣用句で名詞を修飾し、数えられるものの場合に用いて、その数がとても多いことを表す。「数限りなく」の形でも用いられる。

b かぎりなくNにちかい

（1）その着物は限りなく白に近い紫だった。

（2）その真珠のネックレスは限りなく本物に近い偽物で、見ただけでは偽物であることがわからない。

（3）キムさんの日本語の発音は限りなく日本人に近いが、注意して聞くとやはり韓国語の影響が残っている。

名詞が表すものとひじょうに近い、ほとんど同じ、という意味を表す。

2 …かぎり ＜限度＞

a Nかぎり

（1）彼女は今年限りで定年退職することになっている。

（2）その演劇の公演は、今週限りで打ち切られる。

（3）勝負は1回限りだ。たとえ負けても文句は言うな。

（4）あの人はその場限りの思いつきの意見しか言わない人だ。

（5）今の話はこの場限りで忘れてください。

時間・回数・空間を表す名詞に付いて、それが限度であることを表す。空間の場合は「この場／その場／あの場」の表現しか用いられない。（1）は「今年まで」、（4）は「その場だけの」の意味。

b …かぎり

［Nのかぎり］

［V-るかぎり］

（1）力の限り戦ったのだから負けても悔いはない。

（2）選手たちは優勝をかけて命の限り戦ったが、惜しくも敗れてしまった。

（3）あの大統領は、権力の絶頂にあった頃ぜいたくの限りを尽くしていたそうだ。

（4）難民たちは持てる限りの荷物を持って逃げてきた。

（5）できる限りの努力はした。あとは結果を待つだけだ。

（6）そこは見渡す限り（の）桜の花だった。

「最高限度・極限まで」、「すべて」の意味。名詞に付く（1）から（3）は「力の限り」「命の限り」「ぜいたくの限り」で慣用句。（6）は「見渡す限り」で「見渡せるすべての範囲」の意味の慣用句。動詞の場合は可能を表す「V-れる」に付くことが多い。

3 かぎり ＜範囲＞

a V-る／V-ている／V-た　かぎり

（1）私の知る限り、彼は絶対そんなことをするような人ではない。

（2）私が聞いている限りでは、全員時間どおりに到着するということだが。

（3）私の見た限りで「樹神（こたま）」という姓の人は、電話帳に2軒しか載っていなかった。

（4）この植物は、私が今まで調べた限りでは、まだ日本では発見されていないようだ。

「見る・聞く・調べる」などの認識を表す動詞に付く。「自分の知識・経験の範囲内で判断すれば」という意味。「かぎり

で」、「かぎりでは」と言うこともある。

b V-る／V-ている　かぎり

（1）この山小屋にいる限りは安全だろう。

（2）プロである限り、その大会への出場資格はない。

（3）あいつが意地を張っている限りは、絶対にこっちも頭を下げないつもりだ。

（4）A：英会話なんか、ちょっと本気でやりさえすればすぐに上達するさ。

B：おまえ、そんなこと言ってる限り、いつまでたってもうまくならないぞ。

「その状態が続いているあいだは」という意味で、条件の範囲を述べるのに用いる。後ろにはその条件で成り立つ状態を述べる表現が続く。もしその条件が変化したら、そこで成り立つ状態も変化する可能性があるということを含意する。

c V-ないかぎり

（1）練習しない限り、上達もありえない。

（2）あいつが謝ってこない限り、こっちも折れるつもりはない。

（3）絶対にやめようと自分で決心しない限り、いつまでたっても禁煙なんかできないだろう。

（4）今の法律が変わらない限り、結婚したら夫婦はどちらか一方の姓を名乗らなければならない。

「そのことがらが起こらないあいだは」という意味で、条件の範囲を述べるのに用いる。後ろにはその条件で成り立つ状態を述べる表現が続く。もしその条件が変化したら、そこで成り立つ状態も変化する可能性があるということを含意する。

【かぎりに】

→【をかぎりに】

【かぎる】

1 …にかぎる

[Nにかぎる]

[Naなのにかぎる]

[Aのにかぎる]

[V-るにかぎる]

（1）和菓子ならこの店にかぎる。

（2）疲れた時は温泉に行くにかぎるね。

（3）せっかくテレビを買いかえるのなら、画面がきれいなのにかぎる。

（4）ヨーロッパを旅行するなら電車にかぎるよ。安くて快適だしね。

（5）家族みんなで楽しみたかったら、ディズニーランドに行くに限る。

「…が一番だ」ということを主張するのに使う。「…なら/たら」を前に伴うことが多い。

2 Nにかぎったことではない

（1）あの人が遅刻するのは今日にかぎったことではない。

（2）レポートのできが悪いのはこの学生にかぎったことではない。

（3）日本の物価の高さはなにも食料品にかぎったことではない。

（4）エンジンの故障が多いのはこの車種に限ったことではないらしく、同じメーカーの他の車種でも同じようなトラブルが起こっているということだ。

「それだけに関する問題ではない」という意味。一般的にマイナス評価のことがらについて、それはこの場合だけではなく他にもよくあることだ、という意味を表す。

3 …とはかぎらない

→【とはかぎらない】

4 …ともかぎらない

→【ともかぎらない】

【かくして】

（1）かくして市民による革命が成し遂げられたのであった。

（2）かくして長かった一党独裁の時代が終わりを告げたのである。

ある程度の長さを持った文章の後で、それまでの結論・結果を述べる文の初めにくる。「このようにして」「こうして」の意味。「かくて」とも言う。歴史を説明する文章など、かたい書きことばに用いる。

【かくて】

→【かくして】

【かけ】

[R-かけ]

（1）やりかけの仕事が残っていたので、会社に戻った。

（2）彼女の部屋には編みかけのセーターが置いてあった。

（3）その本はまだ読みかけだったが、友達がどうしても貸してほしいと言うので貸したら、そのまま戻ってこなかった。

（4）私は友達にもらった壊れかけのテレビを、もう5年も使っている。

（5）食事を作ろうと思ったら、冷蔵庫の中には腐りかけの野菜しかなかった。

動詞の連用形に付いて、ある過程の途中であることを表す。（1）（2）（3）のように、意志をともなう動作を始めてまだ途中であることを表す場合と、（4）（5）のように、意志のないことがらが起こり始めてまだ途中であることを表す場合がある。

【かける】

1 R-かける　<働きかけ>

（1）電車の中で酔っぱらいに話しかけられるたびに、私は日本語

がわからないふりをすることにしている。

(2) みんなに呼びかけて、いらなくなった衣類や食器などを持ってきてもらおう。

(3) その子は、人と目が合うたびにやさしく笑いかけるような、そんな、人を疑うということを知らないような子だったと言う。

(4) リサイクル運動の市民グループを作りたいと思って、周りの友達に相談を持ちかけてみたが、みんな忙しいと言って話に乗ってこなかった。

動詞の連用形に付いて、相手に向かって動作や作用を行って影響を及ぼすことを表す。(4)の「人に相談を持ちかける」は慣用句的。ほかに「問いかける」「語りかける」「誘いかける」などがある。

2 R-かける <途中>

(1) 友達に大事な相談の手紙を書きかけたとき、玄関のベルが鳴った。

(2) 「じゃあ」と言って受話器を置きかけて、しまったと思った。彼に用件を言い忘れていたことに気づいたのだ。

(3) その猫は飢えでほとんど死にかけていたが、世話をしたら奇跡的に命を取り戻した。

(4) 忙しい日々の中で忘れかけていた星空の美しさを、この島は思い出させてくれた。

動詞の連用形に付いて、「途中まで…する」という意味を表す。(1)(2)のように、意志を伴う動作を始めてまだ途中であることを表す場合と、(3)(4)のように、意志を伴わないことがらが起こり始めてまだ途中であることを表す場合がある。

【がさいご】

[V-たがさいご]

(1) ここで会ったが最後、謝ってもらうまでは逃がしはしない。

(2) この計画を聞いたが最後、あなたもグループに加わってもらおう。

(3) 学校内でタバコを吸っているのを見つかったが最後、停学は免れないだろう。

(4) その茶碗は、一度手に取ったが最後、どうしても買わずにはいられなくなるほど手触りや重さ、色合いなどが私の好みに合っていた。

「ある出来事が起こったら、必ず」という意味を表し、後ろには話し手の意志や必然的に生じる状況を表す表現が続く。(1)は「せっかくここであなたに会ったのだから、今日こそはどうしても謝ってもらいたい」というおどしの働き、(2)は「あなたはこの計画を聞いたのだから、グループに加わらなければならない」という命令の働きをもつ。(3)(4)のように、一般的なこととして述べるのに使われる場合もある。

【がたい】

[R-がたい]

(1) 信じがたいことだが本当なのだ。

(2) あいつの言うことは何の根拠もないし常識はずれで、とうてい理解しがたい。

(3) 日本が戦時中にアジア諸国で名もない人たちを理由もなく殺したことは、動かしがたい事実である。

(4) 彼は部下の女性に対するセクシャル・ハラスメントで告発されたにもかかわらず、まるで反省の色が見えないばかりか、あの女は無能だなどと言いふらしており、まったく許しがたい。

動詞の連用形に付いて、その行為を行うことがむずかしい・不可能であるという意味を表す。「想像しがたい・認めがたい・(考えを)受け入れがたい・賛成しがたい」など、認識に関わる動詞が使われるほか、「言いがたい・表しがたい」など発言に関わる動詞も使われる。(3)の「動かしがたい事実」は慣用句的な表現で、「嘘だとすることのできない、まったくの事実」の意味。書きことば的。

【かたがた】

[Nかたがた]

(1) 友達が風邪をひいたというので、お見舞いかたがた家を訪ねることにした。

(2) 散歩かたがたパン屋さんに行ってこよう。

(3) ≪手紙文≫ 以上お礼かたがたお願いまで。

動作を表す名詞に付いて、その動作をかねて、そのあとに述べる動作を行うという意味を表す。「お見舞い」「散歩」など限られた名詞にしか使えない。

【かたわら】

1 …かたわら <そば>

[Nのかたわら]

[V-るかたわら]

(1) 母が編み物をするかたわらで、女の子は折り紙をして遊んでいた。

(2) 楽しそうにおしゃべりしている田中くんのかたわらで、田川さんはしょんぼりうつむいていた。

動作を表す名詞や動詞に付く。「…のそば」の意味で、情景描写に用いることが多い。物語などに用いられる書きことば的な表現。

2 …かたわら <副次的動作>

[Nのかたわら]

[V-るかたわら]

(1) その教授は、自分の専門の研

究をするかたわら、好きな作家の翻訳をすることを趣味としている。

（2）そのロック歌手は、演奏活動のかたわら、中高生向けの小説も書いているそうだ。

（3）その年老いた職人は、本職の家具作りのかたわら、孫のために簡単な木のおもちゃを作ってやるのが楽しみだった。

「主な活動・作業以外の空いた時間に、一方で」という意味。書きことば的な表現。

【がち】

1 Nがち

（1）その作家は、ここ数年病気がちでなかなかまとまった仕事ができないと言っている。

（2）このところ、はっきりしない曇りがちの天気が続いているので、洗濯ものが干せなくて困る。

（3）どうしてあんなことをしたんだと問いつめると、彼女は伏し目がちに、どうしてもお金がほしかったのだと答えた。

（4）「よかったらうちまで車で送ってもらえないでしょうか」と、彼女は遠慮がちにたずねた。

名詞に付いて、「その名詞が表す状態になりやすい、その性質がかなりある」という意味を表す。その状態がふつうの状態とは異なる場合、マイナス評価を受けるような場合に用い、語彙的には限られている。（3）（4）は慣用句。

2 R-がち

（1）寒い季節は家の中にこもりがちだが、たまには外にでて体を動かした方がいい。

（2）彼女に電話すると、どうしても長話になりがちで、いつも父親に文句を言われる。

（3）甘いものはついつい食べ過ぎてしまいがちなので、ダイエット中は気をつけましょう。

（4）惰性で仕事を続けていると、この仕事に飛び込んだ頃の若々しい情熱をつい忘れがちになる。

（5）「『役不足』とは『その役を務めるには能力が不足している』という意味だ」という解釈は、ありがちな間違いだ。

動詞に付いて、意図しなくてもついそうしてしまうという意味を表す。マイナス評価されるような動作について言う。「どうしても・つい・うっかり」などの語や「てしまう」などとともに用いられることが多い。（5）の「ありがちな」は「よくある」の意。

【かつ】

［N（であり）かつN］
［Na かつ Na］
［RかつV］

（1）これで、福祉会館建設に関する議案を提出するのに必要かつ十分な条件が整った。

（2）今回の大胆かつ巧妙な手口の犯行は犯人像を割り出す手がかりになるものと思われる。

（3）その知らせを聞いて一同皆驚きかつ喜び、中には涙を流す者さえいた。

（4）我々は久しぶりの再会に、陽気に騒ぎかつ大いに飲み、時間のたつのも忘れた。

（5）彼は私の親友であり、かつライバルでもある。

あることがらについて同時に二つの状態が成り立つときに、それら二つを並べあげるのに用いる。「そして」の意味。書きことば的。話しことばでは「必要で十分」、「騒いで飲む」など「...て」の形になることが多い。

【かつて】

（1）このあたりは、かつては有名な米の産地だった。

（2）彼女はかつて新聞社の特派員として日本に滞在したことがあるそうだ。

（3）今度この地方で地震が起こるとすれば、それはかつてないほどの規模のものになる恐れがある。

（4）久しぶりに会った彼は、相撲取りのように太っていて、かつての精悍なスポーツマンの面影はどこにもなかった。

（5）わが国が主食である米の生産を外国に頼るなどということは、未だかつてなかった。

「以前」、「昔」の意味。「かって」と言うときもある。（3）（5）の「かつてない」のように否定表現になると、「今までに一度もない」という意味。「かつてない」「未だかつて...ない」は慣用句。書きことば的。

【がてら】

［Nがてら］
［R-がてら］

（1）買い物がてら、その辺をぶらぶらしない?

（2）散歩がてら、パンを買いに行こう。

（3）引っ越してきてから2週間ほどの間、私は運動がてら近所の町を歩き回った。

（4）彼は映画評論家なので、仕事がてらよくアジアの映画を見ることがあるそうだ。

（5）京都においでの節は、お遊びがてらぜひ私どものところへもお立ち寄りください。

動作を表す名詞や動詞の連用形に付く。「XがてらY」の形で、「XをかねてYをする」という意味を表す。Yをすることで結果的にXもできることになるという状況で用いられることが多い。「…をかねて」「…かたがた」とも言う。

【かというと】

1 …かというと

[N／Na　(なの)かというと]
[A／V　(の)かというと]

(1) 彼女はその仕事が気に入っているそうだ。しかし自分の時間を犠牲にしてでも打ち込んでいるかというと、そこまでは行かないらしい。

(2) 私はこの国に失望させられた。しかし、まったく見捨ててしまったのかというと、そうでもない。

(3) 彼女はケーキ作りがとても上手なのだが、甘いものが好きなのかといえば、そうでもない。

(4) 彼は入社して3ヶ月で会社を辞めてしまった。仕事や給料が不満だったのかというとそういうわけではなくて、もともと大学院に行きたかったので就職する気はなかったのだということだった。

「Xかというとそうではない」「Xかというとそうとは限らない」など、後ろにXを否定する表現を伴って、それ以前の文から当然出てくるはずの結論Xを取り上げて、実はそうではないと否定するのに用いる。たとえば(1)では、「彼女はその仕事が気に入っている」から「自分の時間を犠牲にしてでも打ち込む」ことが予想されるが、実際にはそうではないという意味。「かといえば」も使う。

2 疑問詞＋かというと

(1) 私は彼がきらいだ。どうしてかというと、いつも人の悪口ばかり言っているからだ。

(2) 私は一度も海外に行ったことがない。どうしてかというと、飛行機に乗るのが恐いからだ。

(3) 祖父がいつごろこの家を建てたかというと、戦争が終わってすぐの頃、食べるものも満足に手に入らないような苦労の時代だ。

(4) 彼は入社して3ヶ月で一流企業を退職してしまった。やめて何をするかというと、インドへ行って仏教の修行をするらしい。

(5) 機械の苦手な私がどうやってパソコンに慣れたかというと、友達とパソコンでゲームをして遊んでいるうちに、だんだん恐くなくなってきたのだ。

(6) A：なんで引っ越すの。今のアパート、家賃も安いし広いのに。
B：なんでかっていうとね、大家さんがうるさくて、友達を呼ぶと文句を言われるし、おまけに壊れたところも直してくれないのよね。

疑問詞を含む疑問文を受けて疑問点を示すのに用いる。後ろにはその答を述べる表現が続く。(1)のように理由を述べる場合は、後に「からだ／ためだ／のだ」がくることが多い。「どうしてかというと／なぜかというと」は慣用句。何かについて自問自答のような形で説明する場合に用いる。「かといえば」も使う。

【かといえば】

→【かというと】

【かとおもうと】

[V-たかとおもうと]

(1) 急に空が暗くなったかと思うと、はげしい雨がふってきた。

(2) やっと帰ってきたかと思ったら、また出かけるの?

→【とおもう】9

【かとおもうほど】

(1) いつ寝ているのかと思うほどいそがしそうだ。

(2) 死ぬんじゃないかと思うほど苦しかった。

→【とおもう】1

【かとおもうまもなく】

→【とおもう】8

【かとおもえば】

[V-るかとおもえば]

(1) 葉がぜんぶ落ちた木があるかと思えば、まだたくさん残っている木もあった。

(2) 校庭のあちらではけんかをしている子供たちがいるかと思うと、こちらではじっと池の魚を観察している子もいる。

→【とおもう】2

【かとおもったら】

(1) 帰ってきたかと思ったら、また出かけていった。

(2) 何をやっているのかと思ったら、昼寝をしていたのか。

→【とおもう】4

【かな】

(1) 山田さんは今日来るかな。

(2) これ、おいしいのかな。

(3) これ、もらって帰ってもいいのかな。

(4) ちょっと手伝ってくれないかな。

(5) 今度の旅行はどこへ行こうかな。

(6) 最近なんでこんなに疲れやすいのかなあ。

疑問を表す「か」に「な」が付いたもので、文末に用い、自分自身に問いかける気持ちを表す。ひとりごとで不思議に思う気持ちや疑問の気持ちを表すが、聞き手に向けられたときは疑問の表明で、そこから遠回しに許可を求めたり依頼したりする気持ちを表すこともある。丁寧体にはつかない。くだけた話しことば。「・・・かなあ」とのばして発音することもある。

【がな】

(1) 山田さんはまだ来ないの? 遅れずに来るように言っておいたんだがな。

(2) 今度の試験も駄目だった。一生懸命勉強したつもりなんだがなあ。

(3) あした運動会だろう? 雨が降らないといいがなあ。

(4) 彼らももう少し本気で仕事に取り組んでくれるようになるといいんだがなあ。

(5) 田口君、今、暇? ちょっと手伝ってくれるとありがたいんだがな。

逆接を表す「が」に「な」が付いたもので、文末に用い、自分のしたことと実際に起こったことが食違って不思議に思う気持ちや、実際にはまだ起こっていないことを実現させたいと願う気持ちを表す。(5)のように依頼するのに用いることもある。丁寧体にはつかない。ひとりごとや親しい相手に向けて用いる男ことばで、話しことば。「・・・がなあ」とのばして発音することもある。「・・・けどな」と同じで、女性はこの方を用いる。

【かなにか】

→【なにか】3

【かならず】

(1) 休むときはかならず連絡してください。

(2) 宿題はかならずしなければならない。

(3) これからは、かならず朝ごはんを食べるようにしよう。

(4) ご招待ありがとうございます。かならずうかがいます。

(5) そうですか。かならず来てくださいよ。お待ちしていますから。かならずですよ。

「例外なく」「ぜったいに」の意味。強い意志((3)(4))・要望((1)(5))・義務((2))などを表すときに使う。(4)(5)のように「約束」のような機能をもつ場合は「きっと」で言いかえることができる。否定表現には使えない。

(誤) かならず行きません。

(正) ぜったい行きません。

【かならずしも…ない】

(1) 金持ちがかならずしもしあわせだとは限らない。

(2) 語学が得意だからといって、かならずしも就職に有利だとは限らない。

(3) 日本人は礼儀正しい人々だと言う人もいるようだが、実態は必ずしもそうではないとわたしは思っている。

(4) 政治家たちは国連は重要だと言う。しかし、必ずしも、常に尊重しなければならぬものだと思っているわけではない。

「Xなら、かならずYだ」という論理がいつもあてはまるわけではなく、そうではない場合もある、という意味。たとえば(2)は「語学が得意なら就職に有利だ」ということがつねにあてはまるわけではないといっている。「わけではない」「とはかぎらない」などとともに使うことが多い。書きことば的。

【かにみえる】

→【みえる】2f

【かねない】

[R-かねない]

(1) 風邪だからといってほうっておくと、大きい病気になりかねない。

(2) 君は、彼がそんなことをするはずがないと言っているそうだが、ぼくはあいつならやりかねないと思うけどね。

(3) 政府の今回の決定はいくつかの問題点をはらんでおり、近隣諸国の反発をまねきかねない。

(4) 今回の土砂崩れは二次災害を引き起こしかねないものであり、対策を急がねばならない。

その可能性・危険性がある、という意味。「かもしれない」「ないとは言えない」などと近いが、この「かねない」は、話し手がマイナスの評価をあたえるものにしか使えない。

(誤) 私のこどものこの病気はなおりかねない。

(正) 私のこどものこの病気はなおるかもしれない。

書きことば的。

【かねる】

[R-かねる]

(1) そのご意見には賛成しかねます。

(2) 残念ながら、そのご提案はお受けいたしかねます。

(3) その中学生の死は、同級生のいじめにたえかねての自殺と見られている。

(4) その人が、あまりにもこどもの心理を理解していないようなしかり方をするものだから、見かねて、つい口を出してしまったんだ。

動詞の連用形に付いて、そうすることが困難・不可能だ、という意味を表す。「やろうとしても／努力しても、不可能だ」という意味あいがある。「決めるに決めかねる」「見るに見かねて」などは慣用的。あらたまった書きことば的表現。

【かのごとき】

→【ごとし】

【かのよう】

→【ようだ1】1b

【がはやいか】

[V-るがはやいか]

(1) そのことばを聞くがはやいか、彼はその男になぐりかかった。

(2) その男はジョッキをつかむがはやいか一気に飲みほした。

(3) こどもは、学校から帰って来ると、玄関にカバンをおくが早いか、また飛び出していった。

(4) その鳥は、ウサギをするどいツメでとらえるが早いか、あっと言う間に空にまい上がった。

「XがはやいかY」の形で、Xが起こるのとほとんど同時にYが起こる、という意味。「…やいなや」「…とたんに」書きことば。

【かもしれない】

[N／Na／A／V　かもしれない]

話しことばでは、「かもわからない」の形で使われることもある。また、くだけた会話では「かもね」「かもよ」などの形でも使われる。「かもしれぬ」「かもしれず」は書きことばとして使われるかたい表現。

1 …かもしれない

(1) A：あの偉そうにしている人、ひょっとしてここの社長かもしれないね。
B：そうかもね。

(2) ここよりもあっちの方が静かかもしれない。行ってみようか。

(3) 雨が降るかもしれないから、かさを持っていったほうがいいよ。

(4) A：来週のパーティー、行くの?
B：まだ決めてないんだ。行くかもしれないし、行かないかもしれない。

(5) ノックをしても返事がない。彼はもう寝てしまったのかもしれない。

(6) 交渉相手が依然として強気の姿勢をくずさないということは、もしかすると何か強力な材料をもっているのかもしれない。

(7) 見合い話が壊れて、さぞがっかりしているだろうと心配していたが、それほど気にしている

様子もない。当の本人は案外平気なのかもしれない。

(8) ちょっと待って。今山田君が言ったそのアイデア、ちょっとおもしろいかもしれないよ。

話し手の発話時における推量を表す。「その可能性がある」という意味。「にちがいない」や「だろう」に比べて、「かもしれない」の表す可能性の度合いは低く、そうではない可能性もあるという気持ちを表す。「のかもしれない」は、「のだ」に「かもしれない」が付いたもの。

(8)のように、話し手が断定を避けて、表現をやわらげるために使われたり、「御存知かもしれませんが」「私が間違っているかもしれませんが」などのように、話し手の主張を述べる前に前置きとして使われることもある。

話しことばでは、「かもしれない」の形で使われるが、視点を自由に移動できる小説の地の文などでは、次のように「かもしれなかった」の形が使われることがある。

(例) このままでは、達彦自身の会社も危なくなるかもしれなかった。

2 たしかに…かもしれない
なるほど…かもしれない

(1) A：この計画は危険すぎますよ。
B：確かに、危険かもしれない。しかし、やってみるだけの価値はあると思う。

(2) A：今の時代、小さいころから受験勉強を始めなければ、いい大学には入れないんですよ。
B：なるほど君の言うとおりかもしれない。でも、いい大学に入れなくったって、いいじゃないか。

(3) 女性は強くなったといわれている。確かに、昔に比べれば女性も自由になったかもしれない。しかし、就職ひとつを例にとっても、真の男女平等と言うにはほど遠いのが日本の現状だ。

相手の言った内容や一般的な見解を、正しい可能性があると一応は認めた上で、それとは異なる意見を述べる場合に使う。

3 …ば／…たら　…かもしれない

a …ば／…たら　V-るかもしれない

(1) ここで代打がホームランでも打てば、形勢は逆転するかもしれない。

(2) もう少しがんばれば、志望校に合格できるかもしれない。

ある条件が成立することを想定して、そのときに起こる可能性についての話し手の推量を表す。

b …ば／…たら　V-たかもしれない

(1) あの時彼女を引き留めていたら、僕たちは別れずに済んだかもしれない。

(2) もう少し早く手術をしていれ

ば、あるいは助かったかもしれない。

（3）もし、あの時、救急車の到着があと5分遅かったら、私は今こうして生きていなかったかもしれない。

すでに起きてしまったことがらについて、「条件が違えば、違う結果になった可能性がある」という意味を表す。話し手の後悔や、悪い結果をまぬがれたことに安堵する気持ちを表すような場合に使われる。

【かもわからない】

1 …かもわからない

[N／Na／A／V　かもわからない]

（1）私は明日来られないかもわからない。

（2）きょうは山田さんも来るかもわからないから、日本酒も用意しておこう。

「かもしれない」とおなじ意味だが、それほど使われない。

2 …か(も)わからない

[N／Na　か(も)わからない]

[A／V　か(も)わからない]

（1）先生の言っていることがわかりません。何について話しているかもわかりません。

（2）社長が今どこにいるのかもわからなくて、秘書がつとまると思っているのか。

（3）はたしてその計画をスタートさせることができるかどうかも分からないのに、成功した後のことをあれこれ言うのは早すぎる。

疑問表現を受け、他のことだけでなく「…か」ということも分からないという意味を表す。多くは普通なら当然分かっているはずのことさえ分からないという状況で用いられる。

→【かもしれない】

【がゆえ】

→【ゆえ】3

【がよかろう】

→【よかろう】

【から$_1$】

1 Nから

a Nから

（1）この町には、国じゅうからたくさんの人があつまってくる。

（2）あのクラスでは、試験の成績と出席率から成績が決められるそうだよ。

（3）窓からひざしがさしこんでいて、その部屋はとてもあたたかかった。

（4）父からはこっぴどくしかられるし、母からはいやみを言われるし、さんざんな失敗だった。

（5）成績不振から解雇されたそのチームの監督はいまテレビの解説者をしている。

（6）日本は衆議院・参議院からなる二院制を取っている。

さまざまな動作・現象の起点・始まり・由来などを表す。

b NからNまで

（1）ここから目的地までは10キロほどあります。

（2）10日から15日まで休みます。

（3）子どもから大人まで楽しめる番組です。

起点と終点を明示して、距離や時間などの範囲を表す。

c NからNにいたるまで

（1）あの会社はヒラ社員から社長にいたるまで全員が制服を着ている。

（2）この番組は、北海道から九州、沖縄に至るまで、全国ネットでお送りしています。

（3）当社は、設計・施工からアフターサービスに至るまで、みなさまの大切な住宅をお世話させていただきます。

（4）一日の過ごし方から政治思想に至るまで、私があの思想家の影響を受けなかったものはない。

起点と終点を示し、その範囲が大きい様子を表す。書きことば的。

2 Nからいうと　→【からいう】

3 Nからが　→【にしてからが】

4 Nからして　→【からして】

5 Nからすると　→【からする】

6 Nからみると　→【からみる】

7 …こと／…ところ　から

[Nである　こと／ところ　から]

[Naである　こと／ところ　から]

[Naな　こと／ところ　から]

[A／V　こと／ところ　から]

（1）この魚は、ヘビそっくりなところから、ウミヘビという名前をもつ。

（2）カボチャは、カンボジアからやってきたと言われているところからその名がついたそうだ。

（3）車のバンパーから被害者の衣服の繊維が検出されたことから、その車の所有者にひき逃げの容疑がかかっている。

（4）その人物が殺害されたことを記録した文書が全く存在しないところから、実はその人物は生き延びて大陸に渡ったのだという伝説が生まれたらしい。

（5）彼女は父親が中国人であるところから、中国人の知り合いも多い。

根拠や由来を表す。（1）（2）のように名前の由来を述べるときは「ところ」のほうが比較的よく使われる。かたい、書きことば的表現。

8 Nにしてからが →【にしてからが】

9 数量詞＋から

a 数量詞＋からのN

（1）その説明会には1000人からの人々がつめかけたと言う。

（2）あの人は3000万からの借金をかかえているそうだ。

「ある数量より以上」という意味で、数量が多いという含みがある。ややかたい表現。

b 数量詞＋ からある／からする

（1）その遺跡からは、20キロからある金塊が出土した。

（2）自動車産業は好調で300万からする車が飛ぶように売れている。

（3）その種の陶器は今では貴重で、小皿1枚が10万からしている。

「だいたいそれくらいか、それ以上」という意味を表す。重さ、長さ、大きさには「からある」、値段には「からする」が用いられるのが普通。

10 V-てから →【てから】

【から2】

[N／Na だから]

[A／V から]

1 …から

（1）今日は土曜日だから、銀行は休みですよ。

（2）それは私が持ちますから、あれを持って行っていただけますか。

（3）星が出ているから、あしたもきっといい天気だろう。

（4）この辞書じゃよくわからないから先生に聞こう。

普通体にも丁寧体にも付く。話し手が主体的な立場でおこなう依頼・命令・推量・意志・主張などの理由を述べる時に使う。そのため「ので」と比べて主観性が強い。

2 …から ＜文末用法＞

（1）いつか、しかえししてやるからな。

（2）おとなしく待ってろよ。おみやげ買ってきてやるからな。

（3）A：たまご、買って来るの忘れちゃった。
　　B：いいから、いいから。それより、はやく手をあらいなさい。

文末に用いて、警告や慰めなどの気持ちを表す。相手に対する様々な働きかけを、言葉で表さないで含みとして表す用法。「いつかしかえししてやるから、覚えてろ」「いいから、早く手を洗いなさい」などの下線部が省略されたり倒置されたりしたもの。話しことばで用いられる。

3 …からいい →【からいい】

4 …からこそ →【からこそ】

5 …からだ

a …のは…からだ

（1）試験に落ちたのは勉強しなかったからだ。

（2）今日こんなに波が高いのは台風が近づいているからだ。

（3）君はまだ気がついていないのか。彼女が君につめたいのは、君がいつもからかうようなことを言うからだよ。

理由を表す「XからY」を転倒させて「YのはXからだ」の形になったもの。この文型の「から」は「ので」に言いかえられない。

（誤）試験に落ちたのは勉強しなかったのでだ。

b …からだ

（1）試験に落ちたんだってね。勉強しなかったからだよ。

（2）A：今日は二日酔いだ。
　　B：きのうあんなに飲んだからだよ。

「YのはXからだ」の「Yのは」の部分が文脈であきらかなため省略された場合の言い方。

6 …からって →【からって】

7 …からといって →【からといって】

8 …からには →【から(に)は】

【からある】

→【から1】9b

【からいい】

[N／Na だからいい]

[A／V からいい]

1 …からいいが

（1）まだ時間はあるからいいが、今度からはもうちょっと早く来るようにしなさい。

（2）ネギ、買ってくるの忘れたの? まあ、少し残っているからいいけど。

（3）え? 今日も休むの? まあ、あまり忙しくない時期だからいいけど。

「…からいいが」「…からいいけど」などの形で、「…からそれほど問題にはならないが」という意味を表す。話しことば的。

2 …からいいようなものの

（1）大きな事故にならなかったからいいようなものの、これからはもっと慎重に運転しなさい。

（2）だれも文句を言ってこないからいいようなものの、一つ間違えば大事故になっていたところだ。

（3）保険をかけてあるからいいようなものの、そうでなければ大変なことになっていたよ。

（4）ちょうどタクシーが通りかかったからいいようなものの、あやうく遅刻するところだった。

（5）大事に至らなかったからいいようなものの、今回の事故によって、政府の原子力政策は見直しをせまられそうだ。

「…からそれほど大きな問題にならなく

てすんだが」という意味を表す。結果として最悪の事態は避けられたがいずれにせよあまり好ましいことではないという気持ちが含まれる。「からいいが／けど」と似た意味を表すが、それよりも非難やしっ責の気持ちが強い。

【からいう】

1 Nからいうと

(1) 私の立場から言うと、それはこまります。

(2) 先生の見方から言うと、私のやりかたはまちがっているのかもしれませんが、私はこれがいいんです。

(3) あなたの考え方から言うと、私の主張していることなんかは急進的すぎるということになるんでしょうね。

(4) 民主主義の原則から言えば、あのやり方は手続きの点で問題がある。

「Nからいうと／からいえば／からいったら」の形で、「ある立場に立って判断すると」という意味を表す。「からみると」と同様の意味を表すが、「からみると」とは違って、人を表す名詞に直接付くことはできない。

(誤) 彼から言うと、それはまちがっているそうだ。

(正) 彼の考え方から言うと、それはまちがっているそうだ。

(正) 彼から見ると、それはまちがっているそうだ。

2 Nからいって

(1) さっきの返事のしかたから言って、私はあの人にきらわれているようだ。

(2) あの態度から言って、彼女は引き下がる気はまったくないようだ。

(3) あの口ぶりから言って、彼はもうその話を知っているようだな。

(4) あの人の性格から言って、そんなことで納得するはずがないよ。

判断の手がかりを表す。「からして」「からみて」などとも言う。

【からいったら】

→【からいう】1

【からこそ】

[N／Na　だからこそ]
[A／V　からこそ]

(1) これは運じゃない。努力したからこそ成功したんだ。

(2) A：君はぼくを正当に評価していない。
B：評価しているからこそ、もっとまじめにやれと言っているんだ。

(3) 愛が終わったから別れるのではなく、愛するからこそ別れるという場合もあるのだ。

(4) 忙しくて自分の時間がないという人がいるが、私は忙しいからこそ時間を有効に使って自分のための時間を作っているのだ。

理由や原因を取り立てて特に強調する言い方。「のだ」と共に使うことが多い。理由に「こそ」が付くのは「ほかでもないそのことが」という特に強い気持ちがあるときで、因果関係を客観的に示す場合などには使えない。文末が「…のだ」で結ばれることが多い。

(誤) 今、東京は朝の9時だからこそ、ロンドンは夜中の12時だ。

(正) 今、東京は朝の9時だから、ロンドンは夜中の12時だ。

【からしたら】

→【からする】1

【からして】

1 Nからして　＜例示＞

(1) リーダーからしてやる気がないのだから、ほかの人たちがやるはずがない。

(2) 課長からして事態を把握していないのだからヒラの社員によくわからないのも無理はない。

(3) ほら、その君の言い方からして、外国人に対する偏見が感じられるよ。

(4) 君はいろいろ言うが、まずこの問題には自分はまったく責任がないと信じ込んでいることからして私には理解しかねる。

極端な例や典型的な例を示して、「それでさえそうなのだから、ましてほかのものは言うまでもない」という気持ちを表すのに用いる。マイナス評価が多い。「にしてからが」とも言う。

2 Nからして　＜根拠＞

(1) あの言い方からして、私はあの人にきらわれているようだ。

(2) あの態度からして、彼女は引き下がる気はまったくないようだ。

(3) あの口ぶりからして、彼はもうその話を知っているようだな。

(4) あの人の性格からして、そんなことで納得するはずがないよ。

判断の手がかりを表す。「からすると」「からみて」「からいって」などとも言う。

【からする】

1 Nからすると

(1) あの言い方からすると、私はあの人にきらわれているようだ。

(2) あの態度からすると、彼女は引き下がる気はまったくないようだ。

(3) あの口ぶりからすると、彼はもうその話を知っているようだな。

（４）あの人の性格からすると、そんなことで納得するはずがないよ。

「Nからすると／すれば／したら」の形で、判断の手がかりを表す。「からして」「からみて」「からいって」などとも言う。

2 数量詞＋からする

→【から１】9b

【からって】

[N／Na　だからって]
[A／V　からって]

（１）頭が痛いからって先に帰っちゃった。

（２）金持ちだからって何でも自由にできるというわけではない。

「からといって」のくだけた言い方。

→【からといって】

【からでないと】

→【てから】2

【からでなければ】

→【てから】2

【からといって】

[N／Na　だからといって]
[A／V　からといって]

1 …からといって

（１）用事があるからと言って、彼女は途中で帰った。

（２）電車の中でおなかがすくといけないからと言って、見送りに来た母は売店であれこれ買っている。

他の人が述べた理由を引用するのに用いる。

2 …からといって＋否定的表現

（１）手紙がしばらく来ないからといって、病気だとはかぎらないよ。

（２）いくらおふくろだからといって、ぼくの日記を読むなんてゆるせない。

「ただそれだけの理由で」という意味を表す。後ろには否定的表現をともなって「XだからY」ということは必ずしも成立しない、という意味となる。

【からには】

[Vから(に)は]

（１）約束したからにはまもるべきだ。

（２）戦うからには、ぜったい勝つぞ。

（３）この人を信じようと一度決めたからには、もう迷わないで最後まで味方になろう。

（４）こうなったからは、覚悟を決めて腰をすえて取り組むしかないだろう。

「ある状況になった以上は」という意味を表す。うしろには「最後までつらぬく」という意味の表現が続く。依頼・命令・意志・当為などを表す文に用いられる。

【からみたら】

→【からみる】1

【からみる】

1 Nからみると

（１）イスラム教から見ると、それはおかしな考え方だ。

（２）先生から見ると、私のやりかたはまちがっているのかもしれませんが、私はこれがいいんです。

（３）私の立場から見ると、その見とおしは楽観的すぎると言わざるをえません。

（４）あなたのような人から見ると、私の主張していることなんかは急進的すぎるということになるんでしょうね。

（５）子供たちから見ると、おとなはいったい何をやっているんだ、ということになるんだろうね。

「Nからみると／みれば／みたら」の形で、「ある立場に立って判断すると」という意味を表す。「からいうと」と同様の意味を表すが、「からいうと」とは違って、人を表す名詞に直接付くことができる。

2 Nからみて

（１）あの言い方からみて、私はあの人にきらわれているようだ。

（２）あの態度から見て、彼女は引き下がる気はまったくないようだ。

（３）あの口ぶりから見て、彼はもうその話を知っているようだな。

（４）あの人の性格から見て、そんなことで納得するはずがない。

判断の手がかりを表す。

【がり】

→【がる】

【かりそめにも】

（１）かりそめにもそのような恐ろしいことを口にしてはならない。

（２）かりそめにも一城の主たる方が、こんなところにお泊まりになるはずがない。

「かりにも」の古めかしい言い方。

→【かりにも】

【かりに】

1 かりに　…たら／…ば

（１）かりに３億円の宝くじに当たったら、何をしますか。

（２）仮に関東大震災と同程度の地震が今の東京に起こったら、東京はどうなってしまうだろうか。

（３）仮に予定の時間までに私がもどってこない場合は、先に出発してください。

「たら」「ば」や「場合は」のような、条件や状況を表す節を伴い、「そのような

ことが起こったと仮定して、その時は」という意味を表す。「もし(も)」と似ているが、現実がどうであるかはさておき、かりに設定するという意識は「かりに」のほうが強い。「かりに」と「もし」の相違についての詳しい説明は、【もし1】を参照。

2 かりに　…とすれば／…としたら

(1) かりに100人来るとしたら、この部屋には入りきらない。

(2) 仮にあなたの話が本当だとすれば、彼は嘘をついていることになる。

(3) 仮に私の推測が正しいとすれば、あの二人はもうすぐ婚約するはずだ。

(4) 仮に時給千円とすれば、一日5時間働けば5千円もらえることになる。

「とすれば／としたら」「とする」「と呼ぶ」などを伴い、「…を…であると仮定して、その時は」「仮定の上で…と考えれば」という意味を表す。あくまでも仮定の上でことがらや状況を設定し、その場合に成立することがらを述べる場合に用いる。

　次のように、「ば」「たら」を用いない言い方もある。

(例1) いまかりにXの値を100としよう。

(例2) かりにこの人をA子さんと呼んでおく。

　(例1) は数学でよく用いる。

3 かりに　…ても／…としても

(1) かりに参加希望者が定員に満たないような場合でも旅行は決行します。

(2) かりに予定の日までに私が帰って来ないようなことがあっても、心配しないで待っていてくれ。

(3) 仮にその話がうそだとしても、おもしろいじゃないか。

(4) 仮に手術で命が助かったとしても、一生寝たきりの生活となるだろう。

「ても／としても」のような逆接的な条件節を伴い、「もしそのようなことが起こっても／それが事実だとしても」という意味を表す。

【かりにも】

「たとえ仮であるにせよ」という意味の副詞。ややかたい書きことば的な表現。「かりそめにも」「かりにもせよ」とも言う。

1 かりにも＋　禁止／否定の表現

(1) かりにもこのことは人に言うな。

(2) かりにも人のものを盗んだりしてはいけない。

(3) 仮にもそのようなことは口にすべきではない。

(4) 仮にも死ぬなんてことは考えないでほしい。

(5) 仮にもあんな男と結婚したいとは思わない。

禁止や否定の表現を伴い、「仮定のうえ

の行為だとしても、そのようなことはするな／すべきではない／してはいけない／しない」という意味を表す。

2 かりにも　…なら／…いじょうは

(1) かりにも大学生なら、このくらいの漢字は読めるだろう。

(2) かりにもチャンピオンである以上は、この試合で負けるわけにはいかない。

(3) 仮にも教師であるからには生徒に尊敬される人間でありたい。

(4) 仮にも学長という立場にある以上は、大学の経営についても関心を払うべきだ。

(5) 仮にも医者ともあろうものが患者を犠牲にして金もうけを行うとは信じがたいことだ。

職業や社会的な地位・立場を表す名詞や節を受けて、「そのような立場にあるものなら」「そのような地位を名乗るものなら」という意味を表す。「Xなら／いじょうは／からには／ともあろうものがY」のような文型で用いられ、Yは、Xが成り立つ状況で当然成り立つ判断や、その立場の人間が行うべきことがらを表す。(5)の「Xともあろうものが」は、「Xが行うべきでない行為を行っている場合に、それを行うべきでない」ということを言う場合の表現。

【がる】

[Naがる]

[A-がる]

[V-たがる]

(1) 注射をいやがるこどもは多い。

(2) その子は自分と同じくらいの大きさの犬をかわいがっている。

(3) 妻の死をいつまでもかなしがってばかりはいられない。わたしには残されたこどもたちをそだてていく義務がある。

(4) こわがらなくてもいいのよ。この人はおかあさんのともだちなの。

(5) そのラーメン屋は朝8時から夜の2時までやっているうえに安くてうまいので、近所の学生たちに重宝がられていた。

(6) こどもがおもちゃをほしがって地べたにすわりこんで泣いていた。

(7) 人の話を最後まで聞かずに口をはさみたがる人がときどきいる。

形容詞や欲求を表す「V-たい」の語幹に付いて、そのように思う、感じる、ふるまう、などの意味を表す。そのようすを客観的に叙述する動詞になっているので、小説の地の文や(3)のように自分を客観視している場合をのぞけば一人称では使わないのがふつう。「本が読みたい」「車がほしい」などの「が」は「本を読みたがる」「車をほしがる」のように「を」に変わる。例のほかによく使われる

のは「はずかしがる」「さびしがる」「なつかしがる」「けむたがる」「つよがる」「いたがる」「とくいがる」など。

「…たがり」や「あつがり」「さむがり」「さびしがり」「はずかしがり」「こわがり」など「がり」の形になると名詞になって、そのように思う・感じる・ふるまう人、という意味になる。

【かれ】

[A-かれ A-かれ]

（1）遅かれ早かれ、山田さんも来るでしょう。

（2）人は多かれ少なかれ、悩みをもっているものだ。

「どちらの場合であっても」の意味。対立的意味のイ形容詞が用いられる。（1）は「時間の早い遅いはあっても、いずれ」、（2）は「量・程度の多い少ないはあっても、いずれにしても」という意味。慣用句的に使われ、他には「よかれあしかれ」がある。

【かろう】

[N／Na　ではなかろう]

[A-かろう]

[A-く(は)なかろう]

（1）その話は真実ではなかろう。

（2）親をなくしてはさぞや辛かろう。

（3）少しは苦しむのもよかろう。

（4）手術はさほどむずかしくはなかろうと存じます。

イ形容詞や「だ」の否定形の「ではない」の語尾の「い」が落ちたものに続き、「だろう」とほぼ同義の推量の意味を表す。「V-よう」の推量用法はこれに対応する動詞の形。文語的な古めかしい言い方で、書きことばや改まった話しことばで使われる。普通の話しことばでは「だろう」を使う。

【かろうじて】

書きことば的なかたい表現。日常の話しことばでは「どうにか」「なんとか」がよく使われる。他に似た表現として「やっと」「ようやく」がある。

1 かろうじて V-た

（1）試験の開始時間に、かろうじて間に合った。

（2）試験のできは良くなかったが、かろうじて合格できた。

（3）雨でタイヤがスリップした。危ないところだったが、かろうじて事故はまぬがれた。

（4）国連の介入で、かろうじて武力衝突は避けられた。

（5）ひどい怪我だったが、かろうじて死なずにすんだ。

「やっとのことで…した」「ようやく…した」という意味。ぎりぎりでよい結果を得た場合や、最悪の状態を避けることができた場合に使う。「かろうじて…をまぬがれた」「かろうじて…せずにすんだ」「かろうじて…は避けられた」などの形でよく使われる。

「やっと」には、結果にいたるまでに「長い時間がかかって」「たいへんな苦労をして」という含みがあるが、「かろうじて」には、途中の経過はかならずしも必要ではなく、結果に重点をおいた表現である。「やっと」よりもかたい書きことば的な言い方。

2 かろうじて V-ている

（1）毎日の生活は苦しいが、かろうじて借金はせずに済んでいる。

（2）病人は機械の力を借りて、かろうじて生きている。

（3）現代人は、毎日のストレスに耐えて、かろうじてバランスを保っているに過ぎない。

（4）彼女も、かろうじて涙をこらえているようだった。

「やっとのことで…している」「ようやく…している」という意味。（1）～（3）のように、「状態は良くないが、最悪の状態にはならずに、ぎりぎりで現在の状態を保っている」という場合や、（4）のように、たいへんな努力や苦労をして、現在の状態を保っている場合に使う。（4）は、「今にも泣きだしてしまいそうだが、努力して我慢している」という意味。

3 かろうじて V-るN

（1）この道は、車二台がかろうじてすれ違える広さしかない。

（2）列車の寝台というのは、人ひとりが、かろうじて横になれる大きさだ。

（3）その家は、僕にもかろうじて買えそうな値段だ。

（4）私の英語は、かろうじて日常会話ができる程度だ。

（1）～（4）のように、可能を表す表現とともに使われて、「やっと／なんとか／どうにか…できる程度のN」という意味を表す。「難しいけれども、ぎりぎりなんとかできる。しかし、それ以上の余裕はない」という場合に使う。

【かわきりに】

→【をかわきりに】

【かわりに】

[Nのかわりに]

[Vかわりに]

（1）わたしのかわりに山田さんが会議にでる予定です。

（2）ママは熱があるので、きょうはパパがかわりにむかえに行ってあげる。

（3）じゃあ、きょうはぼくが作るかわりに、あしたかぜがなおってたらきみが料理するんだぞ。

（4）今度転勤して来たこのまちはしずかでおちついているかわりに交通の便がややわるい。

（5）彼女のような生き方をしていたんでは、大きな失敗もしない代わりに、胸おどるような経験もないだろうね。

（1）（2）（3）のように、ほかのものや人の代理として、という意味の場合と、

(4)(5)のように、あることについて、このましいことの反面そうでないこともある、あるいはその反対に、このましくないこともある反面このましいこともある、という意味の場合とがある。

【きく】

→【ときく】

【きっかけ】

[Nをきっかけに(して)]

(1) 彼女は卒業をきっかけに髪をきった。

(2) 彼は、就職をきっかけにして、生活をかえた。

(3) 日本は朝鮮戦争をきっかけにして高度成長の時代にはいったと言われる。

(4) こんなところで同じ高校の出身の方と出会うとは思いませんでした。これをきっかけに今後ともよろしくお願いいたします。

「あるものごとを機会・手がかり・契機として」という意味。

【きっと】

(1) 鈴木さんもきっと来るでしょう。

(2) 雲が出てきた。今夜はきっと雨だろう。

(3) 彼女はきっとあのことを知っているにちがいない。

(4) ご招待ありがとうございます。きっとうかがいます。

(5) そうですか。きっと来てくださいよ。お待ちしていますから。きっとですよ。

「たしかに」「かならず」の意味。(1)～(3)のように話し手の推測を表す場合(「たぶん」より強い)や、(4)のように話し手の強い意志を表す場合や、(5)のように相手に対する強い要望を表す場合などに使われる。(4)(5)のように「約束」のような機能をもつ場合は、「かならず」で言いかえることができる。また、その場合、否定表現は使えない。

(誤) きっと行きません。

(誤) きっと来ないでください。

【ぎみ】

[Nぎみ]

[R-ぎみ]

(1) ちょっとかぜぎみで、せきが出る。

(2) 彼女はすこし緊張ぎみだった。

(3) ここのところ、すこしつかれぎみで、仕事がはかどらない。

(4) 現在の内閣の支持率は発足時よりやや下がり気味である。

そういう様子である、そういう傾向にある、という意味を表す。よくないことがらの場合が多い。

【きらいがある】

[Nのきらいがある]

[V-るきらいがある]

(1) 彼はいい男だが、なんでもおおげさに言うきらいがある。

(2) 最近の学生は自分で調べず、すぐ教師に頼るきらいがある。

(3) あの先生の講義はおもしろいのだが、いつの間にか自慢話に変わってしまうきらいがある。

(4) あの政治家は有能だが、やや独断専行のきらいがある。

そういう傾向を持つ、そうなりやすい、という意味を表す。よくないことがらの場合に用いる。書きことば的。

【きり】

話しことばでは「っきり」となることが多い。

1 Nきり

(1) ふたりきりで話しあった。

(2) のこったのは私ひとりきりだった。

(3) 見て。残ったお金はこれ(っ)きりよ。

名詞に付いて、「それだけ」と範囲を限定するのに用いる。「これ」「それ」「あれ」に付くときは「これっきり」「それっきり」「あれっきり」となることが多い。

2 R-きり

(1) 彼女は3人の子供の世話にかかりきり(で)、自分の時間もろくにない。

(2) 熱を出した子供をつき(っ)きりで看病した。

動詞の連用形に付いて、ほかのことをしないでずっとそれだけをする、という意味を表す。

3 V-たきり…ない

(1) 彼は卒業して日本を出ていったきり、もう5年も帰ってこない。

(2) あの方とは一度お会いしたきり(で)、その後、会っていません。

多く「たきり、…ない」の形で使われる。それを最後として、次に予想される事態が起こらないことを意味する。「これっきり」「それっきり」「あれっきり」ということもある。

(例) あの方とは一度お会いしましたが、それ(っ)きり会っていません。

【きる】

動詞の連用形に付いて動詞の表す動作に様々な意味を添える。

1 R-きる ＜完了＞

(1) お金を使いきってしまった。

(2) 山道を登りきったところに小屋があった。

(3) 長編の冒険小説を1週間かけて読み切った。

「最後まで…する」「…し終える」という意味を表す。

2 R-きる ＜十分＞

(1) 無理な仕事をして疲れきってしまった。

(2) そんな分かりきったことをいつまで言っているんだ。

(3) この絵はその情景を十分に描き切っているとは言えない。

(4) 彼女は絶対に自分が正しいと言い切った。

「十分に…する」「強く…する」という意味を表す。

3 R-きる ＜切断＞

(1) 大きな布を二つに断ち切った。

(2) 別れてからも彼女のことを思い切ることができない。

(3) 故郷にとどまりたいという思いを断ち切って出発した。

切断するという意味を表す。そこから、捨てる、あきらめるという意味にもなる。

4 R-きれない

(1) それはいくら悔やんでも悔やみきれないことだった。

(2) その人との別れは、あきらめきれないつらい思い出として、今でも私の胸の奥底にある。

「完全に…できない」「十分に…できない」という意味を表す。

【きわまりない】

[Na(なこと)きわまりない]

[A-いこときわまりない]

(1) その探検旅行は危険きわまりないものと言えた。

(2) その相手の電話の切り方は不愉快きわまりないものだった。

(3) そのような行動は、この社会では無作法(なこと)きわまりないものとされている。

(4) 丁重きわまりないごあいさつをいただき、まことに恐縮です。

(5) そのけしきは美しいこときわまりないものだった。

それ以上はないようなところまで達している、という意味。また「無作法／丁重／不愉快きわまる」という形もあり、おなじ意味だが、ナ形容詞の語幹にしか付かない。あらたまった、書きことば的表現。「…ことこのうえない」とも言う。

【きわまる】

→【きわまりない】

【きわみ】

[Nのきわみ]

(1) このような盛大なる激励会を開いていただき、感激のきわみです。

(2) 彼が自殺してちょうど一か月たつ。あの日何か話しをしたそうな様子だったのに忙しくてそのままにしてしまった。いま思うと痛恨の極みだ。

(3) 不慮の事故でわが子を失った母親は悲嘆の極みにあった。

(4) 資産家の一人息子として、贅沢の極みを尽くしていた。

「感激」「痛恨」など限られた名詞に付いて、これ以上ないほどの極限的な状態であることを表す。

【きんじえない】

→【をきんじえない】

【くさい】

1 Nくさい ＜臭い＞

(1) あれ? ガスくさいよ!

(2) この部屋はなんだかカビくさい。

(3) 昨日火事があったところは、焦げくさい臭いが充満していた。

そのような臭いがするという意味を表す。よくない臭いの場合に用いる。

2 Nくさい ＜様子＞

(1) インチキくさい商品だなあ。

(2) 子供たちに信頼される教師になりたいのなら、そのインテリくさいしゃべり方を止めろ。

(3) 彼女はバタ臭い顔立ちをしている。

いかにもそのような様子であるという意味を表す。あまりよいと思われていないものに使われることが多い。

3 Na／A くさい ＜強め＞

(1) あんた、いつまでそんな古くさいこと言っているつもり?

(2) そんな面倒くさいことは、だれか別の人に頼んでくれ。

(3) 彼はけちくさいことばかり言うので、嫌われている。

よくない意味を表す形容詞に付いて、その意味を強めるのに用いる。

【くせ】

[Nのくせに]

[Naなくせに]

[A／V くせに]

1 …くせに

(1) 彼は、自分ではできないくせに、いつも人のやり方にもんくを言う。

(2) もんく言うんじゃないの。自分はできないくせに。

(3) あの選手は、体が大きいくせに、まったく力がない。

(4) こどものくせにおとなびたものの言い方をする子だな。

(5) 好きなくせに、嫌いだと言いはっている。

「XくせにY」の形で、Xの内容から当然予想されることとはちがうYという事態がつづくことを表す場合に使われる。Yにはマイナス評価の表現が来ることが多い。(2)のように「Y。Xくせに」の形もある。主語の異なる次のような文では「くせに」は使えない。

(誤) 犬は散歩に行きたがっているくせに、彼はつれて行ってやらなかった。

(正) 犬は散歩に行きたがっているのに、彼はつれて行ってやらなかっ

た。

2 …くせして

（1）彼は、自分ではできないくせして、いつも人のやり方についてああだこうだと言う。

（2）人のやり方にけちつけるんじゃないの。自分ではできないくせして。

（3）この人、大きなからだのくせして、ほんとに力がないんだから。

（4）こどものくせしておとなびたものの言い方をする子だな。

（5）好きなくせして、嫌いだと言いはっている。

「くせに」とおなじ意味だが、それよりはうちとけた感じをあたえる場合が多い。

3 そのくせ

（1）彼女はもんくばかり言う。そのくせ自分ではなにもしない。

（2）彼女は自分ではなにもしない。そのくせ、もんくだけは言う。

（3）彼女はよく山田君はバカだと言ってるでしょ。そのくせ、私がそうだ、そうだというと、こんどはおこるのよ。

（4）日本人は他人には非常に冷淡な時がある、そのくせ身内に対しては異常なくらい仲間意識を持つという側面がある、とその研究者は言っている。

二つの独立した文をつなぐ。「くせに」とおなじ意味を表すが、「くせに」の用例の（2）の「もんく言うんじゃないの」のような禁止や命令の表現とともに使うことはできない。

（誤）自分では何もしないじゃない。そのくせもんく言うんじゃないの。

【ください】

→【てください】

【くださる】

→【てくださる】

【くらい】

「ぐらい」と言うことも多い。よく似た表現に「ほど」があるが、「くらい」のほうが話しことば的である。

1 数量詞＋くらい ＜概数＞

（1）この道を5分くらい行くと、大きな川があります。

（2）修理には一週間ぐらいかかります。

（3）これ、いくらだろう。3000円ぐらいかな。

（4）その島はこの国の3倍くらいの面積がある。

（5）店内のお客さまに、まいごのお子さまのご案内を申し上げます。青いシャツと黄色のズボンの、2才ぐらいのお子さまがまいごになっていらっしゃいます。

数量を表す表現に付いて、だいたいその程度であること（概数）を示す。時刻や日付を表すときには「…くらいに」を使う。

（正）3時ぐらいに来てください。

（誤）3時ぐらい来てください。

また、次のように疑問詞「どれ／どの」「いくら」「何メートル／キログラム／時間」などに付いて、だいたいの程度を尋ねたり、「これ・それ・あれ」に付いて、具体的な大きさなどを示したりする場合にも使われる。

（例）A：テープを切ってくれない?
B：どれくらい?
A：≪指を広げて大きさを示しながら≫これくらい。

2 Nくらい ＜比較＞

a N（とおなじ）くらい

（1）A：物価は日本と比べてどうですか。
B：あまり変わりませんよ。日本と同じくらいです。

（2）A：田中君って、いくつぐらいだろう。
B：そうだね。うちの息子ぐらいじゃないかな。

（3）こんどのアパートは前のと同じぐらい広くて、しかも日当たりがいい。

「XはY（とおなじ）くらい…だ」の形で使われて、XとYが同じ程度であることを表す。「ほど」には、この使い方はない。

b N（とおなじ）くらいのN

（1）このボールは、ちょうどリンゴくらいの大きさだ。

（2）ジルさんは、トムさんと同じぐらいの成績だ。

（3）これと同じぐらいの値段でもっといいのがありますよ。

「XはYくらいのNだ」の形で使われて、XとYが同じ程度であることを表す。Nには、「大きさ・重さ・高さ・温度・量」など量や程度を表す名詞が使われる。

c …くらい… Nはない

（1）タバコぐらいからだにわるいものはない。

（2）山田さんくらい自分でこつこつと勉強する学生は少ない。

（3）この車くらい若者から年輩の人にまで人気のある車は他にない。

（4）国民に見はなされた政治家ぐらいみじめなものはない。

（5）いまの私にとって、まずしくて書物が自由に買えないことぐらいつらいことはない。

「…くらい」で示されたものの程度が一番高いことを表す。「それが最も…だ」という意味。「ない」のかわりに（2）のように「すくない」「めずらしい」のような表現を使うこともある。「…ほど…Nはない」に言いかえることができる。

d Vくらいなら

（1）あいつに助けてもらうくらいなら、死んだほうがましだ。

（2）あんな大学に行くくらいなら、

就職するほうがよほどいい。

（3）上から紙を貼って訂正するくらいなら、もう一度はじめから書き直したほうがいいと思うよ。

（4）銀行で借りるくらいなら、私が貸してあげるのに。

（5）君に迷惑をかけるくらいなら、僕が自分で行くよ。

「XくらいならYのほうがましだ／ほうがいい／…する」などの形で使われて、「XよりYがよい」ことを表す。Yに極端な例が挙げられて、「…くらい」で表されたことがらに対して、話し手が非常に嫌っている気持ちをあらわしたり、話し手が「Xは望ましくないのでYのほうがよい」と考えている場合に使う。

3 …くらい ＜程度＞

a …くらい

（1）その話を聞いて、息が止まりそうになるぐらい驚いた。

（2）顔も見たくないくらい嫌いだ。

（3）佐藤さんぐらい英語ができるといいのにな。

（4）一歩も歩けないくらい疲れていた。

（5）コートがほしい(と思う)くらいさむい日だった。

（6）A：ずいぶん大きな声で怒っていたね。
　　B：うん、あいつにはあれぐらい言ってやらないとわからないんだ。

動作や状態の程度がどれくらいかを、比喩や具体的な例を使って表す表現。「ほど」と同じように使えるが、程度がはなはだしい場合には「くらい」は使えない。

（正）死ぬほど疲れた。

（誤）死ぬぐらい疲れた。

b …くらいだ

（1）君が困ることはないだろう。困るのは僕のほうだ。もう、泣きたいぐらいだよ。

（2）疲れて一歩も歩けないくらいだった。

（3）寒い日で、コートがほしいくらいだった。

（4）今のぼくのうれしさがわかるかい。そこらへんの人をみんなだきしめたいくらいだよ。

（5）おぼえてる? あの寒い夜ふたりでわけあって食べたラーメン。おいしくて、あたたかくて、世の中にこんなごちそうはないと思うくらいだったね。

先に述べられたことがらについて、具体的に例を挙げて、どの程度かを説明するのに使う。

c …くらいだから

（1）あの人は、会社をみっつも持ってるぐらいだから、金持ちなんだろう。

（2）彼はいつも本さえあればほかにはなにもいらないと言っているぐらいだから、きっと家の中は

本だらけなんだろう。

（3）あの温厚な山田さんが怒ったくらいだから、よほどのことだったのでしょう。

（4）素人の作品でも、こんなにおもしろいくらいだから、プロが作ればもっとおもしろいものができるだろう。

動作・状態の度合いを示して、話し手の判断や推量の根拠を述べる時に使う。後ろには「のだろう／にちがいない／はずだ」などの話し手の推量を表す表現が来ることが多い。

d …くらいの…しか…ない

（1）燃料が少なくなっているので、あと10キロくらい(の距離)しか走れない。

（2）10年間も英語を習っているのに、挨拶くらいの会話しかできない。

（3）体が丈夫で、風邪で数日寝込んだことくらいしかない。

（4）今忙しいので、ちょっとお茶を飲むくらいの時間しかありませんが、いいですか?

（5）学費を払うために無理をしている息子をなんとか助けてやりたいのだが、失業中の私たちには、励ましの言葉をかけてやるくらいのことしかできない。

「XくらいのYしか…ない」という形で、程度の少ないXを挙げて、Yがそれ以上のものではないことを表す。後ろには不可能を表す表現が続くことが多く、その場合は「X以上のYは…できない」という意味になる。

4 …くらい ＜軽視＞

（1）そんなことくらい子供でもわかる。

（2）山田さんは1キロメートルぐらいなら片手でも泳げるそうです。

（3）ちょっと足がだるいぐらい、ふろにはいればすぐになおるよ。

（4）すこし歩いたぐらいで疲れた疲れたって言うなよ。

（5）1回や2回試験に落ちたくらいがなんだ。このおれなんて、これまで払った受験料だけで大学がひとつ買えるぐらいだぞ。

（6）ビールぐらいしか用意できませんが、会議の後で一杯やりましょう。

（7）あいさつくらいの簡単な日本語しか話せない。

（8）指定された曜日にゴミを出さない人がいる。自分一人ぐらいかまわないだろうと軽く考えているのだろう。

ものごとを「重要ではない、たいしたことはない」ととらえる気持ちを表す。

「そんな簡単なこと、つまらないこと」という意味。後ろには、「大したことではない／容易である／問題はない」といった内容が続くことが多い。

5 …くらい ＜限定＞

a Nくらい

（1）子供じゃないんだから、自分のことぐらい自分で決めなさい。

（2）A：もう、11時ですよ。
　　B：いいじゃないか。日曜日ぐらい、ゆっくり寝かせてくれよ。

（3）帰りがおそくなるのなら、電話の一本ぐらいかけてくれてもいいじゃないか。

（4）あいさつぐらいしたらどうだ。

「…くらい」の形で、極端な例を挙げて、「最低限のこととして…は」という意味を表すのに用いる。

b …のは…ぐらいのものだ

（1）息子が電話をよこすのは、金に困った時ぐらいのものだ。

（2）仕事が忙しくて、ゆっくりできるのは週末ぐらいのものだ。

（3）そんな高価な宝石が買えるのは、ごく一部の金持ちくらいのものだ。

（4）社長に、あんなにずけずけものを言うのは君くらいのもんだよ。

「XのはYくらいのものだ」の形で、「Xが成立するのはYの場合だけだ」という意味を表す。

【くらべる】

→【にくらべて】

【くれ】

→【てくれ】

【くれる】

→【てくれる】

【くわえて】

[NくわえてN]

（1）規則正しい食事、適度な運動、くわえて近所の人達との日常的なつきあい、そういったものがこの村のお年寄りの長生きの秘訣と考えられる。

（2）慢性的な不作、加えて百年に一度という大災害で食糧不足はいっそう深刻になっている。

（3）地場産業の衰退、加えて児童の減少による小学校の廃校が、この地域の人口流出に拍車をかけているようだ。

それにつけ加えてという意味。「それだけでなく」「そのうえ」の意。書きことば的表現。かたい書きことばでは「くわうるに」ともいう。

【げ】

[Naげ]
[A-げ]
[R-げ]

（1）その人は退屈げに雑誌のページをめくっていた。

（2）「そうですか」というその声には悲しげな響きがあった。

（3）彼女の笑顔にはどこか寂しげなところがあった。

（4）彼のそのいわくありげな様子が私には気になった。

形容詞の語幹や動詞の連用形に付いて、そのような様子、ありさまである、という意味のナ形容詞を作る。例文は「退屈そう」「悲しそう」など「…そう」に言いかえられるが、「…げ」の方が書きことば的。慣用的な表現として（4）のようなものもある。

【けっか】

[Nのけっか]
[V-たけっか]

（1）投票の結果、議長には山田さんが選出された。

（2）調べた結果、私がまちがっていることがわかりました。

（3）3人でよく話し合った結果、その問題についてはもうすこし様子を見ようということになった。

（4）国会審議の空転の結果、この法案がこの会期中に採決される見通しはなくなった。

「調べた結果を教えてください」のようにほんらい「結果」は名詞だが、原因と結果をつなぐ表現として用例のように使われることがある。原因を表す表現に付いて、「それを原因として」「それによって」という意味を表す。後ろには結果としてもたらされることがらが表される。書きことば的。

【けっきょく】

（1）バーゲンセールに行ったが、結局何も買わないで帰ってきた。

（2）結局、世の中は万事金で決まるということだよ。

（3）挑戦者も善戦したが、結局は判定でチャンピオンが勝利をおさめた。

（4）結局のところ、あなたは何が言いたいのですか。

文頭や文中に用いられ、最終的な結論・結果を述べる場合に用いる。（3）（4）のように、「結局は」「結局のところ」の形で用いられることもある。努力や期待にもかかわらず、人の意志の力の及ばないところで成立する結論や結果を述べる場合が多く、「ものごとはなるようにしかならない（なかった）」という、やや否定的なニュアンスを伴う。したがって、望ましい結果を述べる場合は、不自然で使用しにくい。

（誤）猛勉強を続け、結局、彼は一流大学に合格した。

（正）猛勉強を続けたが、結局、彼は希

望した大学に合格できなかった。

（4）は疑問文が続く場合で、聞き手に結論を下すよう促す表現。

【けっして…ない】

（1）あなたのことはけっしてわすれません。

（2）いいかい。知らない人においでとさそわれても、けっしてついて行ってはいけないよ。

（3）きみのために忠告しておく。人前でそんなばかなことは決して言うな。

（4）気をわるくされたのならあやまります。失礼なことを言うつもりは決してなかったのです。

否定形や禁止の表現とともに使うことが多く、それらの意味を強めたり、強い意志・決意を表したりする。

【けど】

1 けど

（1）A：この本は、恵子にやるつもりだ。
　　B：けど、それじゃ、良子がかわいそうよ。

（2）このカメラ、貸してもいいよ。けど、ちゃんと扱ってくれよ。

「けれど」のくだけた言い方で、普通は、丁寧体の会話では使わない。

→【けれど】

2 …けど

（1）みんながあの映画はいいと言うけど、わたしにはちっともおもしろいと思えない。

（2）これは給料はよくないけど、やりがいのある仕事だ。

（3）A：これから、出かけるんだけど、一緒に行かない。
　　B：うん、行く。

（4）役所は認めてくれませんけど、これは立派な託児所です。

（5）すみません、電話が故障しているらしいんですけど。

「けれど」のくだけた言い方。丁寧体の文につけると、やや女性的になる。

→【けれど】

【けれど】

1 けれど

（1）2時間待った。けれど、彼は姿を表さなかった。

（2）パーティーではだれも知っている人がいなかった。けれど、みんな親切でとても楽しかった。

（3）この作品で3等賞ぐらいとれるかなと期待していた。けれど、結果は思いがけなく1等賞だった。

文頭に用いて、その前に述べられたことから予想されるのとは異なった展開で次に続くことを表す。「しかし」にくらべて、やや話しことば的。ただし、くだけた文章でも使う。

2 …けれど

（1）2時間待ったけれど、彼は姿を現さなかった。

（2）あの人はきれいだけれど、意地悪だ。

（3）下手だけれど、ピアノを弾くのは楽しい。

（4）野球もおもしろいけれどサッカーはもっとおもしろいと思う若い人が増えている。

（5）係長はもうすぐ帰ると思いますけれど、ここでお待ちになりますか。

節に付いて、そこで述べられたことから予想されるのとは異なった展開で次に続くことを表す。逆接表現だが、かならずしも逆接とは限らず、（5）のように前置きのようにも使う。やや話しことば的だが、くだけた文章でも使う。

3 …けれど

（1）いま母は留守なんですけれど。

（2）来週は外国出張で、いないんですけれど。

（3）紅茶は切らしています。コーヒーならありますけれど。

（4）ちょっとコピー機が動かないんですけれど。

（5）書類が一枚足りないんですけれど。

（6）かあさん、友達が夏休みにうちへ泊まりに来たいって言ってるんだけれど。

文を途中で省略した形で、いいわけ、事情の説明などを柔らかい調子で述べるのに用いる。（4）（5）（6）のようにして、間接的に依頼をするのにも使う。丁寧体、普通体どちらの文にも付く。丁寧体に付くと女性的で丁寧な表現になる。話しことば。

【けれども】

1 けれども

（1）2時間待った。けれども、一郎は姿を現さなかった。

（2）彼は話すのが下手だ。けれども、彼の話し方には説得力がある。

「けれど」と同じ。

→【けれど】

2 …けれども

（1）結婚式の日取りはまだ決まっていないんですけれども、たぶん夏ごろになると思います。

（2）あの人とは仲良く仕事をしたいと思っているんですけれども、なかなかうまく行きません。

（3）このままずっとここにいたいけれども、いつか国へ帰らなければならない。

（4）これは正式には発表されていないんですけれども、近いうちに大きな関心を呼ぶことになる

と思います。

「けれど」と同じ。丁寧体の表現に続けると、会議などの公式の場でも用いられる。

→【けれど】

【げんざい】

（1）彼が死んでしまった現在、もうそんなことを言っても意味がないよ。
（2）失敗の原因が明らかになった現在、われわれは何をすべきか。
（3）あの改革案がいまだに大方の賛同を得られていない現在、新たな方策を考えておくことも重要なことではないか。
（4）地球環境の保護が叫ばれている現在、クリーンエネルギーの夢を広げるその計画への期待は大きい。

「過去と現在」「現在の気温は29度だ」というように本来は名詞である。節につくと、今の状況を提示した上で、話し手の主張を述べる表現となる。かたい、書きことば的表現。

【ごし】

1 Nごし <空間>

（1）となりの人とへいごしにあいさつした。
（2）そのふるい映画には恋人どうしがガラスごしにキスをするシーンがあった。
（3）窓越しに見える無数の星を見るのが好きだ。

「ある物をへだてて」という意味。

2 Nごし <時間>

（1）3年ごしの話し合いで、やっと離婚した。
（2）私にとっては10年ごしの問題にやっとくぎりがつき、まとめたのが、この作品です。
（3）7年ごしの交渉がようやく実を結び、両国の間に平和条約が結ばれた。

多くは「…年ごしのN」の形で、その期間ずっとつづいた行為・状態を表す。

【こしたことはない】

→【にこしたことはない】

【こそ】

1 Nこそ

（1）A：よろしくお願いします。
　　B：こちらこそよろしく。
（2）ことしこそ『源氏物語』を終わりまで読むぞ。
（3）いまでこそ、こうやって笑って話せるが、あの時はほんとうにどうしようかと思ったよ。
（4）そうか。彼はひきうけてくれたのか。それでこそわれわれが見こんだとおりの人物だ。
（5）A：やはり私は文学部に進みたいと思います。
　　B：そうか。それこそ、なくなったきみのお父さんものぞんでいたことだ。

あるものごとを強調して、ほかでもなくこれなのだ、という意味を持たせる。

2 …こそ　あれ／すれ

[Nこそすれ]
[Naでこそあれ]
[R-こそすれ]

（1）あなたのその言い方は、皮肉でこそあれ、けっしてユーモアとは言えない。
（2）あなたをうらんでいるですって？ 感謝(し)こそすれ、私があなたをうらむ理由があるわけがないでしょう。
（3）政府のその決定は、両国間の新たな緊張の火種になりこそすれ、およそ賢明な選択とは言いがたいものである。

「Xこそあれ／Xこそすれ、Yではない」の形で事実はXであって、決してYではないと強く主張するのに用いる。Yでないと言う主張を強くきわだたせるために、それとは対照的なXであることに触れる用法。書きことば的表現。（3）は「火種にこそなれ」と言うこともできる。

3 …こそ…が

[Nこそ…が]
[Naでこそあるが]
[R-こそするが]

（1）この靴は、デザインこそ古いが、とても歩きやすい。
（2）書きこそしたが、彼のレポートはひどいものだった。
（3）彼はいちおう会長でこそあるが、実権はまったくない。
（4）あの学生は宿題こそいつもきちんと提出するけれども、試験をしてみると何もわかっていないことがわかる。
（5）その作家は、ベストセラーこそないけれども、ある一群の読者たちにささえられて、一作一作着実に書いてきた。

「XはYこそ…」と述べることによって、Xについて「Y…」であることは一応認めた上で、さらにそれとは対立する事態があることを述べるのに用いられる。「…が」「…けれども」などの逆接の接続詞が使用される。書きことば的表現。

4 …からでこそ　→【それでこそ】
5 …からこそ　→【からこそ】
6 …だからこそ　→【だからこそ】
7 …てこそ　→【てこそ】
8 …ばこそ　→【ばこそ】

【こと】

1 …こと <ことがら>

[Nのこと]
[Naなこと]
[A／V　こと]

（1）なにかおもしろいことないかな

あ。

（２）卒業したらやりたいと思っていることはありますか。

（３）私がきのう言ったこと、おぼえてる?

（４）世の中には君の知らないことがまだまだたくさんあるんだよ。

（５）本を読んで思ったこと、感じたことなどは、書名・著者名などといっしょにカードに書いておくとよい。

（６）なんでも好きなことをやってよい。

節に付いて、思考・発言・知識などのことがらをその内容に具体的に触れずに表すのに使う。「もの」との違いについては「もの１」参照。

2 …(という)こと <事実>

（１）山田さんが魚がきらいなことを知っていますか。

（２）午後から会議だということをすっかりわすれていた。

（３）きみが将来アフリカに行きたいと思っている(という)ことは、もう彼女に話したのか。

（４）彼は死んでもうこの世にいない(という)ことが、まだわたしには信じられない気がする。

節に付いて、そこで述べられたことがらを事実としてさししめすのに使う。ナ形容詞は(１)のように「魚がきらいなこと」、または「魚がきらいだということ」となる。

3 V-る／V-ない　こと <命令>

（１）休むときは、かならず学校に連絡すること。

（２）期末レポートは、かならず縦書き400字づめ原稿用紙を使用すること(とする)。

（３）体育館には土足ではいらないこと。

（４）教室を授業以外の目的で使用するときは、前もって申請をすること。

文末で用いて、命令やそうすべきだという話し手の気持ちを表す。規則や守るべき指示をつたえる表現。文章に書かれることが多い。(２)のように「こととする」で終わる場合もある。

4 …こと <感嘆>

[Nだこと]
[Na　だこと／なこと]
[A-いこと]
[V-ていること]

（１）まあ、かわいいあかちゃんだこと。

（２）あら、すてきなお洋服だこと。おかあさんに買ってもらったの?

（３）あらあら、元気だこと。でも電車の中でさわいではいけませんよ。

（４）え?　この子まだ２才なの?　まあ、大きいこと。

（５）このネコ、見てよ。よくふとっていること。病気かしら。

人や物の状態や性質を表す表現に付いて、おどろきや感動などの感嘆の気持ちを表す。(３)のようなナ形容詞の場合「元気なこと」のように「な」でもよい。話しことば。女性的表現。若い世代は男女ともに使わない。

5 NことN

（１）小泉八雲ことラフカディオ・ハーンはギリシャ生まれのイギリス人だ。

（２）これが、あの太陽王ことフランスのルイ14世が毎日使っていたワイングラスです。

（３）漱石こと夏目金之助は1867年、東京に生まれた。

「XことY」の形でXに通称・ペンネーム・ニックネーム、Yに本名やより公的な名前を入れて使う。「XすなわちY」の意味で、XとYが同一人物であることを表す。書きことば的。

6 Nのこと

（１）私のこと、すき?

（２）あなたのことは一生わすれない。

（３）彼女のことはもうあきらめなさい。

（４）パーティのこと、もう山田さんに言った?

（５）最近私は、どういうわけか、ふとしたひょうしに、ずいぶん前に死んだ祖母のことを考えていることが多い。

あるものを一つの個体としてではなく、それをとりまく事情・思い出・声や、時にはにおいのようなものにいたるまで、すべてをつつみこんだものとして表す。知覚・思考・感情・言語活動などの動詞の対象を表すときによく使われる。

【ことうけあいだ】

（１）こんどあの人のところに行くときは花を持って行くといい。よろこんでもらえること請け合いだよ。

（２）あんなやり方をしていたのでは、失敗することはうけあいだ。

（３）この計画に彼を参加させるには、成功したら手にはいるばく大な金のことを話せばいい。乗ってくることうけあいだ。

節に付いて、未来のできごとを確信をもって予想したり保証したりするのに用いる。(２)のように「は」がはいることもある。やや古めかしい表現。

【ことか】

[疑問詞＋Na なことか]
[疑問詞＋　A／V　ことか]

（１）つまらない話を３時間も聞かされる身にもなってください。どれほど退屈なことか。

（２）続けて二人も子供に死なれるなんて。どんなにつらいことか。

(3) とうとう成功した。この日を何年待っていたことか。

(4) それを直接本人に伝えてやってください。どんなに喜ぶことか。

それがどの程度・どれほどの量であるかが特定できないぐらい、はなはだしいという意味を感慨の気持をこめて表す。

【ことがある】

1 V-たことが　ある／ない

(1) A：京都へ行ったことがありますか。
B：いいえ、まだないんです。

(2) ああ、その本なら子供の頃読んだことがあります。

(3) そんな話は聞いたこともないよ。

(4) 高橋さんにはこれまでに2度お会いしたことがあります。

(5) 高橋さんにはまだお会いしたことがありませんが、お噂はよく聞いています。

(6) このあたりは過去に何回か洪水に見舞われたことがある。

ある出来事を経験したかしないかを述べるのに用いる。主として動詞が用いられるが、次のように「名詞＋だった」という形が用いられることもある。

(例) あのホテルはできるだけ早く予約した方がいいよ。3ヶ月前に電話したのに満員だったことがあるんだ。

また、「V-なかったことがある」という形で、「…しなかった」という経験を述べる場合もある。

(例) 財布を拾ったのに警察に届けなかったことがある。

2 V-る／V-ない　ことがある

(1) 子供たちは仲がいいのですが、たまに喧嘩をすることがあります。

(2) これだけ練習していても、時として失敗することがある。

(3) 天気のいい日に子供と散歩することがあるぐらいで、ふだんはあまり運動しません。

(4) A：最近、外で食事することはありますか。
B：最近はあまりないですねえ。

(5) 長雨が続くと、害虫の被害を受けることがある。

(6) 彼は仕事が忙しくて、食事の時間をとれないこともあるそうだ。

(7) 乾期にはいると2ヶ月以上も雨が降らないことがある。

ときどき、あるいはたまに何かの出来事が生じることを表す。頻度の多い出来事の場合は使えない。

(誤) このあたりはよく事故が起こることがある。

(正) このあたりはよく事故が起こる。

【ことができる】

[V-ることができる]

(1) アラビア語を話すことができますか。

(2) あの人は、ゆっくりなら20 kmでも30 kmでも泳ぐことができるそうだよ。

(3) 残念ですが、ご要望におこたえすることはできません。

(4) その社会や階級の構成員を「再生産」するという観点から、「教育」というものをとらえ直してみることもできるだろう。

「能力」((1)(2))や「可能性」((3)(4))の有無を表す。「話せる」「泳げる」のように可能を表す「V-れる」で言いかえることもできるが、あらたまった場面やかたい文章では、(特に可能性を表す場合は)やや「ことができる」のほうが好まれる傾向がある。

【ことこのうえない】

[Na なことこのうえない]

[A-いことこのうえない]

(1) 丁重なことこの上ないごあいさつをいただき、恐縮しております。

(2) その風景は、さびしいことこのうえ(も)ないものであった。

(3) 有権者の存在を無視したような、その政治家たちの舞台裏での争いは、見ぐるしいことこの上ないものであった。

それ以上のものはない、という意味。あらたまった、書きことば的表現で、上の例はそれぞれ「このうえなく丁重なあいさつ」「このうえなくさびしい」「このうえなく見ぐるしいもの」と言いかえることができる。

【ごとし】

文語で現在では書きことばにしか用いない。「ごとし」は文末に用いられる形で、「ごときN」、「ごとくV」のように活用する。

1 ごとし

[Nのごとし]

[Nであるがごとし]

(1) 光陰矢のごとし。

(2) 時間というものは、矢のごとくはやくすぎさっていくものだ。

(3) 山田ごときに負けるものか。

「…のようだ」となにかにたとえるときに使う。「Nごとき」の形は名詞に続く形で、「NごときN」となるのが普通だが、(3)のように「Nごとき」だけで、名詞として使われることもある。このような使い方はマイナス評価を帯びた意味を表す場合に限られる。ことわざや慣用句をのぞけば、現在では「ようだ」のほうをよく使う。

2 …かのごとし

(1) 彼女はそのことを知っているはずなのに、まったく聞いたことがないかのごとき態度だった。

(2) そのふたりはまずしかったが、

世界中が自分たちのものであるかのごとくしあわせであった。

（3）「盗作する」とは、他人の作品を自分の作品であるかのごとく発表することである。

（4）あの政治家は、いつも優柔不断であるかのごとくふるまってはいるが、実はそうかんたんには真意を見せないタヌキである。

文につづくが、名詞・ナ形容詞の場合は（3）（4）のように「だ」でなく「である」につづく。事実はそうではないがまるでそうであるかのようだ、という意味。現在では「かのようだ」の方をよく使う。特に辞書形の「かのごとし」は今ではほとんど使わない。

【ことだ】

1 V-る／V-ない　ことだ

（1）日本語がうまくなりたければもっと勉強することです。それいがいに方法はありません。

（2）かぜをはやくなおしたいんだったら、あたたかくしてゆっくり寝ることだ。

（3）まあ、ここは相手に花を持たせておくことだね。またチャンスもあるよ。

（4）こどもにさわらせたくないというのなら、最初から手のとどく所におかないことだ。

その状況でもっとものぞましいこと、もっともよいことを述べて、間接的に忠告や命令の機能をはたすのに用いられる。話しことば。

2 …ことだ

[Na なことだ]

[A-いことだ]

（1）家族みんな健康で、けっこうなことだ。

（2）いつまでもお若くて、うらやましいことです。

（3）夜はあぶないからって、あのおかあさん、こどもを塾までおくりむかえしてるんだって。ごくろうなことだね。

（4）道路に飛び出した弟を止めようと追いかけていって車にはねられるなんて…。いたましいことだ。

話し手のおどろき・感動・皮肉・感慨などを表す。用いられる形容詞はかぎられている。

3 …ということ　→【ということ】

4 …とは…のことだ　→【とは】

【ことだから】

[Nのことだから]

（1）彼のことだからどうせ時間どおりにはこないだろう。

（2）あの人のことだから、わすれずに持ってきてくれると思うけど

な。

（3）慎重な山田さんのことだから、そのへんのところまでちゃんと考えてあるとは思うけどね。

（4）あの人のことだから、この計画が失敗しても自分だけは責任をのがれられるような手はうってあるんだろう。

主として人を表す名詞に付く。話し手も聞き手もよく知っている人物について、その人の性格・行動パターンにもとづいてなんらかの判断をくだす時に使う。（3）の「慎重な」のように、判断の根拠にするその人物の性格や特徴を明示する場合もある。

【ことだし】

[N／Na　であることだし]

[Na なことだし]

[A／V　ことだし]

（1）雨がふってきそうだから、きょうは散歩はやめておこうか。こどもたちもかぜをひいていることだし。

（2）おいしそうな料理もでてきたことですし、私のへたなごあいさつはこのへんで終わりにしたいと存じます。

（3）委員も大体そろったことだし、予定時間も過ぎているので、そろそろ委員会を始めてはいかがですか。

節に付く。「ことだ＋し」という構造で、なんらかの判断・決定・希望の理由・根拠となる事情・状況を述べるときに使う。（2）のような「ことですし」はより丁寧な形。（3）のように理由をふたつ述べる場合や（2）のようにひとつだけの場合、また（1）のように最後につけたしのように言う場合などがある。話しことばだが、「し」だけよりもあらたまった表現。

【ことだろう】

[Na　な／である　ことだろう]

[A／V　ことだろう]

（1）ながいあいだ会っていないが、山田さんのこどももさぞおおきくなったことだろう。

（2）市内でこんなにふっているのだから、山のほうではきっとひどい雪になっていることだろう。

（3）≪手紙≫息子さん、大学合格とのこと。さぞかしお喜びのことでございましょう。

（4）この誘拐事件は人質の安全を考慮して今はふせられているが、公表されれば、まちがいなく社会に大きな衝撃をあたえることだろう。

節に付いて、推測を表す。「だろう」だけでも言えるが、「ことだろう」は、よりあらたまった、書きことば的な表現であり、「いま・ここ」ではわからないことについて、感情移入しながら推測するときに使う。（1）のように副詞の「さぞ（かし）」と

ともに使うとさらに強い感情移入となる。

【ことで】

[Nのことで]

(1) さっきのお話のことで質問があるんですが。

(2) 先生、レポートのことで、ご相談したいことがあるんですが。

(3) 君がきのう出した企画書のことで、課長が話があるそうだよ。

「質問する・相談する・話す」などの「話す」動作を表す動詞を伴い「…について」という意味を表す。理由・事情をしめして話を切りだすときに使う。

【こととおもう】

[Nのこととおもう]
[Naなこととおもう]
[A／V　こととおもう]

(1) ≪手紙≫「ごぶさたいたしておりますが、お元気でおすごしのことと思います。」

(2) ≪手紙≫「このたびのおかあさまのご不幸、さぞお力落としのことと存じます。」

(3) みなさんもずいぶん楽しみになさっていたことと思いますが、旅行の中止は私もたいへん残念です。

節に付いて、聞き手の状況を同情やいたわりの気持ちをこめて推測する気持ちを表す。「さぞ」「さぞかし」「ずいぶん」などの副詞とともに使われることも多い。「…とおもう」よりもあらたまった書きことば的な感じを与える表現で、手紙文に多く用いられる。(2)の「…ことと存じます」はさらにあらたまった丁寧な言い方。

【こととて】

[Nのこととて]
[Vこととて]

(1) 子供のやったこととて、大目に見てはいただけませんか。

(2) なにぶんにも年寄りのこととて、そそうがあったらお許しください。

(3) 慣れぬこととて、失礼をいたしました。

(4) 知らぬこととて、ご迷惑をおかけして申しわけございません。

後半に謝罪や許しを求める言葉をともなって、その謝罪の理由を述べるのに用いる。少し古めかしい表現。(3)(4)の「V-ぬ」は「V-ない」に相当する文語表現。

【ことなく】

[V-ることなく]

(1) ひどいゆきだったが、列車はおくれることなく京都についた。

(2) われわれは、いつまでもかわることなくともだちだ。

(3) その子は、もうこちらをふりかえることもなく、両手を振り、胸を張って、峠の向こうに消えて行った。

(3)のように「…こともなく」の形もある。「…ないで」や「…ず(に)」にちかいが、「…ことなく」は書きことばで、また意味的には、例で言えばそれぞれ「おくれる・かわる・ふりかえる」可能性もあるのに、そういうこともなく、というような意味あいで使われる。

【ことなしに】

[V-ることなしに]

(1) 努力することなしに成功はありえない。

(2) 誰しも他人を傷つけることなしには生きていけない。

(3) リスクを負うことなしに新しい道を切り開くことはできないだろう。

「XすることなしにYできない」のように後ろに可能性を否定する表現を伴って、「XをしなければYができない」、つまり「Yをしようと思ったら、Xをすることは避けられない」という意味を表す。かたい表現。

【ことに】

[Naなことに]
[A-いことに]
[V-たことに]

(1) 残念なことに、私がたずねたときには、その人はもう引っ越したあとだった。

(2) おもしろいことに、私がいま教えている学生は、私がむかしお世話になった先生のこどもさんだ。

(3) おどろいたことに、彼女はもうその話を知っていた。

(4) あきれたことに、その役所は知事の選挙資金のために裏金をプールしていた。

感情を表す形容詞や動詞に付いて、これから述べようとしていることがらに対する話し手の気持ちを前もって表すのに用いる。書きことば的表現。

【ごとに】

[Nごとに]
[V-るごとに]

(1) このめざまし時計は5分ごとに鳴る。

(2) こどもというものは、見るごとに大きくなっていくものだなあ。

(3) この季節は、よくひと雨ごとにあたたかくなるという。

(4) 彼は、会う人ごとに、こんど建てた家のことを自慢している。

(1)(2)(3)のように、そのたびに、そのつど、という意味を表す場合と、(4)のように、それぞれに、おのおのに、というような意味を表す場合とがある。(2)のように動詞に付く場合は「見るたびに」のように「たびに」を使うことの方が多い。また(4)は「人に会うたびに」や「会う

人会う人に」と言いかえることもできる。

【ことにしている】

[Vことにしている]

（1） 私は毎日かならず日記をつけることにしている。

（2） 夜はコーヒーを飲まないことにしているんです。

（3） 彼の家族は、家事はすべて分担してやることにしているそうだ。

（4） 運動不足解消のため、私はこどもと公園に行くとかならず鉄棒をやることにしている。

（5） ずいぶん前から、不正をおこなった場合は失格ということにしています。

なんらかの決定にもとづいて習慣やとりきめとなっているという意味を表す。「ことにする」の決定・決意の結果が習慣になったものと考えてよい。したがって一般的な習慣・儀礼などを表す場合には使わない。

（誤） 日本人は、はしを使ってご飯を食べることにしています。

（正） 日本人は、はしを使ってご飯を食べます。

【ことにする】

1 …ことにする ＜決定＞

[Vことにする]

（1） あしたからジョギングすることにしよう。

（2） これからはあまりあまい物は食べないことにしよう。

（3） きょうはどこへも行かないで勉強することにしたよ。

将来の行為についての決定・決意などを表す。（3）のように「ことにした」の形になると、その決定・決意はすでに成立しているという意味あいをつたえる。同じ意味の「こととする」は、よりあらたまった書きことば的表現。

2 …ことにする ＜扱い＞

[N（だ）ということにする]

[Na だということにする]

[V-た（という）ことにする]

（1） その話は聞かなかった（という）ことにしましょう。

（2） その件は検討中（だ）ということにして、すこしなりゆきを見まもろう。

（3） 敵の攻撃に対する防御の時間をかせぐために、大統領はすこぶる健康だということにしておくべきだ。

（4） 出張に行った（という）ことにして出張費を着服したり不正流用することを、俗に「カラ出張」と言う。

節に付いて、事実とは反対のこととしてふるまったり、そのように事態をあつかったりする、という意味を表す。名詞の場合は（2）のように「N（だ）ということにする」の形にする。動詞の場合は（1）（4）のようにタ形に付く。この場合は「という」

があってもなくてもよい。おなじ意味の「…こととする」は、よりあらたまった書きことば的表現。「ことになる」との比較は【ことになる】1を参照。

【ことになっている】

[Nということになっている]

[V-る （という）ことになっている]

[V-ない （という）ことになっている]

（1） やすむときは学校に連絡しなければならないことになっています。

（2） 乗車券をなくした場合は最長区間の料金をいただくことになっているんですが。

（3） 規則では、不正をおこなった場合は失格ということになっている。

（4） 駐車場内での盗難や事故については、駐車場側は関知しないことになっております。

（5） パーティーに参加する人は、6時に駅で待ち合わせることになっている。

（6） 夏休みのあいだ、畑の水やりは子供たちがすることになっている。

予定、日常生活でのとりきめ、法律や規則、慣例のようなものにいたるまで、人を拘束するさまざまなとりきめを表す。「…ことになる」の結論・結果がつづいている状態と考えてよい。

【ことになる】

1 …ことになる ＜決定＞

[Nということになる]

[V-る （という）ことになる]

[V-ない （という）ことになる]

（1） こんど大阪支社に行くことになりました。

（2） ふたりでよく話し合った結果、やはり離婚するのが一番いいということになりました。

（3） よく話し合った結果、やはり離婚ということになりました。

（4） 亡くなった山田さんは形式ばったことがきらいな人だったから、葬式などはしないことになりそうだな。

（5） この問題は、細部については両政府の次官級協議にゆだねられることになった。

将来の行為について、なんらかの決定や合意がなされたり、ある結果になることを表す。「…ことにする」が、だれが決定・決意したのかがはっきりしているのに比べ、この「ことになる」はそれが明瞭ではなく、自然に、なんとなく、ひとりでに、そういう結論・結果になる、というような意味あいをつたえる。（1）（2）（4）のように「ことになった」というタ形で使うことが多い。同じ意味の「こととなる」は、よりあらたまった、書きことば的表現。

2 …ことになる ＜言いかえ＞

[Nということになる]

[V-る (という)ことになる]
[V-ない (という)ことになる]

(1) 4年も留学するの? じゃあ、あの会社には就職しないことになるの?

(2) りえさんはわたしの母の妹のこどもだから、わたしとりえさんはいとこどうしということになる。

(3) これまで10年前と4年前に開いているので、これで日本での開催は3回目ということになる。

言いかえたり、ほかの視点から見たり、本質を指摘したりするときに使う。

【ことには】

1 V-ることには

(1) その子供たちの言うことには、彼らの両親はもう二日も帰ってきていないらしい。

(2) 学生たちの言うことには、ことしは就職が予想以上にきびしいらしい。

(3) 先生のおっしゃることには、最近の学生は言われたことしかしないそうだ。

(4) たぬきさんの言うことにゃ、きつねさんがかぜをひいたそうじゃ。

「言う」やそれに類する動詞の辞書形に付くことが多い。引用する発言の発言者をしめす。(1)なら「その子供たちが、両親がもう二日も帰ってきていないと言っている」という意味。やや古めかしい、書きことば的表現で、特に(4)のような「ことにゃ」の形は昔話などでよく使われる。

2 V-ないことには

(1) 先生が来ないことにはクラスははじまらない。

(2) いい辞書を手にいれないことには外国語の勉強はうまくいかない。

(3) あなたがこころよく見おくってくれないことには、私としても気持ちよく出発できないよ。

(4) とにかくこの予算案が国会で承認されないことには、景気回復のための次のてだてを講ずることは不可能だ。

「XないことにはYない」の形でXが実現しないとYが実現しないという意味を表す。XはYの成立のための必要条件を表す。「なければ」「なくては」と言いかえられる。

【ことは…が】

[Na なことは Na だが]
[A ことは A が]
[V ことは V が]

(1) 読んだことは読んだが、ぜんぜん分からなかった。

(2) あの映画、おもしろいことはおもしろいけど、もう一度金をはらって見たいとは思わないね。

(3) おいしかったことはおいしかったけどね、でも高すぎるよ。

(4) どうしてもやれと言うなら、いちおうやってみることは(やって)みるけど、うまく行かないと思うよ。

(5) A:ひさしぶり。元気だった?
B:元気なことは元気なんだけどねえ。なにかもうひとつ満たされない気分なんだなあ。

同じ語を繰り返して使う。譲歩の気持ちを表し、あることをいちおう認めるが、それほど積極的な意味を持たせたくない時に使う。

(1)(4)のように動詞が使われた場合は、その行為をいちおうはおこなう(おこなった)が、結果は思わしくないだろう(なかった)、という意味を表す。「てみる」とともに使うことも多い。(2)(3)(5)のように名詞や形容詞が使われる場合は、「それを否定するわけではないが」という意味になる。たとえば(2)なら「おもしろくない(という)わけではないが」と言いかえることができる。

過去のことについて言う場合は、(1)のように2語ともタ形にすることもあるし、次のように2番目の語だけをタ形にする場合もある。

(例) 読むことは読んだが、ぜんぜん分からなかった。

【ことはない】

[V-ることはない]

(1) 心配することはないよ。ぼくもてつだうからがんばろう。

(2) こまったことがあったらいつでも私に言ってね。ひとりでなやむことはないのよ。

(3) そのことでは彼にも責任があるんだから、君だけが責任をとることはないよ。

ある行為について、その必要がない、しなくてもよい、という意味。人をはげましたり忠告するときによく使う。

【ことはならない】

[V ことはならない]

(1) だめだ。あんな男と結婚することはならない。おまえはだまされているんだ。おとうさんはぜったいにゆるさない。

(2) 戦前は、天皇の写真でさえ顔を上げて見ることはならないとされていた。

(3) こどものころ、本や新聞をまたぐことはならぬとよくおじいさんにしかられたものだ。

してはならないという禁止の意味を持つ。(3)のように「ならぬ」の形もある。古い言い方。

【このたび】

(1) この度はご結婚おめでとうござ

います。

（２）≪あいさつ≫この度、転勤することになりました。

（３）この度、会長に選ばれました佐々木でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

「今回は」の意で、慣用的な改まった言い方。

【このぶんでは】

→【ぶん】3

【こむ】

［R-こむ］

（１）ここに名前を書きこんでください。

（２）かばんに本をつめこんで旅にでかけた。

（３）トラックに荷物を積みこむのを手伝った。

（４）その客は家にあがりこんで、もう５時間も帰らない。

（５）日本の社会に溶け込むことと自分の文化を見うしなわないこととは両立するのだろうか。

（６）人の部屋に勝手に入り込まないでくれ。

（７）友達と話し込んでいたらいつのまにか朝になっていた。

（８）サルに芸を教え込むことと子供を教育することとの違いが分かっていない教師がいる。

（９）部屋の片隅に座り込んで、じっと考え事をしている。

なにかの中にいれるという意味の他動詞を作ったり（用例（１）～（３））なにかの中にはいる、という意味の自動詞を作ったりする（用例（４）～（６））。また、「徹底的に／じゅうぶんに…する」という意味の動詞を作るのに用いる（用例（７）～（９））。

【ごらん】

（１）どうぞ、ご自由にごらんください。

（２）ごらん（なさい）、つばめがやってきた。

（３）ひとりでやってごらん。ここで見ててあげるから。

（４）こどもはいくらかな。駅員さんに聞いてきてごらん。

「見る」の尊敬語。（１）のように「ごらんください」の形で、「見てください」の尊敬表現として使う場合や、（２）のように「見なさい」の上品な言い方（「ごらん」は「ごらんなさい」をみじかくしたもの）として使う場合や、（３）（４）のように「てごらん」の形で、「てみなさい」の上品な言い方として使う場合などがある。（２）（３）（４）が上品な言い方だとしても、いぜんとして「…しなさい」の意味であるから目上に対しては使わない。

【これだと】

（１）これだと、ちょっと困るんですけど。

（２）これだと、まだ解決には遠いようですね。

（３）これだと、人には薦められません。

（４）これだと、目的地に到着するまでまだ２～３時間かかりそうだ。

「これでは」と同じ。

→【これでは】

【これでは】

（１）これでは、生活していけません。

（２）これでは、問題の解決になっていない。

（３）君の作文は誤字が多すぎる。これでは、試験にパスしないだろう。

（４）高速道路の渋滞がひどい。これでは目的地に到着するまで、２～３時間はかかりそうだ。

「この状況では／この条件では」の意味で、あとにあまりよくないという判断や予測を述べることが多い。

【さあ】

1 さあ

（１）さあ、いこう。

（２）さあ、いそいで、いそいで。

（３）さあ、がんばるぞ。

（４）さあ、春だ。

（５）さあ、ごはんができたぞ。

聞き手をうながしたりさそったりするときに使う。（３）のような場合は自分自身をはげましている。（４）（５）のような場合には（１）（２）（３）のような「うながし」「さそい」「はげまし」などの機能がかくされており、「さあ、春だ。がんばるぞ」「さあ、ごはんができたぞ。食べよう／食べなさい」のように言うこともできる。（３）の用法以外で、状況だけで意味がつうじる場合は「さあ」だけでもよい。

2 さあ

（１）Ａ：あの人、だれ？
　　Ｂ：さあ（、知りません）。

（２）Ａ：これから、どうする？
　　Ｂ：さあ、どうしようかな。

質問や状況を受けて、（１）のように答えがわからない場合や（２）のように判断にこまったときに使う。特に（１）の意味のとき「さあ」とだけしか言わないのは、親しい相手の場合だけにゆるされる。

【さい】

［Nのさい（に）］

［Vさい（に）］

（１）お降りのさいは、お忘れ物のないよう、お気をつけください。

（２）先日京都へ行った際、小学校のときの同級生をたずねた。

（3） このさい、おもいきって家族みんなでスペインにひっこさない?

（4） 国際会議を本県で開催される際には、次回はぜひとも我が市の施設をお使いくださるよう、市長としてお願い申し上げます。

「とき」と言いかえられることが多いが、「とき」とことなる点は、(a)「とき」よりかたい言い方である(b)機会・チャンス・きっかけなどの意味がくわわる(c)否定形に付くことがすくない、などである。また（3）の「このさい」という表現は、なにかをきっかけとしておもいきって決断するときに使う慣用表現で、「とき」と言いかえることができない。

【さいご】

→【がさいご】

【さいちゅう】

[Nのさいちゅう]
[V-ているさいちゅう]

（1） 大事な電話の最中に、急におなかが痛くなってきた。

（2） きのうの断水のとき私はちょうどシャワーの最中でした。

（3） 授業をしている最中に非常ベルが鳴りだした。

（4） その件は私たちの方で今話し合っている最中だから、最終結論を出すのはもうちょっと待ってくれないか。

ちょうどその行為・現象が進行しているところ、という意味。（1）～（3）のように、進行中に突然何かが起こるという場合に使うことが多い。

【さえ】

1 さえ

[N（＋助詞）さえ（も）]
[疑問詞…かさえ（も）]

（1） あのころは授業料どころか家賃さえはらえないほどまずしかった。

（2） この本はわたしにはむずかしすぎます。何について書いてあるのかさえわかりません。

（3） そんなことは小学生でさえ知ってるよ。

（4） 本人にさえわからないものを、どうしてあの人にわかるはずがあるんだ。

（5） その小説はあまりにもおもしろくて、食事の時間さえもったいないと思ったほどだった。

（6） A：ぼくたち、いつ結婚するんだ。
B：なに言ってるの。するかどうかさえ、私はまだ決めてないのよ。

普通なら当然だと思われていることがそうではないと述べ、その他のものはなおさらだという含みを伝えるのに用いる。主格に付くときは「でさえ」になることが多い。「…も」に言いかえられる。

2 …さえ …たら／…ば

[Nさえ …たら／…ば]
[R-さえ したら／すれば]
[V-てさえ …たら／…ば]
[疑問詞…かさえ …たら／…ば]

（1） あなたさえそばにいてくだされば、ほかにはなにもいりません。

（2） あなたがそばにいてさえくだされば、ほかにはなにもいりません。

（3） あなたがそばにいてくださりさえすれば、ほかにはなにもいりません。

（4） 今度の試験で何が出るのかさえわかったらなあ。

あるものごとが実現すればそれで十分で、ほかはちいさなことだ、必要ではない、問題ではない、という気持ちを表す。

3 ただでさえ →【ただでさえ】

【さしあげる】

→【てさしあげる】

【さしつかえない】

（1） さしつかえ（が）なければ、今夜ご自宅にお電話しますが…。

（2） これ、来週までお借りしてほんとうにさしつかえありませんか。

（3） わたしがおおくりしてさしつかえないのなら、山田先生はわたしの車でおつれしますが。

「支障がない」「かまわない」という意味。（2）（3）のように「て（も）さしつかえない」の形で使われることもある。（1）のような場合は「が」をいれることができるが（2）（3）のような場合は、いれることができない。

【さすが】

1 さすが

（1） これ、山田さんがつくったの?うまいねえ。さすが（は）プロだねえ。

（2） さすが（は）山田さんだねえ。うまいねえ。

（3） これ山田さんがつくったの?さすがだねえ。

（4） さすが（は）世界チャンピオン、その新人の対戦相手を問題にせずしりぞけた。

文頭にくることが多い。（1）（2）（4）のような「さすが（は）Nだ」の形と（3）のような「さすがだ」の形とがある。話し手が持つ知識や社会通念どおりの結果になったときに使う。「やはり」と近いが、「さすが」はプラス評価のみに使う。

2 さすがに

（1） 沖縄でもさすがに冬の夜はさむいね。

（2） いつもはおちついている山田さんだが、はじめてテレビに出

たときはさすがに緊張したそうだ。

（3）世界チャンピオンもさすがにかぜには勝てず、いいところなくやぶれた。

（4）最近調子を落としている山田選手だが、このレベルの相手だとさすがにあぶなげなく勝った。

（5）ふだんはそうぞうしいこどもたちも今夜ばかりはさすがにお通夜のふんいきにのまれているようだ。

ある評価をあたえられているものが、ある特定の状況におかれることによって、その評価とはことなった結果を見せたときに使う。（1）で言えば、日本の中ではあたたかいと評価されている沖縄でも冬の夜という状況ではそうではない、という意味。プラス評価・マイナス評価いずれにも使う。

3 さすが（に）…だけあって

［Nだけあって］

［Naなだけあって］

［A-いだけあって］

［Vだけあって］

（1）さすがプロだけあって、アマチュア選手を問題にせず勝った。

（2）さすがに熱心なだけあって、山田さんのテニスはたいしたもんだ。

（3）さすがからだが大きいだけあって、山田さんは力があるねえ。

（4）山田さんは、さすがによく勉強しているだけあって、この前のテストでもいい成績だった。

（5）彼女は、さすがに10年も組合活動をしているだけあって、なにごとも民主的に考えることのできる人だ。

そのものやことについての話し手の知識や社会通念から予想されるとおりの結果になったときに使う。「やはり」と近いが、この「さすがに…だけあって」はプラス評価のみに使う。

4 さすがに…だけのことはある

［Nだけのことはある］

［Naなだけのことはある］

［A-いだけのことはある］

［Vだけのことはある］

（1）アマチュア選手が相手なら問題にしないね。さすがにプロだけのことはあるよ。

（2）山田さんのテニスはたいしたもんだ。さすがに熱心なだけのことはあるよ。

（3）山田さんはちからがあるねえ。さすがにからだがおおきいだけのことはある。

（4）山田さんはこの前のテストでもいい成績だった。さすがによく勉強しているだけのことはあるね。

（5）彼女はなにごとも民主的に考えることのできる人だ。さすがに20年も組合のリーダーをやっているだけのことはある。

ある結果や状態を見て、そのものやことについての話し手の知識や社会通念を使って、その原因や理由を見つけるときに使う。「やはり」と近いが、この「さすがに…だけのことはある」はプラス評価のみに使う。上の「さすがに…だけあって」と組み合わせて「さすがに…だけのことはあって」と言うこともできる。

5 さすがのNも

（1）さすがの世界チャンピオンもケガには勝てなかった。

（2）さすがの山田さんも、はじめてテレビに出たときは緊張したそうだ。

（3）さすがの機動隊も、ひとびとのからだをはった抵抗にたいしては、それ以上まえにすすむことができなかった。

（4）私は小さいころよくいじめられるこどもだった。しかし、さすがのよわむしもおとうとやいもうとがいじめられているときだけは相手にとびかかっていったそうだ。

ある評価をあたえられているものが、ある特定の状況におかれることによって、その評価とはことなった結果を見せたときに使う。副詞的に使う「さすがに」と基本的におなじ機能。

【させる】

使役を表す。「V-させる」のVが五段活用の動詞の場合は、「行く→行かせる」「飲む→飲ませる」のように、辞書形の末尾をア段に変えて「せる」を付ける。一段活用の場合は、「食べる→食べさせる」のように、語幹「食べ」に「させる」を付ける。「する」は「させる」、「来る」は「こさせる」になる。話しことばでは「行かす」「飲ます」「食べさす」などの形が使われることもある。

使役文の基本的な意味は、ある人の命令や指示に従って他の人間がある行動をすることであるが、実際に使用される場合には、「強制」「指示」「放任」「許可」など一般に使役と考えられているよりも幅広い意味を表わす。

（例1）<強制>犯人は銀行員に現金を用意させた。

（例2）<指示>社長は秘書にタイプを打たせた。

（例3）<放任>疲れているようだったので、そのまま眠らせておいた。

（例4）<許可>社長は給料を前借りさせてくれた。

（例5）<放置>風呂の水をあふれさせるな。

（例6）<介護>子供にミルクを飲ませる時間です。

（例7）<自責>子どもを事故で死なせてしまった。

（例8）<原因>フロンガスが地球を温暖化させている。

1 V-させる

a NがNにNをV-させる

(1) 教師が学生に本を読ませた。

(2) 犯人は銀行員に現金を用意させた。

(3) A：機械がまた故障なんですが…。
B：申し訳ありません。すぐに係りの者を伺わせます。

(4) 山田はひどい奴だ。旅行中ずっと僕に運転させて、自分は寝てるんだよ。

強制・指示・放任など、さまざまな意味を表す。他動詞を使った文「NがNをV(他動詞)」を使役の文「NがNにNをV-させる」に変えたもの。他動詞文の主語「Nが」は「Nに」となる。

b NがN を／に V-させる

(1) 子どもを買い物に行かせた。

(2) 社長は、まず山田をソファーにかけさせて、しばらく世間話をしてから退職の話を切りだした。

(3) 最近は小学生を塾に通わせる親が多い。

(4) 大きな契約だから、新入社員に行かせるのは心配だ。

強制・指示・放任など、さまざまな意味を表す。自動詞を使った文「NがV(自動詞)」を使役の文「NがNを／にV-させる」に変えたもの。自動詞文の主語「Nが」は「Nを」になることが多いが、「Nに」となることもある。

c NがNをV-させる ＜人＞

(1) 彼は、いつも冗談を言ってみんなを笑わせる。

(2) 就職試験を受けなかったために、父をすっかり怒らせてしまった。

(3) 私は子供の頃は乱暴で、近所の子をよく泣かせていた。

(4) 二年も続けて落第して母をがっかりさせた。

(5) 厳しくしつけすぎて、息子をすっかりいじけさせてしまった。

(6) 子どもを交通事故で死なせてからというもの、毎日が失意のどん底であった。

「人が…するように仕向ける」「人が…する原因となる」という意味を表す。「泣く・笑う・怒る」など自分で行動を制御できない自動詞を用いた使役文。「NがV(自動詞)」の主語「Nが」は、使役文では「Nを」となる。(5)は意図的に仕向けたり、その原因となったりしたわけではないが、保護する立場なのに引き起こしてしまった事態として自分を責める気持ちが表されている。

d NがNをV-させる ＜物＞

(1) シャーベットは、果汁を凍らせて作ります。

(2) 打撲の痛みには、タオルを水で湿らせて冷やすとよい。

(3) 貿易の不均衡が日米関係を悪化させている。

(4) 金融不安が、日本の経済状態を悪化させる原因となっている。

(5) 子供達は目を輝かせて話に聞き入っている。

(6) 猫は目を光らせて暗闇に潜んでいる。

「物が…するように仕向ける」「物が…する原因となる」という意味を表す。「凍る」「湿る」のように対応する他動詞がない自動詞を、他動詞と同じように使う用法。(5)(6)の「目を輝かせる／光らせる」は慣用句的な表現。

2 V-させてあげる ＜許可＞

(1) そんなにこの仕事がやりたいのなら、やらせてあげましょう。

(2) 従業員たちもずいぶんよく働いてくれた。2、3日休みをとらせてやってはどうだろう。

(3) きのうの晩、ずいぶん遅くまで勉強をしていたようだから、もう少し休ませてあげましょう。

使役の表現と「あげる」「やる」などを組み合せて、許可や放任を表す。

3 V-させておく ＜放任＞

(1) 甘えて泣いているだけだから、そのまま泣かせておきなさい。

(2) 注意したってどうせ人の言うことなんか聞こうとしないんだ。勝手に好きなことをさせておけばいいさ。

(3) 夕方になると急に冷え込みますから、あんまり遅くまで遊ばせておいてはいけませんよ。

使役の表現と「おく」を組み合せて、放任を表す。

4 V-させてください ＜許可求め＞

(1) 申し訳ありませんが、今日は少し早く帰らせてください。

(2) A：だれか、この仕事を引き受けてくれませんか。
B：ぜひ、私にやらせてください。

(3) A：私が御馳走しますよ。
B：いや、いつも御馳走になってばかりですので、ここは、私に払わせてください。

(4) 少し考えさせていただけますか。

(5) 期日については、こちらで決めさせていただけるとありがたいのですが…。

使役の表現と「ください」「いただけますか」などの依頼の表現を組み合せて、許可を求める意味を表す。(3)のように丁寧な申し出としても使われる。

5 V-させて もらう／くれる ＜恩恵＞

(1) 両親が早く亡くなったので、姉が働いて私を大学に行かせてくれた。

(2) 金婚式のお祝いに、子ども達にハワイに行かせてもらった。

（3）≪結婚式のスピーチ≫新婦の友人を代表して、一言ご挨拶させていただきます。

（4）≪パーティーで≫では、僭越ではございますが、乾杯の音頭をとらせていただきます。

使役の表現と「もらう」「くれる」などを組み合せて、許可・放任などを恩恵として受けとめているという意味を表す。（3）（4）は、あいさつなどの前置きに使われる慣用的な表現で、その行為をすることを光栄に思っているという意味が含まれる謙譲表現。

6 V-させられる ＜使役受身＞

［NがNにVさせられる］

（1）きのうは、お母さんに3時間も勉強させられた。

（2）先輩に無理に酒を飲まされた。

（3）この歳になって、海外に転勤させられるとは思ってもみなかった。

（4）山下さんは、毎日遅くまで残業させられているらしい。

（5）きのうのサッカーの試合は、逆転につぐ逆転で最後までハラハラさせられた。

「XがYにV-させる」という使役文をYの視点から言い換えた受身文で、「YがXにV-させられる」となったもの。Xに強制されて行動するという意味で、Yが「迷惑だ・いやだ」を思っている場合に使う。「行く」「読む」など五段活用の動詞の場合は、「行かせられる」「読ませられる」の代わりに「行かされる」「読まされる」となることが多い。

【さぞ…ことだろう】

→【ことだろう】

【さっぱり】

1 さっぱり…ない

（1）あの人の話はいつもむずかしいことばがたくさんでてきてさっぱりわからない。

（2）最近山田さんからさっぱり連絡がないね。

（3）辞書をいくら使ってもこの本はさっぱり理解できない。

（4）これだけ努力しているのにさっぱり上達しないのは、これは私のせいではなく、日本語そのもののせいなのではないだろうか。

否定表現（動詞が多い）を強めるのに用いられる。期待どおりにならない、という意味あいをふくむ時がおおい。

2 さっぱりだ

（1）A：どう、調子は。

B：だめ。さっぱりだよ。

（2）このごろ数学の成績がさっぱりだ。

（3）暖冬の影響で冬物衣料の売れ行きがさっぱりだという。

よくない、うまくいかないという意味。

【さて】

1 さて

（1）さて、そろそろいこうか。

（2）さて、つぎはどこへいこうかな。

（3）A：あの人、だれ?

B：さて、だれだろう。

（4）さて、話はかわりますが、…。

次の話題に移ろうとしたり次の行動をしようとしたりするときに発することば。（1）のようにさそったり（2）（3）のように考えているということを聞き手に知らせたり（4）のように話題をかえるようなときに使う。ややあらたまった表現。

2 さて V-てみると

（1）漢字がおもしろそうだったので日本語を勉強することにしたのだが、さてはじめてみると、これがけっこうむずかしい。

（2）頂上までいけば水ぐらいあるだろうと、むりをしてのぼっていった。ところが、さてついてみると何もないのである。

（3）頂上までいけば水ぐらいあるだろうと、むりをしてのぼっていった。さてついてみると、あった、あった、そこには神社もあり水もあった。

後ろに結果を表す表現を伴って、なにか予想をしたうえで行為をおこなってみるとある結果になった、という意味を表す。どちらかというと、（3）のように予想どおりの結果になったという場合よりは、（1）（2）のように予想とはちがう結果になった、という場合に使うほうが多い。ややあらたまった表現。

【さほど】

［さほど Na ではない］

［さほど A-くない］

［さほど V-ない］

（1）きょうはさほどさむくない。

（2）きのうはさほど風がなかったので、公園でバドミントンができた。

（3）さほど行かないうちにバス停が見えてきた。

（4）その子は、熱もさほど高いわけではなかったので、朝まで待って、それから医者につれていくことにした。

否定表現とともに使い、程度がはなはだしくないという意味を表す。「それほど…ない」のかたい言い方。

【さも】

（1）かれはさもおいしそうにビールを飲みほした。

（2）子供はさもねむそうな様子で、大きなあくびをした。

（3）老人は、さもがっかりした様子で立ち去った。

（4）その子はさもうらやましそうな

声で「いいなあ」と言った。

（5）その植木はさも本物らしく作ってあるが、よく見るとにせ物だということがわかる。

様子や様態を強調する言い方。「本当に、大変に…らしい」という意味。「そうだ」「らしい」「ようすだ」などと共に使われる。

【さらに】

[さらに Na／A／V]

[さらに＋数量詞]

（1）一日一回では効かないので、さらに薬の量を増やした。

（2）このままでも十分おいしいのだが、クリームを入れるとさらにおいしくなる。

（3）さらに多くの方に利用していただけますように今月は入会金を半額にいたしております。またご家族でご入会いただきますと、さらにお得なファミリー割引がございます。

（4）途中の小屋まで5時間、それから頂上まではさらに2時間かかった。

（5）さらに二人のメンバーが入って、団員は全部で18人になった。

（6）事故の全貌が明らかになるにしたがって、更に犠牲者が増える見込みである。

程度が今より進むことを表す言い方。書きことば的表現。丁寧な話しことばでも使う。数量とともに使うときは「その上に」という意味になる。「もっと」で言いかえられるが「もっと」のほうが話しことば的表現。数量とともに使う（4）、（5）は「もっと」には言いかえられない。

【さることながら】

→【もさることながら】

【ざるをえない】

[V-ざるをえない]

「V-ない」の「ない」を「ざる」に変えて作る。ただし、「する」は「せざるをえない」となる。

（1）先生に言われたことだからやらざるをえない。

（2）先生に言われたことだからせざるをえない。

（3）あんな話を信じてしまうとは、我ながらうかつだったと言わざるを得ない。

（4）これだけ国際的な非難を浴びれば、政府も計画を白紙に戻さざるを得ないのではないか。

そうするよりほかに選択肢がないという意味を表す。「V-するほかない」に言いかえられる。（1）（2）（4）のように圧力や状況の切迫のために、意に反してその行為を行うことを表す場合が多い。書きことば的。

【されている】

→【とされている】

【し】

1 し ＜並列＞

a …し

（1）あの店は安いし、うまい。

（2）このアパートは静かだし、日当りもいい。

（3）部屋にはかぎがかかっていなかったし、窓もあいていた。

（4）昨日は食欲もなかったし、少し寒気がしたのではやく寝た。

節と節を「そして」の意味でつなぐ表現。同時的なことがらや、話し手の意識の中で互いに関連しているような事を並べるときに使う。ことがらを時間的な順序で並べあげていくときには使えない。

（誤）先週大阪へ行ったし、友だちに会った。

（正）先週大阪へ行った。そして友だちに会った。

b …し、それに

（1）今日は雨だし、それに風もつよい。

（2）この会社は給料もやすいし、それに休みも少ない。

（3）家の修理にはお金がかかるし、それに時間もない。だから当分このままで住むつもりだ。

「そのうえ」「さらに」と、つけくわえていく言い方。

c Nも…し、Nも

（1）あの子は頭もいいし性格もいい。

（2）新年会には山田も来たし、松本も来た。

（3）かれはタバコも吸うし、酒も飲む。

（4）小さな庭ですが、春になると花も咲きますし鳥も来ます。

（5）A：すきやきの材料は全部買った？

B：ええ、ねぎも買ったし、肉も買ったし・・。

同じようなものを提示して、並べ立てて言うのに用いる。

2 し ＜理由＞

a …し

（1）もう遅いしこれで失礼します。

（2）暗くなってきたし、そろそろ帰りましょうか。

（3）今日はボーナスも出たし、久しぶりに外に食べに行こうか。

（4）そこは電気もないし、ひどく不便なところだった。

（5）まだ若いんだし、あきらめずにもう一度挑戦してみてください。

理由を表す。「ので」や「から」よりもゆるやかな因果関係で、他にも理由があるという含みがある。

b …し、…から

(1) この子はまだ10歳だし、体が弱いから留学は無理だ。

(2) 昨日は祭日だったし、天気がよかったから、がらくた市は大勢の人でにぎわった。

(3) その道は夜は暗いし危ないから一人で歩かないようにしてください。

(4) 風邪気味だし、それに着て行く服もないからパーティーには行かない。

理由をふたつ以上あげるときの表現。

c Nは…し、Nは…して

(1) 子供は生まれるし、金はないしで大変だ。

(2) 雨は降るし、駅は遠いしで本当につかれました。

(3) 遊園地では待ち時間は長いし、子供は寝てしまうしで散々でした。

それぞれの原因を「は」で対比的に表し、強調する言い方。そのために大変だ、疲れたなどの表現が続く。

d Nじゃあるまいし

(1) 子供じゃあるまいしそんなこと一人でやりなさい。

(2) 学生じゃあるまいし取引先にちゃんと挨拶ぐらいできなくては困る。

(3) 泥棒じゃあるまいし、裏口からこっそり入って来ないでよ。

「…じゃないのだから」の意味で、「しなさい」、「しては困る」などの軽く非難したり、たしなめたりする表現が続く。例えば(1)は「子供なら仕方がないが、そうじゃないのだから」の意味。

【しいしい】

(1) 女は遠慮しいしい部屋の片隅に座った。

(2) 男は大きなハンカチで汗をふきふき坂を登ってきた。

(3) 子供たちはもらったばかりのあめをなめなめ老人についていった。

「食べ食べ」「飲み飲み」のように動詞の連用形を繰り返して、繰り返し動作を行う様子を表す。「する」「みる」など、連用形が「し」「み」のように一音節になる場合には、「い」を付けて「しいしい」「みいみい」の形にする。「しいしい…する」のように一方で並行した動作がある場合に使う。多少慣用的な古い言い方。話しことばでは「ながら」を使う。

【しか】

1 しか…ない

a N(＋助詞)しか…ない

(1) 朝はコーヒーしか飲まない。

(2) 1時間しか待てません。

(3) 月曜しか空いている日はないんで、打ち合せはその日にしてもらえませんか。

(4) こんなことは友だちにしか話せません。

(5) この映画は18歳からしか見ることはできない。

(6) あそこの店は6時までしかやっていない。

(7) かれは自然のものだけしか食べない。

(8) 今月はもうこれだけしかない。

否定表現と共に使い、ひとつの事だけを取りあげて、他を排除するのに用いる。

(7)(8)のように「だけ」と共に使い、意味をいっそう強調することもある。

b Nでしかない

(1) どんなに社会的な地位のある人でも死ぬときはひとりの人間でしかない。

(2) かれは学長にまでなったが、親の目から見るといつまでも子どもでしかないようだ。

(3) 会社でいばってはいるが、家では子どもに相手にされないさびしい父親でしかない。

(4) 時間がなくて出来ないと言っているが、そんなのは口実でしかない。ほんとうはやりたくないのだろう。

「Nだ」ということを強調する言い方だが、Nにくるものをあまり評価しない、価値がそれだけに限られるという意味で使うことが多い。「にすぎない」に言いかえられる。

c V-るしかない

(1) 高すぎて買えないから、借りるしかないでしょう。

(2) そんなに学校がいやならやめるしかない。

(3) 燃料がなくなったら、飛行機は落ちるしかない。

(4) ここまで来ればもう頑張ってやるしかほかに方法はありませんね。

「そうするだけだ」という意味で、他に方法がない、他の可能性がないから仕方がないという文脈で使われることが多い。

2 …としか…ない

(1) 今はただ悪かったとしか言えない。

(2) 今の時点ではわからないとしか申し上げようがありません。

(3) 彼の立場なら知っているはずだ。隠しているとしか思えない。

(4) 風邪で行けないというのは口実としか思えない。

(5) この時刻になっても連絡がないのはおかしい。どこかで事故にあったとしか考えられない。

他の可能性を否定して、それだけだと強く主張するのに用いる。「言えない」「思えない」などの可能性を表す「V-れる」の否定形と共に使う。また(2)の「申し上げようがない」のように「V-ようがな

い」という形も使われる。

【しかし】

（1）手紙を出した。しかし返事は来なかった。

（2）そのニュースを聞いて皆泣いた。しかし私は涙が出なかった。

（3）われわれ医師団は患者の命を救うために最大限の努力をいたしました。が、しかしどうしても助けることができませんでした。

（4）A：先ほどのご意見ですが、モデルが現実とかなりずれているんじゃないでしょうか。
　　B：しかしですね、個々のケースにばかりとらわれていると、全体が見えなくなってくるということもありますし。

（5）A：社長、先方は今月末までに送金してくれと言ってますが…。
　　B：しかしだね、君、そう急に言われても困るんだよ。

（6）A：ずいぶん、ひどい雨ね。
　　B：しかしそれにしても佐藤さん、遅いね。

前半の文で予想されることと反対のことが後半につづくことを表す。書きことば的な表現。話しことばでは討論会、講演などの改まった場面で使われる。会話では相手の意見に反論するときの前置きとして、また（6）のように話題の転換にも使われる。

【しかしながら】

（1）彼の計画は思いつきとしてはすばらしいと思います。しかしながら、実現は不可能です。

（2）彼女のしたことは法律の上では決して許されない。しかしながら、人道的には同情の余地が十分ある。

「しかし」と同義だが、より書きことば的で、改まった会話や、文章で用いる。論理的に筋道を展開する文によく用いられる。

【しかたがない】

1 しかたがない

（1）電話の通じない所で、しかたがないから電報を打った。

（2）こんなことができないなんて、しかたがない人ね。

（3）行きたくないけど行くしか仕方がない。

（4）会えないなら引き返すよりしかたがない。

ほかに方法がないという意味。（3）（4）のように「V-るしかしかたがない」「V-るよりしかたがない」のかたちで使うこともある。（2）はどうしようもない人、困った人という意味。話しことばでは「しょうがない」とも言う。

2 …てしかたがない

→【てしかたがない】

【しかも】

[N／Na　でしかも]
[A-くてしかも]

（1）いいアパートを見つけた。部屋が広くて、南向きでしかも駅から歩いて５分だ。

（2）通訳の採用枠二名に対し百人近い応募があったが、その九割が女性で、しかも半数以上は留学経験者だった。

（3）若くて、きれいで、しかも性格がいいとなれば結婚したがる男はいくらでもいるだろう。

（4）彼女は仕事が速くて、しかも間違いが少ないので上司の信頼が厚い。

（5）A：会社の近くで安くておいしい店、知ってるんだって。
　　B：うん、しかもすいてるんだよ。

（6）この不況で会社は昇給なし、しかもボーナスは例年の半分になった。

ひとつの事について同じ傾向の条件をつけ加えていく表現。「そのうえ」の意味。

【しだい】

1 Nしだいだ

（1）するかしないかは、あなたしだいだ。

（2）世の中は金しだいでどうにでもなる。

（3）作物の出来具合いはこの夏の天気次第です。

（4）結婚した相手次第で人生が決ってしまうこともある。

「Nによっていろいろに変わる、左右される」という意味。（1）は「あなたが決めることだ」の意味。

2 R-しだい

（1）落し物が見つかりしだい、お知らせします。

（2）事件のくわしい経過がわかりしだい、番組のなかでお伝えします。

（3）資料が手に入り次第、すぐに公表するつもりだ。

（4）天候が回復し次第、出航します。

「…したらすぐに」の意味で、あることがらが実現したらすぐに、次の行為をすることを表す。前半の文は自然の経過で起こることを表す場合が多いが、後半の文は自然の経過で起こることには使えず、話し手の意志的な行為を表す文が

続く。

(誤) そのニュースが伝わり次第、暴動が起こるだろう。

また、過去のことには使えない。

(誤) 休みになりしだい、旅行に行った。

(2)のようにテレビのニュースなどでよく使われる。

3 V-る/V-た しだいだ

(1) とりあえずお知らせした次第です。

(2) ≪挨拶状≫今後ともよろしくご指導くださいますようお願い申し上げる次第でございます。

成行きからここに至った事情、わけなどを述べるのに使う。書きことば的。慣用的な言い方では形容詞が用いられることがある。

(例) こんなことになってしまい、まったくお恥ずかしい次第です。

4 こととしだいによって

(1) ことと次第によって、計画を大幅に変更しなければならなくなるかもしれない。

(2) ことと次第によっては、事件の当事者だけでなく責任者も罰することになる。

成行きでどうなるかわからない時、なにか重大なことを決める際の前置きとして使う。慣用的な表現。

【したがって】

(1) このあたりは非常に交通の便がよい。したがって地価が高い。

(2) その地方は道路があまり整備されていない。したがって初心者のドライバーは避けたほうがよい。

(3) ロケットの燃料タンクに重大な欠陥が見つかった。したがって打ち上げ計画は当分の間、延期せざるをえない。

(4) 台風の接近にともなって、沖縄地方は午後から暴風雨圏にはいる。したがって本日は休校とする。

前の文が理由となって導き出されることがらを論理的に後ろの文につなぐ表現。「それだから」の意味。書きことば的なかたい表現。

【じつは】

1 じつは

(1) 今まで黙っていたけれど、実は先月、会社を首になったんだ。

(2) A:実は急に結婚することになりまして。
B:あら、それはおめでとう。
A:それで申し訳ないんですが今月で退職させていただきたいんですが。

(3) 今まで知らなかったのだが、それをやったのは実は彼女だった。

(4) 不況で都会からふるさとに帰って仕事をさがす人が増えているという。それを聞いて安心するという人が実は多いのではないだろうか。

(5) A:井田さん、急にやせたね。どこか悪いところでもあるのかな。
B:実は私も前からそう思っていたのよ。

「本当は」の意味。真相・真実を明らかにするときに用いる。(1)は聞き手にとって意外なことを切り出すときの言い方。(2)のように依頼表現の前置きにも使う。(3)は話し手自身が、知らされた事実におどろいて言う言い方。(4)は表面ではわからないが、本当のところはという意味で使われる。(5)は相手のことばを受けて真相を打ち明ける言い方。

2 じつをいうと

(1) A:なんだか、元気がないな。
B:うん、実を言うと金がないんだ。もう少ししたら入るはずなんだけど。

(2) A:さっきの人、知っている人だったの。
B:実を言うと別れた女房なんだ。こんなところで会うとは思わなかったよ。

(3) A:このごろ、お子さんの成績がひどく落ちているんですが、お母さんに、なにか心あたりはありませんか。
B:先生、実を言いますと、この頃ほとんど家にいないんです。家に帰って来るのも何時なのか親もよく知らないような始末でして。

「打ち明けて言うと」の意味。「じつは」とほぼ同じように使えるが、依頼の前置きにはあまり使わず、わけを聞かれて(3)のように真相をながながと打ち明けるような時に使うことが多い。

3 じつのところ

(1) A:山口さん、また仕事中に寝てましたよ。
B:実のところ、僕も彼には困っているんだ、無断欠勤も多いし。

(2) A:石田選手、よくがんばりましたね。
B:実のところかれの活躍には本当におどろいているんだ。あまり期待していなかったから、よけいそう思うのかもしれないけどね。

(3) A:刑事さん、犯人は正子でしょうね。
B:いや、実のところわからないことが多すぎるんだ。

相手の話を受けて打ち明けるときに用いる。聞いたことに対する話し手の態度、状況説明などが続くことが多い。た

んなる事実を打ち明けるときや、依頼の前置きには使わない。

(誤) 実のところ結婚することになりました。

(正) 実は結婚することになりました。

【して】

→【て】

【しないで】

→【ないで】

【しなくて】

→【なくて】

【しはする】

[R-はする]

(1) 坂田さんはアルバイトに遅れはするが、ぜったいに休まない。

(2) かれは人前に行きはするが、だれともしゃべらない。

(3) 酔ってその男をなぐりはしたが、殺してはいない。

(4) だれも責めはしない。悪いのは私なのだから。

(5) そんなことをしてもだれも喜びはしない。かえって迷惑に思うだけだ。

動詞の連用形に付いて、その部分を取り立てるのに用いる。「Xしはするが、Y」のようにXの行為を強調しておいて、Yで違う側面を提示したり、(3)のように「は」で2つの行為を対比させて使うことが多い。かたい言い方。

【しまつだ】

[V-るしまつだ]

(1) 彼女は夫の欠点を延々と並べ上げ、あげくの果てには離婚すると言って泣き出す始末だった。

(2) 息子は大学の勉強は何の役にも立たないと言ってアルバイトに精を出し、この頃は中退して働きたいなどと言い出す始末だ。

(3) 一度相談にのってあげただけなのに、彼はあなただけが頼りだと言って、真夜中にでも電話をかけてくる始末だった。

動詞の辞書形に付いて、誰かの行為による困った状況や迷惑な状況が生じることを表す。前半でその状況に至るまでにどんなことがあったかを述べ、その結果としてその状況が起こったということを言うのに用いる。

次の「この始末だ」は慣用的な表現で、何か問題が起こったときに非難の気持ちを込めてそれを指し示すのに用いる。

(例) 山田はどうもこの頃学校に来ないと思ったらこの始末だ。バイクで人身事故を起こすような学生には、もう退学してもらうしかない。

【じゃあ】

「では2」のくだけた言い方。長く引き伸ばして「じゃあ」と言うこともある。

1 じゃ(あ) ＜推論＞

(1) A：風邪をひいて熱があるんですよ。
B：じゃあ、試合に出るのは無理ですね。

(2) A：急な用事が入っちゃって。
B：じゃあ、パーティーに来られないの?

→【では2】1

2 じゃ(あ) ＜態度表明＞

(1) A：先生、終わりました。
B：じゃあ、帰ってもいい。

(2) A：気分が悪いんです。
B：じゃあ、休みなさい。

→【では2】2

3 じゃ(あ) ＜転換＞

(1) じゃ、次の議題に入りましょう。

(2) じゃ、始めましょう。

(3) じゃ、今日の授業はこれで終わりにします。

(4) じゃあ、またね。

→【では2】3

【じゃない】

[N／Na じゃない]

(1) A：雨?
B：いや、雨じゃない。

(2) A：雨じゃない?
B：ええ、雨よ。

(3) あら、雨じゃない。せんたく物いれなくちゃ。

「ではない」のくだけた言い方。(1)は否定文で、「な」の部分が高く発音される。(2)は否定疑問文で上がりイントネーションになる。(3)は否定ではなく断定で、「じゃない」全体が下がりイントネーションになる。話しことば。男性も女性も使う。

→【ではない】

【じゃないか$_1$】

[N／Na／A／V じゃないか]

「ではないか1」のくだけた形で、話しことばの文末で主として男性が使う。女性は「じゃないの」「じゃない」の形を使うことが多い。「じゃん」はさらにくだけた言い方で、男女共に使う。丁寧形は「じゃないですか」「じゃありませんか」

→【ではないか1】

1 ...じゃないか ＜驚き・発見＞

(1) すごいじゃないか。大発見だね。

(2) なんだ、山田君じゃないか。どうしたんだ。こんな所で。

→【ではないか1】1

2 ...じゃないか ＜非難＞

(1) どうしたんだ。遅かったじゃないか。

(2) 約束は守ってくれなきゃ困るじ

ゃないか。

→【ではないか1】2

3 …じゃないか ＜確認＞

（1）ほら、覚えていないかな。同じクラスに加藤って子がいたじゃないか。

（2）A：郵便局どこ?
B：あそこに映画館があるじゃないか。あのとなりだよ。

→【ではないか1】3

4 V-ようじゃないか

（1）頑張って勝ち抜こうじゃないか。

（2）十分注意してやろうじゃないか。

「V-ようではないか」のくだけた言い方。

→【ではないか1】4

【じゃないか$_2$】

[N／Na （なん)じゃないか]
[A／V んじゃないか]

（1）隣、ひょっとして留守じゃないか。

（2）A：隣の家の様子、ちょっと変じゃないか。
B：そうね。ちょっと見て来る。

（3）A：この部屋、少しさむいんじゃないか。
B：そうね。暖房をいれましょう。

（4）ひょっとして、昼からは雨になるんじゃないか。

「ではないか2」のくだけた形。「じゃないか」は男性的な言い方で、女性は普通「じゃないの」「じゃない」を使う。

会話で上昇調で発音された場合は「あなたもそう思いませんか」と聞き手に自分の推測を確認する用法となる。独り言的な用法では、話し手の不確かな推測を表す。この場合は「(ん)じゃないかな／(ん)じゃないかしら」とも言いかえが可能。

→【ではないか1】4

【じゃないが】

[Nじゃないが]

（1）非難するわけじゃないけど、どうしてあなたの部屋はこんなに散らかっているの。

（2）悪口を言いたいわけじゃないけど、あの人、このごろ付き合いがわるいんだよ。

（3）疑うわけじゃありませんが、きのう1日どこにいたのか話してください。

（4）A：自慢じゃないが、息子が今年東大に入ってね。
B：あっ、それはおめでとうございます。

「…のつもりではないのだが」という意味で、次に来る表現をやわらげるための前置きとして用いる。(4)は慣用的な言い方。

【じゃないだろうか】

[N／Na （なん)じゃないだろうか]
[A／V んじゃないだろうか]

（1）もう帰ってしまったんじゃないだろうか。

（2）あいつはやる気がないんじゃないだろうか。

「ではないだろうか」の話しことば的表現。丁寧体は「(ん)じゃないでしょうか」。独り言的に言う場合は、話手の推測を表すが、会話では、それを聞き手に確認する意味になることが多い。

→【ではないだろうか】

【じゅう】

1 Nじゅう ＜空間＞

（1）学校中にうわさが広まった。

（2）国中の人がそのニュースを知っている。

（3）家中、大掃除をした。

（4）ふたごの転校生が教室に入ってくると、クラスじゅう、大騒ぎになった。

（5）サイレンの音でアパート中の住人が外にとびだした。

（6）そこいら中で風邪がはやっている。

場所、範囲を表す言葉と共に使い、「その範囲すべて」の意味を表す。(6)は「あちこち、いたるところで」の意味。

2 Nじゅう ＜時間＞

（1）一晩中起きている。

（2）一日中仕事をする。

（3）家の前は年中、道路工事をしている。

（4）午後中ずっと宣伝カーの音でうるさかった。

「時間」「期間」を表す言葉と共に使い、「その期間の間ずっと」の意味。ただし「午前中」の場合は「ごぜんちゅう」と言う。

【しゅんかん】

[Nのしゅんかん]
[V-たしゅんかん]

（1）立ち上がった瞬間に、家がぐらっと大きく揺れた。

（2）王子様が、眠っているお姫様にキスしたその瞬間、魔法がとけた。

（3）試験に落ちたことがわかった瞬間、目の前が真っ暗になって血の気が引いていくのが自分でもわかった。

（4）これが誕生の瞬間だ。

「ちょうどその時」の意味。名詞に付くことはまれ。話しことばでは「V-たとたん」が用いられる。

【じょう】

[Nじょう]

（1）子供にお金を与えるのは教育上よくない。

（2）サービス業という仕事上、人

が休みの時は休むわけにはいかない。

（３）安全上、作業中はヘルメットを必ずかぶること。

（４）経験上、練習を三日休むと体がついていかなくなる。

（５）立場上、その質問にはお答えできません。

（６）図書整理の都合上、当分の間閉館します。

「その見地からいうと」「その点で」という意味。（６）は「都合により」とも言える。かたい言い方。

【しょうがない】

1 しょうがない

（１）誰もやらないならしょうがない、私一人でもやる。

（２）散歩の途中で雨が降ってきた。しょうがないから、スーパーに入って雨の止むのを待った。

（３）ワインがない時はしょうがないからビールにします。

（４）A：おかしもらったけど、かびがはえてて、食べられないの。

B：しょうがないな、捨ててしまおう。

（５）しょうがない子ね、一人でトイレにも行けないの。

「しかたがない」「ほかに方法がない」という意味。（４）（５）のように困惑していることを表す言い方にもなる。「しょうがない」の縮約語。くだけた話しことば。

2 …てしょうがない

→【てしょうがない】

【ず】

文語の助動詞「ず」から。否定の意味を表す。書きことばや慣用的な表現でしか用いない。話しことばでは「なくて」「ないで」が使われる。「V-ない」の「ない」を「ず」に変えて作る。「する」は「せず」となる。

1 V-ず

（１）途中であきらめず、最後までがんばってください。

（２）１時間待っても雨は止まず、ぬれて帰った。

（３）出発前日まで予約が取れず、心配させられた。

（４）だれにきいても住所がわからず、困った。

「V-ないで」「V-なくて」という意味。（１）は単に文を並べて、「あきらめないで」という意味。（３）（４）のように、前の文と後ろの文の因果関係がはっきりしていて、理由を表す表現になることが多い。話しことばでも使うが、多少かたい、書きことば的表現。

2 …ず、…ず

[A-からず、A-からず]

[V-ず、V-ず]

（１）飲まず食わずで三日間も山中を歩きつづけた。

（２）その時、彼はあわてず騒がず一言「失礼しました」と言って部屋を出ていった。

（３）展覧会に出品されている作品はいずれも負けず劣らずすばらしい。

（４）独立した子供達とは、つかず離れずのいい関係だ。

（５）日本の５月は暑からず、寒からずちょうどいい気候です。

（６）客は多からず、少なからずほどほどだ。

「XでもないしYでもなくて」という意味を表す。（１）（２）（３）のように同じ様な意味の言葉を並べる場合と、（４）（５）（６）のように対照的な言葉を並べる場合とがある。（３）はいくつかを比べて「そのいずれもが同じようにすばらしい」、（４）は「ほどよい距離を保って」、（５）は「暑くなく、寒くなく」の意味。慣用句的な表現。他に「鳴かず飛ばず」など。

【すえに】

[Nのすえに]

[V-たすえに]

（１）今月のすえに、首相が訪中する。

（２）長時間の協議のすえに、やっと結論が出た。

（３）かれは三年の闘病生活の末に亡くなった。

（４）よく考えた末に決めたことです。

（５）大型トラックは１キロ暴走した末に、ようやく止まった。

「ある期間のおわりに」の意味。（１）の場合は単に期間のおわりを指すが、（２）以下のように「ある経過をたどったあとで最後に」の意味で使われることが多い。書きことば的。

【すぎない】

[N／Na／A／V　にすぎない]

（１）その件は責任者にきいてください。私は事務員にすぎませんので。

（２）彼は政治家ではなく、たんなる官僚に過ぎない。

（３）それが本当にあるかどうかは知りません。例として言っているに過ぎないんです。

（４）そんなに怒られるとは思ってもみなかった。からかったにすぎないのに。

「単に…だ」という意味。「あまり重要でない」という評価の気持ちが伴う。（１）は「責任ある地位にいるのではない、ただの事務員だ」、（３）は「例として言っているだけだ」の意味。

【すぎる】

[N／Na　すぎる]

[A-すぎる]

[R-すぎる]

1 …すぎる

（1）この役は思春期の役だから10歳では子供すぎて話にならない。

（2）下宿のおばさんは親切すぎてときどき迷惑なこともあります。

（3）彼はまじめすぎて、面白味に欠ける。

（4）このあたりの家は高すぎて、とても買えません。

（5）銭湯の湯は私にはあつすぎます。

（6）子供の目が悪くなったのはテレビを見すぎたせいだと思います。

（7）ゆうべ飲み過ぎて頭が痛い。

過度の状態を表す。

2 …すぎ

[R-すぎだ]

[R-すぎのN]

（1）太郎、遊びすぎですよ。もうちょっと勉強しなさい。

（2）働きすぎのお父さん、もっと子供と遊ぶ時間を作ってください。

（3）飲み過ぎにはこの薬がいいそうだ。

（4）テレビの見すぎで成績が下がってしまった。

（5）肥料は適度に与えてください。やりすぎはかえってよくありません。

過度の状態を表す。名詞として用いられる。

3 …ても…すぎることはない

（1）冬山登山は注意しても、し過ぎることはない。

（2）手紙の返事はどんなに早くても、早すぎることはない。

（3）親にはどんなに感謝してもしすぎることはないと思っています。

「何かをしても、それで充分だとはいえない」という意味。（1）は「注意すればするほどいい」、（2）は「早いほどいい」の意味。

【すぐ】

（1）すぐ来てください。

（2）会ってすぐに結婚を申し込んだ。

（3）空港に着いてすぐホテルに電話した。

（4）郵便局はすぐそこです。

（5）すぐ近くまで来ている。

時間、距離がとても短い様子を表す。時間の場合は「に」が付くこともある。

【すくなくとも】

（1）そこはちょっと遠いですよ。歩けば、すくなくとも20分はかかります。

（2）この町で部屋を借りれば、すくなくとも5万円はかかるでしょう。

（3）すごい人出だった。少なくとも三千人はいただろう。

（4）せっかく外食するんだから、そんなものじゃなくて、少なくとも、自分では作れないなと思えるぐらいの料理を食べようよ。

量や程度が最低限でもこれぐらいだ、という意味を表す。かなり多いという意味が含まれる。（1）（2）（3）のように「すくなくとも…は」や、（4）のように「すくなくとも…ぐらい（は）」の形が多い。また、（4）のように意志・願望の表現と共に使う場合は「せめて」と言いかえられる。話しことばで「すくなくても」と言う場合もある。

【すぐにでも】

（1）お急ぎならすぐにでもお届けいたします。

（2）お金があればすぐにでも国に帰りたい。

（3）そんなにやめたいなら、今すぐにでも退職金を払います。

（4）私がてんぷらのおいしい店をみつけたと言うと、かれはすぐにでも食べに行きたそうな感じだった。

「ただちに」「たちどころに」という意味。「帰りたい」のような欲求の表現などと共に使う。（4）のように「すぐに…しそうだ」の形でも使われる。

【ずくめ】

[Nずくめ]

（1）彼女はいつも黒ずくめのかっこうをしている。

（2）この頃なぜかいいことずくめだ。

（3）今日の夕食は、新鮮なお刺身やいただきもののロブスターなど、ごちそうずくめだった。

（4）毎日毎日残業ずくめで、このままだと自分がすり減っていきそうだ。

名詞に付いて、身の回りにあるのがそればかりであることを表す。「黒ずくめ」「いいことずくめ」「ごちそうずくめ」など、定型化した言い方で使うことが多く、「赤ずくめ」「本ずくめ」などは使えない。

【すこしも…ない】

（1）強くこすっているのに、すこしもきれいにならない。

（2）貯金がすこしもふえない。

否定表現を強めるときに使う。

【ずして】

[V-ずして]

（1）悪天候の中を飛行機が無事着陸すると、乗客の中から期せずして拍手がわき起こっ

た。
(2) 戦わずして負ける。
(3) 労せずして手に入れる。

「…しないで」の意味。(1)は「予期しなかったが」、(2)は「戦わないで」、(3)は「苦労しないで」の意。慣用的で、文語的な表現。

【ずじまいだ】

[V-ずじまいだ]

(1) 出張で香港へ行ったが、いそがしくて友だちには会わずじまいだった。
(2) せっかく買ったブーツも今年の冬は暖かくて使わずじまいだった。
(3) 夏休みのまえにたくさん本を借りたが、結局読まずじまいで、先生にしかられた。
(4) 旅行でお世話になった人たちに、お礼の手紙を出さずじまいではずかしい。

ある行為をしないで終わってしまうという意味。残念な気持ちを表すことが多い。

【ずつ】

[数量詞＋ずつ]

(1) 一人に3つずつキャンディーをあげましょう。
(2) 5人ずつでグループを作った。
(3) 雪が溶けて、少しずつ春が近づいてくる。
(4) いくらかずつでもお金を出し合って、焼けた寺の再建に協力しよう。
(5) 病人はわずかずつだが食べられるようになってきた。

「同じ量をそれぞれに」、または「だいたい同じ量をくりかえして」という意味を表す。(1)は「それぞれに3個」、(2)は「5人が1組で」、(5)は「毎回すこしだけ」の意味。

【ずとも】

[V-ずとも]

(1) そんな簡単なことぐらい聞かずともわかる。
(2) ≪昔話≫これこれそこの娘。泣かずともよい。わけを話してみなさい。
(3) あの方は体にさわらずとも病気がわかる名医だ。

「…しなくても」の意味。あとに「わかる」「いい」などの表現が続く。文語的な表現。

【すなわち】

(1) 彼は、1945年、すなわち、第二次世界大戦の終わった年に生まれた。
(2) この絵は、父の母親の父、すなわち私の曾祖父が描いたもの

である。
(3) 生まれによる差別、すなわち、だれの子供であるかということによる社会的差別は、どこの社会にも存在する。
(4) 敬語とは人間と人間の関係で使い分けることばである。すなわち、話し手と聞き手、および第三者との相互関係によっていろいろに言い分ける、その言葉の使い分けである。

語句や文を受けて、それと同じ意味内容をもつ別の語句や表現で言いかえるような場合に用いる。前の語句や表現を端的に表す語や、具体的例や補足的な説明を与える表現が後に続く。学術論文や講義・講演など、かたい書きことば的な表現で用いられ、話しことばでは「つまり」のほうがよく用いられる。

【ずに】

[V-ずに]

(1) よくかまずに食べると胃を悪くしますよ。
(2) 切手を貼らずに手紙を出してしまった。
(3) きのうはさいふを持たずに家を出て、昼ご飯も食べられなかった。
(4) ワープロの説明をよく読まずに使っている人は多いようだ。
(5) あきらめずに最後までがんばってください。
(6) 両親を事故で亡くしたあと、彼はだれの援助も受けずに大学を出た。

後ろに動詞の文を伴って、「…しない状態で…する」という意味を表す。書きことば。話しことばでは「…ないで」となる。

【ずにいる】

[V-ずにいる]

(1) 禁煙を始めたが、吸わずにいるとだんだんイライラしてくる。
(2) これでもう1ヶ月酒を飲まずにいることになる。
(3) 三日新聞を読まずにいると世の中のことがわからなくなる。
(4) わがままな彼が、なぜあんなひどい会社をやめずにいるのか不思議だ。

ある行為をしない状態でいることを表す。

【ずにおく】

[V-ずにおく]

(1) 父に電話がかかってきたが、疲れてよく寝ているようだったので起こさずにおいた。
(2) 彼女がショックを受けるとかわいそうだから、このことは当分言わずにおきましょう。
(3) あとでいるかもしれないと思っ

て、もらったお金は使わずにおいた。
（4）あした病院で検査を受けるなら、夕飯は食べずにおいたほうがいいんじゃないですか。

何かのために、ある行為をしないでおくことを表す。

【ずにすむ】

[V-ずにすむ]

（1）漢和辞典を買おうと思っていたら、友だちが古いのをくれたので買わずにすんだ。
（2）いい薬ができたので手術せずにすんだ。
（3）一生働かずにすんだらいいんだけれど、そういうわけにはいかない。
（4）いまちゃんとやっておけば、あとで後悔せずにすみますよ。
（5）安全装置が作動したので大事故にならずにすんだ。

「予定していたことをしなくてもよくなる」「予測されることが避けられる」という意味。好ましくない事態が避けられることを表す。書きことば的。話しことばでは「…ないですむ」となる。

【ずにはいられない】

[V-ずにはいられない]

（1）この本を読むと、誰でも感動せずにはいられないだろう。
（2）彼女の気持ちを思うと、自分のしたことを悔やまずにはいられない。
（3）彼女の美しさには誰でも魅了されずにはいられなかった。
（4）会社でのストレスを解消するために酒を飲まずにはいられない。
（5）その冗談にはどんなまじめな人も笑わずにはいられないだろう。

意志の力では押さえられずに自然にそうしてしまうという意味を表す。書きことば的。話しことばでは「…ないではいられない」となる。

【ずにはおかない】

[V-ずにはおかない]

（1）この本は読む人を感動させずにはおかない。
（2）彼の言動は皆を怒らせずにはおかない。
（3）今のような政治情勢では国民に不信感を与えずにはおかないだろう。
（4）両大国の争いは世界中を巻込まずにはおかない。

本人の意志にはかかわらず、そのような状態や行動が引き起こされるという意味を表す。感情の変化や争いごとの発生などの自発的作用について言うことが多い。

【ずにはすまない】

[V-ずにはすまない]

（1）あいつはこの頃怠けてばかりだ。一言言わずにはすまない。
（2）親せきみんなが出席するのなら、うちも行かずにはすまないだろう。
（3）意図したわけではなかったとは言え、それだけ彼女を傷つけてしまったのなら、謝らずにはすまないのではないか。

「しないわけにはいかない」「しないではすまされない」の意味を表す。かたい言い方。

【すまない】

→【ずにはすまない】

【すむ】

1 …すむ

[Nですむ]

[V-てすむ]

（1）もっと費用がかかると思ったが2万円ですんだ。
（2）用事は電話ですんだ。
（3）金ですむなら、いくらでも出します。
（4）ガラスを割ってしまったが、あやまっただけで済んだ。
（5）あやまってすむこととすまないことがある。

本来は「終わる」の意味だが、「それで充分だ、それ以上の面倒なことをしなくてよかった」という意味。

2 V-ないで／V-ずに　すむ

（1）バスがすぐに来たので待たないですんだ。
（2）バスがすぐに来たので待たずにすんだ。
（3）電話で話がついたので行かずにすんだ。
（4）古い自転車をもらったので、買わないで済んだ。

「予定していたことをしなくてもよくなる」「予測されることが避けられる」という意味。好ましくない事態が避けられることを表す。

3 …すむことではない

[Nですむことではない]

[V-てすむことではない]

（1）大事な書類をなくしてしまうなんて、謝ってすむことではない。
（2）少数意見だと片付けてすむことではない。
（3）この問題は補償金で済むことではない。心からの謝罪が必要だ。

「なにかをすることで問題を終わらせることは出来ない、それをするだけでは充分ではない」という意味を表す。（1）は「謝ってもつぐなえない／取り返しがつかない」、（2）は「少数意見だといって無視することはできない」の意味。

【すら】

名詞や「名詞＋助詞」に付く。主格に付く時は、「ですら」になることが多い。かたい書きことば的な表現。

1 N（＋助詞）すら

（1）そんなことは子供ですら知っている。
（2）むかし世話になった人の名前すら忘れてしまった。
（3）この寒さで、あの元気な加藤さんですら風邪を引いている。
（4）大企業はもちろんのこと、この辺の町工場ですら週休2日だという。
（5）こういった確執はどんなにうまくいっている親子の間にすら存在する。

「さえ」の意味。一つの例をとりあげて、それでさえこうだということを述べ、その他はもちろんのことだという含みを持たせる。（1）は「ふつうのひとはもちろんのこと、子供でも知っている」の意味。

2 N（＋助詞）すら…ない

（1）あまりに重すぎて、持ち上げることすらできない。
（2）そのことは親にすら言っていない。
（3）仕事が忙しくて日曜日すら休めない。
（4）40度の熱が出ている時ですら病院に行かなかった。
（5）入社してもう20年近くたったが、まだ課長ですらない。

「さえ…ない」の意味。極端な例を出し、それができないことを強調する言い方。（3）は「ほかの曜日はもちろん休めないし、皆が休む日曜日も休めない」の意味。

【する】

1 数量詞＋する

（1）バンコクまで往復でいくらぐらいしますか。
（2）その旅館は一泊5万円もする。
（3）30分ほどして戻りますのでお待ちください。
（4）この球根は植えて半年したら芽がでます。
（5）少ししてから出かけましょう。
（6）こんな建て方では10年しないうちに壊れる。

時間の経過、かかる費用を表す。時間の場合は「たつ」、費用の場合は「かかる」と言いかえられる。

2 副詞＋する

（1）赤ちゃんの肌はすべすべしている。
（2）ほこりで机の上がざらざらしている。
（3）この料理は味がさっぱりしている。
（4）息子は体つきががっしりしている。
（5）休日はみんなのんびりとしている。
（6）なかなかしっかりしたよい青年だ。

「…している」や「…したN」の形で用いて、ある性質をもつことやある様子を示すことを表す。

3 …する

[N／Na　にする]
[A-くする]
[V-ようにする]

（1）子供を医者にしたがる親が多い。
（2）部屋をきれいにしなさい。
（3）冷たくするともっとおいしいですよ。
（4）この食品はいそがしい人のためにすぐに食べられるようにしてあります。

対象に働きかけて変化させることを表す。「なる」がそのもの自体の自然な変化を表すのに対し、「する」は働きかける人が存在する意図的な変化を表す。

→【ように3】5

4 Nがする

（1）台所からいいにおいがしてきた。
（2）このサラダは変な味がする。
（3）古いピアノはひどい音がして、使い物にならない。
（4）外に出ると冷たい風が吹いていて、寒気がした。
（5）その動物は小さくて柔らかく、まるでぬいぐるみのような感じがした。
（6）彼とはうまくやっていけないような気がする。
（7）今朝から吐き気がして何も食べられない。
（8）この肉料理にはふしぎな香りがするスパイスが使ってある。

におい、かおり、味、音、感じ、気、寒気、吐き気などの名詞に付いて、その感覚、知覚を表す。

5 …とする

（1）来週は休講とする。
（2）一応60点を合格とします。

→【とする2】

6 …にする

[Nにする]
[Vことにする]

（1）A：何になさいますか。
　　B：コーヒーにします。
（2）今度のキャプテンは西田さんにしよう。
（3）かぜがよくならないので旅行は止めることにします。
（4）事故がこわいので飛行機には乗らないことにしています。

「決める」という意味。次のように「N＋助詞」が使われることもある。
（例）会議は5時からにします。

7 …ものとする　→【ものとする】

8 Nをする

a N(を)する

(1) 午後は買い物をするつもりだ。

(2) 日曜日には妻と散歩をしたりテニスをしたりする。

(3) 昔はよくダンスをしたものだ。

(4) いたずらをすると叱られるよ。

(5) ころんで足にけがをした。

(6) せきをしているので風邪をひいたのでしょう。

動作や作用を表す名詞に付いて動詞を作るのに使う。和語に付く例も少なくないが、漢語や外来語の名詞に付いて動詞を作る場合が多い。

b Nをする ＜外見＞

(1) きれいな色をしたネクタイをもらった。

(2) その建物は三角形のおもしろい形をしている。

(3) 見舞いに行ったら、かれはとても苦しそうな様子をしていたのでつらかった。

(4) それは人間の姿をした神々の物語だ。

(5) みすぼらしい格好をした男が訪ねてきた。

(6) この仏像はとてもやさしそうな顔をしている。

「Nをしている」「Nをした N」のように使う。色、形、様子、姿、かっこう、顔など視覚的にとらえられるものを表す言い方。

c Nをする ＜職業＞

(1) 彼は教師をしている。

(2) ベビー・シッターをしてくれる人を探しています。

(3) 社長をしているおじの紹介で就職した。

(4) 母は前は主婦だったが今は薬剤師をしている。

「職業名＋をしている」の形で用いて、「その仕事についている」という意味を表す。

d Nをする ＜装身＞

(1) あの赤いネクタイをした人が森さんです。

(2) あの人はいつもイヤリングをしている。

(3) 手袋をしたままで失礼します。

(4) あっ、今日は時計をしてくるのを忘れた。

(5) このごろ風邪をひいてもマスクをする人はいませんね。

ネクタイ、時計、指輪などにつけて、それを身につけていることを表す。状態を言うときは(2)のように「している」の形で使う。

9 NをNにする

(1) 本をまくらにして昼寝した。

(2) スカーフをテーブルクロスにして使っています。

(3) 客間を子どもの勉強部屋にした。

あるものを別の用途で使うという意味。

10 おR-する

(1) ここでお待ちします。

(2) お荷物お持ちしましょうか。

→【お…する】

11 V-ようにする

(1) 必ず連絡をとるようにする。

(2) 朝寝坊しないようにしよう。

→【ように3】5

【せい】

[Nのせい]

[Naなせい]

[A/V せい]

1 …せい

a …せいで

(1) わがままな母親のせいで、彼女は結婚が遅れた。

(2) 3人が遅刻したせいで、みんな新幹線に乗れなかった。

(3) とうとう事業に失敗した。しかし誰のせいでもない、責任はこの私にある。

(4) 熱帯夜が続いているせいで、電気の消費量はうなぎのぼりだという。

よくないことが生じたことの原因や責任の所在を表すのに用いる。「…ので」や「…ために」に言いかえられることが多い。後半には、その原因から生じたよくない事態を表す表現が続く。(1)は「母親がわがままだったので」、(4)は「暑い夜が続いているために」の意味。

b …のは…せいだ

(1) こんなに海が汚れたのはリゾート開発規制をしなかった県のせいだ。

(2) 目が悪くなったのはテレビを見すぎたせいだ。

(3) 暮しがよくならないのは政府のせいだ。

(4) 夜眠れないのは騒音のせいだ。

好ましくないことがらを先に述べて、それが起こった原因がなんであるのかを述べるのに用いる。

c …せいにする

(1) A:あっ、雨。君が今日は降らないっていうから、かさ持ってこなかったのに。

　　B:わたしのせいにしないでよ。

(2) 学校は責任をとりたくないので、その事故は生徒のせいにして公表しようとしない。

(3) 彼は仕事がうまくいった時は自分一人でしたように言い、うまくいかなかったら人のせいにするというような男だ。

(4) 彼女は協調性がないのを一人っ子で育ったせいにして、自分の非を認めようとしない。

よくない結果が起こったことの責任を一方的に決めつけることを表す。本当はそれ以外に責任があるという意を含むこと

が多い。

2 …せいか

(1) 歳のせいか、この頃疲れやすい。

(2) 家族が見舞いに来たせいか、おじいさんは食欲がでてきた。

(3) 春になったせいでしょうか、いくら寝ても眠くてたまりません。

(4) 年頃になったせいか、彼女は一段ときれいになった。

(5) 彼は童顔のせいか、もう30近いのに高校生のように見える。

(6) 気のせいか、このごろ少し新聞の字が読みにくくなったようだ。

原因、理由を表す言い方。「はっきりはいえないがこれこれの理由で」という意味。(1)は「歳を取ったためか」の意。その結果がよい場合、悪い場合どちらにも使う。

【せいぜい】

(1) 結婚記念日といっても、せいぜい夕食を外に食べに行くくらいで、たいしたことはしません。

(2) 忙しい会社で、年末でもせいぜい三日くらいしか休めません。

(3) 景気が今どうなのか知りません。私にわかることといえばせいぜい貯金の金利ぐらいです。

(4) ふるさとと言われて思い出すことといえばせいぜい秋祭りくらいですね。

(5) 給料が安くて、一人で暮らすのがせいぜいだ。

(6) たいしたおもてなしも出来ませんが、せいぜい楽しんでください。

(7) あまり期待していないけどせいぜい頑張って来い、とコーチに言われて出た試合で勝ってしまった。

「限度はあるが、出来る範囲で」という意味。「せいぜい…くらい」の形でよく使う。(5)のように「…が、せいぜいだ」の形もある。(6)(7)は「できるかぎり」の意で慣用的な表現。

【せずに】

→【ずに】

【せっかく】

1 せっかく…からには

(1) せっかく留学するからには、できる限り多くの知識を身につけて帰りたい。

(2) せっかく代表として選ばれたからには、全力を尽くさなければならない。

(3) せっかく休暇をとるからには、2日や3日でなく、10日ぐらいは休みたい。

「せっかくXからにはY」の形で、Xにはまれな機会や努力、骨折りを伴ってなされた行為などが示され、Yではそれを有効に利用するように話し手が望む気持ちが示される。Yの部分には意志、希望、助言などを表す表現が用いられる。

2 せっかく…けれども

(1) せっかくここまできたけれども、雨がひどくなってきたから引き返そう。

(2) せっかく皆さんに骨折っていただきましたが、実はこの計画は取りやめになりました。

(3) せっかく作ったのですが、喜んではもらえなかったようです。

「せっかくXけれどもY」「せっかくXがY」などの形で、Xにはまれな機会や努力、骨折りを伴ってなされた行為などが示され、Yではそれが無駄になることが示され、無駄になって残念だ、申し訳ないなどの話し手の気持ちが表される。

3 せっかく…のだから

(1) せっかく来たのだから夕飯を食べて行きなさい。

(2) せっかくここまで努力したのだから、最後までやり通しましょう。

(3) せっかくおしゃれをしたのだから、どこかいいレストランへ行きましょうよ。

「せっかくX(の)だからY」の形で、Xにはまれな機会や努力、骨折りを伴ってなされた行為などが示され、Yではそれを有効に利用するように話し手が望む気持ちが示される。Yの部分には意志、希望、依頼、勧誘、助言などを表す表現が用いられる。

4 せっかく…のだったら

(1) せっかくピアノを習うのだったら、少しくらい高くてもいい先生についた方がいい。

(2) せっかく京都まで行くのなら、奈良にも行ってみたらどうですか。

(3) せっかく音楽を楽しむのだったら、もうすこし音のいいステレオを買いたい。

「せっかくXのだったらY」「せっかくX(の)ならY」の形で、まれな機会にめぐまれたり努力して何かをする場合にはそれを有効に利用した方がよいと望む気持ちが示される。Yの部分には意志、希望、助言などを表す表現が用いられる。

5 せっかく …のに／…ても

(1) せっかく招待していただいたのに、伺えなくてすみません。

(2) せっかくいい天気なのに、かぜをひいてどこにも行けない。

(3) せっかくセーターを編んであげたのに、どうも気にいらないようだ。

(4) せっかく来ていただいても何もお話しすることはありません。

（5）今回のクイズには多数のおはがきをお寄せいただきました。ただせっかくお送りいただきましても、締切日をすぎておりますものは抽選できませんのでご了承ください。

「せっかくXのにY」「せっかくXてもY」の形で、「せっかく…けれども」と同じ意味を表す。「…のに」は確定したことがら、「…ても」は仮定的なことがらとしてXを示している。

6 せっかくのN

（1）せっかくの日曜日なのに、一日中、雨が降っている。

（2）せっかくのチャンスを逃してしまった。

（3）せっかくの努力が水の泡になってしまった。

（4）せっかくのごちそうなのだから、残さないで全部食べましょう。

恵まれた機会や努力を伴ってなされる行為などを表す名詞を用いて、それが有効に利用できないで残念だと悔やむ気持ちや、利用した方がよいと望む気持ちが表される。

7 せっかく＋連体修飾句＋N

（1）せっかく書いた原稿をなくしてしまった。

（2）せっかく覚えた英語も今は使う機会がない。

（3）せっかくきれいに咲いた花をだれかが取っていった。

（4）せっかく作った料理を誰も食べてくれない。

恵まれた機会や努力を伴ってなされる行為などを表し、それが有効に利用できないで残念だと悔やむ気持ちや、利用した方がよいと望む気持ちが表される。

8 せっかくですが

（1）A：もう遅いですから、泊まっていらしたらいかがですか。
　　B：せっかくですが、あしたは朝から用事がありますので。

（2）A：今晩一緒に食事しない?
　　B：せっかくだけど、今晩はちょっと都合が悪いんだ。

「せっかくですが」「せっかくだけど」などの形で、相手の申し出を断るときの前置きとして使う。

9 せっかくですから

（1）A：食事の準備がしてありますので、うちで召し上がってくださいよ。
　　B：せっかくですから、お言葉に甘えて、そうさせていただきます。

（2）せっかくだから、あなたの作ったケーキご馳走になっていくわ。

相手からの申し出を受けるときの前置きとして使う。

【せつな】

［V-たせつな］

（1）目を離したせつな、子供は波にのまれていった。

（2）あたり一面火の海だった。逃げてきた道をふりかえったそのせつな、建物が轟音をたててくずれおちた。

「短い間、瞬間」の意味。「瞬間」より使用範囲がせまく、文学的な意味あいが強い言い方。書きことば的。

【ぜひ】

（1）ぜひ一度遊びにきてください。

（2）≪引越しのあいさつ状≫お近くにおいでの節は是非ともお立ち寄りください。

（3）この大学を卒業する皆さんは、ぜひ世の中の役に立つような人間になってもらいたいものだと思います。

（4）友人から、引っ越したからぜひ遊びに来るようにという電話がかかってきた。

（5）彼女は有能だから結婚してもぜひ仕事を続けてほしい。

「どうしても」「かならず」という意味。依頼の表現「てください」、希望の表現「てほしい」などと共に使い、強い願望を表す。ふつう否定の希望表現と共には使わない。

（誤）ぜひ話さないでください。
（正）ぜったいに話さないで下さい。

また人間のかかわることにしか使えない。

（誤）あしたはぜひ晴れてほしい。
（正）あしたは何としても晴れてほしい。

単に意志の表現を強めるためには「かならず」などを使う。

（誤）ぜひそこに参ります。
（正）かならずそこに参ります。

しかし、依頼の返答としては「ぜひ行かせていただきます」のように使える。改まった言い方。

【せめて】

1 せめて

（1）夏はせめて一週間ぐらい休みがほしい。

（2）大学に入ったのだから、せめて教員免許ぐらい取っておこうと思う。

（3）小さくてもいい。せめて庭のある家に住みたい。

（4）せめてあと三日あれば、もうちょっといい作品が出せるのだが。

（5）あしたが無理なら、せめてあさってぐらいまでに金を返してほしい。

「不十分だがすくなくともそれぐらいは」の意味。意志、願望の表現が続く。「せめて…ぐらいは」の形で使うことが多い。（1）は「長い休みは無理だけど、1週間

ぐらいはほしい」の意味。

2 せめて…だけでも

（1）せめて一晩だけでも泊めてもらえませんか。

（2）忙しいのはわかっているけど、せめて日曜日だけでも子供と遊んでやってよ。

（3）うちは子供に継がせるような財産はなにもないので、せめて教育だけでもと思って無理をして大学へやっているのです。

（4）両親を早くなくして、苦労しました。せめて母親だけでも生きていてくれたらと思います。

「不十分だがすくなくともそれぐらいは」の意味。（1）は「一晩だけでかまわないから」の意。

3 せめて…なりとも

（1）せめて一目なりとも子供に会いたいものだ。

（2）せめて一晩なりとも部屋を貸してはいただけないでしょうか。

「せめて…だけでも」とおなじ意味。文語的な表現。

4 せめてものN

（1）ひどい事故だったが、死者が出なかったのがせめてもの救いだ。

（2）パスポートをとられなかったのが、せめてものなぐさめだ。

（3）せめてものお礼のしるしにこれを受け取ってください。

よりひどいことに比べれば、この程度でよかったという意味。Nに来るものは「救い」「なぐさめ」など限られている。（3）は「充分とは言えないがお礼として」という意味。慣用句的な表現。

【せよ】

→【にせよ】

【せられたい】

［Nせられたい］

［R-られたい］

（1）上記三名の者ただちに出頭せられたい。

（2）何等かの変更がある場合は、すぐに届出られたい。

（3）心当たりの方は係まで申し出られたい。

役所の文書で「しなさい」という命令を表す言い方。文語的なかたい表現。

【せる】

→【させる】

【ぜんぜん…ない】

（1）テレビ、消そう。ぜんぜんおもしろくない。

（2）なんだ、これ。ぜんぜんおいしくないぞ。塩が足りなかったかな。

（3）あの人、きょうはどうしたんだろう。全然しゃべらないね。

（4）A：どう、勉強進んでる?
　　B：だめ、だめ、全然だめ。

否定表現を伴って否定の意を強めるとき使う。話しことば。最近はくだけた言い方で、否定を伴わない「ぜんぜんいい」のような言い方をすることもある。

【そう…ない】

（1）夕食はそうおいしくなかったが全部食べた。

（2）日本語はそうむずかしくないと思う。

（3）松子は明るい感じの子でしたが、クラスではそう目立たない生徒でした。

（4）このあたりでは雪で学校が休みになるのはそうめずらしいことではない。

「それほど、そんなに…ない」という意味。

【そういえば】

（1）A：なんだか今夜はしずかね。
　　B：そういえばいつものカラオケがきこえないね。

（2）A：おなかがすいてない?
　　B：そういえば朝から何もたべてないね。

（3）A：山田、今日のゼミ休んでたけど風邪かな。
　　B：そういえば先週から見かけないな。

（4）A：坂田さんの家に何度電話しても通じないんだけど、どうしたのかしら。
　　B：そういえば、火曜から旅行に行くって言ってたわよ。

（5）きょうは4月1日か。そういえば去年のいまごろはイギリスだったなあ。

（6）もうじき春休みか。そういえばいとこが遊びに来るって言ってたなあ。

それまでの話の内容に関連する何かを思い出したり、気がついたりしたことを表すときに使う。相手の話を受けて使うことが多いが、（5）（6）のように自分に問う形でも使う。話しことば。

【そうしたら】

前の文と後の文を時間的な順序でつなぐ用法。さらにくだけた言い方に「そしたら」がある。

1 そうしたら <未来>

（1）娘は大学に入ったら下宿すると言っている。そうしたら、家の中が静かになるだろう。

（2）ここには木を植えて、ベンチを置こう。そうしたら、いい憩いの場所ができるだろう。

（3）彼の店はもうすぐ開店するらしい。そうしたら、わたしも行ってみよう。

（4）毎日30分だけ練習しなさい。そうしたら見違えるほど上達するでしょう。

計画などを述べた文の後につづけ、それによって将来起こる結果について述べるのに用いる。

2 そうしたら ＜過去＞

（1）暑いので窓を開けた。そうしたら大きなガが飛び込んで来た。

（2）忘れ物をとりに夕方学校へ行った。そうしたらもう正門が閉まっていた。

（3）ふらっとデパートに入ってみた。そうしたらちょうどバーゲンセールをしていた。

（4）前にはだぶだぶだったズボンをはいてみた。そうしたらちょうどいい大きさになっていた。

（5）試験のあと、参考書を開いてみた。そうしたら、全く同じ問題がのっていた。

ある出来事、行為をきっかけに起こった過去の出来事を述べるのに用いる。新しい発見などを述べることが多い。「そして」と違い、前の文で起こったことを受けて、自分の行為、意志とは無関係なこと、新しく起こったこと、事実の発見などが続く。自分の意志でおこなう行為が続くときは使えない。くだけた話しことば。

→【たら1】3 ＜確定条件＞

（誤）デパートへ行った。そうしたら買物をした。

（正）デパートへ行った。そして買物をした。

【そうして】

1 そうして ＜列挙＞

（1）好きな所。雑踏の中、港、遊園地、そうして、旅立つ前の空港。

（2）おもしろくて、そうして人の役に立つことをしたい。

ものごとを列挙したり、つけ加えたりするのに用いる。だいたい、「そして」と同じ。「そうして」を用いると、思い入れが強くなる。この用法では一般に「そして」の方がよく使われる。

2 そうして ＜継起＞

（1）旅行にもって行く物を全部再点検した。そうして、やっと安心した。

（2）状況を説明する言葉をじっくり考えた。そうして、彼に電話した。

（3）次に会う時間と場所、連絡の方法などを決めた。そうして、散会した。

前に述べたことがらを受けて、次に何かが起こるということを表す。ひとつづきの出来事を述べる中で、最終的に到達したことを示すという用い方が多い。「そして」でだいたい言いかえられる。

【そうすると】

1 そうすると ＜きっかけ＞

（1）ビルのまわりを回ってみた。そうすると、ひとつだけ電気のついている窓があった。

（2）切符はまとめて20人分予約することにした。そうすると、少し割り引きがあって助かるのだ。

（3）テニスの練習は土曜日の朝することにしよう。そうすると、土曜日の午後は、時間ができる。

前の出来事をきっかけとして、後の出来事が生じる、または、あとの出来事に気付くことを表す。「そうすると」のあとでは、話し手の意志で行う行為を表すことはできない。

（誤）20人以上予約して下さい。そうすると割引きしましょう。

また、後続の文が前の出来事についての解釈を表すことも多い。

2 そうすると ＜帰結＞

（1）A：ホテルを出るのが5時で、新幹線に乗るのが6時です。
　　B：そうすると、買い物の時間がなくなりますよ。

（2）A：お客の数が百から二百に増えそうなんですが。
　　B：そうすると、この会場ではできなくなりますね。

（3）A：パスポートはおととし取りました
　　B：そうすると、来年はまだ大丈夫ですね。

前の話し手が述べたことを受けて、発言するときに使う。「そうすると」のあとに、相手の言ったことについての解釈、論理的な帰結などを述べる。「すると」とだいたい同じ。話しことば。

【そうだ1】

[N／Na だそうだ]
[A／V そうだ]

（1）あの人は留学生ではなくて技術研修生だそうだ。

（2）今年の冬は暖かいそうだ。

（3）昔はこのあたりは海だったそうだ。

（4）そのコンサートには1万人の若者がつめかけたそうだ。

（5）米が値上がりしているそうだ。

（6）新聞によると今年は交通事故の死者が激増しているそうだ。

（7）担当者の話によると新製品の開発に成功したそうだ。

（8）うわさでは大統領が辞任するそうだ。

（9）予報では台風は今夜半に紀伊半島に上陸するそうだ。

（10）パンフレットによるとこの寺は二百年前に建てられたのだそう

だ。

普通体の節に続いて、自分が直接得たことではなくどこかから入った伝聞情報だということを表す。否定や過去の形にはならない。

(誤) 今年の冬は寒いそうではない。
(正) 今年の冬は寒くないそうだ。
(誤) 去年の冬は寒いそうだった。
(正) 去年の冬は寒かったそうだ。

　新聞やうわさなど、情報源を表すときは、(6)〜(10)のように「...では」「...によると」などの表現を伴う。「みたいだ」「らしい」との違いについては【みたいだ】2を参照。

【そうだ2】

[Na そうだ]
[A-そうだ]
[R-そうだ]

ナ形容詞と同じ活用で、「そうにV」「そうなN」と活用する。否定形の場合、「Na そうではない」「A-そうではない」と言うことはできるが、「R-そうではない」という形はほとんど用いられない。代わりに「R-そうもない／そうにない／そうにもない」を用いる。

1 ...そうだ ＜様態＞

a ...そうだ

[Na そうだ]
[A-そうだ]

(1) その映画はおもしろそうだ。
(2) 彼女はいつもさびしそうだ。
(3) おいしそうなケーキが並んでいる。
(4) 今日は傘を持って行った方がよさそうだ。
(5) あの人はお金がなさそうだ。
(6) 久しぶりに彼に会ったが、あまり元気そうではなかった。
(7) 子供は人形をさも大事そうに箱の中にしまった。
(8) いかにも重そうな荷物を持っている。
(9) 彼は一見まじめそうだが実は相当な遊び人だ。
(10) このおもちゃはちょっと見たところ丈夫そうだが、使うとすぐに壊れてしまう。

話し手が見たり聞いたりしたりしたことから判断した様態を表す。(4)の「いい」は「よさそう」、(5)の「ない」は「なさそう」となる。(7)(8)のように「さも」「いかにも」などの副詞を伴って強調することがある。「きれいだ」「赤い」など、見ただけですぐに分かるものには使わないのが普通。

(誤) 彼女はきれいそうだ。
(正) 彼女はきれいに見える。

　また、(9)(10)のように「一見」「ちょっと見たところ」などを伴ったときは、実際にはそうではないという文が続くことが多い。

　「みたいだ」とのちがいについては【みたいだ】2を参照。

b ...そうにみえる

[Na そうにみえる]
[A-そうにみえる]

(1) 誕生パーティーで彼女はいかにもしあわせそうに見えた。

(2) 彼は若そうに見えるが来年は60才になる。
(3) なんだか気分が悪そうに見えますが大丈夫ですか。
(4) その問題はむずかしそうに見えたがやってみるとそうでもなかった。

外見からはそういうふうに見えるという意味。

c ...そうにしている

[Na そうにしている]
[A-そうにしている]

(1) 彼女はいつもはずかしそうにしている。
(2) 先生はお元気そうにしておられたので、安心しました。
(3) その人はコートも着ずに寒そうにしていた。
(4) その子はいやそうにして遊び場からひとり離れて座っていた。

感情や感覚を表す形容詞に付いて、そのような様子で動作をしているという意味を表す。「...そうだ」と言いかえられるが、何らかの動作をしているという意味は失われる。

2 R-そうだ ＜生起の可能性１＞

a R-そうだ

(1) 星が出ているから明日は天気になりそうだ。
(2) 今年は雨が多いから、桜はすぐに散ってしまいそうだ。
(3) 服のボタンがとれそうだ。
(4) 反対運動は全国に広がりそうな気配だ。
(5) 今日中に原稿が書けそうだ。
(6) 今夜は涼しいからぐっすり眠れそうだ。
(7) 暑くて死にそうだ。
(8) ジェット機の音がうるさくて、気が変になりそうだ。

「なる」「落ちる」などの意志を表さない動詞や「書ける」「眠れる」などの可能を表す「V-れる」に付いて、そのような出来事が起こる可能性が大きいという判断を表す。また、次のように「もうちょっとで」「今にも」などを伴って事態が切迫している感じを表すことがある。

(例) あの古い家はもうちょっとで倒れそうだ。
(例) その子は今にも泣き出しそうな顔をしていた。

　(7)(8)は程度がひどいことを比喩的に表す慣用的な言い方。

b R-そうになる

(1) 道が凍っていて、何度もころびそうになった。
(2) 車にぶつかりそうになって、あわてて道の端にとびのいた。
(3) びっくりして持っていたグラスを落としそうになった。
(4) 私には子供のころ犬にかまれそうになった記憶がある。
(5) 私には、くじけそうになるといつもはげましてくれる友がいる。

話し手のコントロールが及ばない現象が起こる直前の状況になる、という意味を表す。(1)～(4)のように過去のことがらについて述べることが多い。また、「あやうく」「あわや」などを伴って事態が切迫している感じを表すことがある。

(例) 山で遭難して、あやうく命を失いそうになった。

(1)(3)は「V-るところだ」に言いかえられる。

c R-そうもない
R-そうにない

(1) この本は売れそうもない。
(2) 仕事は明日までには終わりそうもない。
(3) 雨は夜に入っても止みそうになかった。
(4) 一人の力ではとうてい出来そうにもない。
(5) 民家はちょっとやそっとでは壊れそうもないほど頑丈な造りだった。
(6) 社長は歳をとってはいるが、元気だからなかなか辞めそうにもない。

「R-そうもない」「R-そうにない」「R-そうにもない」の形で、そのような出来事が起こる可能性が少ないという意味を表す。

3 R-そうだ ＜生起の可能性 2＞

(1) あの様子では二人はもうじき結婚しそうだ。
(2) 彼はもう10日も無断で休んでいる。どうも会社を辞めそうだ。
(3) 彼女は熱心にパンフレットを見ていたから、誘ったら会員になりそうだ。
(4) あんなに叱ったら、あの子は家出しそうな気がします。

第三者の意志的な行為を表す動詞に付いて、そのような出来事が起こる可能性が大きいという判断を表す。＜生起の可能性1＞の「そうだ」とは違って、話し手自身のことについては使わないのが普通。

(誤) 私は会社をやめそうだ。

4 R-てしまいそうだ

(1) おいしいから全部食べてしまいそうだ。
(2) 1度やめていたタバコをまた吸ってしまいそうだ。
(3) 警察のきびしい尋問を受けたら、組織の秘密をしゃべってしまいそうな気がする。

意志的な行為を表す動詞に付いて、意志に反してそうなるのではないかと恐れる気持ちを表す。自分自身の行為について述べることが多い。

【そこで】

1 そこで ＜理由＞

(1) 今度の事件ではかなりの被害が出ています。そこで、ひとつ皆さんにご相談があるのですが。

(2) 皆さんこの問題にはおおいに関心をお持ちのことと思います。そこで専門のお立場からご意見をお聞かせいただければと思うのですが、いかがでしょうか。
(3) 村ではだれ一人、荒れ地の開墾に賛成の者はいなかった。そこで役人はまずひとりの若者を選んでこの困難な事業に当たらせることにした。
(4) A：このあたりは開発が遅れてるな。
B：そこで、相談なんだが少し金を融資してもらえないかな。

理由を表す。ある事情を前提に、改まって次に何かを提案するときなどに使う。改まった言い方。「それで」に言いかえることができる。

2 そこで ＜時点＞

(1) A：だんだんむずかしくなってきたし、タイ語の勉強やめようかな。
B：そこでやめちゃダメだよ。せっかく今までがんばってきたんだから。
(2) 仕掛け花火が炸裂し、そこで祭りは終わりになった。

「その時点で」という意味。場所ではなくある状況のもとでの判断を述べるときに使われる。

【そこへ】

(1) 友人のうわさ話をしていたら、そこへ当の本人が来てしまった。
(2) 酔っぱらい客がけんかを始めた。そこへバーテンが止めに入ったが、かえって騒ぎが大きくなってしまった。
(3) 集会は整然と行われていた。ところがそこへデモ隊が入ってきて場内は騒然となった。

「問題となっている場面へ」の意味。後には「来る」「入る」などの移動の動詞が来ることが多い。

【そこへいくと】

(1) A：うちの会社、残業が多くてね。先週はほとんど晩ご飯、家で食べていないんだ。
B：そりゃ、大変だな。そこへいくと僕のとこなんか楽なほうだ。
(2) お宅の坊っちゃん、よくお出来になるそうですね。そこへいくとうちの坊主なんかまったくだめですよ。

「それとくらべると」の意。比較の表現が続くことが多い。話しことば。

【そしたら】

（1）きのう映画を見に行ったのよ。そしたらばったり高田さんに会っちゃって。

（2）一日に 30 分だけ練習しなさい。そしたら、上手になりますよ。

「そうしたら」をより話しことば的にした表現。文章では普通用いない。

→【そうしたら】

【そして】

1 そして ＜並立＞

（1）今回の旅行ではスペイン、イタリアそしてフランスと、おもに南ヨーロッパを中心に回った。

（2）リーダーには指導力、判断力そして決断力が欠かせない。

（3）おみやげは小さくて、そして軽いものがいい。

（4）この病気には、甘いもの、あぶらっこいもの、そしてアルコールがよくない。

ものごとを並べ上げ、つけ加えるのに使う。「それに」とだいたい同じだが、「そして」のほうが書きことば的。

2 そして ＜継起＞

（1）観客は一人帰り、二人帰り、そして最後にはだれもいなくなってしまった。

（2）山間部のこの地方では、刈り入れが終わると短い秋が去り、そして厳しい冬がやってくるのだ。

（3）彼はその日、部下にすべてを打ち明けた。そして今後の対応を夜遅くまで話し合った。

出来事の時間的順序を表すのに使う。ひとつづきの出来事を述べる中で、最後の出来事を示すときに使われることが多い。やや書きことば的。

【その…その】

［そのNそのN］

（1）その日その日を無事に過ごせれば出世なんかしなくてもいいんです。

（2）その人その人で考え方がちがうのは当然だ。

（3）人生の大事なその時その時を写真におさめてある。

Nには同じ名詞を用いて「それぞれの」という意味を表す。

【そのうえ】

（1）あそこのレストランは高くて、そのうえまずい。

（2）彼の奥さんは美人だし、そのうえ料理もうまい。

（3）あの人にはすっかりお世話になった。住むところから、役所の手続きまで。そのうえアルバイトまで紹介してもらった。

（4）きのうは先生の家でごちそうになった。帰りにはおみやげまでもらい、そのうえ車で駅まで送っていただいた。

同じようなことを付け足していく表現。状況をさらにつけ加えてくわしく言うときの言い方。「それに」に言いかえることができる。

【そのうち】

（1）木村さんはそのうち来ると思います。

（2）そのうち雨もやむだろうから、そうしたら出かけよう。

（3）あんなに毎日遅くまで仕事していたら、そのうち過労で倒れるんじゃないだろうか。

（4）A：また一緒に食事に行こうよ。

B：ええ、そのうちにね。

「今からあまり時間がたたないうちに」という意味を表す。話しことば的。書ことば的な表現に「いずれ」がある。「そのうちに」とも言う。

【そのくせ】

（1）彼は味にうるさく、文句が多い。そのくせ自分ではまったく料理ができない。

（2）妻は寒いときは体があたたまるからたまご酒を飲めとかいろいろ言うが、そのくせ自分はよくかぜをひく。

（3）この辺は雪が多いが、そのくせ時々水不足になる。

「それなのに」の意味。非難する気持ちがあるときに使う。くだけた話しことば。

→【くせ】3

【そのもの】

1 Nそのもの

（1）機械そのものには問題はないが、ソフトに問題があるようだ。

（2）この本がつまらないんじゃない。読書そのものが好きになれないんだ。

「それ自体」という意味を表す。

2 Nそのものだ

（1）その合唱団は天使の歌声そのものだ。

（2）あの映画は彼の人生そのものだ。

何かに例えて、その通りだということを強調するのに使う。

【そばから】

［Vそばから］

（1）子供達は作るそばから食べてしまうので、作っても作ってもおいつかない。

（2）聞いたそばから忘れてしまう。

（3）読んだそばから抜けていって

何もおぼえていない。

「…するとすぐに」の意味。少し古めかしい言い方。

【そもそも】

1 そもそものN

(1) 父が株に手を出したことが、わが家の苦労のそもそもの始まりだった。

(2) それはそもそも姉が持ち出した話なのに、彼女はそのことをすっかり忘れてしまっている。

(3) そもそもことの起こりは、弟がうちを出て一人暮らしをすると言い出したことだった。

「始まり」「起こり」など開始を表す名詞を伴って、「あることがらの一番始め」という意味を表す。(3)の「ことの起こり」とは問題のある状況という意味で、「そもそも」をつけることでその状況の生じるきっかけを表している。

2 そもそも…というのは

(1) そもそも人の気持ちというのは他人にコントロールできるものではないのだから、人を思い通りにしようとしても無駄だ。

(2) そもそも子供というものは型にはまらない生き方を好むものだ。規則ずくめの学校を息苦しく感じるのは当然だ。

あるものの本質や基本的な性質を述べるのに使う。そのような本質を考慮していない行動や意見に対して反論する場合に多く使われる。

3 そもそも

(1) そもそもおまえが悪いんだよ。友達に自分の仕事をおしつけるなんて。

(2) そもそもあんたがこっちの道を行こうって言い出したのよ。文句言わないで、さっさと歩いてよ。

問題のある状況で、そのきっかけを作ったのはおまえだと非難する気持ちを表す。

【それが】

(1) 10時に会う約束だった。それが1時になっても現れないんだ。

(2) 10時に着くはずだった。それが道に迷ってひどく遅れてしまった。

(3) A：お父さんはお元気でしょうね。
B：それが、このごろどうも調子がよくないんですよ。

(4) A：ご主人相変わらず遅いの?
B：それが変なのよ、このごろ。夕食前にうちに帰ってくるの。

「ところが」「それなのに」の意味。(3)(4)は相手の予期していないようなことを述べるときの前置き。

【それから】

1 それから

(1) まず玉子の黄身だけよくかき混ぜて下さい。それからサラダ油と用意しておいた調味料を加え、混ぜ合わせます。

(2) となりの奥さんにはおとといマーケットで会いました。それから一度も見かけていません。

(3) 彼は高校時代にある事件のためひどく傷ついた。そしてそれから人を信じなくなってしまった。

(4) きのうは夕方一度家に帰って、それから家族で食事に出かけました。

(5) あの日のことはよく覚えています。改札口を出て、それから駅前の喫茶店に入ろうとしたときに男の人がぶつかってきたんです。

出来事が時間の順序を追って起こることを表す。「そのあと」という意味。話しことば的。(4)(5)のように動詞のテ形に続いて「V-て、それから」の形になることも多い。

(誤) 昨日は風邪をひいていました。それから学校を休みました。

理由を示すときは「それで」「それだから」などを使う。

2 NそれからN

(1) 夏休みにタイ、マレーシアそれからインドネシアの3カ国を回ってきた。

(2) カレーとミニサラダ、あっそれからコーヒーもお願いします。

(3) 初級のクラスは月曜日と水曜日、それから土曜日にやっています。

(4) 担当は山田さん、それから松本さん、この二人です。

(5) この時期の海外旅行としましては、香港それから台湾といったところが人気がありますね。

同じようなことがらを次々に数え上げていく時に使い、「そして」という意味を表す。名詞を挙げていく時は同時的で時間的順序はない。話しことば的。

【それこそ】

(1) 野球部は練習がきびしくて、君ではそれこそ三日ともたないよ。

(2) 育ち盛りの子供がたくさんいるので、毎日それこそ山のようなご飯を炊く。

あるたとえをあげて、程度がすごいことを強調する言い方。(1)は「三日以上は続かないくらい練習がきびしい」、(2)は「大量のご飯がいるくらい、みなよく食べる」の意味。話しことば的。

【それだけ】

（１）１年間努力して合格したのでそれだけ喜びも大きい。

（２）よく働いたらそれだけおなかもすく。

（３）あの仲の良かったふたりはとうとう別れてしまった。愛し合っていたからそれだけ憎しみも大きいようだ。

（４）練習を１日でもさぼるとそれだけ体が動かなくなる。

その程度に比例しての意味。

【それで】

（１）きのうの晩熱が出て、それで今日は学校を休んだ。

（２）小さい時に海でこわい思いをした。それで海が好きになれない。

（３）Ａ：来週から試験だ。
　　Ｂ：それで。
　　Ａ：しばらく遊べない。

（４）Ａ：昨日、突然いなかから親戚が出てきまして…。
　　Ｂ：それで。
　　Ａ：それで、あのう今日の残業は…。
　　Ｂ：かまわないよ、はやく帰りなさい。

理由を表す言い方。(３)や(４)のＢのように相手の話を促すときにも使う。話しことば。さらにくだけた言い方に「で」がある。

【それでこそ】

（１）彼は部下の失敗の責任をとって、社長の座を降りた。それでこそ真のリーダーと言える。

（２）Ａ：あの大学、卒業するのがむずかしいそうだよ。
　　Ｂ：それでこそ本当の大学だね。

（３）Ａ：今度のコピー機は、まったく人手がいらないそうだ。
　　Ｂ：それでこそオフィス革命と言えるね。今までのは人を忙しくさせるだけだったから。

文頭に用いて、「そういう理由だから」という意味を表す。あることがらや人物の資質を取り立てて、そういった理由でそのことがら(人物)を高く評価する場合に用いる。プラスの評価の場合にしか使わない。古めかしい言い方。会話では「それでこそ本当のＮだ。」のように決まり文句的に使われることが多い。

【それでは】

「では」の前に指示語の「それ」がついたもの。ほとんどの場合「では」で言いかえられるが、４の<否定的結果>の用法だけは異なり、必ず「それでは」の形で用いられる。やや改まった言い方で、くだけた話しことばでは「それじゃ(あ)」「じゃ(あ)」が用いられる。

１それでは　<推論>

（１）Ａ：私は1974年の卒業です。
　　Ｂ：それでは、私は２年後輩になります。

（２）Ａ：ようやく就職が内定しました。
　　Ｂ：それでは、ご両親もさぞお喜びのことでしょう。

→【では２】１

２それでは　<態度表明>

（１）Ａ：その人にはあった事がないんです。
　　Ｂ：それでは紹介してあげますよ。

（２）Ａ：準備できました。
　　Ｂ：それでは始めましょう。

→【では２】２

３それでは　<転換>

（１）それでは、次は天気予報です。

（２）それでは、皆さん、さようなら。

→【では２】３

４それでは　<否定的結果>

（１）Ａ：入学試験、多分60パーセントもとれなかったと思います。
　　Ｂ：それでは合格は無理だろう。

（２）Ａ：明日までには何とか出来上がると思いますが。
　　Ｂ：それでは、間に合わないんですよ。

（３）こんなに大変な仕事を彼女ひとりに任せているそうだが、それでは彼女があまりにも気の毒だ。

文や節を受けて、そのような場合には望ましくない結果となるといった意味を表す。後には「だめだ／無理だ／不可能だ」など、否定的な意味の表現が続く。

【それでも】

（１）いろいろ説明してもらったが、それでもまだ納得できない。

（２）試合は９時におわったが、それでもなお残ってさわいでいるファンがいた。

（３）葬式もすんだし、遺品の整理もついた。しかしそれでもまだ彼の死は信じられない。

（４）去年の冬に山で大けがをした。しかしそれでもまた山に登りたい。

「前に述べたことがあっても、しかし」という意味を表す。「まだ」、「なお」と共に使うことが多い。

【それどころか】

（１）Ａ：山の家はすずしくていい

でしょうね。

B：それどころか、寒くてすっかりかぜをひいてしまいました。

（2）A：彼、最近結婚したらしいね。

B：それどころか、もう赤ん坊が生まれたそうだよ。

相手が予想していることよりはるかに程度がはなはだしいことを述べるときに用いる。

【それとも】

1 NそれともN

（1）A：コーヒー？　それとも紅茶？

B：どちらでもけっこうです。

（2）A：あしたのパーティーには、何を着て行くつもり？　着物、それともドレス？

B：まだ、決めてないのよ。

（3）進学か、それとも就職かとずいぶん悩んだ。

「XそれともY」「XかそれともYか」の形で、XとYのどちらかという意味を表す。（1）のように、二つの可能性を示して、聞き手にどちらがよいか尋ねたり、（2）のように、聞き手の意向を尋ねるような場合に使う。次の例のように、相手に指示を与える場合には使えない。

（誤）黒それとも青のインクで書いてください。

（正）黒か青のインクで書いてください。

（3）のように、二つの可能性があって、どちらか迷っていたり、分からない場合に使う。この場合には、「あるいは」と言いかえることができる。

2 …それとも

（1）雨が降ってきましたが、どうしますか。行きますか。それとも延期しますか。

（2）洋室がよろしいですか、それとも和室の方がよろしいですか。

（3）A：散歩にでも行く？　それとも、映画でも見ようか。

B：そうね、久しぶりに映画もいいな。

（4）就職しようか、それとも進学しようかと迷っている。

（5）彼は、初めから来るつもりがなかったのか、それとも、急に気が変わったのか、約束の時間が過ぎても現れなかった。

（6）この手紙を読んで、彼女は喜んでくれるだろうか。それとも、軽蔑するだろうか。

「XそれともY」「XかそれともYか」の形で、XとYのどちらかという意味を表す。（1）～（3）は、二つの可能性を示して、聞き手にどちらがよいか尋ねる場合の例。（4）～（6）は、二つの可能性があって、どちらか迷っていたり、分からない場合の例。この場合には、「あるいは」と言いかえることができる。

【それなら】

（1）A：どこか山登りに行こうと思うんだけど。

B：それなら、日本アルプスがいいよ。

（2）A：パーティーにはリーさんの奥さんも来るそうだ。

B：それなら私も行きたいわ。

（3）これ以上の援助はできないといっているが、それならこちらにも考えがある。

相手の言ったことを受けて、そうだったら、その場合はという意味を表す。

→【なら1】

【それに】

1 …それにN

（1）部屋にはさいふとかぎ、それに手帳が残されていた。

（2）用意するものは紙、はさみ、色えんぴつそれに輪ゴムです。

（3）牛乳とそれにたまごも買ってきてね。

（4）A：いつがご都合がよろしいでしょうか。

B：そうですね、火曜と木曜それに金曜の午後もあいています。

（5）カレーにハンバーグ、それにライスもお願いします。

同じようなものを次々に付け加えるのに用いる。同じく付け加える言い方だが、「そのうえ」「しかも」には言いかえられない。

2 …それに

（1）このごろよく眠れない。それに時々めまいもする。

（2）そのアルバイトは楽だし、それに時間給もいい。

（3）高速バスは速いし、それになんといっても安い。

（4）去年の夏は雨が多かった。それに気温も低くて米も不作だった。

同じようなものを次々に付け加えるのに用いる。「そのうえ」「しかも」で言いかえられる。「そのうえ」「しかも」よりくだけた話しことば。

【それにしては】

（1）A：きのうほとんど寝てないんです。

B：それにしては元気がいいね。

（2）A：これは輸入の最高級品だよ。

B：それにしては安いのね。

（3）かれは一流の大学をでているそうだが、それにしては仕事ができない。

（4）アメリカに3年いたそうだが、それにしては英語が下手だ。

「前に述べたことから予想されることと比べて、それとは反対に」という意味。

【それにしても】

（1）A：予選ではあんなに強かったのにどうして決勝で負けたんでしょうね。
　　B：プレッシャーでしょう。
　　A：それにしてもひどい負け方ですね。

（2）A：坂本さん、あの高校に受かったんだってね。
　　B：必死で勉強してたらしいよ。
　　A：それにしてもすごいね。

（3）A：太郎、また背がのびたようよ。
　　B：それにしても、あいつはよく寝るなあ。

（4）A：またガソリン代、値上がりしたよ。
　　B：それにしても政治家はなにをしてるんだろう。われわれがこんなに苦しんでいるのに。

（5）≪A、Bが竹下を待っている≫
　　A：よく降りますね。
　　B：ええ、それにしても竹下さん遅いですね。

「そのことを考慮に入れても」という意味を表す。前に述べたことを一応認めながらも、それとは食い違うことがらを述べるのに使う。

【それはそうと】

（1）A：先生、レポートのしめきりはいつですか。
　　B：七月末だよ。それはそうと明日の演習の発表はだれだったかな。

（2）A：パン、買ってきたよ。
　　B：ありがとう。それはそうと安田さんに電話してくれた?

今の話題を一旦打ち切り、話題を変えるとき、前置きのように用いる。思い出したことなどを付け加えるのに使うことが多い。

【それはそれでいい】

（1）事故の責任は取ったというなら、それはそれでいい。しかし今後の補償をちゃんとしてくれなくては困る。

（2）A：部長、会議の資料そろいました。
　　B：それはそれでいいけど、事前の打ち合せのほうはどうなってるのかね。

そのことは了承するが、という前提で別のことを持ち出すときの前置きに使う。

【それはそれとして】

（1）万引が問題なのはわかります。しかしそれはそれとして、もう

少し広く青少年をとりまく社会環境について話し合いたいと思います。

（2）A：今月かなりの赤字になっているのは人件費がかかりすぎているからじゃないか。
　　B：まあそうだけど、それはそれとして、円高のことも考えないといけないんじゃないかな。

ことがらを一応了承して、すこし角度を変えて別のことがらを次に述べるのに用いる。

【それほど】

（1）それほど好きならあきらめずにやりなさい。

（2）A：嫌いなの?
　　B：いや、それほど嫌いなわけじゃないけど、あまり会いたくないんだ。

（3）A：テニス、ほんとにお上手ですね。
　　B：いや、それほどでもありませんよ。

「そんなに」の意味。（2）（3）のように否定の表現を伴って「あまり…ない」の意味を表すことが多い。

【それまでだ】

（1）人間、死んでしまえばそれまでだ。生きているうちにやりたいことをやろう。

（2）A：お土産、チョコレートにしましょうか。
　　B：チョコレートなんか食べてしまえばそれまでだ。なにか記念に残るものがいいよ。

（3）一度赤ん坊が目を覚ましたらもうそれまでだ。自分のことはなにもできない。

「それで終わりだ」「もうそれ以上はない」の意味。「…すれば」「…したら」と共に用い、（1）（2）のように「あとには何も残らないから、今なにかしておくほうがいい」という表現が続くことが多い。

【それゆえ】

（1）彼は自分の能力を過信していた。それゆえに人の忠告を聞かず失敗した。

（2）最近、腸チフスに感染して帰国する旅行者が増加している。それゆえ飲み水には十分注意されたい。

（3）我思う。ゆえに我あり。（デカルト）

（4）二つの辺が等しい。ゆえに、三角形ABCは二等辺三角形である。

文と文をつなぎ、原因と結果の関係を表す。文語的で改まった表現。数学や哲学などの論文で用いられることが多い。「それゆえに」、「ゆえに」とも言う。

【それを】

（1）あれほど考え直すように言ったのに君は会社をやめた。それを今になってもう一度雇ってくれだなんて、いったい何を考えてるんだ。

（2）A：もう一度やり直そうよ。

B：別れようって言ったのはあなたよ。それを今さらなによ。

（3）契約したのは1年前だ。それを今になって解約したいと言ってきても無理だ。

「それなのに」の意味で、前の状態と変わった、現在の状態について相手を非難する表現。「今さら」「今になって」などと共に使うことが多い。

【たい】

1 R-たい

（1）ああ、暑い。なにか冷たいものが飲みたい。

（2）A：子供はこんな時間までテレビを見てはいけません。

B：ぼく、はやく大人になりたいなあ。

（3）老後は暖かい所でのんびり暮らしたい。

（4）その町には若い頃の苦い思い出があって、二度と行きたくない。

（5）大学をやめたくはなかったのだが、どうしても学資が続かなかった。

（6）今は単身赴任だが、来年3月までになんとか家族そろって住むところを見つけたい。

（7）A：来月も続けて受講されますか。

B：続けたいんですが、ちょっと時間がなくて。

（8）A：将来はどうなさるんですか。

B：インテリア・デザインの会社で働きたいと思っていますが、まだわかりません。

話し手（疑問文の時は聞き手）の行為の実現にたいする欲求、強い願望を表す。形容詞と同じ活用。（1）のように対象を強調するときは、助詞「を」を「が」に変え、「…がR-たい」を使う。（7）（8）のように「-たいんです」「-たいと思っています」を用いて直接的な言い方をやわらげることも多い。また、丁寧さが必要とされる場面では「なにか飲みたいですか」のような直接的な欲求表現を避けて、「なにか飲みますか」「飲物はいかがですか」などの言い方をするのが普通。

第三者の欲求を述べるのに「…たい（です）」を使うことはできない。そのときは「…たがる」を使ったり「…らしい」「…ようだ」などの推量表現を使う。また、「…と言っています」などの引用の形で報告する。

（例）森田さんは古い車を売りたいらしい。

（例）息子は友達となにかあったのか、学校に行きたくないと言っています。

ただし、文を言い切る場合でなければ、使える場合もある。

（例）和夫はバイクを買いたくて、夏休みはずっとガソリンスタンドで働いていた。

（例）ツアーに参加したい人は15日までに申し込んで下さい。

2 R-たいんですが

（1）A：住民登録について聞きたいんですが、何番の窓口でしょうか。

B：3番へどうぞ。

（2）A：フェスティバルの日程が知りたいんですが。

B：そこにパンフレットがありますから、お持ち下さい。

（3）A：すみません、ちょっとお聞きしたいんですが。

B：はい、なんでしょう。

丁寧な依頼の前置きとして使う。

3 R-たがる

（1）自信がない人ほどいばりたがるものだ。

（2）入社後一年はやめたがる人が多いが、それを過ぎるとたいていはながく勤めるようだ。

→【たがる】

【だい】

くだけた会話で、男性が使う。

1 疑問表現＋だい

（1）いま何時だい？

（2）いつだい？　花子の入学式は。

（3）その手紙だれからだい？

（4）どうだい。元気かい。

（5）そんなことだれから聞いたんだい？

（6）何時にどこに集まればいいんだい？

（7）どうだい、すごいだろう。

（8）何だい、今頃やってきて。もう準備はぜんぶ終わったよ。

疑問詞や疑問詞を含む節などの疑問を表す表現に付いて、聞き手に対する問いかけの気持ちを表す。（7）や（8）のように問いかけや非難の気持ちをこめて感動詞的に使うこともある。話しことばで、少し古めかしい言い方。ふつうは大人の男性が用いる。

2 …だい。

[N／Na　だい]

（1）そんなことうそだい。

（2）いやだい。絶対教えてあげないよ。

（３） ぼくのはこれじゃないよ。それがぼくのだい。

男の子が強い断定の気持ちを表すのに用いる。

【たいがい】

（１） あの人は、たいがい９時ごろ来ます。８時ごろの時もありますが。

（２） 私は、朝食は、たいがいパンですね。

（３） そんなに遠くない所なら、たいがいは自転車を使うことにしています。

（４） 試験の成績が悪かった人は、たいがいの場合、追試を受けることになっています。

習慣的なことに付いて、頻度・確率が高いことを表す。「たいがいは」「たいがいの場合(は)」などというときもある。将来についての推測には使えない。

(誤) 今晩はたいがい７時には帰るでしょう。

(正) 今晩はおそらく７時には帰るでしょう。

また、「たいがいの人」「たいがいの町」のように「たいがいのN」の形で使う場合は、割合が高いことを表し、「大部分のN」で言いかえられる。「たいてい」とも言う。

【たいした】

1 たいしたNだ

（１） たいした人物だ。たった一人で今の事業をおこしたのだから。

（２） 中国語を１年習っただけであれだけ話せるんだから、たいしたものだ。

（３） あんなに大勢のお客さんに一人でフルコースの料理を作るなんて、たいした腕前だ。

（４） A：あの人、紹介状も持たずに社長に会いに行ったそうよ。

B：たいした度胸ね。

人の活躍ぶりなどがすばらしいという意味。Nには「もの」「人」「人物」「腕前」「度胸」「力量」などが来る。

2 たいしたNではない

（１） たいしたものではありませんが、おみやげにと思って買ってきました。

（２） 私にとってボーナスが多いか少ないかはたいした問題ではない。休みが取れるかどうかが問題だ。

（３） A：朝から病院って、なにか大変なことがあったんですか。

B：いや、たいしたことではありません。家のねこがちょっとけがをしただけです。

それほど重大なことではないという意味。

3 たいしたことはない

（１） A：お宅の奥さん、料理がお上手だそうですね。

B：いや、たいしたことはありませんよ。

（２） A：日本語、うまいですね。

B：いや、たいしたことはありません。敬語の使い方なんか、まだまだです。

（３） A：かぜの具合いはいかがですか。

B：おかげさまで、たいしたことはありません。

「それほど…ではない」と程度を否定するのに用いる。(１)(２)はほめられたときの応答で、謙遜する気持ちを表す。

【たいして…ない】

（１） きょうはたいして寒くないね。散歩にでも行こうか。

（２） あのすし屋は高すぎる。たいしてうまくもないのに。

（３） あの人、うまいねえ。大して練習しているわけでもないのに。

（４） 大して有能でもないのに、あの議員は勤続25年だそうだ。一体どんな人が投票しているんだろう。

後ろに否定をともなって、程度が高くないことを表す。(２)(３)(４)のように、「のに」と共に用いて、マイナスの評価を下すような文に使うことが多い。またたとえば(４)なら「大した能力でもないのに」「能力は大したことがないのに」のように言いかえることができる。

【だいたい】

（１） 大体のことは伝えておきます。

（２） だいたいわかりました。

（３） この本をひとりで日本語に翻訳するのはだいたい無理な話だ。

（４） こんな時間に電話するなんてだいたい非常識な人だ。

（５） A：あの子、いつも忘れものをするらしいの。

B：だいたいね、注意してやらない君が悪いんだよ。

（６） だいたいぼくよりあいつの方が給料がいいなんて変だよ。

（７） A：すみません、遅れまして。

B：だいたいだね、君は今まで時間通りに来たことがない。

(１)(２)はほとんど、大部分の意味。また、(３)(４)のように「無理」なこと、「非常識」なことなどについての話し手の判断を述べるときに非難、批判の気持ちをこめて使われる。また、(５)(６)(７)のように相手に文句や苦情をいったり、非難したりするときの前置きとしても使う。

【たいてい】

(1) あの人は、たいてい9時ごろ来ます。8時ごろの時もありますが。

(2) 私は、朝食は、たいていパンですね。

(3) そんなに遠くない所なら、たいていは自転車を使うことにしています。

(4) 試験の成績が悪かった人は、たいていの場合、追試を受けることになっています。

習慣的なことに付いて、頻度・確率が高いことを表す。将来についての推測には使えない。

(誤) 今晩はたいてい7時には帰るでしょう。

(正) 今晩はおそらく7時には帰るでしょう。

「たいていは」「たいていの場合(は)」などという場合もある。また、「たいていの人」「たいていの町」のように「たいていのN」の形で使う場合は、割合が高いことを表し、「大部分のN」で言いかえられる。「たいがい」とも言う。

【たいへん】

1 たいへん

(1) ≪教師が生徒に≫はい、たいへんよくできました。

(2) 先日は大変結構なものをちょうだいし、ありがとうございました。

程度がはなはだしいことを表す。ややかたい表現で、話しことばでは「とても」「すごく」のほうがよく使われる。

2 たいへんだ

(1) たいへんだ。さいふがない。

(2) 日曜日も仕事ですか。大変ですねえ。

(3) え? あそこのうち、子供が3人とも大学に行ってるの? 親は大変だ。

普通ではないこと、意外なことに対して、驚き・同情・感慨などを表す。

3 たいへんなN

(1) きのうはたいへんな雨でしたね。

(2) あのピアニストの才能は大変なものだ。

(3) 家族のうち二人も入院だ。大変なことになった。

普通でない、意外なものごとに対して使う。プラス評価にもマイナス評価にも使える。

【たかが】

1 たかがN

(1) かしこいと言ってもたかが子どもだ。言うことに、いちいち腹を立ててはいけないよ。

(2) たかが皿1枚に10万円も払うのはばかげている。

(3) たかが証明書一枚のために朝から二時間も待たされるなんて、ひどく能率の悪い役所だ。

(4) たかが1泊の旅行のためにどうしてそんな大きなカバンがいるのよ。

(5) A:ぼく、この服いやだ。
B:たかが服のことでなんだ。気に入らないなら家にいなさい。

「たかが」の付く名詞にたいして、たいしたことではないと低く評価する気持ちを表す。「ばからしい」「気にするな」などの価値判断の表現が続く。「たかがNのために」「たかがNのことで」という形で使われることが多い。

2 たかが…ぐらいで

[たかが N/A/V ぐらいで]
[たかが N/Na なぐらいで]

(1) たかが風邪ぐらいで学校を休まなくてもよい。

(2) たかが試験に失敗したぐらいでくよくよすることはない。

(3) たかが絵画展に入選したぐらいでこんなに祝っていただくのはなんだか恥ずかしいです。

(4) たかが旅さきの安いおみやげぐらいで、そんなにお礼をいっていただくと困ります。

「こんなに小さいことのために」という意味。「そのことのために…する必要はない、気にしないでよい」と言うときに使う。

【たかだか】

(1) あれはそんなに高くないと思うよ。たかだか3000円ぐらいのもんだろう。

(2) 今度の出張はそんなに長くならないでしょう。のびたとしても、たかだか一週間程度のものだと思います。

(3) ちょっとぐらい遅刻してもしかられないよ。あの先生なら、たかだか「これから気をつけてください」と言う程度だと思うよ。

(4) 長生きしたとしてもたかだか90年の人生だ。私は、一瞬一瞬が生の充実感で満たされているような、そんな人生を送りたいと思っている。

数量・程度などを、余裕を見て大きめに見積もっても、そんなに大したものにはならないだろう、というような推測をおこなう時に使う。「ぐらい」「程度」などとともに使うことが多い。推測でなく、話し手がそのことを事実として扱う場合は使えない。

(誤) これは安かったですよ。たかだか2000円でした。

(正) たった2000円でした。

【だから】

丁寧な形に「ですから」がある。

1 だから ＜帰結＞

（1）踏切で事故があった。だから、学校に遅刻してしまった。

（2）部屋の電気がついている。だから、もう帰って来ているはずだ。

（3）時間がありません。だから、急いでください。

（4）A：今夜は雨になるそうですね。

　　B：だから、私、傘をもって来ました。

前の文を原因・理由・根拠として、そこから結果として導き出される帰結を述べる場合に用いる。後の文には事実を述べる文ばかりでなく、推量、依頼、勧誘などさまざまなタイプの文が続く。（4）は会話の場合で、理由と帰結を二人が分担して述べるような用法。

2 だから …のだ／…わけだ

（1）A：ジャクソンさんは、小学生の時からもう10年も日本語を習っているそうです。

　　B：だから、あんなに日本語が上手なんですね。

（2）A：今日は吉田先生、休講だそうだよ。

　　B：ああ、そう。だからいくら待ってもだれも来ないわけか。

（3）やっぱり、不合格だったか。だから、もっと簡単な大学を受けろと言ったのだ。

ある事実が分かったときに、そこから導き出された当然の結果だと納得する気持ちを伴って現状を表すのに使う。会話の場合は、相手の発言で、原因・理由が明らかになったような場合に用いられ、文末には確認の「ね」や納得を表す「か」を伴う。「だから」の最初の音に強勢がおかれ強くやや長く発音される。

3 だから ＜質問＞

（1）A：みんなお前のためにこんなに遅くまで働いているんだ。

　　B：だから、どうだって言うの。

（2）A：できることは全部やったつもりです。

　　B：だから、何なんですか。

（3）A：たった一度会っただけだよ。

　　B：だから？

会話の用法で、「だから」の後に、質問が続く。因果関係を表すのではなく、聞き手の発言を受けた際に「だからあなたは何が言いたいのか」と、その発言意図をはっきりさせようと要求する用法。「それで」「で」で置きかえられる。（3）のように、上昇調で発音され、後半が省略されることもある。失礼なニュアンスがあるため、この用法では、文末が丁寧体であっても「ですから」は使用しにくい。

4 だから ＜主張＞

（1）A：ちょっと、どういうことですか。

　　B：別に特別のことはないよ。

　　A：だから、どういうことって聞いているんだよ。

（2）A：何で、電話してくれなかったの。

　　B：だから、時間がなかったんだ。

会話の用法。因果関係を表すのではなく、聞き手と意見の食い違いなどがある場合に、「私が言いたいのはこういうことなのだ」と、話し手の発言意図を聞き手に理解させようとするときに用いる。（2）は言い訳をする場合の用法。自分の主張を強く表現するため、押し付けがましく、失礼なニュアンスを伴うことが多い。

【だからこそ】

（1）A：どうして彼女はその不審な電話のことを社長に話さなかったんでしょうか。

　　B：彼女は社長に信頼されていたんです。だからこそまず自分で調べようとしたんだと思います。

（2）私ほど彼女の幸せを願っているものはいない。だからこそ、あの時あえて身を引いたのだ。

（3）A：結婚は人生の大事な節目ですから二人だけで式をあげたいんです。

　　B：確かに結婚は人生の大事な節目だ。だからこそ大勢の人に祝ってもらわなくてはいけないんだよ。

（4）A：職場では、一人だと上司になかなか文句は言いにくいですよね。

　　B：だからこそ、皆で団結しなくてはいけないと思うんです。

（5）A：最近この辺で空き巣に入られる事件が増えているらしいですね。

　　B：だからこそ、このマンションに防犯ベルをつけるようお願いしているんです。

（6）A：高齢化社会が急速に進んでるね。

　　B：だからこそ、今すぐ老人医療の見直しをやらなければならないんだよ。

理由を表す節に取り立ての「こそ」がついたもの。文頭に用い、前の文の内容を受けて、「そういう理由で」と、理由を強調するのに使う。普通の理由は「だから」で十分だが、特に強く理由の正当性を主張するときに使う。また議論で相手の発言をそのまま理由として取り上げ、自分の言いたいことを主張する時にもよく使われる。文末に「のだ」を伴うことが多い。

【だからといって】

（1）毎日忙しい。しかし、だからと

いって、好きな陶芸をやめるつもりはない。

（2）わたしは彼が好きだ。しかし、だからといって、彼のすることは何でもいいと思っているわけではない。

（3）今この店で買うと50パーセント引きだそうだ。しかし、だからといって、いらないものを買う必要はない。

（4）確かに、あの会社は待遇がいい。しかし、だからといって今の仕事をやめるのには反対だ。

前のことがらを一応認めるが、そういう理由があっても、後のことがらを受け入れはしないと述べるのに用いる。後ろに否定表現を伴うことが多い。

【たがる】

[R-たがる]

（1）子供というものはなんでも知りたがる。

（2）子供は歯医者に行きたがらない。

（3）父は海外旅行に行きたがっているが、母は行きたくないようだ。

（4）夏になると、みんな冷たくてさっぱりしたものばかり食べたがるが、それでは夏バテしてしまう。

（5）避難している住民は一刻も早く家に帰りたがっている。

（6）リーさんは留学してまだ半年だが、家族のことが心配で国に帰りたがっている。

（7）教授はこの実験を大学院の学生にさせたがっているが、今のような研究態勢では無理なのではないだろうか。

第三者の欲求や希望を表すときに用いられる。現在の状態を表すときは「V-たがっている」となる。

「たがる」を使わないときは「たいと言っている」「たいらしい」「たいそうだ」などの間接的な表現を使う。ただし次のように話し手が第三者の立場に立ってものを言っている場合には「たがる」は使わない。

（例）A：山本さん、どうしてパーティーに来なかったんでしょう。
　　B：佐野に会いたくないからだよ。

また、第三者が話し手について思っていることあるいは言ったことを話し手がもう一度繰り返すときは、「たがる」を使う。

（例）彼は僕が社長になりたがっているると思っているらしいが、僕はそんなつもりはまったくない。

→【がる】

【だけ$_1$】

[N（＋助詞＋）だけ]

[N／Na　なだけ]

[A／V　だけ]

限定を表す。

1 …だけだ

a …だけ

（1）今度の事件に関係がないのは彼だけだ。

（2）品物なんかいりません。お気持ちだけいただきます。

（3）コピーをとるだけの簡単な仕事です。

（4）ちょっとだけお借りします。

（5）あの人だけが私を理解してくれる。

（6）ここは便利なだけで環境はあまりよくない。

（7）たいした怪我ではありません。ちょっと指を切っただけです。

（8）その話を聞いて泣いたのはわたしだけではない。

（9）あなただけにお知らせします。

（10）あの人にだけは負けたくない。

それ以外のものはないという限定を表す。節に付く場合は普通体に続く。「が」「を」には「Nだけが」「Nだけを」のように接続する。（2）のように「が」「を」を省略することもある。「に」「から」などは「Nだけに」「Nにだけ」のように2通りの接続のしかたがある。ただし、次のような使い分けがある場合もある。

（例）身分は保険証でだけ証明できる。
　　（他の手段ではできない）

（例）身分は保険証だけで証明できる。
　　（保険証以外のものは要らない）

b …といってもせいぜい…だけだ

（1）ボーナスといってもせいぜい一ヶ月分出るだけだ。

（2）夏祭りといってもせいぜい屋台が三、四軒出るだけです。

（3）旅行といってもせいぜい2泊するだけです。

（4）はやっているといってもせいぜい週末に混むだけだ。

少ないことを強調するのに用いる。

c …たところで…だけだ

（1）急いで計算したところで間違いが多くなるだけだ。

（2）親に話したところで誤解されるだけだ。

（3）早く帰ったところでねこが待っているだけだ。

なにかをしてもあまり良くない結末にしかならないという意味。

d ただ…だけでは

（1）スポーツはただ見るだけでは面白くない。

（2）外国へ行ってただ景色を見るだけではつまらない。そこの土地の人たちとちょっとでも触れ合う旅にしたい。

（3）ただ話しただけではあの人の本当のよさはわからない。

それをするだけではという意味。後ろにはマイナス評価の表現が続く。

e …だけで

(1) 明日からまた仕事だと思うと、考えるだけでいやになる。

(2) 地震は経験した人の話を聞くだけでこわい。

(3) イルカのダンスなんて考えただけで楽しくなる。

「考える、聞く、思う、想像する」などの動詞に続けて使い、実際には体験しなくても感じられるという意味を表すのに使う。

2 …だけしか…ない

(1) 今月、残ったお金はこれだけしかありません。

(2) 頼りになるのはもうあなただけしかいない。

(3) こんなことは、あなたにだけしか頼めません。

(4) いまのところひとりだけしかレポートを出していない。

「…だけだ」を強調して言う表現。少ないことを強調するときは「だけある」ではなく「だけだ」「(だけ)しかない」の表現を使う。

(例) A：お金がいくらありますか。
B：(誤)千円だけあります。
B：(正)千円だけです／千円しかありません。

次のような場合は「だけ」は使えない。

(例) A：この花いくらでしたか。
B：(誤)二百円だけです。
B：(正)二百円しかしませんでした／たったの二百円でした。

(例) A：いま何時ですか。
B：(誤)1時だけです。
B：(正)まだ1時です。

3 …だけでなく…も

(1) 肉だけでなく、野菜も食べなければいけない。

(2) 英語だけでなくて、アラビア語もうまい。

(3) 彼は歌が上手なだけでなく自分で曲も作る。

(4) 今度の台風で、村は田畑だけでなく家屋も大きな被害を受けた。

(5) 授賞式にかれは招待を受けただけではなく、スピーチも頼まれた。

両方とも、どちらもという意味。話しことばでは「…だけじゃなく…も」とも言う。

4 …だけのことだ

(1) だれも行かないのなら私が行くだけのことだ。

(2) 入園テストといっても何もむずかしいことはないんです。先生に名前を呼ばれたら「はい」と返事をするだけのことです。

(3) いやなら無理をすることはない。断わるだけのことだ。

それ以外に方法はない、あるいはそれはたいしたことはないという意味。

5 …というだけ(の理由)で

(1) その野菜はめずらしいというだけでよく売れている。

(2) 若いというだけで皆にもてはやされる。

(3) その晩に現場近くにいたというだけで彼は逮捕された。

(4) 子どもが多いというだけの理由でアパートの入居を断わられた。

(5) 名前の書いてない自転車に乗っているというだけの理由で警官に職務質問を受けた。

ただひとつの理由でという意味。

6 V-るだけV-て

(1) 彼女は文句を言うだけ言ってなにも手伝ってくれない。

(2) 彼は飲むだけ飲んで会費を払わずに帰ってしまった。

(3) 言いたいことだけ言ってさっさと出ていった。

(4) いまどうしているか様子がわからないから、手紙を出すだけ出して返事を待とう。

同じ動詞を繰り返して使うことが多い。(3)の「言いたいこと」のように繰り返す動詞を含んだ名詞になることもある。「そのこと以外の、他のするべきことをしない」という意味。

【だけ$_2$】

程度を表す。

1 V-れるだけV

(1) がんばれるだけがんばってみます。

(2) そこのリンゴ、持てるだけ持って行っていいよ。

(3) 彼は銀行から金を借りられるだけ借りて家を買った。

(4) 待てるだけ待ったが彼は、待ち合わせの場所に現れなかった。

「頑張る」「持つ」などの動詞を繰り返して、「できる限りする」という意味を表す。

2 V-たいだけV

(1) ここが気に入ったのなら、いたいだけいていいですよ。

(2) 遠慮しないで食べたいだけ食べなさい。

(3) 遊びたいだけ遊んで納得した。あすからいっしょうけんめい勉強しよう。

(4) 彼女は泣きたいだけ泣いて気が済んだのか夕食の支度を始めた。

動詞を繰り返して、欲求が満たされる程度までという意味を表す。

3 V-るだけはV

(1) やるだけはやったのだから、静かに結果を待とう。

(2) 息子の言い分を聞くだけは聞いてやってくれませんか。

(3) このことは両親にも話すだけは話しておいた方がいい。

この程度のことまではするという意味。それ以上のことは期待しない、要求しないという表現が続くことが多い。

4 V-る／V-た　だけのことはする

（1）お金をいただいただけのことはしますが、それ以上のことは出来かねます。

（2）調査期間はわずか1カ月でしたが、やれるだけのことはやったつもりです。

（3）出来るだけのことはしますが、今月中に仕上げるのはむずかしいと思います。

それに見合う程度にするという意味。

5 V-るだけのN

（1）どんなところでも生きていけるだけの生活力が彼にはある。

（2）その日彼の財布にはコーヒーを一杯飲むだけの金もなかった。

（3）妻に本当のことを打ち明けるだけの勇気もなかった。

（4）その学生には異国で暮らすだけの語学力が不足している。

「…するのに充分な」の意味。「生活力、金、勇気、語学力、根性、やさしさ」などの名詞に付いて程度を表す。

6 V-ば V-るだけ

（1）交渉は時間をかければかけるだけ余計にもつれていった。

（2）動物は世話をすればするだけなついてきます。

（3）ピアノは練習すればするだけよく指が動くようになる。

あることをすればその程度にあわせて次のことが起こるという意味。「V-ば V-るほど」と言いかえることができる。「V-ば V-るほど」の方が広く用いられる。

7 これだけ…のだから

（1）これだけ努力したんだからいつかは報われるだろう。

（2）よくがんばったね。それだけがんばれば誰にも文句は言われないよ。

（3）あれだけ頼んでおいたのに彼はやってくれなかった。

（4）あれだけ練習してもうまくならないのは、彼に才能がないのだろう。

（5）どれだけ言えば、あの人にわかってもらえるのだろうか。

「これ」「それ」「あれ」「どれ」が用いられる。後ろには「…のだから」「…ば」「…のに」「…ても」などを伴って、「こんなにたくさん、この程度まで」の意味を表す。

8 …だけましだ

[Na　なだけましだ]

[A／V　だけましだ]

（1）風邪でのどが痛いが、熱が出ないだけましだ。

（2）さいふをとられたが、パスポートが無事だっただけまだましだ。

（3）私の住んでいるところは駅からも遠いし工場があってうるさい。このへんは不便だが、静かなだけましだ。

あまり良くない状況だが、もっとひどいことにならなくて、この程度でよかったという意味を表す。

【だけ$_3$】

[N／A／V　だけに]

[Na なだけに]

あることがらの一般的な性質を示し、そこから当然推測できることを述べる。

1 …だけに

a …だけに

（1）お茶の先生だけに言葉遣いが上品だ。

（2）彼は現職の教師だけに受験についてはくわしい。

（3）かれらは若いだけに徹夜をしても平気なようだ。

（4）今回の事故は一歩まちがえば大惨事につながるだけに、原因の究明が急がれる。

前のことがらの当然のなりゆきとして後の状況が出て来るということを表す表現。

b …だけになおさら

（1）横綱の意地があるだけになおさら大関には負けられないでしょう。

（2）彼女は若かっただけになおのことその早すぎた死が惜しまれる。

（3）苦労しただけになおさら今回の優勝はうれしいでしょうね。

（4）現地は暑さに加えて、飲み水も不足しているだけになおさら救援が待たれる。

「…なので当然ではあるが、よりいっそう」の意味。（2）の「なおのこと」も同じように使う。

c …だけにかえって

（1）若くて体力があるだけにかえって無理をして体をこわしてしまった。

（2）今まで順調だっただけにかえって今度の事業の失敗は彼に致命的な打撃となった。

ふつうは良い結果が得られるはずなのにそれとは反対に、という意味。期待されるのとは反対の悪い結果をもたらした場合に使う。

d NがNだけに

（1）祖父は今年90歳で元気だが、歳が歳だけに昼間もウトウトしていることが多くなってきた。

（2）この商品は今までの物よりもずっと性能がいいのですが、値段が値段だけにそうたくさんは売れないでしょう。

→【が1】3

2 …だけのことはある

（1）うまい魚だ。とれたてを送ってもらっただけのことはある。

（2）A：このナイフ、いつまでもよく切れるね。
　　B：買った時は高いと思ったけど、それだけのことはあるね。

（3）A：杉島さんの英語の発音、とってもきれいね。
　　B：そうね、さすがにイギリスに留学していただけのことはあるわね。

（4）彼女は学校の先生をしていただけのことはあって、今も人前で話すのがうまい。

努力や地位や経験に値するという意味。それに見合う結果、能力、特長などがあることを評価して表す。

【だけど】

（1）2時間待った。だけど、彼は現れなかった。

（2）朝から頭が痛かった。だけど、彼女との約束を破るのはいやだった。

（3）みきさんの言いたいことはわかる。だけど、決まったことは変えられない。

（4）仕事が山ほどたまっている。だけど、なかなか働く気になれない。

前に述べたことから予想されることとは反対のことがらが続くことを表す。かたい文章などでは普通用いない。また、文中では使わない。

（誤）2時間待っただけど、彼は現れなかった。

「だけれども」のくだけた言い方。丁寧体で「ですけれども」という言い方もある。

【だけに】

→【だけ3】

【ただ】

1 ただ ＜限定＞

（1）その絵はただ古いだけであまり値打がない。

（2）悪いのはこちらの方だから、ただひたすら謝るほかはない。

（3）部下はただ命令に従うのみだ。

（4）ただご無事をお祈りするばかりでございます。

（5）ただ一度会っただけなのにあの人が忘れられない。

（6）これまで学校をただの1日も休んだことはない。

（7）外はただ一面の雪であった。

それ以外はないという限定を表す。「だけ」「のみ」「ばかり」などとともに使うことが多い。「それだけ」の意。（2）は「謝るだけだ」という意味。（5）（6）のように数量の少なさを表すときは「たった」「ほんの」で言いかえられる。

2 …ただ

（1）おもしろい計画だね。ただ金がかかりそうだ。

（2）A：この椅子はずいぶんしっかりした作りですね。
　　B：ええ、ただ少し重いのでお年寄りにはちょっと不便かもしれません。

（3）あいつは悪いやつだ。ただ家族にはやさしいようだが。

（4）A：お母さん、アメリカに留学する話。賛成してくれるでしょ?
　　B：私はいいんだけど、ただね、お父さんがどういうかと思って…。

前に述べたことを補ったり、そのほかの条件、例外などを述べるときに使う。話しことば。書きことばでは「ただし」を用いる。

【ただし】

（1）テニスコートの使用量は1時間千円。ただし、午前中は半額となります。

（2）ハイキングの参加費はバス代を含めて一人2千円です。ただし、昼食は各自ご用意ください。

（3）病人は少し落ち着いてきましたから面会はかまいません。ただし、興奮するといけませんから、あまり長く話さないようにしてください。

（4）日曜日は閉店します。ただし、祭日が日曜日と重なる場合は開店します。

（5）診察時間は夜7時まで。ただし、急患はこの限りではない。

前で述ことについて、それに関する細かい注意事項や例外を示すときに使う。

【ただでさえ】

（1）お父さんはただでさえうるさいのだから、病気にでもなったらああしろ、こうしろと大変だろうね。

（2）ただでさえ人手がたりなくて困っているのに、こんな小さな会社で一度に三人もやめられたらどうしようもない。

「普段の場合でも」の意で、普段でもそうなのに、普通でない状態の時はもっとそうだということを述べるのに使う。

【たっけ】

（1）きのうの晩ご飯、なに食べたっけ。どうもよく覚えていないな。

（2）A：試験は何課からだったっけ。
　　B：5課からだよ。

→【つけ】

【だったら】

（1）A：この仕事、私一人じゃとても無理だと思います。
B：だったら私が手伝いますよ。

（2）A：どうしても彼には言えない。
B：だったら私が言います。

（3）A：先生、入院なさったらしい。
B：だったら、しばらくは授業はないね。

「そうだったら」の意で、相手のことばや新しい情報を受けて、話し手が態度表明をしたり推論を述べるような場合に使う。話しことば。「それなら」「それでは」なども類義のことば。

【たって】

1 …たって

[A-くたって]

[V-たって]

（1）遅くなったって、必ず行きますよ。

（2）あの人はいくら食べたって太らないんだそうだ。

（3）いまごろ来たって遅い。食べ物は何も残っていないよ。

（4）あの人はどんなにつらくたって、決して顔に出さない人です。

（5）いくら高くたって買うつもりです。めったに手に入りませんから。

（6）笑われたって平気だ。たとえ一人になっても最後までがんばるよ。

「ても」のくだけた話しことばの言い方。

→【ても】

2 …たって

a …ったって

（1）高いったって一万円も出せば買える。

（2）A：日曜日なんだから、どっか出かけましょうよ。
B：出かけるったって、どこも人でいっぱいだよ。

（3）ストレス解消には、なんてったってスポーツが一番ですよ。

「といっても」のくだけた言い方で、「たって」のつまったもの。（3）の「なんてったって」には「なんたって」という言い方もある。

→【といっても】

b V-ようったって

（1）帰ろうったって、こんな時間じゃもう電車もバスもない。

（2）こんなにへいが高くては、逃げようったって逃げられない。

（3）連絡しようったって、どこにいるかさえわからないのに無理だ。

（4）A：ちょっと休もうよ。
B：休もうたってベンチもなにもないよ。

「V-ようといっても」のくだけた話しことばの言い方。「なにかをしようといっても」という意味。あとに「そんなことはむずかしい、無理だ」というような表現が続く。

【だって$_1$】

1 …だって ＜問い＞

（1）A：あっ、地震だ。
B：地震だって？ ちがうよ。ダンプカーが通っただけだよ。

（2）A：あの人、男よ。
B：男だって？ ぜったいに女だよ。

（3）A：太郎、テストどうだった
B：おもしろかったよ。
A：おもしろかっただって？むずかしかったとか、やさしかったけど問題が多かったとかほかに答えようがあるだろう。

（4）A：福田さん、美人コンテストに出るらしいよ。
B：美人コンテストですって？今ごろそんな時代遅れのコンテストなんかどこでやってるのよ。

（5）A：ヘリコプターがまだ到着しないんですが。
B：なんだって？ そりゃ大変だ。

相手の言ったことをそのまま繰り返して驚いたり、あきれたりする気持ちを表す。不快の感情を表現することもある。上がり調子のイントネーションになる。

くだけた話しことばで、丁寧な形の「…ですって」もあるが、目下や親しい人に対してしか使えない。強い驚きを表すのには（5）の「なんだって」のほかに「なんですって」「なんだと」などの表現がある。

2 …んだって →【って】5

3 …なんだって →【って】5

【だって$_2$】

[Nだって]

（1）それぐらいのことは子供だって知っている。

（2）先生だって間違うことはある。

（3）医者だって風邪ぐらいひくよ。

（4）つらいのはあなただけじゃない。浅田さんだって、坂田さんだってみんながまんしてるんです。

（5）好き嫌いはありません。魚だって肉だってなんだって大丈夫です。

（6）あの子はこのごろ帰りが遅い。きのうだって11時過ぎていた。

（7）だれにだって一つや二つは秘密がある。

「でも」という意味。（1）（2）（3）は極

端な例を出して「でさえ」の意になり、(4)(5)(6)などは「Aだけではなく、BもCも」と同じ程度のものを例に出す言い方。くだけた話しことば。

【だって3】

(1) A：どうして外で遊ばないの。
　B：だって寒いんだもん。
(2) A：にんじん、残さずにちゃんと食べなさい。
　B：だってきらいだもん。
(3) A：夕刊まだかな。
　B：だって、今日は日曜日でしょ、来ないわよ。
(4) A：きのうはどうして待ってくれなかったの。
　B：だってあそこの喫茶店、人が多くて居ずらかったんだよ。

理由を聞かれたときの答えとして「どうしてかというと」の意。(2)(3)のように理由がはっきり問われなくても使える。特に子供が口答えするときに「だって...もの／もん」という言い方で使う。大人も使うことがある。くだけた話しことば。

【たて】

[R-たてのN]
[R-たてだ]

(1) 覚えたての外国語で話してみる。
(2) ここのパンは焼きたてで、おいしい。
(3) 彼女は先生になりたてだ。
(4) 畑でとれたてのトマトをかじった。
(5) しぼりたてのオレンジジュースはいかがですか。
(6) ≪貼紙≫ペンキぬりたて。さわるな。

動詞の連用形を受けて「...したばかり」の意味を表す。使える動詞は限られている。
(誤) 読みたての本。
(正) 読んだばかりの本。

【だと】

(1) A：今日は学校に行きたくないな。
　B：なに? 行きたくないだと? そんなことは言わせないぞ。
(2) 子：お父さんが悪いんだ。
　父：何だと? もう一度言ってみろ。
(3) 大雪警報が出てるから旅行は取りやめだとさ。

「だって」のよりぞんざいな言い方。男性が用いる。
→【だって1】

【だといい】

(1) A：みんな今頃安全な場所に避難していますよ。
　B：だといいが。心配だ。
(2) A：彼は慎重だから、危ない運転はしませんよ。
　B：だといいけど。本当に大丈夫かしら。
(3) A：子供達もきっとこのプレゼントに大喜びしますよ。
　B：だといいね。

会話の中で、文頭に用いる。「そうだといい」と同じ。後ろに「が」「けれど」「けど」などを伴って、「そういう状況であってほしい」という意味で使う。「それだといいが」「そうだといいけど」などとも言う。

【だといって】

(1) A：これは全面的にあいつが悪い。
　B：だといって、困っているのを見捨てるわけにもいかないだろう。
(2) A：こちらも人が足りないんですよ。
　B：だといって、放っておけないでしょう。

「そうだといって」「だからといって」と同じ。
→【だからといって】

【たとえ】

(1) たとえその事実を知っていたところで、私の気持ちは変わらなかっただろう。
(2) たとえ子どもでもやったことの責任はとらなくてはいけない。
(3) たとえどんなところに住もうとも、家族がいればいい。
(4) たとえ大金をつまれたとしてもそんな仕事はやりたくない。

「仮に、もし...としても」という意味。「たとえ」のあとに「ても、とも、たとところで、としても」などの譲歩の表現が続く。(3)の「住もうとも」は「住んだとしても」の書きことば的表現。

【たとえば】

(1) 飲物でしたら、たとえばコーヒー、紅茶、ジュースなどを用意してあります。
(2) 日本語の中には、たとえばパン、ドア、ラジオなどたくさんの外来語が入っている。
(3) ゆっくり過ごすとしたら、たとえば温泉なんかどうですか。
(4) A：このごろ運動不足なんだ。だけどスポーツするひまもないし金もないし。
　B：わざわざ出かけなくても、たとえばバスをやめて、駅まで歩くとかいろいろある

でしょ。

（5）たとえばこの方程式のXを2とすると、Yは5になる。

（6）たとえば今ここに1億円あるとしたら、何に使いたい?

（7）たとえば地球上に飲み水がだんだんなくなっていくとしますね。そういう場合どうするか。海水の淡水化ということが当然考えられるでしょう。

前に述べたことを具体的に例をあげて示すときに用いる。（5）（6）のように仮想のことを例としてあげるときは「とすると」「としたら」などが続く。

【だとすると】

（1）A：近くに大きなホテルができるのは確実です。
　　B：だとすると、この町の雇用率が上がるかもしれませんね。

（2）A：飛行機が10時間も遅れてるんだそうです。
　　B：だとすると、彼の帰りはあしたになるな。

「だとすれば」とだいたい同じ。「そうだとすると」もある。

→【だとすれば】

【だとすれば】

（1）A：近くに大きなホテルができるのは確実です。
　　B：だとすれば、この町の雇用率が上がるかもしれませんね。

（2）A：この写真は、夏に京都でとったものです。
　　B：だとすれば、彼は去年の7月に日本にいたことになりますね。

文頭に用いて、相手が述べたことがらを根拠として、話し手の推量や判断を述べる場合に使う。「そのような事実・現状から考えると」という意味。「それなら」に近いが、「だとすれば」の方がやや固く、書きことばでも使う。「そうだとすれば」「だとすると」「そうだとすると」などもある。

【だなんて】

（1）今頃になって気が変わっただなんてよく言えますね。

（2）約束したのに、できなかっただなんて、ひどい。

（3）予約できるかもしれない、だなんて、無責任な言い方ですね。

（4）事故で死んでしまうだなんて、あんまりだ。

相手の言ったことを繰り返して、非難したり、批判したりするのに用いる。（4）のように自分に責任のない事態に対する非難や悲嘆の気持ちを表す場合もある。「なんて」だけでも使う。

【だにしない】

[Nだにしない]

（1）このような事故が起きるとは想像だにしなかった。

（2）衛兵は直立不動のまま、微動だにしない。

（3）そんな危険をおかすなんて考えるだに恐ろしい。

（4）一顧だにしない。

（5）一瞥だにしない。

文語的表現で、「…さえしない」「まったく…しない」という意味。

「思うだに恐ろしい」のように肯定の形とともに使われて、「…だけでも…」の意味で使われることもある。

（4）（5）は慣用的な言い方。（4）は「まったくかえりみない」、（5）は「まったく見もしない」という意味。

【だの】

[N／Na　だの　N／Na　だの]

[A／V　だの　A／V　だの]

（1）彼女は市場に出かけると、肉だの野菜だの持ちきれないほど買ってきた。

（2）同窓会には中村だの池田だの、20年ぶりのなつかしい顔がそろった。

（3）チャリティーバザーには有名人の服だのサイン入りの本だのいろいろなものが集まった。

（4）彼は、やれ給料が安いだの休みが少ないだのと文句が多い。

（5）彼はいつ会っても会社をやめて留学するだのなんだのと実現不可能なことばかり言っている。

「やら」「とか」のようにいくつかのものをあげる言い方だが、（4）（5）のように発言の内容を「いろいろ言ってうるさい」と否定的にとらえて使うことも多い。また（5）のように「…だのなんだの」という慣用的な表現もある。

【たび】

→【このたび】

【たびに】

[Nのたびに]

[V-るたびに]

（1）健康診断のたびに、太りすぎだと言われる。

（2）山に行くたびに雨に降られる。

（3）父は出張のたびにかならずその土地の土産を買ってくる。

（4）ふるさとは帰るたびに変わっていって、昔ののどかな風景がだんだんなくなっていく。

（5）彼女は会うたびにちがうメガネをかけている。

（6）この写真を見るたびにむかしを思い出す。

「その時ごとに」「...するといつもその時には」という意味。

【たぶん】

（1）たぶん田中さんも来るでしょう。

（2）あしたはたぶん雨だから、今日のうちに洗濯しておこう。

（3）A：だいじょうぶでしょうか。
　　B：たぶん。

（4）これでたぶん足りると思うけど、念のために、もう少しもっていこう。

話し手の推量を表す。「きっと」より弱いが、可能性がかなり高いことを表す。「おそらく」よりもくだけた話しことば的表現。

【たまらない】

1 たまらない

（1）A：毎日、車の音がうるさくて眠れないんです。
　　B：それはたまりませんね。

（2）A：あの湖ではおもしろいほど魚がつれるんだよ。
　　B：つり好きにはたまらないね。

（3）A：戦争で家も家族も全部なくしたんだそうだ。
　　B：たまらない話ね。

本来「我慢できない」の意で、（1）は「がまんできないぐらいいやだ」、（2）は「どうにもならないくらいいい」、（3）は「聞くのがつらい」という意味。

2 ...てたまらない

（1）和子はあしたから夏休みだと思うとうれしくてたまらなかった。

（2）最近はじめたばかりのスキューバダイビングがおもしろくてたまらない。

→【てたまらない】

【ため】

1 Nのため ＜利益＞

（1）こんなにきついことをいうのも君のためだ。

（2）みんなのためを思ってやったことだ。

（3）家族のために働いている。

（4）子供たちのためには自然のある田舎で暮らすほうがいい。

（5）過労死という言葉がありますが、会社のために死ぬなんて馬鹿げていると思います。

人やものを表す名詞を受けて、それにとっての利益を表す。古い言い方で「Nがため」という表現もある。

2 ...ために ＜目的＞

a ...ために

[Nのために]
[V-るために]

（1）世界平和のために国際会議が開かれる。

（2）ここの小学校では異文化理解のために留学生をクラスに招待している。

（3）外国語を習うためにこれまでずいぶん時間とお金を使った。

（4）入場券を手に入れるために朝早くから並んだ。

（5）家を買うために朝から晩まで働く。

（6）疲れをいやすためにサウナへ行った。

目的を表す。「...ために」が目的を表すには、前後の節の主語が同じでなければならない。したがって（例1）は目的の解釈がなりたつが、（例2）は原因の解釈しかなりたたない。

（例1）息子を留学させるために大金を使った。

（例2）息子が留学するために大金を使った。

また、「ために」の前には自分の意志で実現できることがらを表す節が来る。ある状態になることを目指すときは「ために」ではなく「ように」を使う。

（誤）聞こえるために大きい声で話した。

（正）聞こえるように大きい声で話した。

（誤）よく冷えるために冷蔵庫に入れておいた。

（正）よく冷えるように冷蔵庫に入れておいた。

b V-んがため

（1）生きんがための仕事。

（2）子供を救わんがため命を落とした。

形は「V-ない」の「ない」を「ん」に入れかえて作る。「する」は「せんがため」となる。「...を目的として」という意味を表す。文語的な表現。慣用的な表現で使われる。（1）は「生きるための」、（2）は「救うために」の意。他に「V-たいがため」という言い方もある。

3 ...ため ＜原因＞

a ...ため

[Nのため]
[Naなため]
[A／V ため]

（1）過労のため3日間の休養が必要だ。

（2）暑さのために家畜が死んだ。

（3）事故のために現在5キロの渋滞です。

（4）台風が近づいているために波が高くなっている。

（5）去年の夏は気温が低かったために、この地方では米は不作だった。

（6）株価が急落したために市場が混乱している。

（7）この辺は、5年後にオリンピックの開催が予定されているために、次々と体育施設が建設されている。

「...が原因で」の意味。似た表現に、「...せいで」「...おかげで」がある。

b ひとつには...ためである

（1）彼の性格が暗いのは、ひとつにはさびしい少年時代を送っ

たためである。

（2）市民ホールが建たなかったのはひとつには予算不足のためである。

原因のひとつを取りあげて述べるのに用いる。書きことば的。

c …のは…ためだ

→【のは…だ】3

【ためし】

1 ためしに…てみる

（1）先月できたレストランはおいしいという評判だ。ためしに一度行ってみよう。

（2）テレビで宣伝していたシャンプー、ためしに買ってみましょう。

（3）新発売のインスタントラーメンためしに買ってみたがおいしくなかった。

「よいか悪いかを判断するためにやってみる」という意味。

2 V-たためしがない

（1）彼女は約束の時間を守ったためしがない。

（2）彼は競馬が好きだが、彼の予想は一度も当たったためしがない。

（3）彼とはよく食事をするが、おごってくれたためしがない。

（4）息子はあきっぽくて、何をやっても三日と続いたためしがない。

「いままで一度もそんなことはなかった」という意味。非難の気持ちを伴うことが多い。

【たら$_1$】

[N／Na　だったら]

[A-かったら]

[V-たら]

述語の活用形の一つで、条件や契機を表す。「と」「ば」「なら」と重なる用法をもつ。一般的な真理や法則を述べる「一般条件」よりも、特定の個別的なことがらについて述べる場合に使われる傾向が強い。他の三つに比べると、文末表現の制約が少なく、話しことばでよく使われる。丁寧体は「N／Na でしたら」「V-ましたら」となるが、イ形容詞は丁寧体はとらない。やや古めかしい言い方では「ば」を伴って「たらば」となることもある。

1 …たら ＜仮定条件＞

個別的な事態について「Xが実現した場合にYが実現する」あるいは「Xが実現した状況でYが実現するよう求める」といった関係を表す。Xは未実現のことがら、あるいはすでに実現していることがらを表すが、Yはいつも未実現のことがらを表す。Yには未実現のことがらの述べ立てや推量を表す「平叙文」や、意志・希望を表す「表出」の文、命令・禁止・勧誘などを表す「働きかけ」の文などが用いられる。

a …たら＋未実現のことがら

（1）雨だったら道が混雑するだろう。

（2）もしも、あまり高かったら誰も買わないでしょう。

（3）万一雨が降ったら試合は中止です。

（4）この薬を飲んだらすぐにせきはとまりますが、3時間たったら効き目がなくなります。

（5）あんなに美人だったら、男性がほうっておかないだろう。

（6）ここまで来たら、一人でも帰れます。

（7）そんなにたくさん食べたらおなかをこわしますよ。

Yが未実現のことがらについての述べ立てを表す場合の用法。文末には述語の辞書形、またはそれに推量の「だろう」などが付いた形が用いられる。

（1）～（4）は、XもYも未実現のことがらを表し、Xが実現した場合にYが実現するということを述べる表現。まだ起こっていない不確実なことがらや実現しそうもないことがらを仮定するような場合には「もし」「万一」などが使われることがある。（4）は「Xの後にYが起こる／行われる」といった未来に順を追って実現することがらをそのまま述べるような用法で、仮定的な意味は薄い。

（5）～（7）は、Xがすでに実現していることがらの場合で、そうした現状に基づいてYを予測的に述べる表現。Xには現状を示す「こ／そ／あ」の付く語を伴うことが多い。

「たら」は、個別的なことがらに使われる傾向が強く、恒常的な真理や法則を述べる「一般条件」には用いられにくい。ただし、話しことばでは、次のように、個人の習慣や、特定の事物の反復動作を表す場合に使われることもある。

（8）いつも、5時になったらすぐ仕事をやめて、テニスをします。

（9）ここは冬になったら雪が1メートルぐらいつもる。

（10）ふだんは昼ご飯を食べたら昼寝をしますが、今日は買物に行かなければなりません。

（11）古くなったらすぐに新しいのに買いかえるというような生活では、お金は貯まらない。

（8）～（11）は、「Xが成立した後に、Yが成立する」という意味を表す。XはYの成立する時間的状況を表し、そうした時間的条件のもとで繰り返される動作を表す。この場合は「たら」から「と」への言いかえが可能。

b …たら＋表出・働きかけ

（1）この仕事が完成したら、長い休みをとるつもりだ。

（2）もしも1千万円の宝くじに当たったら、何でも買ってあげますよ。

（3）教師になったら子どもたちにものをつくる楽しさを教えたい。

（4）お風呂に入ったらすぐ寝なさい。

（5）この予防注射をしたら、風呂

に入ってはいけません。

（6）お酒を飲んだら絶対に運転はするな。

（7）宿題が済んだら遊びに行ってもいいよ。

（8）A：あちらで野田さんに会われますか。

B：ええ、その予定ですが。

A：じゃ、お会いになったらよろしくお伝えください。

（9）もしも遅れたら、連絡してください。

（10）会議が終わったら食事をしに行きましょう。

「Xが実現した場合にYをしよう／したい」「Xが実現した場合にYをしなさい／するな／してもいい／してください」といった意味を表す。Yには、話し手の意志・希望を表す「表出」の表現や、聞き手に対する命令・禁止・許可・依頼・勧誘といった「働きかけ」の表現が続く。

「たら」は普通、その時だけの具体的なことがらの関係に使われ、Xが成立した状況で成立するYについて述べる場合に使われる。XはYに時間的に先行することがらを表し「こういうことが起こった場合には」「…した時に」「このあとで」のような言葉で言いかえられる。以下のように、「たら」の前が「ある」や形容詞、名詞などの状態性の述語の場合は、「そのような状況であれば」という意味を表し、その状況が成立した場合の話し手の意志・希望や聞き手に対する要求や勧めなどを表す。

聞き手の都合や意向を問題にする場合は<前置き>の用法に近い表現になる。

（11）暇があったら海外旅行をしたい。

（12）暑かったら、窓を開けてください。

（13）お暇でしたら、いらっしゃいませんか。

（14）そんなに勉強が嫌だったら大学なんかやめてしまえ。

（15）熱があったら休んでもいいよ。

「たら」と比べた場合、「と」「ば」は使用できる表現に制約がある。「と」は「表出」や「働きかけ」の表現とともに使えないし、「ば」はXが動作・変化を表す動詞の場合は、「表出」や「働きかけ」の表現が使われにくい。

（誤）結婚すれば仕事をやめたい。

（正）結婚したら仕事をやめたい。

（誤）お風呂に入ればすぐ寝なさい。

（正）お風呂に入ったらすぐ寝なさい。

c …たら＋問いかけ

（1）雨だったら試合は中止になりますか。

（2）A：結婚したら仕事はやめるの。

B：ううん、しばらく続けるつもりよ。

（3）万一雨が降ったらどうしましょうか。

（4）A：もし宝くじに当たったら、

何に使いますか。

B：すぐに使わないで貯金しておきます。

（5）A：大学を卒業したらどうするつもりですか。

B：オーストラリアに留学したいと思っています。

（6）A：社長はただ今出かけておりますが。

B：何時ごろでしたらお帰りでしょうか。

（7）どのぐらい勉強したら日本語の新聞が読めるようになりますか。

「XたらYか」の形で、聞き手に答えを要求する疑問文での「たら」の用法。

（1）（2）は、「はい」「いいえ」を問う肯否疑問文、（3）～（7）は「何」「どう」などの疑問詞を伴う疑問詞疑問文の場合である。（3）～（5）は、「XたらYか」のYが不明の場合、（6）（7）は、Xが不明の場合の疑問詞疑問文である。

（6）（7）のように、よい結果を得るための方法・手段Xを問う疑問文では、「たら」から「ば」への言いかえが可能だが、（2）～（5）のように、Xが成立した場合にYでどのような行動をとるかを問う疑問文では、たいてい「たら」が使われ、「ば」の使用は不自然である。

（誤）結婚すれば仕事をやめるつもりですか。

（正）結婚したら仕事をやめるつもりですか。

（誤）大学を卒業すればどうしますか。

（正）大学を卒業したらどうしますか。

d 疑問詞＋V-たら…のか

（1）何度言ったら分かるんだ。

（2）人間は戦争という愚行を何度繰り返したら気がすむのであろうか。

（3）何年たったら一人前になれるのだろうか。

（4）何回繰り返したら覚えられるのか。

（5）どれだけ待ったら平和な世界になるのだろうか。

（6）一体どうしたら今の思いを伝えることができるのか。

「何／どれだけ／どんなに」などの疑問詞に動詞のタラ形が続く反語的表現。「いくら…してもなかなか思い通りにならない」という意味で、状況に対するいらだちや絶望的な気持ちを表す。文末には「のか」や「のだ／のだろう（か）」などが用いられる。「V-たら」は「V-ば」に言いかえ可能。

e …たらどんなに…か

（1）宝くじに当たったらどんなにうれしいだろう。

（2）合格したら両親はどんなに喜んでくれるだろうか。

（3）子供たちがもどってきたらどんなににぎやかになることか。

「もしXが実現したらどんなにいいか分からない」という意味で、Xの実現を強く望んだり、それが実現したらとてもうれしいという気持ちを表す。文末には「だ

たら$_1$

ろう(か)」「ことか」などが使われる。

2 …たら <反事実>

a …たら …だろう／…はずだ

(1) あのとき精密検査を受けていたら、手遅れにならなかっただろう。

(2) 隕石が地球に衝突していなかったら恐竜は絶滅していなかったかもしれない。

(3) ひどい話を聞かなかったら、こんなに酔うまで飲んだりしなかったにちがいない。

(4) あの時彼と結婚していたら、私の人生はもっと幸せだったはずだ。

(5) あの当時この「薬の害」という本を読んでいたら今ごろ苦しまなくてもよかったのに残念だ。

(6) A：面接試験、うまくいった。
B：うまくいっていたら、こんな顔していないよ。

(7) 点数があと10点高かったらこの大学に合格できるんだけど。

実際に起こったことと違うこと、あるいは反対のことを仮定して、その場合はこうなっただろうという言い方。普通、動詞は状態性にして「V-ていたら」とすることが多い。

過去の事実に反することを仮定する場合は、(1)〜(5)のように、文末には「…ただろう／はずだ／のに」などタ形の述語が用いられる。これに対し、現状と異なることを仮定する場合は、(6)(7)のように「…するのに／のだが」のような辞書形が用いられる。

この用法の「たら」は「ば」で言いかえが可能だが、「たら」のほうが話しことば的。<反事実>を表す条件文のとる文型についての詳しい説明は【ば】4を参照。

b …たらどんなに…か

(1) 背があと10センチ高かったらどんなによかっただろうか。

(2) 10年前に彼女に会っていたらどんなによかっただろう。

(3) 祖母が生きていたら、どんなに喜んだことか。

(4) 今すぐあなたに会えたらどんなにうれしいだろうか。

Xが実現が不可能だったり、現実と反対のことがらの場合の言い方で、「もしXが実現したら(していたら)どんなにいい(よかった)か分からない」という意味の表現。Xの実現を強く望むが、実際にはそれが不可能なことをとても残念に思う気持ちを表す。

すでに実現していることがらと反対のことがらを仮定する場合は、(1)〜(3)のように、「…ただろうか」の形を、まだ実現していないがそれが不可能なような場合は、(4)のように「…るだろうか」を使う。

3 …たら…た <確定条件>

(1) 空港に着いたら友達が迎えに来ていた。

(2) トンネルを出たら一面の銀世界だった。

(3) 変な音がするので隣の部屋に行ってみたらねずみがいた。

(4) 山田さんは無口でおとなしい人だと思っていたが、よく話をしたらとても面白い人だということが分かった。

(5) お風呂に入っていたら、電話がかかってきた。

(6) デパートで買い物していたら、隣の奥さんにばったり会った。

(7) 5月に入ったら急に暑くなった。

(8) 薬を飲んだら熱が下がった。

(9) 会社をやめたらストレスがなくなって元気になった。

(10) 落ちてもともとと思って試験を受けたら、思いがけず合格した。

(11) 部屋の様子が変だと思ったら、案の定、空き巣に入られていた。

「XたらYた」という形で前後ともすでに実現していることがらを表す。Xが成立した場面でYを話し手が新たに認識したり、それをきっかけに新しいことがらが起こったりするようなことを言う場合に使う。Yには、話し手の意志が及ばないようなことがらの出現や、それが新たに見つかった、分かったといった意味の表現が続く。

(1)〜(4)は、Xという動作が行われた場面で、Yという状況を話し手が発見するといった用法だが、その場合に「…たら、私は…した」のようにYでは発見者「私」を表さないで、「…たら…ということが分かった」「…たら…がいた」「…たら…があった」など、状況を描写する表現を使う。

(誤) 隣の部屋に行ったら、私はねずみを見た

(正) 隣の部屋に行ったら、ねずみがいた。

また、新たに分かったこと、発見したことがらを表すYには、(1)(2)のように「V-ていた」「Nだった」などの状態性の表現が用いられる。

一方、「V-ていた」の代わりに「V-た」が用いられると次のように意味が変わる。

(例) 空港に着いたら友達が迎えに来た。

(例)は「来ていた」の代わりに動作性の表現「来た」が用いられているが、この場合は空港に迎えに来ていた友達を発見したという(1)の状況ではなく、話し手が着いた後に友達が迎えに来たという状況で用いる。

(10)(11)のように、前半で予想を立てる場合、後の文に予想したことが続くときは「案の定」「やっぱり」、予想外のときには「案外」「意外なことに」「思いがけず」などの言葉がよく使われる。

この用法の「たら」は「と」で言いかえられることが多いが、XとYが意志でコントロールできる同一人物の動作の連続を表すような場合、「と」は使用可能だが、「たら」は不可能である。

(誤) 男は部屋に入ったら友達に電話した。

(正) 男は部屋に入ると友達に電話した。

また、「と」が小説や物語などで使われるのに対し、「たら」は、話し手が直接経験したことがらを述べるような場合に用いられる。

4 …たらさいご

(1) 彼は寝たら最後、まわりでどんなに騒いでも絶対に目をさまさない。

(2) 賭事は一度手を出したら最後ずるずると抜けられなくなる人が多い。

(3) すっぽんは一度かみついたら最後どんなことがあっても離れない。

一度あることが起こると、そのものの性質や固い決意などで、以後その状態を変えないという意味。「一度…たらさいご絶対に…」の形でよく使われる。

5 …たら…で

[A-かったら A-いで]
[A-かったら A-かったで]
[V-たら V-たで]

(1) 金というのはあったらあったで使うし、なかったらないで何とかなるものだ。

(2) 自動車はあれば便利だが、なかったらなかったで何とかなるものだ。

(3) 母は寒がりで冬が苦手だが、それでは夏が好きかというとそうではない。暑かったら暑かったで文句を言っている。

(4) 息子には大学に受かってほしいが、受かったら受かったでお金が要って大変だ。

(5) 平社員のときは給料が少なくて困ったけど、昇進したらしたでつきあいも増えるしやっぱり金はたまらない。

前後に同じ形容詞や動詞を2度繰り返して使う。対照的なことがらを取り上げて、どちらにしても同じだという意味を表す。

(1)(2)のように「問題はあるにしてもさほど困らない／何とかなる」といった意味を表す場合と、(3)～(5)のように、状況をあまり好ましいととらえないで、「どちらにしても大変だ／問題だ」という意味を表す場合がある。

イ形容詞は、たいてい「A-かったら A-かったで」の形で使われるが、(1)のように「なかったらないで」の形が使われることもある。

「…ば…で」は類義表現。

6 …たら ＜前置き＞

後に続く発言がどのような条件でなされるものなのか、前もってその範囲を限定したり、予告や注釈を行う場合に用いる。ある程度固定化の進んだ慣用表現。「ば」で言いかえが可能。

a …たら＋依頼・勧め ＜前置き＞

(1) もし差し支えなかったら事情を聞かせてください。

(2) よろしかったら、もう一度お電話くださいませんか。

(3) よかったら、週末、家にいらっしゃいませんか。

依頼や勧めをするときに相手の都合を丁寧にたずねる慣用化した表現。

b …たら ＜前置き＞

(1) 私から見たら、こんなことはたいした問題ではない。

(2) 私に言わせたら、責任はあなたの方にあるんじゃないかと思う。

(3) 一時代前と比べたら、家事は格段に楽になったと言える。

「見る」「思う」「比べる」など、発言や思考、比較などを表す動詞を受けて、後に続く発言・判断がどのような立場・観点から行われているかを前もって予告する言い方。ある程度慣用化した言い方。

「からしたら」「から言ったら」なども類義的な表現。

7 V-たら ＜勧め＞

(1) 立って見てないで、ちょっと手伝ってあげたら。

(2) 危ないからやめといたら。

(3) そんなに疲れているなら、すこし休んだら?

「V-たらどうか」の後半が省略されたもので、聞き手にその動作を行うように勧める表現。上昇調で発音される。普通親しい間柄の相手に使う。丁寧に話す必要がある場合には、後半を省略しないで「たらどうですか／いかがですか」などを使う。

「V-ば」での言いかえが可能だが、「たら」には、相手に本気で勧めているというニュアンスがあるのに対し、「ば」を使うと話し手とってはどうでもいいことだという投げやりなニュアンスが伴うことがある。

8 …からいったら →【からいう】1

9 …からしたら →【からする】1

10 …からみたら →【からみる】1

11 …といったら →【といったらありはしない】、【といったらありゃしない】、【といったらない】

12 …ときたら →【ときたら】

13 …としたら →【としたら】

14 …となったら →【となったら】

15 V-てみたら →【てみる】4

16 …にかかったら →【にかかっては】

17 …にかけたら →【にかけたら】、【にかけて】2

18 …にしたら →【にしたら】

19 …にしてみたら →【にしてみれば】

20 …によったら／ことによったら →【によると】1b

21 だったら →【だったら】

【たら$_2$】

(1) あなたったら、何考えてるの?

(2) やめろったら。

→【ったら】

【たらいい】

[N／Na だったらいい]
[A-かったらいい]

［V-たらいい］

1 V-たらいい ＜勧め＞

（1）A：レポートのしめきり間に合いそうもないんだ。どうしたらいいかなあ。
　　B：先生に聞いてみたらどう?
（2）A：この急ぎの仕事だれにやってもらおうか?
　　B：山田君に頼んだらいいよ。どんな仕事でもいやな顔しないよ。
（3）A：もう一杯おかわりしようかな、それともやめとこうかな。
　　B：食べたいだけ食べたらいいじゃないか。そんなに太ってないんだし。
（4）ゆっくり休んだらいい。後のことは任せなさい。
（5）もう遅いから残りの仕事はあしたにしたらいい。
（6）若いうちにいろいろ苦労したらいいと思う。あとできっと役に立つはずだ。

相手に何かを勧めたり、提案したりする表現。特定のよい結果を得るためにどのような手段や方法をとるのがいいか助言を求めたり、助言を与えたりする場合に用いる。たずねる場合は「どうしたらいいか」のような形で疑問詞とともに使う。しないように勧める場合、「しなかったらいい」はやや不自然だが、「しなければいい」は使用可能である。

（誤）太りたくなければ食べなかったらいい。
（正）太りたくなければ食べなければいい。

「たらいい」は「ばいい」と類義的で相互に置きかえ可能だが、「たらいい」の方が、ややくだけた話しことば的な言い方である。どうしたらいいかが問題になっている場合は「どうしたら／すればいいか」は使えるが、「どうするといい」は使えない。だが、その答えとしては「たらいい／ばいい／といい」のいずれも使える。

（誤）A：電車の中にかばんを忘れてしまったのですが、どうするといいですか。
（正）A：電車の中にかばんを忘れてしまったのですが、どうしたら／すればいいですか。
　　B：遺失物係で聞いてみたら／聞いてみれば／聞いてみるといいでしょう。

2 …たらいい ＜願望＞

（1）生まれてくる子が男の子だったらいいのだが。
（2）体がもっと丈夫だったらいいのに。
（3）もう少し給料がよかったらいいのだが。
（4）もっと家が広かったらいいのになあ。
（5）明日、晴れたらいいなあ。
（6）もう少しひまだったらなあ。

そうなってほしいという話し手の願望を表す。文末は「のに／なあ／のだが」などを伴うことが多い。現状が希望する状態と異なったり、実現できないような場合には「そうでなくて残念だ」という気持ちを表す。（6）のように、「いい」が省略され「たらなあ」の形もよく用いられる。

3 …たらよかった

（1）A：このあいだのパーティーおもしろかったわよ。
　　B：僕も行ったらよかった。
　　A：そうよ。来たらよかったのに。どうして来なかったの。
　　B：アルバイトがあったんだよ。でもあの日はバイト、ひまでね。休んでもよかったんだ。
（2）きのう会社の上司とはじめて飲みに行った。彼がもうちょっと話好きだったらよかったのだが、会話が続かなくて困った。

実際には起こらなかったこと、現実にはそうでなかったことを残念に思う表現。文末は「のに／（のに）なあ／のだが」などを伴うことが多い。「のに」は普通自分のことには使わない。

（誤）僕も行ったらよかったのに。
（正）僕も行ったら｛よかったんだけど／よかったんだが｝。

【だらけ】

［Nだらけだ］

（1）間違いだらけの答案が返ってきた。
（2）子供は泥だらけの足で部屋に上がってきた。
（3）彼は借金だらけだ。
（4）「傷だらけの青春」という映画を見た。
（5）彼女の部屋は本だらけだ。

それでいっぱいで、そればかりがたくさんある様子。「…でいっぱい」と違い、話し手のマイナスの評価を表すことが多い。（5）は部屋に本が非常にたくさんあるというだけでなく、多すぎたり、散らかっている感じがある。

【たらどうか】

［V-たらどうか］

（1）別の方法で実験してみたらどうでしょうか。
（2）少しお酒でも飲んでみたらいかがですか。気分がよくなりますよ。
（3）遊んでばかりいないで、たまには勉強したらどう?
（4）さっさと白状したらどうなんだ。
（5）アメリカに留学してみたらどうかと先生に勧められた。
（6）A：吉田君、パーティーには出席しないって。
　　B：もう一度誘ってみたら。

提案や勧めを表す慣用的表現。「V-てみたらどうか」の形で使われることが多い。「てはどうか」とほぼ同義だが、「たらどうか」の方が話しことば的。くだけた話しことばでは「たらどうなの／どうかしら(女性)」「たらどうなんだ(男性)」「たらどう(男女)」、丁寧な言い方では「たらいかがですか／いかかでしょうか」などが用いられる。

(3)(4)は、話し手の忠告や勧めに聞き手がなかなか従わないような状況で使われたもので、話し手の苛立ちの気持ちを伴う。(6)は後半部分が省略されたもので、上昇調で発音される。

【たり】

[N／Na　だったり]
[A-かったり]
[V-たり]

1 …たり…たりする

(1) 休みの日には、ビデオを見たり音楽を聞いたりしてのんびり過ごすのが好きです。
(2) コピーをとったり、ワープロを打ったり、今日は一日中いそがしかった。
(3) 子供が大きくなって家族がそろうことはめったにないのですが、年に数回はいっしょに食事したりします。
(4) 給料日前には昼食を抜いたりすることもある。
(5) アルバイトで来ている学生は曜日によって男子学生だったり女子学生だったりしますが、みなよく働いてくれます。
(6) 彼女の絵のモチーフは鳥だったり人だったりするが一貫して現代人の不安が描かれている。

いくつかのことがら、行為のうちの代表的なものを二、三あげる表現。(3)(4)のようにひとつだけ例をあげて、他にもあることを暗示する場合もある。「…たり…たりします／しました」のように、この文型だけで言い切りで終るときは、最後に来る動詞には必ず「たりする」が付く。

(誤) きのうの休みにはビデオを見たり、散歩したり、手紙を書きました。
(正) きのうの休みにはビデオを見たり、散歩したり、手紙を書いたりしました。

2 …たり…たり

(1) 何か心配なことでもあるのか彼は腕組をして廊下を行ったり来たりしている。
(2) 去年の秋は暑かったり寒かったりして秋らしい日は少なかった。
(3) 父は近頃あまり具合いがよくなく、寝たり起きたりだ。
(4) 薬はきちんと飲まなければいけない。飲んだり飲まなかったりでは効果がない。
(5) くつを買おうと思うが、いいと思うと高すぎたり、サイズがあわなかったりで、なかなか気に入ったのが見つからない。
(6) あすは山間部は晴れたり曇ったりの天気でしょう。

ある状態、行為を交互に繰り返すときの様子、あるいはふたつの対照的な状態を表す。よく使われる対照的な状態には例のほかに、「あったりなかったり」「上がったり下がったり」「泣いたり笑ったり」「乗ったり降りたり」「出たり入ったり」などがある。

3 …たり　したら／しては

(1) 英語の生活にもだいぶん慣れたが、早口で話しかけられたりしたらわからなくて困ることも多い。
(2) その人のいないところで悪口を言ったりしてはいけない。

ほかにもあるという含みで例をあげる言い方。(2)は「悪口を言ったらいけない」と意味はほとんど同じだが、はっきり言わないことで表現がやわらかくなる。

4 …たりして

(1) A：変だね、まだだれも来てないよ。
B：約束、あしただったりして。
(2) A：佐野さん、遅いわね。
B：ひとりだけ先に行ってたりして。

例を1つあげる言い方。ほかにも可能性があるという含みで、直接はっきり言うことを避けるときなどに使われる。距離を置いたやゆ的な表現。若い人のくだけた話しことばに使われることが多い。

【たりとも】

[…たりとも…ない]
[Nたりとも…ない]
[数量詞+たりとも…ない]

(1) 試験まであと一カ月しかない。一日たりとも無駄にはできない。
(2) 水がどんどんなくなっていく。これ以上は一滴たりともむだにはできない。
(3) 密林の中では、一瞬たりとも油断してはいけない。
(4) この綱領について変更は一字たりとも許されない。
(5) だれもが敵は一人たりとも逃がさないと決意していた。

最小の人数、最小の量も許容しないという意味で、「一人/一滴/一日たりとも…ない」などの形で使う。数量表現は「一」が普通である。ややくだけたときは「ひとりも」「一滴も」などとなる。文語表現で、かたい書きことばや、フォーマルな話しことば(会議、演説など)に用いる。

【たる】

文語の「てあり」からきている。どの表現も荘重な印象をあたえる。誇張された調子があり、かたい書きことばや、演説な

ど、フォーマルな話しことばでもちいる。

1 NたるN

（1）国家の指導者たる者は緊急の際にすばやい判断ができなければならない。

（2）国会議員たる者は身辺潔白でなければならないはずである。

（3）教師たる者は、すべてにおいて生徒の模範とならねばならないとここに書いてある。

（4）百獣の王たるライオンをカメラにおさめたいとサファリに参加した。

「…という（すぐれた）資格のあるもの」の意味。

2 NたるとNたるとをとわず

（1）救出にあたっては軍人たると民間人たるとを問わず、総力を結集せよ。

（2）医療活動は民間人たると、政府関係者たるとを問わず、全員を平等に扱う。

（3）この法律は市民たると外国人たるとを問わず等しく適用される。

「Xであっても、Yであっても関係なくどちらも」の意味。

3 Nたるべきもの

（1）それは、指導者たるべき者のとる行動ではない。

（2）後継者たるべき者は以下の資格を備えていなければならない。

（3）王たるべき者はそのようなことを恐れてはならない。

「…という資格をもつべき人、…という地位につくはずの人」の意味。後半には「当然…なければならない」などの文がきて、前半の資格地位をもつ者のあるべき姿を述べるのが普通である。

4 Nたるや

（1）そのショーの意外性たるや、すべての人の注目を集めるに十分であった。

（2）その姿たるや、さながら鬼のようであった。

（3）その歌声たるや、聞き入る聴衆のすべてを感動させるすばらしいものであった。

（4）救出に際しての彼らの活動たるや、長く記憶にとどめるに十分値するものであった。

ある特性を有する名詞を用いて、それが表すものを強調してとりあげ、どのような性質をもつか、どのような状態かを述べるのに用いる。ただし、人名などは用いられない。

（誤）山田先生たるや、すべての人を感動させた。

（正）山田先生の話し振りたるや、すべての人を感動させた。

文の主題を強調して提示する表現のひとつ。たとえば、（1）では「その意外性は…」という表現に比べて、誇張した言い方になる。

【たろう】

[N／Na　だったろう]

[A-かったろう]

[V-たろう]

（1）母は若いころはずいぶん美人だったろう。

（2）試験で大変だったろう。

（3）さぞや苦しかったろう。

（4）A：おなかがすいたろう。

　B：うん、ちょっとね。

（5）あの子はあんなに熱があるのに学校に出かけたが、今日一日だいじょうぶだったろうか。

（6）あわてて出かけて行ったが、無事間に合ったろうか。

述語のタ形に「だろう」がついた「ただろう」の「だ」が落ちたもの。意味・用法は「ただろう」と同じで、すでに成立していることについての推量を表す。書きことばでも話しこばでも使われる。（4）は話しことばの用法で、話し手の推量を聞き手に確認するもの。この場合はたいてい上昇調で発音される。（5）（6）の「たろうか」は話し手の疑念や心配の気持ちを表す。丁寧体は「たでしょう」。

→【だろう】

【だろう】

[N／Na　だろう]

[A／V　だろう]

書きことばとしては、男女別なく用いるが、話しことばとしては、一般に男性が用いる。丁寧な形は「でしょう」となる。

1 …だろう <推量>

（1）あしたもきっといい天気だろう。

（2）この辺は木も多いし、たぶん昼間も静かだろう。

（3）北海道では、今はもう寒いだろう。

（4）この程度の作文なら、だれにでも書けるだろう。

（5）これだけ長い手紙を書けば、両親も満足するだろう。

（6）彼がその試験問題を見せてくれた。ひどくむずかしい。わたしだったら、全然できなかっただろう。

（7）A：朝はずっと雪の中で鳥の観察をしていたんです。

　B：それは、寒かっただろうね。

（8）A：お母さんたちは今頃どこにいるかしら。

　B：もうホテルに着いているだろうよ。

（9）A：これでよろしいですか。

　B：ああ、いいだろう。

（10）A：どれにしましょうか。

　B：これがいいだろう。

下降調のイントネーションを伴って、話し手の推量を表す。「かもしれない」に比べて、話し手がその事を真実だと考え

ている度合いが高く、「たぶん」「きっと」などと共に使うことも多い。また、文脈によっては、推量ではなく、話し手の判断をややぼかして表すこともある。

2 …だろう <確認>

（1） A：君も行くだろう?
　　 B：はい、もちろん。

（2） A：美術館はバスをおりてすぐみつかりました。
　　 B：行くの、簡単だっただろう?

（3） やっぱり、納得できなくてもう一度自分で交渉に行ったんだ。わかるだろう、ぼくの気持ち。

上昇調のイントネーションを伴って、確認を表す。聞き手が同意してくれることを期待しているという含みがある。男性が使うのが普通。女性の言葉としては、「でしょう／でしょ」となる。話しことば。

3 …だろうか

（1） この計画に、母は賛成してくれるだろうか。

（2） 今回の試合のためにはあまり練習できなかった。いい成績があげられるだろうか。

（3） こんな不思議な話だれが信じるだろうか。

（4） 彼はこつこつと作品を作り続けているが、いつかその価値を認める人が出てくるだろうか。

（5） A：佐々木さん、こんな仕事を引き受けてくれるだろうか。
　　 B：だいじょうぶだよ。喜んで引き受けてくれるよ。

（6） このコンテスト、はたしてだれが優勝するだろうか。

（7） A：山下さん、欠席ですね。
　　 B：うん。病気だろうか。

（8） この選挙は、雨が降ったからだろうか、投票率が非常に低かった。

話し手がその事が起こる可能性について疑念を抱いたり、心配したりする気持ちを表す。

（3）は反語の表現で「だれが信じるだろうか、だれも信じないだろう」という意味。また、（5）のように、自分の疑念を投げ出すようにして、間接的に、聞き手に問いかけることもできる。（8）のように、挿入句的に用いて話し手の疑念を表すこともある。

4 …ではないだろうか

[N／Na　ではないだろうか]
[A／V　のではないだろうか]

（1） さっきすれちがった人は、高校のときの同級生ではないだろうか。

（2） この統計からは彼の述べているような予測をたてるのは無理ではないだろうか。

（3） 選手たちの調子がとてもいいから、今回の試合ではいい成績があげられるのではないだろうか。

（4） 一日十ページ書いていけば、来月中には完成できるのではないだろうか。

（5） 通子はけんかして以来少しやさしくなった。いろいろと反省したのではないだろうか。

（6） この道の両側に桜の木を植えれば、市民のいい散歩道になるのではないだろうか。

ある事が起こるかどうかについて推量を表す表現。「だろう」を使うほど自信をもって述べられないが、その事については肯定的だということを示す。たとえば、（3）では、話し手は、心の中で、確実ではないけれど、いい成績があげられると思っている。逆に可能性が低いと思っている場合は、「だろうか」の表現を使う。話しことばでは「（ん）ではないだろうか」となる。

5 Nだろうが、Nだろうが

（1） 相手が重役だろうが、社長だろうが、彼は遠慮せずに言いたいことを言う。

（2） 子供だろうが、大人だろうが、法を守らなければならないのは同じだ。

（3） 彼は、山田さんだろうが、加藤さんだろうが、反対する者は容赦しないと言っている。

（4） もし鉄道が使えなければ、ボートだろうが、ヘリコプターだろうが、とにかく使える方法でできるだけ早くそこに到着しなければならない。

「Xでも、Yでも関係なく、だれでも（何でも）」の意味。形容詞や動詞が用いられるときは、「暑かろうが、寒かろうが」「生きようが死のうが、」「雨が降ろうが降るまいが」のように「A-かろうが」「V-ようが」の形が使われる。

6 …だろうに

a …だろうに

（1） その山道は、子供には厳しかっただろうに、よく歩き通した。

（2） 忙しくて大変だっただろうに、よく期日までに仕上げたものだ。

（3） 共同経営者を失ったのは痛手だっただろうに、彼は一人で会社を立て直してしまった。

（4） 冬の水は冷たくてつらいだろうに、彼らは黙々と作業を続けていく。

（5） きちんと読めばわかっただろうに、あわてたばかりに誤解してしまった。

「…と思われるのに」という意味。話し手の同情、批判などがこめられることが多い。

b …だろうに

（1） あなたの言い方がきついから、彼女はとうとう泣き出してしまった。もっとやさしい言い方もあっただろうに。

（2） うちでグズグスしていなかった

ら、今頃は旅館に到着しておいしい晩ご飯を食べていただろうに。

（3）もしあの大金をこの会社に投資していたら、大儲けできただろうに。

（4）地図と磁石をもって行けば、迷ってもそんなにあわてることはなかっただろうに。

実際には起こらなかったことを残念に思う気持ちを表す。

7 …のだろう →【のだろう】

【ちがいない】

[N／Na　（である）にちがいない]
[A／V　にちがいない]

（1）あんなすばらしい車に乗っているのだから、田村さんは金持ちにちがいない。

（2）あそこにかかっている絵は素晴らしい。値段も高いにちがいない。

（3）学生のゆううつそうな様子からすると、試験はむずかしかったにちがいない。

（4）あの人の幸せそうな顔をごらんなさい。きっといい知らせだったにちがいありません。

（5）あの人は規則をわざと破るような人ではない。きっと知らなかったにちがいない。

（6）A：この足跡は?
　　B：あの男のものだ。犯人はあいつに違いない。

何らかの根拠にもとづいて、話し手が強く確信していることを表す。「だろう」に比べて話し手がもつ確信の度合い、思い込みの度合いが高い。書きことばではよく使うが、日常会話では、おおげさに響く傾向があり、（6）のような特殊な状況以外では、「きっと…と思います」などの表現を用いる。

【ちっとも…ない】

（1）この前の旅行はちっとも楽しくなかった。

（2）日本語がちっとも上達しない。

（3）A：ごめんね。
　　B：いや、いや。ちっともかまわないよ。

（4）妻が髪形を変えたのに、夫はちっとも気がつかなかった。

（5）久しぶりに帰国した友達のためにたくさんごちそうを作ったのに、疲れていると言ってちっとも食べてくれなかった。

（6）ダイビングはこわいものと思っていたが、やってみたら、ちっともこわくなかった。

「すこしも／ぜんぜん…ない」の意で否定を強めるときに使う。「すこしも」よりもくだけた話しことば。「ぜんぜん」とはちがい、回数を表す用法はない。

（誤）ちっとも行ったことがない。
（正）ぜんぜん行ったことがない。

【ちなみに】

（1）この遊園地を訪れた人は、今年五十万人に上りました。これは去年の三十万人を大きく上回っています。ちなみに迷子の数も千人と去年の倍近くありました。

（2）この人形はフランスで三百年前に作られたもので、同種のものは世界に五体しかないといいます。ちなみにお値段は一体五百万円。

（3）山田議員の発言は政局に大きな混乱をもたらした。ちなみに山田議員は一昨年も議会で爆弾発言をしている。

主要なことを述べたあとで、それに関連のあることを付け加えるのに使う。「参考までに述べると…」の意味。書きことば、あるいはかたい話しことば（ニュース、会議など）で用いる。この表現は、付加的な動作を表すのには使えない。

（誤）買い物に出かけた。ちなみに、友達のところに寄った。
（正）買い物に出かけた。ついでに、友達のところに寄った。

【ちゃんと】

1 ちゃんと

（1）めがねを新しいのに変えたら、ちゃんと見えるようになった。

（2）おじいさんは耳が遠いと言っているが本当は何でもちゃんと聞こえている。

（3）そのとき言われたことは今でもちゃんと覚えている。

（4）親戚の人にあったらちゃんと挨拶するように母に言われた。

（5）あの先生はみんながちゃんと席につくまで話し始めない。

（6）今朝は7時にちゃんと起きたが、雨で走りに行けなかった。

（7）この問題にちゃんと答えられた人は少ない。

（8）わたしは朝どんなに忙しくてもちゃんと食べることにしている。

「そうあるべきやり方で」という意味。いろいろな状況で使う。文脈によって具体的な意味はさまざまで、たとえば、（4）では社会習慣の上では適切に、非難をあびないようにふるまうこと、予定したことから逸脱しないで行うこと、など、正しいとか適切とみなされるありかた、やりかたに沿っているという意味で使われている。

2 ちゃんとする

（1）おばあさんはきびしい人だから、おばあさんの前ではちゃんとしなさい。

（2）昨日来たときは仕事場がひどくちらかっていたけれど、だれか

が片付けてちゃんとしたらしい。

（3）客に会う前にちゃんとした服に着替えた。

（4）ちゃんとした書類がないと、許可証はもらえない。

（5）A：これ、変な名前だね。
B：ええ、でもちゃんとしたレストランですよ。

（6）A：彼女のお父さんは、娘の結婚に反対しているそうですね。
B：ええ。相手を信用していないんです。わたしは、ちゃんとした人だと思いますよ。

その状況に合った適切なふるまいかたをしたり、適切な状態にすること。名詞の前では「ちゃんとした」を用い、「適切で、正しいものとして社会に受け入れられる」の意味になる。

【ちゅう】

1 Nちゅう <継続>

（1）会議中だから、入ってはいけない。

（2）「営業中」の札がかかっている。

（3）その件はただいま検討中です。

（4）課長の休暇中に一大事が起こった。

（5）工事中の道路が多くて、ここまで来るのに随分時間がかかった。

（6）勤務中は個人的な電話をかけてはいけないことになっている。

（7）彼女はダイエット中のはずなのに、どうしてあんなにたくさん食べ物を買い込むのだろう。

「ちゅう」は漢字「中」で書く。何かをしているところだ、ある状態が続いているところだ、という意味。この意味では、必ず「ちゅう」と読むことに注意。一緒に使う名詞は、一般に活動にかかわるもの。
例:電話中・交渉中・婚約中・執筆中・旅行中・タイプ中など。
「(名詞)中」を「じゅう」と読むこともあるが、この場合は、「一日中」「一年中」のように、「ある期間ずっと」の意味になる。

2 Nちゅう <期間>

（1）午前中は、図書館にいて、午後は実験室にいる予定だ。

（2）戦時中、一家はばらばらになっていた。

（3）夏休み中に水泳の練習をするつもりだ。

（4）彼は試験期間中に病気になって気の毒だった。

（5）この製品は、試用期間中に故障したら、ただで修理してもらえる。

時間を表す名詞とともに用いて、「ある期間」の意味を表す。ただし、「ごぜんちゅう」はあるが、「ごごちゅう」はない。

【ちょっと】

1 ちょっと <程度>

（1）ちょっと食べてみた。

（2）借りた本はまだちょっとだけしか読んでいない。

（3）目標額の10万円にはちょっと足りない。

（4）手紙をちょっと書き直した。

（5）韓国語は、ちょっとだけ話せる。

（6）ちょっと左へ寄ってください。

（7）今日はちょっと寒い。

（8）試験の問題はいつもよりちょっとむずかしかったが、なんとか解けた。

量の少なさ、程度の低さを表す。話しことばで使うのが普通。

2 ちょっと

a ちょっと <程度のやわらげ>

（1）ちょっと電話してきます。

（2）ちょっと用がありますので、これで失礼します。

（3）ちょっとおたずねしますが、この辺に有田さんというお宅はありませんか。

（4）すみません、ちょっと手伝ってください。

（5）A：ちょっとこの辺でお茶でも飲みませんか。
B：ええ、そうですね。

（6）A：これで決まりですね。
B：ちょっと待ってください。わたしはまだいいとは言っていません。

（7）A：おでかけですか。
B：ええ、ちょっとそこまで。

会話で用いる婉曲表現。量の少なさという意味は強くなく、程度が軽いことを匂わせる。話し手が自分の行為について述べる場合や、相手に頼んだりする場合などに使う。依頼などでは、「ちょっと」をつける方がやわらかく響く。(7)は、人に会ったときのあいさつの定型表現。

b ちょっと <語調のやわらげ>

（1）A：この手紙の文章は、ちょっとかたすぎませんか。
B：そうですか。じゃ、もう一度書き直してみます。

（2）A：山田さんが急病で、当分会社に出てこられないそうです。
B：そうか、それはちょっと大変だな。

（3）この問題は君にはちょっと難しすぎるんじゃないかな。

（4）一日で仕上げるのはちょっと無理だ。

（5）A：十時ではいかがでしょうか。

B：十時はちょっと都合が悪いんですけど。

「大変」「無理」「むずかしい」のような否定的な表現につけて、語調をやわらげるのに使う。

c ちょっと ＜言いさし＞

（1）A：この写真ここに飾ったらどう?
B：そこはちょっとね…。
（2）A：ご都合が悪いんですか。
B：ええ、ちょっと月曜日は…。
（3）A：このコピー機空いていますか?
B：あ、すみません。まだ、ちょっと…。

会話で使う。「ちょっと」だけ述べて、後の文は省略した形で、否定的な内容を暗示するのに使う。言いにくいことを回避する表現。たとえば、（1）では、話し手は、その場所があまり気にいらないという気持ちを示している。また、断りの表現などに付いて調子を和らげる。（2）（3）のように、後の文を省略すると、断りの表現などの代わりに用いられ、それだけで、相手に理解される。受諾など肯定的な意味を表す文の場合は省略しないのが普通。

3 ちょっと ＜プラス評価＞

（1）この本、ちょっとおもしろいよ。
（2）この先にちょっといいレストランをみつけた。
（3）A：彼がどんな小説を書くか、ちょっと楽しみです。
B：そうですね。
（4）A：新しい職場はどう?
B：課長さんがちょっとすてきな人なの。

「ちょっと」を、いい意味をもつ評価や属性を表す表現につけると、程度の低さより、話し手が普通以上によいと判断していることを示す、婉曲的な表現になる。「かなり」に近い。「すこし」にはこの用法はない。

4 ちょっと…ない

a ちょっと…ない ＜プラス評価＞

（1）こんなにおもしろい映画は最近ちょっとない。
（2）この本は読み出したらちょっとやめられませんよ。
（3）こんなおいしいもの、ちょっとほかでは食べられない。
（4）あの人のあんな演説は、ちょっとほかの人にはまねができないだろう。

否定表現とともに使って、否定を強調するが、普通以上に評価する場合に使うことが多い。（1）は、おもしろい映画に対するほめ言葉。

b ちょっと…ない ＜語調のやわらげ＞

（1）A：田中先生の研究室はどちらですか。
B：すみません。ちょっとわかりません。

（2）A：あしたまでに全部現像してもらえますか。
B：それは、ちょっとできかねます。
（3）A：今、ちょっと手が放せないので、あとでこちらからお電話します。
B：そうですか。じゃあ、あとでよろしく。

否定表現とともに使う。「すこし」という意味ではなく、否定の言い方を和らげるのに使う。たとえば、（1）のBのことばは、実際には「全然わからない」ということを婉曲に言っており、「すこしわからない部分がある」という意味ではない。

5 ちょっと ＜呼びかけ＞

（1）ちょっと、そこのおくさん、財布落としましたよ。
（2）ちょっと、これは何ですか。スープの中にハエが入ってるじゃないの。
（3）ちょっと、だれか来て手伝って。
（4）ちょっと、お願いだからもう少し静かにしてて。

人の注意を引き付けるのに使う。単に、呼びかけるだけでなく、イントネーションによって、非難、威嚇、哀願などの気持ちを表す。

6 ちょっとしたN

a ちょっとしたN ＜程度のやわらげ＞

（1）ちょっとしたアイデアだったが、大金になった。
（2）ちょっとした風邪がもとで、亡くなった。
（3）酒のつまみには、何かちょっとしたものがあればそれでいい。

「軽い」、「あまりたいしたものではない」、「ささいなもの」という意味。

b ちょっとしたN ＜プラス評価＞

（1）かれは、両親の死後、ちょっとした財産を受け継いだので、生活には困らない。
（2）パーティーでは奥さんの手料理が出た。素人の料理とはいえ、ちょっとしたものだった。
（3）彼の帰国は、まわりの人にとって、ちょっとした驚きだった。

普通以上だということ。「かなりのN」でいいかえられることが多い。「ちょっとしたN」は、ややぼかして控えめに判断・評価を述べる。

【つ…つ】

[R-つ R-つ]

（1）彼に会おうか会うまいかと悩んで、家の前を行きつ戻りつしていた。
（2）お互い持ちつ持たれつで、助け合いましょう。
（3）初詣の神社はものすごい人出で、押しつ押されつ、やっとのことで境内までたどり着いた。
（4）久しぶりに友人とさしつさされ

つ酒を飲んで何時間もしゃべった。

「行くー戻る」のような反対の意味を持つ動詞や「押すー押される」のように能動と受動の形の連用形を並べて、両方の動作が交互に行われることを表す。「行きつ戻りつ」「持ちつ持たれつ」などのように定型化した言い方で使う。

【つい】

(1) 太るとわかっていながら、あまりおいしそうなケーキだったので、つい食べてしまった。

(2) お酒はやめたはずだが、目の前にあると、つい手が出る。

(3) そのことは口止めされていたのに、つい口をすべらせて言ってしまった。

(4) おしゃべりが楽しくてつい遅くなってしまった。

(5) よく周りから声が大きいと苦情がでるので気をつけてはいるのだが、興奮するとつい声が高くなる。

してはいけないと思っていることとか、自分でしないようにしていることを抑制がきかずにしてしまうという意味を表す。「V-てしまう」と一緒に使う事が多い。

【ついて】

→【について】

【ついでに】

1 ついでに

(1) 図書館へ本を借りにいった。ついでに、近くに住んでいる友達のところへ行ってみた。

(2) でかけるのなら、ついでに、この手紙を出して来てくれませんか。

その機会を利用してという意味。本来の目的を果たすときに、追加の形で何か他のことをもする場合に用いる。

2 …ついで(に)

[Nのついで]

[Vついで]

(1) 京都へ行くついでに、奈良を回ってみたい。

(2) 洗濯機を直すついでに、ドアの取っ手も直してもらった。

(3) 姉は実家に遊びに来たついでに、冷蔵庫の中のものをみんな持って帰った。

(4) 買い物のついでに、図書館へ行って本を借りて来た。

(5) 兄は出張のついでだといって、わたしの仕事場へ会いに来た。

本来の目的を果たす行為に加えて、追加の形でほかの行為もするという意味を表す。名詞は、活動を表すものを用いる。

【ついては】

(1) ≪手紙≫この秋に町民の大運動会を開催することになりました。ついては、皆様からの御寄付をいただきたく、お願い申し上げます。

(2) 今の会長が来月任期満了で引退します。ついては、新しい会長を選ぶために候補者をあげることになりました。

「そういう理由で」という意味。書きことば的で、婉曲な言い方。聞き手(読み手)にフォーマルな形で何かを報告したり、頼んだりするような場合に使われることが多い。

【ついに】

1 ついにV-た

(1) 1995年、トンネルはついに完成した。

(2) 登山隊は、ついに頂上を征服した。

(3) 待ちに待ったオリンピックがついに始まった。

(4) 留学生の数は年々増え続け、ついに10万人を越えた。

(5) 客は、一人去り二人去りして、ついに誰もいなくなった。

(6) 遭難して五日目、食糧も水もついに底をついた。

さまざまな経過を経てとうとう実現する様子を表す。(1)(2)のように、長い時間がかかって、あるいは、たいへんな苦労をして、何かが完成したり成功したような場合や、(3)のように何か大きなできごとが始まったり終わったりする場合によく使われる。また、(4)のように、区切りや目標となるような大きな数値に達した場合や、(5)(6)のように、状態がしだいに変化していって、話し手が予想していた最終的な段階に至った場合に使う。

「ついに」は、途中の経過よりも起こったできごとの方に重点をおいた表現で、次の(例1)は、「完成した」という結果に重点がおかれている。(例2)の「やっと」は、「たいへんな工事で時間がかかった」という途中の経過のほうに重点をおいた表現である。

(例1) 1995年トンネルはついに完成した。

(例2) 1995年トンネルはやっと完成した。

似た表現に「やっと」「とうとう」がある。詳しくは【やっと】1を参照。

2 ついにV-なかった

(1) 閉店時間まで待ったが、彼はついに姿を表さなかった。

(2) 彼の願いはついに実現しなかった。

(3) 彼はついに最後まで謝らなかった。

(4) 犯人はついにわからずじまいだった。

話し手の期待や予想が、最後まで実現しなかった場合に使う。(1)〜(4)の例に「とうとう」を使うことはできるが、「やっと」は使えない。

3 ついには

(1) この病気は、次第に全身が衰弱し、ついには死亡するという恐ろしい病気だ。

(2) 血のにじむような練習に明け暮れて、ついには栄光の勝利を勝ち取った。

さまざまな経過を経て、最終的にある結末に至る様子を表す。書きことば的表現。

【つきましては】

(1) ≪招待状≫この度、新学生会館が完成いたしました。つきましては、次の通り落成式を挙行いたしますので、ご案内申し上げます。

(2) 先月の台風で当地は大きな被害を受けました。つきましては皆様にご支援いただきたくお願い致します。

「ついては」の丁寧な表現。公式の手紙などでよく使われる。

→【ついては】

【っきり】

(1) ふたりっきりで話しあった。

(2) 一晩中つきっきりで看病した。

(3) 家を飛び出していったっきり戻って来ない。

「きり」の話しことばでの言い方。

→【きり】

【っけ】

[N／Na　だ(った)っけ]
[A-かったっけ]
[V-たっけ]
[…んだ(った)っけ]

(1) あの人、鈴木さんだ(った)っけ?

(2) 君、これ嫌いだ(った)っけ?

(3) この前の日曜日、寒かったっけ?

(4) もう手紙出したっけ?

(5) 明日田中さんも来るんだっけ?

(6) しまった! 今日は宿題を提出する日じゃなかったっけ。

はっきり記憶していないことを確認するのに使う。(6)のように自分に確認するような気分で独り言を言うときにも使う。くだけた話しことば。丁寧体は「N／Naでしたっけ」「V-ましたっけ」「…んでしたっけ」となるが、「A-かったですっけ」という形はない。話しことば。

【っこない】

[R-っこない]

(1) A：毎日5時間は勉強しなさい。
　　B：そんなこと、できっこないよ。

(2) いくら彼に聞いても、本当のことなんか言いっこないよ。

(3) 俳優になんかなれっこないと親にも言われたけれど、夢は捨てられなかった。

(4) こんなひどい雨では頂上まで登れっこないから、きょうは出かけるのはやめよう。

(5) 山口さんなんか、頼んだってやってくれっこないよ。

動詞の連用形と共に用いて、ある事の起こる可能性を断定的に強く否定する。「絶対…しない」、「…するはずがない」「…するわけがない」などに近いくだけた話しことば。親しい間柄の会話などで使う。

【ったら】

1 Nったら

(1) 太郎ったら、女の子の前で赤くなってるわ。

(2) A：松井さん昔はほんとうに小さくてかわいかったけど、今はすっかりいいお母さんだね。
　　B：まあ先生ったら。小学校を卒業してからもう20年ですもの。

(3) A：このカレンダーの赤丸なんだったかな。
　　B：もうあなたったら忘れたの。私たちの結婚記念日じゃありませんか。

(4) 多恵子ったら、どうしたのかしら。いくら呼んでも返事がないけど。

(5) お母さんったら。ちゃんと話を聞いてよ。

「といったら」の意味で、くだけた話しことばに用いる。話し手が親しみ、からかい、たしなめ、非難、心配などの気持ちを込めて話題に取り上げるのに用いる。主に子供、女性が使う。

2 Vったら

(1) こっちへ来いったら。

(2) やめろったらやめろよ。

(3) やめてったらやめてよ。

命令形や、テ形に付いて、「こう言っているのにどうしてそうしないのだ」という気持ちで相手に強く言うのに用いる。同じ動詞を繰り返して使うことが多い。命令形は男性が使う。くだけた話しことば。

3 …ったら

(1) A：ひとりで出来るの?
　　B：出来るったら。

(2) A：飲んだらコーヒーカップちゃんと洗って。
　　B：うん、わかった。
　　A：ほんとにわかったの? コーヒーカップは?
　　B：わかったったら。同じことそう何度も言うなよ。

相手の言葉を受けて、相手の自分に対する疑いなどをはねつける気持ちを表す。くだけた話しことば。

4 ったらない

(1) うちのおやじ、うるさいったらない。

(2) あの時のあいつのあわてかたったらなかったよ。

程度が激しいことを表す。くだけた話しことば。

【つつ】

動詞の連用形と共に使う。書きことばやかたい会話で用いるのが普通。

1 R-つつ <同時>

(1) かれは、「春ももう終わりですね」と言いつつ、庭へ目をやった。

(2) 静かな青い海を眺めつつ、良子は物思いにふけっていた。

(3) この会議では、個々の問題点を検討しつつ、今後の発展の方向を探っていきたいと思います。

(4) その選手はけがした足をかばいつつ、最後まで完走した。

同一の主体がひとつの行為を行いながら、同時にもうひとつの行為をすることを表す。「...ながら」とだいたい同義だが、「...つつ」の方は、書きことばとして用いる傾向が強い。

2 R-つつ <逆接>

a R-つつ

(1) 夏休みの間、勉強しなければいけないと思いつつ、毎日遊んで過ごしてしまった。

(2) 早くたばこをやめなければいけないと思いつつ、いまだに禁煙に成功していない。

(3) その言い訳はうそと知りつつ、わたしは彼にお金を貸した。

(4) 青木さんは事業のパートナーを嫌いつつ、常に協力を惜しまなかった。

相反する二つのことがらを結びつけるのに用いる。たとえば、(1)は、「思っていたけれど」の意味。「のに」や「ながら」の逆接的用法に近い。(3)の「うそと知りつつ」は慣用的によく用いられる表現。

b R-つつも

(1) 彼は、歯痛に悩まされつつも、走り続けた。

(2) 「健康のために働き過ぎはよくないのよ」と言いつつも、彼女は決して休暇をとらないのだ。

(3) 医者に行かなければと思いつつも、忙しさに紛れて忘れてしまった。

(4) 設備の再調査が必要だと知りつつも無視したことが、今回の大事故につながったと思われる。

【つつ】2aと同じ。

3 R-つつある

(1) 地球は温暖化しつつある。

(2) この会社は現在成長しつつある。

(3) この海底では長大なトンネルを掘りつつある。

(4) 手術以来、彼の体は順調に回復しつつある。

(5) 若い人が都会へ出て行くため、五百年の伝統のある祭りの火がいまや消えつつある。

(6) 彼は今自分が死につつあることを意識していた。

(7) その時代は静かに終わりつつあった。

動作や作用がある方向へ向かって続いている状態を表す。「ている」に対応する場合が多いが、異なる点がいくつかある。(1)から(3)までは、「ている」で言いかえてもだいたい同じ意味になるが、(4)から(7)までのように瞬間的変化を表す動詞とともに使ったときは「ている」と違う意味になる。瞬間的変化を表す動詞を伴った場合、「つつある」は変化が生じて、それが完成する方向に向かっているという意味であるが、「ている」は変化が完成した後の状態を表す。したがって(6)の「死につつある」を「死んでいる」に変えるとおかしな文になってしまう。

また、完成の意味を持たない動詞には、「つつある」は用いにくく、「彼女は泣きつつある」とは言えない。

【って】

1 NってN

(1) これ、キアリーって作家の書いた本です。

(2) A：留守の間に人が来ましたよ。

B：なんて人?

(3) 佐川さんって人に会いました。友達だそうですね。

(4) 駅前のベルって喫茶店、入ったことある?

くだけた会話で使う表現。「NというN」の縮まった形。「キアリーっていう作家」「なんていう人」のように「NっていうN」の形でも使う。話し手が知らない、あるいは聞き手が知らないだろうと考えられるものごとについて述べるときに使う。疑問詞「何」のあとでは「って」ではなく、「なんて」になる。

(誤) なんって人。

(正) なんて人。

2 ...って <主題>

[Nって]

[Aって]

[V(の)って]

(1) WHOって、何のことですか。

(2) ヒアリングって、何のことですか。

(3) ゲートボールって、どんなスポーツですか。

(4) 赤井さんって、商社に勤めているんですよ。

(5) 山田課長って、ほんとうにやさしい人ですね。

(6) うわさって、こわいものです。

(7) 若いって、すばらしい。

(8) 都会でひとりで暮らす(の)って、大変です。

(9) 反対する(の)って、勇気のいることです。

(10) どちらかひとつに決める(の)って、むずかしい。

そのことを話題として取り上げて、定義や意味について述べたり、評価を与えたりするのに使う。くだけた会話の表現。定義や意味について述べる場合は、かたい書きことばで、「Nとは」に当たる。また、(8)のように動詞を用いた句の場合は、「Vのは…だ」に対応する話しことばの表現。

3 …って <引用>

a …って

(1) かれはすぐ来るっていってますよ。

(2) それで、もうすこし待ってくれっていったんです。

(3) A：お母さん、きょうは、いやだって。
B：じゃあ、いつならいいの。

(4) A：電話して聞いてみたけど、予約のキャンセルはできないって。
B：ああ、そう。

文を引用する「と」に対応するくだけた会話の表現。あらたまった会話以外では、広く用いられ、男性、女性の別なく使う。(1)は「かれはすぐ来るといっていますよ。」の意味。(3)(4)のように、あとの部分を省略して、聞いたことなどを伝える表現としても使う。

4 …って

(1) A：これ、どこで買ったの。
B：どこって、マニラだよ。

(2) A：もうこの辺でやめてほしいんだが。
B：やめろって、一体どういうことですか。

相手のいったことをくりかえして、詰問に対して応酬したり、反問したりするのに用いる。くだけた会話の表現。「…というのは」という表現に対応することが多い。

5 んだって <伝聞>

[N／Na　なんだって]
[A／V　んだって]

(1) あの人、先生なんだって。

(2) 山田さん、お酒、きらいなんだって。

(3) あの店のケーキ、おいしいんだって。

(4) 鈴木さんがあす田中さんに会うんだって。

(5) A：あの人、先生なんだって?
B：うん、英語の先生だよ。

(6) A：山田さん、お酒、きらいなんだって?
B：ああ、そう言ってたよ。

(7) A：あの店のケーキ、おいしいんだって?
B：いや、それほどでもないよ。

(8) A：鈴木さんがあす田中さん

に会うんだって?
B：うん、約束してるんだって。

「のだ／んだ」と、<引用>の「って」が結び付いた形。人から聞いて得た情報であること(伝聞)を表す。(5)〜(8)は上昇調で、聞いたことを持ち出して聞き手に確認の問いかけをする表現。男女の別なく、くだけた会話で使う。「なのだって／のだって」はほとんど使わず「んだって」「んですって」になることが多い。

「んですって」はおもに女性が使うが、「です」が入っていても目上に対しては使えず、「あの人は先生なんだそうです」のように言う。

6 …たって

(1) そんなこと、したってむだだ。

(2) そんなこと、言ったって、いまからもどれないよ。

(3) ここから呼んだって、聞こえないだろう。

→【たって】

【ってば】

(1) A：この字、間違ってるんじゃないか?
B：あってるよ。
A：いや、絶対、間違ってるってば。

(2) A：宿題やったの?
B：うん。
A：もう9時よ。
B：やったってば。

(3) A：お母さん
B：....
A：お母さんってば。聞いてるの?

親しい間柄同士のくだけた会話で、話し手の主張を強調するのに使う。自分の主張が通じなくて話し手が少しいらだっているような場合に使われる。また(3)のように相手の注意を引くときに用いることもある。

【っぽい】

[Nっぽい]
[Rっぽい]

(1) 男は白っぽい服を着ていた。

(2) あの人は忘れっぽくて困る。

(3) 30にもなって、そんなことで怒るなんて子供っぽいね。

(4) この牛乳水っぽくてまずいよ。

(5) 死ぬだとか葬式だとか、湿っぽい話はもうやめよう。

名詞や動詞の連用形に付いて、「その感じがする・傾向がある」などの意味を表すイ形容詞を作る。

(1)のように「赤・白・黒・黄色・茶色」など色を表す名詞と共に用いられて、「その色をおびている・その色に近い」という意味を表す。(2)のように「怒る・ひがむ・ぐちる・忘れる」などの動詞の連用形に付いて、「すぐに…する・よく…する」という人の性質を表す。また、

(3)のように「子供・女・男・やくざ」等に付いて、「子供／やくざのようだ」「いかにも女／男という感じがする」という意味を表す。

そのほか「水っぽい(水の量が多くて薄い)」「湿っぽい(湿っている感じがする、陰気な)」「熱っぽい(熱がある感じがする)」などがある。「子供っぽい・水っぽい」は話し手のマイナス評価を含む。プラス評価を表すときには「子供らしい・みずみずしい」が用いられる。

【つまり】

1 つまり ＜言いかえ＞

(1) 彼は、母の弟、つまり私の叔父である。

(2) 両親は、終戦の翌年、つまり1946年に結婚した。

(3) 相思相愛の仲とは、つまりお互いのことを心底愛し合っている関係のことである。

(4) A：この件については、ちょっと考えさせてください。
B：つまり「引き受けていただけない」ということですね。

語句や文を受けて、それを同じ意味内容をもつ別の語句や表現で言いかえる用法。たとえば(4)は相手の発言を受けて、それを話し手が自分の言葉で言いかえている。「すなわち」に近いが、「つまり」の方が話しことば的である。したがって、(4)のような会話では「すなわち」での言いかえは不自然である。

2 つまり(は) ＜結論＞

(1) つまり、責任は自分にはないとおっしゃりたいのですね。

(2) 子供の教育は、つまりは、家庭でのしつけの問題だ。

(3) A：まあ、それほど忙しいというわけでもないんですけど…。
B：つまり、君は何が言いたいんだ。

(4) 私の言いたいことは、つまり、この問題の責任は経営者側にあって…。そのつまり、社員はその犠牲者だということです。

途中の経過はいちいち説明しないで、最終的な結論を述べる場合に用いる。(1)(3)は、聞き手の結論を確認したり促す用法。(2)のように「つまりは」の形で用いられることもある。(4)は、話しことばで間つなぎ的に使われる用法。「結局」「要するに」で言いかえられることが多い。

【つもり】

1 V-るつもり

a V-る／V-ない　つもりだ

(1) 来年はヨーロッパへ旅行するつもりだ。

(2) 友達が来たら、東京を案内するつもりだ。

(3) たばこは、もう決してすわないつもりだ。

(4) 山本さんも参加するつもりだったのですが、都合で来られなくなってしまいました。

(5) A：これから、美術館へもいらっしゃいますか。
B：ええ、そのつもりです。

意志、意図を表す。話し手の意志でも、第三者の意志でもかまわない。「V-ないつもりだ」は、ある行為を行わないという意志を示す。また、動詞部分を省略する場合は、(5)のように「その」をつける。「はい、つもりです」というのは間違い。

b V-るつもりはない

(1) この授業を聴講してみたい。続けて出るつもりはないけれど。

(2) 趣味で描いていた絵が展覧会で入選して、売れたが、プロになるつもりはない。

(3) 今すぐ行くつもりはないが、アメリカのことを勉強しておきたい。

(4) この失敗であきらめるつもりはないけれど、やはりひどくショックなのには変わりがない。

(5) このけんかはあの人達が始めたことで、わたしにはそんなことをするつもりは全くなかったんです。

(6) A：この条件で何とか売っていただけないでしょうか。
B：いくらお金をもらっても、この土地を売るつもりはない。帰ってください。

話し手の「…しよう」という意志の存在を否定するのに用いる。この表現を用いる場合、話し手は、その状況で聞き手が予想あるいは期待しそうな行為を想定した上で、そのようなことをする意志はないと否定する。(3)(4)のように、聞き手の予測しそうな内容について述べて、前置きとする場合もある。

c V-るつもりではない

(1) すみません、あなたの邪魔をするつもりではなかったんです。

(2) A：彼はあなたが批判したといって気にしていましたよ。
B：あの、そんなつもりではなかったんです。

話し手の「…しよう」という意志の存在を否定するのに用いる。自分のとった行為や態度について誤解を招きそうな場合に、「本当はそんな意図はない／なかった」と弁解したり、自己弁護したりするために用いることが多い。「つもりはない」に言いかえられる。

d V-るつもりで

(1) 今日限りでやめるつもりで、上司に話しに行った。

(2) 彼女は彼と結婚するつもりでずっと待っていた。

(3) 今回の試合には絶対負けないつもりで練習に励んで来た。

「そういう意志をもって」の意味。

2 …つもりだ

[Nのつもりだ]
[Na なつもりだ]
[Aつもりだ]
[V-た/V-ている　つもりだ]

a …つもりだ ＜信念＞

(1) ミスが多かったが、今日の試合は練習のつもりだったからそれほど気にしていない。

(2) まだまだ元気なつもりだったけど、あの程度のハイキングでこんなに疲れてしまうとはねえ。もう年かなあ。

(3) まだまだ気は若いつもりだよ。

(4) よく調べて書いたつもりですが、まだ間違いがあるかもしれません。

(5) A:君の仕事ぶり、評判いいよ。
B:そうですか。ありがとうございます。お客様にご満足いただけるよう、毎日ベストをつくしているつもりです。

主語が1人称の場合、話し手がそう思っている、そう信じている、という意味を表し、それが他の人が事実だと考えることとくいちがっているかどうかは関係がない。

b …つもりだ ＜反事実＞

(1) なによ、あの人、女王のつもりかしら。

(2) あの人は自分では有能なつもりだが、その仕事ぶりに対する周囲の評価は低い。

(3) 彼女のあの人を小ばかにしたような態度は好きじゃないな。自分ではよほど賢いつもりなんだろうけどね。

(4) 君はちゃんと説明したつもりかもしれないが、先方は聞いてないといっているよ。

(5) 彼女はすべてを知っているつもりだが、本当は何も知らない。

主語が2人称や3人称の場合、その人が信じていることが(話し手や他の人の考える)事実とくいちがっている、という意味。

c V-たつもりはない

(1) 私はそんなことを言ったつもりはない。

(2) あの人、怒ってるの? からかったつもりはないんだけどねえ。

(3) A:彼、あなたに服をほめられたって喜んでたわよ。
B:こまったな。ほめたつもりはないんだけどな。

自分の行為に対する相手の解釈・判断を否定する場合に使う。(3)は「そんなつもりはないんだけどな」とも言える。

3 V-たつもりで

(1) 旅行したつもりで、お金は貯金することにした。

(2) 学生たちはプロのモデルになったつもりで、いろいろなポーズをとった。

(3) 昔にもどったつもりで、もう一度一からやり直してみます。

(4) 完成までまだ一週間かかるのに、もう終わったつもりで、飲みに行った。

(5) 死んだつもりで頑張ればできないことはない。

ある行為をする前提として、仮に想定してという意味を表す。「したと見なして、したと考えて」「したと仮定して」などに言いかえられる。「死んだつもりで」は強い決心で何かをする様子を表す慣用的表現。

【つれて】

→【につれて】

【て】

[N/Na　で]
[A-くて]
[V-て]

名詞とナ形容詞には「で」がつく。イ形容詞では「くて」。「ない」には「なくて」「ないで」の2つの形がある。動詞の場合、辞書形がグ・ヌ・ブ・ムで終るものは「で」、それ以外は「て」となる。

(1) 朝ご飯を作って、子供を起こした。

(2) しっかり安全を点検して、それからかぎをかけた。

(3) まず、買い物をして、それから、映画を見て、帰って来た。

(4) 電話をかけて、面会の約束をとりつけて、会いに行った。

(5) 山田さんがやめて、高田さんが入った。

(6) びっくりして、口もきけなかった。

(7) 着物を着て、出掛けた。

(8) 地下鉄ははやくて安全だ。

(9) 外が真っ暗でこわかった。

(10) めずらしい人から手紙をもらってうれしかった。

前の節と後ろの節をゆるやかに結びつけるのに用いる。(3)(4)のように「…て」を二つ以上使うこともできる。

行為を表す文を連結する場合は、連続的に起こることを述べる。(1)、(2)など。また、文脈によって対比的に使ったり、軽い理由を表したり、行為の手段や付随する状況を表すこともある。

形容詞など属性や状態を表す文では、ふたつの属性を並べる場合や、「…て」の部分が軽く理由を表す場合がある。(10)のように動作性の表現のあとに形容詞などの状態性の文がくると軽く理由を表す表現になることが多い。

いくつかの行為や状態が交代して起こる場合、また時間の順とかかわりなく述べる場合は、「て」ではなく、「たり」を用いる。

【て…て】

[Na で Na で]
[A-くて A-くて]
[V-て V-て]

(1) 連絡がいつまで待っても来ないので、不安で不安で仕方がなかった。
(2) お土産を買い過ぎたので、トランクが重くて重くて腕がしびれそうだった。
(3) はじめて着物を着たら、帯がきつくてきつくて何も食べられなかった。
(4) 走って走ってやっと間に合った。
(5) 一晩中飲んで飲んで、飲みまくった。

同一の動詞や形容詞をくりかえすことによって、程度を強調する。会話で用いるのが普通。

【で】

1 で

(1) ≪写真を見せながら≫これが、田中先生の奥さん。で、こっちが息子さんの孝君。
(2) あしたから、試験なんだ。で、この2、3日はほとんど寝てないんだ。
(3) A：私には、ちょっと無理じゃないかと思うんですが。
B：で？ どうだと言うの。
(4) A：今の仕事やめようと思っているんです。
B：ああ、そう。で、やめた後、どうするつもりなんだ。
(5) ようやく結婚式の日取りも決まりました。で、実は先生にお願いがあるのですが。

話し手、あるいは聞き手の前の発言を受けて、そこから話を続けたり、相手に情報提供を求めたりする場合に用いる。「それで」が短くつまったもので、普通、話しことばで用いられる。たいていの場合、「それで」で言いかえができるが、(5)のように、依頼を切り出すような場合は、「そこで」との置きかえも可能。

→【それで】、【そこで】、【そして】、【それから】

2 …で

(1) 彼女は病気で寝ています。
(2) ちょっと休んでいって下さい。

→【て】、【ていく】

【てあげる】

1 V-てあげる

(1) おばあさんが横断歩道で困っていたので、手を引いてあげた。
(2) 妹は母の誕生日に家中の掃除をしてケーキを焼いてあげたらしい。
(3) この暖かいひざかけ、お母さんに一枚買ってあげたら喜ばれ

ますよ。
(4) せっかくみんなの写真を撮ってあげようと思ったのに、カメラを忘れてきてしまった。
(5) A：何を書いているの。
B：できたら、読ませてあげる。
(6) A：ごはん、もうできた？
B：まだ。できたら呼んであげるから、もう少し待ってて。

他の人のために、話し手(または話し手の側の人)が何かの行為をすることを表す。行為を受ける人が聞き手であるときは、(5)(6)のように対等の関係で、なおかつ親しい人でないとおしつけがましく聞こえ、失礼になる。話しことばでは「話してあげる→話したげる」「読んであげる→読んだげる」のように「V-たげる」の形になることも多い。

なお、他の人の体の一部や持ち物に対して行為をする場合や他の人に直接働き掛ける場合は「…に V-てあげる」とは言えない。

(誤) おばあさんに手を引いてあげた。
(正) おばあさんの手を引いてあげた。
(誤) 友達に荷物を持ってあげた。
(正) 友達の荷物を持ってあげた。
(誤) キムさんに手伝ってあげた。
(正) キムさんを手伝ってあげた。

2 V-てあげてくれ(ないか)
V-てあげてください

(1) ケーキを作りすぎたので、おばあさんに持っていってあげて下さい。
(2) 太郎くん、今度の日曜日、暇だったら花子さんの引っ越しを手伝ってあげてくれない？ 私、用事があってどうしても行けないのよ。

第三者の利益になる行為をしてほしいと依頼するときに用いる。その第三者が話し手側の人間である場合には「…てやってくれ／くれないか／ください」を使うほうが普通。

【てある】

[V-てある]

(1) テーブルの上には花が飾ってある。
(2) A：辞書どこ？
B：辞書なら机の上においてあるだろ。
(3) 黒板に英語で Goodbye!と書いてあった。
(4) 窓が開けてあるのは空気を入れかえるためだ。
(5) あしたの授業の予習はしてあるが、持っていくものはまだ確かめていない。
(6) 起きてみると、もう朝食が作ってあった。
(7) 推薦状は準備してあるから、いつでも好きなときにとりにきてください。
(8) 電車の中に忘れたかさは、事

務所に届けてあった。

(9) ホテルの手配は、もうしてあるので心配ありません。

(10) パスポートはとってあったので、安心していたら、ビザも必要だということが分かった。

(11) その手紙は、カウンターにおかれてあった。

他動詞を用いて、だれかがした行為の結果として残っている状態を表す。文脈によっては「将来に備えて何かを行う」という意味が感じられる場合がある。

　動詞の意味上の目的語が主語になり、動作主はことばに表されないことが多いが動作主の存在は含意されている。「窓があけてある」と似た表現に「窓があいている」があるが、こちらは、動作主の存在を含意しない。「あけてある」のほうは言葉で表現しなくても動作主の存在が感じられるが、「あいている」のほうにはそれが感じられない。また(11)のように受身が用いられると、動作主の存在がより強く感じられるようになる。「ておく」との違いについては【ておく】を参照。

【であれ】

[NであれNであれ]

(1) 晴天であれ、雨天であれ、実施計画は変更しない。

(2) 貧乏であれ、金持ちであれ、彼にたいする気持ちは変わらない。

(3) 試験の時期が春であれ秋であれ、準備の大変さは同じだ。

(4) アジアであれ、ヨーロッパであれ、戦争を憎む気持ちは同じはずだ。

「どちらの場合であっても」の意味。後ろには事態に変わりがないことを示す表現が続くことが多い。「…であろうと…であろうと」に言いかえられる。かたい話しことばや、フォーマルな書きことばで使う。主として名詞が用いられるが、ナ形容詞を用いることもある。イ形容詞の場合は、「あつかれ、さむかれ」「よかれ、あしかれ」のように「…かれ…かれ」の形になる。

【であろうと】

1 Nであろうと、Nであろうと、

(1) 雨であろうと、雪であろうと、当日は予定通り行う。

(2) トラックであろうと、軽自動車であろうと、ここを通る車はすべてチェックするようにという指令が出ている。

(3) 猫であろうと、虎であろうと、動物の子供がかわいいのは同じだ。

「どちらの場合であっても」の意味。後ろには事態に変わりがないことを示す表現が続くことが多い。「…であれ…であれ」と言いかえられる。かたい話しことばやフォーマルな書きことばで使う。主として名詞が用いられるが、ナ形容詞を用

いることもある。イ形容詞の場合は「あつかろうとさむかろうと」「よかろうとわるかろうと」のように「…かろうと…かろうと」の形になる。

2 …であろうとなかろうと

[N／Na　であろうとなかろうと]

(1) 休日であろうとなかろうと、わたしの仕事には何も関係ない。

(2) 観光地であろうとなかろうと、休暇が楽しく過ごせればどこでもいい。

(3) 仕事であろうとなかろうと、彼は何ごとにも全力をつくさないと気がすまない。

(4) 彼が有名であろうとなかろうと、つり仲間としてはほかの人と同じだ。

「そうでもそうでなくても」の意味。後ろには「どちらでも同じだ」という内容が続く。

【ていい】

[N／Na　でいい]

[A-くていい]

[V-ていい]

(1) この部屋にあるものは自由に使っていい。

(2) ちょっとこの辞書借りていいかしら。

(3) 3000円でいいから、貸してくれないか。

許可や譲歩を表す。「…てもいい」の1と4と同じだが、「…ていい」はもっぱら話しことばで使う。

→【てもいい】1、【てもいい】4

【ていく】

1 V-ていく ＜移動時の様態＞

(1) 学校まで走っていこう。

(2) 重いタイヤを転がしていった。

(3) 時間がないからタクシーに乗って行きましょう。

(4) トラックは急な坂道をゆっくり登っていった。

どんな動作をしながら行くのか、またはどんな手段で行くのかを表す。

→【てくる】1

2 V-ていく ＜遠ざかる移動＞

(1) あの子は、友達とけんかして、泣きながら帰っていった。

(2) ブーメランは大きな弧を描いて彼のもとに戻って行きました。

(3) 船はどんどん遠くに離れて行く。

話し手から遠ざかることを表す。

3 V-ていく ＜継起＞

(1) あと少しだからこの仕事をすませていきます。

(2) A：じゃ、失礼します。
B：そんなこと言わないで、ぜひうちでご飯を食べていって下さいよ。

(3) 疲れたからここで休んでいくこ

とにしましょう。

（4）叔母の誕生日だから、途中でプレゼントに花を買って行きました。

ある行為をしてから行くことを表す。どこかに行くことを前提としてある行為をすることを表すのであって、行くこと自体よりも行く前の行為の方に重点がある。

4 V-ていく＜継続＞

（1）結婚してからも仕事は続けていくつもりです。

（2）今後もわが社の発展のために努力していくつもりだ。

（3）日本ではさらに子供の数が減少していくことが予想される。

（4）見ている間にもどんどん雪がつもっていく。

（5）その映画で評判になって以来、彼女の人気は日増しに高まっていった。

（6）当分この土地で生活していこうと思っている。

ある時点を基準にして、それより先に向かって変化が進展し続けたり行為を続けたりすることを表す。

5 V-ていく＜消滅＞

（1）この学校では、毎年五百名の学生が卒業していく。

（2）見てごらん、虹がどんどん消えていくよ。

（3）小さいボートは木の葉のように渦の中に沈んでいった。

（4）毎日交通事故で多くの人が死んでいく。

（5）仕事についても3ヶ月ぐらいで辞めていく人が多いので困っている。

（6）英語の単語を覚えようとしているが、覚えたはしから忘れていく。

存在していたものがなくなったり、話し手の視界から遠ざかったりすることを表す。

【ていけない】

[V-ていけない]

（1）この音楽を聞くたびに、別れた恋人のことが思い出されていけない。

（2）こんな光景を見ると涙がでていけない。

（3）最近若い人の言葉使いが気になっていけない。

ある感情が自然に（繰り返し）起きてくるが、どうしようもできないという意味を表す。やや古風な表現で、「…てしかたがない」とだいたい同じ意味。

【ていただく】

動詞のテ形に「いただく」のついたもの。さらに丁寧な言い方に、「おR-いただく」「ごNいただく」がある。

1 V-ていただく＜受益＞

（1）友達のお父さんに、駅まで車

で送っていただきました。

（2）高野さんに教えていただいたんですが、この近くにいいマッサージ師がいるそうですね。

（3）会議の日程は、もう、山下さんから教えていただきました。

（4）≪手紙≫ 珍しいものをたくさんお送りいただき本当にありがとうございました。

「…てもらう」の謙譲表現。だれかが話し手、あるいは話し手側の人のためにある行為をするという意味を表す。普通、恩恵を受けたという気持ちが含まれる。行為をする人は、「に」で示すのが普通だが、情報の伝達やものの受け渡しなどの場合は「から」を用いることもある。

2 V-ていただく＜指示＞

（1）まず、1階で受け付けをすませていただきます。それから3階の方にいらして下さい。

（2）この書類に名前を書いていただきます。そして、ここに印鑑を押していただきます。

丁寧に指示を与えるのに使われる。一方的に指示できる立場の人しか使えない。次の例のように「お／ご…いただく」という形が使われることが多い。

（例）3才以下のお子様はコンサート会場への入場をご遠慮いただきます。

（例）クレジットカードはご利用いただけません。

3 V-ていただきたい

（1）A：この次からは、間違えないでいただきたいですね。
　　B：はい、申し訳ございませんでした。

（2）この忙しいときにすみません、あした休ませていただきたいんですが…。

（3）すみません、もう少し席をつめていただきたいんですが。

「…てもらいたい」に対応する謙譲表現。相手に何かしてほしいという希望を述べるのに使う。「…ていただきたい」とそのままで使うと、形は丁寧だが、強い要求を表すことが多い。「…ていただきたいのですが」という文末を言い切らない形は、遠慮がちに依頼するときに用いる。

4 V-ていただける＜依頼＞

（1）A：ご注文のお品ですが、取り寄せますので、3日ほど待っていただけますか。
　　B：ええ、かまいません。

（2）これ、贈り物にしたいんですが、包んでいただけますか。

（3）A：わたしも手伝いに来ますよ。
　　B：そうですか。じゃあ、日曜日のお昼頃来ていただけますか。

（4）タクシーがまだ来ませんので、あと5分ぐらい待っていただけませんか。

（5）先生、論文ができたんですが、ちょっと見ていただけませんか。

（6）そのことはぜひ知りたいんです。もし何か詳しいことがわかったら、連絡していただけませんか。

（7）5分ほど待っていただける?

（8）こちらにいらしていただけない?

「いただく」の可能を表す形である「いただける」を用いて、丁寧な依頼を表す。「いただけますか」よりも「いただけませんか」の方が遠慮がちな表現で、相手が必ずしも依頼に応じてくれるとは限らないと思われる場合などによく使われる。(7)(8)は同等か目下の人に対して、女性が親しみを込めて上品に依頼する場合に使う。さらに丁寧な言い方として、「お／ご…いただける」の形もよく使われる。

（例）修理に少し時間がかかっています。すみませんが、もう少々お待ちいただけないでしょうか。

5 V-ていただけるとありがたい
V-ていただけるとうれしい

（1）A：私がやりましょう。
　　B：そうですか。そうしていただけると助かります。

（2）一人では心細いんで、いっしょに行っていただけるとうれしいんですけれど。

（3）≪手紙≫お返事がいただければ幸いです。

「…ば／…たら／…と」など仮定の表現とともに使われて、相手がその行為をすると「ありがたい、うれしい、助かる」など、話し手にとって好ましい状態になることを述べる表現。

【ていはしまいか】

[V-ていはしまいか]

（1）環境保護の運動が盛んになってきたが、本質的な問題を忘れていはしまいか。

（2）娘はひとりで旅行にでかけたが、今頃言葉のわからない外国で苦労していはしまいかと気になる。

（3）幼い子供は両親の家に預けてきたが、寂しくなって泣いていはしまいかと心配だ。

（4）はじめて報告レポートを書いたときは思わぬ間違いをしていはしまいかと、何度も見直したものである。

（5）彼は、自分の書いた批評が彼女をおこらせていはしまいかと、おそるおそる挨拶した。

「まい」は否定的な推量を表す文語的表現で、「しまい」は、「しないだろう」に相当する。文型全体は、「ていないだろうか」とだいたい同じ意味。たとえば、(2)では、話し手は娘がたぶん外国で苦労しているだろうと思っていることを表している。

【ている】

話しことばでは、「V-てる」になることが多い。

1 V-ている ＜継続＞

（1）雨がざあざあ降っている。

（2）わたしは、手紙の来るのを待っている。

（3）子供たちが走っている。

（4）A：今、何してるの。
　　B：お茶飲んでるところ。

（5）五年前から、日本語を勉強している。

（6）このテーマはもう三年も研究しているのに、まだ結果が出ない。

動作や作用を表す動詞を用いて、その動作・作用が継続中であることを表す。(5)(6)は動作が過去のある時点から現在まで続いていることを表している。動詞によっては、この意味を表さないものがあるので注意する必要がある。たとえば、「行く」を用いた「彼は今アメリカに行っている」は、アメリカへ行く途中なのではなく、今アメリカにいるという意味になる。用法2を参照のこと。

2 V-ている ＜結果＞

（1）授業はもう始まっている。

（2）せんたくものはもう乾いている。

（3）彼女が着ている着物は高価なものだった。

（4）その集まりには彼も来ていたそうだ。

（5）A：お母さんはいらっしゃいますか。
　　B：母はまだ帰っていません。

（6）今5時だから、銀行は、もうしまっている。

（7）電灯のまわりで、たくさん虫が死んでいた。

（8）A：あそこにいる人の名前を知っていますか。
　　B：さあ、知りません。

（9）疲れていたので、そこで会った人のことはよく覚えていません。

（10）わたしが新聞を読むのはたいてい電車に乗っているときだ。

（11）今はアパートに住んでいるが、いずれは一軒家に住みたいと思っている。

（12）このプリントを持っていない人は手を上げてください。

（13）彼は今はあんなにふとっているが、若いころは、やせていたのだ。

（14）その家の有り様はひどいものだった。ドアは壊れているし、ガラスは全部割れているし、ゆかはあちこち穴があいていた。

ある動作・作用の結果としての状態を表す。この意味で使われる動詞は、「始まる」「乾く」「あく」「閉まる」など状態

の変化を表す動詞や、「行く」「来る」「帰る」など。また、「知る」「持つ」「住む」なども「…ている」の形で状態を表す。これらは、普通、動作の継続進行の意味は表さない。ただし、繰り返し起こることを表す3の用法の場合は使われる。また、「着る」のように、文脈によって、進行継続、結果としての状態のどちらの用法も可能なものもある。

3 V-ている ＜繰り返し＞

a V-ている

（1）毎年、交通事故で多くの人が死んでいる。
（2）いま週に一回、エアロビクスのクラスに通っている。
（3）この病院では毎日二十人の赤ちゃんが生まれている。
（4）いつもここで本を注文している。
（5）戸田さんはデパートで働きながら、大学の夜間部へ行っているそうだ。

動作作用が繰り返し起こることを表す。一組の人などが何回も行為を行う場合と、多くの人が次々に同じことを繰り返す場合の両方がある。

b Nをしている

（1）彼は、トラックの運転手をしている。
（2）わたしの父は、本屋をしている。
（3）彼女は、以前、新聞記者をしていたが、今は主婦をしている。
（4）A：お仕事はなにをしていらっしゃいますか。
　　B：コンピューター関係の会社につとめています。

職業を表す名詞について、現在の職業を表す表現。「Nをしていた」は過去のある時期の仕事を表す。

4 V-ている ＜経験＞

（1）調べてみると、彼はその会社を三か月前にやめていることがわかった。
（2）わたしは、十年前に一度ブラジルのこの町を訪れている。だから、この町を知らないわけではない。
（3）記録をみると、彼は過去の大会で優勝している。
（4）北海道にはもう3度行っている。

過去に起こったことを回想的に表す。それが何らかの意味で現在にかかわりがあると思われる場合に用いる。

5 V-ている ＜完了＞

a V-ている

（1）子供が大学に入るころには、父親はもう定年退職しているだろう。
（2）遅刻した高田が会場に着いたときにはもう披露宴が始まっていた。
（3）彼女が気づいたとき、彼はもう彼女の写真をとっていた。

「ている」の形で、未来のある時点において完了している事態を表す。また、「ていた」の形で過去においてすでに完了している事態を表す。

b V-ていない

（1）A：もう終わりましたか。
　　B：いいえ、まだ終わっていません。
（2）A：試験の結果を聞きましたか。
　　B：いや、まだ聞いていません。
　　C：わたしは、もう聞きました。
（3）卒業後の進路についてはまだはっきりとは決めていない。

動作や作用の実現がまだであることを表す。「まだ来ません」のように、「まだV-ない」の形に言いかえられる場合もあるが、それができる動詞は限られている。普通は、「まだV-ていない」を用いるほうが自然である。

6 V-ている ＜状態＞

（1）ここから道はくねくね曲がっている。
（2）北のほうに高い山がそびえている。
（3）日本と大陸はかつてつながっていた。
（4）先がとがっている。
（5）母と娘はよく似ている。

恒常的な状態を表す。「そびえる」「似る」などの動詞は、普通「ている」「ていた」でしか使わない。また、このような動詞は、名詞の前では、「曲がっている道」より「曲がった道」の形の方が自然なことが多い。

【ておく】

[V-ておく]

（1）このワインは冷たい方がいいから、飲むときまで冷蔵庫に入れておこう。
（2）帰るとき窓は開けておいてください。
（3）その書類はあとで見ますから、そこに置いておいて下さい。
（4）A：岡田教授にお目にかかりたいんですが。
　　B：じゃあ、電話しておくよ。向こうの都合がつけば、来週にでも会えると思うよ。
（5）インドネシアへ行く前にインドネシア語を習っておくつもりだ。
（6）よし子が遅れて来てもわかるように、伝言板に地図を書いておいた。

ある行為を行い、その結果の状態を持続させるという意味を示す。文脈によって、一時的な処置を表したり、将来に備えての準備を表したりする。「…てある」も将来に備えての準備を表すが、構文の形式的違いのほかに、「…ておく」の

場合は、準備として何らかの行為をすることを示し、「…てある」はその準備ができている状態を示すという違いがある。「…ておく」は話しことばでは、「…とく」となる。

(例) お母さんに話しとくね。

(例) ビール冷やしといてね。

【てから】

1 V-てから

(1) 先に風呂に入ってから食事にしよう。

(2) 遊びに行くのは仕事が終わってからだ。

(3) 日本に来てから経済の勉強を始めた。

(4) 夏休みになってから一度も学校に行っていない。

(5) 今は昼休みですので、1時になってから来て下さい。

「XてからY」の形で、XのほうがYよりも先に行われることを表す。例えば(1)は「風呂に入る」のが先で「食事をする」のが後という時間の前後関係を表している。

2 V-てからでないと

a V-てからでないとV-ない

(1) A:いっしょに帰ろうよ。
B:この仕事が終わってからでないと帰れないんだ。

(2) わが社では、社長の許可をもらってからでなければ何もできない。

(3) まずボタンを押して、次にレバーを引いて下さい。ボタンを押してからでなければ、レバーはうごきません。

「Xてからでないと/なければ/なかったらY」の形で、何かを実現するのに必ず満たさなければならない条件を表す。「Xをした後でないとYをすることができない」という意味。次のように時間を表す表現が直接付く場合もある。

(例) 3日からでないとその仕事にはかかれない。

(例) 1時からでなければ会議に出席できない。

b V-てからでないとV-る

(1) A:あした、うちへ泊まりにおいでよ。
B:後で返事するよ。お母さんに聞いてからでないとおこられるから。

(2) きちんと確かめてからでないと失敗するよ。

「Xてからでないと/なければ/なかったらY」の形で、「Xをしない場合はYという事態になる」という意味を表す。Yの事態はあまり好ましくないことであるのが普通。

3 V-てからというもの(は)

(1) 彼女は、学生時代には、なんとなくたよりない感じだったが、就職してからというもの見違えるようにしっかりした女性になった。

(2) 彼は、その人に出会ってからというもの、人が変わったようにまじめになった。

(3) 70才を過ぎても元気だったのに、去年つれあいをなくしてからというものは、別人のようになってしまった。

「そのできごとをきっかけとして」という意味を表す。それ以前と以後とで大きな変化が起こるということを述べる時に使う。書きことば的。

【てください】

[V-てください]

(1) 今週中に履歴書を出してください。

(2) 来週までにこの本を読んでおいてくださいね。

(3) この薬は1日3回、毎食後に飲んでください。

(4) 授業はできるだけ遅刻しないでください。

(5) 頼むから、邪魔しないでくださいよ。

話し手(または話し手側の人)のために誰かが何かの行為をするよう依頼したり、指示したり、命令したりする表現。

「V-てくれ」よりは丁寧だが、相手がそうするのが当然であるであるような状況でしか使われない。目下や同等の人に対して使う。

【てくださる】

動詞のテ形に「くださる」のついたもの。さらに丁寧な言い方に、「おR-くださる」「ごNくださる」がある。

1 V-てくださる ＜受益＞

(1) 先生が論文をコピーしてくださった。

(2) 明日山田さんがわざわざうちまで来てくださることになった。

(3) どうも今日はわざわざおいで下さってありがとうございました。

(4) せっかくいろいろ計画して下さったのに、だめになってしまって申し訳ありません。

話し手、あるいは話し手側の人のために誰かが何かの行為をするということを、行為する人を主語にして述べる表現。行為をする人が話し手より目上またはあまり親しくない関係のときに使う。「V-てくれる」の尊敬表現。

2 V-てくださる ＜依頼＞

(1) ちょっとここで待っていてくださる?

(2) いっしょに行ってくださらない?

(3) ついでにこの手紙も出しておいて下さいますか。

(4) ちょっとこの書類、ミスがないかどうかチェックして下さいませんか。

話し手、あるいは話し手の側の人のために何かすることを依頼する表現。「…

てくださいますか」「…てくださいませんか」は「…てください」よりも丁寧に依頼するのに用いる。また、(1)(2)の「…てくださる」「…てくださらない」は、女性が親しみを持って、目下や同等の人に上品に依頼するときに使う。

【てくる】

1 V-てくる ＜移動時の様態＞

(1) ここまで走ってきた。
(2) 歩いて来たので汗をかいた。
(3) バスは時間がかかるから、タクシーに乗って来て下さい。

どんな動作をしながら来るのか、またはどんな手段でくるのかを表す。

2 V-てくる ＜近づく移動＞

(1) 先月日本に帰ってきました。
(2) 頂上から戻ってくるのに1時間かかった。
(3) 船はゆっくりとこちらに向かって来ます。
(4) その物体はどんどん近づいて来た。

離れたところの人やものが、話し手の領域に近づくことを表す。

3 V-てくる ＜継起＞

(1) ちょっと切符を買ってきます。ここで待っていて下さい。
(2) A：小川さんいらっしゃいますか。
B：隣の部屋です。すぐ呼んできますから、中に入ってお待ち下さい。
(3) A：どこに行くの?
B：ちょっと友達のうちに遊びに行ってくる。
(4) おそくなってごめんなさい。途中で本屋に寄ってきたものだから。
(5) A：かさはどうしたの?
B：あ、電車の中に忘れて来ちゃった。

ある行為を行ってから来ることを表す。(1)〜(3)は、「今いる場所から離れて、ある行為をして、また今の場所へもどる」ことを表す。(4)〜(5)は「ほかの場所であることを行って今の場所に来ている」ことを表す。どちらも「てくる」を使わないで言うことも可能だが、「てくる」を使うことの方が多い。他のところで起こったことを、話している場に関係づける表現である。

4 V-てくる ＜継続＞

(1) この伝統は5百年も続いてきたのだ。
(2) 17歳のときからずっとこの店で働いてきました。
(3) 今まで一生懸命頑張ってきたんだから、絶対に大丈夫だ。
(4) これまで先祖伝来の土地を守り続けてきたが、事業に失敗して手放さなければならなくなった。

変化や動作が過去から続いて今にいたることを表す。

5 V-てくる ＜出現＞

(1) 少しずつ霧が晴れて、山が見えてきた。
(2) 雲の間から月が出てきた。
(3) 赤ちゃんの歯が生えてきた。
(4) 春になって木々が芽吹いてきた。

今まで存在しなかったり見えなかったりしたものが、現れることを表す。反対に、消滅することを表すときは「…ていく」を使う。

6 V-てくる ＜開始＞

(1) 雨が降ってきた。
(2) 最近少し太ってきた。
(3) ずいぶん寒くなってきましたね。
(4) このあいだ買ってあげたばかりのくつが、もうきつくなってきた。
(5) 問題がむずかしくて、頭が混乱してきた。

変化が生じることを表す。

7 V-てくる ＜こちらに向かう動作＞

(1) 友達が結婚式の日取りを知らせてきた。
(2) 化粧品を買った客が苦情を言ってきた。
(3) 急に犬がとびかかってきた。
(4) 歩いていたら、知らない人が話しかけてきました。
(5) 息子は勝手にスーツを買って、請求書を送りつけてきた。

話し手や話し手が視点をおいている人に向かってある動作が行われることを表す。動作をする人は「…が」、動作が向けられる人は「…に」を伴って表される。

(例) 山田さんが父に電話をかけてきた。

動作をするのが「会社」など場所を表す名詞である場合は「…から」で表されることもある。

(例) 会社から調査を依頼してきた。

これらの表現は次のように受身的な出来事として言いかえられる場合がある。

(例) 山田さんから父に電話がかかってきた。
(例) 国の家族から衣類や食料が送られてきた。

その場合、動作をする人は「…から」、動作を受ける人は「…に」を伴う。

【てくれ】

1 V-てくれ

(1) もう帰ってくれ。
(2) いいかげんにしてくれ。
(3) 人前でそんなこと言うのはやめてくれよ。
(4) こんなものは、どこかに捨ててきてくれ。

話し手、あるいは話し手側の人のために誰かが何かの行為をするよう強く命令する表現。目下や同等の人に対して使う。女性はあまり使わない。

2 V-ないでくれ

(1) 冗談は言わないでくれよ。

(2) ここではたばこを吸わないでください。

(3) 見ないで!

(4) このことは絶対に外にはもらさないでいただけませんか。

「V-ないでくれ」「V-ないでもらえないか」「V-ないでください」などの形で行為を実行しないように依頼するのに用いる。「V-てくれ」などの「V-て」が否定形になったもの。

くだけた話しことばでは、(3)のように、後半部分が省略されることもある。丁寧な形としては「V-ないでください(ませんか)/いただけませんか/いただけないでしょうか」などがある。「V-ないでほしい」のような言い方をすることもある。

【てくれる】

1 V-てくれる ＜受益＞

(1) 鈴木さんが自転車を修理してくれた。

(2) 誰もそのことを(私に)教えてくれなかった。

(3) 母がイタリアを旅行したとき案内してくれたガイドさんは、日本語がとても上手だったらしい。

(4) 自転車がパンクして困っていたら、知らない人が手伝ってくれて、本当に助かった。

(5) せっかく迎えに来てくれたのに、すれ違いになってしまってごめんなさい。

話し手(または話し手の側の人)のために誰かが何かの行為をするということを、行為をする人を主語にして述べる表現。その人が自分から進んで行為をしたときに使う。話し手に頼まれて行為をした場合は「V-てもらう」を使うことが多い。

「V-てくれる」を使わないで動詞だけで表すと、話し手(または話し手の側の人)以外の人のための行為を表すことになるので、注意が必要。例えば、「鈴木さんが自転車を修理した」と言うと、「私以外の人の自転車を修理した」という意味になる。従って、話し手のためにしてくれた行為なのに「V-てくれる」を使わなかった場合は、おかしな文になる。

(誤) 誰もそのことを私に教えなかった。

(誤) おいしいリンゴを送って、ありがとう。

次のように誰かの行為が話し手から見て迷惑であったり問題を引き起こすようなことであったりする場合に皮肉として使われることもある。

(例) 大事な書類をどこかに置き忘れるなんて、まったく困ったことをしてくれたな。

2 V-てくれる ＜依頼＞

(1) この本、そこの棚に入れてくれる?

(2) ちょっとこの荷物運んでくれないか?

(3) すみませんけど、ちょっと静かにしてくれませんか。今大事な用事で電話してるんです。

(4) もしよかったら、うちの子に英語を教えてくれないか?

話し手、あるいは話し手側の人のために何かするように依頼する表現。普通体は目下や同等の親しい相手に使う。「...てくれないか」は男性が使う。「...てくれますか」よりも「...てくれませんか」のほうが丁寧な感じがする。(3)のように人に注意を与える場合に使われる。

3 V-てやってくれないか

(1) 息子にもう少し勉強するように言ってやってくれ。

(2) 山田君に何か食べるものを作ってやってくれないか。

話し手、聞き手以外の第三者に対してある行為をするように、聞き手に依頼するときに使う。話し手、聞き手、それ以外の第三者の三人ともが話し手の側に属する親しい間柄である場合に用いる。

【てこそ】

[V-てこそ]

(1) 一人でやってこそ身につくのだから、むずかしくてもがんばってやりなさい。

(2) この木は雨の少ない地方に植えてこそ価値がある。

(3) 互いに助け合ってこそ本当の家族といえるのではないだろうか。

(4) この問題は皆で話し合ってこそ意味がある。規則だけ急いで決めてしまうというやり方には反対だ。

(5) 今あなたがこうして普通に暮らせるのは、あの時のご両親の援助があってこそですよ。

動詞のテ形に強調の「こそ」がついたもの。「V-てこそ」のあとにプラス評価の表現が続いて、「なにかをすることによって、それで初めて意味が生まれ、よい結果が生じる」という意味を表す。(5)のようによい結果を招いた理由ともとれる場合は「ばこそ」で言いかえることができる。

(例) ご両親の援助があればこそです。

【てさしあげる】

[V-てさしあげる]

(1) 昨日は社長を車で家まで送ってさしあげた。

(2) A:あなた、お客様を駅までお見送りしてさしあげたら?
B:うん、そうだな。

(3) 田中さんをご存じないのなら、私の方から連絡してさしあげましょうか。

他の人のために話し手(または話し手の側の人)が何かの行為をすることを表す。行為を受けるのが目上か対等の親しくない人の場合に使うことが多く、相手が困っている状況や、相手にはできないことが自分にはできるという状況におい

て、相手のためにすることを自分を低めて言う言い方だが、おしつけがましい印象を与えることもある。

直接相手に言う場合は目上の人には使いにくく、使うときにも(3)のように「V-てさしあげます／ましょう」の形を避けておしつけがましい感じをやわらげないと失礼になる。丁寧に言う場合は、謙譲語を使って「お送りした」「ご連絡しましょうか」などと言うのが普通。

【てしかたがない】

[Na でしかたがない]
[A-くてしかたがない]
[V-てしかたがない]

(1) 公園で出会って以来、彼女のことが気になってしかたがない。
(2) この映画はみるたびに、涙が出てしかたがない。
(3) 何とか仕事に集中しようとしているのだが、気が散ってしかたがない。
(4) 毎日ひまでしかたがない。
(5) 試験に合格したので、うれしくてしかたがない。
(6) 台風のせいで、あの山に登れなかったのが、今でも残念でしかたがない。
(7) わたしが転職したのは、前の会社で働くのがいやでしかたがなかったからだ。
(8) 田中さんは孫が可愛くて仕方がないらしい。

自然に何らかの感情や感覚が起こってきて自分ではコントロールできない状態を表す。押さえようとしても押さえられない状態で、そのためその感情の程度が非常に高いことを表す場合が多い。「...てしかたがない」の前には感情や感覚や欲求を表す言葉が用いられるのが普通で、ものの属性や評価についての言葉を用いると、不自然な文になる。

(誤) 歌が下手で仕方がない。
(正) 歌がとても下手だ。

直接感情や感覚を表さない場合でも、その事態をコントロールできないことから困惑したりいらだったりする状態が生じる場合は用いることができる。

(例) 最近うちの息子は口答えをしてしかたがないんです。
(例) 年のせいか物忘れをしてしかたがない。

「が」を省略して「...てしかたない」となることもある。また、くだけた話しことばでは「...てしょうがない」とも言う。「てならない」との違いについては【てならない】を参照。

【でしかない】

→【しか】

【てしまう】

くだけた話しことばでは、「言っちゃう」「来ちゃう」のように「...ちゃう」の形になることが多い。

1 V-てしまう <完了>

(1) この本はもう読んでしまったから、あげます。
(2) A：でかけますよ。
　B：ちょっと、この手紙を書いてしまうから、待ってください。
(3) この宿題をしてしまったら、遊びにいける。
(4) 仕事は、もう全部完成してしまった。
(5) あの車は売ってしまったので、もうここにはない。
(6) 雨の中を歩いて、かぜをひいてしまった。
(7) 朝早くから働いていたので、もうすっかり疲れてしまって、動けない。

動作の過程が完了することを表す。(1)～(3)のように、継続する動作を表す動詞の場合は、「R-おわる」に近い意味になる。また、(6)(7)のように、動詞の意味によっては、「ある状態に至った」という意味を表す。(6)は「かぜをひいた状態になった」という意味。

2 V-てしまう <感慨>

(1) 酔っ払って、ばかな事を言ってしまったと後悔している。
(2) 新しいカメラをうっかり水の中に落としてしまった。
(3) 電車の中にかさを忘れて来てしまった。
(4) だまっているのはつらいから、本当のことを話してしまいたい。
(5) 知ってはいけないことを知ってしまった。
(6) 彼は、友達に嫌われてしまったと言う。
(7) アルバイトの学生にやめられてしまって、困っている。

文脈によって、残念、後悔など、いろいろな感慨をこめて使われる。「とりかえしがつかないことがおこった」というニュアンスが加わることもある。(6)(7)のように、受身の表現もできる。

3 V-てしまっていた

(1) わたしが電話したときには、彼女はもう家を出てしまっていた。
(2) 友達が手伝いに来たときには、ほとんどの荷造りは終わってしまっていた。
(3) 警察がかけつけたときには、犯人の乗った飛行機は離陸してしまっていた。

過去の時点で完了していることを表す。「...ていた」を用いることもできるが、「...てしまっていた」を使うと、「すっかり完了していた」と完了の意を強めたり、「とりかえしのつかないことがおこった」というニュアンスが加わったりする。

【でしょう】

→【だろう】

【てしょうがない】

[A-くてしょうがない]
[V-てしょうがない]

（1）赤ちゃんが朝から泣いてしょうがない。

（2）このところ、疲れがたまっているのか、眠くてしょうがない。

（3）バレーボールを始めたら、毎日おなかがすいてしょうがない。

（4）可愛いがっていた猫が死んで、悲しくてしょうがない。

（5）二度も、自転車を盗まれた。腹がたってしょうがない。

（6）うちの子は先生にほめられたのがうれしくてしょうがない様子だ。

「…てしょうがない」のつづまった形で「…てしかたがない」のくだけた話しことばでの言い方。

→【てしかたがない】

【てたまらない】

[Na でたまらない]
[A-くてたまらない]

（1）今日は暑くてたまらない。

（2）この仕事はやめたくてたまらないが、事情があってやめられないのだ。

（3）彼女に会いたくてたまらない。

（4）ショーウィンドーに飾ってあった帽子がほしくてたまらなかったから、もう一度その店に行ったんです。

（5）はじめての海外旅行が中止になってしまった。残念でたまらない。

（6）うちの子供は試合に負けたのがくやしくてたまらないようです。

話し手の感情・感覚・欲求の程度が激しいことを表す。たとえば、（1）は「とても暑い」に近い。「てしかたがない」とだいたい同義。第三者の様子を表すときは（6）のように「ようだ」「そうだ」「らしい」などを伴う。

【てちょうだい】

[V-てちょうだい]

（1）伸子さん、ちょっとここへ来てちょうだい。

（2）彼女は「和雄さん、ちょっと見てちょうだい」と言って、わたしを窓のところへ連れて行った。

（3）「お願いだから、オートバイを乗り回すのはやめてちょうだい」と母に言われた。

相手に何かするように依頼するのに用いる。女性、子供が身近な、親しい相手に言うのが普通。ぞんざいな表現ではないが、フォーマルな場面では使わない。

【てっきり…とおもう】

（1）彼女がいろいろな結婚式場のパンフレットを持っているので、これはてっきり結婚するんだと思ってしまったんです。

（2）人が倒れていたので、てっきり事故だと思って駅員に知らせたんです。

（3）窓ガラスが割れていたので、これはてっきり泥棒だと思ったんです。

（4）てっきり怒られるものと思っていたが、反対にほめられたので、驚いた。

何らかの根拠、きっかけから推量したことを本当のことだと信じこんでしまったときに、それをあとから解説するのに用いる。「てっきり」は思い込みの深さを強調する。実際には事実ではないことが多い。過去の思いこみにしか使えない。

（誤）てっきり帰ったと思っています。
（正）てっきり帰ったと思いました。

【てでも】

[V-てでも]

（1）どうしても留学したい。家を売ってでも行きたいと思った。

（2）彼女がもしいやだと言えば、引きずってでも病院へ連れて行くつもりだ。

（3）いざとなれば、会社をやめてでも、裁判で争うつもりだ。

（4）由起子はまだ熱が下がらないが、この試合だけは、這ってでも出たいと言っている。

強硬な手段を示す。後ろに強い意志や希望を表す表現を伴って、実現のためには、そのような極端な手段を用いるのもためらわないという強い決意を表す。

【でなくてなんだろう】

[N でなくてなんだろう]

（1）彼女のためなら死んでもいいとまで思う。これが愛でなくて何だろう。

（2）出会ったときから二人の人生は破滅へ向かって進んでいった。これが宿命でなくて何だろうか。

「愛」「宿命」「運命」「真実」などの名詞に付いて、「…である」ということを強調するのに用いる。小説や随筆などの中で用いられることが多い。

【でなくては】

→【なくては】

【てならない】

[Na でならない]
[A-くてならない]
[V-てならない]

（1）卒業できるかどうか、心配でならない。

（2）将来がどうなるか、不安でならない。

（3）子供のころニンジンを食べる

のがいやでならなかった。

（4）あのコンサートに行き損ねたのが今でも残念でならない。

（5）住み慣れたこの土地を離れるのがつらくてならない。

（6）だまされてお金をとられたのがくやしくてならない。

（7）青春時代を過ごした北海道の山々が思い出されてならない。

（8）きのうの英語の試験の結果が気になってならない。

（9）大切な試験に失敗してしまった。なぜもっと早くから勉強しておかなかったのかと悔やまれてならない。

自然にある感情や感覚が起こってきて自分ではコントロールできない状態を表す。押さえようとしても押さえられない状態で、そのためその感情の程度が非常に高いことを表す場合が多い。「…てならない」の前には感情や感覚や欲求を表す言葉が用いられ、ものの属性や評価についての言葉を用いると、不自然な文になる。

（誤）この本はつまらなくてならない。

（正）この本はすごくつまらない。

「…てしかたがない」とほぼ同義だが、「…てしかたがない」とは違って、感情・感覚・欲求以外の言葉を用いるのは難しい。

（誤）赤ちゃんが朝から泣いてならない。

（正）赤ちゃんが朝から泣いてしかたがない。

やや古めかしい言い方で、書きことばに多く用いられる。

【てのこと】

[V-てのこと]

（1）彼が6年も留学できたのは、親の援助があってのことだ。

（2）彼は来年から喫茶店を経営するつもりだ。しかし、それも資金調達がうまくいってのことだ。

（3）今回の人事異動は君の将来を考えてのことだ。不満もあるだろうが辛抱してくれたまえ。

「XはYてのことだ」などの形で、Xが可能になる、または可能になったのは、Yという条件があるからだという意味を表す。必要な条件を強調する表現。会話で使うが、それほどくだけた表現ではない。

【ては】

[N／Na　では]

[A-くては]

[V-ては]

述語のテ形と「は」の組合わさったもの。名詞、ナ形容詞の場合は「だ」のテ形を受けて「では」となるが、書きことばでは「であっては」が使われることもある。話しことばでは「ちゃ」「じゃ」となることが多い。

1 …ては ＜条件＞

文末にマイナス評価の内容を表す表現を伴って、「…ては」で示された条件のもとでは望ましくない結果となるという意味を表す。その事態を避けるべきだということが言いたい場合に使うことが多い。

a …ては

（1）この仕事に時給500円では人がみつかりません。

（2）先方の態度がそんなにあやふやでは将来が心配だ。

（3）コーチがそんなにきびしくては、だれもついてきませんよ。

（4）そんなに大きな声を出しては魚が逃げてしまう。

（5）そのことを彼女に言ってはかわいそうだ。

普通、否定的な内容を表す表現が続き、この条件では困るとか、このようなことをしてはいけないという意味を表す。

b V-ていては

（1）そんなにテレビばかり見ていては目が悪くなってしまうよ。

（2）そんなにたばこばかり吸っていては、体に障りますよ。

（3）そんなに先生に頼っていては、進歩しませんよ。

忠告によく使われる表現。相手の悪い点を取り上げて、態度をあらためるように言うときに使う。

c Vのでは

（1）そんなに遠くから通勤していらっしゃるのでは大変ですね。

（2）年間200万円もかかるのではとてもその大学には行けない。

（3）A：山下さん子供が5人いるんですって。
　　B：5人もいるのでは、毎日大騒ぎだろうな。

（4）そんなふうに頭ごなしに否定されたのでは議論にならないじゃないですか。

動詞に「のでは」が続き、「そのような状況では」という意味を表す。後半には、そのような状況から起こることがらや話し手の感想が述べられる。話しことばでは、「Vんでは」「Vんじゃ」が使われることが多い。

d V-る／V-ない　ようでは

（1）最初の日から、仕事に遅刻するようでは困る。

（2）この程度の練習にまいるようでは、もうやめたほうがいい。

（3）そんなささいなことで傷ついて泣くようではこれから先が思いやられる。

（4）こんな簡単な文書も書けないようでは、店長の仕事はつとまらない。

（5）こんな短い距離も歩けないようでは夏の登山はとても無理だ。

「困る」「いけない」「無理だ」のような否定的な意味の表現とともに使って、「こんな様子では困る」という意味を表す。人を批判したり非難したりする場合に用いることが多い。文脈によっては、相手を直

接叱責するのにも使う。

→【ようだ2】4

2 V-ては ＜反復＞

動詞を受けて、動作、現象が繰り返し起こることを表す。

a V-てはV

(1) 家計が苦しいので、母はお金の計算をしてはため息をついている。

(2) 子供は二、三歩歩いては立ち止まって、母親の来るのを待っている。

(3) その女性は誰かを待っているらしく、1ページ読んでは顔をあげて窓の外を見ている。

(4) 一行書いては考え込むので、執筆はなかなかはかどらない。

(5) 学生の頃は、小説を読んでは仲間と議論したものだ。

一定の時間をおいて繰り返される動作を表す。(5)は「たものだ」を伴い、過去に反復された行為についての回想を表す。

b V-てはV、V-てはV

(1) 書いては消し、書いては消し、やっと手紙を書き上げた。

(2) 作ってはこわし、作ってはこわし、を何度もやりなおして、ようやく満足できるつぼができあがった。

(3) 降ってはやみ、降ってはやみの天気が続いている。

(4) 食べては寝、寝ては食べるという生活をしている。

二つの動詞が同じ順序で2回繰り返されて使われ、動作や現象が反復して起こることを表す。(4)のように、前後が入れ代わり「V1てはV2、V2てはV1」の形が使われることもある。

【では$_1$】

1 Nでは

(1) 人は外見では判断できない。

(2) これくらいの病気ではへこたれない。

(3) この仕事は1時間では終わらない。

(4) 日本ではタクシーに乗っても、チップを渡す必要はありません。

(5) 私の時計では今12時5分です。

(6) この地方では旧暦で正月を祝います。

名詞に助詞の「で」がついたものに「は」が続いたもの。「だ」のテ形に「は」がついたものと異なり、「であっては」との言いかえができない。

(誤) これくらいの病気であってはへこたれない。

(正) 重い病気であっては、欠席もやむをえない。

手段、基準、時間、場所などを表す名詞に続き、「そのような手段／基準／時間／場所では」という意味を表す。後

半には(1)〜(3)のように否定表現が続くことが多い。(5)(6)のように、対比の意味を表すこともある。

2 N／Na のでは

→【ては】、【てはだめだ】2

【では$_2$】

書きことば的でやや改まった場面で使われる。くだけた話しことばでは「じゃ(あ)」が用いられる。

1 では ＜推論＞

(1) A：私は1974年の卒業です。
　B：では、私は2年後輩になります。

(2) A：この1週間毎晩帰宅は12時過ぎだよ。
　B：では、睡眠不足でしょう。

(3) A：彼、日本語を10年も習っているんですよ。
　B：では、日常の会話に困ることはないですね。

(4) A：緊急の会議が入ってしまいまして…
　B：では、今日のパーティにはおいでになれませんね。

(5) 家を出たときには、あの袋はたしかに手にもっていた。では、途中のバスの中に忘れたということかな。

文頭に付いて、新たに知った事実や、自分の記憶などに基づいて話し手が推論し、結論を導き出すきっかけに用いる。聞き手に推論の正しさを確認する場合は(2)〜(4)のように確認や疑問の表現になる。(5)は、自分の記憶に基づいて推論するような用法。ほとんどの場合「それなら、そうしたら、(それ)だったら、(そう)すると」などで言いかえられる。

2 では ＜態度表明＞

(1) A：すみません。教科書を忘れてしまいました。
　B：では、となりの人に見せてもらいなさい。

(2) A：用紙の記入、終わりましたが。
　B：じゃ、3番の窓口に出してください。

(3) A：全員集合しました。
　B：では、そろそろ出発しましょう。

(4) A：実は子供が病気なんです。
　B：では、今日は帰ってもいいです。

文頭に付いて、新たな情報を受けて話し手が態度表明を行うきっかけに用いる。命令、依頼、意志、許可などの表現が続く。「それなら、そしたら、(そう)だったら」などとの言いかえができるが、「(そう)すると」との言いかえはできない。

3 では ＜転換＞

(1) では、次の議題に入りましょう。

(2) では、始めましょう。

(3) では、今日の授業はこれで終

わりにします。

（4）では、また明日。さようなら。

文頭に付いて、話題や場面を新たなものに転換するきっかけに用いる。後ろには、話題転換や開始・終了を宣言する表現が続く。(4)は、別れの定型的な表現。

【ではあるが】

[N／Na　ではあるが]

（1）この絵はきれいではあるが、感動させるものがない。

（2）彼は才能の豊かな人間ではあるが、努力が足りない。

（3）これはお金をかけた建築ではあるが、芸術性は全くない。

（4）まだ10歳の子供ではあるが、大人びた面も持っている。

（5）彼は犯罪者ではあるが、文学的な才能に恵まれていた。

評価を対比的に述べるのに用いる。「が」の前で、部分的な価値を認めたり、否定的な見解を述べ、その後にそれに対立する評価を述べる。後続の評価に重点がある。書きことばで使うことが多い。イ形容詞を用いる場合は、「A-くはあるが」となる。

【ではあるまいか】

[N／Na　（なの）ではあるまいか]

[A／V　のではあるまいか]

（1）この話は全くの作り話なのではあるまいか。

（2）この品質で、こんな値段をつけるとは、あまりにも非常識ではあるまいか。

（3）いまどき、彼のような学生はめずらしいのではあるまいか。

（4）父は自分が癌だということに気づいていたのではあるまいか。

（5）彼らは私のことを疑っているのではあるまいか。

「ではないだろうか」のさらに改まった書きことば的表現。論文や論説文などのかたい文章で用いられる。

→【ではないだろうか】

【てはいけない】

1　V-てはいけない

（1）遊んでいたらおじいさんがきて、「芝生に入ってはいけないよ。」と言った。

（2）この薬は、一日に三錠以上飲んではいけないそうだ。

（3）この場所に駐車してはいけないらしい。

（4）きみ、はじめて会った人にそんな失礼なことを言っちゃいけないよ。

（5）A：おかあさん、公園へ行っていい?

B：宿題をすまさないうちは、遊びに行ってはいけませんよ。

禁止を表す。普通体は、一般的に禁じられていることを表したり、男性が目下の人に向かって用いたりする。対応する丁寧体の表現、「いけません」は、母親や、教師、職場の上司など監督的立場にある人が監督される立場にある人に対して使うのが普通。

2　V-なくてはいけない

→【なくてはいけない】

【てはいられない】

1　Nではいられない

（1）きみは大人になりたくないと言うが、人はいつまでも子供ではいられない。

（2）ずっと大学にいたいが、いつまでも学生のままではいられない。

（3）わたしは同級生の彼と友達でいたいのに、彼はこのままではいられないと言う。

（4）ずっとお世話になりっぱなしではいられないし、仕事を探すつもりです。

「Nでいる」は、Nという状態にとどまるという意味で、「いられない」で、ずっと同じ状態を続けることはできないという意味。

2　V-てはいられない

（1）時間がないから、遅れて来る人を待ってはいられない。すぐ始めよう。

（2）A：すっかりよくなるまで寝ていないと。

B：こんなに忙しいときに寝てはいられないよ。

（3）あしたは試験だから、こんなところでのんびり遊んではいられない。

（4）今晩はお客が何人か来るし、テニスなんかしてはいられない。早く買い物に行かなければならない。

（5）今うちの商品はよく売れているが、うかうかしてはいられない。新しい製品がどんどん出てくるからだ。

（6）この事態を傍観してはいられない。

（7）スキーのシーズンが始まると、わたしはじっとしてはいられない。

（8）こうしてはいられない。早く、知らせなくちゃ。

切迫した状況なので、そのようなことを続けるのはいけない、あるいは、急いで行動に移りたいという意味を表す。「のんびり」「うかうか」「じっと」などの副詞を伴うことが多い。

【てはだめだ】

1　V-てはだめだ　＜禁止＞

（1）駐車場で遊んではだめだ。出て行きなさい。

（2）「その花をとってはだめよ。」と姉が弟に言った。

（3）文句ばかり言っていてはだめだ。自分でなんとかしろ。

（4）こんなところでへばってはだめだ。あと1キロだ。しっかりしろ。

（5）「今、あの人を叱ってはだめです。もうすこし様子を見ましょう。」と彼女は部下をかばった。

（6）そんな浅いところから、飛び込んではだめだ。

禁止を表す。教師、親、管理人など、監督的立場にある人が監督される立場の人に対して用いることが多い。縮約して、「では→じゃ」、「ては→ちゃ」になる事が多い。「V-てはいけない」と同じ。

2 …てはだめだ

[N／Na　ではだめだ]

[A-くてはだめだ]

[V-ていてはだめだ]

（1）写真をとるのに、こんなに暗くてはだめだ。

（2）秘書になりたいそうだが、言葉がそんなにぞんざいではだめだ。

（3）富士山へ登りたいのなら、そんな靴ではだめです。登山靴をはきなさい。

（4）今でもお母さんに洗濯してもらっているんですか。それではだめです。自立したかったら、自分でやりなさい。

（5）君のように遊んでばかりいてはだめだ。学生は勉強しなくてはいけない。

その条件では、目的が達成できないという判断を表す。目的自体は言語的に表現することも文脈にかくれていることもある。会話で使われることが多く、縮約して「じゃ(あ)だめだ」「ちゃ(あ)だめだ」とも言う。

（5）のように、動詞とともに用いて、「V-ていてはだめだ」の形で現在の状況が適切でないことを述べて、批判したり叱責したりする表現としても使う。

【てはどうか】

[V-てはどうか]

（1）A：この辺でちょっと休憩してはどうですか。

　　B：そうですね。

（2）作戦を変えてみてはどうですか。

（3）この問題については、議長に一任してはどうだろうか。

（4）A：家の譲渡のことで家族の間でもめているんです。

　　B：弁護士に相談してみてはどうですか。

（5）A：この壁はちょっと暗いですね。壁紙を取りかえてみてはどうでしょうか。

　　B：そうですね。

（6）しばらく何も言わないでそっとしておいてみては？

提案や勧めを表す慣用的表現。「V-てみては」の形で使われることが多い。「V-たらどうか」とほぼ同義だが、「V-てはどうか」の方が書きことば的で、改まった場面での話しことばや、手紙文などでよく使われる。普通の会話では「V-たらどうか」のほうをよく使う。「V-ちゃどうか」はくだけた話しことばで用いられる形。丁寧な言い方では「V-てはいかがですか／いかがでしょうか」などが用いられる。（6）は後半部分が省略されたもの。

【ではない】

1 …ではない

[N／Na　ではない]

（1）これは、新しい考えではない。

（2）わたしの生まれた所は、札幌だが、育ったのは、札幌ではない。

（3）この表現はけっして失礼ではない。

（4）昨日行ったレストランはあまりきれいではなかった。

「XはYだ」を否定するのに用いる。

2 …ではない

（1）A：すみません、日程の変更をご連絡するのを忘れていました。

　　B：忘れていましたではないよ。おかげで、予定が一日狂ってしまったんだよ。

（2）A：あ。そのこと、言い忘れてた。

　　B：言い忘れてたじゃないわ。おかげで大変な目にあったのよ。

（3）A：ごめん、現像失敗しちゃった。

　　B：失敗しちゃったじゃないよ。どうしてくれるんだ。

（4）A：あの、お借りしたビデオカメラ、こわれちゃったんです。

　　B：こわれちゃった、じゃないよ。大事なもの、君だから貸したのに。

相手の言葉を繰り返すことにより、非難を表す。目下の相手やかなり親しい相手にしか用いられない話しことばの表現。（2）～（4）のように「じゃない」になることが多い。

3 …ではなくて

→【ではなくて】

【ではないか$_1$】

[N／Na／A／V　ではないか]

普通体の表現に付いて、話し手の驚きの気持ちや、聞き手に認識を迫る態度を表す。名詞、ナ形容詞の辞書形の場合は「だ」を介さずに直接付くことができるが、辞書形以外の場合は「だった／ではない／ではなかった」を介して接続する。

「だ」の否定疑問形が固定化した表

現で、書きことば的でややかたい言い方。普通、男性が用いる。くだけた話しことばでは、男性は「じゃないか」、女性は「じゃない」「じゃないの」などの形を使う。「じゃん」は、さらにくだけた言い方で男女共用いる。丁寧体は「ではないですか／ではありませんか」。タ形にはならず、いつも辞書形で用いられる点、「だろうか」が付いたりできない点で「ではないか2」とは異なる。

1 …ではないか ＜驚き・発見＞

(1) やあ、大野君ではないか。

(2) これはすごい、純金ではないか。

(3) なんだ、中身、空っぽじゃないか。

(4) この店の料理、結構おいしいではありませんか。

(5) このレポートなかなかよくできているではありませんか。

予想していなかったことを発見した場合の驚きの気持ちを表す。それが望ましいことならば(4)(5)のように「感心した」という意味になるが、期待に反していることならば、(3)のように落胆や期待はずれの意味になる。

2 …ではないか ＜非難＞

(1) A：悪いのは君のほうではないか。
　　B：僕はそうは思いませんが。

(2) A：病人を連れ出したりしたら、だめじゃないか。
　　B：はい、これから気をつけます。

(3) A：おそかったじゃないか。
　　B：あの、道が混んでいたんです。

(4) A：まずいじゃありませんか、そんな発言をしては。
　　B：そうですか。

(5) A：はじめにそう言ってくれなくては困るではないか。
　　B：すみません、気がつかなくて。

地位が下か同等の相手を叱りつけたり、非難したりするのに使う。望ましくない現状が相手の責任で生じていることを相手にしっかり認識させようとする表現。下降調のイントネーションをとる。

3 …ではないか ＜確認＞

(1) A：同級生に田中さんという女の子がいたじゃないか。
　　B：ああ、髪が長くてやせた子ね。

(2) A：あそこに、郵便局が見えるじゃないですか。
　　B：ええ。
　　A：あの手前の角を右に曲がってください。

(3) 地下道などによくいるではありませんか。ああいう男が。

聞き手も知っているはずの人やものごとについて、思い出させたり、現場で見聞きできるものに気づかせるような場合に

用いる。聞き手が認識できたかどうかを確認する気持ちを伴うので、上昇調をとることが多く、確認を表す「だろう／でしょう」で置きかえられる。

この用法は、会話特有の用法のため、「ではないか」の形ではあまり用いられず、たいてい「じゃないか」「じゃありませんか」「じゃないですか」の形で用いられる。

4 V-ようではないか

(1) このクラスみんなでディベート大会に申し込もうではないか。

(2) とにかく、最後まで頑張ってみようではないか。

(3) 遠くからはるばる来たのだから、お金の心配などしないで十分楽しもうではないか。

(4) 売られた喧嘩だ。受けて立とうじゃないか。

動詞の意向形に付き、いっしょに何かをしようと提案したり、自分の意志を強く表明したりするのに用いる。やや形式張った言い方で、普通、男性が使う。

【ではないか$_2$】

[N／Na　(なの)ではないか]
[A／V　のではないか]

名詞、ナ形容詞には「の」を介さずに直接付くことができるが、イ形容詞と動詞には「の」が必ず必要で「のではないか」の形で用いられる。この点で、「ではないか1」と異なる。くだけた言い方では、男性は「(ん)じゃないか」、女性は「(ん)じゃない」「んじゃないの」などを使う。丁寧形は「(の)ではないですか／(の)ではありませんか」となる。

1 …(の)ではないか

(1) あそこを歩いているのは、もしかして山下さんではないか。

(2) こんな大きなアパートは一人暮らしにはちょっとぜいたくではないか。

(3) もしかしたら、和子は本当は良雄が好きなのではないか。

(4) この話は結局ハッピーエンドになるのではないか。

(5) ファーストフード産業が伸びれば伸びるほどごみも増えるのではないか。

(6) この品質でこの値段は、ちょっと高いのではないか。

(7) これからますます環境問題は重要になるのではないか。

普通体の表現に付いて、「はっきりそうだと断定はできないが、おそらく…ではないだろうか」といった話し手の推測的な判断を表す。話し手の確信の度合いは「だろう」よりも低い。

2 …(の)ではないかとおもう

(1) こんなうまい話は、うそではないかと思う。

(2) どちらかというと妹さんの方がきれいなのではないかと思う。

(3) 話がうますぎるので、山田さんは、これは詐欺ではないかと思ったんだそうです。

（４）もしかすると、彼女はこの秘密を知っているのではないかと思う。

（５）この条件はわれわれにとって不利ではないかと思われる。

「ではないか」に「思う」がついたもの。「思う」が辞書形の場合は、常に話し手の判断を表すが、（３）のように、「思った」となれば、三人称主語の判断を表すことができる。（５）の「思われる」は書きことば的な言い方で、話し手は必ずしも疑いの気持ちをもっているわけではなく、独断的な言い方を和らげる目的で使用されることが多い。

【ではないだろうか】

[N／Na （なの）ではないだろうか]
[A／V のではないだろうか]

（１）ひょっとして、これは悪い病気ではないだろうか。

（２）もしかしたら、和子は本当は良雄が好きなのではないだろうか。

（３）A：この本、子供にはまだ難しいのではないでしょうか。
B：そうでもないですよ。

（４）不況は長引くのではないだろうか。

（５）彼らはもう出発してしまったのではないだろうか。

（６）もしかして、私はだまされているのではないだろうか。

「ではないか２」と類義の表現で、話し手の推測的判断を表すが、話し手の確信度は、こちらのほうがさらに低く、婉曲的な言い方。丁寧体は「ではないでしょうか」。（３）のような会話では自分の推測を聞き手に確認する意味を持つことが多い。

【ではなかったか】

[N／Na （なの）ではなかったか]
[A／V のではなかったか]

過去の状況について推測したり、現状が過去と異なることに対する不満を表す書きことば的表現。話しことばでは「（ん）じゃなかったか」（男性）「（ん）じゃなかったの」（女性）などが用いられる。

1 …（の）ではなかったか ＜推測＞

（１）古代人にとってはこれも貴重な食物ではなかったか。

（２）昔はここもずいぶん閑静だったのではなかったか。

（３）当時のわが家の暮らしは、かなり苦しかったのではなかったか。

（４）当時の人々は人間が空を飛ぶなどということは考えもしなかったのではなかったか。

過去のことがらについて推測する言い方。「…た（だ）ろう」と似ているが、「ではなかったか」の方が話し手の確信度は低い。（１）のような場合を除いて、普通、述語のタ形を受けて「…たのではなかったか」の形で用いられる。「ではなかっただろうか」「ではなかったろうか」もほ

ぼ同義の言い方。

2 …（の）ではなかったか ＜反期待＞

（１）昔はとなり近所の人々は互いにもっと協力的ではなかったか。

（２）あなたたちは規律を守ると誓ったのではなかったか。

（３）これまでは平和に共存してきたのではなかったのか。

（４）これからは一家が平和に暮らしていくのではなかったか。

現状が過去とは異なり、望ましくないものになっていることに対して、聞き手への非難や、不満や残念な気持ちを表す。「のではなかったか」は、書きことば。（３）のように「ではなかったのか」の形をとることもある。（４）のように、動詞の辞書形を受ける場合は、「そうするはずだったのに現実はそうでない」という意味を表す。

【ではなかろうか】

[N／Na （なの）ではなかろうか]
[A／V のではなかろうか]

（１）彼の成績では、この大学は無理ではなかろうか。

（２）低温続きで、今年の桜はちょっと遅いのではなかろうか。

（３）不況は長引くのではなかろうか。

「ではないだろうか」のやや古めかしい言い方で、論説調の書きことばで使われる。「ではあるまいか」とほぼ同義。

→【ではあるまいか】

【ではなくて】

[N／Na （なの）ではなくて]
[A のではなくて]
[V のではなくて]

（１）彼がこの前一緒に歩いていた女性は、恋人ではなくて、妹なのだそうだ。

（２）わたしが買ったのは、日英辞書ではなくて、英日辞書です。

（３）A：つまり、報酬が少なすぎるとおっしゃるんですね。
B：いや、そうではなくて、仕事の量が問題なんです。

（４）A：じゃあ、彼は会ってくれるんですね。いつ行けばいいんですか。
B：いや、わたしたちが彼のところへ行くのではなくて、向こうから来るというんです。

「Xではなくて」でXを否定し、あとに正しいものをつけ加えるのに用いる。訂正の表現。話しことばでは「…じゃなくて」になる。

【てはならない】

[V-てはならない]

（１）一度や二度の失敗であきらめてはならない。

（２）警察が来るまで、だれもここに

入ってはならないそうだ。

（3）ここで見たり聞いたりしたことは決して話してはならないと言われた。

禁止を表す。一般的な注意、訓戒を述べるときに用いることが多く、特定のことがらを禁止するために相手に向かって直接使うのは、かなり特殊な状況に限られている。書きことばで使われることが多い。「V-てはならない」、および、丁寧体の「V-てはなりません」のどちらも、直接相手に対して使うのは、かなり特殊な状況に限られており、話しことばでは、「V-ちゃあだめだ」「V-ちゃいけない」などがよく使われる。

【ではならない】

→【てはならない】

【てほしい】

→【ほしい】2

【てまもなく】

→【まもなく】

【てみせる】

［V-てみせる］

（1）かれは柔道の型を教えるためにまずやってみせた。

（2）歌がおじょうずだそうですね。一度歌ってみせてください。

（3）ファックスの使い方がまだわからないので、一度やって見せてくれませんか。

（4）トラクターぐらいなら、一度やってみせてもらったら、後は一人で扱えると思います。

紹介をしたり、理解をうながしたりするのに、実際の動作で示すことを表す。

【てみる】

1 V-てみる

（1）一度そのめずらしい料理が食べてみたい。

（2）先日最近話題になっている店へ行ってみました。

（3）ズボンのすそを直したので、ちょっとはいてみてください。

（4）電話番号は電話局へ問い合わせてみたのですが、わかりませんでした。

（5）パンダはまだ見たことがない。一度見てみたいと思っている。

（6）電車をやめて、自転車通勤をしてみることにした。

（7）どの車を買うか決める前に、車に詳しい人の意見を聞いてみようと思っています。

どんなものか、どんな所かといったことを知るために、実際に行為をすることを示す。試みる意志があっても実際に行為をしていない場合は、使わない。たとえば、「会ってみたが会えなかった」のような使い方は誤用となる。この場合は、「会おうとしたが会えなかった」のようにする。

2 V-てみてはじめて

（1）病気になってみてはじめて健康の大切さが身にしみた。

（2）親に死なれてみてはじめてありがたさがわかった。

（3）彼がやめてみてはじめて、この会社にとって重要な人物だったということがわかった。

「そういう状態になってはじめて」の意味。この「みて」は、意志的な「ためしにする」という意味ではなく、「ある状態が生じる」という意味。

3 V-てみると

（1）表にして比べてみると、両者は実際にはあまり違いがないということがわかる。

（2）そのルポルタージュをよく読んでみると、作者はその場所へは実際に行ったことがないとわかった。

（3）今振り返ってみると、5年前の会社設立当時が自分の人生の中で最も大変だったと思う。

（4）もう一度考えてみると、この批評はある程度当たっていないこともない。

（5）仕事をやめてみると、急に生活の空間が広がったような気がした。

（6）生のイカなんて、みかけは気持ちが悪かったが、食べてみると、意外においしかった。

（7）A：意地悪に見えるけど、彼は本当は好意でそう言ったんじゃないんですか。

B：そう言われてみると、そんな気もします。

（8）一夜明けてみると、大木がなぎ倒されていた。

発見のきっかけを表す。きっかけには意志的なものとそうでないものがある。意志のある場合は、「試行して、その結果、こういうことがわかる」の意味。また、(7)(8)のように、意志がない場合は、「そのような状況になって、発見した」という意味。「みる」をつけなくても、だいたい同じ意味になるが、「読んでみると」「振り返ってみると」などは慣用的によく使う。

4 V-てみたら

a V-てみたら

（1）電話でたずねてみたら、もう切符は売り切れたと言われた。

（2）きらいなうなぎを思い切って食べてみたら、おいしいので驚いた。

（3）新聞に広告を出してみたら、予想以上の反響があった。

発見のきっかけを表す。

b V-てみたらどう

（1）A：山下さんは全然わかってくれません。

B：もう一度会って話してみたらどうですか。

（2）結果をまとめる前にもうすこしデータを増やしてみたらどうですか。

（3）ひとりで考えていないで、専門家に相談してみたらどうですか。

ためしにするように薦めることを表す。

5 V-てもみない

（1）この作品がコンクールに入選するなんて考えてもみなかった。

（2）できないと思い込んでいたので、試してもみなかった。

（3）はじめから断られると思っていたので、言ってもみなかった。

（4）彼女と結婚することになるとは思ってもみなかった。

（5）あの人にもう一度会えるなんて思ってもみなかった。

（6）始める前は、こんなに大変な仕事だとは思ってもみなかった。

多くは、「てもみなかった」の形で、そうしなかったということを強めるのに用いる。使う動詞は限られている。「思ってもみなかった」は慣用的によく使う表現で、実際にある状態になってから、「全く予想しなかった」という意味で用いる。

6 V-てもみないで

（1）本を読んでもみないで、何が書いてあったかどうしてわかるだろう。

（2）食べてもみないで、文句を言うのはやめてください。

「V-ないで」のやや強調した表現。非難の表現に使うことが多い。

7 Nにしてみれば →【にしてみれば】

【ても】

[N／Na　でも]
[A-くても]
[V-ても]

述語のテ形と「も」の組合わさったもの。名詞、ナ形容詞の場合は「でも」となる。くだけた話しことばでは「たって」「だって」の形も使われる。

1 …ても <逆条件>

（1）この仕事は、病気でも休めない。

（2）その車がたとえ10万円でも、今の私には買えない。

（3）不便でも、慣れた機械の方が使いやすい。

（4）風が冷たくても平気だ。

（5）ほしくなくても、食べなければいけない。

（6）国へ帰っても、ここの人々の親切は忘れないだろう。

（7）今すぐできなくても、がっかりする必要はない。

（8）わたしは、まだ勉強不足だから、今試験を受けても受からないだろう。

（9）たとえ両親に反対されても彼との結婚はあきらめない。

Xが成り立てばYが成り立つという「XならばY」の順接的な条件関係を否定する逆接条件を表す。（1）（6）の例で言えば「病気なら休める」「国へ帰ったらここの人々の親切を忘れる」という関係を否定し、Xという条件が成り立ってもYが成り立たないことを表す。（9）のように、副詞の「たとえ」が用いられる場合もある。

2 …ても <並列条件>

二つまたはそれ以上の条件を並べ上げ、どちらの（どの）条件が成立した場合でも同じ結果になることを表す。

a …ても

（1）2を二乗すると4になりますが、−2を二乗しても4になります。

（2）飛行機で行くと料金は片道2万円ぐらいですが、新幹線で行っても費用はだいたい同じです。

（3）A：演奏会、あと20分で始まるんですが、タクシーで行けば間に合うでしょうか。
　　B：会場は駅の近くですから、歩いて行っても間に合うと思いますよ。

「XならばZ」「YならばZ」のように、異なる条件で結果が同じになるような条件文が並べられる場合、二番目の条件文は「Y（であっ）てもZ」のように「ても」で表される。どちらの条件でも同じ結果になるという意味を表すもので、「XてもYてもZ」という形に言いかえることができる。

（例）2を二乗しても、-2を二乗しても4になります。

b …ても…ても

（1）うちの子供は、ニンジンでもピーマンでも、好き嫌いを言わないで食べます。

（2）天気がよくても悪くても、雨が降っても風がふいても、新聞配達の仕事は休めない。

（3）道を歩いてもデパートへ入っても人でいっぱいだ。

（4）辞書で調べても先生に聞いても、まだこの文の意味が理解できない。

（5）スポーツをしても映画を見ても気が晴れない。

「XてもYても(…ても)Z」の形で二つ(以上)の条件を並べ上げて、どちらの(どの)場合でも同じ結果になるという意味を表す。

c V-てもV-なくても

（1）今回のレポートは出しても出さなくても、成績には全く影響ありません。

（2）全員が参加してもしなくても、一応人数分の席を確保しておきます。

（3）1日ぐらいなら、食べても食べ

なくても、体重はたいして変化しない。

「…してもしなくても」のような形で、肯定と否定の関係をもつ条件を並べ、どちらの場合でも結果が変わらないことを表す。

d V-ても V-ても

（1） このズボンは洗っても洗っても汚れが落ちない。

（2） 宿題が多すぎて、やってもやっても終わらない。

（3） 働いても働いても、暮らしは全然楽にならない。

同じ動詞を繰り返して用い、いくら努力しても望む結果が得られないことを強調する場合に用いる。後ろにはたいてい否定表現が続くが、次のように肯定表現が続くこともある。その場合も、その結果が望ましくないという否定的な意味が含まれる。

（例） 追い払っても追い払ってもついてくる。

（例） 雑草は取っても取ってもすぐ生えてくる。

3 疑問詞…ても

「何、どこ、だれ、どれ、いつ、どう」などの疑問詞が「ても」の条件に用いられる場合で、どのような条件であっても、必ず帰結の事態が成立する（否定形ではそれが成立しない）ことを表す。

a いくら…ても

（1） いくら華やかな職業でも、つらいことはたくさんある。

（2） いくら高い車でも、使わなかったら宝のもちぐされだ。

（3） 給料がいくらよくても、休日のない職場には行きたくない。

（4） いくら騒いでも、ここは森の中の一軒家だから大丈夫だ。

（5） いくらお金を貰っても、この絵は絶対手放せない。

（6） このテープの会話は、いくら聞いてもよく分からない。

「いくらXても」で動作や状態の頻度や程度が大きい様子を表し、そのような強力な条件であっても、それに影響されずに結果の事態が成立するような場合に用いられる。

結果は予想・期待に反したものである場合が多い。例えば（1）は、「華やかな職業だったら楽しいことばかりだろう」という予想に反して、「つらいことはたくさんある」ということを、（6）は、「テープをたくさん聞けば分かるようになるだろう」という予想に反して「分かるようにならない」という結果が述べられている。

b どんなに…ても

（1） このコンピューターはどんなに複雑な問題でも解いてしまう。

（2） どんなにつらくても頑張ろう。

（3） どんなに熱心に誘われても、彼女はプロの歌手にはなりたくなかった。

（4） どんなに大きい地震がきても、この建物なら大丈夫だ。

（5） 妻は、わたしがどんなに怒っても平気である。

上のａと同様の用法。「どんなに」は「いくら」で言いかえが可能だが、「いくら」のほうが話しことば的。

c 疑問詞…ても

（1） だれが電話してきても、取りつがないでください。

（2） どんな仕事でも、彼は快く引き受けてくれる。

（3） 本は、どこで買っても同じ値段だ。

（4） あの人はいつ見ても美しい。

（5） 何をしても、あのショックが忘れられない。

「どのような場合でもＹ」という意味で、疑問詞の部分にどんな要素を当てはめても必ず帰結の事態Ｙが成立する（否定形ではそれが成立しない）ことを表す。

d どう V-ても

（1） どう言ってみても、彼の決心を変えさせることはできなかった。

（2） どう計算してみても、そこへ着くまで10時間はかかる。

（3） どうがんばっても、前を走っている三人を追い抜くのは無理だと思った。

意志的な行為を表す動詞を用いて、あれこれやってみても期待通りにならないという意味を表す。

e なん＋助数詞＋V-ても

（1） 何回聞いても名前が覚えられない。

（2） この論文は何度読み返しても、理解できない。

（3） 何回話し合っても、この問題は簡単には解決できないだろう。

（4） あの店の料理は何度食べてもあきない。

（5） あの映画は何回見ても面白い。

動作を表す動詞が用いられ、何度繰り返しても同じ結果になることを表す。（1）〜（3）のように、期待に反した結果が続くことが多いが、（4）（5）のように望ましい事態が続く場合もある。

4 …ても…ただろう

（1） たとえ、努力しても合格できなかっただろう。

（2） 彼は頭がいいので、努力しなくても合格できただろう。

（3） 人をだまして金儲けをするような商売では、たとえ成功しても両親は喜んでくれなかっただろう。

「XしていたらYしていただろう」という関係を否定する、反事実条件文。「XしてもYしなかっただろう」という形で、事実に反するXが成立していてもYの不成立という事実には影響を与えなかっただろうと仮想的に述べるのに使う。

例えば（1）は、順接の反事実条件「努力していれば合格できただろう」（実際は努力しなかったので合格できなかった）の条件関係を否定するもので、「実際は努力しなかったが、仮に努力しても

合格できなかったという事実は変わらなかっただろう」という意味を表す。(2)は、順接の反事実条件「努力しなければ合格できなかっただろう」(実際は努力したので合格できた)を否定するもので、「実際には努力したが、仮に努力しなくても合格できたという事実は変わらなかっただろう」という意味を表す。

5 …ても…た

(1) 雨でも運動会は行われた。

(2) 頭が痛くても学校を休まなかった。

(3) ドアは強く押しても開かなかった。

(4) いくら待っても彼女は現れなかった。

(5) この本は難しすぎて、辞書を引いて読んでも、ほとんど理解できなかった。

「XてもYた」の形で、文末にタ形が用いられ、XもYも実際に起こった出来事を表す。例えば(1)は「雨が降ったけれども運動会は行われた」という意味。この場合「ても」は「が」「けれども」や「のに」などと似た意味を表すが、「ても」が動作を表す動詞に続く場合は、その動作が繰り返し行われた、あるいは極端な程度まで行われたにもかかわらず期待する結果が得られなかったというニュアンスがある。したがって、(4)のように「いくら」を伴う文の場合、「ても」を「が」「けれども」や「のに」で言いかえることはできない。

(誤) いくら待った {が/けれど/のに} 彼女は現れなかった。

6 V-ても R-きれない

(1) 彼の親切に対しては、いくら感謝してもしきれない。

(2) 学生時代になぜもっと勉強しておかなかったのかと、悔やんでも悔やみきれない。

(3) ここで負けたら、死んでも死にきれない。

同一の動詞を使って、その意味を強める。たとえば(1)は深く感謝していることを、(2)は強く後悔していることを強調する。やや慣用的な表現で、使える動詞は限定されている。「死んでも死にきれない」は「あきらめられない」とか「後悔する」の強調表現として使う。

7 V-てもどうなるものでもない

(1) いまから抗議してもどうなるものでもない。

(2) もう一度彼に会ってもどうなるものでもないと彼女は思った。

(3) 性格は直らないのだから、あの人に説教してもどうなるものでもない。

あることをしても解決には至らないという意味。あきらめの気持ちをふくむ表現。

8 V-たくても V-れない

(1) 急に仕事が入って、飲みに行きたくても行けないのだ。

(2) きらいな先生の前では、泣きたくても泣けない。

(3) 医者に止められているので、甘いものは食べたくても食べられない。

「V-たい」の「ても」の形と可能を表す「V-れる」の否定形を組合わせて使う慣用的表現で、「そうしたくてもできない」という意味を表す。事情が許さないのでできないことを強調したり、言い訳をするような場合に用いられる。

9 …てもいい →【てもいい】

10 …てもかまわない

→【てもかまわない】

11 …てもさしつかえない

→【てもさしつかえない】

12 …てもしかたがない

→【てもしかたがない】

13 …てもみない

→【てみる】5、【てみる】6

14 …てもよろしい

→【てもよろしい】

【でも$_1$】

(1) 友達はプールへ泳ぎに行った。でも、わたしはアルバイトで行けなかった。

(2) 彼は新しい、いい車をもっている。でもめったに乗らない。

(3) 青木さんは、自分勝手な人だと言われている。でも、わたしはそうは思わない。

(4) わたしの姉は貧乏な画家と結婚した。でも、とても幸せそうだ。

文頭に用いて、それより前に述べられたことと相反することが続くことを表す。「しかし」より、くだけた表現で、やや会話的。文中では使わない。

(誤) 友達はアルバイトをやめたでも、わたしはやめられなかった。

(正) 友達はアルバイトをやめたが、わたしはやめられなかった。

【でも$_2$】

1 Nでも

(1) この機械は操作が簡単で、子供でも使えます。

(2) この算数の問題は大人でもむずかしい。

(3) この森は、夏でも涼しい。

「XでもY」の形で普通Yだとは考えられない極端な例Xをあげて、それがYなのだから他のものはなおさらYだということを表す。

2 N(+助詞)でも

(1) コーヒーでも飲みませんか。

(2) 待っている間、この雑誌でも見ていてください。

(3) A:佐々木さん、いませんね。
B:ああ、昼食にでもでかけたんでしょう。

(4) 山下さんにでも聞いてみたらどう?

(5) A:先生のお宅へ行くとき、何か持って行きましょうか。
B:そうですね。ワインでも買って行きましょう。

（6）この夏は、山にでも登ってみたい。

（7）病気にでもなったら困るから、日ごろ運動するようにしている。

（8）宿題のレポートは、図書館ででも調べてみることにした。

（9）避暑にでも行ったら元気になるかもしれない。

（10）こんな忙しいときに客でも来たら大変なことになる。

（11）寒いからなべものでもしたらどうでしょうか。

他にも選択肢があることを含みながら一例をあげるのに用いる。文脈によって、実際にはそのものを婉曲に指すことが多い。

たとえば、（1）は、「コーヒーかほかの飲みもの」を示すが、（2）は具体的に指示しようとしているのは、「この雑誌を見ている」ことである。（9）から（11）は、「でも」を用いて、例を示し、「たとえば、こういうことをしたら」という意味の仮定表現。ただし、実際に話し手の言いたいことは、「避暑にいったら」など、それぞれの表現から「でも」をとった文であることが多い。全体に婉曲な表現をする文では、「でも」がよく使われる。

3 R-でもしたら

（1）放っておいて、病気が悪くなりでもしたら、どうするんですか。

（2）そんな大金、落としでもしたら大変だから、銀行に入れた方がいいですよ。

（3）そんなにいうならこのカメラ、貸してあげるけど、気をつけてよ、こわしでもしたら承知しないから。

（4）こどものころ、妹を泣かしでもしたら、いつも一番上の兄に怒られた。

動詞の連用形に付いて、万一そうなったらという意味を表す。事故、病気など、万一起こると困るということをあげて、注意を促すような場合が多い。

4 V-てでも →【てでも】

5 N／Na でも

→【ても】、【てもいい】4、【てもかまわない】3、【てもよろしい】

【でもあり、でもある】

[NでもありNでもある]
[NaでもありNaでもある]
[AくもありAくもある]

（1）彼はこの会社の創始者でもあり、今の社長でもある。

（2）娘の結婚はうれしくもあり、さみしくもある。

XであることとYであることが同時に成り立つことを表す。

【でもあるまいし】

→【まい】3b

【てもいい】

1 V-てもいい <許可>

（1）A：入ってもいいですか。
　　B：どうぞ。

（2）A：すみません、ここに座ってもいいですか。
　　B：あの、連れがいるんですけど…。

（3）A：この服、ちょっと着てみてもいいですか。
　　B：はい、どうぞ。

（4）あそこは、夕方八時から朝六時までは駐車してもいいらしい。

（5）A：あしたは何時に来ればいいでしょうか。
　　B：10時ぐらいに来てくれますか。
　　A：あの、ちょっと遅れてもいいですか。

（6）A：すみませんが、ここで写真をとってもいいですか。
　　B：申し訳ありませんが、ここでは撮影禁止になっております。

（7）この部屋のものは何でも自由に使って(も)いいと言われました。

（8）母は、将来は、わたしの好きなようにして(も)いいと言った。

（9）明日は特に用もないから、別に来なくてもいいですよ。

（10）飲めないのなら無理に飲まなくてもいいよ。

許可や許容を表す。会話では、相手に許可を与える場合や相手に許可を求める場合に使う。「V-てもよい」とも言う。「V-てもかまわない」もだいたい同じ意味。「V-ていい」も使う。

約束の時間を決めるような場合に、「何時に来てもいいですか」のように言うのは誤用で、「何時に来たらいいですか」「何時に来ればいいですか」のようにいう。

「...なくてもいい」は（9）（10）のように、「...する必要がない」という意味になる。

2 V-てもいい <可能性>

（1）ワインのかわりに、しょうゆで味をつけてもいい。

（2）そのときすぐ断ってもよかったのだが、失礼だと思ったので、そうしなかったのだ。

（3）滞在をもう少し延ばしてもよかったのだが、切符がとれたので、予定通り帰って来た。

（4）就職の時、東京の会社を選んでもよかったのだが、最終的には、郷里に帰る方をとったのだ。

（5）タクシーで行ってもよかったのだが、車で送ってくれるというので、乗せてもらった。

ほかの選択の余地、可能性があることを示す。この意味では、「ていい」という表

現はあまり使わない。過去の場合は、「選択の余地はあったが、そうはしなかった」という意味を表す。

3 V-てもいい ＜申し出＞

（1） A：わたしは、月曜日はちょっと家を出られないんですが。
　　B：じゃあ、わたしがお宅へ伺ってもいいですよ。
　　A：それじゃ、そうしてください。

（2） A：彼がいないので、この仕事が進まないんだ。
　　B：ぼくが引き受けてもいいよ。

話し手が、自発的にある行為をすると申し出るのに使う。相手の利益になる申し出に使うのが普通。

4 …てもいい ＜譲歩＞

[N／Na　でもいい]

[A-くてもいい]

（1） 印かんがなければ、サインでもいいですよ。

（2） 給料がよければ、すこしぐらい危険な仕事でもいい。

（3） 試合をするのに人数が足りないので、へたでもいいですから、誰か参加者を探してください。

（4） 多少不便でもいいから、自然環境のいいところに住みたいと思う。

（5） わたしでもよければ、手伝います。

（6） この部署には若くてもいいから、しっかりした人を入れたい。

（7） 手紙でも、電話でもいいから、連絡してみてください。

譲歩を表す表現で、最上とはいえないが、妥協して、これでよいとする意味を表す。また、（7）のように、いくつか選択肢を示す場合は、可能とする範囲を示す。「…てもかまわない」と同じ。

【てもかまわない】

1 V-てもかまわない ＜許可＞

（1） この集まりにはすこしぐらい遅れてもかまわない。

（2） このレポートは英語で書いても、日本語で書いてもかまいません。

（3） A：すみません、ここで待っていてもかまいませんか。
　　B：いいですよ。どうぞ。

（4） 今できないのなら、あとでやってもかまいません。

（5） ここでやめてもかまわないが、そうすると、この次、また、始めからやり直さなければならないだろう。

（6） 飲めないのなら、無理に飲まなくてもかまいません。

（7） ここでは何もしなくてもかまわないから、ゆっくり養生して、元気をとりもどしてください。

（8） A：10分待ちましたよ。
　　B：すみません、でも先に行ってくれてもかまわなかったのに。

許可や許容を表す。会話では、相手に許可を与えたり、許可を求めるのに使う。「…てもいい」に言いかえられる。「…なくてもかまわない」は（6）（7）のように、「…する必要がない」という意味になる。

2 V-てもかまわない ＜可能性＞

（1） タクシーで行ってもかまわなかったのだが、車で送ってくれるというので、乗せてもらった。

（2） お金は十分あったので、高いホテルに泊まってもかまわなかったのだが、そうはしなかった。

多くは、「てもかまわなかった」の形で、ほかを選択する可能性があったことを示す。実際には、そうしなかったことを暗示することが多い。「…てもよかった」に言いかえられる。

3 …てもかまわない ＜譲歩＞

[N／Na　でもかまわない]

[A-くてもかまわない]

（1） 何か上着のようなものを貸してください。大きくてもかまいません。

（2） A：このスープはまだ十分温まっていませんよ。
　　B：ぬるくてもかまいません。

（3） テレビは、映りさえすれば古くてもかまわない。

（4） 静かなアパートを捜している。静かな場所なら、多少不便でもかまわない。

（5） 意味が通じるのなら、表現は多少不自然でもかまわない。

（6） だれでもかまわないから、わたしの仕事を代わってほしい。

（7） 手紙は手書きでも、ワープロ書きでもかまわない。

（8） 誰か一人呼んでください。吉田さんでも、小山さんでもかまいません。

（9） A：何時頃お電話すればいいですか。
　　B：朝でも晩でもかまいませんから、なるべく早く結果を知らせてください。

譲歩を表す。最上のものではないが、妥協して、これでいいとするという意味。（9）のように、選択肢がいくつかある場合は、可能とする範囲を示す。「…てもいい」に言いかえられる。

【てもさしつかえない】

[N／Na　でもさしつかえない]

[A-くてもさしつかえない]

[V-てもさしつかえない]

（1） 無理をしなければ運動をしてもさしつかえありません。

（2）ひとりかふたりのお客さまなら、人数を変更なさってもさしつかえありません。

（3）この書類ははんこがなくてもさしつかえない。

（4）最終的に決定するのに、全員の意見が聞けなくてもさしつかえはないと思う。

「...てもさしつかえない」「...なくてもさしつかえない」のどちらも使う。譲歩の表現で、「...ても」で示した条件でいい、支障がないの意味。「さしつかえはない」ともいう。「てもいい」「てもかまわない」に近いが、このふたつより改まった状況で使うのが普通。

【てもしかたがない】

[N／Na　でもしかたがない]

[A-くてもしかたがない]

[V-てもしかたがない]

（1）このレポートでは、やりなおしを命じられても仕方がない。

（2）あんないいかげんな練習では、一回戦で負けてもしかたがない。

（3）あんなに雪が降っては、時間通りに着けなくてもしかたがない。

（4）これだけたくさんの人がいては、彼女がみつけられなくても仕方がない。

（5）チームの選手にけが人が多かったから、今回は最下位でもしかたがない。

（6）買い物にいくひまがないから、今夜のパーティーは古い服でもしかたがない。

（7）このところ雨ばかりだから、ビアガーデンのお客が少なくてもしかたがない。

（8）この辺は便利だから、マンションの値段が高くても仕方がない。

「...てもしかたがない」「...なくてもしかたがない」のどちらも使う。残念な、または、不満な状況だが、受け入れざるをえないとする意味を表す。「...ては」をつけて、その状況を生み出した原因や理由を述べることが多い。

【でもって】

1 Nでもって

（1）行為でもって誠意を示しなさい。

（2）言葉は信じられない。行動でもって示してください。

（3）お金でもって、始末しようという彼の態度が気に入らない。

手段や方法を表す。話しことばで使うことが多い。

2 でもって

（1）彼女は美人である。でもってスポーツ万能ときている。

（2）A：山田さんは、おこって部屋を飛び出して行ったの。みんな、びっくりよ。

B：でもって、それから、どうなったの。

話を追加したり、発展させたりするときに用いる。そのうえ。それで。くだけた会話で使う。

【でもない】

1 Vでもない

（1）彼は反論するでもなく、ただぼんやりたばこをすっている。

（2）角のところにぼんやり人影が現れた。しかし、こちらへ歩いてくるでもない。

（3）彼女はそんなきびしい批評をされても、しょんぼりするでもなく、いつものように淡々としていた。

（4）彼はプレゼントをもらっても、喜ぶでもなく、何かほかのことを考えている様子だ。

あまりはっきりしない態度や様子を表す。その文脈で、ある反応が予想されるが、それが明確に示されず、全体に、ぼんやりした状態であるような様子を表すのに用いる。

2 まんざら...でもない　→【まんざら】

【てもみない】

→【てみる】5

【てもよろしい】

1 V-てもよろしい

a V-てもよろしい ＜許可＞

（1）A：君たち、きょうは、もう帰ってもよろしい。

B：はい、社長。

（2）A：いやなら、おやめになってもよろしいですよ。

B：いいえ、参ります。

（3）A：書類はここでご覧になってもよろしいですよ。

B：ありがとうございます。

許可を与えるのに使う。普通体の表現は、権威的な響きがある。また、丁寧体の「よろしいです」は、かしこまった言い方。

許可を与えるという行為は、その権限のある人が行なうのが普通であるため、目下の人が目上の人に向かってこの表現を使うと失礼に聞こえることが多い。

b V-てもよろしいですか

V-てもよろしいでしょうか

（1）A：先生、お聞きしたいことがあるんですが、少しお時間をいただいてもよろしいでしょうか。

B：いいですよ。

（2）A：先生、これを見せていただいてもよろしいですか。

B：ええ、どうぞ。

（3）A：必要書類は明日お届けにあがってもよろしいでし

ょうか。

B：結構です。よろしく。

(4) 社長、では十時ごろ、お迎えに参ってもよろしいでしょうか。

(5) お客様、お部屋を掃除させていただいてもよろしいでしょうか。

非常に丁寧に許可を求める表現で、目上に対して使う。文中のほかの部分は、敬語表現を多用する。「てもいいですか」をもっと丁寧にしたもの。「でしょうか」は「ですか」より丁寧。

2 てもよろしい ＜可能性＞

(1) A：ネクタイピンはこちらをおつけになってもよろしいですね。

B：そうですね。

(2) ≪料理の番組≫これは、キャベツをお使いになってもよろしいと思います。

ほかのものを選択する可能性があることを示す。「てもいい」にくらべ、かしこまった表現。

3 …てもよろしい ＜譲歩＞
[N／Na でもよろしい]
[A-くてもよろしい]

(1) 面会はあしたでもよろしい。

(2) これ、自宅まで届けていただけますか。来週でもよろしいんですけど。

(3) 酒さえあれば、食べ物はなくてもよろしい。

(4) 応募したいんですが、経験が不十分でもよろしいですか。

譲歩を表す表現で、最上とはいえないが妥協してこれでよいとする意味を表す。会話では、許可を与えたり、許可を求めたりする意味でも使う。普通体の表現は相手がある場合は、権威的に聞こえる。丁寧体の「よろしいです」は、かしこまった言い方。

【てもらう】

1 V-てもらう

(1) 私はタイ人の友だちにタイ料理を教えてもらった。

(2) 山本さんに香港映画のビデオを貸してもらった。

(3) 今年の冬は、ホストファミリーにスキーに連れて行ってもらいました。

(4) みんなに1000円ずつ出してもらって、お祝いの花束を買った。

(5) いろいろと準備してもらったのに、中止になってしまって申しわけありません。

(6) プリントが足りなかったら、隣の人に見せてもらってください。

話し手(または話し手の側の人)のために誰かが何かの行為をするということを、話し手の側から述べる表現。話し手が行為をするように頼んだ場合は「V-てもらう」を使うことが多いが、相手が自分から進んで行為をした場合はその人を主語にして「V-てくれる」を使うことが多い。

「教えてもらう」「貸してもらう」「送ってもらう」などのように、物や知識などが相手側からこちら側に移動したり伝わったりする場合は、「友だちからタイ料理の作り方を教えてもらった」のように「…からV-てもらう」の形も使われる。

2 V-てもらえるか
V-てもらえないか

(1) A：ちょっとドア、閉めてもらえる?

B：いいよ。

(2) 買い物のついでに郵便局に寄ってもらえるかな。

(3) ちょっとペン貸してもらえますか。

(4) A：ねえ、悪いけどちょっと1000円貸してもらえない?

B：いいよ。

(5) すみません、ここは子供の遊び場なんですけど、ゴルフの練習はやめてもらえませんか。

(6) ここは公共の場なんですから、タバコは遠慮してもらえませんか。

「もらう」の可能の形を使って、話し手(または話し手の側の人)のために何かの行為をするように頼む時に用いる。普通体は目下の親しい相手に対して、丁寧体は広くいろいろな相手に対して用いられ、(5)(6)のように人に注意を与えたりする場合にも使う。

より丁寧に依頼したい場合は「V-てもらえないでしょうか」「V-ていただけませんか」「V-ていただけないでしょうか」などの形を使う。

3 V-てもらえるとありがたい
V-てもらえるとうれしい

(1) A：今度の日曜日、もし時間があったら、引っ越しの手伝いに来てもらえるとありがたいんですけど。

B：あ、いいですよ。

(2) 私が買い物から帰ってくるまでに掃除しておいてもらえるとうれしいんだけど。

(3) 約束の時間をもう少し遅くしてもらえると、助かるんだが。

「V-てもらえると」の後に、「ありがたい」「うれしい」「助かる」などを続けて、丁寧な依頼を表す。文末は言い切らないで、「けど」「が」などで終わることが多い。

4 V-てやってもらえるか
V-てやってもらえないか

(1) わるいけど、ちょっと太郎の宿題を見てやってもらえる?

(2) 彼女、人間関係でかなり落ち込んでるみたいなんだけど、それとなく一度話を聞いてみてやってもらえる?

(3) うちの娘に英語を教えてやってもらえないかしら。

話し手側に属する人のためにある行為をしてほしいと依頼する場合に使う。

【てやまない】

[V-てやまない]

(1) 愛してやまないアルプスの山々は今日もきれいだ。
(2) 彼女は、女優をしていた間、ずっとその役にあこがれてやまなかった。
(3) 今井氏は一生そのことを後悔してやまなかった。
(4) あの方はわたしの父が生涯尊敬してやまなかった方です。

感情を表す動詞に付いて、その感情が強く持続していることを表す。否定的な感情についても用いられる。小説などの文章で用い、会話ではあまり用いない。

【てやる】

[V-てやる]

(1) 子供に新しい自転車を買ってやったら、翌日盗まれてしまった。
(2) 東京の弟に、今年もふるさとの名物を送ってやった。
(3) 犬を広い公園で放してやったら、うれしそうに走り回っていた。
(4) A：荷物、重かったら持ってやるよ。
　　B：あ、いい、大丈夫。
(5) こんな給料の安い会社、いつでも辞めてやる。
(6) A：あんたなんか死ねばいいのよ。
　　B：そんなに言うんなら、ほんとに死んでやる。

話し手より目下の人や動物のために、話し手（または話し手の側の人）が何かの行為をすることを表す。(5)(6)のように、怒りの表現として、相手の嫌がることをするという意味で使われることもある。話し手と対等の関係にある人には「V-てあげる」を使う。

【てん】

1 …てん

[Nのてん]
[Naなてん]
[A-いてん]
[Vてん]

(1) 兄より弟の方が行動力の点でまさっている。
(2) 新しい車の方が、燃費の点で安上がりだ。
(3) 値段の点では、A電気のもののほうが安いが、性能の点では、B電気のほうがよくできている。
(4) この種類の犬は性格のやさしい点が好まれている。
(5) この小説は、現代の世相をよくとらえている点で評価が高い。

(6) 経験がある点で、彼のほうがこの仕事には向いている。
(7) 若い社員がたくさん活躍している点で、この会社はおもしろそうだ。
(8) この点でみんなの意見が分かれた。

あるものごとの特性のうち、特にひとつのことを取りあげて示すのに用いる。

2 …というてん

[Nというてん]
[Naだというてん]
[A-いというてん]
[Vというてん]

(1) 彼の設計は創造性という点で高く評価された。
(2) この会社は、給料はいいが、労働条件がきびしいという点が気になる。
(3) この犬は、性格がやさしいという点で、人気がある。
(4) この計画は人がたくさん必要だという点で問題がある。
(5) 経験があるという点で、彼のほうがこの仕事には向いている。

意味は、1の用法と同じで、「という」でつないだ表現。名詞を用いる場合も「という」を入れることができるが、節を用いる場合に、「という」でつなぐことが多い。動詞、形容詞の場合は、「という」がなくてもよいが、名詞やナ形容詞が述語になる「…だ」の場合は、「という」が必ず必要。

【と$_1$】

[N／Na　だと]
[A-いと]
[V-ると]

述語の辞書形に付く。たいてい普通体に付くが、丁寧に言う場合は「…ですと」「…ますと」となる場合もある。前の出来事を契機にして後の出来事が成立するという関係を表す。

1 …と <一般条件>

(1) あまり生活が便利だと、人は不精になる。
(2) 気温が低いと桜はなかなか咲かない。
(3) 酒を飲むと顔が赤くなる。
(4) 春が来ると花が咲く。
(5) 水は100度になると沸騰する。
(6) 気温が急に下がると霧が発生する。
(7) だれでも年をとると昔がなつかしくなるものだ。
(8) 生活が安定すると退屈になるし、不安定すぎるとストレスがたまる。
(9) 月にかさがかかると翌日は雨になる。
(10) 来年のことを言うと鬼が笑う。
(11) 夜爪を切ると親の死に目に会えない。

特定の個人やものではなく、人やものごと一般についての条件関係を述べる表

現で、「Xが成立する場合に必ずYが成立する」という意味を表す。文末はいつも辞書形をとり、タ形や推量の形をとることはない。(7)のように、本来そのような性質を持っているという意味を表す「ものだ」が付くことがある。

前のことがらが起こると、それに引き続き自動的・自然発生的に後のことがらが起こるというような関係を表すことが多く、自然界の法則を述べる場合などによく使われる。(10)(11)はことわざの表現。

2 …と <反復・習慣>

特定の人やものの習慣や動作の反復を表す。「必ず」「いつも」「毎年」「よく」など、習慣や反復を表す副詞を伴うことが多い。1の<一般条件>と異なり、この用法は、特定の主語について述べるもので、文末には辞書形とタ形のどちらも使える。

a …と…る

(1) おじいさんは、天気がいいと裏山に散歩にでかける。
(2) 兄は、冬になると毎年スキーに行く。
(3) 隣の犬は、私の顔を見るといつもほえる。
(4) 私は、面白いコマーシャルを見るとすぐその製品を買いたくなるくせがある。
(5) お酒を飲むと、いつも頭がいたくなる。
(6) ワープロを2時間たたくと、肩がこる。
(7) 彼女は、ストレスがたまるとむやみに食べたくなるのだそうだ。
(8) 僕がデートに遅れると、彼女は必ず不機嫌になる。
(9) 彼は給料が入ると飲みに行く。

特定の人やものの現在の習慣・動作の反復を表す。文末には述語の辞書形が用いられる。

b …と…た(ものだ)

(1) 子供のころ、天気がいいと、この辺を祖母とよく散歩をしたものだ。
(2) 日曜日に一家で買い物に出ると、必ずデパートの食堂でお昼を食べた。
(3) 祖母のところに行くと、必ずおこづかいをもらったものだ。
(4) 学生のころは、試験が始まると胃が痛くなったものだ。
(5) 北海道のおじさんが遊びに来ると、娘たちはいつも大喜びをした。
(6) あのころは一日働くと、一カ月遊んで暮らせたものだ。

文末に述語のタ形が用いられ、特定の人やものの過去の習慣・動作の反復を表す。回想を表す「たものだ」を伴うことが多い。

3 …と <仮定条件>

a …と+未実現のことがら

(1) ここをまっすぐ行くと、右手に大きな建物が見えます。
(2) このボタンを押すとドアは開きます。
(3) この小説を読むと世界観が変わるかもしれません。
(4) 雨天だと明日の試合は中止になります。
(5) これを全部計算すると、総費用はだいたい百万円になります。
(6) 動くと撃つぞ。
(7) そんなに食べると太るよ。
(8) 真面目に勉強しないと卒業できないよ。
(9) 生活がこんなに不安定だと落ち着いて研究ができない。
(10) こんなにおいしいと、いくらでも食べてしまいそうだ。

特定の人やものについて「Xが成立する場合にYが成立する」ということを述べるのに使う。Yはいつも未実現のことがらを表すが、Xは未実現のことがらの場合とすでに実現していることがらの場合がある。

(1)～(6)は、Xが未実現の場合、(7)～(10)は、Xがすでに実現している場合である。(6)は動き出しそうな相手に銃を向けて脅す場合の表現で、この場合「動いたら撃つぞ」とも言えるが、「と」には前後の動作が間を置かずにほとんど同時に起こるという意味があり、「たら」よりも迫力のある脅しの表現となる。(7)(8)はそれぞれ食べ過ぎの人、勉強しない人に警告する時の言い方である。

Yには、事実を述べ立てる表現や「だろう」「かもしれない」などの推量表現を続けることができるが、命令・依頼・勧誘など相手への働きかけの表現や、「V-よう」の形の意志表現は使えない。

(誤) 雨天だと明日の試合は中止しよう。
(正) 雨天なら明日の試合は中止しよう。

「と」は、すでに実現していることや、未来にかなりの確率で実現しそうなことがらを条件とするという意味が強いため、仮定の意味をもつ「もし」は付きにくい傾向がある。

(誤) もし雨天だと試合は中止になります。
(正) もし雨天なら試合は中止になります。

b …と+疑問詞…か

(1) A:お酒を飲むとどうなりますか。
　　B:顔が赤くなります。
(2) A:51を3で割ると、いくつになりますか。
　　B:17になります。
(3) A:この道をまっすぐ行くと、どこに出ますか。
　　B:国道1号線に出ます。

「…するとどうなるか」のような形で、「と」の後に疑問詞を伴う疑問文が続いたも

の。後ろには「どうなるか」「何があるか」など、変化や存在などを表す無意志的な行為を表す動詞が続く。「どうするか」のような意志でコントロールできる動作の表現は習慣や習性を表す以外には使えない。

(誤) 水は100度になるとどうしますか。

(正) 水は100度になるとどうなりますか。

「と」は、たいてい「...するとどうなるか」のように、後半に疑問の焦点がある場合に使われ、「どうするとそうなるか」のように、前半に疑問の焦点がある文には使いにくい。この場合は、「と」ではなく「ば」や「たら」を使ったほうが自然である。

(誤) どうするとドアは開きますか。

(正) どう{すれば／したら}ドアは開きますか。

4 ...と...た <確定条件>

前後ともにすでに実現している特定のことがらを表す。文末はタ形をとるのが普通だが、小説などでは、歴史的現在を表す辞書形が用いられることもある。ほとんどの場合、前後とも動詞が用いられる。物語や小説でよく使われるが、会話では「たら」のほうがよく使われる。

a ...と...た <契機>

(1) 教えられたとおりまっすぐ行くと、つきあたりに郵便局があった。

(2) 駅に着くと、友達が迎えに来ていた。

(3) トンネルを出ると、そこは銀世界だった。

(4) お風呂に入っていると、電話がかかってきた。

(5) 街を歩いていると、見知らぬ男が声をかけてきた。

(6) 夜になると急に冷え込んできた。

(7) 午後になるとだいぶ暖かくなった。

(8) ベルを鳴らすと、女の子が出て来た。

(9) 仕事をやめるとたちまちお金がなくなった。

前のことがらが成立した場面で、後のことがらを話し手が新たに認識したり、前のことがらをきっかけに後のことがらが起こったりするという関係を表す。

(1)(2)(3)は前の動作が行われたところで、後の状況を話し手が発見するといった用法。(4)(5)は前の動作が行われている場面に、新たな事態が出現するといった用法。(6)(7)は、前半が後続のことがらが成立する時間的状況を表す用法である。(8)(9)は、前の動作をきっかけに後の動作が起こるという関係を表す。

いずれの場合も、後続のことがらは、前のことがらが成立するのと同一場面で、話し手が外から観察できるようなことがらでなければならない。次の例は、話し手の身体的な感覚を表しており、こうした関係を表さないので「と」は使えず、代わりに「たら」を使わなければならない。

(誤) 昨夜この薬を飲むと、よく効いた。

(正) 昨夜この薬を飲んだら、よく効いた。

ほとんどの場合、前後とも動詞が用いられるが、(3)のように、ある状況の発見を表す用法では後半に名詞述語や形容詞述語が使われることもある。

(例) 外に出ると、予想以上に寒かった。

b ...と...た <連続>

(1) 男はめざまし時計を止めると、またベッドへ戻った。

(2) わたしは、東京駅へ着くとその足で会社へ向かった。

(3) 母は受話機を置くと、ためいきをついた。

同一の行為者が、ひとつの動作を契機にして、引き続き次の動作をしたということを表す。前後とも意志的動作を表す。文末は普通タ形を用いるが、シナリオのト書などでは次のように辞書形も使われる。

(例) (シナリオ)良雄は、手をふくと、ギターを手に取る。

<連続>の「と」は小説や物語でよく使われる。この用法では「たら」の使用は不自然で、ほとんどの場合、言いかえは不可能である。この用法の「と」は、動詞のテ形で言いかえられるが、テ形から「と」への言いかえは、いつも可能とは限らない。例えば、テ形は三つ以上の動作の連続を表すことができるが、これを「と」で言いかえることはできない。

(誤) 父は家に帰ると、ご飯を食べると、すぐ布団に入った。

(正) 父は家に帰って、ご飯を食べて、すぐ布団に入った。

テ形は同一の場面で連続する動作を表すのに対し、「と」は、場面を二つに分けて、第一の場面から第二の場面に切り替わる時に起こる変化を外から描写するような場合に用いるものだからである。

5 ...とすぐ

(1) 彼は、うちへ帰るとすぐテレビのスイッチを入れる。

(2) 放送局は、駅を降りて右へ曲がるとすぐです。

(3) うちへ帰るとすぐテレビのスイッチを入れた。

(4) 彼らは土地の開発許可が降りるとすぐ工事にとりかかった。

(5) 彼女は大学を卒業するとすぐ結婚した。

(6) スポーツをやめるとすぐ太り出した。

条件表現の「と」と副詞「すぐ」の組み合わさったもので、前の出来事に続いてすぐに次の出来事が起こることを表す。

6 ...と <前置き>

(1) 正直に言うと、そのことについてはあまりよく分からないのです。

(2) 母に言わせると、最近の若者は行儀が悪くなっているようだ。

(3) 本当のことを申し上げますと、手術で助かる見込みは50パ

ーセント以下ではないかと思います。

（4）実用的な点からみると、あまり使いやすい部屋ではない。

（5）今となって考えてみると、彼の言うことももっともだ。

（6）昨年に比べると、今年は桜の開花がちょっと遅いようだ。

「言う」「見る」「考える」「比べる」など、発言や思考、比較などを表す動詞に続き、後に続くことがらがどのような観点や立場から述べられているかについて前置き的に述べる表現。この用法の「と」は、「たら」「ば」「なら」で言いかえられることが多い。

7 …からいうと →【からいう】1
8 …からすると →【からする】1
9 …からみると →【からみる】1
10 …てみると →【てみる】3
11 …というと →【というと】
12 …となると →【となると$_2$】
13 …ともなると →【ともなると】
14 …によると →【によると】
15 V-ようとV-まいと →【よう$_2$】4

【と$_2$】

1 数量詞＋と ＜繰り返し＞

（1）人々は一人、また一人とやってきた。

（2）星が、一つ、また一つと消えていく。

（3）白鳥が一羽、また一羽と湖に降り立った。

「一人、また一人」「一つ、また一つ」のように、「1」を表す数量詞を繰り返して、出来事が散発的に繰り返される様子を表す。書きことば。

2 数量詞＋と ＜累加＞

（1）人々は一人、二人と集ってきた。

（2）このコンクールも二回、三回と回を重ねるうちに、だんだんよくなってきた。

（3）二度三度と失敗を繰り返して、ようやく成功にこぎつけた。

少ない数と、一つ上の数を並べて、少しずつ量や回数が増る様子を表す。

3 数量詞＋とV-ない

（1）禁煙しようという彼の決心は三日と続かなかった。

（2）あの人は気が短いから、5分と待っていられない。

（3）A：これだけビールを買っておけばだいじょうぶでしょう。
B：いや、客が多いから1時間ともちませんよ。

（4）あんなに宣伝したのに、参加者は二十人と集らなかった。

短い期間や少ない量を表す数量詞を用い、後ろには否定の表現を伴って、わずかそれだけでさえ満たせないという意味を表す。

4 にどとV-ない →【にどと…ない】

5 擬態語＋と

（1）彼はゆっくりと立ち上がった。

（2）雨がザーッと降ってきた。

（3）雨がぽつり、ぽつりと降り始めた。

（4）列車はガタンガタンと動き始めた。

（5）傷口がずきんずきんと痛む。

擬態語や擬声語に付いて、動作や作用の行われる様子を表す。「と」は省略できる場合もある。また、（3）～（5）のように擬態語や擬声語を繰り返すと、動作や作用が繰り返されたり少しずつゆっくりと開始されたりする様子を表す。

【とあいまって】

［Nとあいまって］

（1）彼の現代的な建築は背景のすばらしい自然とあいまって、シンプルでやすらぎのある空間を生み出している。

（2）その映画は、弦楽器の音色が美しい映像と相まって、見る人を感動させずにはおかないすばらしい作品となっている。

（3）彼の独創性が彼女の伝統美と相まって、彼らの作る家具はオリジナリティあふれたものとなっている。

名詞に付いて、「それが他の要素と作用し合って」「その性質が他の要素の性質と一緒に働いて」という意味を表す。書きことば的な表現。

【とあって】

1 …とあって

［Nとあって］
［Vとあって］

（1）今日は三連休とあって、全国の行楽地は家族連れの観光客で賑わいました。

（2）一年に一回のお祭りとあって、村の人はみんな神社へ集まっていた。

（3）めったに聞けない彼の生演奏とあって、狭いクラブは満員になった。

（4）大型の台風が接近しているとあって、どの家も対策におおわらわだ。

（5）名画が無料で見られるとあって、席ははやばやと埋まってしまった。

「…という状況なので」という意味を表す。特別の状況の場合に用いられ、後にその状況で当然起こることがらやとるべき行動を述べるという含みがある。書きことばで、ニュースなどで使う。

2 …とあっては

（1）伊藤さんの頼みとあっては、断れない。

（2）彼が講演するとあっては、何とかして聞きに行かねばならない。

（3）高価なじゅうたんが定価の一

割で買えるとあっては、店が混雑しないはずがありません。

（4）最新のコンピューター機器がすべて展示されるとあっては、コンピューターマニアの彼が行かないわけがない。

「…という状況であるなら」という意味を表す。特別な状況の場合に用いられ、後にその状況で当然起こることがらやとるべき行動を述べるのに使う。たとえば（1）の例では、伊藤さんが自分にとって重要な人物であるから当然断れないといった状況で用いる。ややかたい表現だが、話しことばでも使う。

【といい】

[N／Na　だといい]
[A-いといい]
[V-るといい]

「と1-3」と「いい」が結び付いたもの。「とよい」はそのやや改まった形。

1 V-るといい ＜勧め＞

（1）この株は今買うといいですよ。

（2）分からないときは、この辞書を使うといい。

（3）旅行には、小さいドライヤーを持っていくといい。

（4）疲れたようだね。仕事は急がなくてもいいから、ソファで少し寝るといい。

（5）私を疑いたければ存分に疑うといい。

動詞の辞書形を受け、人に対してその行為を行うように勧める意味を表す。文脈によっては、（5）のように「自分の好きなように…しなさい」といった「放任」を表す場合もある。しないように勧める場合には使えず、その場合は「V-ないほうがいい」などを使う。

（誤）今買わないといい。

（正）今買わないほうがいい。

類義的表現として「たらいい」「ばいい」があるが、「といい」は「一般的にそうするのが適当だ」という意味の勧めに使う。どうすべきかをたずねる疑問表現では「といい」は使えず、「たらいい」「ばいい」を使う。その答えには「たらいい／ばいい」だけでなく、「といい」も使うことができる。この場合「たらいい／ばいい」が特定の結果を得るために「それで必要十分だ」という意味を表すのに対し、「といい」は「それが一般的に適切だ」という意味を表す。

（誤）うまくいかない時はどうするといいですか。

（正）A：うまくいかない時はどう｛したら／すれば｝いいですか。
B：山本さんに｛聞いたら／聞けば／聞くと｝いいですよ。

2 …といい ＜願望＞

（1）生まれてくる子供が、女の子だといいなあ。

（2）学生がもっと積極的だといいのだが。

（3）勉強部屋がもっと広いといいのになあ。

（4）旅行の間、晴天が続くといい。

（5）彼が時間に間に合うといいんだけど。

（6）みんながこのことを忘れていないといいが。

（7）学生の自発的な活動が今後も継続されるといい。

そうなってほしいという願望を表す。文末に「が／けど／のに／（のに）なあ」などを伴うことが多い。「が／けど／のに」を伴う場合は、「実現しないかもしれない」という不安や、現状が希望する状態と異なるという含みがある。「たらいい」「ばいい」もほぼ同義で、ほとんどの場合言いかえが可能。

3 …とよかった（のに）

（1）A：とても楽しい旅行だったわよ。あなたも来るとよかったのに。
B：行けるとよかったんだけど、急用ができてしまってね。

（2）本当のことを言ってくれるとよかったのに。

（3）この部屋、もう少し日当たりがいいとよかったんだが。

実際には起こらなかったり、現実が期待に反するような場合に、それを残念に思ったり聞き手を非難したりする気持ちを表す。この用法では「とよかった」よりも「ばよかった」「たらよかった」の形の方がよく使われる。文末には「のに／のだが／のだけれど」などが付くことが多い。「のに」は普通自分の行動については使わない。

（誤）僕も行けるとよかったのに。

（正）僕も行けるとよかったん｛だけど／だが｝。

【といい…といい】

[NといいNといい]

（1）社長といい、専務といい、この会社の幹部は古くさい頭の持ち主ばかりだ。

（2）娘といい、息子といい、遊んでばかりで、全然勉強しようとしない。

（3）玄関の絵といい、この部屋の絵といい、時価一千万を越えるものばかりだ。

（4）これは、質といい、柄といい、申し分のない着物です。

（5）ここは、気候といい、景色といい、休暇を過ごすには、最高の場所だ。

（6）あのホテルといい、このレストランといい、観光客からできるだけしぼりとろうとしているのが明白だ。

例としてふたつのものをとりあげるのに用いる。その二つだけでなく他のものもそうであるという意味が含まれることが多い。批判や評価の文で使い、特別な感情（あきれたという気持ち、感心、あきらめなど）が表される。

【といいますと】

（1） サファリといいますと、アフリカの大自然が連想されます。

（2） 団塊の世代といいますと、1940年代の終わりごろに生まれた世代のことですね。

（3） A：この時代は女性の時代ですね。
B：といいますと、どういうことでしょうか。

「というと」の丁寧な言い方。

→【というと】

【という$_1$】

（1） 道子さんはすぐにいくと言いました。

（2） 卒業後は郷里へ帰って教師をしているという。

（3） あの船の名前はなんといいますか。

→【いう】

【という$_2$】

1 Nという N <名前>

（1） これは、プルメリアという花です。

（2） 山川登美子という歌人を知っていますか。

（3） 中野さんという人から電話があった。

（4） 飛行機が次に着いたのは、エベスという小さい町だった。

（5） 「天使の朝」という映画を見たが、友達はだれもその映画の名前を聞いたことがないと言った。

「N 1 という N 2」の形で N 2 の名前を示すのに用いる。単に「これはプルメリアです」という場合と比べると、「という」を用いた場合は、話し手か聞き手、またはその双方がその花をあまりよく知らないという含みがある。くだけた話しことばでは、しばしば「プルメリアって花」「エベスって町」のように「Nって」という形が用いられる。

2 NというN <繰り返し>

（1） 道路という道路は車であふれていた。

（2） 家という家は飾りをいっぱいつけて、独立の喜びをあらわしていた。

（3） ビルの窓という窓に人の顔がみえた。

（4） 会場をでてくる選手の顔という顔に満足感がみちあふれていた。

同一の名詞を使って、「全部のN」という意味を表す。すべてであることを強調するのに用いる。書きことばで文学的な表現。

3 …というN <内容>

（1） この会社には、仕事は五時までだという規則がある。

（2） 山田さんは自分では画家だといっているが、本当は会社経

営者だといううわさが流れている。

（3） 弟が大学に合格したという知らせを受け取った。

（4） 彼女の到着が一日遅れるという連絡が入った。

（5） 今度K製薬からでた新製品はよく効くし、それに使いやすいという評判である。

（6） たばこの煙が体によくないという事実はだれでも知っている。

Nの内容を述べるのに用いる。Nには「話」「うわさ」「評判」など発言に関わる名詞や、「規則」「記事」「情報」「事件」など内容のあるまとまりを表す名詞が用いられる。「仕事」「事件」など、できごとの内容を述べる場合は、「という」が省略されることもある。

(例) 3人の高校生が中学校に放火した(という)事件は、近所の人を不安に陥れた。

【というか】

1 …というか

（1） そんなことをするなんて、ほんとに馬鹿というか、困った人だ。

（2） この決断は、勇気があるというか、とにかく凡人にはなかなかできないことだ。

（3） 持っていたお金を全部あげてしまうとは、人がいいというか、びっくりさせられた。

人やできごとに付いて、「たとえばこんな風にも言える」という気持ちで印象や判断を挿入的に述べるのに用いる。後に、総括的な判断を述べることが多い。

2 …というか…というか

（1） そんなことを言うなんて、無神経というか、馬鹿というか、あきれてものもいえない。

（2） 彼女の行動は大胆というか、無邪気というか、みんなを困惑させた。

（3） そのときの彼の表情は、悲壮というか、雄々しいというか、言葉にはしがたいものがあった。

（4） そのほめ言葉を聞いたときのわたしの気持ちは、うれしいというか、恥ずかしいというか、何とも説明しがたいものだった。

人やできごとについて、その印象や判断などを、思いつくままに並べあげるのに用いる。あとに、総括的な判断などを述べることが多い。

【ということ】

1 …ということ <内容>

（1） 最初のオリンピックがアテネだったということは今まで知らなかった。

（2） 日本語のクラスで、日本ではクリスマスよりお正月の方が大事だということを習った。

（3）この工場地帯のはしに、豊かな自然が残っているということは、あまり知られていない。
（4）この法律を知っている人が少ないということは、大きな問題だ。
（5）小林さんが、バンコクへ赴任するということが正式に決まった。
（6）わたしがここで言いたいのは、根本的に原因を解明しない限り、事態は改善されないということだ。

話や知識や出来事などの内容を具体的に示すのに用いる。「という」は「…だ」のあとでは必ず必要だが、それ以外ではつけなくてもよい場合が多い。ただし、文が長い場合は文のまとまりをわかりやすくするために付けるのが普通。

2 …ということ ＜意味＞

（1）「灯台もと暗し」とは、身近なことはかえって気がつかないということである。
（2）このことわざの意味は、時間を大切にしないといけないということだ。
（3）A：なんであの人腕時計を指してるの?
　　B：早くしろってことよ。
（4）A：つまり、この商談は成立しないということですか。
　　B：ええ、まあそういうことです。

語句の意味やことがらの解釈を述べるのに用いる。必ず「という」をつける。

3 …ということは…(ということ)だ

（1）電車がストライキをするということは、あしたは学校が休みになるということだ。
（2）一日5時間月曜から金曜まで働くということは、1週間で25時間の労働だ。
（3）車が一台しかないということは、わたしたちのうち誰かバスで行かなければならないということだ。

ある状況についての解釈を述べる表現。「XということはYだ」において、聞き手も知っている状況Xを述べ、その状況から推測されたり、結論として導き出されたりすることがらを、Yで示す。

4 …ということにする

→【ことにする】2

5 …ということだ ＜伝聞＞

（1）山田さんは、近く会社をやめて留学するということだ。
（2）この店は当分休業するということで、わたしのアルバイトも今日で終わりになった。
（3）新しい冷蔵庫を買う場合は、古いのを下取りしてくれるということだから、それを確かめてから買ったほうがいい。
（4）募集のしめきりは9月末(だ)ということだから、応募するのなら急いだほうがいい。
（5）A：吉田さん、まだ姿が見えませんね。
　　B：いや、さっきまでいたんですが、もう帰りました。今夜から出張するということです。

伝聞を表す。かならず「という」をつける。

【というと】

1 …というと

（1）スペインというと、すぐフラメンコが心に浮かぶ。
（2）北海道というと、広い草原や牛の群れを思い出す。
（3）漱石というと、「こころ」という小説を思い出す人も多いだろう。
（4）モーツァルトというと没後200年の年には随分たくさん行事がありましたね。
（5）A：スキーというと、今年は長野オリンピックですが、Bさんスキーはなさいますか。
　　B：ええ、でもあまり上手じゃないんですよ。

ある話題を受けて、そこから連想されることについて述べたり、それについて説明を加えたりするのに用いる。「…といえば」とも言う。話しことばでは「っていうと」となることもある。

2 というと…のことですか

（1）「しめなわ」というと、あの、お正月につける飾りのことですか。
（2）NGOというと、民間の援助団体のことですか。
（3）A：困っていたとき、ケリーが金を貸してくれまして。
　　B：あの、ケリーというと、あの銀行家のケリーのことですか。
　　A：ああ、そうです。

単語、語句の意味や定義を確認するのに使う。先行文脈で出された語句をとりあげてたずねる場合が多い。話しことばでは、「というと」のかわりに、「って」を使うこともある。確認の表現であり、「NGOというと、何のことですか」というような質問はしにくい。

3 というと

（1）A：この企画は大筋はいいが、細かいところで少々無理があるね。
　　B：というと。
　　A：今から説明するよ。
（2）A：この事件は終わったように見えて、実はまだ終わってはいないんだ。
　　B：というと、まだ何か起こるんですか?

相手の言葉をうけて、くわしく展開するようにうながす表現。丁寧表現として「といいますと」がある。

【というところだ】

（1）A：どうですか、もう仕上がりますか。

B：あと2、3日というところです。

（2）先頭の選手は、ゴールまであと一息というところです。

（3）A：進度はどんなものですか。

B：来週で入門段階が終わるというところです。

その段階での状況を説明するのに用いる。「…といったところだ」とも言う。

【というのは】

1 というのは

（1）駅前の開発計画が急に取りやめになった。というのは、地域住民の強硬な反対で、マスコミまでが騒ぎだしたからだ。

（2）申しわけありませんが、来週お休みをいただけないでしょうか。というのは、国から母が突然訪ねてくることになったんです。

（3）A：あしたのご都合はいかがですか。

B：あしたはちょっと都合が悪いんです。というのは、東京に出かけることになっているものですから。

文を受け、前の文で述べられたことがらの原因・理由について説明したり、話し手の判断の根拠を後から付加的に述べるような場合に用いる。後に続く文は「…からだ／のだ」などで終わることが多い。

「なぜなら」と似ているが、「なぜなら」が明確な因果関係がある場合に使われるのに対し、「というのは」は事情を付加的に説明する場合であれば、必ずしもはっきりとした因果関係がなくても使うことができる。また、「なぜなら」は書きことばで、「というのは」は話しことばで用いられることが多い。

2 …というのは…ということだ

（1）レイさんが「少し遅くなる」というのは、一時間は遅れるということだ。

（2）この地方全体で雨が一時間に10センチ降るというのは、洪水が起こるということだ。

「…ということは…(ということ)だ」と同義。

→【ということ】3

3 …というのはNのことだ

（1）パソコンというのはパーソナルコンピューターのことだ。

（2）十五夜というのは、満月の出る夜のことだ。

単語、語句、文の意味の定義、説明、

解釈を示す表現。

【というのも】

1 というのも

（1）あの会社、倒産するかもしれませんよ。というのも、このところ急激に株価が下がっているんですよ。

（2）彼は昼だけでなく、夜もアルバイトしている。というのも、親の仕送りを受けずに大学を卒業しようとしているからだ。

「というのは」とほぼ同じだ。

2 というのも…からだ

（1）彼が転職したというのも、空気のきれいな田舎で病弱な子供を強くしたいと思ったからだ。

（2）わざわざ横浜までそのレコードを買いに行ったというのも、ただ彼女を喜ばせたかったからだ。

（3）青木さんが怒ったというのも、部下がみんなあまりにも怠惰だったからだ。

（4）土地を売るというのも、そうしなければ相続税が払えないからだ。

すでになされた、あるいはすると決まった行為について、そうなった理由を説明するのに用いる。「も」は、それが特別な行為であることを強調する。「…からだ」の代わりに「…のだ」を用いることもある。

【というものだ】

[V-るというものだ]

（1）この研究は、生産量を10年のうちに2倍にするというものだ。

（2）今回作られたタイムカプセルは200年先の人々に20世紀からのメッセージを送るというものだ。

（3）先方から提示された取引の条件は、利益の30パーセントを渡すというものだった。

あるものの機能や内容の説明をするのに用いる。

【というものではない】

（1）食べ物などは、安ければそれでいいというものではない。

（2）速ければそれだけでいい車だというものでもないだろう。

（3）有名な大学を卒業したからといって、それで幸せになれるというものでもない。

（4）人には自由があるからといって、何をしてもよいというものではない。

ある主張や考え方について、それが全面的に妥当だとは言えないという意味を

表す。(2)(3)のように「というものでもない」とも言い、その場合、その主張や考え方をやや婉曲に否定している。

【というより】

(1) 野村さんは、学校の先生というより、銀行員のようだ。

(2) この絵本は、子供向けというより、むしろ、大人のために書かれたような作品だ。

(3) あの人は、失礼というより、無神経なのだ。

(4) 彼は、論争を静めるためというより、自分の力を見せつけるために発言したにすぎない。

あることがらについての表現や判断の仕方を比較するのに用いる。「Xという言い方もできるが、比較すればYという言い方の方が妥当だ」という意味。

【といえど】

1 …といえど

(1) この寺院では、一国の王といえど、靴をはいたまま入ることは許されない。

(2) 暦の上では春といえど、この土地の人々はいまだ真冬の寒さにふるえている。

「…といえども」と同じ。

2 …といえども

(1) 冬山は、ベテランの登山家といえども、遭難する危険がある。

(2) スポーツマンの家田さんといえども、風邪には勝てなかったらしい。

(3) その機密は厳重に管理されており、たとえ、部長といえども近づくことは禁じられている。

(4) 弘法大師といえども字を間違えることがあるのだから、少々の失敗にくよくよすることはない。

譲歩を表す表現で、資格や能力のあるものを取り上げ、それなら当然できるという予想に反したことがらが成立することを表す。あらたまった話しことばや、小説などの書きことばで使う。「でも」で言いかえることができる。

【といえなくもない】

(1) A：最近、彼はまじめに仕事をしていますか。
B：まあ、前よりはましだといえなくもないですが。

(2) A：山田君のゴルフはプロ並みだね。
B：うーん。まあ、そう言えなくもないけど…。

(3) この会社に入った当初は、仕事のあまりのきつさにどうなることかと思ったが、今では慣れてきたと言えなくもない。すくなくとも、前ほどは疲れなくなった。

「といえる」ほど断定的ではなく、やや消極的に肯定する言い方。後に逆接的な内容が続いたり、それを暗示したりすることが多い。

【といえば】

1 Nといえば

(1) 川口さんといえば、どこへ行ったのか、姿が見えませんね。

(2) 高木さんといえば切手というぐらい、彼の収集熱は有名だ。

(3) 森町といえば、昔から木材の産地だが、最近は温泉が吹き出して話題になっている。

ある話題を受けて、そこから連想されることについて述べたり、それについて説明を加えたりするのに用いる。「…というと」とも言う。

2 …といえば…が

(1) おっとりしているといえば、聞こえがいいが、彼女は何をするのも遅い。

(2) 緑が豊かだといえば、いい所だと思うが、実際は遠くて行くのが大変だ。

(3) 一日に一回は部下をどなりつけるといえば、こわい上司だと思われるが、実際はみんなにしたわれている。

対立する評価を述べる表現。Xという言い方から考えるとYという評価を得るのが普通だが、実はそれとは対照的なZという評価が得られるということを表すのに用いる。

3 …といえば…かもしれない

(1) 彼らはビートルズの再来だといえば、ほめすぎかもしれない。

(2) この議会は今までで最低だといえば、問題があるかもしれない。

(3) この作品が時代の流れを変えるといえば、あまりにおおげさかもしれないが、実際に見ればその素晴らしさがわかるだろう。

婉曲的な評価の表現。前半部分で述べた評価を後半で弱めるのに用いる。話し手の主張したいのは前半部分の評価であることが多く、(3)のように後ろにその評価を肯定し発展させる文が続くことも多い。

4 …といえば…ぐらいのことだ

(1) わたしの得意なことといえば、ビールの早飲みぐらいのことだ。

(2) 町の名所といえば、小さい古墳が残っているぐらいのことだ。

(3) うちの子供のとりえといえば、動物をかわいがるぐらいのことだ。

取り上げた話題について、あまりすぐれたものがないと述べるのに用いる。自分

に関することを謙遜して述べるときに使うことが多い。

【といけない】

[V-るといけない　から／ので]

（1）盗まれるといけないので、さいふは金庫にしまっておこう。

（2）雨がふるといけませんから、傘を持って行きましょう。

（3）忘れるといけないので、メモしておいた。

（4）遅れるといけないと思って、早目に家を出た。

望ましくないことがらを受け「それが起こると困る」という心配・危惧の気持ちを表す。たいていの場合「...といけないので／から／と思って」のような形で使われ、後ろには困ったことにならないようにあらかじめ準備しておくといった意味の表現が続く。「V-てはいけない」も似た意味を表すが、言い切りで「禁止」の表現として使うことができる点で「といけない」と異なる。

【といった】

1 N、NといったN

（1）黒沢、小津といった日本の有名な映画監督の作品を上映するそうだ。

（2）この学校には、タイ、インドネシア、マレーシアといった東南アジアの国々からの留学生が多い。

（3）この豪華な催しの行われているホールの駐車場には、ベンツ、ロールスロイスといった超高級車がずらりと止まっている。

例を列挙するのに使う。これが全部ではなく、ほかにまだあるという含みがある。

2 ...といったところだ

（1）A：最近よく借りだされるビデオは何ですか。

B：ダイハード、スターウォーズといったところですね。

（2）A：体の調子、どうですか。

B：回復まであと一歩といったところです。

（3）A：彼の運転の腕はどうですか。

B：まあまあといったところですね。

その段階での状況を説明するのに用いる。「...というところだ」とも言う。

【といったらありはしない】

[Nといったらありはしない]

[A-いといったらありはしない]

（1）この年になってから一人暮らしを始める心細さといったらありはしない。

（2）彼女はこっちが立場上断れないとわかっていて、わざといやな仕事を押しつけてくるのだ。くやしいといったらありはしない。

「といったらない」とほぼ同じ意味だが、マイナス評価のことがらを言うときだけに使われる。書きことば的。

【といったらありゃしない】

[Nといったらありゃしない]

[A-いといったらありゃしない]

（1）あの子は自分が周りからちやほやされているのを知った上で、それを利用しているんだよ。憎たらしいといったらありゃしない。

（2）このごろあちこちで地震があるでしょ?　おそろしいったらありゃしない。

「といったらありはしない」のくだけた話しことばでの言い方。「...ったらありゃしない」と省略されることが多い。

【といったらない】

[Nといったらない]

[A-い(とい)ったらない]

（1）花嫁衣装を着た彼女の美しさといったらなかった。

（2）みんなが帰っていったあと、一人きりで病室に取り残されたときの寂しさといったらなかった。

（3）彼は会議中にまじめな顔をして冗談を言うんだから、おかしいったらないよ。

（4）結婚以来今まで10年も別居せざるをえなかった妻とやっと一緒に暮らせるのだ。うれしいといったらない。

名詞やイ形容詞に付いて、その程度が極端であることを強調するのに用いる。「とても言い表せないほど...だ」「そんなに...ことは他にはない」という意味。話しことばでは「...ったらない」の形も使われる。また、「といったらありはしない」も同じ意味だが、マイナス評価の時だけに用いる。

【といって】

1 といって

（1）お金をなくしたのは気の毒だが、といって、わたしにも貸せる程のお金はない。

（2）入社以来週末も働き通しで、疲れ果ててしまった。といって、ここで仕事をやめることもできない。

（3）最近の彼の働きはめざましいが、といって、すぐに昇進させるわけにもいかない。

（4）このような対応の仕方では、解決はおぼつかないという批判が集中した。といって、これに代わる案が出て来たわけではなかった。

状況を表す文を受けて、「しかしながら」

という意味を表す。後ろには、その状況から当然予測できる事態には続かないということが表される。

2 …といって

（1）頭が痛いといって、彼は会社を休んだ。

（2）ニュースを見るといって、娘はテレビを独占している。

（3）大きな事故が起こったといって、当局はトンネルを通行止めにした。

（4）石田さんは、子供の健康のためだといって、いなかに引っ越していった。

「…という理由を言って」という意味。口実や理由を述べて、ある行為をするということを述べるのに使う。ただし、実際に声に出して言った言葉のとおりでなくてもかまわない。

3 これといって…ない

（1）現代絵画の展覧会にいったが、これといっておもしろい作品には出会わなかった。

（2）初めて高い山に登るので少し不安だったが、これといって事故もなく無事に下山できた。

（3）食べ物の好き嫌いはこれといってないんですが、お酒はまったく飲めません。

（4）彼は何でもよくできて優秀なので、これといって注文はない。自由にやってくれればいい。

否定を伴い、「特にとりあげるべきものがない」という意味を表す。

【といっては】

（1）あの人はなまけものだといっては言い過ぎかもしれない。

（2）神童といってはほめすぎかもしれないが、その夜の彼の演奏は確かに見事だった。

（3）工業都市といってはあたらないかもしれない。ここには広大な森も広がっているからだ。

（4）彼女をワンマンだといっては気の毒だ。ほかの人が働かないだけなのだから。

人やできごとについての判断や評判などを述べた表現を受けて、そのように批評することは「言い過ぎだ」とか「合っていない」と述べるときに使う。

【といっても】

1 といっても

（1）ビデオの作品を作った。といっても、せいぜい10分の短い作品だが。

（2）新しいアルバイトが見つかった。といっても、友達の代わりに一週間働くだけだ。

（3）あの人がこのクラブの会長です。といっても、大会であいさつするだけですが。

（4）仕事場が変わりました。といっても、同じ階の端から端へ移っただけなんですけど。

前文で述べたことから期待されることがらに対して、実際はそれほど程度が重くないと修正をくわえ、限定するのに使う。

2 …といっても

a …といっても

（1）A：休みには故郷へ帰ります。
　　B：じゃあ、当分お目にかかれませんね。
　　A：いや、帰るといっても、一週間程度で、すぐまた帰って来ます。

（2）料理ができるといっても、卵焼きぐらいです。

（3）シンガポールへ行ったといっても、実際は一日滞在しただけです。

（4）A：去年は珍しく雪が降りました。
　　B：へえ、あんな暖かい所でも降るんですか。
　　A：いや、降ったといっても、ほんの少しで、すぐ消えてしまいました。

（5）日本舞踊ができるといっても、ほんのお遊び程度です。

前に述べたことについて、それが実際にはそれほど程度の重いことではないとつけ足すのに用いる。

b ひとくちに…といっても

（1）一口にアジアといっても、広大で、多種多様な文化があるのです。

（2）一口にバラといっても、実に豊富な種類があります。

（3）一口に日本人の考え方といっても、いろいろな考え方があるので、どうとは決めにくいのです。

簡単にまとめていうが、実際は複雑だという意味を表す。

c …といっても…ない

（1）A：来週はテストがあるんです。
　　B：じゃあ、このハイキングはだめですね。
　　A：いえ、テストがあるといっても、そんなにたいしたものじゃありませんから、一日ぐらいはだいじょうぶです。

（2）山登りが趣味だと言っても、そんなに経験があるわけではありません。

（3）風邪を引いたと言っても、そんなに熱はない。

（4）アルバイトの人がやめたといっても、店のほうは別に支障はな

い。

（5）土曜日には、夫の姉が遊びに来ることになっている。しかし、お客が来るといっても、別に特に忙しいわけではない。

ある特別な事態が生じていることを示し、そこから当然予測されることがあるが、実際には程度は重くない、問題は生じないと述べるのに用いる。

3 …といってもいいだろう

（1）これは、この作家の最高の傑作だといってもいいだろう。

（2）川田さんは、かれの本当の恩師だといってもいいだろう。

（3）事実上の決勝は、この試合だと言ってもいいだろう。

「そのように評価してまちがいではないだろう」の意味。ことがらや人についての解釈、判断、批評を述べる表現。「…といえる」より、婉曲な表現。

4 …といってもいいすぎではない

（1）環境破壊の問題は、これから世界の最も重要な課題になるといっても言い過ぎではない。

（2）成功はすべて有田さんのおかげだといってもいいすぎではない。

「そのように述べることもおおげさではない」という意味。主張を強く述べるのに用いる。かたい書きことばでは、「言いすぎ」のかわりに「過言」が用いられることがある。

（例）そのニュースは国中の人々を幸福な気分にさせたといっても過言ではない。

【といってもまちがいない】

（1）現在、彼が日本マラソン界の第一人者といっても間違いない。

（2）この会社は祖父の力で大きくなったといってもまちがいはない。

ことがらや人についての解釈、判断、批評を述べるのに用いる。「といえる」に比べ、確信をもって断定的に述べる。書きことばで使うのが普通で、「も」を入れないこともある。

【といわず…といわず】

[NといわずNといわず]

（1）風の強い日だったから、口といわず、目といわず、すなぼこりが入ってきた。

（2）車体といわず、窓といわず、はでなペンキをぬりたくった。

（3）入り口といわず、出口といわず、パニックになった人々が押し寄せた。

あるものの部分を表す名詞を繰り返して、「区別をつけないで全部」の意味を表す。

【どうしても】

1 どうしてもR-たい

（1）次の休みには、どうしても北海道へ行きたい。

（2）競争率の高いのは知っているけれど、どうしてもあの大学へ入りたいのです。

（3）どうしても今年中に運転免許をとらなければならないし、とりたいと思う。

（4）両親が反対したが、わたしはどうしても演劇の道に進みたいと思っていた。

欲求表現とともに用いて、望んでいるのは実現がむずかしいと思われることだが、困難を乗り越えてでもしたいという、願望の強さを表す。

2 どうしても…ない

（1）仕事がひどく忙しいので、今月末までは、どうしてもあなたのところへは行けません。

（2）何度もやってみたが、この問題だけはどうしても解けなかった。

（3）努力はしているが、あの課長はどうしてもすきになれない。

（4）あしたまでに車の修理をしてほしいと頼んだが、人手が足りないのでどうしても無理だと言われた。

（5）もしどうしても都合が悪いなら、別の人を推薦してくださっても結構です。

可能を表す「V-れる」の否定形や「無理だ」「だめだ」「都合が悪い」などの否定的な意味を表す表現とともに用いられ、努力してもできないという意味を表す。

【どうじに】

1 …とどうじに

[Nとどうじに]

[V-る／V-た　(の)とどうじに]

（1）スタートの合図と同時に、選手達はいっせいに走り出した。

（2）私が乗り込むと同時に、電車のドアは閉まった。

（3）私が部屋に入ったのとほとんど同時に電話が鳴りだした。

前のことがらの起こった直後に次のことがらが起こることを表す。動詞と「と」の間には（3）のように「の」が入ることもある。

2 …とどうじに

[N／Na　であるとどうじに]

[A／V　とどうじに]

（1）この手術はかなりの危険を伴うと同時に費用もかかる。

（2）社会に巣立つ若い男女の意欲に対して、期待するところが大きいと同時にいささかの懸念も残る。

（3）当選できて大変うれしく思いますと同時に、議員としての責任に身の引き締まる思いです。

二つのことがらが同時に成立することを

表す。前後の意味内容によって、「累加」(1)、「対比」(2)(3)などの関係を表す。たいてい普通体を受けるが、改まったスピーチなどでは(3)のように丁寧体を受けることもある。

3 どうじに

(1) 医者という職業は体力を必要とする。同時に、人間の繊細な心理に対する深い理解も要求される。

(2) 過疎地の開発も大切である。が、同時に自然の保護には十分な注意が必要である。

(3) 医学の進歩は人類に大きな恩恵をもたらした。しかし、同時に人間の生命に対してどこまで手を加えられるのかという倫理上の問題を新たに生じさせている。

二つの文の間に用いて、前後のことがらが同時並行的に成立することを表す。対比的な意味内容の文が続くのが普通で、(2)(3)のように「同時に」の前に「が」「しかし」を伴うことが多い。書きことば的。

【どうせ】

1 どうせ

(1) どうせ私は馬鹿ですよ。

(2) 三日坊主の彼のことだから、どうせ長続きはしないだろう。

どちらにしても結論や結果は決まっており、個人の意志や努力で変えることができないといった、話し手の諦めや投げやりな態度を表す。望ましくないことがらが続くことが多い。

2 どうせ…(の)なら

(1) どうせやるならもっと大きいことをやれ。

(2) どうせ参加しないのなら、早めに知らせておいたほうがいい。

(3) どうせ2か月余りの命なら、本人のやりたいことをやらせたい。

(4) 急いでもどうせ間に合わないのだったら、ゆっくり行こう。

「どのみち…ということが決まっているなら」という意味で、その条件の下で、とるべき態度や行動について述べるのに用いる。「…のだったら」も用いられる。話し手の意志、希望、義務や、命令、勧誘といった相手への働き掛けの表現が続く。

3 どうせ V-るいじょう(は)
どうせ V-るからには

(1) やる以上は必ず成功して戻ってこい。

(2) どうせ試合に出るからには、必ず優勝してみせる。

(3) どうせ留学するからには、博士号まで取って帰ってきたい。

「…することは決まっているのだから」という意味を表す。話し手の意志、希望、義務や、命令、勧誘といった相手への働き掛けの表現が続く。

4 どうせ…のだから

(1) どうせ間に合わないのだから、いまさらあわてても仕方がない。

(2) どうせ合格するはずがないのだから、気楽にいこう。

(3) どうせやらなければならないのだから、早めにやってしまいましょう。

結論・結果が分かっている(決まっている)状況での話し手の意志や判断を表すのに使う。後ろには話し手の諦めや、投げやりな態度を表す表現が用いられることが多い。

5 どうせ(のこと)だから

(1) どうせのことだから、とびきり高級なホテルに泊まろう。

(2) どうせのことだから、駅までお送りします。

(3) 当分バスも来ないみたいだし、どうせだからお茶でも飲まない?

「どのみち…することが決まっているのだから」といった意味の慣用的表現。後ろには「思い切って/ついでに…しよう(意志・勧誘)」といった意味の表現が続く。話しことばでは「どうせだから」の形で用いられることが多い。

【どうぜん】

1 Nどうぜん

(1) 実の娘同然に大切に育ててくれた。

(2) このみじめなくらしは奴隷同然だ。

(3) ボロ同然に捨てられて、彼は会社に復讐を誓った。

「…と同様」という意味。「…のようだ」に近いが、「同然」の方が感情的で、あざけり、不満の感情などをこめることが多い。

2 …もどうぜん

[Nもどうぜん]
[V-たもどうぜん]

(1) この子は本当は姪ですが、小さいころから一緒に暮らしているので娘も同然です。

(2) あの人はアルバイト社員だが、仕事の内容からみると正社員も同然だ。

(3) 別れた恋人は、わたしにとっては死んだも同然の人だ。

(4) 10000票の差が開いたから、これでもう勝ったも同然だ。

事実はそうではないが、ほとんど事実と同じ状態だという意味。「…と(ほとんど)同じだ」という意味だが、「同然」はさらに感情的な評価があり、思い込みが強い場合が多い。

【とうてい…ない】

(1) うちの息子の実力では、東大合格はとうてい無理だ。

(2) 彼女が僕を裏切るなんて、とうていあり得ない。

（3）歴史の長さにおいて、日本の大学は西洋の古い大学にはとうてい及ばない。

「どんな方法をとっても、どう考えても無理だ、不可能だ、あり得ない」という意味を表す。書きことば的。

【とうとう】

1 とうとう V-た

（1）夏休みも、とうとう終わってしまった。

（2）長い間入院していた祖父も、とうとう亡くなった。

（3）卒業式も無事に終わって、とうとう国に帰る日になった。

（4）20年の歳月をかけて、研究はとうとう完成した。

（5）相手があまりにしつこいので、温厚な彼もとうとう怒ってしまった。

（6）朝から曇っていたが、夕方にはとうとう雨になった。

長い時間をかけて、または最終的に何かが実現することを表す。（1）～（3）は長い時間や経過を経て、予想されていた最後の段階に至った場合、また、（4）は長い時間をかけて努力してその結果に至った場合である。そこに至るまでのできごとや歳月に対しての話し手の感慨がこめられる。

また、（5）（6）のように、それまで保っていた状態が限界を越えてしまった場合に使うこともある。（5）は、「ふだん怒らない彼も我慢しきれなくなって怒った」、（6）は「朝から雨が降りそうな天気だったが、なんとか昼の間は降らずにもっていたが、夕方には降り始めた」という意味。

似た表現に「やっと」「ついに」がある。

詳しくは【やっと】1を参照。

2 とうとう… V-なかった

（1）二時間も待ったが、とうとう彼は来なかった。

（2）何週間も捜索が続けられたが、遺体はとうとう発見されなかった。

（3）全力をあげて調査が行われたが、事故の原因はとうとう分からなかった。

期待されていた事態が、最後まで実現しなかった場合に使う。「ついに」も同じように使われるが、この文型には「やっと」は使えない。

【どうにか】

1 どうにか

（1）おかげさまで、どうにかやっておりますので、ご安心ください。

（2）急いで行ったら、どうにか間に合った。

（3）どうにか希望の大学に合格できましたので、ご安心ください。

苦労や努力の結果、十分ではないが一応希望する状況に至る様子を表す。さらに強めて「どうにかこうにか」となることもある。「なんとか」「やっと」との違いについては【やっと】2を参照。

2 どうにかする

（1）早くどうにかしないと、手遅れになってしまうよ。

（2）そちらの手違いで予約もれになってしまったのだから、どうにかしてもらいたい。

（3）この水不足をどうにかしないと大変だ。

問題が起こった時などに、それを解決するために「何か手を打つ」の意味。「何とかする」とも言う。

3 どうにかなる

（1）そんなに心配しなくても、どうにかなるよ。

（2）A：レポート遅れそうなんだよ。
　　B：大丈夫、先生に頼めばどうにかなるよ。

（3）この猛暑、どうにかならないかな。

問題が自然に解決したり、何らかの方法で解決することができるという意味を表す。「何とかなる」とも言う。

【どうにも】

1 どうにも…ない

（1）こうむし暑くては、どうにもやりきれない。

（2）彼の怠惰な性格は、どうにも直しようがない。

後ろに「できない」「V-ようがない」などの否定の表現を伴って、どのような方法をとっても不可能だという意味を表す。「どうにも」のようなアクセントで発音される。さらに強めて「どうにもこうにも」となることもある。

2 どうにも　ならない／できない

（1）過ぎたことは、いまさらくやんでも、どうにもならない。

（2）ここまで病状が悪化してしまっては、もうどうにもできない。

どのようなことを行っても状況を変えることができないという意味を表す。悪い状況を好転させられないような場合に用いる。アクセントは「どうにも」となるのが普通。

【どうも】

1 どうも ＜不確か＞

（1）母のことがどうも気になってならない。

（2）最近、彼はどうも様子がおかしい。

（3）あの人の考えていることは、どうもよく分からない。

（4）努力はしているのだが、どうもうまくいかない。

（5）今日は、朝からどうも気分がふさぐ。

（6）A：奥さんの具合はいかがですか。
　　B：それがどうもね……

現状や自分の感覚、感情について、「なぜそうなるのか／そのように感じられるのかよく分からない」という話し手の「いぶかしみ」の気持ちを表す。述語には打ち消しの表現や、「変だ」「おかしい」「気分がふさぐ」のようなマイナス評価の表現が用いられる。(6)は「あまりよくない」という部分を言わないで婉曲に言う場合の表現。「なんだか」「何となく」に言いかえられることが多い。

2 どうも

…そうだ／…ようだ／…らしい

(1) この空模様では、どうも雨になりそうだ。

(2) 彼の言ったことは、どうも全部うそのようだ。

(3) おじの病気は、どうもガンらしい。

「そうだ(様態)」「ようだ」「らしい」などを伴い、一定の根拠に基づいた話し手の推定を表す。「どうやら」に言いかえられる。

3 どうも ＜困惑＞

(1) ちっとも勉強しないで遊んでばかりで、どうも困った息子です。

(2) A：先輩、一曲歌ってくださいよ。
　B：これは、どうもまいったな。

「困った」「まいった」などを伴って、困惑や軽い驚きの気持ちを強調する。

4 どうも ＜挨拶＞

(1) お手紙どうもありがとうございます。

(2) お待たせして、どうもすいません。

(3) 先日はどうも。

挨拶の表現に用いられ、感謝やおわびの気持ちを強調する。(3)のように後半が省略されることもある。実際には特別な感情がなくても「どうも、どうも」のような形で単なる儀礼的挨拶の表現として使われることが多い。

【どうもない】

(1) 彼は、酒を1升ぐらい飲んでも、どうもない。

(2) A：この牛乳、ちょっと変な味しない?
　B：(飲んでみて)どうもないよ。

「平気だ」「大丈夫だ」「問題がない」といった意味の話しことば的表現。

【どうやら】

1 どうやら…そうだ

(1) このぶんでいくと、どうやら桜の開花は早まりそうだ。

(2) むこうから歩いて来るのは、どうやら田中さんのようだ。

(3) 部屋から次々と人が出て来るところをみると、どうやら会議は終わったらしい。

後ろに「そうだ」「ようだ」「らしい」などの推量を表す表現を伴って、はっきりとは分からないが、そのように推量されるという話し手の不確かな気持ちを表す。

2 どうやら(こうやら)

(1) 急いだので、どうやら間に合った。

(2) どうやら論文も完成に近づいた。

(3) どうやらこうやら卒業することができました。

十分ではないが努力した結果、ようやく目標としていた状態や完成の段階に到達する様子を表す。

【どうり】

1 …どうりがない

(1) こんなに難しい本が子供に読める道理がない。

(2) 上司なら部下にどんな命令をしてもよいなどという道理はない。

(3) そんな道理はない。

どう考えてもそれが正しいと認められる理由・根拠がないという意味を表す。(2)(3)のように「が」が「は」になることもある。

2 どうりで

(1) A：彼女13歳までアメリカで育ったんだって。
　B：へえ。どうりで英語の発音がいいわけだね。

(2) A：彼女の両親は学者だよ。
　B：道理で彼女も頭がいいはずだ。

現状についてのもっともな理由を知り、「なるほどそうであるはずだ／わけだ」と納得する場合に用いる。

【どおし】

[R-どおし]

(1) 1週間働き通しだ。

(2) 一日中立ち通しで働いている。

(3) 一日中歩き通しで、足が痛くなった。

(4) 朝から晩まで座り通しの仕事は、かえって疲れるものだ。

ある期間同じ動作や状態が続く様子を表す。動詞の連用形を受けるが、名詞を受けるものとして「夜通し(＝一晩中)」がある。

【とおして】

1 Nをとおして ＜仲立ち＞

(1) 私たちは友人を通して知り合いになった。

(2) 我々は体験ばかりでなく書物を通して様々な知識を得ることができる。

(3) 実験を通して得られた結果しか信用できない。

(4) 5年間の文通を通して、二人は恋を実らせた。

(5) 今日では、マスメディアを通して、その日のうちに世界の出

来事を知ることができる。

人やものごと、動作を表す名詞などを受け、「それを仲立ちや手段にして」という表示を表す。それによって知識や経験などを得ることを述べるのに使う。

2 V-ることをとおして

(1) 子供は、学校で他の子供と一緒に遊んだり学んだりすることを通して、社会生活のルールを学んで行く。

(2) 教師は、学生に教えることを通して、逆に学生から教えられることも多い。

動詞の辞書形を受けて、上の1と同様の意味を表す。「学ぶ」のような和語の動詞を受けるのが普通で、「学習する」「研究する」のような漢語の動詞の場合は、1の表現を使って「学習/研究をとおして」のように言うほうが一般的である。

3 Nをとおして <期間中>

(1) 5日間を通しての会議で、様々な意見が交換された。

(2) この地方は1年を通して雨の降る日が少ない。

(3) この1週間を通して、外に出たのはたったの2度だけだ。

期間を表す語を受けて、「その期間中」「期間の範囲内」といった意味を表す。(1)のように期間中ずっと継続的に行為が行われたり、(2)(3)のように、その期間内に断続的に生じる出来事などを表す。

【とおす】

[R-とおす]

(1) やると決めたことは最後までやり通すつもりだ。

(2) 途中で転んでしまったが、あきらめないでゴールまで走り通した。

(3) こんな難しい本は、私にはとても読み通せない。

意志的な行為を表す動詞に付いて、「最後まで…する」という意味を表す。

【とおもう】

1 …かとおもうほど

(1) 彼は、いつ寝ているのかと思うほどいそがしそうだ。

(2) その家は、ほかに金の使い道を思いつかなかったのだろうかと思うほど、金のかかったつくりだった。

(3) その人のあいさつは、永遠に終わらないのではないかと思うほど長いものだった。

(4) 死んでしまうのではないかと思うほどの厳しい修行だった。

「そう思うほどはなはだしい」という意味。「Xかと思うほど(の)Y」という形で、Yの程度が高いことを強調するのに使う。次の例のように「…かと思うほどだ」という形が使われることもある。

(例) 彼はいそがしい。いつ寝ているのかと思うほどだ。

2 …かとおもえば

a V-るかとおもえば

(1) 勉強しているかと思えば漫画を読んでいる。

(2) 来るかと思うと欠席だし、休むかと思うと出席している。

(3) 今年こそ冷夏かと思えば、猛暑で毎日うだるような暑さだ。

「V-るかとおもえば/V-るかとおもうと」の形で、現状が話し手の予想に反していることがらを表すのに用いる。予想に反することがらが繰り返し生じたり、現状が予想に反しているということを表す表現なので、文末には辞書形をとるのが普通である。また、この用法では「かと思ったら」は用いられにくい。

b V-るかとおもえば…も

(1) 熱心に授業に出る学生がいるかと思えば、全然出席せずに試験だけ受けるような学生もいる。

(2) 一日原稿用紙に向かっていても一枚も書けない日があるかと思うと、一気に数十枚も書ける日もある。

対立・対比的な事態が共存・並立することを表す。「V-るかとおもうと」も用いられる。「ある/いる」など、存在を表す動詞が繰り返して用いられることが多い。aの「V-るかとおもえば」は、予想と現実のくいちがいを表しているが、ここでは、そのような意味は特になく、意味的に性質の異なる事態を並べて述べているに過ぎない。

3 …からとおもって

(1) 体にいいからと思って、緑の野菜を食べるようにしています。

(2) せっかくパリまで来たのだからと思って、一流レストランで食事することにした。

(3) 明日の試験に遅れては大変だからと思い、今晩は早寝することにした。

節を受け、そのようなことを理由にして後続の行動をとるという意味を表す。前半の理由の部分は後続動作の結果成立するような意味関係(=行動の目的)を表すのが普通で、後半部分には意志的な動作を表す表現が用いられる。

4 …とおもったら

a V-たとおもったら →【とおもう】9b

b 疑問詞…かとおもったら

(1) 何を言うのかと思ったら、そんなくだらないことか。

(2) 食事もしないで何をやってるのかと思ったら、テレビゲームか。

(3) 会議中に席を立ってどこへ行くのかと思ったら、ちょっと空が見たいって言うんだよ。あいつ、最近おかしいよ。

(4) 2才の赤ん坊が夢中で何かやっている。何をやっているのかと思ったら、鏡にむかってに

こにこ笑ったり、手をふったりしているのだ。

話し手が不思議に思って注目する様子を表す。後ろには意外な発見や驚きをさそう出来事が表される。

5 …たいとおもう →【おもう】

6 …とおもいきや

（1）今場所は横綱の優勝間違いなしと思いきや、3日目にケガで休場することになってしまった。

（2）今年の夏は猛暑が続くと思いきや、連日の雨で冷害の心配さえでてきた。

（3）これで一件落着かと思いきや、思いがけない反対意見で、この件は次回の会議に持ち越されることになった。

節を受けて、そこで表されるような結果を予想していたら、意外にもそれに反する結果が現れたということを表す。（3）のように「と」の直前に「か」を伴う場合もある。やや古めかしい言い方で、書きことばに用いられる。

7 …とおもう →【おもう】

8 …とおもうまもなく

（1）つめたい雨が降ってきたと思う間もなく、それは雪にかわった。

（2）両目に涙があふれてきたかと思う間もなく、その子は大声で泣き出した。

（3）帰ってきたなと思う間もなく、息子は「遊びに行ってくる!」と叫んで出ていった。

（4）雲を突き抜けたと思う間もなく、翼の下に、街の灯が広がった。

二つのことが時間をおかずにつづけて起こることを表す。「と」の直前に「か」を伴うこともある。書きことばに用いられる。「XかとおもうまもなくY」で、XにもYにも話し手の行為は使えない。

（誤）私はうちに帰ったかと思う間もなく友達に電話した。

（正）私は家に帰るとすぐ友達に電話した。

9 …とおもうと

a V-るかとおもうと →【とおもう】2a

b V-たとおもうと

（1）急に空が暗くなったかと思うと、大粒の雨がふってきた。

（2）山田さんたら、来たと思ったらすぐ帰っちゃった。

（3）さっきまで泣いていたと思ったらもう笑っている。

（4）やっと暖かくなったかと思うと、今朝は突然の春の雪でびっくりした。

（5）夫はさっき家に戻ってきたかと思ったら、知らぬ間にまた出掛けていた。

（6）今までニコニコしていたかと思えば、突然泣き出したりして、本当に、よく気分の変わる人だ。

（7）ちょっとうとうとしたかと思うと、突然大きな物音がして目が覚めた。

二つの対比的なことがらがほとんど同時につづいて起こることを表す。「V-たとおもったら」「V-たとおもえば」の形も用いられる。また、「V-たかとおもったら」となることも多い。後ろには話し手の驚きや意外感を表す表現が続くことが多い。話し手自身の行為について述べることはできない。

（誤）私は、うちに帰ったと思うとまた出かけた。

（正）私は、うちに帰って、またすぐに出かけた。

10 …とおもったものの →【ものの】1

11 Nにとおもって

（1）おばあちゃんへのお土産にと思って、湯飲み茶碗を買った。

（2）つまらないものですが、これ、お子さんにと思って……。

（3）健康維持にと思い、水泳を始めた。

人や、目的・用途を表す名詞を受け、「その人や目的のために」という意味を表す。意志的な動作を表す表現が続く。「…にと思い」という言い方もする。

12 …ものとおもう →【ものとおもう】

13 …ようとおもう →【おもう】5

【とおり】

1 数詞／なん／いく　とおり

（1）駅からあの建物までには3通りの行き方がある。

（2）やり方は、何とおりもありますがどの方法がよろしいでしょう。

（3）「生」の読み方は、いくとおりあるか知っていますか。

数詞や「何（なん）・幾（いく）」などの疑問詞に付いて、方法や種類の数を表す。

2 …どおり

[Nどおり]

[R-どおり]

（1）計画はなかなか予定どおりには進まないものだ。

（2）すべて課長の指示どおり手配いたしました。

（3）自分の気持ちを思いどおりに書くことは、簡単そうに見えて難しい。

（4）世の中は自分の考えどおりには動いてはくれないものだ。

予定・計画・指示・命令などの名詞や「思う・考える」などの思考動詞の連用形に付いて、「それと同様に」「その通りに」「そのままに」といった意味を表す。この用法ではいつも「…どおり」となる。この他の例として「命令どおり・型どおり・見本どおり・文字どおり・想像どおり」などがある。

3 V-る／V-た　とおり

（1）おっしゃるとおりです。（＝あなたの意見に賛成です。）

（2）私の言うとおりに繰り返して言ってください。

（3）先生の奥さんは私が想像して

いたとおりの美人でした。

(4) ものごとは自分で考えているとおりにはなかなか進まない場合が多い。

「言う」「思う」などの発言や思考を表す動詞の辞書形／タ形に付いて、それと同じようであるという意味を表す。

【とか$_1$】

1 Nとか(Nとか)

(1) 病気のお見舞いには果物とかお花が好まれる。

(2) 私は、ケーキとか和菓子とかの甘いものは、あまり好きではありません。

(3) 最近の大学院では、一度就職した人とか、子育てを終わった主婦とかが、再び勉強するために入学するケースが目立つようになった。

(4) 日本から外国へのお土産としては、カメラとか電気製品がいいでしょう。

人や物に付いて、同じような例をいくつか挙げる場合に用いる。話しことば的。

2 V-るとか(V-るとか)

(1) 休日はテレビを見るとか、買い物するとかして過ごすことが多い。

(2) 教師の不足は、教師が教える時間数を増やすとか、一つの教室で複式の授業をするとかの方法で何とか乗り切ることにしたい。

(3) 奨学金をもらっていない留学生には授業料を免除するとか、部屋代の安い宿舎を提供するとかして、経済面での援助をする必要がある。

動作を表す動詞を受け、同じような動作・行動の例をいくつか挙げる場合に用いる。

【とか$_2$】

1 …とか(いう)

(1) 山田さんとかいう人が訪ねてきていますよ。

(2) 田中さんは今日は風邪で休むとか。

(3) A：田中さんは?
B：なんか今日はかぜで休むとか言っていました。

(4) 天気予報によると台風が近づいているとかいう話です。

名詞や引用節の後に付いて、聞いた内容を他の人に伝える場合に用いる。内容の正確さに十分な確信がないという含みがある。(2)のように文末の「言っている／言った」が省略されることもある。

2 …とか…とか(いう)

(1) 彼女は買い物に行くとこれがいいとかあれがいいとか言っ

て、決まるまでに本当に時間がかかる。

(2) あの二人は結婚するとかしないとか、いつまでたっても態度がはっきりしない。

(3) もう仕事はやめるとかやっぱり続けるとか、会うたびに言うことが変わる人だ。

正反対のことがらや、いろいろに変わる発言内容を受け、本当はどちらなのかはっきりしない場合に用いる。(2)のように「言う」の部分が省略されることもある。

3 …とかいうことだ

[N／Na　だとかいうことだ]
[A／V　とかいうことだ]

(1) 隣の娘さんは来月結婚式を挙げるとかいうことだ。

(2) ニュースによると大雨で新幹線がストップしているとかいうことだ。

伝聞内容を受けて、「はっきりとではないが…のようなことを聞いている」という意味を表す。

4 …とかで

[N／Na　だとかで]
[A／V　とかで]

(1) 途中で事故があったとかで、彼は1時間ほど遅刻してきた。

(2) 来週引っ越すとかで、鈴木さんから二日間の休暇願いが出ています。

(3) 結婚式に出るとかで、彼女は着物姿で現れた。

「聞くところによると…のような原因・理由で」という意味で、原因・理由の部分が他の人から伝え聞いたものであることを表す。話しことば的。

【とかく】

1 とかく…がちだ

(1) 女だというだけで、とかく軽く見られがちだ。

(2) 年を取ると、とかく外に出るのがおっくうになるものだ。

(3) われわれは、とかく学歴や身なりで人間の価値を判断してしまう傾向がある。

(4) とかく人の世は住みにくいものだ。

文末に「…がちだ／やすい／傾向がある／ものだ」などの表現を伴って、「どちらかというと…ような傾向がある」という意味を表す。あまりよくないことがらが表されるのが普通。「とかく」の代わりに「ともすれば」「ややもすると」などが用いられることもある。書きことば的。

2 とかく

(1) 先のことを今からとかく心配してもしようがない。

(2) 他人のことをとかく言う前に自分の責任をはたすべきだ。

(3) とかくしているうちに時間ばかり過ぎていった。(書きことば

的）

あれこれといろいろなことを考えたり言ったりする様子を表す。その行動や発言に対してマイナス評価のニュアンスをもつ場合が多い。やや文語的で、現代語では「とやかく」の方が一般的。

【とかんがえられる】

1 … とかんがえられる

[N／Na とかんがえられる]

[A／V とかんがえられる]

（1）このままでは、日本の映画産業は落ち込む一方だと考えられる。

（2）ここ数年の経済動向から見ても、彼の予測の方が妥当なのではないかと考えられる。

（3）この難解な文章を10歳の子供が書いたとはとても考えられないですね。

自分の考えを何らかの根拠にもとづいた客観的なものとして述べるのに使う。

2 … とかんがえられている

[N／Na とかんがえられている]

[A／V とかんがえられている]

（1）一般的に英語は世界の共通語だと考えられているが、実際には英語が通じない国はいくらもある。

（2）火星には生物はいないと考えられていましたが、今回の探索で生命の痕跡が確認されました。

一般的に受け入れられている考えを述べるのに使う。その考えが実は正しくない、あるいは修正する必要があるということを言う場合によく使われる。

3 …ものとかんがえられる

[N であるものとかんがえられる]

[Na であるものとかんがえられる]

[A／V ものとかんがえられる]

（1）泥棒は二階の窓から入ったものと考えられる。

（2）現在の二酸化炭素の排出量の増加傾向から、地球の温暖化はますます進むものと考えられる。

自分の考えを、さまざまな根拠から当然導き出される客観的なものとして述べるときに使う。論文や論説など、かたい書きことばで用いられることが多い。

4 …ものとかんがえられている

[N であるものとかんがえられている]

[Na であるものとかんがえられている]

[A／V ものとかんがえられている]

（1）今回の地震の原因は、地下断層に亀裂が生じたことによるものと考えられている。

（2）携帯電話の利用者は、今後急激に増加していくものと考えられている。

さまざまな根拠によって妥当な判断だと一般的に認められている考えを述べるのに使う。かたい書きことばで用いられることが多い。

【とき】

1 …とき

[Nのとき]

[Na なとき]

[A-いとき]

[V-るとき]

（1）子供の時、田舎の小さな村に住んでいた。

（2）暇な時には、どんなことをして過ごしますか。

（3）祖父は体の調子がいい時は、外を散歩する。

（4）ひまのある時には、たいていお金がない。

（5）寝ている時に地震がありました。

状態を表す述語の辞書形を受けて、それと同時並行的に他の出来事や状態が成立することを表す。

2 …たとき

[N／Na だったとき]

[A-かったとき]

[V-たとき]

（1）先代が社長だった時は、この会社の経営もうまく行っていたが、息子の代になってから、急に傾きはじめた。

（2）貧乏だった時は、その日の食べ物にも困ったものだ。

（3）子供がまだ小さかった時は、いろいろ苦労が多かった。

（4）東京にいた時は、いろいろ楽しい経験をした。

（5）ニューヨークで働いていた時に、彼女と知り合った。

状態を表す述語のタ形を受けて、それと同時並行的に成立した過去の出来事や状態を表す。この場合、前半の部分には辞書形を用いることもできるが、意味には微妙な違いがある。

（例）子供がまだ小さい時は、いろいろ苦労が多かった。

（例）と（3）を比べると、タ形を用いた（3）には、話し手が過去を回想しているといった意味や、「現在はもう過去の状態とは違う」という意味があるのに対し、辞書形を用いた（例）にはそのような含みがない。

3 V-るとき

（1）電車に乗るとき、後ろから押されてころんでしまった。

（2）関西へいらっしゃるときは、前もってお知らせください。

（3）東京へ行くとき夜行バスを使っていった。

（4）父は新聞を読むとき、めがねをかけます。

動作を表す動詞の辞書形を受けて、その動作の行われる前に、あるいはそれと同時並行して他の行為や出来事が成立することを表す。（1）（2）が前者、（3）（4）が後者の例である。

4 V-たとき

（1）家を出たときに、忘れ物に気がついた。

（2）アメリカへ行った時に、昔の友

人の家に泊めてもらった。

（3）朝、人と会ったときは「おはようございます」と言います。

（4）火事や地震が起こったときには、エレベーターを使用しないでください。

動作を表す動詞のタ形を受けて、その動作の実現後に他の出来事や状態が成立することを表す。

【どき】

[Nどき]

[R-どき]

（1）昼飯どきは、この辺りはサラリーマンで一杯になる。

（2）木の芽時は、どうも体調がよくない。

（3）梅雨時はじめじめして、カビが生えやすい。

（4）株でもうけるには、買い時と売り時のタイミングに対するセンスが必要だ。

（5）会社の引け時には、ビルのエレベーターは帰宅を急ぐ人で満員になる。

（6）お中元の季節と歳末は、デパートのかきいれ時だ。

そのようなことが起こったり、行われる時、あるいはそれの盛んな時、それを行うのにふさわしい時などの意味を表す。

【ときく】

[N／Na　だときく]

[A／V　ときく]

（1）ここは昔は海だったと聞く。

（2）今の市長は、次の選挙には立候補しないと聞いている。

（3）噂で、あの二人が婚約を破棄したと聞いた。

「…と聞く／聞いている／聞いた」などがあり、そのようなことを伝え聞いていることを表す。「と聞く」は書きことばでしか用いられず、マス形の「と聞きます」は用いられない。

（誤）このあたりは昔海だったと聞きます。

（正）このあたりは昔海だったと聞いています。

【ときたひには】

やや古めかしい話しことば。「…ときたら」の方がふつうに使われる。

1 Nときたひには

（1）うちの女房ときたひには、暇さえあれば居眠りしている。

（2）うちの親父ときたひには、天気さえよければ釣りに行っている。

極端な行動や性質をもった人物を話題にして、「まったくあきれてしまう」といった気持ちを表す。

2 …ときたひには

（1）毎日残業で、しかも休日なしときたひには、病気になるのも無理はない。

（2）授業には毎回遅刻で、試験も零点ときたひには、落第するのも当然だ。

（3）毎日うだるような暑さが続いて、しかも水不足ときたひには愚痴もいいたくなる。

程度が普通ではない極端な状況を表す節や名詞を受け、このような状況ではこうなるのも当然といった意味を表す。たいていマイナス評価を表す。

【ときたら】

1 Nときたら

（1）うちの亭主ときたら、週のうち３日は午前様で、日曜になるとごろごろ寝てばかりいる。

（2）あそこの家の中ときたら、散らかし放題で足の踏み場もない。

ある人物や事物を話題として取り上げ、それについて話し手の評価を述べる場合に用いる。話題は話し手にとって身近なもので、それについて話し手がとりわけ強く感じている感情や評価を表す。たいてい「本当に嫌になる／あきれてしまう」といった非難や不満を表す表現が続く。話しことば的。

2 …ときたら

（1）毎日残業の後に飲み屋のはしごときたら、体がもつはずがない。

（2）働き者で気立てがいいときたら、みんなに好かれるのも無理はない。

（3）新鮮な刺し身ときたら、やっぱり辛口の日本酒がいいな。

（4）ステーキときたらやっぱり赤ワインでなくちゃ。

極端な性質をもつ人物や事物、状況を話題に挙げ、「このような場合・状況では、やっぱりこうなる(する)のが当然だ」といった意味を表す。(3)(4)は、「NときたらN」という形で使われて、「NにはNが一番あう」「NにはNが一番いい」という意味。

【ときているから】

[N／Na／A／V　ときているから]

（1）あの寿司屋は、ネタがいいうえに安いときているから、いつ行っても店の前に行列ができている。

（2）秀才でしかも努力家ときているから、彼の上にでるのは簡単ではない。

（3）収入が少なく子だくさんときているから、暮らしは楽ではない。

極端な性質をもつ人物、事物、状況を取り上げ、「これほど…のだからそれも当然だ」というふうに、現状がそのような性質からの当然の結果であることを述べる表現。話しことば的。

【ときとして】

1 ときとして

(1) 温暖なこの地方でも、時として雪がふることもある。

(2) 人は時として人を裏切ることもある。

「(いつもそうとは限らないが)時によってはそのようなこともある」といった場合に用いる。やや書きことば的。

2 ときとして…ない

(1) このごろは時として心休まる日がない。

(2) 当時は心配事ばかり続き、時として心休まる日はなかった。

安心してすごせる時が「少しの間さえも…ない」ような場合に用いる。文語的で、現代語では普通「一時(いっとき)として…ない」の形で用いられる。

【ときに】

(1) 時に、ご家族の皆様はお元気ですか。

(2) 時に、例の件はどうなりましたか。

会話の途中で、今までの話題とは関係のない新しい話題を言い出す場合に用いる。やや書きことば的な言い方で、普通は「ところで」「さて」などを使う。

【ときには】

(1) 生真面目な彼だが、時には冗談をいうこともある。

(2) 私だって時には人恋しくなることもある。

(3) いつも明るい人だが、時に機嫌の悪いこともある。

(4) 専門家でも、時に失敗する場合もある。

「いつもというわけではないが時によっては」という意味。(3)(4)のように「は」は省略されることもある。

【どこか】

1 どこか ＜不定＞

(1) このテレビ、どこかがこわれているんじゃないかな。

(2) 今頃はどこかをさまよっているかもしれない。

(3) どこかでお茶でも飲みませんか。

(4) 春休みにはどこかへ出かける予定がありますか。

(5) どこかから赤ん坊の泣いている声が聞こえてくる。

(6) 顔色が悪いが、どこか悪いところでもあるのではないか。

不特定なある場所を表す。「が／を／から／で／に／へ」などの助詞は後に付くが、「が」はよく省略される。話しことばでは「どっか」となることが多い。なお、次のように名詞を修飾する場合は「どこか＋連体修飾節＋ところ」のようになる。

(正) どこか静かなところで話しましょう。

(誤) 静かなどこかで話しましょう。

2 どこか ＜不確か＞

(1) あの人は、どこかかわいいところがある。

(2) 彼女にはどこか私の母に似たところがある。

(3) このあたりの風景には、どこか懐かしい記憶を呼び起こすものがある。

どの部分がそうだということはできないが、そのようなところがあるという意味。

【どことなく】

(1) 彼女はどことなく色気がある。

(2) あの先生はどことなく人をひきつける魅力をもっている。

どことははっきり言えないが、そのような印象・感じを与えるところがあるという意味を表す。「どこかしら」「どこか」とも言う。

【ところ$_1$】

1 Nのところ

(1) 今のところ患者は小康状態を保っています。

(2) 現在のところ応募者は約100人ほどです。

(3) このところ肌寒い日が続いている。

「今」「げんざい」「この」など「今」を表す名詞に付いて、「現段階、今の時点、最近」といった、現在の時間的状況を表す。

2 V-るところとなる

(1) この政治的スキャンダルは、遠からず世界中の人々が知るところとなるだろう。

(2) 彼らの別居はたちまち周囲の人の知るところとなった。

うわさや、ニュースが人に知られる状態になるという意味。「知るところとなる」の形をとるのが普通。書きことば的。

3 V-るところに よると／よれば

(1) 聞くところによれば、あの二人は離婚したそうだ。

(2) 現地記者の話すところによると、戦況は悪化する一方のようである。

(3) 特派員の伝えるところによると、アフリカの飢饉はさらに悪化しているらしい。

「聞く」「話す」「伝える」などの発言や伝達の動詞を受けて、後に続くことがらが伝聞情報であることを示す。文末には「らしい／そうだ／とのことだ」などを伴うことが多い。ニュース報道などでよく使われる。

4 V-る／V-ている ところのN

(1) 私が知るところの限りでは、そのようなことは一切ございません。

(2) 彼が目指すところの理想の社会とは、身分差別のないすべての人が平等であるような社会であった。

欧文の関係代名詞の直訳的表現。日本語では「彼の目指す理想の社会」のように、必ずしもこれを用いる必要はないが、使用した場合は翻訳調に聞こえる。書きことば的。

5 V-るところまでV

（1）堕ちるところまで堕ちてしまった。

（2）とにかく、行けるところまで行ってみよう。

（3）時間内にやれるところまでやってみてください。

前後に同じ動詞が用いられ、動作・変化が極限・最終段階に至るという意味を表す。（2）（3）のように可能を表す「V-れる」を使った場合は、可能な限りその動作を行うという意味になる。

6 V-ているところをみると

（1）平気な顔をしているところをみると、まだ事故のことを知らされてないのだろう。

（2）大勢の人が行列しているところを見ると、安くておいしい店のようだ。

直接の経験を根拠に話し手が推量を述べる場合に用いる。文末には「らしい／ようだ／にちがいない」などが使われることが多い。「…ところから」や「…ところからみて」という形が用いられることもある。

（例）高級車に乗っているところから、相当の金持ちだと思われる。

【ところ$_2$】

1 V-たところ <順接>

（1）先生にお願いしたところ、早速承諾のお返事をいただいた。

（2）駅の遺失物係に問い合わせたところ、届いているとのことだ。

（3）ホテルに電話したところ、そのような名前の人は泊まっていないそうだ。

（4）教室に行ってみたところが、学生は一人も来ていなかった。

動作を表す動詞のタ形に付いて、後に続くことがらの成立や、発見のきっかけを表す。前後にくることがらには直接的な因果関係はなく「…したら、たまたま／偶然そうであった」という関係である。後に続くことがらは前の動作をきっかけに話し手が発見した事態で、すでに成立している事実の表現が用いられる。（4）のように「V-たところが」の形で「が」を伴うこともある。その場合は、後件が期待に反する内容であることが多い。

2 V-たところが <逆接>

（1）親切のつもりで言ったところが、かえって恨まれてしまった。

（2）高いお金を出して買ったところが、すぐ壊れてしまった。

（3）仕事が終わって急いで駆けつけてみたところが、講演はもうほとんど終わってしまっていた。

「のに」で言いかえられる逆接的な用法で、結果が予想・期待に反したものであることを表す。上の順接用法と異なり「が」は省略されないのが普通である。

【どころ】

1 …どころか

[N／Na(な) どころか]

[A-いどころか]

[V-るどころか]

（1）病気どころか、ぴんぴんしている。

（2）A：あの人、まだ独身でしょう。

B：独身どころか、子供が3人もいますよ。

（3）彼女は静かなどころか、すごいおしゃべりだ。

（4）A：そちらは涼しくなりましたか。

B：涼しいどころか、連日30度を越える暑さが続いていますよ。

（5）風雨は弱まるどころか、ますます激しくなる一方だった。

（6）この夏休みはゆっくり休むどころか、仕事に追われどおしだった。

名詞、形容詞などに付く。ナ形容詞の場合は、（3）のように間に「な」を伴うこともあるが省略も可能。前の部分で述べられたこととは正反対であるような事実が後ろに続き、話し手、あるいは聞き手の予想・期待を根底からくつがえす事実を述べる場合に用いる。

（2）を例にとれば、聞き手が「独身だ」と思っている人物に対して、単に「独身でない」ことを言うのではなく、実は「子供が3人もいる」という事実を伝え、「独身だ」と思っている聞き手の予想を根底から否定するような用法である。

2 …どころか…ない

[…どころか…さえ(も)…ない]

[…どころか…も…ない]

[…どころか…だって…ない]

（1）最近の大学生の中には、英語どころか日本語の文章さえもうまく書けない者がいる。

（2）旅行先で熱を出してしまい、見物どころか、温泉にも入れなかった。

（3）彼女の家まで行ったが、話をするどころか姿も見せてくれなかった。

（4）A：今夜お暇ですか。

B：暇などころか、食事をする暇さえありませんよ。

（5）お前のような奴には、1万円どころか1円だって貸してやる気はない。

接続、意味とも上の1に準ずる用法である。後半では「さえ(も)／も／だって…ない」のような否定表現が用いられ、平均的な基準や期待が満たされないばかりでなく、それよりずっと容易だったり、低

い水準の期待さえも満たされないということを表す。

（1）の例で言えば、日本の大学生であれば普通、外国語では英語ができるはずだが、それより易しい日本語の作文でさえまともにできないほど、作文力がない学生がいるという意味である。

3 …どころではない

[Nどころではない]

[V-ているどころではない]

（1）この1か月は来客が続き、勉強どころではなかった。

（2）こう天気が悪くては海水浴どころではない。

（3）仕事が残っていて、酒を飲んでいるどころではないんです。

（4）A：今晩一杯いかがですか。
　　B：仕事がたまっていて、それどころではないんです。

動詞や、動作を表す名詞に付いて、「そのような活動ができる状況・場合ではない」という意を表す。（4）のように前の発言を指示語「それ」でうけることもある。（4）は「酒を飲んでいるどころではない」という言いかえが可能である。

4 Nどころのはなしではない
Nどころのさわぎではない

（1）受験生の息子を二人もかかえ、海外旅行どころの話ではありません。

（2）こう忙しくては、のんびり釣りどころの話ではない。

（3）原子力発電所の事故発生でバカンスどころのさわぎではなくなった。

動詞や動作を表す名詞について、3と類似の意味を表す。「そんな呑気なことを言っている状況ではない」といった含みがある。

【ところが】

1 ところが ＜反予測＞

（1）天気予報では今日は雨になると言っていた。ところが、少し曇っただけで、結局は降らなかった。

（2）ダイエットを始めて3週間になる。ところが、減った体重は、わずか1キロだけだ。

（3）いつもは8時半ごろ会社に着く。ところが、今日は交通事故に巻き込まれ、1時間遅れで到着した。

（4）兄は大変な秀才である。ところが弟は大の勉強嫌いで、高校を無事に卒業できるかどうかも危ぶまれている。

（5）A：春休みはゆっくりされているんでしょうね。
　　B：ところが、締め切り原稿があってそうもしていられないんです。

（6）A：来週のパーティには是非いらしてくださいね。
　　B：ところが、その日急に予定が入ってしまったんです。

前文の内容から自然に予想されたり、期待されることに反したり、食い違う内容の文が続く場合に用いられる。また、（3）（4）のように二つの事態が対比的関係に立つ場合にも用いられる。（5）（6）のような会話文では、「あなたはそうお考えでしょうが、事実はそれと違う」というようなことを聞き手に伝える場合に用いられる。つまり、相手の期待や予想と現実の食い違いを示す用法である。いずれの場合も後続の文には既定の事実を表す表現が用いられる。事実性が定まっていない意志、希望、命令、推量などの表現は用いることができない。次の例はそのために誤用となる。

（誤）合格はかなり難しそうだ。ところが、受験してみるつもりだ（意志）／挑戦してみたい（希望）／頑張れ（命令）／ひょっとしたら受かるかもしれない（推量）。

2 ところが ＜発見＞

（1）急いで家を出た。ところが、途中で財布を忘れていることに気がつき、あわてて引き返した。

（2）友人の家に電話した。ところが、1週間前から海外旅行に行って留守だという。

前に述べた状況や成り行きからは予想しにくい出来事や、新たな状況の変化が起こり、それを意外だと話し手が受け止めるような場合に用いられる。後続文は話し手がそこで初めて発見するような新たな情報で、前に述べた状況から自然に予想されることと食い違うような内容をもつものである。

この用法の「ところが」は、「しかし、けれども、だが」などとは、置きかえられないのが普通で、仮に置きかえられた場合でも、別の意味を表す。

【ところだ】

1 Vところだ ＜事態の局面＞

動詞に付いて場面・状況や出来事がどのような進展の段階にあるかを報告するような場合に用いる。「ところだった」の場合は、過去においてそのような段階にあったということを表す。「ところだ」自体は否定形や疑問形にはなりにくい。また、前に付く動詞には否定形が使われないのが普通。

a V-たところだ

（1）今帰ってきたところです。

（2）海外勤務を終え、先月帰国したところです。

（3）電話したら、あいにくちょっと前に出かけたところだった。

動作・変化がその「直後」の段階にあることを表す。「今、さっき、ちょっと前」などの、直前の時を表す副詞と共に用いられることが多い。

b V-ているところだ

（1）A：もしもし、和雄君いますか。
　　B：今お風呂に入っているところなんです。

（2）ただ今電話番号を調べているところですので、もう少々お待ちください。

（3）ふすまを開けると、妻は着物を片付けているところだった。

動作がその「最中」の段階にあることを表す。

c V-ていたところだ

（1）いい時に電話をくれました。私もちょうどあなたに電話しようと思っていたところなんです。

（2）思いがけなくも留学のチャンスが舞い込んできた。そのころ私は、将来の進路が決められずいろいろ思い悩んでいたところだった。

以前から文の表す時点に至るまでそのような状態が続いていたということを表す。思考や心理状態を説明するような場合が多く、その状況に新たな変化・展開が起きたような場合によく用いられる。

d V-るところだ

（1）これから家を出るところですから、30分ほどしたら着くと思います。

（2）飛行機は今飛び立つところだ。

（3）A：ご飯もう食べた？

B：ううん、これから食べるところ。

（4）家に戻って来ると、妻は買い物に出掛けるところだった。

動作や変化がその「直前」の段階にあることを表す。「ちょうど、今、これから」などの副詞が用いられることもある。

2 Vところだ <反事実>

「もし場合が違っていればこうであるはずだ」という事実に反することがらを表す。前に「たら／なら／ば」などの条件節を伴うことが多い。

a ...たらVところだ

（1）昔だったらそんな過激な発言をする人間は、処刑されているところだ。

（2）父がそのことを知ったら激怒するところだ。

（3）先生がお元気だったら、今日のような日には一緒に中華料理でも食べているところでしょう。

（4）知らせていただかなければ、とっくにあきらめていたところです。

「...ば」「...たら」などの条件節を伴い動詞の辞書形、タ形を受け、事実はこれとは異なるが、もしそのような場合だったら成立したはずの状況を想像して述べる表現。

（1）の例で言えば「昔だったら処刑されているはずだ」が現代の社会ではそのようなことはないという意味を表す。

b ...ところだった

[V-るところだった]

[V-ていたところだった]

（1）もし気がつくのが遅かったら、大惨事になるところだった。

（2）あっ、あなたに大事な話があるのを思い出しました。うっかり忘れるところでした。

（3）ありがとうございます。注意していただかなければ忘れていたところでした。

事情が異なれば起こっていたはずの出来事がその直前のところで避けられたという意味を表す。「...ば」「...たら」などの条件節を伴うことが多い。直前までできていたという意味を強めるときは「もうすこしで...ところだった」のように言う。

c ...なら(ば)...ところ　だが／を

（1）普通ならただではすまないところだが、今回だけは見逃してやろう。

（2）本来ならば直接お伺いすべきところですが、書面にて失礼致します。

（3）通常は定価どおりのところを、お得意さんに限り特別に1万円引きになっております。

（4）いつもなら1時間で行けるところを、今日は交通事故があって3時間もかかった。

「普通／通常／本来ならば」などの表現を伴い、普通はこうなのだが、現状がそれとは異なり特別だという意味を表す。

【ところで】

1 ところで

（1）A：お元気そうですね。

B：おかげさまで。

A：ところで、この度は息子さんが大学に合格なさったそうで、おめでとうございます。

（2）A：やっと夏休みだね。ところで、今年の夏休みはどうするの。

B：卒論の資料を集めるつもり。

（3）今日はお疲れ様でした。ところで、駅のそばに新しい中華料理屋さんができたんですけど、今夜行ってみませんか。

（4）今日の授業はこれまでです。ところで、田中君を最近見かけませんが、どうしているか知っている人いますか。

これまでの話題とは別のものに話題を変更したり、いまの話題に関連することがらを付け加えたり、対比させて述べるような場合に用いる。

2 V-たところで <区切りの時点>

（1）論文の最後の一行を書いたところで、突然気を失った。

（2）話の区切りが付いたところで、終わることにしましょう。

（3）大急ぎで走り、飛び乗ったところで電車のドアが閉まった。

（4）ようやく事業に見通しがつくようになったところで、父は倒れ

てしまった。

前の動作・変化が終わり一区切りがついた時点で、後の動作・変化が起こる(あるいは起こす)という意味を表す。

3 V-たところで ＜逆接＞

a V-たところで…ない

（1） いくら頼んだところで、あの人は引き受けてはくれないだろう。

（2） そんなに悲しんだところで、死んだ人が帰って来るわけではない。

（3） 今頃になって急いだところで、無駄だ(＝間に合わない)。

（4） 到着が少しぐらい遅れたところで問題はない(＝大丈夫だ)。

（5） 頑丈な作りですから倒れたところで壊れる心配はありません。

動詞のタ形に続いて、そのような行為をしても期待する結果が得られないことを表す。結果の部分は述語のナイ形や、「無駄だ／無意味だ」というような否定的な判断や評価を表す表現が用いられる((1)～(3))。また、(4)(5)のように「…しても大丈夫／問題はない」という肯定的な評価を表す用法もある。これは前の事態が成立しても後の事態には影響が及ばないという関係である。「たとえ」「どんなに」「いくら」のような副詞や「何＋助数詞」(例:何人、何冊、何回)を伴うこともある。

b V-たところで

（1） うちの夫は出世したところで課長どまりだろう。

（2） どんなに遅れたところで、せいぜい5、6分だと思います。

（3） 泥棒に入られたところで、価値のあるものは本ぐらいしかない。

後に少ない程度を表す表現を伴い、「仮にそのようなことが起こった場合でも、その程度・量・数はたいしたものではない」といった意味を表す。

【ところに】

[V-ている／V-た ところに]

（1） 出掛けようとしたところに電話がかかってきた。

（2） ようやく実行する方向に意見がまとまったところへ思わぬ邪魔が入った。

（3） 財布をなくして困っているところに偶然知り合いが通りかかり、無事家までたどり着くことができた。

「…ところに／ところへ」で、「…している／したときに」の意味。

ある段階における状況を変化・変更させるような出来事が起こることを表す場合に用いる。たいていは、(1)(2)のようにものごとの進行を妨害・邪魔するような出来事のことが多いが、(3)のように現状をよい方向に変えるような場合もある。

【ところを】

1 Vところを…V

（1） お母さんは子供が遊んでいるところを家の窓から見ていた。

（2） こっそりタバコを吸っているところを先生に見つかった。

（3） 駅前を歩いているところを警官に呼び止められた。

（4） 男は金庫からお金を盗み出そうとしているところを現行犯で逮捕された。

（5） 人々がぐっすり寝込んだところを突然の揺れが襲った。

（6） あやうく暴漢に襲われかけたところを見知らぬ男性に助けてもらった。

前後に動詞を伴い、前の動詞によって表されている状況の進展に対して、直接的な働きかけを与えるような動作が後に続くことを表す。後続の動詞としては「見る」「見つける」「見つかる」「発見する」といった、視覚や発見の意味の動詞や、「呼び止める」「捕まえる」「捕まる」「襲う」「助ける」など、停止・捕捉・攻撃や救助といった意味のものが用いられる。これらは前の動作・出来事の進展を止めたりさえぎったりする意味上の共通点をもつものである。

2 …ところ(を)

[Nのところ(を)]

[Aところ(を)]

[R-ちゅうのところ(を)]

（1） お楽しみのところを恐縮ですが、ちょっとお時間を拝借できないでしょうか。

（2） ご多忙のところ、よくきてくださいました。

（3） お忙しいところを申し訳ありませんが、ちょっとお邪魔いたします。

（4） お取り込み中のところを失礼します。

（5） お休み中のところをお電話してすみませんでした。

（6） 難しいことは承知のうえですが、そこのところをちょっと無理して聞いていただけないでしょうか。

（7） A：最近ちょっと忙しくて……。

B：そこんところを何とかよろしくお願いしますよ。

相手に無理を言ったり、迷惑をかけたりするような場合に、相手の状況を配慮する表現として用いられる。前置き的に使われることが多く、依頼やおわび、感謝などの表現が後に続く。(6)(7)のように前のことがらを指示詞で受けて「そこのところ」のような形で用いられることもある。

【とされている】

（1） 仏教で、生き物を殺すのは十悪のひとつとされている。

（2）地球の温暖化の一因として、大気中のオゾン層の破壊が大きくかかわっているとされている。

（3）チョムスキーの理論では、言語能力は人間が生まれつきもっている能力とされている。

（4）当時歌舞伎は風俗を乱すものとされ、禁止されていた。

「…と考えられている／見なされている」という意味を表す。名詞述語の場合は「だ」が省かれ「Nとされている」となることが多い。普通、報道文や論文など、改まった文体で用いられる。

【としたら】

助詞「と」に「したら」がついたもの。「それが事実だと考えた場合」「実現・存在すると考えた場合」「このような事実・現状をふまえると」のような意味を表す。「そのように考えた場合」という想定上の条件設定を行うもので、ほとんどの場合、単独の「たら」では置きかえられない。

1 …としたら ＜仮定条件＞

[N／Na　だとしたら]

[A／V　としたら]

（1）家を建てるとしたら、大きい家がいい。

（2）もし1億円の宝くじがあたったとしたら、家を買おう。

（3）仮にあなたが言っていることが本当だとしたら、彼は私に嘘をついていることになる。

（4）いらっしゃるとしたら何時ごろになりますか。

（5）責任があるとしたら、私ではなくあなたの方です。

「仮にそれが事実だと考えれば／それが実現・存在するような場合は」という意味を表す。後半には話し手の意志、判断や評価の表現が続く。「仮に／もし」を伴うこともある。後に意志や評価を表す表現が続く場合は「としたら」は使えるが、「とすると」「とすれば」は不自然である。

（誤）宝くじがあたった｛とすると／とすれば｝家を買おう。

2 …としたら ＜確定条件＞

[N／Na　（なの）だとしたら]

[A／V　（の）だとしたら]

（1）これだけ待っても来ないのだとしたら、今日はもう来ないでしょう。

（2）A：私はそのことを誰にも話していません。
　　B：あなたが話してないのだとしたら、一体誰がもらしたのだろう。

現状や相手からの情報に基づき、「このような現状・事実をふまえれば」といった意味を表す。「…のだとしたら」の形で使われることが多い。この用法では「かりに／もし」は使えない。

3（そう）だとしたら

（1）A：寝台車は全て満席だって。
　　B：だとしたら、普通の座席に座って行くしかないわね。

（2）A：会議は1時間遅れの開始になったそうですよ。
　　B：そうだとしたら、こんなに急いでくるんじゃなかった。

（3）台風の上陸と満潮の時刻が重なるらしい。だとしたら、沿岸では厳重な警戒が必要になる。

前の文や相手の発言を受けて、「そのような事実／状況をふまえれば」「それが事実なら」という意味を表す。

【として】

1 Nとして

（1）研究生として、この大学で勉強している。

（2）日本軍の行った行為は日本人として恥ずかしく思う。

（3）子供がこんなひどい目にあわされては、親として黙っているわけにはいかない。

（4）彼は大学の教授としてより、むしろ作家としての方がよく知られている。

（5）趣味として書道を勉強している。

（6）学長の代理として会議に出席した。

（7）大統領を国賓として待遇する。

（8）軽井沢は古くから避暑地として人気があるところだ。

（9）文学者としては高い評価を得ている彼も、家庭人としては失格である。

（10）彼の料理の腕前はプロのコックとしても十分に通用するほどのものだ。

名詞に接続して資格・立場・部類・名目などを表す。

2 Nとしては　→【としては】

3 Nとしても

（1）私としても、この件に関しては当惑しております。

（2）学長としても、教授会の意向を無視するわけにはいかないだろう。

（3）会社といたしましても、この度の不祥事は誠に遺憾に思っております。

人物や組織を表す名詞に付いて、「その立場、観点からも」という意味を表す。（3）のように丁寧な形をとることもある。「としては」との違いは、「としても」は、他にも同様の立場・観点に立つ人や組織があるという含みがある点である。

→【としても】

4 NとしてのN

（1）教師としてではなく、一人の人

間としての立場から発言したいと思う。

（2）彼にも男としての意地があるはずです。

（3）日本代表としての責任を強く感じ、精一杯頑張りたいと思います。

「Nとして」が名詞を修飾する用法。

【として…ない】

[最小限の数量+として…ない]

（1）戦争が始まって以来、一日として心の休まる日はない。

（2）期末試験では、一人として満足のいく答案を書いた学生はなかった。

（3）高級品ばかりで、一つとして私が買えそうな品物は見当たらない。

（4）だれ一人として、私の発言を支持してくれる人はいなかった。

「一日」「一時（いっとき）」「（だれ）一人」「（何）一つ」などの最小限の量を表す「一」の付く語を受け、後に述語の否定形を伴って「全然…ない」という意味を表す。「なに」「だれ」のような疑問詞を伴う場合は「として」を省くことができる。

（例）だれ一人、私の発言を支持してくれる人はいなかった。

やや書きことば的な表現で、話しことばで「一人も…ない」のような言い方が普通。

【としては】

「として」に「は」のついたものだが、以下の用法では、通常「は」は省略されない。

1 Nとしては ＜立場・観点＞

（1）彼としては、辞職する以外に方法がなかったのでしょう。

（2）私といたしましては、ご意見に賛成しかねます。

（3）吉田さんとしては、ああとしか答えようがなかったのでしょう。

（4）委員会としては、早急に委員長を選出する必要がある。

人物や組織を表す言葉に付いて、「その立場・観点から言えば／考えると」という意味を表す。「…としましては／いたしましては」のように、丁寧な形が用いられることもある。

2 Nとしては ＜平均値とのずれ＞

（1）父は、日本人としては背の高いほうです。

（2）100キロの体重は普通の男性だったらずいぶん重いと思うが、相撲取りとしてはむしろ軽いほうである。

（3）大学院を出てすぐ大学に就職できる人は、研究者としては幸運な部類に入る。

（4）学生数2000人というのは大学としてはかなり規模が小さい。

人物や組織を表す名詞に付いて、その属するグループの標準・平均と比べた場合、それからはずれた数値や性質をもっていることを述べる場合に用いる。「…にしては」と言いかえられる。

【としても】

1 Nとしても →【として】3

2 …としても

[N／Na （だ）としても]

[A／V としても]

（1）彼の言っていることが真実だとしても、証拠がなければ信じるわけにはいかない。

（2）たとえ賛成してくれる人が一人もいないとしても、自分の意見を最後まで主張するつもりだ。

（3）留学するとしても、来年以降です。

（4）今からタクシーに乗ったとしても、時間には間に合いそうもない。

（5）渋滞でバスが遅れたとしても、電話ぐらいしてくるはずだ。

（6）加藤さんの忠告がなかったとしても、やっぱり病院を変えていただろう。

（7）同級生に駅で出会わなかったとしても、やっぱり授業をさぼって映画に行っただろう。

「XとしてもY」の形で、「仮にXが事実であっても／成立していてもYの成立や阻止に有効に働かない」という意味を表す。Yは、Xから予想・期待されることに反したり、はずれたことがらを表す。

Xが動詞の場合は、（4）～（7）のように「V-たとしても」のようにタ形を受ける場合が多いが、（3）のように「V-るとしても」も使われる。（3）は「未来に留学するようなことが生じる場合」という意味で、YはXが成立する同時的な時間を表している。これに対して「V-たとしても」は、「Xの事態が成立した場合でも」という意味で、XはYに先行して成立していることがらを表す。（4）の例で言えば「タクシーに乗った場合でも間に合わないという結果に終わるだろう」という意味の表現である。

（6）（7）はXが事実に反することがらを表す場合で、「実際は加藤さんの忠告があったが、それがなかった場合でも」「実際は同級生に会ったが、会わなかった場合でも」、Yという結果は成立していただろうということを述べる表現。

3 …はいいとしても

（1）彼はいいとしても、彼女が許してくれないだろう。

（2）計算を間違えたのはいいとしても、すぐに報告しなかったことが問題だ。

（3）時間通り来たのはいいとしても、宿題を忘れて来たのはよくない。

（4）あのホテルは、部屋はいいとし

ても、従業員の態度がよくない。

名詞や節を受け、「XはいいとしてもY」の形で用いられる。Yには「よくない」などのマイナス評価の表現が続き、「Xについてはいいと考えてもいいが、Yについてはそうは言えない」という意味を表す。二つのことがらを対比させ、Xは許容される範囲にあるが、Yはその範囲にないということを表す言い方。

【とする$_1$】

(1) ぎりぎりで締め切りに間に合い、ほっとした。
(2) 子供は少しの間もじっとしていない。
(3) 何を言われても平然としている。
(4) ぼんやり(と)していた記憶が時間が経つにつれてだんだんはっきり(と)してきた。
(5) 記者の質問に対し堂々とした態度で応対した。
(6) もっときちんとした格好をしなさい。
(7) 真夜中の電話の音にはっとして目が覚めた。
(8) 何を言われても、平然としてたばこを吹かしている。
(9) 彼女はきっとして、私をにらみつけた。
(10) 昨日からの雪は、一夜明けた今も依然として降り続いている。

語尾に「と」の付く副詞に「する」が付いて、そういう様子・状態であるということを示す。(4)の「ぼんやり」「はっきり」のように「と」がつかなくても副詞として使える語の場合は、「と」を省略することができる。(7)〜(9)では「して」を省略することができる。その他の例「ちゃんと／ゆったりと／かっかと／悠々と／悠然と／毅然とする」など。

【とする$_2$】

[N／Na　だとする]
[A／V　とする]

1 …とする ＜仮定＞

(1) 今仮に3億円の宝くじがあなたに当たったとします。あなたは、それで何をしますか。
(2) 今、東京で関東大震災と同程度の地震が起こったとしよう。その被害は当時とは比べものにならないものになるだろう。
(3) 例えば50人来るとして、会費は一人いくらぐらいにすればよいでしょうか。
(4) それはそうとして、我々はどうしたらよいでしょうか。

「かりに…と考える」という意味で、現実がどうであるかということは別にして、とりあえず仮定・想像の上でのことがらとして条件を設定する用法。かりのものとして設定するという話し手の意識的な条

件設定の意識が強い。

2 …とする ＜見なし＞

ニュース報道や法律の条文など、かたい表現で用いられる。

a …とする

[N／Na　(だ)とする]
[A／V　とする]

(1) 酔ったうえでの失言(だ)として、彼の責任は問われないことになった。
(2) 多額の不正融資が行われた証拠があるにもかかわらず、事実無根として片付けられた。
(3) 裁判長は過失は被告側にあるとし、被害者に賠償金を払うよう命じた。
(4) 今の法律では夫婦はどちらか一方の姓を選ばなければならないとされている。

「…と見なす」「…と決める」という意味を表す。名詞のあとの「だ」は省略されることが多い。

b …こととする

「…と見なす」「…と判断する」「…と決める」という意味を表す。

(1) ≪規則≫会議を欠席する場合は、事前に議長宛に届けを提出することとする。
(2) この度の法律改正は喜ぶべきこととして受け止められている。

「…と決める」「…と判断する」という意味を表す。

c …ものとする

(1) 意見を言わない者は賛成しているものとする。
(2) 1週間たってもお返事がない場合はご辞退なさったものとして扱います。

「…と見なす」「…と解釈する」という意味を表す。

3 V-ようとする

(1) 時計は正午を知らせようとしている。
(2) お風呂に入ろうとしたところに、電話がかかってきた。

→【よう2】8

4 NをNとする

(1) 私は恩師の生き方を手本としている。
(2) 祖父は散歩を日課としている。
(3) この試験では60点以上を合格とする。
(4) 看護婦は昔は女の仕事とされていたが、この頃は男の看護士もいるそうだ。
(5) 芭蕉は人生を旅として生きた。

「…を…のように見なす／考える／決る」という意味を表す。人の行動や方法を手本にしたり、行動を習慣として決めたり、ものごとを異なるものに見立てたりするといった様々な意味を表す。(1)〜(4)は「Nにする」とも言いかえられ

るが、(5)のような比喩的な用法の場合は言いかえられない。

【とすると】

助詞「と」に「すると」がついたもので、節を受け、「それが事実だと考えた場合は」「実現する場合は」「このような現状・事実をふまえると」という意味を表す。後半にはそのように考えた場合に成り立つ判断の表現が続く。「そのように考えた場合」という意味の想定上の条件設定を行うもので、このような意味は単独の「と」にはない。したがって「と」とはほとんどの場合置きかえることができない。

1 …とすると ＜仮定条件＞

[N/Na　だとすると]

[A/V　とすると]

(1) 医学部に入るとすると、一体どのくらいお金が必要なのだろうか。

(2) もし、今後も雨が降らないとすると、水不足になるのは避けられないだろう。

(3) 仮に被告が言っていることが事実だとすると、彼女は嘘の証言をしていることになる。

事実かどうか、あるいは実現するかどうかは分からないが、「かりに事実だ/実現すると考えた場合は」という意味を表す。「かりに/もし」を伴うこともある。

2 …とすると ＜確定条件＞

[N/Na　だとすると]

[A/V　とすると]

(1) 1時間待ってまだ何の連絡もないとすると、途中で事故にでもあったのかもしれない。

(2) A：図書館は明日から2週間休館になります。
　　B：2週間休館だとすると、今日のうちに必要な本を借りておかなければならないな。

現状や相手から聞いた情報に基づいて、「このような現状・事実をふまえると」といった意味を表す。この用法では「かりに/もし」はつかない。

3 (だ)とすると

(1) A：今年の2月の平均気温は平年より数度も高いそうですよ。
　　B：とすると、桜の開花も早くなるでしょうね。

(2) 脱線事故で、今日一日、電車は不通の見込みだという。だとすると、道路は相当混雑するだろう。

前の文や相手の発言を受けて「このような現状/事実をふまえると」という意味を表す。

【とすれば$_1$】

[Nとすれば]

(1) 夫とすれば家事をおろそかにする妻には不満も多いだろうと思う。

(2) 当事者の彼とすれば、そう簡単に決めるわけにはいかないのです。

(3) 教師とすれば、よくできる学生に関心が行くのは自然なことだと思う。

人を表す名詞を受けて、「その人の立場から見れば/考えれば」という意味を表す。やや書きことば的。話しことばでは「にしたら/にしてみれば」をよく使う。

【とすれば$_2$】

助詞の「と」に「すれば」がついたもの。節を受け、「それが事実だと考えれば」「実現する場合は」「このような事実・現状をふまえれば」という意味を表す。「そのように考えた場合」という話し手の想定上の条件設定を行うもの。このような意味は単独の「ば」にはないため、ほとんどの場合、「ば」で置きかえることはできない。

1 …とすれば ＜仮定条件＞

[N/Na　だとすれば]

[A/V　とすれば]

(1) 死ぬとすれば10歳年上の私の方が早いはずだ。

(2) 台風は上陸するとすれば、明日の夜になるでしょう。

(3) 仮に20人来るとすれば、この部屋ではちょっと狭すぎるだろう。

(4) この結婚に反対する人がいるとすれば、それは一番身近な母親である可能性が高い。

それが事実かどうか、あるいは実現するかどうかは分からないが「かりにそれが事実だと考えた場合/それが実現・存在するような場合は」という意味の仮定条件を表す。「かりに/もし」のような副詞を伴うこともある。後半には「だろう」「はずだ」のような話し手の判断を表す表現が用いられることが多い。

2 …とすれば ＜確定条件＞

[N/Na　だとすれば]

[A/V　とすれば]

(1) これだけ待っても来ないとすれば、もともと来る気がなかったんじゃないだろうか。

(2) 我々の計画が敵に知られていたとすれば、仲間のだれかがもらしたことになる。

(3) A：この時間に容疑者は友人と会っていることが分かっています。
　　B：そうか。彼にアリバイがあるとすれば、では、犯人は一体誰なのだろう。

現状や相手からの情報で、それが事実であることが新たに分かったような時に、「このような現状・事実をふまえれば/それに基づいて判断すれば」という意味を表す。後ろには話し手の判断を表す表現が用いられる。この場合は「かりに/もし」はつかない。

3 (だ)とすれば

(1) A：家に電話しても誰も出ないんですよ。

B：だとすれば、もうこちらに向かっているということじゃないですか。

（2）あの日彼女は一日中彼と一緒だったことが証明された。とすれば、彼女にはアリバイがあるということになる。

前の文や相手の発言を受ける表現で、「それが事実なら／正しいとすると」という意味を表す。用法は上の2と同じ。ややかたい言い方で、普通の会話では「だったら、そうなら」などがよく使われる。

4 NをNとすれば
NがNだとすれば

（1）テレビがお茶の間のものとすれば、ラジオは個室のものである。

（2）兄が実業家タイプだとすれば、弟は学者タイプの性格である。

二つのものを対比させる表現で、「一方について…のように表現するとすれば、他方のものは…のように表現できる」といった意味の定型的表現。「兄が実業家タイプなら(ば)、弟は学者タイプだ。」のように、「NがNなら(ば)」で言いかえることができる。この用法で「とすると」「としたら」がまったく使えないわけではないが、「なら」か「とすれば」が使われることが多い。

【とたん】

1 V-たとたん(に)

（1）ドアを開けたとたん、猫が飛び込んできた。

（2）有名になったとたんに、彼は横柄な態度をとるようになった。

（3）試験終了のベルが鳴ったとたんに教室が騒がしくなった。

（4）注射をしたとたん、患者のけいれんはおさまった。

動詞のタ形を受け、前の動作や変化が起こるとすぐ後に、別の動作や変化が起こるということを表す。後の動作・変化を話し手がその場で新たに気付いたような場合に用いられるため、「意外だ」というニュアンスを伴うことが多い。したがって、話し手の意志的な動作を表す表現が後に来る場合は用いることができず、代わりに「とすぐに／やいなや」などが用いられる。

（誤）私は家に帰ったとたん、お風呂に入った。

（正）私は家に帰るとすぐにお風呂に入った。

2 そのとたん(に)

（1）友だちと30分ほど話して、受話器を置いた。そのとたんに再び電話のベルが鳴り出した。

（2）噂の二人が部屋から姿を現した。そのとたん、外で待ち構えていた記者たちのフラッシュのシャワーが二人をおそった。

前の文の内容を受けて、「その直後に」「するとすぐ後に」という意味を表す。

3 とたんにV

（1）空が急に暗くなったと思ったら、途端に大粒の雨が降りだした。

（2）日が落ちたら、途端に寒くなった。

（3）列車はゆっくりと動き出した。とたんに彼女の目から涙があふれ出した。

「急に」「たちまち」という意味を表す。この場合は「に」を省略できない。

【とちがって】

[Nと(は)ちがって]
[Na なのと(は)ちがって]
[A／V　のと(は)ちがって]

（1）弟は大柄な兄とちがって、やせていて背も低い。

（2）人間は機械とちがって、想像力をもっている。

（3）外国での生活は、自国で生活するのとちがって、思わぬ苦労をすることがある。

（4）実際に自分の目で見るのは、人から聞くのとちがって強烈な印象を受けるものだ。

「…と異なって」という意味。異なる性質をもつものを他と比較して述べる場合に用いる。「…とちがい」の形で用いられることもある。

（例）評判で聞いていたのとはちがい、実際に見たら退屈な映画だった。

【とちゅう】

1 とちゅうで

（1）いつもの時間に家を出たが、途中で忘れ物に気づいて引き返した。

（2）やりかけた仕事は途中で投げ出してはいけないよ。

（3）泥棒の足跡は途中で途切れている。

（4）この道は途中で行き止まりになっている。

時間や場所の「中途で」の意味で、ものごとが最後まで終わらないうちに、中止されたり、別の何かが起こったりすることを表す場合に用いる。この場合「で」は省略できない。

2 …とちゅう(で／に)
[Nのとちゅう(で／に)]
[V-るとちゅう(で／に)]

（1）通勤の途中、突然雨が降りだした。

（2）買い物の途中で、急に気分が悪くなって倒れてしまった。

（3）買い物に行く途中で、ばったり昔の友人に会った。

（4）家に帰る途中、居酒屋に立ち寄った。

（5）駅に行く途中に郵便局があるので、そこでこの手紙を出して

くれませんか。

動作を表す名詞や動詞を受けて、その行為が終了していない時点で、別の出来事が起こったり、移動中の場所に存在するものを示す場合に用いる。一般に出来事の起こる時点には「で」、存在の場所を表す場合は「に」が使われるが、(1)(4)のように省略されることもある。

3 …とちゅう(は)

(1) 会社に来る途中、ずっとこの小説を読んでいた。

(2) 歩いている途中、彼に言われたことばが頭を離れなかった。

(3) 旅の途中は眠ってばかりいた。

(4) 通勤の途中は語学の勉強をすることにしている。

移動の動作を表す名詞や動詞を受けて、その間ずっと後の動作や状態が続く場合に用いる。

【どちらかというと】

(1) 私はどちらかというと、人前で発言するのが苦手である。

(2) この店はどちらかというと若者向けで、年配の客はあまり見当たらない。

(3) あの教授は、どちらかといえば、学者というよりビジネスマンタイプである。

(4) 大阪も悪くないが、どちらかというと私は京都の方が好きだ。

(5) 最近の大学生は、どちらかといえば男子より女子のほうがよく勉強して成績もよい傾向がある。

「全体としては」「総じて」という意味。人や物の性格・特徴について評価する場合、全体としてはそのような特性・傾向が認められるといった意味を表すのに使う。「どちらかといえば」もほぼ同義。

【どちらかといえば】

→【どちらかというと】

【とて】

1 Nとて(も)

(1) 私とて悔しい気持ちは皆と同じである。

(2) この事故に関しては、部下の彼とても責任はまぬかれない。

(3) 最近は父親とて、育児に無関心でいるわけにはいかない。

(4) これとても、特に例外的な現象というわけではない。

主に人や役割などを表す名詞に付いて、「…であっても」「それについても他と同様に」の意味を表す。他の同類のものと比較した場合、それについても当然同じことが言えるということを強く主張する場合に用いる。やや古めかしい言い方で、話しことばでは「私だって」のような言い方のほうがよく使われる。

2 …からとて

[N／Na だからとて]

[A／V からとて]

(1) 病気だからとて、無断で休むのはけしからん。

(2) 仕事に情熱がもてないからとて、家族を養う身としては、簡単に辞めるわけにはいかないのである。

「それだけの理由で」という意味で、あとに述べるような結論を出すことはできないということを述べるのに用いる。「からといって」の文語的表現。

3 …とて

[Nだとて]

[V-たとて]

(1) いくら愚か者だとて、そのくらいのことはわきまえていてもよさそうなものだが。

(2) たとえ病気だとて試合は休むわけにはいくまい。

(3) いくら頼んだとて、聞き入れてはもらえまい。

(4) どんなに後悔したとて、失われたものは再び元に戻ることはないのである。

「…でも」「…としても／としたって」「…たところで」などの文語的な言い方。話しことばではあまり用いられない。「いくら」「どんなに」「たとえ」などを伴うことが多い。

【とても】

1 とても

(1) あの映画はとても面白かった。

(2) 今度の新入社員はとてもよく働く。

程度がはなはだしいことを表す。たいへん、ひじょうに。

2 とても…ない

(1) こんな難しい問題はとても私には解けません。

(2) 一度にこんなにたくさんの単語はとても覚えられません。

(3) あの美しさはとても言葉では表現できない。

どのような方法を尽くしても無理だ、できないという話し手の主観的な判断を表す。書きことばでは「とうてい…ない」と言いかえられる。

【とでもいう】

(1) 学問の楽しみは、未知の世界を発見する喜びとでもいおうか。

(2) シルクの繊維としての素晴らしさは、気温や湿度の変化に対する絶妙なバランスにあるとでもいったらよいだろうか。

(3) 冷房のきいた部屋から外に出た時の感じは、まるで蒸し風呂に入った感じとでもいえようか。

ものごとの性質・特徴を別の表現にたとえて説明する言い方。「たとえて言えば…のように言えるのではないか」という意味を表す。「…とでもいおうか」「…とでもいえよう」「…とでもいってよいだろう」な

どの形で使われる。書きことば的。

【とでもいうべき】

[Nとでもいうべきい]

（1）そこは東洋のパリとでもいうべき優雅な雰囲気のある町である。

（2）第二のモハメッド・アリとでもいうべきボクサーが現れた。

（3）彼は映画の神様とでもいうべき存在である。

婉曲な比喩表現。よく知られた名前をあげて、このようにたとえるのがふさわしいという気持ちを表す。「…ともいうべき」と言うこともある。

【とともに】

1 Nとともに

（1）仲間とともに作業に励んでいる。

（2）夫とともに幸せな人生を歩んできた。

（3）隣国とともに地域経済の発展に努めている。

人や機関を表す名詞を受けて、それと「いっしょに」「共同で／協力して」といった意味を表す。書きことば的。

2 …とともに

[Nとともに]

[V-るとともに]

（1）テレビの普及とともに、映画は衰退した。

（2）国の経済力の発展とともに、国民の生活も豊かになった。

（3）地震の発生とともに津波が発生することがある。

（4）年をとるとともに記憶力が衰えてきた。

（5）≪スピーチ≫今後、教育内容の充実を図るとともに、地域社会に貢献する大学の建設に努力する所存でございます。

動作・変化を表す動詞や名詞を受けて、一方の動作・変化に応じて別の動作・変化が起こるという意味や、二つのことが同時に起こるという意味を表す。書きことば的。「…につれて」「…とどうじに」。

【となく】

1 なん＋助数詞＋となく

（1）原始林の中には、巨大な樹木が何本となく茂っている。

（2）彼は世界選手権にはすでに何回となく参加した経験をもっている。

（3）公園のベンチには若いカップルが幾組となく腰掛けて愛を語り合っている。

「何（なん）」「幾（いく）」など不定の数量を表すことばに「…人」「…回」などの助数詞がついたものを受け、その数量がかなり多いことを表す。書きことば的で、話しことばでは、「何回も」「幾組みも」のような表現のほうがよく使われる。

2 ひるとなくよるとなく

（1）世界の至るところで、昼となく夜となく様々な事件が発生している。

（2）母は昼となく夜となく病気の祖母の世話で忙しく暮らしている。

「昼も夜も」すなわち「一日中」という意味を表す。書きことば的。

【となったら】

節や名詞を受け、「…ような場合・状況になったら」といった意味や「そのことが話題になったら」といった意味を表す。状況・話題が「そのようなことになった場合」のように、自然にそうなるといった意味が強い。「となると」「となれば」とも言う。

1 …となったら

[N／Na（だ）となったら]

[A／V　となったら]

（1）もし、一戸建の家を建てるとなったら、銀行から相当の借金をしなければならない。

（2）引き受ける人が誰もいないとなったら、私がやるしかない。

（3）彼女がすでに他の人と結婚してしまったとなったら、もう諦めるしかない。

（4）A：夫が海外勤務になったんですよ。

B：そうですか。海外で生活するとなったら、お子さんの学校のことなど、いろいろ大変ですね。

節を受け、「…のようなこと・状況が起こった場合は」という意味を表す。事実かどうかが未定の仮定的なことがらと、事実であることが新たに分かったようなことがらのどちらにも用いられるが、どちらかは文脈によって決まる。例えば（2）は、「仮にそのような場合」と「すでに事実が明らかになった現在」のどちらでもありえる。仮定的なことがらの場合は「かりに／もし」を伴うことがある。（4）は人の発言を受ける場合で、「そうなったら」で言いかえることができる。

2 いざとなったら

（1）いざとなったら私が責任をとります。

（2）いざとなったら、今の仕事を辞めても自分のやりたい道に進むつもりだ。

「実行するにあたって何か障害となるような問題が起こったような場合には」という意味を表す。後半には意志の表現が用いられることが多い。この場合、「となれば」とは言いかえられるが、「となると」は使えない。

3 N（のこと）となったら

（1）日本料理となったらここの板前の右に出る者はいないそうだ。

（2）自分の専門のこととなったら、彼は何時間でも話し続ける。

名詞を受けそれを話題として取り上げるのに使う。「そのことについては」「それが話題になったら」などの意味を表す。

【となっては】

1 いまとなっては

（1）今となっては、名前も顔も思い出すことができない。

（2）全てが終わってしまった今となっては、じたばたしてもしかたがない。

（3）当時はずいぶん辛い思いをしたものだが、今となっては、それも懐かしく思い出される。

「いろいろな経緯を経た現時点においては」という意味を表す。後ろには「それも当然だ／もっともだ」といった意味の表現が続くことが多い。(1)(2)のように「できない」「しかたがない」といったマイナス評価の表現が続くことが多いが、(3)のように、中立的な評価のこともある。

2 …となっては

[N／Na (だ)となっては]

[A／V となっては]

（1）子供達だけで海外へ行くとなっては、親としてはちょっと心配になる。

（2）病状がここまで進んだとなっては、もうどうすることもできない。

（3）誰も引き受けてくれないとなっては、自分でやるしかない。

節を受けて、「…のような状況になった場合は」の意を表す。すでに成立している状況を表すことが多く、後ろは、そのような場合に当然成り立つような話し手の評価や判断を表す。「心配だ」「しかたがない」のようなマイナス評価を表す場合が多い。

【となる】

[N／Na となる]

（1）初めて戦後生まれの人物がアメリカの大統領となった。

（2）今回の協定は大筋では米国側の主張を受け入れた内容となっている。

→【なる】5

【となると】

1 となると

（1）A：先生はご病気で昨日入院されました。

B：となると、しばらく授業は休講ということになりますね。

（2）長期予報によれば今年の梅雨は空梅雨になるとのことだ。となると、野菜の値段の高騰や、水不足の心配が予想される。

文頭に用いて、「そのような事実をふまえると」という意味を表す。前半にはその場で話し手が新たに知ったことがらや、他の人の発言内容が述べられ、後半ではそのような情報に基づいてそこから話

し手が導き出した判断が表される。「だとなると／そうだとなると」のような形をとることもある。

2 …となると

[N／Na (だ)となると]

[A／V となると]

（1）医学部に進むとなると相当にお金がかかるだろう。

（2）彼は、決断するまでは時間がかかるが、やるとなると実行するのは早い。

（3）いざ、海外に行くとなると、事前の準備が大変だ。

（4）仮に、このまま水不足が続くとなると営業時間を短縮しなければならなくなる。

（5）この時間になっても帰っていないとなると、何かの事件に巻き込まれている可能性がある。

（6）現場に残された指紋が彼のものと一致するとなると、彼が犯人である公算が高い。

（7）これほど大企業の経営状態が悪いとなると、不況はかなり深刻ということになる。

（8）社長がそう言っているとなると、変更はほとんど不可能でしょう。

節を受けて、「…のような場合は」「…のような状況になった場合は」という意味を表す。現実的な状況を言う場合と、仮定的な状況を言う場合があるが、どちらの意味かは文脈による。仮定的なことがらには「もし／かりに」が用いられることがある。

3 いざとなると

（1）危険は承知の手術だが、いざとなると不安になるものだ。

（2）スピーチは原稿を何度も読んで練習してきたが、いざとなるとあがってしまいうまくしゃべれなかった。

「実際に実行する場合は」という意味の慣用的表現。後ろにはそのような状況では自然にそうなってしまうといった意味の表現が続くことが多い。

4 N(のこと)となると

（1）芸能人のスキャンダルとなると、マスコミは夢中になって追跡する。

（2）試験問題のこととなると学生は急に真剣になる。

名詞を受け、「そのことが話題／問題になるときは」という意味を表す。後ろには、そのことが問題になると普通とは違う態度をとるといった意味を表す表現が続く。

5 …かとなると

（1）どうすればこの問題を解決できるかとなると、簡単には答えられない。

（2）実際にだれがその危険な仕事にあたるかとなると、積極的な人は一人もいない。

疑問表現を受けて、「…のことが問題に

なると」という意味を表す。後ろにはそれに対する解決・実行が不可能だ、困難だという否定的な意味の表現が続く。

6 Nともなると →【ともなると】

【となれば】

1 …となれば

[N／Na (だ)となれば]

[A／V となれば]

(1) 外国に住むとなれば、やはりその国の言葉ぐらいは勉強しておいたほうがよい。

(2) 結婚してから両親と同居するとなれば、今の家では狭すぎるだろう。

(3) 今から急いで行ってももう間に合わないとなれば、焦ってもしかたがない。

(4) 彼が言ったことが全て嘘だとなれば、我々はまんまとだまされていたことになる。

節を受けて「…のような場合は」「…のような状況になった場合は」「…のような事実をふまえると」などの意味を表す。後には当然だといった意味の判断や、そのような状況でとるべき行動の表現が続く。仮定的な状況を言う場合と現実的な状況を言う場合があるが、どちらの意味かは文脈による。

2 いざとなれば

(1) 手持ちの現金では足りないかもしれないが、いざとなればクレジットカードを使うことができる。

(2) 一人で留学するのは不安だが、いざとなれば、友達が助けてくれるから大丈夫だ。

「現実にそのような状況になった場合」という意味を表す慣用的表現。困った状況になった場合でも大丈夫だといった意味を表す場合が多い。「いざとなると」「いざとなったら」とも言う。

3 N(のこと)となれば

(1) いつもは生気のない彼の目もサッカーのこととなれば急に生き生きと輝やいてくる。

(2) 脳死問題となれば学者も安易な発言はできない。

名詞を受けて「そのことが話題になると」という意味で、それを話題として取り上げる用法。話題がそのことになった場合は普通と異なる態度や扱い方になるといった表現が続く。

4 …かとなれば

(1) どうすれば解決できるかとなれば、答えは簡単には出てこないものだ。

(2) 首相が発言どおり実行するかとなれば、必ずしもそうとばかりは言えない。

疑問表現を受けて、「…のことが話題・問題となる場合は」といった意味を表す。後ろには、それに対する解答や実行が不可能だ、困難だといった、否定的な意味の表現が続く。「発言はするが、いざ実行するかといえば」のように、他のこ

とがらと対比させてさらに重要な問題を取り上げるような場合に用いることが多い。

5 Nともなれば →【ともなれば】

【とにかく】

あることがらや行為について、それはひとまずおいておいて、それより他のことがらや行為を優先させて扱うことを表す場合に用いる。「ともかく」とも言う。

1 とにかく

(1) あの人はとにかく大変な秀才です。

(2) 田中さんの新しい家、とにかくすごく大きい家なんですよ。

(3) 戦闘の後の町は、とにかくひどい状況です。

「いろいろあるだろうが、まず何よりも」という意味を表す。後に平均的ではない程度を表す表現を伴い、「非常に／大変／すごく…だ」といった意味を強調するのに用いる。話しことば的。

2 とにかくV

(1) うまくいくか分かりませんが、とにかくやってみます。

(2) とにかく言われたことだけはやっておきました。

(3) お忙しいとは存じますがとにかくおいでくださいますようお願いいたします。

(4) まだ全員そろっていませんが、時間ですのでとにかく始めることにしましょう。

意志的な行為を表す動詞を後に伴い「ほかの事情はどうであれ、まずこの行為を優先して」という意味を表す。話し手が自分の意志や事実を主張したり、相手に実行を促すような場合に用いる。

3 Nはとにかく(として)

(1) 見かけはとにかく、味はよい。

(2) 成績はとにかくとして、明るくて思いやりのあるいい子供です。

(3) 私はとにかく、あなたはこの仕事に満足しているんですか。

(4) あいさつはとにかく、まずは中にお入りください。

(5) A：先日はお世話様でした。
B：いいえ。それはとにかく、お願いした仕事の方は引き受けてくださいますか。

名詞を受けて、それよりももっと大事なことや、先に行うべきことなどを対比させて言う場合に用いる。会話では、(5)のように、「それはとにかく(として)」のような形で文頭で相手の発言を受け、それと異なる別の話題を持ち出すような場合にも用いられる。

【との】

1 …とのことだ

(1) みなさんによろしくとのことでした。

（２）無事大学に合格なされたとのこと、まことにおめでとうございます。

（３）社長はすこし遅れるので、会議を始めておいてくれとのことでした。

（４）そちらは、寒い日が続いているとのことですが、皆様お変わりありませんか。

（５）あの二人も、長かった婚約に終止符を打ち、6月に挙式するとのことだ。

「…(だ)そうだ／ということだ」の意味で、人から伝え聞いたことを言う場合に用いる。(2)(5)のように、「だ」が省略されたまま文が終わることもある。「とのことだった／でした」のようにタ形にはなるが、否定形にはならない。

2 …とのN

（１）恩師から結婚式には出席できないとの返事を受け取った。

（２）学生から、留学するため、一年休学させてほしいとの希望が出されている。

（３）この件については、次回の審議に回してはどうかとの議長の提案に全員賛成した。

（４）来月から一年間、札幌の支社に出向せよとの辞令を受けた。

（５）文部大臣は、学校教育を改善するためには、高等教育機関の入学試験制度の抜本的改革が必要だとの見解を述べた。

言語表現や思考の内容を表す節が名詞を修飾しているもので、改まった文体で用いられる。Nには、「手紙、返事、依頼、提案、警告、命令」など言語活動や、「意見、見解、考え、希望」など思考活動にかかわる名詞が用いられる。他の人の発言や考えについて言う場合に用いられ、話し手自身の考えを表す場合は、次の例のように「との」ではなく、「という」が用いられるのが普通である。

(例) 私は夫婦別姓を合法化すべきだという意見をもっている。

【とは】

1 …とは ＜定義づけ＞

（１）パソコンとは、個人で使える小型のコンピューターのことだ。

（２）蓮華とは蓮の花のことだ。

（３）21世紀の日本で求められる福祉の形態とはどのようなものだろうか。

（４）「普遍的」とは、どんな場合にも広く一般的に当てはまるという意味だ。

（５）私にとって家族とは一体何なのだろうか。

名詞を受けて、その意味や性質・内容がどのようなものかを述べる場合に用いる。「とは…ものだ」のような形でその本質的な特徴を述べたり、「…とは…のことだ／意味だ」「…とは…ということだ／意味だ」のような形で、語句の意味や内容について定義づけを行うような場合に用いる。書きことば的な言い方で、話しことばでは「Nというのは」の方が一般的。

2 …とは ＜引用＞

（１）A：森山さん、会社退職するそうですよ。

B：えっ、退職するとは、結婚するということですか。

（２）≪書き置きを見て≫「お世話になりました」とは、もう帰ってこないということだろうか。

（３）A：このお話、なかったことにしてください。

B：「なかったことにする」とはどういうことですか?

（４）親に向かって「バカヤロー」とは何事だ。

相手の発言や書かれた情報などの言語表現を受けて、その真意を確かめたり、それに対する話し手の評価を述べたりする時に用いる。驚き、感嘆、怒りなどの気持ちを伴うことが多い。「とは」は「というのは」で置きかえられることが多いが、(4)の「とは何事だ」のような定型的な言い方では置きかえられない。

3 …とは ＜驚き＞

（１）一人で5種目も優勝とは、まったく驚いた。

（２）全員そろって授業をサボるとはあきれた学生達だ。

（３）人を2時間も待たせておいて「すみません」の一言もないとはまったく非常識な奴だ。

（４）タクシーの中に忘れた現金が、もどってくるとは思いもよらないことでした。

予想外の状況に接した時の驚き、感嘆を表す。くだけた話しことばでは「…なんて」の形もよく使われる。次のように後ろの部分を省略することもある。

(例) あの人がこんな嘘をつくとは。

(例) ベテラン登山家の彼が遭難するとは。

(例) こともあろうに、結婚式の日がこんなひどい土砂降りになろうとは。

【とはいいながら】

1 …とはいいながら

（１）分かっているとはいいながら、やはり別れはつらいものだ。

（２）もう過去のこととはいいながら、なかなかあきらめられない。

節を受けて、「そのことは認めるけれども、しかし」という意味を表す。

2 とはいいながら

（１）過ぎたことは悔やんでも仕方がない。とはいいながら、思い出すとつい涙が出てしまう。

（２）結婚相手を決める場合は、何よりもお互いの相性が大事で

ある。とはいいながら、いざとなると相手の家柄や経済力、容姿などのことが気になる。

前の文を受けて、「そのことは認めるけれども、しかし」という意味を表す。

【とはいうものの】

(1) フランス語は大学時代に習ったとはいうものの、もうすっかり忘れてしまった。

(2) 大学時代は英文学専攻だった。とはいうものの、英語はほとんどしゃべれない。

→【ものの】2、【ものの】3

【とはいえ】

節や文を受け、「それはそうなのだが、しかし」といった意味を表す。前のことがらから予想・期待されることと結果が食い違うような場合に用いられる。書きことば。「とはいいながら」「とはいうものの」「と(は)いっても」に言いかえられる。

1 …とはいえ

[N／Na (だ)とはいえ]

[A／V とはいえ]

(1) 男女平等の世の中とはいえ、職場での地位や仕事の内容などの点でまだ差別が残っている。

(2) 国際化が進んだとはいえ、やはり日本社会には外国人を特別視するという態度が残っている。

節を受けて、「それはそうなのだが、しかし」といった意味を表す。前のことがらから予想・期待されることと結果が食い違うような場合に用いられる。書きことば。「とはいいながら」「とはいうものの」「と(は)いっても」に言いかえられる。

2 とはいえ

(1) 病状は危険な状態を脱して、回復に向かっている。とはいえ、まだ完全に安心するわけにはいかない。

(2) 生徒の非行には家庭環境が強く影響する。とはいえ、学校教育のあり方に責任の一端もある。

前の文を受けて、「それはそうなのだが、しかし」といった意味を表す。前のことがらから予想・期待されることと結果が食い違うような場合に用いられる。書きことば。「とはいいながら」「とはいうものの」「と(は)いっても」に言いかえられる。

【とはいっても】

(1) 初めて小説を書いた。とはいっても、ごく短いものだけれど。

(2) 病気でねこんだとはいっても、風邪をひいただけですよ。

「といっても」と同じ。

→【といっても】1、【といっても】2

【とはうってかわって】

[Nとはうってかわって]

(1) 父は若い時とはうってかわって、とても優しくなった。

(2) 村は昔の姿とはうってかわり、近代的なビルが立ち並んでいる。

(3) 社長はこれまでとはうってかわったように、強硬な態度に出てきた。

「…とはうってかわって／うってかわり／うってかわったように」などの形で、前の状態とまったく別の状態にがらりと変わる様子を表す。次の例のように、「Nとは」なしで、副詞的に使われることもある。

(例) 教室はうってかわったように静まり返っていた。

【とはかぎらない】

[N／Na／A／V とはかぎらない]

(1) 日本語を教えているのは日本人とはかぎらない。

(2) 有名な作家の小説ならどれでもおもしろいとはかぎらない。

(3) スーパーマンだからって、何でもできるとはかぎらないよ。

(4) ここのお料理もいつもおいしいとはかぎらないんですよ。

(5) 完治したからといって再発しないとはかぎらないのだから、気を付けるにこしたことはない。

「…ということがいつも正しいとは言えない」という意味を表す。一般的に正しいと認められることがらについて、例外もあると言うのに使う。

【とばかり】

1 …とばかり

(1) 今がチャンスとばかり、チャンピオンは猛烈な攻撃を開始した。

(2) 横綱はいつでもかかってこいとばかりに身構えた。

(3) もう二度と来るなとばかりに私の目の前でピシャッと戸を閉めた。

(4) 「どうだ、すごいだろう」とばかりに、新しい車を見せびらかしている。

節を受けて「まるで…と言うかのように」という意味を表す。相手がいかにもそのようなことを言いたそうな様子に見えるような場合に用いる。後には勢いや程度が強力だという意味の表現が続く。書きことば的な表現で、「この時とばかりに攻め込む／攻めかかる」「えいっとばかりに切りつける／切りかかる」など慣用的に使われることが多い。

2 …といわんばかり

(1) お前は黙っていろと言わんばかりに、兄は私をにらみつけた。

(2) 警察は、「お前がやったんだろう」と言わんばかりの態度で、男を尋問した。

節を受けて「まるで…とでも言いそうな態度で」という意味を表す。用法は上の1とほぼ同様である。

【とはちがって】

→【とちがって】

【とみえて】

[N／Na (だ)とみえて]

[A／V とみえて]

1 …とみえて

(1) 最近忙しいとみえて、いつ電話しても留守だ。

(2) 夜中に雨が降ったとみえて、水たまりができている。

(3) 何かいいことがあったとみえて、朝からずっとにこにこしている。

(4) 隣の家は留守とみえて、ドアの前に数日分の新聞がたまっている。

現状を理由・根拠に予想されることを述べる言い方。前の節にその予想の部分が来て、後ろの節でその理由・根拠が表される。(2)を例にとって言えば、後ろの「水たまりができている」という現状を根拠に前の「夜中に雨が降ったようだ」という予想を述べる言い方である。後ろの節には、話し手が実際に観察した事実が述べられる。

2 …とみえる

(1) 今日の田中君はやけに気前がいい。何かいいことがあったとみえる。

(2) 合格発表を見に行った妹は、帰ってくるなり部屋に閉じ込もってしまった。どうも不合格だったとみえる。

(3) 学生にパソコンの使い方を説明したが、ほかの人に聞いているところを見ると、一度聞いただけではよくわからなかったとみえる。

(4) 花子は、先生にほめられた絵を会う人ごとに見せている。ほめられたことがよほどうれしかったとみえる。

自分の観察したことがらから推測したことを述べる言い方で、独り言のように用いる。若い人にはあまり使われない。

【とも】

活用語に付いて、「ても」と同様の意味を表す。文語の用法なので「ても」に比べて、古めかしい言い方である。

1 …とも

[A-くとも]

[A-かろうと(も)]

(1) 田中さんの送別会には、少なくとも30人は集まるだろう。

(2) どんなに苦しくとも、最後まで諦めないで頑張るつもりだ。

(3) どんなに辛かろうと、苦しかろうと必ずやり遂げてみせます。

イ形容詞の「-く」、「-かろう」の形に付く。話しことばでは、「-くても」となるのが普通である。(1)は「そのように見積もっても」の意味で数量を見積もる表現が続く。「多くとも10人」「長くとも30分」「遅くとも5時までに」などが同様の用法である。(3)のように、「-かろうと」が2度繰り返される場合は「も」が省略されることが多い。

2 V-ようと(も)

(1) たとえ両親に反対されようと(も)、彼女と結婚するつもりだ。

(2) たとえ失敗しようと(も)、やると決めたことは実行する。

(3) どんな苦労があろうと(も)、二人で助け合って幸せな人生を歩んでゆきたい。

(4) 雨が降ろうと風が吹こうと、練習は決して休まない。

→【よう2】6d

3 …であろうと(も)

[N／Na であろうと(も)]

(1) 病人であろうと年寄りであろうと、何の配慮もなしに、敵は攻撃を仕掛けて来る。

(2) たとえ健康であろうと中年を過ぎたら、定期検診を受けたほうがいい。

(3) 高名な僧侶であろうとも、迷いを断てないこともある。

「N／Naであっても」のやや古めかしい言い方。

→【であろうと】1

【ども$_1$】

[Nども]

(1) 申し訳ありません。私どもの責任です。

(2) 手前どもの店では、この品物は扱っておりません。

(3) ≪けんかのことば≫野郎ども、みんなそろってかかって来い。

(4) 政界は偽善者どもの集まりだ。

主として人を表す名詞に付いて、複数であることを表す。「…たち」と似ているが、一人称についた場合は、謙遜の気持ちを表すため、「私たち」よりも丁寧である。また、「私たち」は聞き手を含む場合と含まない場合があるが、「私ども」は聞き手を含まない意味しかない。(3)(4)のように、一人称以外の人についた場合は、その人を見くだす意味を伴うことが多い。この他に「女ども」「者ども」など。

【ども$_2$】

[V-ども]

(1) 行けども行けども、原野は続く。

(2) 声はすれども、姿は見えず。

(3) 振り向いて見れど、そこにはだれもいなかった。

動詞のバ形の「バ」を除いた形に付いて、「V-ても」「Vけれども」という意味を表す。例えば(1)は「行っても行っても」(2)は「声はするけれども」という意味。(1)(2)は慣用表現で、(3)は文

語表現である。このような特殊な用法や、「といえども」などの形で用いられる場合を除いては、あまり使われない。

【ともあろうものが】

［Nともあろうものが］

（1）大蔵官僚ともあろうものが、賄賂を受け取るとは驚いた。
（2）警察官ともあろうものが、強盗をはたらくとは何ということだろう。
（3）母親ともあろうものが、生まれた自分の子供をゴミ箱に捨てるとは、まったく恐ろしい話だ。

「それほどの人が」という意味。社会的地位・役割や職業を表す名詞を受けて、常識的に考えて、そのような役割の人物が行うべきではない行為を行ったことを述べる場合に用いる。驚きや怒り、不信感を伴う表現が続く。「もの」の部分に「人／人物」など人を表すことばが用いられることもある。

（例）国会議員ともあろう人物がこのような巨額の脱税を平気で行うのだから、議員のモラルも低下したものである。

【ともいうべき】

→【とでもいうべき】

【ともかぎらない】

［N/Na　ともかぎらない］
［Aともかぎらない］
［V-ないともかぎらない］

（1）A：司会者を探してるんだけど、山下さん結婚式の司会なんか、引き受けてくれないよね?
　　B：一度聞いてみたら?引き受けてくれないとも限らないよ。
（2）山田は来ないと言っていたが、気まぐれな彼のことだから、ふらりと現れないともかぎらない。
（3）病院は慎重に選んだ方がいい。へたな医者にかかっては、命を落とさないともかぎらない。
（4）教師の言うことが正しいとは限らないし、本に書いてあることが、正しいとも限らない。

「…とは決まっておらず、それとは逆の可能性もある」という意味。多くは、「V-ないともかぎらない」の形で使われて、可能性が低いと考えられる状況で、あえて可能性があることを述べる表現。似た表現に「とはかぎらない」がある。

【ともかく】

1　Nはともかく（として）

（1）見かけはともかく味はよい。
（2）学歴はともかく、人柄にやや難点がある。
（3）奥さんはともかくとして、ご主人はとてもいい人だ。

（4）細かい点はともかく全体的に見れば、うまく行ったと言えるのではなかろうか。
（5）勝敗はともかくとして、一生懸命頑張ろう。

「それは議論の対象からはずして」という意味を表す。それよりも大事なこととして後のことがらを優先させて述べる場合に用いる。「Nはとにかく（として）」とも言う。

2　ともかくV

（1）雨で中止になるかもしれないが、ともかく行ってみよう。
（2）ともかく、言われたことだけはやっておきました。
（3）ともかく使ってみないことにはいい製品かどうかは分からない。
（4）ともかくお医者さんに見てもらった方がよい。

意志的な行為を表す動詞を伴い、いろいろ議論するよりも、まずは実行するという意味を表す。「とにかく」とも言う。

【ともすると】

（1）ベテラン教師でもともするといい子ばかりに目がいってしまう。
（2）この学生は時間にルーズで、ともすると授業に1時間も平気で遅れて来る。
（3）夏は、ともすると睡眠不足になりがちである。
（4）核兵器は、ともすると人類の破滅を引き起こしかねない危険性をはらんでいる。

何かのきっかけでそういうことが起こりやすいという意味を表す。望ましくない事態が起こるような場合が多く「…がちだ」「…かねない」などといっしょに使われることが多い。「ともすれば」とも言う。

【ともなう】

→【にともなって】

【ともなく】

1　疑問詞＋（助詞）＋ともなく

（1）どこからともなく、沈丁花のいい香りが漂ってくる。
（2）明くる朝、旅人はどこへともなく立ち去って行った。
（3）誰からともなく拍手が起こり、やがて会場は拍手喝采の渦に包まれた。
（4）生徒達は夜遅くまで騒いでいたが、いつともなくそれぞれの部屋に戻っていった。
（5）二人は、どちらからともなく走り寄り固く抱きあった。

「どこ、いつ、だれ、どちら」などの疑問詞を受けて、場所、時間、人物、物などの、「どの部分かは特定はできないが」という意味を表す。助詞が用いられる場合は、疑問詞の直後に付く。

2　V-るともなく

（1）どこを眺めるともなく、ぼんやり

遠くを見つめている。

（2）老人は誰に言うともなく「もう秋か」とつぶやいた。

（3）何を考えるともなく、一日中物思いにふけっていた。

「見る、話す、言う、考える」のような、人間の意志的な行為を表す動詞を受けて、その動作がはっきりした意図や目的なしに行われている様子を表す。その前に「何、どこ」などの疑問詞を伴うことが多い。

【ともなって】

→【にともない】、【にともなって】

【ともなると】

［N／V　ともなると］

（1）いつもは早起きの息子だが、日曜日ともなると、昼頃まで寝ている。

（2）主婦ともなると、独身時代のような自由な時間はなくなる。

（3）子供を留学させるともなると、相当の出費を覚悟しなければならない。

→【ともなれば】

【ともなれば】

［Nともなれば］

［Vともなれば］

（1）9月ともなれば、真夏の暑さはなくなり過ごしやすくなる。

（2）子供も10歳ともなればもう少し物分かりがよくてもいいはずだ。

（3）結婚式ともなればジーパンではまずいだろう。

（4）主婦ともなれば朝寝坊してはいられない。

（5）学長に就任するともなれば、今までのようにのんびり研究に打ち込んではいられなくなる。

時間や年齢、役割、出来事などの名詞や動詞を受けて、状況が「このようなものに至った場合は」という意味を表す。後ろには、状況が変化すればそれに応じて当然そうなるはずだといった判断を表す表現が続く。「ともなると」とも言う。

【ともに】

→【とともに】

【ともよい】

→【なくともよい】

【とやら】

1 Nとやら

（1）例の啓子さんとやらとは、うまくいっていますか。

（2）娘が「ムサカ」とやらいうギリシャ料理を作ってくれました。

「…とかいう」という意味で、正確には覚えていない呼び名などの後につけて用

いる。（1）は「とやら」に直接に助詞がついたものだが、これは「とやらいう人」の「いう人」の部分が省略されたものと考えられる。

2 …とやら

（1）私の答案を見て、先生がびっくりした顔をしていたとやら。

（2）結局あの二人は結婚して、田舎で仲良く暮らしているとやら。

人から伝え聞いたことがらの後に付いて、「正確にではないがそのように聞いている」という意味を表す。「…とか聞いている」「とのことだ」「そうだ」などと類義の意味をもつが、「とやら」は話し手の記憶が曖昧で、あまり正確な引用ではないという意味が強い。日常の話しことばではほとんど用いられない。

【とりわけ】

（1）兄弟は3人とも頭がよいが、次男はとりわけ優秀だ。

（2）暖冬の影響か、今年の春はとりわけ桜の開花が早い。

（3）今回の不況はこれまでの中でもとりわけ深刻だ。

（4）どの学科もあまり成績がよくないが、とりわけ国語がひどい。

どれを見ても平均的ではないが、他のものと比べて特別に際立っているものを取り立てて言う場合に用いる。プラス評価・マイナス評価のどちらにも使用できる。「特に、ことに、ことのほか」などと言いかえられる。

【とわず】

→【をとわず】

【とんだ】

［とんだN］

（1）あなたが邪魔したなどと、とんだ思い違いをしていました。

（2）A：通勤の途中で、事故に遭ってしまったんですよ。
　　B：それはとんだ災難でしたね。

（3）親にかくれてたばこを吸うとは、とんだ不良娘だ。

（4）もし1分でも気が付くのが遅れていたら、とんだ大事故になっていたかもしれない。

（5）とんだ野郎に見込まれてしまったものだ。

（6）委員会の議長に選ばれるとは、とんだことになってしまった。

ことがらや人を表す名詞の前に付いて、それが予想外のものだという意味を表す。「ひどい」「驚きあきれた」「困った」「大変な」といった意味で、マイナス評価を表すことが多く、期待に反した結果や、常識を欠いた人物に対して用いられる。ただし、（5）のような場合は「常識やぶりの面白い人物」といった意味の親しみをこめたプラス評価でもありうる。

【とんでもない】

1 とんでもないN

（1）子供は時々とんでもない質問をして親を困らせることがある。

（2）明け方の4時などという、とんでもない時間に電話がかかってきてびっくりした。

（3）海中に都市を作るとは、とんでもない計画だ。

「まったく思いがけない」「意外だ」「常識では考えられない」という意味を表す。「とんだ」に比べて、マイナス評価の意味が薄い。

2 とんでもない

（1）A：ずいぶん景気がよさそうですね。
　　B：とんでもない。借金だらけで首が回りませんよ。

（2）先生：そのかばん、持ってあげましょう。
　　学生：先生に荷物を持っていただくなんてとんでもないです。

（3）A：この度は本当にお世話になりました。
　　B：とんでもございません。こちらこそいろいろご迷惑をおかけいたしまして……。

会話で相手の発言を「そんなことはない」と強く否定する場合に用いる。（2）（3）のように、相手からの親切な申し出や感謝のことばを否定する場合は、丁寧な遠慮の気持ちの表現になる。「とんでもありません／ございません」はその丁寧な形。

【どんな】

［どんなN＋助詞＋も］

（1）母は、どんなことでもやさしく聞いてくれる。

（2）どんな状況においても対応できる準備ができている。

（3）どんな人間にも、幸福に生きて行く権利がある。

（4）彼女は、どんな人からも好かれる女性です。

（5）教師は、どんな学生に対してもわけへだてなく付き合う必要がある。

（6）彼はどんなことにも興味をもつ人間だ。

名詞の表すものがどのようなものであっても、あらゆる場合に後続のことがらが成立することを表す。

【どんなに】

1 どんなに…だろう（か）

（1）希望校に合格できたら、どんなにいいだろうか。

（2）息子の戦死を知ったら、両親はどんなに悲しむことでしょう。

（3）父が生きていたら、どんなに喜んでくれたことだろうか。

（4）子供が無事だと分かった時、私はどんなにうれしかっただろう。

（5）私はこの日がくることをどんなに望んだことだろう。

喜びや悲しみ、希望などの表現を伴いその程度が普通の程度をはるかに越えていることを詠嘆をこめて述べる言い方。（1）～（3）は「もし…だったら、きっと大変…する／しただろう」のように、現実には実現されていないことを推量して言う言い方であるのに対し、（4）（5）は現実に「大変うれしかった／強く望んだ」ことを表す。

2 どんなに…ても

（1）どんなに金持ちでも愛情に恵まれなければ幸福とは言えない。

（2）たとえどんなに苦しくても最後まで頑張ります。

（3）どんなに働いても暮らしはちっとも楽にならない。

どのような程度・レベルの条件であっても、後続の事態がそれに影響をうけないで成立する（否定形の場合は成立しない）ことを表す。「たとえ」が直前に付くこともある。「いかに／いくら…ても」に言いかえられる。

【ないか】

「…ないか」は主として男性が使う。丁寧な言い方の「…ませんか」や「か」を省略した「…ない?」は男女ともに使う。

1 V-ない（か）＜勧誘＞

（1）ちょっと、食べてみない?

（2）今度、いっしょにスキーに行かないか。

（3）そろそろお茶にしませんか。

（4）ちょっと寄っていきません?

意志的な行為を表す動詞に付いて、相手に行動を勧めたり、いっしょに行動しようと誘う表現。丁寧形は「V-ませんか」となる。普通、上昇調で発音され、「か」は省略されることもある。

2 V-てくれない（か）＜依頼＞

（1）お塩、とってくれない?

（2）ちょっと手伝ってくれませんか。

（3）この本、2、3日貸してもらえない?

（4）5時までにおいでくださいませんか。

（5）明日もう一度ご来店いただけないでしょうか。

「V-てくれないか／もらえないか」などの形で、相手に対する依頼を表す。「V-てくださいませんか／いただけませんか／いただけませんでしょうか」や、（4）（5）のように「お／ご…くださいませんか」「お／ご…いただけないでしょうか」などの形にするとさらに丁寧な表現になる。

「もらう／いただく」の場合は「V-てもらえないか／いただけないか」のように、可能を表す「もらえる」「いただける」

の否定形を使うという点に注意すること。また敬語の「おいでになる」や漢語動詞「来店する」などに「いただく／くださる」が付く場合は「になって」や「して」を省略して「おいでいただけませんか／くださいませんか」「ご来店いただけませんか／くださいませんか」のような形になるのが普通である。

上昇調で発音されることが多く、「か」が省略されることもある。丁寧な言い方では、次のように「...願えないか」という表現に言いかえることもできる。

(例) もう一度ご来店願えないでしょうか。

3 V-ないか ＜命令＞

(1) おい待たないか。

(2) だまらないか。

(3) いい加減でやめないか。

(4) 早く起きないか。

(5) さっさと出かけないか。

行動を起こさない相手に対して、すぐに行動を起こすように命令する表現。例えば(1)は「待て」、(2)は「だまれ」の意味。

これらは「待て」「だまれ」という命令形の表現に似ているが、相手がなかなか行動を起こさない状況で用いられるため、話し手のいらだちや怒りが感じられることが多い。下降の詰問調で発音され、丁寧形にはならない。男性が用いる。

4 ...ない(か) ＜確認＞

[N／Na　ではないか]

[A-くないか]

[V-ないか]

(1) A：彼が犯人じゃないですか。

B：そうかな。

(2) A：子供には無理じゃないですか。

B：大丈夫ですよ。

(3) A：君にはちょっと難しくない?

B：ええ、でもやってみます。

(4) A：この部屋、変な匂いがしない?

B：うん、なんだかちょっと。

(5) A：ちょっと駅から遠すぎませんか。

B：そうですか。歩いて 15 分ぐらいですけど。

(6) 彼の様子、ちょっと変だと思いませんか。

話し手の考えが正しいかどうかを聞き手に確認する場合に用いる。「Xじゃないか」などと打ち消しの形を取っているが、確認の内容は「Xである」という肯定のことがらである。聞き手も同意見の場合は「はい／うん、そうだ」、違う意見の場合は、「いいえ／いや、そうではない」のような形で答える。なお、すでに起こったと思われることについて確認する場合は、次のように、タ形をとる。

(例) A：何か物音がしなかったか。

B：いや、僕には何も聞こえなかったけど。

(例) A：私に電話かかって来ませんでしたか。

B：いいえ。

5 ...ない(か) ＜控えめな主張＞

[N／Na　ではないか]

[A-くないか]

[V-ないか]

(1) 彼が、東大に合格したなんて、何かの間違いではないか。

(2) 最近の彼の言動はちょっと変じゃないか。

(3) このスープ、ちょっと、塩味が薄くない?

(4) やめといたほうがよくないか。

(5) そんなに働いたら病気にならないか。

自分の意見を控えめに主張する場合の表現で、「そうではないかと思う」といった気持ちで、やや疑う余地を残し非断定的に述べるのに用いる。(5)のように、心配・懸念の気持ちを含むことも多い。

「(の)ではないか」「(の)ではないだろうか／(の)ではなかろうか／(の)ではあるまいか」や「ないかしら／ないかな」のような推量や疑念を含む表現で言いかえられることが多い。過去のことについて言う場合は次のように「(では)なかったたか」の形をとる。

(例) 昨日見かけた人、山田さんの奥さんじゃなかったか。

話しことばでは、名詞やナ形容詞につく場合、「じゃないか」になるのが普通。

6 ...じゃないか →【じゃないか$_1$】、【じゃないか$_2$】

7 ...ではないか →【ではないか$_1$】、【ではないか$_2$】

【ないかしら】

活用語の否定形に話し手の不確かな気持ちを表す「かしら」がついたもので、自問と相手への質問のどちらにも用いられる。女性ことばだが、現在はあまり用いられず、代わりに「ないかな」を用いる。

1 ...ないかしら ＜願望＞

[V-ない／V-れない　かしら]

[V-てくれないかしら]

(1) また、あの人から手紙が来ないかしら。

(2) お金持ちと結婚できないかしら。

(3) バス、すぐに来てくれないかしら。

(4) ちょっと手伝ってくれないかしら。

動作を表す動詞の否定形、可能を表す「V-れる」の否定形や「V-てくれない」に付いて、話し手の希望・願望を表す。(4)は直接聞き手に向かって言うような場合は依頼表現にもなる。

2 ...ないかしら ＜推測・懸念＞

[N／Na　ではないかしら]

[A-くないかしら]

[V-ないかしら]

(1) 向こうからくる人、鈴木さんじゃないかしら。

(2) この着物、私にはちょっと派手じゃないかしら。

(3) このご飯、ちょっとかたくないか

しら。

(4) あんなに乱暴に扱ったらこわれないかしら。

述語の否定形に付いて、十分に確信はないが「ひょっとするとそうかもしれない」といった推測や「そんな気がする／心配がある」といった懸念・心配な気持ちを表す。独り言の場合は話し手の自問を表すが、聞き手に向かって使う場合は「そう思いませんか」と相手の判断を問う表現になる。

【ないかな】

活用語の否定形に話し手の不確かな気持ちを表す「かな」がついたもの。自問と相手への質問のどちらにも用いられる。「かしら」とは異なり男女どちらでも使用できるが、丁寧な言い方ではないので、直接聞き手に対して質問するような場合は親しい間柄に限られる。

1 …かな(あ) <願望>

[V-ない／V-れない　かなあ]

[V-てくれないかなあ]

(1) 早く夏休みにならないかなあ。

(2) 今夜いい夢が見られないかな。

(3) 息子が一流大学に入ってくれないかな。

動作や変化や存在を表す動詞や可能を表す「V-れる」の否定形を受けて、「そうだといい」「そうなってほしい」という話し手の希望・願望を表す。

2 …かな(あ) <推測・懸念>

[N／Na　ではないかなあ]

[A-くないかなあ]

[V-ないかなあ]

(1) あの人、森田さんの奥さんじゃないかな。

(2) 彼だったら大丈夫じゃないかな。

(3) こっちのほうが、よくないか。

(4) 子供にはちょっと難しすぎないかな。

(5) この靴、ちょっと小さくないかな。

(6) あんなことを言って、彼女怒っていないかな。

述語の否定形に付いて、十分に確信はないが「ひょっとするとそうかもしれない」という推測や、「そんな心配がある／そんな気がする」という懸念・心配の気持ちを表す。独り言の場合は自問の表現になるが、相手がいる場合には、「そう思いませんか」と相手の判断を問う表現になる。

【ないことはない】

[V-ないことはない]

(1) A：とても明日までには終わりそうにないんですけど…。
B：いや、やる気があればできないことはありませんよ。

(2) A：彼女は来ないんじゃないか。
B：来ないことはないと思うよ。遅れても必ず来ると言っていたから。

(3) A：1週間でできますか。
B：できないことはないですが、かなり頑張らないと難しいですね。

(4) A：行きたくないの?
B：行きたくないことはないけど、あまり気がすすまないんだ。

相手の発言を受けて、「そのようなことは全くない」と全面的に否定したり、「一面ではそうだが100パーセントそうだというわけではない」といった断定を保留して言うような場合に用いる。(1)(2)が前者の例で、(3)(4)が後者の例である。

それぞれの例で説明すれば、(1)はAの「できません」という否定的な発言を受けて、Bは「できないということはない」つまり「できる」ということを言っている。これに対して(3)は「できるが必ずというわけではない」つまり「できないということもある」ということを意味している。

後者の用法は「ないこともない」との言いかえが可能だが、前者の用法ではそれが不可能である。

【ないこともない】

[V-ないこともない]

(1) よく考えてみれば、彼の言うことももっともだと思えないこともない。

(2) 言われてみれば、確かにあのときの彼は様子がおかしかったという気がしないこともない。

(3) この会社は社長一人の意見で動いていると言えないこともない。

二重の否定表現が用いられ「そのような面がある／可能性がある」といった肯定的な意味を表す。全面的にそうだというわけではないが、そのように言える面があるといった、断定を保留する気持ちを表すような場合に用いられる。「言えなくもない」「気がしなくもない」のような形がよく用いられる。

【ないで】

動詞の否定形がテ形の形をとったもので、後に続く動作や状態がどんな様子・状況・事情のもとに成立するかを表す。

1 V-ないで <付帯状況>

(1) 息子は今朝もご飯を食べないで出かけた。

(2) 彼女は一生結婚しないで独身を通した。

(3) 傘を持たないで出かけて雨に降られてしまった。

(4) 予約しないで行ったら、満席で入れなかった。

(5) 歯を磨かないで寝てはいけません。

後ろに動詞の文を伴って、「…しない状態で…する」という意味を表す。書きことばでは「…ずに」も使われる。「…なく

て」に言いかえることはできない。

2 V-ないで ＜代わりに＞

(1) 親が来ないで子供が来た。

(2) ロンドンには行かないで、パリとローマに行った。

(3) 運動してもちっともやせないで、かえって体重が少し増えた。

(4) 頑張っているのに、成績はちっともよくならないで、むしろ下がってきている。

「…ではなく、代わりに別のことを行う／別のことが起こる」という意味で、二つのことがらを対比的に述べる表現。後に続くことがらは予想・期待に反した結果だという意味を含む場合が多い。書きことばでは「…ずに」も使われる。

「なくて」で置きかえられないこともないが、「なくて」の場合は「代わりに」という対比的な意味がなく、二つのことがらが前後して成立したという別の意味になる。したがって、対比的な意味を表したい場合には、「ないで」を使わなければならない。

3 V-ないで ＜原因＞

(1) 子供がちっとも勉強しないで困っています。

(2) やつが来ないで助かった。

(3) 試験にパスできないでがっかりした。

(4) 朝起きられないで授業に遅れた。

(5) 大事故にならないでよかった。

「…しないことが原因で」という意味を表す。後に続く表現には、(1)(2)のように「困った」「助かった」などの感情や評価を表す表現や、(4)のように、時間的な前後関係が認められることがらのことが多い。この用法では、比較的自由に「なくて」との置きかえができる。

【ないである】

[V-ないである]

(1) 手紙は書いたけれど、出さないである。

(2) 頂き物のメロンがまだ手をつけないであるから、召し上がれ。

(3) このことはまだ誰にも知らせないである。

「…しないままの状態においてある」という意味で、人が意識的に行わない状態を続けるような場合の表現。「手紙はもう出してある」のような、「他動詞＋てある」の他動詞が否定形をとったものである。「…(せ)ずにある」の方が普通の言い方。

【ないでいる】

[V-ないでいる]

(1) 昨日から何も食べないでいる。

(2) このことは夫にも話さないでいる。

(3) 雨の日曜日は部屋から一歩も出ないでいた。

(4) 祖母は自分一人では起き上がることもできないでいる。

「…しない(できない)ままの状態でいる」という意味を表す。「…(せ)ずにいる」とも言える。主語にたつのは、感情や意志を持つ人や動物といったものに限られるため、次のような表現には使えない。

(誤) 雨が降らないでいる。

【ないでおく】

[V-ないでおく]

(1) 時間がないので昼ご飯は食べないでおこう。

(2) 十分に残っているので、まだ注文しないでおいた。

(3) 他人がさわると分からなくなると思ったので、机の上は掃除しないでおきました。

何らかの理由・目的があって、意図的に「…しないままでおく」という表現。「…せずにおく」とも言える。

【ないでくれ】

(1) 危険なことはしないでくれよ。

(2) ここではたばこを吸わないでくれ。

→【てくれ】2

【ないですむ】

[V-ないですむ]

(1) 道がすいていたので、遅刻しないですんだ。

(2) 電話で話がついたので、行かないですんだ。

「予定していたことをしなくてもよくなる」「予測されることが避けられる」という意味。好ましくない事態が避けられることを表す。

【ないではいられない】

[V-ないではいられない]

(1) こんな悲しい話を聞いたら、泣かないではいられない。

(2) 言わないほうがよいことは分かっているが、話さないではいられなかった。

(3) あの映画を見たら、誰だって感動しないではいられないだろう。

(4) 子供のことでは、日々悩まされないではいられない。

動詞の否定形に続いて、意志の力では押さえることができないで自然にそうしてしまうという意味を表す。「泣く」「思う」「感動する」など、人間の行為や思考・感情の動きを表す動詞が用いられる。話し手がそれを「もっともだ」ととらえている含みがある。書きことばでは「…せずにはいられない」ともなる。

【ないではおかない】

[V-ないではおかない]

(1) この作品は、読む者の胸を打たないではおかないだろう。

(2) 彼女の言動は、どこか私を苛

立たせないではおかないものがある。

（3）彼女とのこと、白状させないではおかないぞ。

他動詞の否定形や自動詞の使役「V-させる」の否定形に続いて、外部からの強い力によって、本人の意志にはかかわらずそのような状態や行動が引き起こされるという意味を表す。本来、書きことばの表現なので、「せずにはおかない」の形をとるほうが一般的である。

【ないではすまない】

[V-ないではすまない]

（1）知り合いに借りたキャンプ用のテントをひどく破ってしまった。新しいのを買って返さないではすまないだろう。

（2）こんなひどいことをしたんでは、お母さんにしかられないではすまないよ。

（3）罪もない人々に、このような過酷な運命を強いてしまった。いつの日にか、その報いを受けないではすまないであろう。

動詞の否定形に付いて、その行為をしないでそのままにしておくことはできないという意味を表す。例えば（1）は破れたまま返すわけにはいかないから買って返さなければならないの意。マイナスの評価の事態を表すのが普通。かたい表現。

【ないでもない】

動詞の否定形や形容詞「ない」を受けて、そのようなことが全くないわけではなく、それが存在したり成立することもあるという意味を表す。「…ないこともない」「…なくもない」とも言う。

1 V-ないでもない

（1）A：納豆はお好きですか。
　　B：食べないでもないですが、あまり好きじゃありません。

（2）A：ねえ、行きましょうよ。
　　B：そんなに言うなら行かないでもないけど。

（3）自分にも悪い点があったことは認めないでもない。

（4）考えてみれば、彼の意見ももっともだという気がしないでもない。

動詞の否定形を受け、そのような行為、認識が成立することもあるという意味を表す。「言う、考える、思う、認める、感じる、気がする」など思考や知覚にかかわる動詞が用いられた場合は、「何となくそんな気がする」といった意味を表す。

2 Nがないでもない

（1）時には、一人になりたいと思うことがないでもない。

（2）娘は、見合いで結婚するつもりがないでもないらしい。

（3）海外旅行をしたい気もないではないが、なかなかその時間

がとれない。

主として意志や気持ちを表す名詞を受けて、そのような気持ちがまったくないわけではないという意味を表す。「名詞＋も」が先にある場合は、（3）のように「Nもないではない」の形が使われることもある。

【ないでもよい】

[V-ないで(も)よい]

（1）この欄には何も書かないでもよい。

（2）明日は来ないでいいですか。

（3）そんなことは言わないでもいいじゃありませんか。

「V-なくてもいい」と類義の用法で、「する必要がない」という意味を表す。「も」が落ちて「ないでいい」が用いられることもある。話しことばでは「なくてもいい」のほうがよく使われる。古めかしい言い方では「-ずともよい」（例:行かずともよい）のような言い方もある。

【ないと】

[N／Na　でないと]

[A-くないと]

[V-ないと]

1 …ないと＋マイナス評価の内容

（1）急がないと遅刻するよ。

（2）勉強しないと怒られます。

（3）注意しないと病気になるぞ。

（4）東大合格はもう少し成績が良くないとむずかしいだろう。

（5）早く来てくれないと困るよ。

文末に「遅刻する」「むずかしい」などのマイナス評価の内容を表す表現を伴って、あることがらが成立しない場合には好ましくない事態が起こるという意味を表す。「…ないと」の部分で述べたことがらを促したり、そうしたほうがいいと忠告を与えたりする場合に使うことが多い。

2 …ないと…ない

（1）平均70点以上でないと合格できない。

（2）世の中の動きに敏感でないと、すぐれた政治家にはなれない。

（3）背が高くないとファッションモデルにはなれない。

（4）食べないと大きくなれないよ。

（5）早く出ないと間に合いませんよ。

（6）気温が高くないとうまく発酵しない。

文末に動詞の否定形を用いて、あることがらが成立しない場合には別のことがらが成立しないという意味を表す。「なくては…ない」「なければ…ない」とも言うが、それらよりも話しことば的。

3 …ないと　いけない／だめだ

（1）風邪を防ぐには十分な休養を取らないといけません。

（2）レッスンを休むときは、絶対連絡しないといけないよ。

（3）映画はまずおもしろくないとい

けない。ほかの点は二の次だ。

（４）こういう仕事は若い人でないとだめだ。山田君にやってもらおう。

「…であることが必要だ／不可欠だ／義務だ」という意味を表す。次のように後ろの節を省略することもある。

（例）車はやっぱり頑丈でないとね。

「なくてはいけない」「なければいけない」とも言うが、それらよりも話しことば的。「なくてはならない」「なければならない」という言い方はあるが、「ないとならない」の形はない。

（誤）早く行かないとならない。

（正）早く行かなければならない。

→【なければ】2

【ないといい】

[N／Na　でないといい]
[A-くないといい]
[V-ないといい]

（１）あそこの奥さん、もうちょっとおしゃべりでないといいんだけど。

（２）新しく配置される部局の仕事、あまり大変でないといいのだが。

（３）これほど毎日忙しくないといいのだが。

（４）この世に試験なんかないといいのになあ。

（５）雨にならないといいが。

述語の否定形を受け、そうでないことを望む気持ちを表す。すでに実現していたり起こる危険や心配があるような場合に使われることが多い。言い切らずに「いいのに／が／けれど」などで終わる言い方が自然である。「なければいい」とも言う。

【ないともかぎらない】

（１）今日は父の命日だから、誰かが突然訪ねてこないともかぎらない。

（２）鍵を直しておかないと、また泥棒に入られないともかぎらない。

（３）間違えないとも限らないので、もう一度確認した方がいい。

（４）事故じゃないとも限らないし、ちょっと電話を入れてみた方がいいかもしれない。

「…ということは100％確実なことではない」という意味を表す。何も起こるはずがないと思って安心していないで、何か対策を立てた方がいいということを言うのに使うことが多い。否定の表現に付くのが普通だが、次の「いつ死ぬともかぎらない」は例外的に肯定表現に付く慣用句で、「いつ死ぬかはわからない」の意味。

（例）人間いつ死ぬともかぎらないのだから、やりたいことはやりたい時にやった方がいい。

【ないまでも】

[V-ないまでも]

（１）毎日とは言わないまでも、週に２、３度は掃除をしようと思う。

（２）絶対とは言えないまでも、成功する確率はかなり高いと思います。

（３）予習はしないまでも、せめて授業には出て来なさい。

（４）授業を休むのなら、直接教師に連絡しないまでも、友達に伝言を頼むか何かすべきだと思う。

動詞の否定形を受けて、「そこまでの程度でなくても、せめてこのぐらいは」という意味を表す。前の節に、量や重要性において程度の高いことがらが提示され、後の節にはそれより低い程度のことがらが続く。（１）（２）のように、「…とは言わない／言えないまでも」の形もよく使われ、「そこまでとは言わない／言えないが、少なくともこの程度のことは」という意味を表す。文末には「すべきだ」「…た方がよい」などの義務や、意志・命令・希望などの表現が用いられる。文語的なかたい表現に「V-ぬまでも」がある。

【ないものか】

[V-ないもの(だろう)か]
[V-れないもの(だろう)か]

（１）この混雑は何とかならないものか。

（２）この橋が早く完成しないものか。

（３）この状況をどうにかして打開できないものか。

（４）私の力でこの人たちを助けてあげられないものだろうか。

動詞の否定形、可能を表す「V-れる」の否定形に付いて、「それを何とか成立させたい」という動作や変化の実現を強く望む話し手の気持ちを表す。実現がなかなか難しい状況で用いられることが多い。（４）のように「…ないものだろうか」となることもある。

【なお】

1 なお ＜程度＞

（１）あなたが来てくれれば、なお都合がよい。

（２）薬を飲んだのに、病状はなお悪化した。

（３）祖父は老いてもなお精力的に仕事を続けている。

（４）退院するまでには、なお１週間ぐらい必要だ。

（５）反対されると、なおやってみたくなる。

他の同類のものと比べて、「一層」「もっと」「さらに」「そのうえ」のように、それより程度が上だという意味や、「まだ」「相変わらず」「今もなお」のように、依然として同じ状態が続いているという意味を表す。（５）のように、前後が対立的な意味をもつ場合は「かえって」に近い意味になる。

2 なお ＜但し書き＞

(1) 入学希望者は期日までに、入学金を納入してください。なお、いったん納入された入学金は、いかなる場合にもお返しできませんので、ご了承ください。
(2) 毎月の第三水曜日を定例会議の日とします。なお、詳しい時間などは、1週間前までに文書でお知らせすることにします。
(3) 参加希望者は葉書で申し込んでください。なお、希望者多数の場合は、先着順とさせていただきます。
(4) 明日は、2、3年生の授業は休講になります。なお、4年生のみが対象の授業は、通常どおり行いますので注意してください。

これまでの話題をいったん打ち切って、それに関する但し書きや、補足説明、例外や特例を追加したり、前文とは直接的に関係のない別の話題を追加するような場合に用いる。(4)のように、前文から受ける予想からはずれるようなことがらを追加するような場合は「ただし」に近い意味をもつ。掲示やお知らせ、論文の注など、話しことばよりも書かれた文章中で用いられることが多い。

【なおす】

1 R-なおす <意志的>

(1) 出版の際に、論文の一部を書き直した。
(2) 俳優がセリフを間違えたため、同じ場面を3度も撮り直さなければならなかった。
(3) 答案をもう一度見直してください。
(4) 顔を洗って出直して来い。
(5) 一度はこの大学をやめようと思ったが、思い直して卒業まで頑張ることにした。

意志的な行為を表す動詞の連用形に付いて、一度行った行為をもう一度行うという意味を表す。前の行為の結果が好ましくないので、それを修正する目的でやり直すような場合が多い。「出る」のような例を除いて、ほとんどの場合他動詞に付く。その他の例は「言い直す、考え直す、し直す、立て直す、建て直す、作り直す、練り直す、飲み直す、焼き直す、やり直す」など。

2 R-なおす <無意志的>

(1) 今年になって、景気が持ち直した。
(2) 病人はだいぶ持ち直した。
(3) 勇敢な態度を見て、彼にほれ直した。
(4) 部長のことを見直した。

人間の意志に関わらないことがらを表す無意志的な動詞の連用形に付いて、自然によい方向に向かうという意味を表す。「持ち直す」は景気や病状が回復する

るという意味。(3)(4)は新たによい点を認め再評価するといった意味を表す。前に来る動詞は例に挙げたようなもの限られており、いずれの場合にも、「直す」に話し手の意図的な修正の意味がない点で1の用法とは区別される。他の例としては「気を取り直す」がある。

【なか】

1 Nのなか

(1) 部屋の中にはだれがいるの。
(2) 他人の心の中は外からは見えない。
(3) 箱の中からバネ仕掛けの人形が飛び出した。

空間的な範囲の内部という意味を表す。

2 Nのなかで

(1) 3人兄弟の中では、次男が一番優秀だ。
(2) ワインとビールと日本酒の中で、ワインが一番好きだ。
(3) この中で一番背が高い人はだれですか。

三つ以上のものを比較する場合の範囲を示すような場合に用いる。(2)のように「NとNとNの中で」とその候補を列挙する場合もある。

3 …なかを

[Nのなかを]
[A-いなかを]
[V-るなかを]

(1) 激しい雨の中をさまよった。
(2) 雪が降る中を5時間もさまよい続けた。
(3) お忙しい中をご苦労様です。
(4) 本日はお足元の悪い中をわざわざお出でいただき、まことに有り難うございます。

「…中を」の形で、後の動作が行われる状況を表す。後半には「歩く」「さまよう」「来る」など、移動を伴う動作の表現が来る。本来「場所を移動する」の意味を持つため、1の<空間的な範囲>と連続的である。(3)は「お忙しい中を(お出でくださり)」の( )の部分が省略されたもの。(3)(4)は「ところ」で言いかえられる。

【ながす】

[R-ながす]

(1) このレポートは、何の調査もせずに、思いついたことを適当に書き流しているだけだ。
(2) 彼が着物を軽く着流した姿は、なかなか粋である。
(3) ざっと読み流しただけですが、なかなか面白い本ですよ。
(4) 彼のいうことは聞き流しておいてください。
(5) 老政治家は検察の執拗な追及も軽く受け流している。

動詞の連用形を受けて、その動作をあまり力まずに、気楽に行うという意味を表す。相手からの働きかけの動作の場合は、それをまともには受け止めないで、は

ぐらかしたり、そらすといった意味を表す。(2)の「着流す」ははかまをつけずに着る着物のふだんの着方のこと。名詞の「着流し」の形で用いられることが多い。

【ながら】

1 R-ながら <同時>

(1) 音楽を聴きながら、勉強や仕事をする人のことを「ながら族」という。

(2) その辺でお茶でも飲みながら話しましょう。

(3) 母は鼻歌を歌いながら夕飯の用意をしている。

(4) よそ見をしながら運転するのは危険です。

(5) 飛行機は黒煙をあげながら真っ逆さまに墜落していった。

(6) 液体はぶくぶくとガスを発生させながら発酵を続けている。

前後の動作を表す動詞をつないで、同時並行的に進行する二つの動作を表す。この場合、後の動作が主な動作で、前の動作はその動作を行う際の様子などを描写する副次的な動作を表す。(1)の例で言えば、「勉強や仕事をする」のが主な動作で、それを「音楽を聞く」動作を伴いながら行うということである。次の文は電車に乗り込む動作と本を読む動作が同時に行われたことになり、電車の中で本を読んだという意味には解釈できない。

(誤) 電車に乗りながら本を読んだ。

(正) 電車に乗って本を読んだ。

前後とも主語は同一で、人の意志的な行為を表す場合が多いが、(5)(6)のように、飛行機や自然現象のように、自分の力で動いたり変化できるものの場合もある。

(誤) 私は本を読みながら、彼はウイスキーを飲んだ。

2 …ながら <様態>

[Nながら]

[R-ながら]

(1) いつもながら、見事なお手並みですね。

(2) この清酒メーカーは、昔ながらの製法で日本酒をつくっている。

(3) 被害者は、涙ながらに事件の状況を語った。

(4) 生まれながらのすぐれた才能に恵まれている。

(5) この子は、生まれながらにして優れた音楽的感性を備えている。

名詞や、動詞の連用形に付いて、そのまま変化しないで続く状態・様子を表す。例えば、「生まれながら」「昔ながら」は、「その時からずっとそのまま」という意味で「生まれつき」「昔のまま」に近い意味である。また「涙ながらに」は、「涙を流している状態で」という意味で、「涙を流して」とも言いかえることができる。比較的固定化が進んだ表現で、前にくる言葉は上の例のような特定のものに限

られている。

3 …ながら(も/に) <逆接>

[N/Na ながら]

[A-いながら]

[R-ながら]

(1) このバイクは小型ながら馬力がある。

(2) 敵ながら、あっぱれな態度であった。

(3) 子供ながらに、なかなかしっかりとした挨拶であった。

(4) 残念ながら、結婚式には出席できません。

(5) 狭いながらもようやく自分の持ち家を手に入れることができた。

(6) 何もかも知っていながら教えてくれない。

(7) すぐ近くまで行きながら、結局実家には寄らずに帰って来た。

(8) 学生の身分でありながら、高級車で通学している。

(9) 細々ながらも商売を続けている。

(10) ゆっくりながらも作業は少しずつ進んでいる。

名詞、イ形容詞、ナ形容詞、動詞の連用形、副詞(「…と/に」などを伴う場合はそれを除いた部分)などに付いて、「…のに」あるいは「…けれども/が」と類義の逆接の意味を表す。「も」を伴い「ながらも」の形で使われることもある。

(3)の「ながらに」は、やや古めかしい言い方で、話しことばでは、通常用いられない。この逆接の用法では「ながら」の前にくる述語は状態性の場合が多い。これに対して、1の並行的動作の用法は前後とも動作を表す動詞に限られる。

4 …とはいいながら

→【とはいいながら】

【なきゃ】

(1) 早く行かなきゃ間にあわない。

(2) もう帰らなきゃ。

「なければ」のくだけた言い方。

→【なければ】

【なくしては】

[Nなくしては]

(1) 親の援助なくしては、とても一人で生活できない。

(2) 無償の愛情なくしては、子育ては苦痛でしかない。

(3) 彼女のこの長年の努力なくしては、全国大会の代表の座を勝ち取ることはできなかっただろう。

(4) 当事者同士の率直な意見交換なくしては、問題解決への道のりは遠いと言わざるを得ない。

(5) 愛なくして何の人生か。

名詞に付いて、「あるものがなかったら」

という意味を表す。それがなかったら何かすることは難しいだろうということを述べるのに使う。文脈によって「は」は省略できる。(5)は慣用句的表現で「愛がなかったら人生に何の意味があるというのか」という意味。書きことば的表現で、話しことばでは「Nがなかったら」を使う。

【なくちゃ】

[N／Na　でなくちゃ]
[A-くなくちゃ]
[V-なくちゃ]

(1) 勉強しなくちゃ怒られる。
(2) 早く帰らなくちゃ。

「なくては」のくだけた言い方。

→【なくては】

【なくて】

[Nがなくて]
[N／Na　でなくて]
[A-くなくて]
[V-なくて]

(1) 検査の結果、ガンでなくて安心した。
(2) 結婚した頃は、お金がなくて苦労した。
(3) 子供の体が丈夫でなくて大変だ。
(4) 思ったより高くなくてほっとした。
(5) ちっとも雨が降らなくて困っている。
(6) あいつが来なくて助かった。

「そのようなことが成立しないことが原因・理由で」といった意味で、後のことがらの原因・理由を表す。後半には「安心する」「困る」「助かる」など、話し手の感情や評価を表す表現が用いられる。

「なくて」は前後のことがらが同時並行して成立することを表しているだけで、原因・理由を明示するものではない。そのため上の例の「なくて」を「ないので」「ないから」に置きかえると不自然になることが多い。

【なくては】

[N／Na　でなくては]
[A-くなくては]
[V-なくては]

(1) 我慢強い人でなくては彼女と付き合うのは難しい。
(2) どんなにお金があっても健康でなくては幸せだとは言えない。
(3) 成績がもっとよくなくては、この大学への合格は無理だろう。
(4) 彼がいなくては、生きていけない。
(5) 聞いてみなくては分からない。
(6) もっと食べなくては大きくなれないよ。

文末に動詞の否定形や「無理だ」「難しい」などの否定の表現を伴い、「そうでなければ…は不可能だ」という意味を表

す。前の節で述べることがらの実現を望んだり、それが必要だということを言いたい場合に使う。「なくては」は「なかったら」「なければ」「ないと」で言いかえられることが多い。くだけた話しことばでは「N／Na　じゃなくちゃ」「A-く／V-なくちゃ」となる。

【なくてはいけない】

[N／Na　でなくてはいけない]
[A-くなくてはいけない]
[V-なくてはいけない]

(1) 履歴書は自筆のものでなくてはいけない。
(2) 教師はどの生徒に対しても公正でなくてはならない。
(3) 家族が住むには、もう少し広くなくてはだめだ。
(4) 目上の人と話す時はことばづかいに気をつけなくてはいけない。
(5) 家族のために働かなくてはならない。

「…なくてはいけない／ならない／だめだ」などの形で、全体でそうする(である)ことが「義務だ」「必要だ」という意味を表す。話しことばでは「なく(っ)ちゃ」となったり、後ろの部分が省略されることもある。

(例) もっとまじめに勉強しなくちゃだめだよ。
(例) もう行かなくちゃ。

「なくてはいけない」と「なくてはならない」の違いについては【なければ】2を参照。

【なくてはならない】

→【なければ】2

【なくてもいい】

[N／Na　でなくてもいい]
[A-くなくてもいい]
[V-なくてもいい]

(1) 時間はたっぷりあるから、そんなに急がなくてもいいですよ。
(2) 毎日でなくてもいいから、ときどき運動して下さい。
(3) この染料はお湯で溶かすんだけど、温度はそんなに高くなくてもいいよ。すぐ溶けるから。
(4) 仕事が忙しい場合は、無理して来なくてもいいですよ。

「…する必要がない」という意味を表す。「なくてもかまわない」「なくても大丈夫」などが用いられることもある。あらたまった言い方に「なくともよい」がある。

【なくともよい】

[N／Na　でなくともよい]
[A-くなくともよい]
[V-なくともよい]

(1) 履歴書は自筆でなくともよい。ただし、その場合は最後に押印、署名のこと。
(2) 入学式には必ずしも父母同伴でなくともよい。

（3）支柱の強度はそれほど強くなくともよい。

（4）委任状を提出すれば、必ずしも本人が出席しなくともよい。

「…する必要がない」という意味を表す。「なくてもよい／いい」の文語的表現で、現代語では改まった場合を除いてはあまり使われない。「する」の場合は「せずともよい」が使われることもある。

【なくもない】

動詞の否定形や形容詞「ない」の連用形を受けて、そのようなことが全くないわけではなく、それが存在したり成立することもあるという意味を表す。「ないこともない」「ないでもない」とも言う。

1 V-なくもない

（1）A：お酒は召し上がらないんですか。
　　B：飲まなくもないんですが、あまり強くはありません。

（2）時には転職することを考えなくもない。

（3）日本語の会話は、日本に来てから少し上達したと言えなくもない。

（4）最近彼女は少し元気がないような気がしなくもない。

動詞の否定形を受け、そのような行為、認識が成立することもあるという意味を表す。「言う、考える、思う、認める、感じる、気がする」など思考や知覚にかかわる動詞とともに用いられた場合は「何となくそんな気がする」といった意味を表す。

2 Nがなくもない

（1）再婚するつもりがなくもない。

（2）あの人を恨む気持ちがなくもない。

（3）A：あの人まだ独身ですが、結婚するつもりがないのでしょうか。
　　B：その気もなくはないようですが、今のところは特にそんな様子はありませんね。

主として意志や気持ちを表す名詞を受けて、そのような気持ちがまったくないわけではないという意味を表す。「名詞＋も」が先にある場合は、（3）のように「Nもなくはない」の形が使われることもある。

【なけりゃ】

[N／Na　でなけりゃ]
[A-くなけりゃ]
[V-くなけりゃ]

（1）この仕事はあなたでなけりゃ勤まらない。

（2）ころばなけりゃ勝てたのに。

「なければ」のくだけた言い方。

→【なければ】

【なければ】

[N／Na　でなければ]
[A-くなければ]

[V-なければ]

「する」は「しなければ」のほかに「せねば」という形がある。話しことばでは「なけりゃ」「なきゃ」の形も使われる。

1 …なければ…ない

（1）この映画は成人でなければ見ることができない。

（2）体がじょうぶでなければこの仕事はつとまらない。

（3）私はワープロでなければ論文が書けない。

（4）背が高くなければファッションモデルにはなれない。

（5）安くなければ買わない。

（6）勉強しなければ大学には入れない。

（7）君が手伝ってくれなければこの仕事は完成しない。

文末には動詞の否定形や「無理だ」「むずかしい」などの否定の表現を伴い、あることがらが成立しない場合には別のことがらも成立しないという意味を表す。「…なくては…ない」とも言う。

2 …なければいけない
…なければならない
…なければだめだ

（1）教師は、生徒に対して公平でなければならない。

（2）そろそろ、帰らなければいけません。

（3）もっと自分を大切にしなければだめですよ。

「…であることが必要だ／不可欠だ／義務だ」という意味を表す。次のように後ろの節を省略することもある。

（例）もう10時だから、そろそろ帰らなければ。

「なくてはいけない／ならない／だめだ」とも言うが、次のような使い分けがある。

「なければならない」「なくてはならない」は、社会常識やことがらの性質から見て、そのような義務・必要性があるという意味を表す。つまり誰にとってもそうする義務・必要性があるという一般的な判断を述べる場合に用いられることが多い。これに対して「なければいけない」「なくてはいけない」は、個別の事情で義務や必要が生じた場合に用いられることが多い。「なければだめだ」「なくてはだめだ」も同様であるが、「なければいけない」「なくてはいけない」よりもさらに話しことば的。

「なければ」の代わりに「ねば」、「ならない」の代わりに「ならぬ」を使うさらに書きことば的な言い方もある。

（例）人生には、我慢せねばならぬこともある。

また、「ならない」の代わりに「ならん」、「いけない」の代わりに「いかん」を使うこともあるが、これは古めかしい話しことば。

（例）優勝するには、もっと志気を高めなければならん。

（例）少しぐらいつらくても、我慢しなければいかんよ。

3 …なければ V-た

（1）彼が助けてくれなければ、この

本は完成しなかっただろう。

（2）金目当てでなければ、彼女はあんな老人とは結婚しなかったに違いない。

（3）あの一言さえなければ別れることにはならなかったのに。

（4）あのミスさえしていなければ合格できたはずなのに。

（5）体がこんなに弱くなければ仕事が続けられたのに。

事情が異なれば結果もまた異なったものになるという意味の反事実的な意味を表す。文末には「だろう」「にちがいない」「はずだ」「のに」などが使われることが多い。

【なさい】

[R-なさい]

（1）うるさい。すこし静かにしなさい。

（2）明日も学校があるんだから、早く寝なさい。

（3）A：あいつ、本当に馬鹿なんだから。
　　B：よしなさいよ。そんな言い方するの。

（4）A：明日のパーティー、どうするの?
　　B：行こうかな。どうしようかな。
　　A：迷ってないで、行きなさいよ。絶対おもしろいから。

（5）≪試験の問題≫ 次の文を読んで、記号で答えなさい。

命令や指示を表す。親が子供に、教師が学生に対してなど、監督する立場にある者が使うことが多いが、(3)(4)のように、家族や友人など親しい間柄でも使われる。(3)は禁止の表現で、相手の言動をたしなめるために使われている。(4)は強い勧誘。また、(5)のように、試験問題などの指示にも使われる。

「ごめんなさい」は、親しい間柄で使われる謝罪の表現。「おやすみなさい」は、寝る前に言う挨拶。

【なさんな】

[V-なさんな]

（1）風邪などひきなさんな。

（2）大丈夫だから、そんなに心配しなさんな。

「する」の尊敬語「なさる」に禁止の「な」がついた「なさるな」の話しことば的な言い方で、「…するな」の意味を表す。

親しい間柄でしか使えない。年配の人は使うが、若い人はほとんど使わず、「風邪をひくなよ」「心配するなよ」のような言い方をするのが普通。丁寧に言う場合は、「心配しないで／ご心配なさらないで／ご心配にならないでください」のように「…ないでください」やその尊敬形を使う。

【なしでは…ない】

[Nなしでは…ない]

（1）あなたなしでは生きていけない。

（2）辞書なしでは英語の新聞を読めない。

（3）議長なしでは会議を始めるわけにはいかない。

（4）背広にネクタイなしでは、かっこうがつかない。

（5）この会社で働くのに労働許可証なしでは困る。

文末に不可能や否定的な意味の表現を伴い「それがない状態では…することができない／困る」「Nがどうしても必要だ」という意味を表す。「Nが(い)なくては／(い)なければ…できない／困る」などと言いかえることができる。

【なしに】

[Nなしに]

（1）この山は、冬は届け出なしに登山してはいけないことになっている。

（2）断りなしに外泊したために、寮の規則で一週間ロビーの掃除をさせられた。

（3）前田さんは忙しい人だから、約束なしに人と会ったりしないでしょう。

（4）研究会では、前置きなしにいきなり本題に入らないように、皆にわかりやすい発表をこころがけてください。

（5）今度事務所に来たアルバイトの高校生は、いい子なのだが、いつもあいさつなしに帰るので、いつ帰ったかわからなくて困る。

「届け出」「断り」など動作を表す名詞に付いて、その動作をしないで何かするという意味を表す。「当然前もってしておかなくてはいけないことをしないで、何かをする」という文脈で使われることが多い。

次のように名詞に「何の」が付くと「も」が入って「何のNもなしに」という形になる。

（例）彼は何の連絡もなしに突然たずねてきて、金の無心をした。

書きことば的表現で、話しことばでは「しないで」を使う。

【なぜか】

（1）最近なぜか家族のことが気にかかってしかたがない。

（2）彼は今日はなぜか元気がないようだ。

（3）だめだと思ってたのに、なぜか希望していた会社に採用されてしまった。

「原因・理由は分からないが」という気持ちを表す。話し手の感覚や、意志や予想に反したことなどを述べる場合に使われることが多い。

【なぜ…かというと】

（1）なぜ遅刻したかというと、出かける前に電話がかかったからです。

（2）なぜ偏西風が吹くのかというと、地球が自転しているからだ。

（3）なぜアメリカに留学したかといえば、親戚がいるからです。

（4）なぜあんなに勉強しているのかといえば、彼は弁護士資格をとるつもりなのです。

「なぜ…かというと／かといえば」の形で、「なぜ」の後に結果や現状を表す表現が来て、その理由を求めるのに使う。後ろの節で理由が述べられる。文末にはたいてい「からだ」を伴うが、（4）のように「のだ」が用いられることもある。

【なぜかというと…からだ】

（1）A：宇宙に行くとどうして物が落ちないのですか。

B：なぜかというと、地球の引力が働かなくなるからです。

（2）彼が犯人であるはずがない。なぜかというと、その時彼は私と一緒にいましたから。

「なぜかといえば…からだ」と同じ。

→【なぜかといえば…からだ】

【なぜかといえば…からだ】

（1）A：天気はなぜ西から東に変化して行くのでしょう。

B：それはなぜかといえば、地球が自転しているからです。

（2）彼は背広とネクタイを新調した。なぜかといえば、就職の面接がもうすぐあるからだ。

前に述べられたことについて、その原因や理由を説明するのに用いる。文末は「…からだ」の形をとるのが普通だが「…ためだ」となることもある。自然現象の原因や判断の理由などを述べる場合に用いられることが多い。

【なぜならば…からだ】

（1）原子力発電には反対です。なぜならば、絶対に安全だという保証がないからです。

（2）殿下のご結婚相手はまだ発表するわけにはいかない。なぜならば、正式な会議で決まっていないからだ。

（3）私は車は持たないで、タクシーを利用することにしている。なぜなら、タクシーなら、駐車場や維持費がかからず、結局安上がりだからである。

前に述べたことについて、その理由や事情を説明するのに用いる。「ば」は省略されることもある。どちらかというと、書きことばや、改まった場面での話しことばで用られる。日常の会話では「なぜかというと／なぜかといえば…からだ」が使われることが多い。

【など】

くだけた言い方では「なんか」が用いられる。

1 …など

a Nなど

（1）ウェイトレスや皿洗いなどのアルバイトをして学費を貯めた。

（2）A：このスーツに合うブラウスを探しているんですけど…。

B：これなどいかがでしょうか。お似合いだと思いますよ。

（3）デパートやスーパーなどの大きな店ができたために、小さな店は経営が苦しくなった。

いろいろある中から主なものを取り上げて、例として示すのに用いる。ほかにも似たものがあるという含みがある。

b V-るなどする

（1）ひげをそるなどして、もうすこし身だしなみに気を付けてほしい。

（2）時には呼びつけて注意するなどしたのですが、あまり効き目はなかったようです。

いろいろあることの中から主なものを取り上げて例として示すのに用いる。ほかにも似たことをするという含みがある。

2 …などと

（1）学校をやめるなどと言って、みんなを困らせている。

（2）来年になれば景気が持ち直すから大丈夫などと、のんきなことを言っている。

（3）東京で仕事を探すなどと言って、家を出たきり帰ってこない。

後ろに「言う」などの発言を表す動詞を従えて、その発言のおおよその内容を表すのに使う。発言の引用をする用法だが、ほかにも似たようなことをいっているという含みがある。

3 …など…ない

（1）あなたの顔など見たくない。

（2）私は嘘などつきませんよ。

（3）賛成するなどと言っていない。

（4）あんな男となどいっしょに働きたくない。

（5）そんなことで驚いたりなどしないさ。

（6）別にあなたを非難してなどいませんよ。

（7）こんな難しい問題が私のようなものになど解けるはずがありません。

（8）こんな結果になるなどとは考えてもみませんでした。

名詞や動詞、名詞＋助詞などのさまざまな成分に付き、その後に否定を表す表

現を従えて、あることがらに対する否定を表すと同時に、「など」によって取り立てたものごとに対する軽蔑の気持ちや謙遜の気持ち、あるいは意外な気持ちなどを表す。

例えば(7)は「こんな難しい問題は私には解けるはずがない」ということと同時に、自分自身を低く評価して謙遜する気持ちも表している。

4 ...など... V-るものか

(1) そんな馬鹿げた話など、だれが信じるものか。
(2) お前になど教えてやるものか。
(3) あんなやつを助けてなどやるものか。
(4) これくらいの怪我で、だれが死になどするものか。
(5) 私の気持ちが、あなたなどに分かるものですか。

名詞や動詞、名詞+助詞などのさまざまな成分に付き、否定の意を強めると同時に「など」によって取り立てたものごとを、取るに足りないくだらないものだと、軽視する気持ちを表す。

【なに...ない】

1 なにひとつ...ない

(1) 家が貧しかったので、ほしいものは、なにひとつ買ってもらえなかった。
(2) あの大地震でも、家の中のものはなにひとつ壊れなかった。
(3) こんなに一生懸命工夫したのに、まともな作品は何一つ作れていない。
(4) この店には、私が買いたいと思うものは何一つない。
(5) 膨大な資料を調査してみたが、彼らの残した記録は何一つ見つからなかった。
(6) みなさんにお伝えしなければならないような面白い事件は何一つ起こりませんでした。

ものや出来事に関して、「少しも...ない」「まったく...ない」と強く否定する意味を表す。人に関する場合には「だれひとり...ない」という形が用いられる。

2 なに...ない

(1) 彼は父から受け継いだ大きな家に住んで、なに不自由なく暮らしている。
(2) この会は気のあった人たちの集まりだから、なに気兼ねなく自由に振る舞うことができる。
(3) 物質的には何不足ない生活をしているのだが、なぜか満たされない気持ちで日々を過ごしている。
(4) 祖父は孫たちに囲まれて、何不自由ない満たされた老後を送っている。

「なに不自由なく」「なに不自由ない」などの慣用的に固定した表現で、不自由や不足がまったくなく、満たされた状態であることを表す。

【なにか】

1 なにか <物事>

(1) 冷蔵庫に何か入っているから、お腹がすいたら食べなさい。
(2) この穴は何かでふさいでおいたほうがいいでしょう。
(3) 何か質問はありませんか。
(4) 壁に何か堅いものがぶつかったようなあとがある。
(5) 私に何かお手伝いできることはありませんか。

それとはっきり指し示すことのできないものごとを表す。副詞的に用いることが多いが、(2)の「なにかで」や「なにかが」「なにかを」のように助詞と共に用いることもある。くだけた言い方では「なんか」となる。

2 なにか <様子>

(1) 彼の態度は何か不自然だ。
(2) 彼女のことが何か気になってしかたがない。
(3) この景色を見ていると、いつも何か寂しい気持ちになってくる。

「なぜそう感じるのか、はっきりしたことは分からないが、なんとなく」といった意味を表す。くだけた言い方では「なんか」となる。

3 ...かなにか

[N/V かなにか]

(1) コーヒーか何か飲みませんか。
(2) はさみか何かありませんか。
(3) 石か何かの堅いもので殴られた。
(4) 吉田さんは、風邪をひいたか何かで会社を休んでいます。

名詞や動詞に付いて、はっきりと指示できないがそれに類したものごとを表す場合に用いる。「Nかなにか」に続く助詞の「が」や「を」は省略されることが多い。くだけた言い方では「かなんか」となる。

4 Nやなにか

(1) 休みの日は雑誌や何かを読んでのんびり過ごします。
(2) かばんの中には洗面用具や何かの身の回り品が入っていた。
(3) A:何を盗まれたんですか。
B:金庫は荒らされていなかったんですが、たんすの中の宝石や何かがなくなっています。

名詞に付いて、そのものやそれに類似したものを表すのに用いられる。「Nかなにか」が「Nのようなもの」という意味であるのに対して、「Nやなにか」は「N」のほかにそれに類した他のものもあることを表す。助詞を従える場合が多い。くだけた言い方では「やなんか」となる。

5 なにか <詰問>

(1) それならなにか。この会社を辞めてもいいんだな。
(2) 君はなにか、僕に責任があると

言いたいのか。

上がり調子で発せられ、相手を強く問いつめるのに用いる。非難の気持ちが伴うことが多い。男性が、話しことばで、同等や目下の相手に対して用いる。

【なにかしら】

(1) なにかしらアルバイトをしているので、生活には困りません。
(2) いつもなにかしらお噂を聞いております。
(3) 家のことがなにかしら気にかかったので、急いで帰ってきた。
(4) 息子は最近なにかしら反抗的な態度を取る。

特にそれとはっきり指し示すことのできないものごとを表す。ひとつだけでなく他にもいろいろあるという含みがある。「なにか知らぬ」「なにか知らん」から転じたもの。

【なにかと】

1 なにかと

(1) なにかと雑用が多くてゆっくりできません。
(2) 先生には、いつもなにかとお世話になっております。
(3) 駅の近くだと何かと便利です。
(4) お引っ越ししたばかりでは、何かとお忙しいことと存じます。
(5) 大勢の人間をまとめなければならないので、何かと気苦労が多い。

いろいろなものやことを特になにと特定せずに漠然と指し示すときに用いられる。いろいろと。あれやこれやと。

2 なにかというと

(1) あの人はなにかと言うと文句ばかり言っている。
(2) 母は何かと言うと、その話を持ちだしてくる。
(3) その先輩には何かと言うと意地悪をされた。

「何かきっかけがあるたびに」という意味を表す。後ろには人間の行為を表す表現が続き、いつもその行為が繰り返されるという意味になる。「なにかにつけて」とも言う。

【なにがなんでも】

1 なにがなんでも <意気込み>

(1) あの人には、なにがなんでも負けたくない。
(2) この仕事は、なにがなんでも明日までに終わらせてもらわなければ困ります。
(3) なにがなんでも彼女を説得して下さい。
(4) この取引は社運がかかっているんだから、何が何でも成功させなければならない。
(5) この試合に勝ちさえすれば、オリンピックに出場できる。何が何でも勝たなければならない。

後ろに話し手の意志や依頼を表す表現を伴って、「事情がどのようなものであっても、何かをやり抜く、やり抜いてほしい」という意気込みを表す。どんなことがあっても。是非とも。

2 なにがなんでも
＋マイナス評価表現 <非難>

(1) この記事は、なにがなんでもひどすぎる。
(2) なにがなんでも、そんな話は信じられない。
(3) なにがなんでもこんな小さな子供にその役は無理だ。
(4) こんな短期間のうちに工事を終わらせろなんて、何が何でもできない相談です。

後ろに非難や注意を表す表現を伴って、「何かの事情があることは認めた上でも、なおかつ非難や注意に値する」という気持ちを表す。どんな理由があったにしても。いくら何でも。

【なにかにつけて】

(1) なにかにつけてその時のことが思い出される。
(2) 叔父にはなにかにつけて相談にのってもらっている。
(3) 駅の近くだと、なにかにつけて便利です。
(4) 彼はなにかにつけて私の悪口を言いふらしている。

「何かのきっかけがあるたびに」「何かのときには必ず」という意を表す。後ろには出来事や状態を表す表現などが続き、いつもその出来事が繰り返される、あるいはいつもその状態であるという意味になる。「なにかというと」とも言う。

【なにげない】

[なにげないN]
[なにげなくV]

(1) 何気ないその一言が私の心をひどく傷つけた。
(2) 彼は、内心の動揺を隠して何気ない風を装っている。
(3) 彼は特に発言もせずに我々の意見に賛同しているように見えるが、実は、何気ない振りをしてこちらの出方をうかがっているだけなんだ。
(4) 彼女は何気ない顔つきで、みんながびっくりするような発言を始めた。
(5) なにげなく窓の外を見ると、空に大きな虹が架かっていた。
(6) なにげなく、心に浮かんだ風景をキャンバスに描いてみた。
(7) 何気なく言った言葉が彼をひどく傷つけてしまった。

特に深く考えたり意識したりせずに行動する様子を表す。文脈に応じて「深く考えずに」「意識せずに」「さりげなく」などの意味になる。副詞的な用法は「なにげなしに」と言いかえられる。

【なにしろ】

（1）なにしろ彼は頭がいいから、私がどんなに頑張っても言い負かされてしまう。

（2）なにしろ観光シーズンですからどのホテルも予約は取れないと思います。

（3）もっと早くお便りしようと思っていたのですが、なにしろ忙しくてゆっくり机に向かう暇もありませんでした。

（4）どこにも異常はないかもしれないが、なにしろ大至急検査をしてみる必要がある。

いろいろのことが考えられるが、それについては触れないで、とりあえずあることだけを取り立てて表現するのに用いる。「なにしろ…から」「なにしろ…て」の様な形で理由を述べる場合に用いられることが多い。なんにしても。とにかく。

【なににもまして】

（1）なににもまして健康が大切です。

（2）あなたにお会いできたことが、なににもまして嬉しく思いました。

（3）なににもまして必要なのは、このプランを実行に移すことだ。

「ほかのどんなものよりも」「なによりもまず第一に」の意味を表す。

【なにも】

1 なにも

a なにも…ない

（1）外は暗くてなにも見えない。

（2）かばんの中にはなにも入っていなかった。

（3）そのことについて、私は何も知りませんでした。

（4）作業は順調に進み、心配していたようなことは何も起こりませんでした。

後ろに否定を表す表現を伴って、「まったく…ない」「全然…ない」という意味を表す。ものやことがらや人間以外の動物に関して用いられる。人の場合には「だれも…ない」、場所の場合には「どこも…ない」となる。

b なにも…ない

（1）なにも、みんなの前で、そんなに恥ずかしい話をしなくてもいいでしょう。

（2）団体旅行で添乗員もいるのだから、なにもそんなに心配する必要はありませんよ。

（3）彼らも悪気があって言ったことじゃないんだから、何もそんなに怒ることはないじゃないですか。

（4）ちょっと注意されただけなのに、何もそんなに気にすることはないですよ。

（5）何もそこまで懇切丁寧に指導してあげる必要はありませんよ。彼らはもう十分に訓練を受けている人たちなんですから。

（6）何も試合直前になって延期したいと言ってくることはないだろうに。

後ろに「(そこまで)…しなくてもいい」「(そう)…する必要がない」などの表現が続き、「特にそうする必要はないのに」という気持ちを表す。相手がやりすぎていることをたしなめたり非難したりする場合に用いられることが多い。

c なにも…わけではない

（1）私はなにも、あなたがやっていることを非難しているわけではないんです。ただちょっと注意したほうがいいと思って忠告しているんじゃないですか。

（2）私は何もこの仕事がやりたくないわけではないのです。今は他の仕事があるので、少し時間がほしいとお願いしているだけなのです。

（3）あなたは私が邪魔をしていると思っているようですが、何も私は邪魔をしているわけではないのです。手順を踏んで慎重に話を進めようとしているだけなんです。

（4）A：お母さんは私のことが嫌いなんでしょう。

B：何を言ってるの。私は何もあなたが嫌いで反対しているわけではないのよ。あなたのことを気にかけているから、反対しているんじゃないの。

自分の行動に関して相手がどう考えているかを受けとめて、その考えが実は正しくないと否定するのに用いる。(4)のように相手の直前の発話を受ける場合もあるが、多くの場合は相手の考えを推量してそれを否定するのに用いる。

2 …もなにも

a Nもなにも

（1）戦争で、家もなにも全てを失ってしまった。

（2）事故のショックで、自分の名前も何も、すっかり忘れてしまいました。

（3）ペンも何も持っていなかったので、メモが取れませんでした。

（4）住所も何も書いていないので、どこに連絡すればいいのか分からない。

名詞の後に付き、「そこで表されているものやそれに類するものすべて」の意を表す。後ろには「失う」「忘れる」「分からない」などの消滅や否定を表す表現が続く。

b …もなにも

［A／V　もなにも］

（1）A：高田さん、あなた必ずやるって約束してくれたじゃないですか。

B：約束するもなにも、私はそんなことを言った覚えもないですよ。

（2）A：怪我をしたときは痛かったでしょう。

B：痛いもなにも、一瞬死ぬんじゃないかと思ったくらいだ。

（3）A：彼に会ってずいぶん驚いていましたね。

B：驚いたもなにも、彼のことは死んだと思っていたんですから。

相手の言ったことを受けて、それを強く否定したり、相手が考えている以上であると強調したりする場合に用いる。話しことばに用いるのが普通。

3 なにもかも

（1）嫌なことは何もかも忘れて楽しみましょう。

（2）何もかも、あなたの言うとおりにします。

（3）あの人なら何もかも任せておいて大丈夫です。

（4）戦争で何もかもすっかり失ってしまった。

ものやことがらに関して用いられ、何と限定することなくすべてにわたることを表す。全部。すべて。人に関する場合は「だれもかれも」、場所に関する場合は「どこもかも／どこもかしこも」となる。

【なにやら】

1 なにやら

（1）なにやら変な臭いがする。

（2）みんなで集まって、なにやら相談をしているらしい。

（3）なにやら雨が降りそうな天気ですね。

（4）この曲を聞いていたら、なにやら悲しい気分になってしまった。

（5）あの一家は、なにやら伊豆の方へ引越しをするそうです。

それとはっきり指し示すことができないことを表す。「なにかは分からないが」「確かなことは分からないが」「理由ははっきり分からないが」といった意味になる。

2 …やらなにやら

［Nやらなにやら］

［A-い／V-る　やらなにやら］

（1）お菓子やらなにやらを持ち寄ってパーティーを開いた。

（2）子供の病気やらなにやらで、落ち着いて考える暇もなかった。

（3）酔っぱらって、泣き叫ぶやら何やらの大騒ぎを演じたあげく、大いびきをかいて寝込んでしまった。

それのほかにそれと似たようなものがいろいろあることを表す。多くのものやことがらが入りまじって混乱しているという含みを持つことが多い。

【なにより】

1 なにより

（1）料理を作るのがなにより得意です。

（2）息子が無事でいるかどうかが、なにより気がかりだ。

（3）なにより嬉しかったのは、友達に会えたことです。

（4）あなたから励ましの言葉をいただいたことに、なにより感激いたしました。

「他のどんなものよりも一番」「なににもまして」という意味を表す。

2 なによりだ

（1）お元気そうでなによりです。

（2）就職先が決まったそうで何よりです。

（3）温泉に入るのがなによりの楽しみだ。

「他のどんなものとくらべても一番よい」という意を表す。名詞を修飾するときは(3)(4)のように「なによりのN」という形になる。「なによりだ」という形が使われるのは、多くの場合、相手に関するできごとをよいことだと評価する場合で、自分に関するできごとの場合には用いない。

（誤）私が東大に入学できて何よりです。

「なによりの…」という形の場合は、相手や第三者のことだけでなく自分のことに関しても用いることができる。

【なまじ】

（1）なまじ急いでタクシーに乗ったために、渋滞に巻き込まれてかえって遅刻してしまった。

（2）今の段階でなまじ私が発言すれば、かえって事態を混乱させることになりかねない。

（3）なまじ自信があったのがわざわいして、重大なミスを犯してしまった。

（4）なまじ彼女の状況が理解できるだけに、こんな仕事はとても頼みづらい。

（5）なまじの知識は役に立たないどころか邪魔になることもある。

（6）彼女の前ではなまじなことは言わない方がいい。彼女はこの問題を徹底的に調べているらしいから、我々もそのつもりで準備しなければ負けてしまう。

プラスの価値をもつものが十分にその真価を発揮できないで不徹底、中途半端に終わる様子を表す。本来ならプラスの価値を持つものが、反対にマイナスの結果をもたらしてしまうことを述べる場合に用いる。

名詞を修飾するときは(5)(6)のよう

に「なまじなN」「なまじのN」となる。この場合は「中途半端な」と言いかえることができる。例えば(5)は、本来なら持っている方がよい知識が十分なものでないために、かえって邪魔になるという意味。

【なら$_1$】

名詞を直接「なら」が受け、主題を表す。「ならば」の形で使われることもある。

1 Nなら

(1) A：めがねはどこかな。
　　B：めがねなら、タンスの上に置いてありましたよ。
(2) A：アルバイトを雇うには金がかかりますよ。
　　B：お金のことなら、心配しなくていいですよ。何とかなりますから。
(3) A：佐藤さん見ませんでしたか。
　　B：佐藤さんなら、図書館にいましたよ。
(4) 時間ならば十分ありますから、ご心配なく。
(5) 例のことなら、もう社長に伝えてあります。

相手の言ったことやこれまでの話題にあがっていたこと、あるいはその場の状況から予測できることを話題として取り立てて、それに関して話を進める場合に用いる。相手から持ち出されたことがらを話題として取り上げる場合によく使われる。

主題を表す「は」に言いかえられることが多いが、「なら」には本来「Nが話題ということならば」といった仮定的な意味があるのに対し、「は」にはこのような意味がない。そのため、言いかえた場合は意味が変わる。主題を表す「Nだったら」と類義的で、言いかえが可能。

2 NならNだ

(1) 山ならやっぱり富士山だ。
(2) ストレス解消法ならゴルフに限る。
(3) 酒なら、なんといってもここの地酒が一番だ。
(4) カキ料理なら広島が本場だ。

「Nなら」の後には「Nだ」の他「Nに限る」「Nが一番だ」「Nがいい」などが用いられる。「Nなら」で話題の範囲を限定し、その範囲内で最も評価の高いものを述べるのに用いる。この場合は「Nは」で言いかえても大きな意味の違いはない。

3 …(助詞)なら

(1) あの人となら結婚してもいい。
(2) フランス語はだめですが、英語でなら会話ができます。
(3) あと一人だけなら入場できます。
(4) A：足の具合はいかがですか。
　　B：ゆっくりとなら歩けるようになりました。
(5) 仕事の後なら時間があります。

名詞、副詞、あるいは名詞+助詞などを受けて、「他の場合はそうでないが、Xについてなら／の場合ならYが成立する」という意味を表す。Yにはたいてい望ましいことがらが続き、それを成立させることが可能なXを積極的に選ぶような場合に用いる。対比を表す「は」と似ているが、「なら」は疑問詞を受けることができるのに対し、「は」ではそれが不可能である。

(正) 何時なら都合がいいですか。
　　誰となら結婚してもいいですか。
(誤) 何時は都合がいいですか。
　　誰とは結婚してもいいですか。

【なら$_2$】

[N／Na　なら]
[N／Na　だった(の)なら]
[A-い／A-かった　(の)なら]
[V-る／V-た　(の)なら]

述語の辞書形・タ形を受け、「実情・状況がそのようであれば」という意味を表す。「のならば」「のなら」「ならば」の形も使われる。話しことばでは「の」は「ん」となることが多い。

「の」の有無による意味の違いは、はっきりとは認められない場合が多いが、「の」がある場合は、聞き手の発言や具体的な状況を受けて「あなたがそう言うなら」「それが事実ならば」「実情がそのようであれば」という意味を表すのに対し、「の」がない場合は、「一般的にそのような場合は」「そうする場合は」という意味を表す傾向がある。名詞、ナ形容詞を直接受ける場合は「の」は使われないことが多い。動詞、イ形容詞に続く場合、「(の)なら」と「のだったら」は類義的で、互いに言いかえが可能だが、「のだったら」の「の」は省略できない。

(誤) 知っているだったら教えてほしい。
(正) 知っている(の)なら教えてほしい。
　　知っているのだったら教えてほしい。

1 …(の)なら <仮定条件>

(1) A：風邪をひいてしまいまして。
　　B：風邪なら早く帰って休んだほうがいいよ。
(2) 彼女のことがそんなに嫌いなら別れたらいい。
(3) A：頭がずきずき痛むんです。
　　B：そんなに痛い(の)なら早く帰ったほうがいいですよ。
(4) 行きたくない(の)ならやめておいたらどうですか。
(5) 真相を知っている(の)なら私に教えてほしい。
(6) 郵便局に行く(の)なら、この手紙を出してきてくれますか。
(7) あなたがそんなに反対する(の)ならあきらめます。
(8) A：ちょっと買い物に行ってくる。
　　B：買い物に行く(の)ならついでにおしょうゆを買ってきてちょうだい。

(9) A：沖縄ではもう梅雨に入ったそうですよ。
B：沖縄で梅雨に入ったのなら、九州の梅雨入りも間近ですね。

(10) 二人が昼からこの店で会っていたのなら、二人には午前中のアリバイはないことになる。

述語の辞書形・タ形を受け、「実情がそのようであれば」「それが事実であれば」という意味の仮定条件を表す。相手の言ったことやその場の状況を踏まえて、自分の意見や意向を述べたり、相手に依頼・忠告などをしたりする場合に用いる。

起こるのが当然のことがらや、時間が経てば自然に起こることがらについて述べるような場合には「なら」は使えず、かわりに「たら」「ば」「と」などを使わなければならない。また、文末に単なる事実を述べる表現は使えず、判断、意志、命令、要求、提案、評価など、話し手の主観的態度を表す表現を使わなければならない。

(誤) 春が来るなら花が咲きます。
雨が降るなら道がぬかります。
(正) 春が{来たら／来れば／来ると}花が咲きます。
雨が{降ったら／降ると／降れば}道がぬかります。
(正) ≪午後から雨が降ると聞いて≫雨が降る(の)なら、傘を持って行こう。(意志)

「たら」「ば」「と」では、前の条件が時間的に先行して起こり、その結果として後ろに述べることがらが成立するという場合に使われるのに対して、「なら」は、後半のことがらの方がまず成り立って、そのあとに条件部のことがらが続くことを表す場合にも使うことができる。

(例) イタリアに行ったらイタリア語を習いなさい。(イタリアに行ってからイタリアで習う)
(例) イタリアに行くならイタリア語を習いなさい。(イタリアへ行く前に自分の国で習う)

2 …(の)なら ＜反事実＞

(1) 電話をくれるのなら、もう少し早い時間に電話してほしかった。
(2) 神戸に来ていたのなら、電話してくれればよかったのに。
(3) あいつが来るのならこのパーティには来なかったんだが。
(4) 結婚式に出席する(の)なら黒いスーツを買うのだが。

「X(の)ならY」のY、あるいはXとYが事実に反することがらを表す場合の用法。前者は、新たに事実Xを知ったような場合に、「Xを知っていればYを行ったはずだが、それを知らなかったので行わなかった」という意味の表現で、Xが事実、Yが事実に反することがらを表す。後者は、「Xを行う場合はYを行うのだが、実際にはXを行わないのでYも行わない」という表現で、XもYも事実に反することがらを表す。(1)〜(3)が前者、(4)が後者の例である。例えば(2)は、相手が神戸に来ていたという事

実を知って、「それなら電話をしてくれればよかったのに」と、相手が電話しなかったことを非難したり後悔したりする気持ちを表すもので、Xが事実、Yが反事実を表す。(4)は、「結婚式に出席する場合であれば黒いスーツを買うのだが、実際には結婚式には出席しないので黒いスーツは買わない」という意味の表現で、XもYも事実に反することがらを表す。

(1)〜(4)は、「たら」「ば」を使った反事実条件文とは異なる意味を表し、言いかえは不可能である。「たら」「ば」を用いた反事実条件文は、XもYも共に事実に反することがらを表し、しかも、XはYより先に起こるものでなければならない。これに対し、(1)〜(3)はYのみが事実に反することがらを表し、(4)は、XYとも事実に反することがらを表すが、仮にそれが成立した場合の順序は、「黒いスーツを買ってから結婚式に出席する」という、Yの後にXが起こるような関係を表している。このような関係は「なら」でしか表すことができず、「たら」「ば」で言いかえることはできない。

(例) 先週、神戸に来ていたのなら案内してあげたのに。
(「先週、神戸に来ていたという事実を知らなかったので案内してあげられなかった」という意味。Xが事実でYが反事実)
(例) 先週、神戸に来て{いれば／いたら}案内してあげたのに。
(「先週、神戸に来ていなかったので案内してあげられなかった」という意味。XもYも反事実。)
(例) 結婚式に出るなら黒いスーツを買ったのだけど。
(「結婚式に出ないので黒いスーツを買わなかった」という意味。XもYも反事実。成立した場合の行動の順序はYの後にX)
(例) 黒いスーツを買って{いれば／いたら}結婚式に出たのだが。
(「黒いスーツを買っていなかったので、結婚式に出なかった」という意味。XもYも反事実。成立した場合の行動の順序はXの後にY)

3 V-る(の)なら…がいい

(1) 靴を買うならイタリア製がいい。
(2) 食事をするなら、このレストランがいいよ。
(3) 英語を習うならアメリカかカナダに留学することをすすめたい。
(4) A：大学を卒業したら留学したいと思っているんだ。
B：留学するのならオーストラリアがいいよ。

「がいい」「をすすめる」などの表現が続き、あることを行う場合に一番よい手段・方法を勧めるような場合に用いる。広告・コマーシャルのキャッチフレーズでよく使われる。

特定の相手の行為ではなく一般的な行動について述べる場合には「の」は付かないのが普通で、「Nなら…がいい」「Nは…がいい」のような主題を表す「なら」「は」を用いた表現に近い意味にな

る。

(例) 靴を買うならイタリア製がいい。

(例) 靴ならイタリア製がいい。

(例) 靴はイタリア製がいい。

4 V-る(の)なら …しろ／…するな

(1) 何事もやるなら最後まで徹底的にやれ。

(2) 女性と付き合うなら真剣に付き合いなさい。

(3) 留学するならいい加減な気持ちではするな。

(4) 私のことを笑うなら勝手に笑えばいい。

(5) 泣きたいのなら好きなだけ泣けばいい。

「なら」の前後に同じ動詞が続き、ある行動をとる場合に、それをどのように行うべきかを指示する場合に用いる。後ろには命令・禁止の表現のほか「すればいい」など提案や勧めの表現が続く。(4)(5)は、「そうしたければ好きなようにすればいい」という意味の表現。

「一般的に…する場合」という意味では「なら」の前に「の」がつかないことが多いが、特定の相手の発言や意向を受けて、「そういうつもりなら」「そうしたいのなら」という意味の場合は、(5)のように「のなら」の形も使われる。

5 …(の)なら…で

[NaならNaで]

[A(の)ならAで]

[V(の)ならVで]

(1) 嫌なら嫌で、そう言ってくれたらよかったのに。今となっては遅すぎるよ。

(2) 金がないならないで、人生何とかなるものさ。

(3) 会社を辞める(の)なら辞めるで、それからあとの身の振り方ぐらい考えておくべきだった。

(4) 遅くなる(の)なら遅くなるで、ちゃんと連絡ぐらいしてくれればいいのに。

(5) 行かない(の)なら行かないで、ちゃんと断わりの連絡だけはしておいたほうがいい。

「なら」の前後に同じ語を繰り返し、そのような状況ならそれでも構わないと認めた上で、その際どういう行動をすべきであるかを述べたり、それをしなかったことを非難したり後悔したりする意味を表す。

6 …(の)なら…と

[NならN(だ)と]

[NaならNa(だ)と]

[A(の)ならAと]

[V(の)ならVと]

(1) 欠席なら欠席と前もって知らせておいてください。

(2) そうならそうと言ってほしかった。

(3) 嫌なら嫌だとはっきり言ってくれればいいのに。

(4) 好きなら好きとはっきり言っておけばよかった。

(5) 都合が悪い(の)なら悪いと言

ってくれればよかったのに。

(6) これからは来ない(の)なら来ないとちゃんと事前に連絡して下さいね。

(7) 行く(の)なら行く、行かない(の)なら行かないとちゃんと言ってくれなければ困るじゃないですか。

同じ語を繰り返し、後ろに「言う」「連絡する」など発言を表す表現を続けて、相手や第三者が自分の行動に対してはっきり態度表明をすべきであるという話し手の態度を表す。

普通、明確な態度表明をしなかったことを非難したり、態度表明すべきであったと忠告する場合に使う。(4)のように自分自身が明確な態度表明をしなかったことを悔やむ気持ちを表す場合にも用いられる。

7 …(の)ならべつだが

[N／Na ならべつだが]

[A／V (の)ならべつだが]

(1) そんなに勉強がつまらない(の)なら別だが、自分の心構えについても反省してみてはどうだろうか。

(2) やめたい(の)なら別だが、もし続けたい(の)ならもう少し基礎的なところから勉強し直した方がいい。

(3) 本気で頑張る気があるのなら別だがいい加減な気持ちでやっているならやめたほうがいい。

(4) 自分のことなら話は別だが、人のことにそんなに気を揉んでも仕方がないだろう。

(5) どうしても嫌なら話は別だが、我慢して今の会社にとどまるのも一つの考えだ。

異なった二つの状況を想定して、一方の状況の場合は当てはまらないことだがと前置きし、もう一方の場合に対しての話し手の意見を言う場合に用いる。非難や警告・忠告など相手に対する働き掛けを表す表現が続くことが多い。(4)(5)のように、「…なら話は別だが」の形で用いられることもある。

8 …というのなら

(1) A:明日はほかに用事があってお邪魔できないのですが。

B:来たくないと言うのなら来てもらわなくてもいい。

(2) 責任をもつと言うのなら、信頼して任せてみてはどうですか。

(3) 子供が大事だと言うのなら、もっと家庭を大切にしなくてはだめだ。

(4) 経営に行き詰まっているというのならあんな派手な商売はできないはずだ。

これまでの話の内容を踏まえてそれに対する話し手の判断を示す場合に用いる。相手に対する許可や忠告、提案の表

現や、話し手の判断を表す表現が続く。「ということなら」とも言う。

9 …ということなら

（1） 癌だということなら退院させてくれるはずがない。

（2） 自分たちでやるということなら、やらせてみてはどうか。

（3） 期限内にできないということなら、ほかの業者に頼むことにしよう。

第三者の発言を踏まえてそれに対する話し手の対応を表す。用法は「というのなら」とだいたい同じだが、「というのなら」は直接の目の前の相手あるいは第三者の発言を受けて「あなたがそう言うのなら」「彼がそう言うのなら」の両方の意味で使うことができるが、「ということなら」は普通、後者の意味で使われる。

10 どうせ…(の)なら →【どうせ】2
11 …ものなら →【ものなら】1
12 V-ようものなら →【ものなら】2

【なら$_3$】

[N／Na (だった)なら]
[A-い／A-かった なら]
[V-る／V-た なら]

「なら2」と異なり、「のなら」の形にならないもの。「なら」または「ならば」の形で使われる。「N／Naだ」のバ形に当たるが、動詞やイ形容詞にも続き、それぞれの辞書形とタ形を受ける。動詞・イ形容詞に続く場合は、「ば」「たら」で言いかえても大きな意味の違いはない。「たなら」の形は「たら」を強調したやや古めかしい言い方。

1 N／Na なら(ば)

（1） 10人一緒なら団体の割り引き料金になる。

（2） まわりがもう少し静かならば落ち着いて勉強できるのですが。

（3） 東京ならこんなに安い家賃で家は借りられません。

（4） その話が本当なら大変なことになりますよ。

（5） 私があなたならそんなふうには考えなかったと思う。

（6） 日曜日、お天気ならハイキングに行きましょう。

「N／Naだ」のバ形で、「もし…であれば」「かりに…である場合は」といった意味の仮定条件や「事情が反対なら」という反事実条件を表す。改まった書きことばでは「である」のバ形「であれば」も使われる。「だったら」で言いかえが可能。

主題を表す「なら1」との違いは、「なら1」は名詞のみに付いて「Nが話題であれば」という意味を表すのに対し、この用法は事実であるかどうかが未定のことがらや、事実に反することがらを仮にそうだと仮定すればという意味を表す。だが、どちらの用法か判定がむずかしい場合も多い。

2 NがNならNはNだ

（1） 銀座が東京の中心なら心斎橋は大阪の中心だ。

（2） パリが芸術の都なら、ロンドンは金融の都だ。

（3） 兄が努力型の秀才なら弟は天才型の秀才だ。

対比的な性質をもつ人物や事物について、それぞれを対比させて述べる時の言い方。それぞれを別のことばにたとえて言う場合に用いるもので「…を…と表現するとすれば…は…と表現できる」という意味。

3 NがNならNもNだ

（1） 親が親なら子も子だ。

（2） 先生が先生なら学生も学生だ。

（3） 亭主が亭主なら女房も女房だ。

（4） アメリカもアメリカなら日本も日本だ。

前後に「妻」「夫」のように対をなす関係の人物や機関・組織を表す名詞が続き、その人物や組織のやり方や態度が「どちらも同様にひどい」「まったくあきれた連中だ」といったマイナス評価を表す場合に用いる。非常識・怠惰・無遠慮・失礼といった好ましくない性質・態度をもつペアに対して用いる。（4）のように「N1もN1ならN2もN2だ」の形も使われる。

4 …なら(ば)

[A／V なら(ば)]

（1） 今年も真夏の日照時間が短い／短かったならば米不足の問題は深刻だ。

（2） この機会を逃す／逃したならばもう2度と彼には会えないだろう。

（3） このまま不況が続く／続いたなら失業問題は深刻になる。

（4） 今後1週間雨が降らない／降らなかったならば水不足になる。

イ形容詞、動詞の辞書形またはタ形を受け「もしそのような状況が成立した場合は」という意味を表す。未来に成立が予想される状況を仮定して、それが実現した場合に成立することがらを予測して述べる仮定条件の表現。「するなら」「したなら」のどちらを使っても大きな意味の違いはない。文語的な言い方で、論説調の文章などで用いられる。「ば」「たら」で言いかえが可能で、口語的な言い方では、こちらを使うことのほうが多い。

（1'） 今年も真夏の日照時間が｛短ければ／短かったら｝米不足の問題は深刻だ。

（2'） この機会を｛逃せば／逃したら｝もう2度と彼には会えないだろう。

（3'） このまま不況が｛続けば／続いたら｝失業問題は深刻になる。

（4'） 今後1週間雨が｛降らなければ／降らなかったら｝水不足になる。

5 …たなら

[N／Na だったなら]
[A-かったなら]
[V-たなら]

（1） 私が全能の神様だったなら、あなたを助けてあげられるの

に。

（2）もう少し発見が早かったなら助かったのに。

（3）困ることがあったならいつでも相談に来い。

（4）もしも私に翼があったなら大空を自由にかけまわりたい。

（5）≪歌詞≫あの坂を越えたなら幸せが待っている。

「たら」を強調した、やや古風な言い方で、仮定条件や、反事実条件を表す場合に用いられる。歌謡曲の歌詞などでよく使われるが、日常の話しことばでは普通「たら」を使う。

6 V-るなら <観点>

（1）事情を知らない人の目から見るなら、少しおおげさな感じがするかもしれない。

（2）私に言わせるなら、この作品はあまり面白いとは思えない。

（3）戦前と比べるなら生活レベルはずいぶん向上したといえるだろう。

（4）一部を除くなら、彼の意見は正しいと思う。

「見る」や「言う」「比べる」などの動詞の辞書形に「なら」が続く慣用的な表現で、後に続く判断や意見がどのような観点から述べられているかを表す。やや書きことば的。「たら／と／ば」にも同様の用法があり、たいていこれらで言いかえが可能。この他「…によるなら／を別にするなら」などがある。

【ならいい】

[N／Na　ならいい]
[A／V　（の）ならいい]

（1）お母さんが病気ならいいよ。早く家に帰ってあげなさい。

（2）勉強がそんなに嫌いならいいよ。大学など行かないで就職したらいい。

（3）A：悪いけど、その仕事はあまり得意じゃないんだ。
　　B：やりたくない(の)ならいいよ。他の人に頼むから。

（4）それほど熱心に言う(の)ならいいじゃありませんか。やりたいことをやらせてあげなさいよ。

それ以前からの話の内容や状況を踏まえて、「そのような事情なら、それでも構わない／…してもいい／…しなくてもいい」という話し手の許可や放任の態度を表す。例えば(3)は「やりたくないならやらなくてもいい」という意味。

【ならでは】

[Nならでは]

（1）親友ならではの細かい心遣いが嬉しかった。

（2）二枚目俳優ならではの端正な顔立ちをしていた。

（3）当店ならではのすばらしい料理をお楽しみください。

（4）あの役者ならでは演じられないすばらしい演技だった。

人物や組織などを表す名詞を受けて「Nだからこそこれほどすばらしい」「N以外にはできない」「Nでなければあり得ない」といった意味を表す。「NならではのN」のような形で用いられることが多いが「Nならでは…ない」の形もある。Nについての高い評価を表し、店や会社などの広告・宣伝のキャッチフレーズでよく使われる。

【ならない】

1 V-てならない　→【てならない】

2 V-てはならない　→【てはならない】

3 V-なくてはならない
→【なければ】2

4 V-なければならない
→【なければ】2

【ならびに】

[NならびにN]

（1）各国の首相ならびに外相が式典に参列した。

（2）この美術館は主に東欧の絵画並びに工芸品を所蔵している。

（3）本日ご出席の卒業生の諸君ならびに御家族の皆さま方に心からお祝い申し上げます。

（4）優勝者には賞状ならびに記念品が手渡されることになっている。

（5）用紙に住所、氏名ならびに生年月日を記入して下さい。

前のことがらと同様のものをさらに並べる言い方。書きことば的表現。あいさつなどのかたい話しことばでも使われる。

【なり$_1$】

1 V-るなり

（1）家に帰るなり自分の部屋に閉じ込もって出てこない。

（2）立ち上がるなり目まいがして倒れそうになった。

（3）会うなり金を貸してくれなどと言うので驚いた。

動作を表す動詞に付いて、「その動作の直後に」という意味を表す。「…したとたんに」「…するやいなや」。その動作の直後に予期しない出来事が起こる場合に用いられる。

2 V-たなり

a V-たなり(で)

（1）座ったなり動こうともしない。

（2）うつむいたなり黙りこんでいる。

（3）立ったなりでじっとこちらの様子を伺っている。

ある状態がそのまま持続して事態が進展しないことを表す。「…したまま」に言いかえられる。多少古めかしい言い方。

b V-たなり

（1）家を出たなり一ヶ月も帰ってこ

なかった。

（2）お辞儀をしたなり何も言わずに部屋を出て行った。

（3）住民の反対にあって、工事は中断されたなり解決のめどもついていない。

ある事態が起こった後、普通ならそれに引き続いて起こると思われる事態にならないでそのまま何も起こらない状態が続くことを表す。「…したまま」に言いかえられる。多少古めかしい言い方。

【なり$_{2}$】

1 …なり

[Nなり]

[V-るなり]

（1）何かお飲物なりお持ちしましょうか。

（2）そんなに忙しいんだったら友達になり手伝ってもらったらいいのに。

（3）そんなに心配なら先生に相談するなりしてみてはどうですか。

（4）壁に絵を飾るなりしたらもっと落ちつくと思いますよ。

名詞や動詞などのいろいろな成分に付いて、いくつかある可能性の中から一つのものを例として指し示すのに用いる。

2 V-るなりV-ないなり

（1）行くなり行かないなりはっきり決めてほしい。

（2）やるなりやらないなり、はっきりした態度をとらなければならない。

（3）来るなり来ないなりをきちんと連絡してもらわなければ困ります。

動詞の肯定形の後に否定形を続けて、どちらかの行為を選ぶという意味を表す。後ろにはどちらを選択するか態度を明確にすべきである、してほしい、したらどうかなどの表現が続く。選択を迫る気持ちが含まれるので使い方をあやまると失礼になる。

（誤）参加なさるなりなさらないなりをお知らせください。

（正）参加なさるかどうかをお知らせください。

3 …なり…なり

[NなりNなり]

[V-るなりV-るなり]

（1）彼の父親なり母親なりに相談しなければならないだろう。

（2）東京なり大阪なり、好きなところで生活すればいい。

（3）叱るなり誉めるなり、はっきりとした態度をとらなければだめだ。

同じグループに属するものを二つ挙げ、そのどちらかを選ぶという意味を表す。そのふたつのものだけでなく可能性はほかにもあるという含みがある。

4 …なりなんなり

[N／V　なりなんなり]

（1）チューリップなりなんなり、少し

目立つ花を買ってきて下さい。

（2）ここは私が支払いますからコーヒーなりなんなり好きなものを注文して下さい。

（3）転地療養するなり何なりして少し体を休めたほうがいい。

（4）この部屋は寒そうだから、カーペットを入れるなり何なりしなければいけないね。

それに類するものやことがらなら何でもという意を表す。場所を表す場合は「…なりどこなり」という表現がある。

（例）外国なりどこなり、好きなところへ行ってしまえ。

【なり$_{3}$】

1 …なり

a …なり

[Nなり]

[A-いなり]

（1）私なりに努力はしてみましたが、力が及びませんでした。

（2）この事態は役人だけに任せておくのではなく、私たち住人なりの対応策を考えなければならない。

（3）彼らは経験が浅いなりによく頑張ってやってくれる。

（4）母親が留守の間は、子供たちなりに一生懸命考えて、食事を作っていたようです。

（5）この結論は私なりに悩んだ末のものです。

それ相応の状態であることを表す。そのものごとに限界や欠点があることは認めた上で何かプラスの評価をするときに用いる。

b …なり

[Nなり]

[V-るなり]

（1）彼は妻の言うなりになっている。

（2）その店なら、道なりにまっすぐ行くと右側にあります。

「それに逆らわないで従って行く」という意を表す。「言うなり」「道なり」などの固定化した表現でしか用いない。「言うなり」と同じ意味で「言いなり」という表現もある。

2 …なら…なり

[NならNなり]

[NaならNaなり]

[A-いならA-いなり]

[V-るならV-るなり]

（1）嫌なら嫌なりの理由があるはずだ。

（2）若いなら若いなりにやってみればいい。

（3）貧乏なら貧乏なりに楽しく生きられる方法がある。

（4）我々の要求を受け入れられないなら、受け入れられないなりにもっと誠意を持って対応すべきだ。

（5）金があるならあるなりに心配

ごともつきまとう。

（6）新しいビジネスを始めるなら始めるなりの準備というものが必要だ。

同じ語を繰り返して、「そこで述べられているものごとに相応した」「それにふさわしい」といった意を表す。そのものごとに特有の限界や欠点あるいは長所などの特徴があるという含みがあり、「それは認めた上でそれ相応の」という意味を表す。後ろには、そうするはずだ、そうしなければならない、そうしてほしいなどの表現が続くことが多い。「…ば…なり」となることもある。

（例）金があればあるなりに気を使わなければならない。

3 には…なり

[NにはNなり]

[V-るには V-るなり]

（1）若い人には若い人なりの考えがあるだろう。

（2）学生には学生なりの努力が求められている。

（3）金持ちには金持ちなりの心配事がある。

（4）この商売にはこの商売なりに、いろいろな苦労や面白さがある。

（5）断わるには断わるなりの手順というものがある。

同じ名詞や動詞などを繰り返す。そのものごとに特有の限界や欠点あるいは長所などの特徴があるという含みがあり、「それを認めた上でそのものごとに相応の、それにふさわしい」という意味を表す。

4 NはNなり

（1）彼らは彼らなりにいろいろ努力しているのだから、それは認めてやってほしい。

（2）私は私なりのやりかたでやってみたい。

（3）私は私なりに考えて子供をしつけてきたつもりです。

（4）古い機械は古い機械なりに、年代を経た趣と手慣れた使いやすさがある。

同じ名詞を繰り返す。その人やものに限界や欠点があるという含みがあり、「それを認めた上でそれに相当した、それにふさわしい」という意味を表す。

5 それなり

（1）小さな会社だがそれなりの利益は上げている。

（2）嫌だというならそれなりの理由があるのだろう。

（3）子供たちもそれなりに力を合わせて頑張っている。

（4）努力をすればそれなりの成果はあがるはずだ。

それに限界や欠点があると言う含みがあり、「それは認めた上でそれ相応の」という意味を表す。

【なりと】

1 Nなりと(も)

（1）よろしかったら私の話なりとも聞いて下さい。

（2）ここにおかけになってお茶なりと召し上がっていらして下さい。

主として名詞に付いて、いくつかあるもののうち一つを例として指し示すのに用いる。

2 疑問詞(＋格助詞)＋なりと

（1）お前みたいな勝手なやつはどこへなりと行ってしまえばいい。

（2）だれとなりと、好きな男と一緒になるがいい。

（3）なんなりとお好みのものをお持ちしますのでおっしゃって下さい。

（4）ご希望がありましたら、どうぞ遠慮せずに何なりとお申しつけ下さい。

「どこへなりと」「だれとなりと」「なんなりと」などの慣用句的に固定した表現で、なんでも好きなように選ぶことができるという意味を表す。

【なる】

1 …なる

[N／Na　になる]

[A-くなる]

[V-ようになる]

（1）木が切り倒されて山が裸になってしまった。

（2）彼女は働きすぎて病気になった。

（3）このあたりは、昔は静かなところだったのですが、ずいぶんにぎやかになったものですね。

（4）酒を飲んで顔が赤くなりました。

（5）道路が拡張されたために車が増えて、だんだん住みにくくなっています。

（6）練習の成果があって、ようやく平仮名が全部読めるようになりました。

（7）以前は無口だったが、最近はよくしゃべるようになりました。

（8）彼と一緒に仕事をするようになって、ずいぶんいろいろなことを学びました。

ものごとが変化することを表す。「する」は働きかける人が存在する意図的な変化を表すが、「なる」はそのもの自体の自然な変化を表す。

→【ように$_3$】6

2 Nからなる

（1）この本は4つの章からなっている。

（2）この委員会は委員長以下5人の委員からなっている。

（3）日本の議会は参議院と衆議院とからなる。

（4） 3つの主要な論点からなる議題を提案した。

名詞を受けて、「それによって構成されている」という意味を表す。(3)のように「XとYとからなる」という形もある。文末に用いられるときは「...からなっている」となることが多いが、改まった書きことばでは「...からなる」も可能である。名詞を修飾するときは「...からなるN」という形が用いられる。

3 ...ことになる

（1） この大会も今年で4回目ということになりますね。

（2） 私とあの人はいとこどうしということになる。

→【ことになる】

4 R-そうになる

（1） 叱られて泣きそうになった。

（2） この臭いをかぐとくしゃみが出そうになる。

→【そうだ$_2$】2b

5 ...となる

[N／Na となる]

（1） 彼はまだ20歳なのに、もうすぐ一児の父となります。

（2） 人々は次々に島を出て行き、ついにそこは無人島となった。

（3） その法案には様々な問題があることが明らかとなった。

（4） この戦争は最終的には悲劇的な結末となった。

（5） 結局は、両国の話し合いは物別れとなった。

名詞やナ形容詞を受けて、そこで示されたものや状態にものごとが変化する意を表す。最終的な段階まで変化してしまうという含みがあるため、「にぎやか」「病気」「元気」のような最終段階の決めにくい表現は用いられにくい。「...となる」が用いられるものはすべて「...になる」に言いかえられるが、その逆はできないこともある。

（誤） にぎやかとなった。

（正） にぎやかになった。

6 ...となると →【となると$_1$】、【となると$_2$】

7 Nともなると

（1） 3月ともなるとだいぶ暖かく感じられるようになります。

（2） 大学生ともなると、ある程度は自分でお小遣いをかせがなければならない。

→【ともなると】

8 ...になる

[Nになる]

[V-ることになる]

（1） 来年から5月4日は休校日になります。

（2） 今年の秋に結婚することになりました。

将来の行為について何らかの決定や合意がなされたり、ある結果が生じることを表す。誰が決定したかは問題とせず、自然の成り行きで、あるいは他律的にその結果が生じたという意味あいを伝える。次のように「N+助詞」が使われることもある。

(例) 会議は5時からになりました。

→【ことになる】

9 Nになると

（1） 国語なら教えられるが、数学になると全く手がでない。

（2） 練習ではうまくいったのに、いざ本番になると上がってしまいました。

「あるレベル、ある段階に至ったときに」という意を表す。「Nとなると」という形でもよい。

10 お R-になる

（1） 先生はお帰りになりました。

（2） おかけになってお待ち下さい。

→【お...になる】

【なるたけ】

（1） この仕事はなるたけ早く仕上げて下さい。

（2） 壊れやすい品物だから、なるたけ気を付けて運んでね。

「できるだけ」「なるべく」のくだけた言い方。

【なるべく】

1 なるべく

（1） 今晩はなるべく早めに帰ってきて下さいね。

（2） 明日は試合だから、今日は無理をしないでなるべく体を休めておくようにしよう。

（3） この活動には、なるべく多くの人に参加してもらいたい。

（4） この品物は壊れやすいから、なるべく注意して取り扱って下さいね。

（5） かなり長い距離を歩くと聞きましたので、荷物はなるべく少なくするようにしました。

「可能な限り」「できるだけ」という意味を表す。後ろには意志・希望・依頼などの表現が多く使われる。

2 なるべくなら

（1） なるべくなら、今晩は早く帰って休みたい。

（2） なるべくなら、だれにも会わずに帰ろうと思っていたのですが、知り合いに見つかって声をかけられてしまいました。

（3） この話はなるべくなら人に知られたくないので、黙っていて下さいね。

（4） なるべくなら武力を使わずに話し合いで解決したいものだ。

「可能ならば」「できることなら」という意味を表す。後ろには欲求や意志を表す表現が続くことが多い。

【なるほど】

（1） いい店だとは聞いていたが、なるほどサービスもいいし料理もうまい。

（2）あなたの言うことはなるほどもっともだが、私の立場も考えてほしい。

（3）なるほど、富士山というのは美しい山だ。

（4）なるほど、噂には聞いていましたが、実際に使ってみると本当に便利なものなのですね。

（5）A：きのうは久しぶりに大学時代の友達に会ってきたよ。
　　B：なるほど。だからあんなに嬉しそうにしていたんですね。

（6）A：このコピー機は、濃度調整が自動でできるようになっております。
　　B：なるほど。
　　A：それから、用紙の選択も自動になっております。
　　B：なるほど。

他から入ってきた知識や相手が主張していることがその通りであると納得する気持ちを表す。また自分が持っていた知識が正しいことを再確認したり、疑念に解答が与えられて納得したりする気持ちを表す場合にも用いる。（6）のような、「納得」よりは軽い気持ちで、相手に対する同意や注目を示す相づちとして用いる用法もあるが、この用法は尊大に聞こえる場合もあるので目上に対しては使わない。

【なれた】

[R-なれたN]

（1）使いなれた道具を使う。

（2）老後も住み慣れた土地で暮らしたい。

（3）そのベテランの工員は、扱い慣れた自信に満ちた態度で機械を操作していた。

（4）彼は人前で話し慣れているから、上がらない。

動詞の連用形に付き、その動作をたびたび行なって熟練していることやそのことに慣れ親しんでいることを表す。「…なれた」という形で名詞を修飾するために用いられることが多いが、（4）のように「…なれている／なれていない」という形で文の述語になることもまれにある。

【なれば】

1 …となれば　→【となれば】

2 …ともなれば　→【ともなれば】

【なんか】

1 なんか ＜物事＞

「なにか」のくだけた言い方で、話しことばに用いる。

→【なにか】

a なんか

（1）A：なんかたべるものない？
　　B：冷蔵庫見てみたら？　なんか入っていると思うけど。

（2）誕生日にはなんか買ってやろうと思っています。

（3）今日手伝えなかったことは、きっと何かで償うよ。

（4）何か変な音が聞こえませんでしたか。

（5）この部屋、何か臭わない？

それとはっきり指し示すことのできないものごとを表すのに用いられる。

b なんか ＜様子＞

（1）彼女と話しているとなんかほっとした気持ちになる。

（2）あの人の言っていること、なんか変だと思いませんか。

（3）今日は子供たちがなんか妙に静かですね。なにかいたずらをしているんじゃありませんか。

（4）なんか不思議だなあ、この町は。前に来たことがあるような気がしてならない。

「なぜかわからないが」「なんとなく」といった意を表す。

c …かなんか

[N／A／V　かなんか]

（1）今度の休みは映画かなんか行かない？

（2）この傷は石かなんかがぶつかってできたものでしょう。

（3）お見舞いには果物かなんかを持って行くことにしよう。

（4）田中君は試験が近いかなんかでとても忙しそうです。

（5）A：田中君はどうしたの？
　　B：忘れものをしたかなんかで、取りに戻っています。

それとはっきり指し示すことはできないがそれに類したものを表す場合に用いる。

d Nやなんか

（1）スポーツは好きですが、野球やなんかの球技はあまり得意ではないんですよ。

（2）出張やなんかで旅行をするときはいつもこの鞄を持っていきます。

（3）この話は友達やなんかには言わないで下さいね。

（4）山で遭難したときは、持っていたチョコレートやなんかを食べて救助を待ちました。

そのものやそれに類したものを表すのに用いられる。

2 なんか

a Nなんか

（1）お酒はワインなんか好きで、よく飲んでいます。

（2）食料品なんかは近くの店で買うことができます。

（3）山本さんや鈴木さんなんかはこの案に反対のようです。

（4）部品やなんかは揃っているんですが、技術者がいないので

直せないんです。

いろいろあるなかから主なものを取り上げて例として示す。ほかにも似たものがあるという含みがある。「など」のくだけた言い方で話しことばに用いる。

b V-たりなんかして

（1）休みの日は本を読んだりなんかして過ごします。

（2）どうしたの？　ひとりで笑ったりなんかして。

（3）お父さんたら急に怒り出したりなんかして。この頃少し疲れてるのかな。

いろいろあることのなかから主なものを取り上げて例として示す。ほかにも似たことをすると言う含みがある。「など」のくだけた言い方で話しことばに用いる。

c なんか…ない

（1）お金がないから、旅行なんか滅多にできない。

（2）あんな男となんか口もききたくない。

（3）そんなばかげたことなんか考えたこともありません。

（4）こんな汚い部屋になんか一日だって泊まりたくない。

（5）こんな天気の良い日は、家の中で本を読んでなんかいないで、外を散歩しましょうよ。

（6）あんな映画ちっともおもしろくなんかないよ。

名詞や動詞、名詞＋助詞などのさまざまな成分に付き、その後に否定を表す表現を従える。そこで示されたことがらに対する否定を表すが、それと同時に「なんか」によってとりたてたものごとに対する軽蔑の気持ちや謙遜の気持ち、あるいは意外な気持ちなどの意が込められる。「など…ない」のくだけた言い方で話しことばに用いる。

【なんか…ものか】

[…なんか V-るものか]

（1）家になんか帰ってやるものか。

（2）誰がそんな話なんか信じるものか。

（3）あんな男となんか二度と口を利いてやるものか。

（4）あんなひとに教えてなんかやるものか。

（5）一人でも寂しくなんかあるものか。

（6）A：講演会いかがでしたか。おもしろい話が聞けたでしょう。

B：おもしろくなんかあるものですか。すごくくだらない話でしたよ。

名詞・動詞・形容詞や名詞＋助詞などのさまざまな成分に付き、次に述べることを強く否定すると同時に「なんか」によって取り立てたものごとを「馬鹿げたもの、取るに足りないもの、とんでもないこと」と軽視する気持ちを表す。「など…ものか」のくだけた言い方。

【なんだか】

（1）このあたりはなんだか気味が悪いね。

（2）あなたと話していたら、なんだか少し気分が楽になってきた。

（3）彼は最近なんだか私のことを避けているような気がする。

「原因や理由が何であるか分からないが」「どういうわけか」という意味を表す。「なぜか」のくだけた言い方。

【なんだろう】

→【でなくてなんだろう】

【なんて$_1$】

1 なんて

a なんてV

（1）よく聞こえないのですが、あの人はなんて言っているのですか。

（2）この字は何て書いてあるのか分からない。

（3）このことを知ったら、お母さん何て思うかしら。

後ろに「言う」や「書く」などの動詞を続けて、その内容が不明であるという意味を表す。「なんと」のくだけた言い方。

b なんて(いう)N

（1）さっき来た人はなんていう人ですか。

（2）後藤さんは何ていう会社にお勤めですか。

（3）あの人、なんて名前だったかしら。

（4）彼、なんて町に住んでいるんだっけ。

ものや人の名前を聞くのに用いる。「なんというN」のくだけた言い方。

c なんて(いう)Nだ

（1）あなたって人は、なんていう人なの。

（2）あれだけの仕事を１日で片づけてしまうなんて、何ていう早業だろう。

（3）事故で子供を失ってしまうなんて、なんて事だ。

（4）友人を見殺しにするなんて、あなたってなんて人なの。

「なんというNだ」のくだけた言い方で、程度のすごさに驚いたりあきれたりした気持ちを表す。

d なんてことない

（1）これくらいのけがが、なんて事ないさ。

（2）この程度の仕事は何て事ない。１日で片付くさ。

（3）一見何て事ない仕事のようだけれど、やってみると非常に手がかかる。

「大したことではない」という意味を表す。「なんということはない」のくだけた言い方。

2 なんて…んだろう

[なんて… Nなんだろう]
[なんて Na なんだろう]
[なんて A-いんだろう]

（1）ここはなんて寂しいところなんでしょう。
（2）彼の演奏はなんてすばらしいんだろう。
（3）この子は何てかわいげのない子供なんだろう。
（4）家の中に木を植えるとは、何て大胆な発想なんだろう。

驚いたりあきれたりすばらしいと思ったりしたことを、感嘆の気持ちを込めて表現するのに用いる。なんてまあ。「なんと…のだろう」のくだけた言い方。

【なんて$_2$】

1 Nなんて

（1）あなたなんて大嫌い。
（2）そんな馬鹿げた話なんて、だれも信じませんよ。
（3）あの人の言うことなんて、嘘に決まっています。

「馬鹿げたことだ」「くだらないことだ」と軽視する気持ちを伴って主題として取り立てるのに用いる。くだけた話しことば。

2 …なんて

（1）みんなには時間を守れなんて言ったけど、そう言った本人が遅刻してしまった。
（2）息子が大学進学は嫌だなんて言い出して困っている。
（3）私が彼をだましたなんて言っているらしいけど、彼のほうこそ嘘をついているんです。
（4）あやまれば許してもらえるなんて甘い考えは捨てなさい。
（5）まさか、親に頼めば借金を払ってもらえるなんて思っているんじゃないでしょうね。

後ろに「言う」「思う」「考える」などの動詞やそれに相当する名詞を従えて、発言や思考の内容を表すと共に、その内容を意外に思ったり軽視したりする気持ちを表す。「などと」のくだけた言い方。

3 …なんて
[N／Na （だ）なんて]
[A／V なんて]

（1）一家そろって海外旅行だなんて、うらやましいですね。
（2）あなたにそんなことを言うなんて、実にひどい男だ。
（3）こんなところであなたに会うなんて、びっくりしましたよ。
（4）こんな安い給料でまじめに働くなんて馬鹿らしい。
（5）あんな怠け者が一生懸命働きたいなんて、嘘にきまっているでしょう。
（6）この吹雪の中を出て行くなんて、命を捨てに行くようなものだ。

後ろに「うらやましい」「ひどい」などの評価を表す表現を用いて、その評価の

対象となることがらを表す。意外だと驚く気持ちや「くだらないものだ」「馬鹿げた事だ」と軽視する気持ちを伴うことが多い。くだけた話しことば。

【なんでも】

1 なんでも

（1）ほしいものは何でも手に入る。
（2）何でも好きなものを注文して下さい。
（3）あの人は植物の事なら何でも知っている。

「どんなことでも」「どのようなものでも」「すべて」の意味を表す。

2 なんでも …らしい／…そうだ

（1）何でも彼女はもうすぐ仕事をやめるそうですよ。
（2）うわさによると、何でも彼らは浜松に引っ越したという話だ。
（3）何でもこの窪地は、隕石が落下したあとだということです。
（4）何でもこのあたりには幽霊が出るっていう話ですよ。

後ろに「らしい／そうだ／という話だ／ということだ」などの伝聞を表す表現を伴って、人から聞いた内容をあまり確信を持たずに伝えるのに用いる。

3 なんでもない
a なんでもない

（1）あの頃の苦労に比べればこんな苦労は何でもない。
（2）何でもないことにそんなに大騒ぎするな。
（3）この程度の仕事は彼女にとっては何でもないことです。
（4）A：顔色が悪いけど気分でも悪いんじゃないですか。
　B：いいえ、何でもありません。大丈夫です。

「特にどうこう言うほどの事ではない」「大した事ではない」という意味を表す。

b Nでもなんでもない

（1）病気でも何でもない。ただ怠けたくて休んでいただけだ。
（2）こんなものは芸術でも何でもありません。だれだって少し練習すれば作れます。
（3）お前とはもう友達でもなんでもない。二度と僕の前に顔を出さないでくれ。
（4）彼は政治家でもなんでもない。ただのペテン師だ。

名詞を受けて、「そうではない」ということを強調して表す。多くの場合、「そうである」ことの方がプラスの価値を持ち、それを強く否定することによって強いマイナスの評価を表明する。

4 なにがなんでも
→【なにがなんでも】

【なんと】

1 なんと

（1）ご両親はなんとおっしゃっていましたか。

（2）なんと言ってなぐさめてよいか分かりません。
（3）報告書には何と書いてありましたか。
（4）彼らには何と伝えればいいんでしょうか。

「どのように」「どんなふうに」の意。後ろには「言う」「書く」などの動詞が続き、その内容が不明であることを表す。

2 なんと…のだろう
[なんと…Nなのだろう]
[なんとNaなのだろう]
[なんとA-いのだろう]

（1）なんと美しい人なのでしょう。
（2）彼女の気持ちが理解できなかったなんて、俺はなんと馬鹿だったのだろう。
（3）軽装で雪山に登るとは、何と無謀な若者たちなのだろう。

驚いたりあきれたりすばらしいと思ったりしたことを、感嘆の気持ちを込めて表現するのに用いる。なんてまあ。書きことばに用いる。話しことばでは「なんて…んだろう」となる。

【なんという】

1 なんというN

（1）あの人は何という名前ですか。
（2）その赤いのは何という花ですか。

ものの名前を尋ねる場合に用いる。くだけた言い方では「なんていうN」となる。

2 なんという＋連体修飾句＋N

（1）なんという馬鹿なやつだ。
（2）若いのになんという冷静沈着な人物なのだろう。
（3）練習がつらいならやめてしまえだなんて、なんという思いやりのないことを言ってしまったのだろう。
（4）子供たちまで皆殺しにするなんて何という残虐な奴らだろう。

後ろに修飾句を伴った名詞が続き、驚いたりあきれたりすばらしいと思ったりしたことを、感嘆の気持ちを込めて表現するのに用いる。「なんという…のだろう」という形になることが多い。

3 なんというNだ

（1）こんな大きな石を一人で持ち上げられるなんて、何という男だ。
（2）一瞬のうちにして、家族全部を失ってしまうなんて、なんということだ。
（3）何ということだろう。月が真っ赤に染まっている。
（4）外国で同じバスに乗りあわせるなんて、何という偶然だろう。

驚いたりあきれたりすばらしいと思ったりしたことを、感嘆の気持ちを込めて表現するのに用いる。

4 なんということもない

（1）何ということもなく、毎日が穏やかに過ぎて行く。

（2）特に何ということもない平凡な人間だ。

特に取り立てて言うほどの目だったところはないという意味を表す。

【なんとか】

1 なんとか ＜意志的＞

（1）なんとかして山田さんを助け出そう。
（2）このゴミの山を早くなんとかしないといけない。
（3）早くなんとか手を打たないと、大変なことになりますよ。
（4）お忙しいことは承知していますが、何とか明日までに仕上げていただけないでしょうか。
（5）A：あしたまでに仕上げるのはちょっと無理ですね。
　　B：そこを何とかできないでしょうか。何とかお願いしますよ。

「なんとかする」「なんとか手を打つ」など、後ろに手段を講じて何かをするという意味の動詞を従えて、「何らかの手段を尽くして」という意味を表す。

（1）のように「なんとかして…する／しよう」という形をとると、難しい状況を手段を尽くして打開するという意になる。また、（4）（5）のように、後ろに依頼を表す表現を伴うと、難しい状況であることは分かっているが無理を言ってお願いしているという含みが生じる。

2 なんとか ＜自動的＞

（1）安月給だがなんとか食べていくことはできる。
（2）みなさんのご支援でなんとかここまで頑張ってやって来れました。
（3）銀行が金を貸してくれると言うから、何とか倒産だけはまぬがれることができそうだ。

後ろに可能を表す表現を伴って、難しい状況であるが、あるいは十分に満足の行く状況であるとは言えないが、ようやく何かを行うことができるという意味を表す。「どうにか」「やっと」との違いについては「やっと2」を参照。

3 なんとかなる

（1）そんなに心配しなくてもなんとかなりますよ。
（2）二階の雨漏り、何とかならないかしら。
（3）これだけ蓄えがあれば何とかなるだろう。

好ましくない事態を好ましい方向に変えることができる、あるいは十分とは言えないがやっていくことができるという意味を表す。

【なんとかいう】

1 なんとかいう

a なんとかいう

（1）私の言うことは聞こうとしないから、あなたから何とか言ってやって下さい。

（2）なんと言ってなぐさめてよいか分かりません。

（3）報告書には何と書いてありましたか。

（4）彼らには何と伝えればいいんでしょうか。

「どのように」「どんなふうに」の意。後ろには「言う」「書く」などの動詞が続き、その内容が不明であることを表す。

2 なんと…のだろう

[なんと…Nなのだろう]

[なんとNaなのだろう]

[なんとA-いのだろう]

（1）なんと美しい人なのでしょう。

（2）彼女の気持ちが理解できなかったなんて、俺はなんと馬鹿だったのだろう。

（3）軽装で雪山に登るとは、何と無謀な若者たちなのだろう。

驚いたりあきれたりすばらしいと思ったりしたことを、感嘆の気持ちを込めて表現するのに用いる。なんてまあ。書きことばに用いる。話しことばでは「なんて…んだろう」となる。

【なんという】

1 なんというN

（1）あの人は何という名前ですか。

（2）その赤いのは何という花ですか。

ものの名前を尋ねる場合に用いる。くだけた言い方では「なんていうN」となる。

2 なんという＋連体修飾句＋N

（1）なんという馬鹿なやつだ。

（2）若いのになんという冷静沈着な人物なのだろう。

（3）練習がつらいならやめてしまえだなんて、なんという思いやりのないことを言ってしまったのだろう。

（4）子供たちまで皆殺しにするなんて何という残虐な奴らだろう。

後ろに修飾句を伴った名詞が続き、驚いたりあきれたりすばらしいと思ったりしたことを、感嘆の気持ちを込めて表現するのに用いる。「なんという…のだろう」という形になることが多い。

3 なんというNだ

（1）こんな大きな石を一人で持ち上げられるなんて、何という男だ。

（2）一瞬のうちにして、家族全部を失ってしまうなんて、なんということだ。

（3）何ということだろう。月が真っ赤に染まっている。

（4）外国で同じバスに乗りあわせるなんて、何という偶然だろう。

驚いたりあきれたりすばらしいと思ったりしたことを、感嘆の気持ちを込めて表現するのに用いる。

4 なんということもない

（1）何ということもなく、毎日が穏やかに過ぎて行く。

（2）特に何ということもない平凡な人間だ。

特に取り立てて言うほどの目だったところはないという意味を表す。

【なんとか】

1 なんとか ＜意志的＞

（1）なんとかして山田さんを助け出そう。

（2）このゴミの山を早くなんとかしないといけない。

（3）早くなんとか手を打たないと、大変なことになりますよ。

（4）お忙しいことは承知していますが、何とか明日までに仕上げていただけないでしょうか。

（5）A：あしたまでに仕上げるのはちょっと無理ですね。
　　B：そこを何とかできないでしょうか。何とかお願いしますよ。

「なんとかする」「なんとか手を打つ」など、後ろに手段を講じて何かをするという意味の動詞を従えて、「何らかの手段を尽くして」という意味を表す。

（1）のように「なんとかして…する／しよう」という形をとると、難しい状況を手段を尽くして打開するという意になる。また、（4）（5）のように、後ろに依頼を表す表現を伴うと、難しい状況であることは分かっているが無理を言ってお願いしているという含みが生じる。

2 なんとか ＜自動的＞

（1）安月給だがなんとか食べていくことはできる。

（2）みなさんのご支援でなんとかここまで頑張ってやって来れました。

（3）銀行が金を貸してくれると言うから、何とか倒産だけはまぬがれることができそうだ。

後ろに可能を表す表現を伴って、難しい状況であるが、あるいは十分に満足の行く状況であるとは言えないが、ようやく何かを行うことができるという意味を表す。「どうにか」「やっと」との違いについては「やっと2」を参照。

3 なんとかなる

（1）そんなに心配しなくてもなんとかなりますよ。

（2）二階の雨漏り、何とかならないかしら。

（3）これだけ蓄えがあれば何とかなるだろう。

好ましくない事態を好ましい方向に変えることができる、あるいは十分とは言えないがやっていくことができるという意味を表す。

【なんとかいう】

1 なんとかいう

a なんとかいう

（1）私の言うことは聞こうとしないから、あなたから何とか言ってやって下さい。

（2）黙っていないで何とか言ったらどうなんだ。

発言を命じたり頼んだりする場合に用い、何でもよいからとにかく何か言えと、強く発言を求めることを表す。話しことば。

b なんとかいうN

（1）大阪の何とかいう人から電話がありましたよ。

（2）以前佐藤さんが何とかいう学校に通っていただろう。あれはなんていう名前だったかな。

名前のはっきり分からない人やものを指すのに用いる。話しことば。

2 …とかなんとかいう

a Nとかなんとかいう N

（1）ポエムとか何とかいう喫茶店で会うと言っていました。

（2）田中とか何とかいう男の人がたずねてきましたよ。

ある名前や単語が思い当たるが、確かにそれだと確信が持てないことを表す。

b …とかなんとかいう

（1）あの男は給料が安いとかなんとか言って辞めたそうだ。

（2）彼女は自信を失ったとか何とか言っていたようです。

（3）やりたくないとか何とか言っているようだが、本当はやってみたくてしかたがないんだ。

話の内容が確かにそれであると確信が持てないときや、それ以外にもいろいろな発言をしていてその内容だけに特定できないことを表す。

【なんとしても】

（1）なんとしても彼には負けたくない。

（2）なんとしても彼に追いつくことができなかった。

（3）なんとしても戦争の再発だけは防がなければならない。

「あらゆる手段を尽くしても」「どれだけ努力しても」という意味を表す。「どうしても」の書きことば的な言い方。

【なんとなく】

（1）なんとなく旅に出てみたくなりました。

（2）彼と話していると、なんとなく気分が休まるんです。

（3）何となく町をぶらついていて彼女に出会ったのです。

「はっきりとした理由や目的はなしに」という意味を表す。

【なんとはなしに】

（1）なんとはなしに昔の友達に会ってみたくなりました。

（2）何とはなしに嫌な予感がするので、早く家に帰りました。

（3）何とはなしに町を歩いていたら後ろから呼びとめられた。

「なんとなく」と同じ。

→【なんとなく】

【なんとも】

1 なんとも

（1）なんとも申し訳ないことをしてしまいました。

（2）何とも困ったことをしてくれたものだ。

（3）あいつの生意気な態度には、何とも腹がたって仕方がない。

（4）人が突然消えてしまうなんて、何とも不思議な話ですね。

多くは好ましくない状況に関して、その程度がどう形容してよいか分からないほどだということを表す。

2 なんとも…ない

a なんとも V-ない

（1）結果がどうなるかはまだなんとも言えませんね。

（2）みんなは納得したかもしれないが、私は何とも釈然としない気持ちだ。

（3）彼女の言っていることは何とも分かりかねる。

（4）あんなことをする人たちの気持ちは何とも理解できない。

「言えない」「分からない」などの表現を用いて、何と言ってよいか分からない、状況がはっきりと理解できない、はっきり納得することができないなどの気持ちを表す。

b なんとも V-ようがない

（1）こんな事になって、なんともお詫びのしようがありません。

（2）非常に複雑な状況なので、なんとも説明のしようがありません。

（3）成功するかどうか、今の段階では何とも言いようがない。

（4）資料がこんなに少ないのでは、何とも判断のしようがありません。

「言いようがない」「説明のしようがない」などの表現を用いて、何と言ってよいのか分からない、状況がはっきりと理解できない、はっきり納得することができないなどの気持ちを表す。

（1）は謝罪の気持ちを強く表す慣用表現。感謝の気持ちを表す場合には、「なんとも」を使うより「なんとお礼を言ってよいのか分かりません」などの表現の方が多い。

c なんともない

なんともおもわない

（1）A：気分が悪いんじゃありませんか。

B：いいえ、なんともありません。ちょっと疲れただけです。

（2）軽い打ち身だけで、頭のけがは何ともありませんでした。

（3）A：あの映画、こわかったでしょう。

B：ううん。何ともなかったよ。

（4）私がこんなに心配しているのに、彼の方は何とも思っていない様子でした。

（5）こんなに馬鹿にされているのに、あなたは何とも感じないのですか。

（6）A：さっきはあんなこと言ってごめんなさい。

B：いや、別に何とも思ってないよ。

「なんともない」の形で、「たいしたことはない」「特に問題はない」という意味を表す。体の調子や感情の状態に関して用いられることが多い。また「何とも思わない」「何とも感じない」のように用いて、たいしたことだとは思わない(感じない)という意味を表す。

d A-くもなんともない

（1）そんな話は恐くも何ともないさ。

（2）彼の冗談はおもしろくも何ともない。

（3）一人でいたって寂しくも何ともない。

（4）人の日記なんか読みたくも何ともないよ。

（5）そんなくだらないもの、ほしくも何ともない。

「恐い」「おもしろい」などの感動や、「したい」「ほしい」などの欲求を表す表現と共に用いて、「そうではない」と強く否定する気持ちを表す。「まったく…ない」「全然…ない」。

【なんにしても】

（1）なんにしても健康が一番です。

（2）なんにしてもこの場は引き上げたほうがいい。

（3）なんにしても年内に立ち退いてもらいます。

「ほかにもいろいろあるだろうが、どんな場合でも」という意味を表す。

【なんにしろ】

［Nはなんにしろ］

（1）事情は何にしろ、早く故障した部品を取りかえなければならない。

（2）理由は何にしろ、あなたのやったことは間違っている。

（3）理由は何にしろ、約束が果たせなかったことについては責任をとってもらいます。

「いろいろな事情や理由はあるだろうが」という意味を表す。事情や理由があることは認めた上で、注意・勧告・要求などを行うときに用いる。

【なんら…ない】

1 なんらV-ない

（1）彼らがどう言おうと、私にはなんらかかわりのないことだ。

（2）彼の話からは何ら得るところが

なかった。

（3）我々がこれほど努力しているのに、状況は何ら変わらない。

「まったく…ない」「少しも…ない」と、強く否定する気持ちを表す。改まった表現に用いられる。話しことばでは「なにも…ない」の方がよく使われる。

2 なんらのNもV-ない

（1）彼らの対応にはなんらの誠意も感じられない。

（2）住民の生活に対しては何らの配慮もなされていない。

（3）彼らからは何らの回答も得られなかった。

強く否定する気持ちを表す。あらたまった表現に用いられる。話しことばでは「なんのNもV-ない」の方がよく使われる。

【に】

1 R-にV

（1）待ちに待った帰国の日がついにやってきた。

（2）電車は遅れに遅れて、東京駅に着いたときは夜中を過ぎていた。

（3）彼の死を悼んで、人々は泣きに泣いた。

同じ動詞を繰り返し、そこで述べられる動作や作用の程度が非常に激しいことを強調する。過去の文脈に用いられることが多い。

2 V-るにV-れない

（1）人手が足りないのでやめるにやめられない。

（2）ものすごくおかしな話だったけど、みんながまじめな顔をして聞いているので、笑うに笑えなかった。

（3）戦時中は言うに言えない苦労をしてきた。

（4）事業は失敗するし、妻には逃げられるし、全く泣くに泣けない気持ちだ。

（5）ここまで深入りしてしまっては、いまさら引くに引けない。

同じ動詞を繰り返し用いて、「そうしようと思ってもできない」「どうしても…することができない」という意味を表す。（3）～（5）は慣用表現で、（3）（4）はそうしたくてもそれができないぐらいひどい状況であること、（5）はやめることができない状況であることを表す。

【にあたって】

［Nにあたって］

［V-るにあたって］

（1）開会にあたってひとことご挨拶を申し上げます。

（2）年頭にあたって集会を持ち、住民達の結束が揺るぎないものであることを確認しあった。

（3）試合に臨むにあたって、相手の弱点を徹底的に研究した。

(4) お嬢さんをお嫁に出すにあたってのお気持ちはいかがでしたか。

(5) 新しい生活を始めるにあたっての資金は、親の援助で何とか調達できた。

名詞や動詞の辞書形を受けて、「ものごとの節目となるような重要な時期にさしかかって」という意味を表す。…にさいして。式辞や礼状などの形式張った表現として用いることが多い。さらに形式張ったものとして「にあたり(まして)」を用いることもある。名詞を修飾する場合は(4)(5)のように「…にあたってのN」という形になる。

【にあたらない】

→【にはあたらない】

【にあたり】

[Nにあたり]

[V-るにあたり]

(1) 代表団の選出にあたり、被選挙人名簿を作成した。

(2) 今回の企画を実現するにあたりまして、皆様から多大のご支援を賜りましたことを感謝致します。

「にあたって」のさらに形式張った言い方。

→【にあたって】

【にあって】

1 Nにあって

(1) 異国の地にあって、仕事を探すこともままならない。

(2) 住民代表という立場にあって、寝る時間も惜しんでその問題に取り組んでいる。

(3) 大臣という職にあって、不正を働いていたとは許せない。

(4) 母は病床にあって、なおも子供達のことを気にかけている。

名詞を受けて、「そこで示された状況のもとで」の意味を表す。その状況とそれ以後に述べられることがらとの関係はゆるやかなもので、前後の文脈に応じて順接の場合も逆接の場合も考えられる。(1)と(2)は順接の例。(3)と(4)は逆接の例で、「その状況にありながら／あるにもかかわらず」という意味。

2 Nにあっても

(1) 彼は苦境にあっても、めげずに頑張っている。

(2) 暖かい家庭の中にあっても、彼女の心は満たされなかった。

(3) 母は死の間際にあっても、子供達の幸福を願い続けた。

名詞を受けて、「そこで表された状況の中におかれていても」の意味を表す。後には、その状況で起こると予測されることとは食い違うことがらが続く。書きことば的。

3 Nにあっては <状況>

(1) こんな厳寒の地にあっては、新鮮な野菜が食卓に上るなど、

滅多にないことだ。

(2) いつ戦争が起こるか知れない状況にあっては、明るい未来を思い描くことなどできない。

(3) 夫が病床にあっては、子供達に十分な教育を受けさせることもできなかった。

(4) わが社にあっては、若者が自由に発言できる雰囲気を大切にしている。

(5) 「鉄の女」といわれた彼女も家庭にあっては良き母であった。

場所や状況を表す名詞を受けて、「そこで表された状況の中では」の意を表す。…において。「厳寒の地」や「病床」など状況が厳しいことを表す表現が用いられた場合は、後ろに好ましくない状態を表す表現が続くが、そうでないときは、(4)や(5)のように単に「そこにおいて」という意を表す。書きことば的。

4 Nにあっては <人>

(1) 高橋さんにあっては、どんな強敵でも勝てそうにありませんね。

(2) あの男にあっては、嘘もまことと言いくるめられる。油断は禁物だ。

(3) あなたにあってはかなわないな。しょうがない。お望み通りに致しましょう。

人を表す名詞を受けて、その人には誰もかなわないという評価を下すのに用いる。(3)は相手の言葉上手な誘いや強引な要求を断わりきれなかった時の発話で、多少相手をからかうようなニュアンスが感じられる。「…にかかっては」とも言う。

【にいたる】

書きことば的な表現。

1 …にいたる

[N／V　にいたる]

(1) この川は大草原を横切って流れ、やがては海に至る。

(2) 彼はトントン拍子で出世を続け、やがて大蔵大臣になるに至る。

(3) 仕事を辞めて留学するに至った動機は、人生の目標というものを見つめなおしてみたいと思ったことであった。

(4) さんざん悩んだ結果、仕事を辞めて田舎で自給自足の生活をするという結論に至った。

「到達する」という意味を表す。(1)のように空間的にある場所に到達する場合もあれば、(2)(3)(4)のようにことがらや考えなどの変化の結果、ある段階や結論に到達する場合もある。書きことば的なかたい表現。

2 Nにいたるまで

(1) 旅行中に買ったものからハンドバッグの中身に至るまで、厳しく調べられた。

(2) 部長クラスから新入社員に至

るまで、すべての社員に特別手当が支給された。

（3）テレビの普及によって、東京などの大都市から地方の村々に至るまで、ほぼ同じような情報が行き渡るようになった。

「まで」とほぼ同じ意味を表すが、細かいすみずみまでの範囲のことがらを言うのに使う。「...から」とともに使われることが多い。

3 ...にいたって

[N／V　にいたって]

（1）編集段階に至って、初めて撮影したビデオの映像が使いものにならないことがわかったが、すでに遅かった。

（2）上司にはっきり注意されるに至って、ようやく自分の言葉遣いに問題があることに気づいた。

（3）卒業するに至って、やっと大学に入った目的が少し見えてきたような気がする。

「ある極端な段階に到達するときになって」という意味を表す。後ろに「ようやく／やっと／初めて」などの語を伴うことが多い。

4 Nにいたっては

（1）父も母も私の転職に大反対し、姉にいたっては、そんなことより早く結婚しろと言い出す始末だった。

（2）首相が代わってからというもの、住宅問題も教育問題も手付かずで、軍事面にいたっては予算が増加する一方である。

（3）不登校の生徒に対して、どの教師も何の対応もしようとせず、教頭にいたってはどこかよその学校に転校してもらえたらなどと言う始末である。

（4）ことここにいたっては、家庭裁判所に仲裁を頼むしかないのではないだろうか。

マイナス評価のことがらがいくつかあり、その中でも極端な事例について述べるのに使う。（4）の「ことここにいたっては」は「ここまで問題が深刻になったら」という意味の慣用句。

5 ...にいたっても

[N／V　にいたっても]

（1）投票率が史上最低という事態に至っても、なお自分たちが国民から信頼されていると信じて疑わない政治家も少なくない。

（2）大学を卒業するに至っても、まだ自分の将来の目的があやふやな若者が大勢いる。

（3）高校での成績が下から10番以内にまで下がるに至っても、両親は僕に東京大学を受験させたがった。

「ある極端な段階に到達しても」という意

味を表す。後ろに「まだ／なお／いまだに」などの語を伴うことが多い。

【にいわせれば】

[Nにいわせれば]

（1）あの人に言わせれば、こんな辞書はまったく使いものにならないということらしい。

（2）映画好きのいとこに言わせれば、この映画は映像と音楽が見事に調和した、素晴らしい作品だという話だ。

（3）あなたは気に入っているかもしれないが、私に言わせればそんな作品は素人のお遊びみたいなものだ。

（4）彼に言わせると、今度見つかった恐竜の化石は、進化の歴史を変えるかもしれないような重要なものなんだそうだ。

人を表す名詞に付いて、「その人の意見では」という意味を表す。その意見が確信に満ちた強いものであるということを言うのに使う。

【において】

1 Nにおいて ＜状況＞

（1）卒業式は大講堂において行われた。

（2）その時代において、女性が学問を志すのは珍しいことであった。

（3）調査の過程において様々なことが明らかになった。

（4）日本の物理学会において、彼の右に出る者（＝彼より優れている者）はいない。

（5）当時の状況において戦争反対を訴えるのは限りなく勇気のいることだった。

場所や時代や状況を表す名詞を受けて、ある出来事が起こったり、ある状態が存在したりするときの背景を表す。「大講堂で」のように「で」に置きかえられるものが多いが、「で」よりも改まった感じを与える。名詞を修飾するときは、「大講堂における式典」のように「NにおけるN」という形になる。

2 Nにおいて ＜領域＞

（1）絵付けの技術において彼にかなうものはいない。

（2）大筋においてその意見は正しい。

（3）造形の美しさにおいてはこの作品が優れている。

（4）資金援助をするという点においては賛成だが、自衛隊を派遣するという点においては強く反対する。

「それに関して」「その点で」という意味を表す。後ろにはそのものごとに対する評価や他のものとの比較する表現が来ることが多い。

【におうじた】

→【におうじて】

【におうじて】

［Nにおうじて］

（1）物価の変動に応じて給料を上げる。

（2）売行きに応じて生産量を加減する。

（3）状況に応じて戦法を変える。

（4）状況に応じた戦法をとる。

（5）功績に応じた報酬を与える。

「その状況の変化や多様性に見合って」という意味を表す。後ろには「加減する」「戦法を変える」など、それに見合った変化を生じさせることを表す表現が続く。名詞を修飾するときは（4）（5）のように「NにおうじたN」となる。

【におかれましては】

［Nにおかれましては］

（1）先生におかれましては、お元気そうでなによりです。

（2）先生におかれましては、ますます御壮健の由、私ども一同喜んでおります。

目上の人を表す名詞を受けて、その人に向かって、健康状態などについての近況を尋ねたり述べたりするときに用いる。非常に改まった手紙の常套句。

【における】

［NにおけるN］

（1）過去における過ちを謝罪する。

（2）在職中における功労が認められた。

（3）学校における母語の使用が禁止された。

名詞を修飾するのに用いて、ある出来事が起こったり、ある状態が存在したりする時の背景となる場所や時間や状況などを表す。（3）のように、出来事の背景を表す場合は「での」と置きかえられることがあるが、「での」よりも改まった感じを与える。動詞を修飾するときには「過去において過ちを犯した」のように「において」となる。

【にかかったら】

→【にかかっては】

【にかかっては】

［Nにかかっては］

（1）彼の毒舌にかかっては社長も太刀打ちできない。

（2）あなたにかかっては私も嫌とは言えなくなる。

（3）彼女にかかってはいつもしらないうちにイエスと言わされてしまう。

人や人の言動を表す名詞に付いて、それを提示し、その人の態度やその人の言葉に対しては誰もかなわないという表現が続けられる。「…にあっては」とも言えるが、「…にかかっては」の場合はかなわないと感じる側からの視点で語ることができる点が異なっている。

（正）私にかかっては社長も太刀打ちできないさ。

（誤）私にあっては社長も太刀打ちできないさ。

「…にかかったら」「…にかかると」と言うこともある。

【にかかると】

→【にかかっては】

【にかかわらず】

1 Nにかかわらず

（1）試合は晴雨にかかわらず決行する。

（2）性別にかかわらず優れた人材を確保したい。

（3）このクラブは年齢や社会的地位にかかわらず、どなたでも参加できます。

天候、性別、年齢など、異なりを含んで成り立つ名詞を受けて、「その違いに関係なく」「その違いを問題にせずに」という意味を表す。

2 …にかかわらず

［V-る V-ないにかかわらず］

［A-い A-くないにかかわらず］

（1）経験のあるなしにかかわらず、だれでも参加することができる。

（2）結果の良し悪しにかかわらず彼の努力は評価されるだろう。

（3）成功するしないにかかわらず、努力することに意義があると思う。

（4）父が賛成するかしないかにかかわらず、私はこの仕事に就こうと思う。

対立する二つのことがらを表す表現を受けて、「それらに関係なく」「それらを問題とせずに」という意味を表す。「経験のあるなし」「結果の良し悪し」のように慣用表現となっている場合、主語は「の」を伴うが、それ以外の場合は「が」を用いるのが普通。（4）のように「…か…ないか」という形をとることもある。

【にかかわる】

［Nにかかわる］

（1）人の命にかかわる仕事をするにはそれなりの覚悟がいる。

（2）こんなひどい商品を売ったら店の評判にかかわる。

（3）例の議員が武器の密輸に関係していたかどうかはっきりさせなければならない。これは政党の名誉にかかわる重大な問題だ。

（4）たとえ噂でも倒産しそうだなどという話が広まると、会社の存続にかかわる。

（5）あんな人にいつまでもかかわっていたら、あなたまで評判を落としてしまいますよ。

（6）この裁判にかかわって以来、

子どもの人権について深く考えるようになった。

（7）事件が起きてから十年たった。いつまでもこの事件にかかわっているわけにはいかないが、いまだに犯人はつかまっていない。

「影響をおよぼす」あるいは「関係する」という意味を表す。（1）〜（4）は「影響をおよぼす」という意味。名詞には「名誉、評判、生死、合否」など、影響のおよぶものを表すものが使われる。（5）〜（7）は「関係する」、「つながりを持つ」という意味で、「人」「仕事」「出来事」などを表すものが用いられる。

【にかぎったことではない】

→【かぎる】2

【にかけたら】

[Nにかけたら]

（1）スピードにかけたら、その投手の右に出る者はいない。

（2）記憶力にかけたら、彼女は学校中の学生の中で５本の指に入るだろう。

「そのことに関しては」という意味を表す。「Nにかけては」とも言う。

→【にかけて】2

【にかけて】

1 NからNにかけて

（1）台風は今晩から明日の朝にかけて上陸するもようです。

（2）今月から来月にかけて休暇をとるつもりだ。

（3）北陸から東北にかけての一帯が大雪の被害に見舞われた。

場所や時間を表す名詞を受けて、「二つの地点・時点の間」という意味を表す。時間を表す表現の場合、（1）のように二つの時点の間のある時を表す場合と（2）のようにその間の時間帯を表す場合がある。「…から…まで（に）」と類似の用法だが、それほど明確に境界を特定せずに、二つの領域にまたがった時間や空間を漠然と問題にする場合に用いる。

2 Nにかけて

（1）話術にかけては彼の右にでるものはいない。

（2）忍耐力にかけては人より優れているという自信がある。

（3）彼は誠実な男だが、商売にかけての才能はあまり期待できない。

「そのことに関しては」という意味を表す。後ろには人の技術や能力などに関してなんらかの評価を述べる表現が続くことが多い。名詞を修飾するときは（3）のように「NにかけてのN」となる。

3 Nにかけて（も）

（1）命にかけてもこの秘密は守り通す。

（2）私の命にかけて、彼らを助け出してみせます。

（3）面子にかけても約束は守る。

慣用句的な表現で、「命」「名誉」「信用」「面目」など、人の生存や価値を社会的に保証するものを表す名詞が用いられて、「何がなんでも絶対に」と強い決意を表すのに用いられる。後ろには決意や約束を表す表現が続く。

【にかこつけて】

[Nにかこつけて]

（1）仕事にかこつけてヨーロッパ旅行を楽しんできた。

（2）病気にかこつけて仕事もせずにぶらぶらしている。

（3）接待にかこつけて上等な酒を思いっきり飲んできた。

ことがらを表す名詞を受けて、「それが直接の理由や原因でもないのにそれを口実にして」という意を表す。

【にかたくない】

[Nにかたくない]

（1）このままインフレが続くと社会不安が増大し、政権の基盤が危うくなることは想像にかたくない。

（2）親からも教師からも見放された太郎が、非行グループの誘いに救いを求めそうになっただろうことは想像に難くない。

（3）なぜ彼があのような行動に走ったのか、事件の前後の事情をよく聞いてみれば理解にかたくない。

慣用句的に「想像／理解にかたくない」のかたちで使うのが普通で、容易に想像できる、だれが考えても明らかだという意味を表す。書きことば的なかたい表現。

【にかまけて】

[Nにかまけて]

（1）仕事にかまけてちっとも子供の相手をしてやらない。

（2）遊びにかまけて勉強しようともしない。

（3）資料の整理にばかりかまけていては、仕事は前へ進まない。

ことがらを表す名詞を受けて、あることに精力を傾けてほかのことに目を向けないという意味を表す。後ろには他のことをなおざりにして省みないという否定的な意味の表現が続くことが多い。

【にかわって】

[Nにかわって]

（1）母にかわって、私があいさつします。

（2）急病の母にかわって、父が出席した。

（3）本日ご出席いただけなかった山田さんに代わって、ご家族の方に賞状と副賞を受け取っていただきます。

（4）21世紀には、これまでの先進諸国に代わって、アジア諸国が世界をリードするようになるのではないだろうか。

（5）山田さんが立候補を辞退するとなると、彼女に代わる実力者を立てなければならない。

あるものがするはずのことを他のものがするという意味を表す。名詞を修飾する時は(5)のように「NにかわるN」となる。「...のかわりに」とも言う。

【にかわり】

[Nにかわり]

（1）急病の母にかわり、父が出席いたします。

（2）21世紀には、これまでの先進諸国に代わり、アジア諸国が世界をリードする立場に立つという予測があるが、まだ未知数の部分が多いと言わざるを得ない。

「...にかわって」のあらたまった書きことば的な言い方。

→【にかわって】

【にかわる】

→【にかわって】

【にかんして】

[Nにかんして]

（1）その事件に関して学校から報告があった。

（2）地震災害に関しては、我が国は多くの経験と知識をもっている。

（3）その問題に関して質問したいことがある。

（4）地質学に関しての本を読んでいる。

（5）その事件に関しての報告はまだ受けていない。

（6）コンピュータに関する彼の知識は相当なものだ。

（7）地質調査に関する報告をするように求められた。

「それに関係して」「それについて」という意味を表す。名詞を修飾するときは(4)～(7)のように「Nに関してのN」や「NにかんするN」となる。「について」のやや改まった言い方。

【にかんする】

→【にかんして】

【にきまっている】

[N／A／V　にきまっている]

（1）こんないたずらをするのはあいつにきまっている。

（2）きっと彼も参加したがるに決まっている。

（3）そんなことを言ったら彼女が気を悪くするに決まっているじゃないか。

（4）A：田辺さん、ちゃんと時間にまにあったかしら。
B：30分も遅く出ていったのだから、遅刻したに決まっているじゃないの。

「必ずそうに違いない」という話し手の確信のこもった推測を表す。聞き手の推測と食い違っている内容を主張するときは「に決まっているじゃない(か／の)」となる。「にちがいない」の話しことば的な言い方。

【にくい】

[R-にくい]

（1）あの人の話は発音が不明瞭で分かりにくい。

（2）砂利道はハイヒールでは歩きにくい。

（3）人前ではちょっと話しにくい内容なのです。

（4）あんなえらい先生のところにはなかなか相談に行きにくい。

イ形容詞と同じように活用する。動詞の連用形に付いて、そうすることがむずかしい、簡単にはできないという意を表す。(1)(2)のように物理的に困難な場合や(3)(4)のように心理的に困難な場合などがある。「分かりにくい」などの例を除いては、「歩く」「話す」など意志的な行為を表す動詞に用いる。

（誤）あの人は喜びにくい人です。

（正）あの人を喜ばせるのはむずかしい。

反対の意を表すことばに「R-やすい」がある。

【にくらべて】

[Nにくらべて]

[Vのにくらべて]

（1）例年に比べて今年は野菜の出来がいい。

（2）男性に比べて女性の方が柔軟性があると言われる。

（3）ワープロを使うと、手で書くのに比べて字もきれいだし早い。

（4）大都市間を移動するのに比べて、田舎の町へ行くのは何倍も時間がかかる。

（5）東京に比べると大阪の方が物価が安い。

（6）ジョギングに比べると、水泳は全身運動で身体にもいいということだ。

「XにくらべてY」「XにくらべるとY」の形で、Xと比較してYについて述べるのに使う。「XよりY」に言いかえられる。

【にくらべると】

→【にくらべて】

【にくわえ】

[Nにくわえ]

（1）激しい風にくわえ、大雨に見舞われて、被害が拡大した。

（2）学生たちは日々の課題にくわ

え、毎週週明けにはレポート提出を義務付けられていた。

「…にくわえて」の書きことばの言い方。

→【にくわえて】

【にくわえて】

[Nにくわえて]

（1）激しい風にくわえて、雨もひどくなってきた。

（2）学生たちは毎日の宿題にくわえて毎週レポートを出さなければならなかった。

（3）ふたりは、子供の誕生に加えて、仕事も順調に進み、幸せで一杯の毎日を送っている。

（4）その地場産業は、国内需要の低迷に加えて安価な外国製品の流入に押されて、苦しい状態が続いている。

あることがらがそれだけで終わらず、さらに別のものごとが付け加わるという意味を表す。やや書きことば的。

【にこしたことはない】

[Nであるにこしたことはない]
[Na(である)にこしたことはない]
[A-いにこしたことはない]
[V-るにこしたことはない]

（1）体はじょうぶにこしたことはない。

（2）金はあるにこしたことはない。

（3）そうじのことを考えないかぎり、家は広いにこしたことはない。

（4）なにごとも慎重にやるにこしたことはないといつも私に言っている父が、きのう階段から落ちて足を折った。

「…のほうがいい」という意味を表す。常識的に当然と考えられていることについて使う場合が多い。

【にこたえ】

[Nにこたえ]

（1）その青年は人々の期待にこたえ、大きな熊を撃ち取った。

（2）消費者の声に応え、従来より操作が簡単な製品を開発する方針だ。

「…にこたえて」の書きことばの言い方。

→【にこたえて】

【にこたえて】

[Nにこたえて]

（1）その選手は両親の期待にこたえてみごとに完走した。

（2）多数の学生の要望に応えまして、日曜日も図書館を開館することにしました。

（3）多くの消費者の皆様のご意見にお応えして、この程、より使いやすい製品を発売いたしました。

（4）国連からの要請に応えて、政府は救援チームを派遣することにした。

（5）多くのファンの声援に応える完璧なプレーをなしとげた。

「期待」や「要請」などの名詞に付いて、それがかなうように応じて、という意味を表す。また名詞を修飾する場合は、（5）のように「Nにこたえる N」となる。やや書きことば的。

【にさいし】

[Nにさいし]
[V-るにさいし]

（1）今回の合併に際し、大規模な合理化が行われた。

（2）会長選出に際し不正が行われたとの噂がある。

「…にさいして」の書きことばの言い方。

→【にさいして】

【にさいして】

[Nにさいして]
[V-るにさいして]

（1）お別れに際して一言ご挨拶を申し上げます。

（2）今回の初来日に際して、大統領は通商代表団を伴ってきた。

（3）この度の大規模なアジア現代美術展を開催するに際して、各国の多数のアーティストの協力と参加を得られたことには大きな意義がある。

（4）長年の懸案であった平和条約を締結するに際して、両国はお互いの歴史認識を深め合う意義を改めて認識すべきである。

（5）今回の会議参加に際しての最大の懸案事項はやはり安全保障問題であろう。

ある出来事の機会に、という意味を表す。名詞を修飾するときは（5）のように「N／V-るにさいしてのN」となる。書きことば的。

【にさきだち】

[Nにさきだち]
[V-るにさきだち]

（1）実験にさきだち、入念なチェックを行った。

（2）出陣に先立ち神に祈りをささげた。

「さきだって」の書きことばの言い方。

→【にさきだって】

【にさきだって】

[Nにさきだって]
[V-るにさきだって]

（1）試験開始にさきだって、注意事項を説明する。

（2）首相来日に先だって、事務次官レベルの事前協議が始まった。

（3） 開会を宣言するに先だって、今回の災害の犠牲者に黙禱を捧げたいと思います。

（4） 交渉を始めるに先だって、お互いの内政問題を議題にしないという暗黙の合意が両国の間にできたようだ。

「何かを始める前に」という意味。その前にしておくべきことがらをするということを述べる場合に用いられる。名詞を修飾する場合は「Nにさきだつ N」となるが、「V-るにさきだつ N」の形はない。

（正） 首相来日に先立つ事前協議が始まった。

（誤） 首相が来日するに先立つ事前協議が始まった。

【にしたがい】

［Nにしたがい］

［V-るにしたがい］

（1） 引率者の指示に従い行動すること。

（2） 上昇するに従い気温が上がる。

「にしたがって」の書きことばでの言い方。

→【にしたがって】

【にしたがって】

1 Nにしたがって

（1） 引率者の指示にしたがって行動して下さい。

（2） しきたりに従って式をとり行った。

（3） 上司の命令に従って不正を働いた。

（4） 矢印に従って進んで下さい。

人、規則、指示などを表す名詞を受けて、それに逆らわずに言うなりになって、指示通りに行動して、という意味を表す。

2 V-るにしたがって

（1） 上昇するにしたがって気圧が下がる。

（2） 進むにしたがって道は険しくなる。

（3） この材質は年月を重ねるに従って美しいつやがでて来る。

「その動作や作用が進むのにともなって」という意味を表す。後ろには「気圧が下がる」「険しくなる」など、前に述べた動作や作用の進行にともなって変化が生じることがらが続く。

【にしたって】

「にしろ」「にしても」の話しことばでの言い方。

1 Nにしたって

（1） 社長にしたって成功の見通しがあって言っていることではない。

（2） 彼にしたって、今ごろは自分の行いを恥じているはずだ。

（3） 結婚式にしたってあんなに派手にやる必要はなかったんだ。

（4） 住むところにしたって、探すのには一苦労だ。

（5） 食事の支度ひとつにしたってあの歳では重荷になっているはずだ。

人やものごとを表す名詞に付いて、「そのような人やものやことの場合も」という意味を表す。いろいろある中の一つを例として挙げて、それについて述べるのに使う。他にも同じ様なことがいえるということが含みとして感じられる。

2 V-るにしたって

（1） 人に注意を与えるにしたって、もう少し言葉遣いには気を付けるべきだ。

（2） 休暇を増やすにしたって、仕事量が変わらなければ休むこともできない。

（3） 休暇をとるにしたって、旅行などとても無理だ。

「そのよう場合でも」という意味を表す。「そこに述べられたことがらについては一応認めるが」という含みがあり、後ろにはそのような場合に普通予測されるのとは違うことがらがつづく。

3 疑問詞＋にしたって

（1） どちらにしたって勝てる見込みはほとんどない。

（2） なにをやるにしたって金がかかる。

（3） だれにしたってこんな問題にはかかわりあいたくない。

（4） なんにしたってこの種の問題を解決するには時間がかかる。

「いずれ」「どちら」「なに」「だれ」などの疑問詞を伴って、「どんな場合でも」や「だれの場合でも」などの意味を表す。（2）のように疑問詞を含む節が用いられることもある。「…にしても」のくだけた話しことばでの言い方。

【にしたら】

［Nにしたら］

（1） せっかくの申し出を断ってしまったのだから、彼にしたら、自分の親切が踏みにじられたと感じていることだろう。

（2） 母親は子供のためを思って厳しくしつけようとしたのでしょうが、子供にしたら自分が嫌われていると思いこんでしまったのです。

（3） 学生の語学力を高めるには必要な訓練なのだが、学生にしたら退屈きわまりない授業だと思うにちがいない。

（4） 私にしたら親切のつもりだったのですが、言い方がきつかったのか彼はすっかり怒ってしまいました。

人を表す名詞を受けて、「その人の立場に立てば」という意味を表す。他人の立場にたってその人の考えなどを推測す

るという意味を表すのに用いる。話し手自身の立場について用いることはできない。

（誤）私にしたらたいへん嬉しく思います。

（正）私としてはたいへん嬉しく思います。

【にして】

1 Nにして ＜段階＞

（1）この歳にして初めて人生のなんたるかが分かった。

（2）40にしてようやく子宝に恵まれた（＝子供が生まれた）。

（3）長年苦労を共にした妻にして初めて理解できることである。

「そこに至って」の意味。ある段階に到達して初めて何かが起こったことを表すのに用いられる。「Nにしてようやく」「Nにして初めて」のように用いられることが多い。

2 Nにして ＜並立＞

（1）教師にして学問のなんであるかを知らない。

（2）彼は科学者にして優秀な政治家でもある。

「Nでありなおかつ」の意味。（1）のように「Nでありながら」と逆接的に後ろに続けるものと、（2）のように単に並列的に並べるものがある。書きことばに用いる。

3 …にして

（1）幸いにして大事にいたらずにすんだ。

（2）不幸にして、重い病にかかってしまった。

（3）その事故で一瞬にして家族全員を失った。

（4）生まれながらにして体の弱い子供だった。

（5）その小舟は、たちまちにして波に飲まれて沈んでいった。

特定の名詞や副詞に付いて、ことがらの状況を述べるのに用いる。（1）や（2）のように後に続くことがらが好運なことであるかどうかといった話し手の評価を述べる場合と、（3）～（5）のようにことがらのあり方や起こり方を述べる場合がある。

【にしてからが】

［Nにしてからが］

（1）リーダーにしてからがやる気がないのだから、ほかの人たちがやるはずがない。

（2）課長にしてからが事態を把握していないのだから、ヒラの社員によくわからないのも無理はない。

（3）夫にしてからが、自分の事を全然分かってくれようともしない。

本来はもっともそれから遠いはずの例を示して、「それでさえそうなのだから、ましてほかのものは言うまでもない」という気持ちを表すのに用いる。マイナス評価が多い。「からして」とも言う。

【にしては】

［N／Na／V　にしては］

（1）子供にしてはむずかしい言葉をよく知っている。

（2）このアパートは都心にしては家賃が安い。

（3）貧乏人にしてはずいぶん立派なところに住んでいる。

（4）始めたばかりにしてはずいぶん上達したものだ。

（5）近々結婚するにしてはあまり楽しそうな様子ではない。

（6）下調べをしたにしては不十分な内容であった。

「その割に」という意味を表す。後には、そこから当然予想されることと食い違うことがらが続く。「X（な）のに」に言いかえられる場合が多いが、「のに」にはXがすでに確定した事実であるという含みがあるのに対して、「Xにしては」にはそのような含みはない。

【にしてみたら】

→【にしてみれば】

【にしてみれば】

［Nにしてみれば］

（1）今何の歌がはやっているかなんて、私にしてみればどうでもいいことだ。それよりもっと大切なことが山ほどある。

（2）長い間使っていなかった古いコンピュータをあげたのだが、彼女にしてみればとてもありがたかったらしく、何度も何度もお礼を言われた。

（3）私は軽い気持ちで話していたのだが、あの人にしてみれば大きな問題だったのだろう。彼は落ち込んで誰とも口をきかなくなってしまった。

（4）母にしてみれば、大切に育ててきた息子が突然家を出ていったのだから、たいそうショックだろうが、私は親離れしようとしている弟に声援を送りたい気持ちだった。

人を表す名詞に付いて、「その人にとっては」という意味を表す。その人が他の人と比べて違う見方を持っているということを言いたいときに使う。「…にしてみたら」と言うこともある。

【にしても】

くだけた話しことばでは「…にしたって」、改まった話しことばでは「…にせよ」「…にしろ」が用いられる。

1 Nにしても

（1）彼にしても、こんな騒ぎになるとは思ってもいなかったでしょう。

（2） 母にしても初めから賛成していたわけではありません。
（3） かなりハードな仕事だし、給料にしても決していいというわけでもない。
（4） 歩き方ひとつにしてもきちんと作法に則っている。
（5） 身につけているものひとつにしても育ちのよさが感じられた。

人やものを表す名詞に付いて、それ以外の場合にも同様のことがいえるという含みをもたせながら、その人やものについて述べるのに用いられる。いろいろある中の一つを取りあげて述べ、他のものは当然そうだという含みを強調するときは、（4）（5）のように「…ひとつにしても」となる。

2 …にしても

［N（である）にしても］
［A／V　にしても］

（1） 子供のいたずらにしても笑って済ませられる問題ではない。
（2） たとえ失敗作であるにしても十分に人を引き付ける魅力がある。
（3） 忙しいにしても連絡ぐらいは入れられただろうに。
（4） 私を嫌っているにしても、こんな仕打ちはあんまりだ。
（5） いくら貧しいにしても人から施しは受けたくない。

「…で述べられているような事態であることをかりに認めた場合でも」という意味を表す。後ろには、そこから当然予測されることとは食い違うことがらが述べられる。（5）のように「いくら」「どんなに」などの疑問詞と共に用いられることも多い。

3 …にしても…にしても

［NにしてもNにしても］
［VにしてもVにしても］

（1） 山田にしても佐藤にしても、この仕事に向いているとはいえない。
（2） 犬にしても猫にしてもこのマンションではペットを飼ってはいけないことになっている。
（3） 当選にしても落選にしても、今回の選挙に立候補したことは大いに意味があった。
（4） 行くにしても行かないにしても、一応準備だけはしておきなさい。
（5） 勝つにしても負けるにしても、正々堂々と戦いたい。
（6） 勝ったにしても負けたにしても、よく頑張ったとほめてやりたい。

同じジャンルの二つのもの、あるいは対立するふたつのものごとを取りあげて、「そのどちらの場合でも」という意味を表す。

4 疑問詞＋にしても

（1） いずれにしても結論は次回に持ち越されることになった。

（2） だれにしてもそんなことはやりたくない。
（3） なんにしても年内に立ち退いてもらいます。
（4） だれがやったにしても、我々全員で責任をとらなければならない。
（5） 何をするにしても、よく考えてから行動しなさい。

「いずれ」「だれ」「なに」などの疑問詞を伴って、「どんな場合でも」や「だれの場合でも」などの意を表す。（4）（5）のように疑問詞を含む節が用いられることもある。

5 それにしても　→【それにしても】

【にしろ】

（1） 役人がわいろを受け取ったかどうか問題になっているが、かりに金銭の授受はなかったにしろ、なんらかの報酬をもらったことは間違いない。
（2） 妻にしろ子供達にしろ、彼の気持ちを理解しようとするものはいなかった。
（3） どちらの案を採用するにしろ、メンバーには十分な説明をする必要がある。

「…にしても」の改まった書きことばの言い方。「…にせよ」とも言う。

→【にしても】

【にすぎない】

→【すぎない】

【にする】

→【する】

【にせよ】

（1） 直接の責任は部下にあるにせよ、彼の監督不行届きも糾弾されるだろう。
（2） 来るにせよ来ないにせよ、連絡ぐらいはしてほしい。
（3） いずれにせよもう一度検査をしなければならない。

「…にしても」の改まった書きことばの言い方。「…にしろ」とも言う。

→【にしても】

【にそういない】

［N／V　にそういない］

（1） 犯人はあの男に相違ない。
（2） 彼女は3日前に家を出たまま帰ってこない。きっとなにか事件に巻き込まれたに相違ない。
（3） これを知ったら、彼はきっと烈火のごとく怒り出すに相違ない。

「間違いなくそうである」「きっと…だろう」といった話し手の強い確信を表す。書きことばに用いる。「…にちがいない」に言いかえられる。

【にそくして】

[Nにそくして]

(1) 事実にそくして想像をまじえないで事件について話してください。

(2) 経験にそくしていうと、ぼくの人生にとって若いときの異文化体験の意味はとても大きい。

(3) ゼロ才児保育につきましてはそれぞれの家庭で事情が異なると思いますから、実情に即して対処いたします。

(4) この問題は私的な感情ではなく、法にそくして解釈しなければならない。

(5) 法律に則して言うと、今回の事件は刑事事件として取り扱うべき性格のものだ。

事実、体験、規範などを表す名詞に付いて、「それにそって」、「それに従って」あるいは「それを基準として」という意味を表す。(1)～(3)のように事実、経験などの名詞に付くときは「即して」と書き、(4)(5)のように法律や規範などの名詞に付くときは「則して」と書く。

【にそった】

→【にそって】

【にそって】

[Nにそって]

(1) この道に沿ってずっと行くと、右手に大きい公園が見えてきます。

(2) 川岸に沿って、桜並木が続いていた。

(3) この塀に沿って植えてある花は、日陰でもよく育つ。

(4) 書いてある手順に沿ってやってください。

(5) マニュアルに沿った手紙の書き方しか知らないのでは、いざというとき困る。

(6) 妻は夫に添って病室に入っていった。

川や道など長く続くものや、手順やマニュアルなど作業の流れを示すものを表す名詞に付いて、「それが続いていくとおりに／そのふちにずっと／それにしたがって」などの意味を表す。この場合、漢字は「沿う」を用いる。また、(6)のように、人やものに離れずに付き従うという意味を表すこともあるが、この場合の漢字は「添う」を用いる。名詞を修飾するときは(5)のように「NにそったN」となる。

【にたいして】

1 …にたいして

[Nにたいして]
[Naなのにたいして]
[A-いのにたいして]
[Vのにたいして]

(1) 私の発言に対して彼は猛烈に攻撃を加えてきた。

(2) 私の質問に対して何も答えてくれなかった。

(3) 彼は女性に対しては親切に指導してくれる。

(4) 現在容疑者に対しての取り調べが行われているところです。

(5) 私が手を振って合図したのに対して、彼女は大きく腕を振って応えてくれた。

「そのものごとに向けて／応じて」などの意味を表し、後ろにはそれに向けられた行為や態度など、なんらかの働きかけを示す表現が続く。名詞を修飾するときは「…にたいしてのN」「…にたいするN」となる。

2 N＋数量詞＋にたいして

(1) 研究員1人に対して年間40万円の補助金が与えられる。

(2) 学生20人に対して教員一人が配置されている。

(3) 砂3に対して1の割合で土を混ぜます。

(4) 学生1人に対して20平米のスペースが確保されている。

数量で表された数を単位として、「その単位に応じて」の意を表す。「…について」「…につき」に言いかえられる。

3 …のにたいして

(1) 彼が自民党を支持しているのに対して、彼女は共産党を支援している。

(2) 兄が背が高いのに対して、弟の方はクラスで一番低い。

対比的なふたつのことがらを並べて示すのに用いる。

【にたいする】

1 NにたいするN

(1) 私の疑問に対する答えはなかなか得られない。

(2) 子供に対する親の愛情ははかり知れない。

(3) 親に対する反抗心をむき出しにしてくってかかった。

(4) 書画に対する造詣が深い。

「それに向けての」「それに関しての」という意を表し、次に続く名詞を修飾する。「その問に対しての解答」のように、「NにたいしてのN」という形が用いられることもある。

2 N＋数量詞＋にたいするN

(1) 研究員1人に対する年間の補助は40万円である。

(2) 教員1人に対する学生数は20人という計算になる。

数量で表された数を単位として、「その単位に応じて」の意を表し、それに続く名詞を修飾するのに用いられる。

【にたえない】

1 V-るにたえない

(1) 幼い子供が朝から晩まで通りで物乞いをしている姿は見る

にたえない。

（２）近ごろの週刊誌は暴露記事が多く、読むにたえない。

（３）地震のあと、町はパニック状態となった。暴徒が次々に商店をおそい、正視するにたえない光景が繰り広げられた。

あまりにひどい状態で、見たり聞いたりするのがつらいという意味を表す。「見る」「読む」「正視する」など、ごく限られた動詞しか使わない。

2 Nにたえない

（１）このようなお言葉をいただき、感謝の念にたえません。

（２）晩年近くなってボランティア活動を通じて若い人々とこのようなすばらしい出会いがあろうとは考えてもみないことであった。感激にたえない。

「感謝」「感激」などの限られた名詞に付いて、その意味を強調するのに用いる。かたい挨拶言葉として使うのが普通。

【にたえる】

1 Nにたえる

（１）この木はきびしい冬の寒さにたえて、春になると美しい花を咲かせます。

（２）重圧に耐えられなくなって、彼は社長の座を降りた。

負けないで我慢するという意味を表す。否定の表現は不可能を表す「たえられない」を使うことが多い。

2 …にたえる

［Nにたえる］

［V-るにたえる］

（１）アマチュアの展覧会ではあるが鑑賞にたえる作品が並んでいる。

（２）きびしい読者の批評にたえる紙面作りを目指したい。

（３）読むに耐える記事が書けるようになるまでには相当の訓練が要る。

「鑑賞」「批判」、「読む」「見る」などの限られた名詞や動詞に付いて、そうするだけの十分な価値があるという意味を表す。否定の表現は「たえない」を使うのが普通で、「たえられない」は使わない。

→【にたえない】

【にたりない】

［V-るにたりない］

（１）とるに足りない（＝つまらない）ことをそんなに気にするな。

（２）あんなものは恐れるに足りない。

（３）彼は信頼するに足りない人物だ。

「それほどのものではない」「そうするだけの価値がない」という意を表す。

【にたる】

［V-るにたるN］

（１）昨今の政治家は私利私欲に走り、尊敬するにたる人物はいなくなってしまった。

（２）学校で子供たちが信頼するにたる教師に出会えるかどうかが問題だ。

（３）一生のうちに語るに足る冒険などそうあるものではない。

（４）会議では皆それぞれ勝手なことをいうばかりで、耳を傾けるに足る意見は出なかった。

（５）すべてが眠ったような平和な島では、報道するに足るニュースなどなにもなかった。

「尊敬する」「信頼する」などの限られた動詞に付いて、「そうする値打ちがじゅうぶんにある」「そうするにふさわしい」という意味を表す。かたい書きことば。

【にちがいない】

→【ちがいない】

【について】

1 Nについて

（１）農村の生活様式について調べている。

（２）その点については全面的に賛成はできない。

（３）彼女は自分自身について何も語ろうとしない。

（４）事故の原因について究明する。

（５）経営方針についての説明を受けた。

（６）将来についての夢を語った。

（７）ことの善悪についての判断ができなくなっている。

「それに関して」という意を表す。名詞を修飾するときは（５）～（７）のように「NについてのN」という形になる。丁寧に言うときは「つきまして」となる。

（例）その件につきましては後でお返事さしあげます。

2 N＋数量詞＋について

（１）車１台について５千円の使用料をちょうだいします。

（２）乗客１人について３つまでの手荷物を持ち込むことができます。

（３）作業員５人について１部屋しか割り当てられなかった。

数量を受けてその数を単位とし、「その単位に応じて」の意を表す。「…にたいして」。

【につき】

1 Nにつき ＜関して＞

（１）本部の移転問題につき審議が行われた。

（２）領土の分割案につき関係各国の代表から厳しい批判が浴びせられた。

「Nについて」のあらたまった言い方。

→【について】1

2 Nにつき <理由>

（1）改装中につきしばらくお休みさせていただきます。

（2）父は高齢につき参加をとりやめさせていただきます。

名詞を受けて「その理由で」の意を表す。改まった手紙などに用いられる。

3 N＋数量詞＋につき

（1）参加者200人につき、5人の随行員がついた。

（2）テニスコートの使用料は1時間につき千円ちょうだいします。

（3）食費は1人1日につき2千円かかる。

「N＋数量詞＋について」のあらたまった言い方。

→【について】2

【につけ】

1 Nにつけ

（1）何事につけ我慢が肝心だ。

（2）彼は何かにつけ私のことを目のかたきにする。

（3）山田さんご夫妻には何かにつけ親切にしていただいています。

慣用的に固定した表現で、「何事につけ」「何かにつけ」の形で、それぞれ「どんな場合でも」「何かのきっかけがあるたびに」という意味を表す。

2 V-るにつけ

（1）彼女の姿を見るにつけ、その時のことが思い出される。

（2）そのことを考えるにつけ後悔の念にさいなまれる。

（3）その曲を聞くにつけ、苦しかったあの時代のことが思い出される。

慣用的に固定した表現で、「見る」「思う」「考える」などの動詞に付き、「何かを見たり思ったりするたびにそれに関連して」という意を表す。後ろには「思い出」「後悔」など、感情や思考に関する内容が続く。

3 …につけ…につけ

[AにつけAにつけ]

[VにつけVにつけ]

（1）いいにつけ悪いにつけ、あの人達の協力を仰ぐしかない。

（2）話しがまとまるにつけ、まとまらないにつけ、仲介の労を取ってくれた方にはお礼をしなければなりません。

慣用的に固定した表現で、二つの対比的な内容を表す語句を並べて、「それらのどちらの場合でも」という意味を表す。

【につれて】

[Nにつれて]

[V-るにつれて]

（1）町の発展につれて、前になかった新しい問題が生まれて来た。

（2）時間がたつにつれて、悲しみは薄らいできた。

（3）設備が古くなるにつれて、故障の箇所が増えて来た。

（4）試合が進むにつれて、観衆も興奮してきて大騒ぎとなった。

（5）成長するにつれて、娘は無口になってきた。

ある事態の進展とともに、ほかの事態も進展するという、おおまかな比例関係を表す。書きことばの場合は「…につれ」とも言う。

【にて】

[Nにて]

（1）校門前にて写真撮影を行います。

（2）では、これにて失礼致します。

（3）会場係は当方にて手配いたします。

出来事の場所を表したり、「これにて」「当方にて」などの慣用的表現に用いられる。改まった手紙などの書きことばに用いる。「で」に言いかえられる。

【にとって】

[Nにとって]

（1）彼にとってこんな修理は何でもないことです。

（2）年金生活者にとってはインフレは深刻な問題である。

（3）度重なる自然災害が国家の再建にとって大きな痛手となった。

（4）病床の私にとっては、友人の励ましがなによりも有り難いものだった。

多くは人や組織を表す名詞を受けて、「その立場からみれば」という意味を表す。まれに（3）のようにものごとを表す名詞を受けて「その点から考えると」の意を表すこともある。後ろには可能・不可能を表す表現や「むずかしい」「有り難い」「深刻だ」など、評価を表す表現が続く。「賛成」「反対」「感謝する」などの態度表明にかかわる表現は用いることができない。

（誤）その案は私にとって反対です。

（正）私はその案に反対です。

【にどと…ない】

[にどとV-ない]

（1）こんな恐ろしい思いは二度としたくない。

（2）同じ間違いは二度と犯さないようにしましょう。

（3）こんなチャンスは二度と訪れないだろう。

（4）あんなサービスの悪いレストランには二度と行きたくない。

（5）今、別れたら、あの人にはもう二度と会えないかもしれない。

「絶対に…ない」「決して繰り返さない」と強く打ち消すのに用いる。

【にとどまらず】

［Nにとどまらず］

（1）その流行は大都市にとどまらず地方にも広がっていった。

（2）干ばつはその年だけにとどまらず、その後3年間も続いた。

（3）大気汚染による被害は、老人や幼い子供達にとどまらず、若者達にまで広がった。

地域や時間などを表す名詞を受けて、「その範囲には収まらず」「それだけでなく」という意味を表す。

【にともない】

［Nにともない］

［Vのにともない］

（1）高齢化にともない、老人医療の問題も深刻になりつつある。

（2）地球の温暖化にともない、海面も急速に上昇している。

（3）政界再編の動きに伴いまして、このたび新しく党を結成するはこびとなりました。

「にともなって」のさらにかたい言い方。

→**【にともなって】**

【にともなって】

［Nにともなって］

［Vのにともなって］

（1）気温の上昇にともなって湿度も上がり蒸し暑くなってきた。

（2）学生数が増えるのにともなって、学生の質も多様化してきた。

（3）父親の転勤に伴って、一家の生活拠点は仙台からニューヨークへと移ることになった。

「にともなって」の前と後に変化を表す表現を用いて、前で述べる変化と連動して後に述べる変化が起こるという意味を表す。あまり個人的なことがらでなく、規模の大きい変化を述べるのに使う。書きことば的でフォーマルな文体。

【になく】

［Nになく］

（1）店の中はいつになく静かだった。

（2）例年になく、今年の夏は涼しい日が多い。

（3）彼女は歌がうまいと言われて、柄にもなく顔を赤らめていた。

慣用的に固定した表現で、「いつもとは違って」という意味を表す。「…にもなく」とも言う。

【になると】

→**【なる】9**

【ににあわず】

［Nににあわず］

（1）いつもの佐藤さんに似合わず口数が少なかった。

（2）彼は大きな体に似合わず気の

小さいところがある。

「そのものが持つ性質とは一致しないで」という意味を表す。

【には】

1 Nには

助詞の「に」がついた名詞を取り立てるために「は」がつけ加えられたもの。

a Nには ＜時・場所・方向・相手など＞

（1）春には桜が咲きます。

（2）10時には帰ってくると思います。

（3）この町には大学が三つもあります。

（4）結局国には帰りませんでした。

（5）山田さんにはきのう会いました。

（6）みなさんには申し訳ありませんが、今日の集まりは中止になりました。

助詞の「に」が付いていろいろな意味を表す句を取り立てて、主題として示したり、他のものとの対比を示したりする「は」の意味が付け加えられたもの。「は」の意味を加える必要が無いときは「に」だけで用いられる。

b Nには ＜評価の基準＞

（1）このセーターは私には大きすぎる。

（2）この問題はむずかしすぎて私には分かりません。

（3）この仕事は経験のない人には無理でしょう。

人を表す名詞を受けて「その人にとっては」という意を表す。「大きい」「むずかしい」「できる」「できない」などの評価が何に対して下されるのかを示す。「他のものはともかくとして」という対比的な含みが生じる。「に」だけで用いられることは少なく、「…には」の形となるのが普通。

c Nには ＜尊敬の対象＞

（1）皆様にはお変わりなくお過ごしのことと存じます。

（2）先生にはお変わりなくお過ごしのこととお喜び申し上げます。

目上の相手を表す名詞を受けて、その人に敬意を表すために用いる。改まった手紙などでしか用いない。さらに改まった表現としては「…におかれましては」がある。

2 V-るには

（1）そこに行くには険しい山を超えなければならない。

（2）その電車に乗るには予約をとる必要があります。

（3）健康を維持するには早寝早起きが一番だ。

「そうするためには」「そうしたいと思うのなら」という意味を表す。

3 V-るにはVが

（1）行くには行くが、彼に会えるかどうかは分からない。

（2）A：あしたまでに完成させると約束したんですって？

B：うん。約束するにはしたけれど、できるかどうか自信がないんだ。

（3）いちおう説明するにはしたのですが、まだみんな、十分に理解できていないようでした。

同じ動詞を繰り返し用いて、「いちおうはそうする（そうした）けれども、満足のいく結果になるかどうかわからない」という意味を表す。

【にはあたらない】

[V-るにはあたらない]

（1）中学校で教師をしている友人の話によると、学校でのいじめが深刻だという。しかし驚くにはあたらない。大人の社会も同じなのだから。

（2）彼ひとりだけ仲間を置いて下山したからといって、非難するには当たらない。あのような天候のもとではそれ以外の方法はなかっただろう。

（3）子どもがちっとも親のいうことをきかないからといって、嘆くには当たらない。きっといつか親の心がわかる日がくる。

（4）彼が会議でひとことも発言しなかったからといって責めるには当たらない。あのワンマン社長の前ではだれでもそうなのだ。

「驚く」「非難する」などの動詞に付いて、そうすることは適当ではない、的を得ていないという意味を表す。「…からといって」などの理由を表す表現と共に使うことが多く、「こういう理由で驚いたり非難したりするのは的はずれだ」の意味となる。

【にはおよばない】

1 …にはおよばない

[Nにはおよばない]

[V-るにはおよばない]

（1）検査では何も異常は見つかりませんでした。すっかり元気になりましたから、ご心配には及びません。

（2）分かりきったことだから、わざわざ説明するには及ばない。

（3）こんな遠くまで、はるばるお越しいただくには及びません。

「そうするほどのことはない」「その必要はない」という意味を表す。「…にはあたらない」とも言う。

2 それにはおよばない

（1）A：車で家までお送りしましょう。

B：いいえ、それには及びません。歩いても5分ほどの所ですから、どうぞご心配なく。

（2）A：空港までお迎えにあがりますよ。

B：大丈夫です。よく知っている所ですから、それには及びませんよ。

相手の申し出に対して「そこまでしてくれなくても大丈夫」と断わる場合に用いる。相手の気配りを認める含みがあり、「その必要はありません」よりも丁寧な言い方。

【にはんし】

[Nにはんし]

（1）大方の予想に反して、我らのチームが圧勝した。

（2）人々の期待に反し、景気は依然低迷を続けている。

「…にはんして」の書きことばの言い方。

→【にはんして】

【にはんして】

[Nにはんして]

（1）予想にはんして、今年の試験はそれほど難しくはなかったそうだ。

（2）周囲の期待に反して、彼らは結局結婚しなかった。

（3）年初の予測に反して、今年は天候不順の年となった。

（4）今回の交渉では、大方の見方に反して、相手側がかなり思い切った譲歩案を提示した模様だ。

「予想」「期待」など将来を予測する意味を表す名詞に付いて、結果がそれとは異なるものであることを表す。「…とは違って」「…とは反対に」に言いかえられる。書きことば的。また名詞を修飾する場合は「Nにはんする／にはんしたN」となる。

（例）先週の試合は、大方の予想に反する結果となった。

【にひきかえ】

[Nにひきかえ]

（1）兄にひきかえ弟はだれにでも好かれる好青年だ。

（2）努力家の姉に引きかえ、弟は怠け者だ。

（3）このごろは子供っぽい男子学生にひきかえ女子学生のほうが社会性があってしっかりしているようだ。

（4）市当局の柔軟な姿勢にひきかえ、窓口の高圧的な対応は市民の反発を招いている。

対照的な二つのものを比べ、「一方とは反対に他方は」という意味を表す。話しことばでは「Nにくらべて」を使う。

【にほかならない】

1 Nにほかならない

（1）この会を成功のうちに終わらせることが出来ましたのは、皆様がたのご協力のたまものに

他なりません。

（2）年を取るというのは、すなわち経験を積むということに他ならない。

「それ以外にない」「まさにそのものである」と断定的に述べる場合に用いる。

2 …にほかならない

[…から／…ため　にほかならない]

（1）父が肺ガンになったのは、あの工場で長年働いたために他ならない。

（2）彼が私を憎むのは、私の業績をねたんでいるからに他ならない。

（3）この仕事にこんなにも打ち込むことができたのは、家族が支えていてくれたからに他ならない。

あることがらが起こった理由や原因がそのこと以外にない、まさにそのためであると断定的に述べるのに用いられる。

【にむかって】

1 Nにむかって ＜方向＞

（1）この飛行機は現在ボストンに向かっています。

（2）病人はだんだん快方に向かっています。

（3）両国の関係は最悪の事態に向かって一気に進んでいった。

（4）春に向かってだんだん暖かくなってきた。

（5）このトンネルは出口に向かって下り坂になっている。

ものが移動する際の方向を表したり、時間や状態が変化する際の行く先を表したりする。（1）〜（3）は、「この飛行機」「病人」「両国の関係」が行き着く先を示し、（1）（2）のように文の述語として用いることもできる。（4）と（5）は、後に変化を表す表現が続き、「そこに近づくにつれて何かの状態変化が起こる」意を表す。例えば（4）は、春に近づくにつれて、気温の上昇という変化が起こるということを表している。

2 Nにむかって ＜対面＞

（1）机に向かって本を読む。

（2）黒板に向かって座る。

（3）マリア像に向かって祈りを捧げる。

（4）私の部屋は正面に向かって左側にあります。

ものや人を表す名詞を受けて、それに対してまっすぐ前を向く姿勢をとるという意味を表す。

3 Nにむかって ＜相手＞

（1）親に向かって乱暴な口をきくな。

（2）敵に向かって発砲する。

（3）上司に向かって反抗的な態度を示す。

人を表す名詞を受けて、ある態度を取ったりある行為を仕掛けたりする際の相手を表す。「…にたいして」とも言える。

【にむけて】

1 Nにむけて ＜方向＞

（1）入口に背を向けて座っている。

（2）飛行機は機首を北に向けて進んでいた。

（3）飛行機は機首を北に向けた。

場所や方位を表す名詞を受けて、ものの移動して行く先や、人の姿勢の向きなどを表す。（3）のように文の述語として用いることもできる。

2 Nにむけて ＜目的地＞

（1）飛行機はヨーロッパに向けて飛び立った。

（2）彼らは任地に向けて出発した。

場所を表す名詞を受けて移動の目標とする地点を表す。後ろには移動を表す表現が続く。

3 Nにむけて ＜相手＞

（1）人々に向けて戦争の終結を訴えた。

（2）アメリカに向けて、強い態度を取り続けた。

（3）彼は戦争の当事者たちに向けて根気強く停戦協定の締結を訴え続けた。

人や組織を表す名詞を受けて、「…に対して」の意味を表す。

4 Nにむけて ＜目標＞

（1）スポーツ大会に向けて厳しい練習が続けられた。

（2）国際会議の開催に向けてメンバー全員の協力が求められた。

（3）平和的な問題解決に向けて人々は努力を惜しまなかった。

できごとを表す名詞を受けて、「そのできごとの実現をめざして」の意味を表す。後ろには行為を表す表現が続く。

【にめんした】

→【にめんして】

【にめんして】

1 Nにめんして ＜対面＞

（1）美しい庭に面して、バルコニーが広がっている。

（2）この家は広い道路に面している。

（3）リゾート地のホテルで、海に面した部屋を予約した。

道路や庭や海など、ある広がりを持った場所を表す名詞を受けて、そこに対して、ある空間が正面を向いて存在していることを表す。（2）のように「…にめんしている」の形で文末に用いることもできる。また、名詞を修飾するときは、（3）のように「NにめんしたN」の形をとる。

2 Nにめんして ＜直面＞

（1）彼女は非常事態に面しても適切な行動の取れる強い精神力の持ち主なのだ。

（2）彼は危機的事態に面しても冷

静に対処できる人だ。

困難や危機などの厳しい状況に直面してという意味を表す。

【にも】

1 Nにも

助詞の「に」のついた名詞を取り立てるために「も」がつけ加えられたもの。

a Nにも <時・場所・方向・相手など>

（1）あそこにも人がいます。

（2）田中さんにも教えてあげよう。

（3）箱根にも日光にも行きました。

助詞の「に」が付いていろいろな意味を表す句を取り立てて、「それだけでなく他のものについても同じことが言える」という「も」の意味が付け加えられたもの。「も」の意味を加える必要が無いときは「に」だけで用いられる。

b Nにも <尊敬の対象>

（1）ご家族のみなさまがたにもおすこやかにお過ごしのことと拝察申し上げます。

（2）皆々様にもご健勝にお過ごしの由、お喜び申し上げます。

目上の相手を表す名詞を受けて、その人に敬意を表すために用いる。慣用的に決められた表現でしか用いられず、非常に改まった手紙の挨拶表現として使われる。さらに改まった表現としては「...におかれましては」がある。

2 V-ようにも

a V-ようにも...ない

（1）助けを呼ぼうにも声が出ない。

（2）機械を止めようにも、方法が分からなかったのです。

（3）先に進もうにも足が疲れて一歩も踏み出せなかった。

（4）手術をしたときはすでに手遅れで、助けようにも助けようがなかったのです。

「呼ぼう」「止めよう」など、動詞の意向形を受けて、後ろには否定の意味の表現が続き、「そうしようと思ってもできない」という意味を表す。

b V-ようにもV-れない

（1）少し休みたいけれど、忙しくて休もうにも休めない。

（2）こんなに遠くまで来てしまっては、帰ろうにも帰れない。

（3）こんな恐ろしい事件は、忘れようにも忘れられない。

（4）土砂崩れで道がふさがれており、それ以上進もうにも進めない状態だった。

「帰ろう」「忘れよう」など、動詞の意向形を受けて、後ろにも同じ動詞の可能の否定形を繰り返し、「そうしようと思ってもできない」「どうしても...することができない」という意味を表す。

【にもかかわらず】

[N/A/V　にもかかわらず]

[Naであるにもかかわらず]

（1）悪条件にもかかわらず、無事登頂に成功した。

（2）母が止めたにもかかわらず、息子は出かけていった。

（3）あれだけ努力したにもかかわらず、すべて失敗に終わってしまった。

（4）規則で禁止されているにもかかわらず、彼はバイクで通学した。

「そのような事態であるのに」という意味を表す。後ろには、そのような事態なら当然予測できることと食い違った事態を表す表現が続く。次のように文のはじめに使うこともできる。

（例）危険な場所だと十分注意されていた。にもかかわらず、軽装で出かけて遭難するはめになった。

【にもとづいた】

→【にもとづいて】

【にもとづいて】

[Nにもとづいて]

（1）実際にあった話に基づいて小説を書いた。

（2）計画表に基づいて行動する。

（3）過去の経験に基づいて判断を下す。

（4）この小説は実際にあったことに基づいている。

（5）長年の経験に基づいた判断だから、信頼できる。

「それをもとにして」「それを根拠にして」の意味を表す。（4）のように文の述語として用いることもできる。また、名詞を修飾するときは（5）のように「...にもとづいたN」の形になる。「...にもとづいてのN」となることもある。

【にもなく】

[Nにもなく]

（1）今日はがらにもなく背広なんかを着ている。

（2）その光景を見て、我にもなく動揺してしまった。

慣用的に固定された表現で、「その人やそのもののいつもの様子や性質とは違って」という意味を表す。

【にもならない】

1 Nにもならない

（1）あまりにばかばかしい話で、冗談にもならない。

（2）こんなに細い木では焚きつけにもならない。

「冗談」「焚きつけ」など、あまり役に立たないものを表す名詞を受けて、その価値さえないという意味を表す。

2 V-るきにもならない

（1）あまりにばかばかしくて笑う気にもならない。

（2）彼の考え方があまりに子供っぽいので、腹を立てる気にもならなかった。

「そのような気持ちにならない」という意味を表す。多くの場合はそうする気持ち

にならないほど価値が低いというマイナス評価の意味を込めて用いられる。

【によったら】

→【によると】1b

【によって】

1 Nによって <原因>

(1) 私の不注意な発言によって、彼を傷つけてしまった。

(2) 踏切事故によって、電車は3時間も遅れました。

(3) ほとんどの会社は不況によって経営が悪化した。

名詞を受けて、「それが原因となって」の意味を表す。後ろには結果を表す表現が続く。

2 Nによって <受身文の動作主>

(1) この建物は有名な建築家によって設計された。

(2) その村の家の多くは洪水によって押し流された。

(3) 敵の反撃によって苦しめられた。

(4) これらの聖典はヨーロッパからの宣教師たちによってもたらされた。

(5) 3年生の児童たちによって校庭に立派な人文字が描かれた。

(6) この奇抜なファッションは新しいものを好む若者たちによってただちに受け入れられた。

受身文の動作主を表す。「XにYされる」の「Xに」と同じだが、「Y」の動詞が「設計する」「作る」「書く」のように何かを生み出すことを表すものであるときは「に」は使えず「によって」を用いる。また、(2)(3)の「洪水」「敵の反撃」のように原因と解釈されるもののときは、「で」で言いかえることができる。

(例) 洪水で押し流された。

3 Nによって <手段>

(1) この資料によって多くの事実が明らかになった。

(2) 給料をカットすることによって、不況を乗り切ろうとしている。

(3) 交通網の整備によって、遠距離通勤が可能になった。

(4) コンピュータによって大量の文書管理が可能になった。

(5) インターネットによって世界中の情報がいとも簡単に手に入るようになった。

「それを手段として」「その方法を用いて」の意味を表す。

4 Nによって <よりどころ>

(1) この資料によっていままで不明だった多くの点が明らかになった。

(2) 行くか行かないかは、あしたの天気によって決めよう。

(3) 先生の御指導によってこの作品を完成させることができました。

(4) 試験の成績よりも通常の授業でどれだけ活躍したかによって成績をつけようと思う。

(5) 恒例によって会議の後に夕食会を設けることにした。

(6) 例によって彼らは夜遅くまで議論を続けた。

名詞や「疑問詞…か」の形に付いて、「それをよりどころとして」「それを根拠として」という意味を表す。(5)(6)は慣用句として固定された表現で「いつものように」という意味。

5 Nによって <場合>

(1) 人によって考え方が違う。

(2) 明日は所によって雨が降るそうだ。

(3) 時と場合によって、考え方を変えなければならないこともある。

(4) 場合によってはこの契約を破棄しなければならないかもしれない。

(5) 事と次第によっては、裁判に訴えなければならない。

「そのうちのいろいろな場合に応じて」という意味を表す。(5)は慣用句で「場合によって」と同じ意味。

【によらず】

【Nによらず】

(1) この会社では、性別や年齢によらず、能力のあるなしによって評価される。

(2) 古いしきたりによらず、新しい簡素なやりかたで式を行いたい。

(3) 彼は見かけによらず頑固な男だ。

(4) 何事によらず、注意を怠らないことが肝心だ。

「それとは関係なく」「それとは対応しないで」という意味を表す。(3)と(4)は慣用句で、それぞれ「外見とは違って」「どんな場合でも」という意味。

【により】

(1) 水質汚染がかなり広がっていることが、環境庁の調査により明らかになった。

(2) 関東地方はところにより雨。

「によって」の書きことば的な言い方。

→【によって】

【による】

【Nによる】

(1) 学長による祝辞に引き続いて、卒業生代表によるスピーチが行われた。

(2) 計画の大幅な変更は、山田の強い主張によるものである。

(3) 地震による津波の心配はないということである。

（4）晩御飯を食べて帰るかどうかは、会議の終わる時間による。

（5）車で行くかどうかは場合による。晴れていたら自転車の方が気持ちがいいが、もし雨が降ったら車で行くしかない。

「動作主」「原因」「根拠」などを示すのに用いる。(1)～(3)のようにNが動作主や原因を表す場合と、(4)(5)のようにNがなにかを決めるための条件を示す場合がある。動作主や原因を表す用法は、書きことば的なかたい文体で使われるが、条件の場合はふつうの話しことばでも使われる。

【によると】

1 Nによると

a Nによると

（1）天気予報によると、明日は晴れるそうです。

（2）彼の説明によると、この機械は廃棄物を処理するためのものだということです。

（3）あの雲の様子によると、明日は多分晴れるだろう。

ほかから聞いたことの出どころや推測のよりどころを表す。後ろには「…そうだ」「…ということだ」などの伝聞を表す表現や「…だろう」「…らしい」などの推測を表す表現が続く。(1)(2)は「…によれば」を用いることもできる。

b ことによると／ばあいによると

（1）ことによると今回の旅行はキャンセルしなければならないかもしれない。

（2）場合によると彼らも応援に来てくれるかもしれない。

慣用句的に固定した表現で「もしかしたら」「ある条件のもとでは」という意味を表す。後ろには推測を表す表現が続く。「ことによったら」「場合によったら」の形も用いられる。

2 Vところによると

（1）聞いたところによると、最近は飛行機でいく方が電車より安い場合もあるそうですね。

（2）彼の主張するところによると、彼は事件とは関係ないということだ。

（3）祖父の語ったところによると、このあたりには昔古い農家があったということだ。

ほかから聞いたことの出どころや判断のよりどころを表す。後ろには「…そうだ」「…ということだ」などの伝聞を表す表現や推測・断定などの判断を表す表現が続く。「…ところによれば」の形も用いられる。

【によれば】

（1）この記録によれば、その城が完成したのは11世紀末のことだ。

（2）彼の話によれば、この茶碗は骨董品として価値の高いものだそうだ。

「…によると」と同じ。

→【によると】1a、2

【にわたって】

［Nにわたって］

（1）この研究グループは水質汚染の調査を10年にわたって続けてきた。

（2）彼はこの町を数回にわたって訪れ、ダム建設についての住民との話し合いをおこなっている。

（3）首相はヨーロッパからアメリカ大陸まで8カ国にわたって訪問し、経済問題についての理解を求めた。

（4）外国人労働者に関する意識調査の質問項目は多岐に渡っており、とても一言で説明することはできない。

期間・回数・場所の範囲などを表す語に付いて、その規模が大きい様子を表す。後に「行う／続ける／訪れる」などの動詞を伴うことが多い。書きことば的なかたい文体で使われる。

【にわたり】

［Nにわたり］

（1）話し合いは数回にわたり、最終的には和解した。

（2）彼の研究は多岐にわたり、その成果は世界中の学者に強い影響を与えた。

（3）彼女が訪れた国は実に23カ国に渡り、その旅を記録した写真集は普通の人々の生活を生き生きと写し取っていることで評判になっている。

「にわたって」と同じ意味。「にわたって」は直後の動詞を修飾することが多いが、「にわたり」は節の終わりに使われることが多い。書きことば的なかたい文体で使われる。

【ぬ】

文語の否定を表す助動詞で、現在では「…ません」や「知らん」「好かん」などの「ん」にその形跡が残っているほかは、慣用句として固定された言い方に用いられる。

1 V-ぬ

（1）知らぬ存ぜぬで(=知らないと主張し続けて)押し通す。

（2）知らぬが仏(=相手が知らないうちに何か相手にとって都合の悪いことをする場合に用いる)。

（3）予期せぬ(=予期しない)事件が起こった。

（4）急いで対策を考えなければならぬ。

慣用句として固定された表現で、「…ない」の意を表す。(4)は「…なければな

らない」の文語的な言い方。

2 V-ぬうちに

（1）誰にも気付かれぬうちにここを抜け出そう。

（2）暗くならぬうちに家にたどり着けるといいのだが。

「…ないうちに」の文語的な言い方。

→【うち】2c

3 V-ぬばかり

（1）おまえは馬鹿だと言わぬばかりの顔をした。

（2）泣かぬばかりに懇願した。

慣用句的に固定した表現で、「いまにもそうしそうな様子で」という意味を表す。「V-んばかり」の文語的表現。

→【ばかり】6

4 V-ぬまでも

（1）この崖から落ちたら、死に至らぬまでも重傷はまぬがれないだろう。

（2）実刑は受けぬまでも罰金は払わせられるだろう。

「…ないまでも」の文語的な言い方。

→【ないまでも】

5 V-ぬまに

（1）鬼のいぬ間に洗濯（＝邪魔になる人がいない間にしたいことをする）。

（2）知らぬ間にこんなに遠くまで来てしまった。

慣用句的に固定した表現で、「…ないあいだに」という意味を表す。

【ぬき】

1 Nぬきで

（1）この集まりでは、形式張ったこと抜きで気楽にやりましょう。

（2）この後は偉い人抜きで、若手だけで飲みに行きましょう。

（3）前置きは抜きで、さっそく本論に入りましょう。

「…は除いて」という意味。（3）のように「Nはぬきで」となることもある。

2 Nぬきに… V-れない

（1）この企画は、彼の協力抜きには考えられない。

（2）資金援助抜きに研究を続けることは不可能だ。

（3）今回の企画の成功は山田君の活躍抜きに語れない。

名詞を受け、さらに「…できない」「V-れない」「不可能だ」などを文末に用いて、「それなしでは…することができない」という意味を表す。

3 Nはぬきにして

（1）この際、仕事の話は抜きにして、大いに楽しみましょう。

（2）冗談は抜きにして、内容の討議に入りましょう。

「…は除いて」「…は止めて」という意味。

【ぬく】

[R-ぬく]

（1）苦しかったが最後まで走りぬいた。

（2）一度始めたからには、あきらめずに最後までやりぬこう。

（3）考え抜いた結果の決心だからもう変わることはない。

（4）この長い漂流を耐え抜くことができたのは、「ここで死にたくない」という強い気持ちがあったからだと思います。

必要な行為・過程を全て最後までやり終えるという意味。苦しさに耐えてやり遂げるという意味合いが強い。

【ぬまでも】

[V-ぬまでも]

（1）邸宅とは言わぬまでも、せめて小さな一戸建ぐらいは建てたいものだ。

（2）この崖から落ちたら、死に至らぬまでも、重傷はまぬがれないだろう。

「…ないまでも」の文語的な言い方。

→【ないまでも】

【ねばならない】

[V-ねばならない]

（1）平和の実現のために努力せねばならない。

（2）一致協力して問題解決に当たらねばならない。

「…なければならない」の書きことば的な言い方。

→【なければ】2

【ねばならぬ】

[V-ねばならぬ]

（1）暴力には力を合わせて立ち向かわねばならぬ。

（2）自然破壊は防がねばならぬ。

「…ねばならない」よりさらに文語的な言い方。

→【なければ】2

【の$_1$】

1 NのN

a NのN ＜所属＞

（1）これはあなたの財布じゃないですか。

（2）こちらは東京電気の田中さんです。

（3）東京のアパートはとても高い。

名詞を修飾し、その名詞が表すものの所有者や所属先や所在などを表す。

b NのN ＜性質＞

（1）病気の人を見舞う。

（2）バラの花を贈る。

（3）3時の電車に乗る。

（4）カップ1杯の水を加える。

名詞を修飾し、その名詞の性質・状態・種類・数量など、さまざまな意味を表す。

c NのN ＜同格＞

（1）友人の和男に相談した。

（2）社長の木村さんをご紹介しましょう。

（3）これは次女の安子でございます。

前のNと後ろのNが同じものであることを表す。後ろのNには人やものの名前といった固有名詞が用いられることが多い。

d N（＋助詞）のN

（1）子供の成長は早い。

（2）自転車の修理を頼んだ。

（3）アメリカからの観光客を案内する。

（4）京都までのバスに乗った。

（5）田中さんとの旅行は楽しかった。

（6）京都での宿泊はホテルより旅館のほうがいい。

「子供が成長する」「自転車を修理する」「アメリカから観光客が来る」の「子供」と「成長」、「自転車」と「修理」、「アメリカ」と「観光客」の関係を、前の名詞が後ろの名詞を修飾することによって表す。「子供が成長する」「自転車を修理する」のように「が」と「を」が用いられている時は「子供の成長」「自転車の修理」となり、「が」や「を」は表れない。それ以外の助詞の場合は「アメリカからの観光客」「田中さんとの旅行」のように助詞も表さなければならない。また、助詞の「に」にはこの用法がなく、代わりに「へ」が用いられる。

（誤）母にの手紙

（正）母への手紙

e Nの…N

（1）彼の書いた絵はすばらしい。

（2）学生たちの歌う声が聞こえる。

（3）タイプの上手な人を探している。

（4）花の咲く頃にまた来てください。

「彼が書いた絵」「タイプが上手な人」のように、名詞（この場合は「絵」「人」）を修飾する節の中に助詞「が」が用いられている場合、この「が」の代わりに「の」を用いたもの。

2 …の

a Nの

（1）これは私のです。

（2）電気製品はこの会社のが使いやすい。

（3）この電話は壊れてますので、隣の部屋のをお使い下さい。

（4）ラーメンなら、駅前のそば屋のが安くておいしいよ。

（5）柄物のハンカチしか置いてないけど、無地のはありませんか。

「Nのもの」という意味を表す。

b …の

[Naなの]

[A／V　の]

（1）これはちょっと小さすぎます。もう少し大きいのはないですか。

（2）みんなで料理を持ちよってパーティーをしたんだけど、私が作ったのが一番評判よかったんだ。

（3）これは大きすぎて使いにくい。もっと小さくて便利なのを探さなくてはならない。

（4）その牛乳は古いから、さっき買ってきたのを使って下さい。

動詞や形容詞に付いて、「大きいもの」「私が作ったもの」などの意味を表す。

c Nの…の

[NのNaなの]

[Nの　A／V　の]

（1）戸棚のなるべく頑丈なのを探してきてほしい。

（2）ビールの冷えたのはないですか。

（3）袋の中にリンゴの腐ったのが入っていた。

「Nの＋修飾句＋の」という形で、Nの表すものに関して、修飾句の示すような状態にあるものを特に限定して指し示す場合に用いる。例えば（2）は、「ビールに関して、その中の冷えたビール」という意味。

【の$_2$】

1 …の <質問>

[N／Na　なの]

[A／V　の]

（1）A：遊んでばかりいて。試験、本当に大丈夫なの？
　　B：心配するなよ。大丈夫だってば。

（2）A：明子ちゃんは、なにをして遊びたいの？
　　B：バトミントン。

（3）A：スポーツは何が得意なの？
　　B：テニスです。

（4）元気ないね。どうしたの？

上昇調のイントネーションを伴って質問を表す。子供や親しい人に対する話しことばに用いられる。

2 …の <軽い断定>

[N／Na　なの]

[A／V　の]

（1）お母さん、あの子がいじわるするの。

（2）A：あした映画に行きませんか。
　　B：残念だけど、明日はほかに用事があるの。

（3）彼は私に腹を立てているみたいなの。

（4）A：元気ないですね。
　　B：ええ、ちょっと気分が悪いの。

（5）A：もう少し早く歩けない？
　　B：ごめんね。ちょっと足が痛いの。

下降調のイントネーションを伴って、子供や女性が軽い断定するのに用いる。

3 …の <確認>

（1）A：やあ、明子さん。今日は。
　　B：あら和夫さん。来てたの。

（2）春子：正子さん、朝日高校出

身なんですって？ 私もよ。
正子：へえ、春子さんも朝日高校出身なの。

（3）A：君の発表すごくおもしろかったよ。
B：あれ、君も聞いてくれていたの。

上昇、または下降調のイントネーションを伴って、相手に確認するのに用いられる。

4 …の ＜軽い命令＞

［V-る／V-ない　の］

（1）病気なんだから、大人しく寝ているの。
（2）そんなわがままは言わないの。
（3）明日は早いんだから、今晩は早く寝るの。
（4）男の子はこんなことで泣かないの。

平板、または下降調のイントネーションを伴って、女性が目下の人に対して軽い調子で命令したり禁止したりする場合に用いる。

【の…の】

1 …の…のと

［NだのNだのと］
［Na だの Na だのと］
［AのAのと］
［VのVのと］

（1）量が多すぎるの少なすぎるのと文句ばかり言っている。
（2）頭が痛いの気が進まないのと言っては、誘いを断っている。
（3）形が気にいらないの色が嫌いだのと、気むずかしいことばかり言っている。
（4）私の父は、行儀が悪いの言葉づかいが悪いのと、口うるさい。

同類のものを並べ上げて、あれやこれやとうるさく言う様子を表す。次のような慣用句もある。

（例）なんのか(ん)のと(＝ああだこうだと、いろいろ)文句ばかり言っている。
（例）四の五の言わずに(＝あれこれ言わずに)ついてこい。

2 …の…ないの

a …の…ないのと

［A-いの A-くないのと］
［V-るの V-ないのと］

（1）行くの行かないのと言い争っている。
（2）結婚したいのしたくないのとわがままを言う。
（3）会社を辞めるの辞めないのと悩んでいた。
（4）A：あの二人、離婚するんですって？
B：ううん。離婚するのしないのと大騒ぎしたけど、結局はうまくおさまったみたいよ。

対比的な内容を並べ上げて、あれやこれやとうるさく言う様子を表す。

b …の…ないのって

［A-いの A-くないのって］
［V-るの V-ないのって］

（1）A：北海道、寒かったでしょ。
B：寒いの寒くないのって。耳が凍るんじゃないかと思ったよ。

（2）A：あの治療は痛かったでしょうね。
B：痛いの痛くないのって。思わず大声で叫んじゃったよ。

程度が極端に激しいことを表す。「ひどく…な状態だ」という意味。後ろにはそのために生じたことがらが述べられることが多い。「…のなんのって」とも言う。くだけた話しことばに用いる。

3 …のなんの

a …のなんのと

［A／V　のなんのと］

（1）高すぎるのなんのと、文句ばかり言っている。
（2）やりたくないのなんのとわがままを言い始めた。
（3）頭が痛いのなんのと理由をつけては学校を休んでいる。

好ましくないことをあれこれうるさく言う様子を表す。

b …のなんのって

［A／V　のなんのって］

（1）A：彼女に会って驚いたんじゃない？
B：驚いたのなんのって。すっかり変わっちゃってるんだもの。初めは全然違う人かと思ったよ。

（2）A：あのホテルは車の音がうるさくありませんでしたか。
B：いやあ、うるさいのなんのって、結局一晩中寝られなかった。

（3）喜んだのなんのって、あんなに嬉しそうな顔は見たことがない。

2bの「…の…ないのって」と同じ。

【のいたり】

→【いたり】

【のか】

［N／Na　なのか］
［A／V　のか］

1 …のか ＜判明＞

（1）なんだ、猫だったのか。誰か人がいるのかと思った。
（2）彼は知っていると思っていたのに。全然知らなかったのか。
（3）なんだ。まだだれも来ていないのか。ぼくが一番遅いと思ってたのに。

下降調のイントネーションを伴って用いられる。思っていたことと違う事実が判明したことを軽い驚きを込めて述べるのに用いる。

2 …のか <質問>

（1） 朝の5時? そんなに早く起きるのか?

（2） 君は娘に恋人がいたことも知らなかったのか?

（3） A：もう帰るのか?
B：うん。今日は疲れたから。

上昇調のイントネーションを伴って、相手に対する質問や確認を表す。

3 …のか <間接疑問>

（1） 何時までに行けばいいのか聞いてみよう。

（2） 彼はいつも無表情で、何を考えているのかさっぱり分からない。

（3） この書類、どこに送ったらいいのか教えて下さい。

（4） 行くのか行かないのかはっきりして下さい。

（5） あの人はやる気があるのかないのか、さっぱり分からない。

「何時までに行けばいいのですか」「行くのですか、行かないのですか」などの疑問を、間接疑問として文の一部に組み込んだもの。

【のきわみ】

→【きわみ】

【のだ】

[N／Na　なのだ]
[A／V　のだ]

書きことばで用いられるのが普通で、話しことばでは「んだ」となることが多い。丁寧な言い方は「のです」で、これは話しことばにも用いられる。くだけた話しことばでは「どうしたの?」のように「の」だけで終わることもある。また、かたい書きことばでは「のである」が用いられることもある。

1 …のだ <説明>

（1） 道路が渋滞している。きっとこの先で工事をしているのだ。

（2） 彼をすっかり怒らせてしまった。よほど私の言ったことが気にさわったのだろう。

（3） 泰子は私のことが嫌いなのだ。だって、このところ私を避けようとしているもの。

前の文で述べたことや、その場の状況などについて、その原因や理由などを説明するのに用いる。

2 …のだ <主張>

（1） やっぱりこれでよかったのだ。

（2） 誰がなんと言おうと私の意見は間違っていないのだ。

（3） 誰が反対しても僕はやるのだ。

話し手が自分自身を納得させようと強い主張を行ったり、自分の決意を示したりする場合に用いる。

3 疑問詞…のだ

（1） 彼は私を避けようとしている。いったい私の何が気に入らないのだ。

（2） こんな馬鹿げたことを言い出

したのはだれなのだ。

疑問詞を含む節を受けて、自分自身や聞き手に対して何らかの説明を求めるのに使う。

4 つまり…のだ

（1） 防災設備さえ完備していればこのようなことにならなかった。つまりこの災害は天災ではなく人災だったのだ。

（2） 私が言いたいのは、緊急に対策を打たなければならないということなのだ。

（3） 会社の経営は最悪の事態を迎えている。要するに、人員削減はもはや避けられないことなのだ。

「つまり」「私が言いたいのは」「要するに」などに続いて、これまでに述べたことを別の言葉で言いかえる場合に用いる。

5 だから…のだ

（1） コンセントが抜けている。だからスイッチを入れてもつかなかったのだ。

（2） エンジンオイルが漏れている。だから変な臭いがしたのだ。

（3） 産業廃棄物の不法投棄が後をたたない。そのために我々の生活が脅かされているのだ。

「だから」「そのために」などに続いて、そこで述べられることがらが、前の文で述べたことがらの帰結として導き出されるものであるという意味を表す。

6 …のだから

[N／Na　なのだから]
[A／V　のだから]

（1） まだ子供なのだから、わからなくても仕方がないでしょう。

（2） 私でもできたのだから、あなたにできないはずがない。

（3） あした出発するのだから、今日中に準備をしておいた方がいい。

（4） 冬の山は危険なのだから、くれぐれも慎重に行動してくださいね。

節を受けて、そこで述べられていることが事実であると認め、その事実が原因・理由となって次に述べることがらが導き出されることを表す。たとえば（1）は子供だということは認めたうえで、それを根拠に、わからなくても仕方がないという判断を導き出している。それに対し「まだ子供だから分からないのだろう」の場合は、分からないのは子供だからだろうと理由の方を推量している。話しことばでは「…んだから」となることが多い。

【のだった】

1 V-るのだった <後悔>

（1） あと10分あれば間に合ったのに。もう少し早く準備しておくのだった。

（2） こんなにつまらない仕事なら、

断わるのだった。

（3）試験は悲惨な結果だった。こんなことなら、もっとしっかり勉強しておくのだったと後悔しています。

実際にはしなかったことについて、それをしておけばよかったと悔やんでいる気持ちを表す。話しことばでは「...んだった」となるのが普通。

2 ...のだった ＜感慨＞

[N／Na　なのだった]

[A／V　のだった]

（1）田辺はそれが贈賄であると知りながら、金を渡したのだった。

（2）この小さな事故が後の大惨事のきっかけとなるのだったが、その時はことの重大さにだれも気付いていなかった。

「のだ(1)」の用法に準じるが、過去の出来事に関して、ある種の感慨をもって述べる場合に用いられる。小説や随筆などの書きことばに多い。

【のだったら】

[N／Na　なのだったら]

[A／V　のだったら]

（1）風邪なんだったら、そんな薄着はだめだよ。

（2）そんなに嫌いなんだったら、むりに食べなくてもいいよ。

（3）こんなに寒いんだったら、もう1枚着て来るんだった。

（4）A：そのパーティ、私も行きたいな。

B：あなたが行くんだったら私も行こうかな。

今聞いたことや今の状況を示し、「それなら」、「その状況では」、という意味を表す。話しことばでは「んだったら」になることが多い。

【のだろう】

[N／Na　なのだろう]

[A／V　のだろう]

「のだ」と「だろう」が組み合わされた形。話しことばでは「んだろう」となることが多い。

1 ...のだろう ＜推量＞

...んだろう

（1）大川さんはうれしそうだ。何かいいことがあったのだろう。

（2）子供はよく眠っている。今日一日よく遊んだのだろう。

（3）大きなスーパーマーケットができて一年もしないうちに、前の八百屋は営業をやめてしまった。きっと、お客をみんなとられたのだろう。

（4）実験に失敗したのにこのような興味深い結果が得られたのには、何か別の要因があるのだろう。

（5）この製品は特別に売れ行きがいい。きっと宣伝が上手なんだろう。

下降調のイントネーションを伴って、推量を表す。「だろう」の前に「の」が入ると、理由や原因についての推測など、ある出来事についての話し手の状況判断がふくまれる。

2 ...のだろう ＜確認＞

...んだろう

（1）A：10年ぶりの同窓会だね。君も行くんだろう?

B：うん、行くつもりだ。

（2）A：来月ディズニーランドに行くの。

B：え、また?　もう何回も行ったんだろう?

A：うん。でもおもしろいんだもん。

（3）A：来週は試験だから、週末は忙しいんだろう?

B：うん。まあね。

（4）A：新しいコンピュータ買ったんだって?　新型は便利なんだろう?

B：ええ。本当に便利ですよ。

上昇調のイントネーションを伴って、確認を表す。「の／ん」がある場合は、それまでの文脈や状況などから得られた情報や推測をもとにして確認するという含みが生じる。話しことばで男性が使うのが普通。「んだろう」の形で使うことが多い。

3 ...のだろうか

...んだろうか

（1）子どもたちが公園にたくさんいる。今日は学校が休みなのだろうか。

（2）A：山口さんこの頃元気がないね。

B：うん。顔色も悪いし、体の具合でも悪いのだろうか。

（3）A：来年は入試だというのに、太郎ったら、全然勉強しようとしないんですよ。

B：うん。あれでどこかの高校に入れるんだろうか。心配だなあ。

（4）A：山下さん、うれしそうね。

B：ほんとだね。何かいいことでもあったんだろうか。

話し手が疑念を抱いたり、心配したりする気持ちを表す。「のだろうか」は、話し手が文脈から得られた情報や状況などにもとづいて推量しているときに使われる。

【ので】

[N／Na　なので]

[A／V　ので]

（1）雨が降りそうなので試合は中止します。

（2）もう遅いのでこれで失礼いたします。

（3）風邪をひいたので会社を休みました。

(4) 入学式は10時からですので、9時頃家を出れば間に合うと思います。

(5) A：これからお茶でもどうですか。

B：すみません、ちょっと用事がありますので。

前の節で述べたことが原因や理由となって後ろの節で述べることが起こるということを表すのに使う。前のことがらと後ろのことがらの因果関係が客観的に認められるものである場合に用いられる。そのため、後ろにはすでに成立したことや成立が確実なことが来るのが普通で、話し手の判断を根拠にしたうえでの命令などの表現は用いられにくい。

(誤) 時間がないので急げ。

(正) 時間がないから急げ。

(5)のように断りの理由や言い訳を述べるのによく使われる。くだけた話しことばでは「んで」となる。

【のであった】

[N/Na なのであった]

[A/V のであった]

(1) 彼は大学を辞めて故郷に帰った。ようやく父のあとを受けて家業を継ぐ決心がついたのであった。

(2) ついに両国に平和が訪れたのであった。

感慨を込めて過去を回顧する「のだった」の改まった言い方。

→【のだった】2

【のである】

[N/Na なのである]

[A/V のである]

(1) 解決には時間がかかりそうだ。問題は簡単ではないのである。

(2) 結局のところ、政局に大きな変化は期待できないのである。

「のだ」の改まった言い方。

→【のだ】

【のです】

[N/Na なのです]

[A/V のです]

「のだ」の丁寧な言い方。話しことばでは丁寧な会話に用いられるが、普通は「んです」となることが多い。

1 …のです <説明>

(1) 遅くなってすみません。途中で渋滞に巻き込まれてしまったのです。

(2) 電話を使わせていただきたいのですが、よろしいでしょうか。

(3) ハヤブサは突然急降下を始めました。獲物を見つけたのです。

→【のだ】1

2 …のです <主張>

(1) これからはあなたたちがこの店をまもり発展させて行くのです。

(2) やはり私の考えは間違っていなかったのです。

(3) あなたはことの本質を理解していないのです。

(4) だれがなんと言おうと、私は仕事を辞めるのです。

→【のだ】2

3 …のです <話題のきっかけ>

(1) 先週京都へ行ってきたのですが、そこで偶然高橋さんに会いましてね。相変わらず仕事に励んでいるようでした。

(2) 実は近々結婚するのです。それでご挨拶にうかがいたいのですが、ご都合はいかがでしょうか。

新たな話題を提出するときのきっかけを作るために、その話題の背景となることがらを表すのに用いる。

4 …のですか

(1) どうして彼が犯人だとわかったのですか。

(2) 田中さんはタフですね。なにかスポーツでもしているのですか。

(3) A：もうお帰りになるのですか。

B：ええ。ほかに用事もありますので。

その場の状況やそれまでの話の内容などに関して、聞き手になんらかの説明を求める時に用いられる。

5 つまり…のです

(1) 締切は今月末、つまりあと5日しかないのです。

(2) 私が言いたいのは、緊急に対策を打たなければならないということなのです。

→【のだ】4

6 だから…のだ

(1) ずいぶん熱が高いですよ。だから頭がいたかったのですね。

(2) 社長は私を信頼していない。だからこの仕事を任せてもらえなかったのだ。

(3) ここにすきまがあるようですね。そのために風が吹き込んでくるのですよ。

→【のだ】5

7 …のですから

(1) 時間はあるのですから、ゆっくりやって下さい。

(2) ここまで来たのだから、あともう一息です。

→【のだ】6

【のでは】

[N/Na なのでは]

[A/V のでは]

(1) そんなに臆病なのでは、どこにも行けませんよ。

（２）雨なのではしかたがない。あしたにしよう。

（３）こんなに暑いのでは、きょうの遠足はたいへんだろうね。

（４）こんなにたくさんの人に見られているのでは緊張してしまうでしょう。

今聞いたことや状況をふまえて、それなら、その状況では、という意味を表す。後ろに「こまる」「たいへんだ」など否定的な態度を表す表現が来る。話しことばでは「なんじゃ」「んじゃ」の形になることが多い。

【のではあるまいか】

→【ではあるまいか】

【のではないか】

→【ではないか₂】

【のではないだろうか】

→【ではないだろうか】

【のではなかったか】

[N／Na　なのではなかったか]

[A／V　のではなかったか]

１…のではなかったか ＜疑問＞

（１）当時の人々は人間が空を飛ぶなどということは考えもしなかったのではなかったか。

（２）古代人にとってはこれも貴重な食物なのではなかったか。

→【ではなかったか】

２…のではなかったか ＜非難＞

（１）あなたたちは規律を守ると誓ったのではなかったか。

（２）これまでは平和に共存してきたのではなかったか。

前の節で述べられていることとは食い違う事態になったことで、聞き手を非難したり残念だという気持ちを表すのに用いる。

【のではなかろうか】

→【ではなかろうか】

【のに₁】

[N／Na　なのに]

[A-い／A-かった　のに]

[V-る／V-た　のに]

１…のに ＜文中＞

節を受け、「ＸのにＹ」の形で、Ｘから当然予測される結果とならず、それとは食い違った結果Ｙになることを表す。ＸとＹは、確定した事実を表し、Ｙには事実かどうかが確定していない、疑問、命令、依頼、勧誘、意志、希望、推量などの表現は普通用いられない。

（誤）雨が降っているのに出かけなさい。

（誤）雨が降っているのに出かけたい。

（誤）雨が降っているのに出かけるだろう。

a…のに ＜逆原因＞

（１）５月なのに真夏のように暑い。

（２）家が近いのによく遅刻する。

（３）雨が降っているのに出かけていった。

（４）真夜中過ぎたのにまだ帰ってこない。

（５）今日は日曜日なのに会社に行くんですか。

（６）５月なのに何でこんなに暑いんだろう。

「ＸのにＹ」のＸとＹの間に因果関係がある場合に、その因果関係が成立していない場合の用法。

例えば（３）の例では、「雨が降っているので出かけなかった」という通常の因果関係が成立せず、相反することがらが同時に成立していることを表している。予想外の結果や食い違いに対する話し手の意外感・疑念を伴うことが多い。

（６）は予想外の現状の原因を問う形で、意外感・疑念を表している。

（５）は疑問文であるが、「のに」が使用可能な場合である。その理由は（５）は、会社に出かけようとしていることが確定している事実で、「日曜日なのに会社に行く」ことを不思議に思い、こうした事実について「のですか」の形で問う疑問文だからである。

これに対して「のだ」がつかず、会社へ行くかどうかを問う、次のような疑問文は不自然である。

（誤）今日は日曜日なのに会社に行きますか。

b…のに ＜対比＞

（１）昨日はいい天気だったのに今日は雨だ。

（２）あの中国人は日本語はあまり上手でないのに、英語はうまい。

（３）お兄さんはよく勉強するのに弟は授業をよくサボる。

ＸとＹが因果関係をもたず、対比的な関係を表す場合の用法。

例えば（２）は、「日本語が上手でない」「英語がうまい」という対比的な関係をもつＸとＹを結び付けているもので、「あの中国人は日本語が上手でないので英語がうまい」のような因果関係をもつものではない。

この場合の「のに」は次のように「けれども」や「が」で言いかえが可能であるが、「けれども」や「が」が単なる対比的関係を表すのに対し、「のに」にはＸとＹの結び付きが通常の予想からはずれていて「おかしい、変だ」と話し手が感じているニュアンスを含む。

（例）あの中国人は日本語はあまり上手でない{けれども／が}、英語はうまい。

c…のに ＜予想外＞

（１）合格すると思っていたのに、不合格だった。

（２）今晩中に電話するつもりだったのに、うっかり忘れてしまった。

（３）和子さんには来てほしかったのに、来てくれなかった。

（４）せっかくおいでくださったのに、申し訳ございませんでした。

予想がはずれ、予想外の結果となったことを表す。

（1）〜（3）では、Xに「…と思っていた」「つもりだった」「来てほしかった」のような、予想・意向・希望を表す表現が用いられ、それに反する結果がYで述べられている。

（4）は「せっかくおいでくださったのに、（留守にしていて）申し訳ございません」の結果の（　）部分が省略されたもので、期待に反する結果に対するおわびの気持ちを表す表現が直接続いたもの。

2 …のに <文末>

（1）スピードを出すから事故を起こしたんだ。ゆっくり走れと言っておいたのに。

（2）絶対来るとあんなに固く約束したのに。

（3）もっと早く出発すればよかったのに。

（4）あなたも来ればいいのに。

（5）あと5秒早ければ始発電車に間に合ったのに。

文末に用いて、予想した結果とは食い違った結果になって残念だという気持ちを表す。話し手以外の人の行為に対して、非難したり不満を表す場合や、（5）のように反事実条件文の最後によく用いられる。

3 せっかく…のに →【せっかく】5

4 Nでも…のに

（1）電気屋でも直せないのに、あなたに直せるはずがないじゃないの。

（2）九州でもこんなに寒いのに、まして北海道はどんなに寒いだろう。

（3）こんな簡単な問題、小学生でも解けるのに、どうして間違えたりしたの?

「Nなら当然そうあるはずのことが、違う結果となった（電気屋なら直せると思っていたのに直せなかった）。Nでさえそうなのだから、それよりも可能性の薄いものはなおいっそう（素人であるあなたが直すのはなおいっそうむずかしい）」という論の展開を表す。

【のに$_2$】

[V-るのに]

（1）この道具はパイプを切るのに使います。

（2）暖房は冬を快適に過ごすのに不可欠です。

（3）彼を説得するのには時間が必要です。

動詞の辞書形を受けて、目的を表す。「…するために」に言いかえられるが、後ろに続くことばは「使う」「必要だ」「不可欠だ」などに限られており、「…するために」ほど自由ではない。

（誤）留学するのに英語を習っている。

（正）留学するために英語を習っている。

名詞を受けて同じ意味を表すときは「Nに」となる。

（例）辞書は語学の勉強に必要だ。

【のは…だ】

[N／Na　なのは…だ]

[A／V　のは…だ]

「XのはYだ」の形で、聞き手がすでに知っていることや予測のつくことをXで述べ、Yの部分で聞き手の知らない新しいことを述べる用法。

1 …のは　Nだ／N＋助詞＋だ

（1）このことを私に教えてくれたのは山田さんです。

（2）彼の言うことを信じているのはあなただけだ。

（3）ここに通うようになったのは去年の3月からです。

あることがらを先に述べて、そのことがらの成立に関係する人やものなどを示すのに用いる。「だ／です」の前には名詞か名詞＋助詞がくるが助詞の「が」や「を」は用いられない。

（誤）このことを私に教えてくれたのは山田さんがです。

2 のは…からだ

（1）彼女が試験に失敗したのは、体の調子が悪かったからだ。

（2）大阪に行ったのは事故の原因をたしかめたかったからです。

あることがらを先に述べて、その原因や理由が何であるかを述べるのに用いる。

3 のは…ためだ

（1）電車が遅れたのは、踏切事故があったためだ。

（2）彼らが国に帰ったのは、子供たちに会うためだ。

あることがらを先に述べて、その原因や理由が何であるかを述べるのに用いる。

4 のは…おかげだ

（1）子供が助かったのはあなたのおかげです。

（2）この事業が成功したのは、みんなが力を合わせて頑張ったおかげだ。

好ましいことがらを先に述べて、その原因が何であるかを述べるのに用いる。

5 のは…せいだ

（1）雪崩に巻き込まれたのは、無謀な計画のせいだ。

（2）試合に負けたのは私がミスをしたせいだ。

好ましくないことがらを先に述べて、その原因がなんであるかを述べるのに用いる。

【のみ】

1 Nのみ

（1）経験のみに頼っていては成功しない。

（2）金持ちのみが得をする世の中だ。

（3）洪水の後に残されたのは、石の土台のみだった。

それだけと限る意味を表す。書きことば

的なかたい表現に用いられる。話しことばでは「だけ」や「ばかり」が用いられる。

2 V-るのみだ

(1) 準備は整った。あとはスイッチをいれるのみだ。

(2) 早くしなければと焦るのみで、いっこうに仕事がはかどらない。

「それだけである」の意味。(1)のようにある動作が行われる直前の状態にあることを示す場合や、(2)のようにもっぱらその動作ばかりが行われることを表す場合がある。「…するばかりだ」に言いかえられる。

3 Nあるのみだ

(1) こうなったからは前進あるのみだ。

(2) 成功するためには、ひたすら努力あるのみです。

「前進」「努力」「忍耐」などの名詞を受けて、「すべきことはそれだけだ」という意味を表す。

【のみならず】

1 …のみならず…も

[NのみならずNも]

[Na であるのみならず Na でも]

[A-いのみならず A-くも]

[VのみならずNもV]

(1) 若い人のみならず老人や子供達にも人気がある。

(2) 戦火で家を焼かれたのみならず、家族も失った。

(3) 彼女は聡明であるのみならず容姿端麗でもある。

「それだけでなく、さらに…も」とつけ加えるのに用いる。「だけでなく…も」の改まった書きことば的な表現。

2 のみならず

(1) 彼はその作品によって国内で絶大な人気を得た。のみならず、海外でも広く名前を知られることとなった。

(2) 彼女はありあまる才能に恵まれていた。のみならず彼女は努力家でもあった。

前に述べたことを受けて、それだけではなくという意味を表す。ほかにも類似のものがあることを暗示する。改まった書きことば的な表現。

【ば】

[N／Na　なら(ば)]

[A-ければ]

[V-ば]

述語の活用形のひとつで、条件を表す。日本語の条件を表す一番典型的な形式で「たら」「と」「なら」と部分的に重なる用法をもつ。

　名詞、ナ形容詞に続く場合は、「ば」が省略され「N／Na なら」となることが多い。「N／Na であれば」はそのかたい書きことば的な言い方。否定形の「N／Na でなければ」は、書きことばでも話しことばでも使われる。イ形容詞の「いい」は「いければ」ではなく必ず「よ

ければ」の形で用いられる。

　「ば」は「たら」と同じように使われることが多いが、書きことばでは「ば」、話しことばでは「たら」が使われる傾向がある。くだけた話しことばでは、語尾の「子音+eba」が「子音+ya」(例:あれば→ありゃ、行けば→行きゃ、飲めば→飲みゃ、なければ→なけりゃ)となったり、「A-ければ」が「A-きゃ」(例:なければ→なきゃ)となることがある。

1 …ば <一般条件>

[…ば　N／Na　だ]

[…ば A-い]

[…ば V-る]

(1) 春が来れば花が咲く。

(2) 10を2で割れば5になる。

(3) 台風が近づけば気圧が下がる。

(4) 年をとれば身体が弱くなる。

(5) 経済状態が悪化すれば犯罪が増加する。

(6) 人間というものは、余分な金を持ち歩けばつい使いたくなるものだ。

(7) 信じていれば夢はかなうものだ。

(8) だれでもほめられればうれしい。

(9) 風がふけば桶屋がもうかる。

(10) 犬が西向きゃ尾は東。

(11) 終わりよければすべてよし。

特定の個人やものごとではなく、ものごと一般についての条件関係を述べる表現で、「Xが成立すれば必ずYが成立する」という意味を表す。特定の時間にかかわらず恒常的に成り立つ論理的、法則的な関係や因果関係を表し、文末はいつも辞書形が用いられる。個人的な経験や個別的な一回きりの出来事を問題にするのではなく、「Xが成立した場合には、当然Yになる」「一般的にそうなる」「本質的にそうだ」という場合に使われる。

　主語は示されないことが多いが、示される場合は「人はだれでも」「Nというものは」のように、ある種類に属するもの全体が取り上げられ、それについて述べる表現になる。(6)(7)のように、文末に本来そのような性質をもっているという意味の「ものだ」を伴うことも多い。(9)～(11)のように、ことわざや格言などにもよく使われる。

2 …ば <反復・習慣>

ある特定の人物や事物について、「Xが成立するとその度にYが成立する」「Xを行うと決まってYを行う」という繰り返し行われる動作や習慣を表す。1の<一般条件>との違いは、<一般条件>は、不特定の主語について時間を超越して成り立つことがらを述べるもので、文末には必ず辞書形が使われるのに対し、この用法は辞書形だけでなくタ形も用いることができる点である。特定の主語の習慣や反復動作を述べるような場合に使われる。

a …ば… V-る

(1) 祖母は天気がよければ毎朝近所を散歩します。

(2) 彼は暇さえあればいつもテレビ

を見ている。

（3）父は私の顔を見れば「勉強しろ」と言う。

（4）愛犬のポチは主人の姿を見ればとんでくる。

文末に動作を表す動詞の辞書形が用いられ、特定の主語の現在の習慣や反復的動作を表す。

b …ば… V-た

（1）子供のころは、天気がよければ、よく母とこの河原を散歩したものだ。

（2）学生のころは暇さえあればお酒を飲んで友達と語り明かしたものだ。

（3）父は東京へ行けば必ずお土産を買ってきてくれた。

（4）20年ほど前には、街から少し離れれば、いくらでも自然が残っていた。

「過去にはいつも／必ずそうした」「そうすれば必ずそうだった」といった特定の主語の過去の習慣や、過去の特定の状況で必ず成立したことがらなどを表す。（1）（2）のように回想を表す「V-たものだ」を伴うこともある。

「…ば… V-た」の文型としては、事実に反したことがらを述べる4の<反事実>の用法があるが、これと<反復・習慣>の用法の違いは、後者は実際に成立した事実を述べるものだという点である。

なお、過去の事実を述べる用法は「たら」にもあるが、「ば」が過去に繰り返し行われた行動や一定の条件の下でいつも成立した状況を表すのに対して、「たら」は普通、過去に一回だけ成立した出来事を表す。

（例1）ビールを2本飲めば酔っぱらいました。

（例2）ビールを2本飲んだら酔っぱらいました。

（例1）は「2本飲めば必ず／いつも酔っぱらった」という、過去に繰り返し起こった出来事を表すのに対し、（例2）は「たまたま2本飲んだら酔っぱらった」という、過去に一度起こった出来事を表す。

3 …ば <仮定条件>

特定の事物・人物について「Xが成り立てばYが成り立つ」という関係を表す。Xは未実現の場合と、すでに実現している場合があるが、Yは常に未実現のことがらを表す。

1の<一般条件>がものごと一般について述べるもので、文末には必ず言い切りの辞書形を用いるのに対し、<仮定条件>は<一般条件>を特定の個別的なことがらに当てはめて予測的に述べる場合の用法で、文末に「だろう」「かもしれない」などを付けることができる。

（例）<一般条件>食事を減らせば誰でもやせる。

（例）<仮定条件>食事を減らせばあなたもやせるだろう。

Yには未実現のことがらを述べ立てる表現や、意志や命令などの「表出・働きかけ」の表現が用いられる。

a …ば＋未実現のことがら

（1）もし私が彼の立場なら、やっぱり同じように考えるだろう。

（2）もし天気が悪ければ、試合は中止になるかもしれない。

（3）手術をすれば助かるでしょう。

（4）こんなに安ければ、きっとたくさん売れると思う。

（5）それだけ成績がよければ、どの大学にでも入学できるはずです。

（6）ふだん物静かな夫がめずらしく、一時間も説教していた。あれだけ叱られれば、息子も少しは反省するにちがいない。

特定の人物や事物について「Xが成り立てば当然Yが成り立つだろう」という意味を表す。Yは未実現のことがらを表し、文末には「だろう」「にちがいない」「はずだ」「かもしれない」や「思う」など、推量や予測の表現を伴うことが多い。

（1）〜（3）は、未実現のXを仮定して、そのような場合に成り立つはずのYを推測する言い方。（4）〜（6）は、Xがすでに実現していることがらを表す場合で、「このような状況が成立しているのであれば、当然Yが成り立つだろう」という表現。

話し手がYの成立についてかなり確信をもっているような場合には、次のように、文末が述語の現在言い切り形で終わる場合もある。

（7）応募人数が多ければ抽選になります。

（8）うっかりミスさえしなければ必ず合格できますよ。

（9）食事の量を減らして運動をすれば、2、3キロぐらいはすぐ減りますよ。

（10）A：気分が悪くなってきたよ。
B：それだけ飲めば、気分も悪くなるよ。

「ば」は、XがYを成立させるための必要十分条件であるということを言う場合によく用いられる。（8）は、「Xさえ…ばY」の形で「Yが成立するためにはXが成立すれば十分だ」という意味の表現であり、（9）は、どうすれば望んでいる結果が得られるかを述べる表現、（10）は「そんなに飲めば気分が悪くなるのも当然だ」という意味の表現である。

これらはいずれも「Xならば必ずY」という<一般条件>を裏にもち、それを特定の場合にも当てはめて述べるのに用いられる。（10）の例で言えば、「だれでも飲み過ぎれば気分が悪くなる」という<一般条件>を、特定の相手に対して当てはめ「あなたもそれだけ飲めば気分が悪くなるのも当然だ」と言っているのである。

b …ば＋意志・希望

（1）安ければ買うつもりです。

（2）A：こんどの日曜日、天気がよければハイキングに行こうよ。
B：いいね。すこしぐらい天気

が悪くても行こうよ。

（3）A：なにか飲む?

B：そうだな、ビールがあれば飲みたいな。

（4）レポートを提出しなければ、合格点はあげません。

（5）田中さんが行かなければ、私も行かない。

（6）田中さんが行けば、私も行く。

（7）掃除を手伝ってくれればおこづかいをあげる。

（8）お電話くだされればお迎えに上がります。

（9）もし、今学期中にこの本を読み終われば、次にこの本を読みます。

（10）もし雨が降れば中止しよう。

「Xば…しよう／したい」のような形で、Yが意志や希望を表す場合で、Xに用いられる述語には制約がある。一般的傾向としては、Xの述語が状態性の場合は問題がないが、動作や変化を表す動詞に続く場合は不自然になることが多い。

（1）～（5）はイ形容詞や「ある」や「V-ない」など、状態性の述語が使われているため、「ば」は問題なく使用できる。（6）～（10）はXが動作・変化を表す場合だが、「ば」が使用できる場合である。（6）は、聞き手と話し手が同じ動作を表すような場合であり、（7）（8）は、「あなたがXを行えば私は代わりにYを行う」といった意味の、相手に交換条件を出して約束する場合の表現である。（9）（10）は、それぞれ「読み終わるかどうかはっきりわからないが／読み終わらないかもしれないが、もし読み終わったら」「仮に雨が降った場合は」という意味を表すもので、Xのことがらが確実に成立するかどうかに疑いをもっていたり、成立しない場合を考慮にいれて述べる場合の表現である。

（6）～（10）のような場合は、Xが動作・変化を表すものでも「ば」の使用が可能となる。これに対して、未来の行動予定について、動作の順番を時間的な経過にそって表すような場合には「ば」は使えない。例えば（9）が「この本を読み終わってから次の本を読もう」という意味で使われる場合には「ば」を用いることができず、代わりに「たら」を使わなければならない。

（誤）この本を読めば次にこの本を読みます。

（正）この本を読んだら次にこの本を読みます。

c …ば＋働きかけ

（1）そう思いたければ勝手に思え。

（2）やりたくなければやるな。

（3）宿題をすませなければ遊びに行ってはいけない。

（4）飲みたくなければ飲まなくてもいい。

（5）お時間があれば、もう少しゆっくりしていってくださいよ。

（6）明日、天気がよければ海に行きませんか。

（7）7時までに仕事が終われば、来てください。

「ば」の後に「命令・禁止・許可・勧誘・依頼」など、聞き手に行動を行うことを要求する「働きかけ」の表現が続いたもの。一般に文末が「働きかけ」の表現の場合は、Xに動作・変化を表す動詞は使いにくく、Yが「意志・希望」の表現の場合よりもさらに強い制約を受ける。

「ば」が使用可能なのは「V-たい」「V-ない」「ある」などの状態性の述語に続く場合で、（1）～（6）はすべてそのような例である。（7）は、変化を表す動詞に「ば」の使用が可能な例で、「終わる」という変化の動詞に依頼表現が続いている。「終わらないかもしれないが、仮に終わらせることができた場合」という意味で、終わる可能性に対して話し手は疑いや否定的な気持ちをもっている。このような場合には「ば」が使用できることがある。

だが、一般的には、Xが動作や変化を表し、その動作・変化が起こった後に、次の動作を行うよう指示したりそれを禁止したりする場合には「ば」は使えず、代わりに「たら」を使わなければならない。

（誤）駅に着けば迎えに来てください。

（正）駅に着いたら迎えに来てください。

（誤）お酒を飲めば運転するな。

（正）お酒を飲んだら運転するな。

d …ば＋問いかけ

（1）A：学生ならば、料金は安くなりますか。

B：大人料金の2割引になります。

（2）この病気は手術をすれば治りますか。

（3）あやまれば許してくれるでしょうか。

（4）A：どうすれば機嫌を直してくれるかしら。

B：何か贈り物をして丁寧にあやまるのが一番ね。

（5）A：どのぐらい入院すればよくなるでしょうか。

B：2週間ぐらいですね。

（6）A：どこに行けばその本を見つけることができるでしょうか。

B：神田の古本屋を探せば、一冊ぐらいはあるかもしれませんね。

「XばYか」の形で、聞き手に答えを要求する問いかけを表す。（1）～（3）は、「はい」「いいえ」を問う疑問文、（4）～（6）は、「どう」「どこ」などの疑問詞を伴う疑問文の例である。後者の場合、「ば」は、「どうすればYか」の形で、よい結果Yを得るための手段・方法Xを問うような場合によく用いられる。これに対して、Xが成立した場合にどのような行動をとるかを問う場合は「たら」を使うのが自然で、「ば」を使うと不自然になることが多い。

（誤）雨が降ればどうしますか。

（正）雨が降ったらどうしますか。

e 疑問詞＋V-ば…のか

（1）いったいどういうふうに説明すれば分かってもらえるのか。

（2）何年勉強すればあんなに上手に英語がしゃべれるようになるのだろう。

（3）どれだけ待てば、手紙は来るのか。

（4）人間、一体何度同じ過ちを繰り返せば、気がすむのであろうか。

「何／どれだけ／どんなに」などの疑問詞に動詞のバ形が続く反語的表現。「いくら…してもなかなか思い通りにならない」という意味で、状況に対するいらだちや絶望的な気持ちを表す。文末には「のか／のだ／のだろう(か)」などが用いられる。「V-ば」は「V-たら」でも言いかえ可能。

4 …ば <反事実>

前後に事実と反対のことがらを述べて、もし事情が反対ならば実現する(した)はずのことを述べる表現。すでに実現してしまっていることがらについて言う場合と、実現が不可能なことが明らかなような場合に使う。

望ましい事態が実現しない場合は後悔や残念な気持ちを伴う。反対に悪い事態が避けられたような場合は「そうならなくてよかった」という安堵の気持ちを表す。

<反事実>かどうかは形では区別できない場合が多いが、以下のような文型は反事実条件文でよく使われるものである。この用法の「ば」はいずれの場合も「たら」で言いかえることができる。

a …ば …のに／…のだが

（1）宿題がなければ夏休みはもっと楽しいのに。(残念なことに宿題がある。)

（2）お金があれば買うんだけどなあ。(お金が無いから買えない。)

（3）お金があれば買えたんだが。(お金がなかったので買えなかった。)

（4）A：試験うまくいった?
　　B：うまくいっていれば、こんな不機嫌な顔はしていないさ。(試験に失敗したから、こんな不機嫌な顔をしている)

「XばYのに／のだが／のだけれど」の形の反事実条件文。Yの述語は辞書形の場合とタ形の場合がある。(1)(2)が前者の例で、現状と違うことを望んだり、現状を嘆いたりする場合の表現。(3)は後者の例で、過去の事実とは異なる事態を仮定して、その場合には違った結果になっていたということを述べるもの。(4)は「V-ていればV-ている」の形のもので、すでに実現していることがらについて、事情が異なれば現状のようであるはずがないと仮定して述べる表現。

(1)〜(3)のように文末に「のに」「のだが」「のだけれど」などが付けば反事実条件文であることがはっきりするが、(4)のようにそれが示されない場合もある。

b …ば …だろう／…はずだ

（1）地震の起こるのがあと1時間遅ければ被害はずっと大きかっただろう。

（2）気をつけていれば、あんな事故は起きなかったはずだ。

（3）発見がもう少し遅ければ助からなかったかもしれない。

（4）あの時すぐに手術をしていれば、助かったにちがいない。

（5）彼が止めに入らなければ、ひどい喧嘩になっていたと思う。

（6）あの時、あの飛行機に乗っていれば、私は今ここにいないはずだ。

事情が異なればあり得たはずのことがらを推測して述べるもの。文末には「だろう・はずだ・かもしれない・にちがいない・と思う」など予測・推測を表す表現が使われる。

(1)〜(5)のように、これらが述語のタ形を受ける場合は、過去の事実がそれと異なることを表し、(6)のように辞書形を受ける場合は、現状がそれと異なることを表す。

c …ば…ところだ(った)

（1）もう少し若ければ、私が自分で行くところだ。

（2）あのとき、あの飛行機に乗っていれば私も事故に巻き込まれていたところだ。

（3）今日の授業は突然休講になったらしい。田中が電話をしてくれなければ、もう少しで学校に行くところだった。

（4）電車がもう少し早く来ていれば大惨事になるところだった。

（5）注意していただかなければ忘れていたところでした。

文末は「V-るところだった」「V-ていたところだ」「V-ていたところだった」などの形になる。

「…ばV-るところだ」は、事情がXと異なれば実現しそうな未実現のことがらYを仮定する言い方。(1)がその例で「実際には若くないので行けないが、そうしたいぐらいの気持ちだ」という意味を表す。

「…ばV-ていたところだ」は「事情が異なればそうした／なったはずだ」と、過去にあり得た状況を述べる表現で、(2)がその例。

(3)(4)の「…ばV-るところだった」は、事情が異なれば起こっていたはずの出来事が、その直前で避けられたような場合に使う。「悪い結果を避けることができてよかった」というような場合に用いる。

(5)の「忘れていたところだった」は「忘れているところだった」と言うこともできるが、前者は「忘れずにすんだ」という過去の時点での状況を表し、後者は「忘れずにすんでいる」という現時点での状況を表す。

→【ところだ】2

d …ば　V-た／V-ていた

（1）安ければ買った。

（2）もっと早く来れば間に合った。

（3）手当てが早ければ、彼は助かっていた。

（4）きちんとした説明があれば、私も反対しなかった。

文末が動詞の夕形をとって、事実に反することがらを表す。過去のことがらについて、実際にはしなかったことや実際とは違った状態を仮定して、その場合に成立していたことがらを言う場合に使う。（2）の例で言えば「もっと早く来れば間に合ったのだが、実際には遅く来たので間に合わなかった」という意味。

　普通、反事実条件文は、上のa～cのように文末に「のに／のだが／のだけれど」や「だろう／かもしれない／はずだ／にちがいない／と思う」「ところだ（った）」などを伴うことが多いが、dのようにそれがない文型もある。特に文末がタ形で終わる場合は、「ば」を用いた文と「たら」を用いた文は異なる意味を表すことがあるので注意が必要である。

（例1）ボタンを押したら爆発した。

（例2）ボタンを押せば爆発した。

（例1）は「ボタンを押した。すると爆発した」という実際に起こった出来事の意味になるのに対し（例2）は「ボタンを押せば爆発したが実際には押さなかったので爆発しなかった」という反事実条件文の意味になる。

5 …ば　<確定条件>

（1）彼は変わり者だという評判だったが、会ってみれば、うわさほどのことはなかった。

（2）言われてみればそれももっともな気がする。

（3）始める前は心配だったが、すべてが終わってみれば、それほど大したことではなかったと思う。

「XばY」という形で、Xが成立した場面でYを新たに認識したという意味を表す場合に用いる。この用法には、「たら」と「と」を使うのが普通で、「ば」が使われるのは、詩歌や小説など、やや古めかしい文学的な表現に限られる。話しことばで使われる場合は、たいてい「V-てみれば」の形で使われ、事実を知って「それももっともだ」「やっぱりそれが当然だ」と納得するような気持ちを表す。

　（1）～（3）は「たら」で言いかえられるが、「たら」を使った場合は、「あることをした結果、あることに気がついた」という意味になる。例えば、（1）を「たら」で言いかえ「会ってみたら、うわさほどのことはなかったよ」のように言うと「会ってみた結果、うわさとは違うことが分かった」という意味になる。このように新たに分かったことがらをそのまま述べるような場合は、「たら」か「と」を使うのが普通で、「ば」を使うと不自然になることが多い。

（誤）昨日、台所で変な音がするので泥棒かと思って行ってみれば、弟がラーメンを作っていた。

（正）昨日、台所で変な音がするので泥棒かと思って｛行ってみたら／行ってみると｝、弟がラーメンを作っていた。

（誤）朝起きれば、雨が降っていた。

（正）朝｛起きたら／起きると｝、雨が降っていた。

　次のように同じ人物が前の動作に連続して後の動作を一度だけ行うような場合は「ば」と「たら」は使えず、「と」を使わなければならない。

（誤）次郎は家に｛帰れば／帰ったら｝、テレビを見た。

（正）次郎は家に帰ると、テレビを見た。

6 …ば…で

[A-ければ A-いで]

[V-ば V-たで]

（1）自動車がないとさぞ不便だろうと思っていたが、なければないでやっていけるものだ。

（2）父は暑さに弱い。それでは冬が好きかというとそうではない。寒ければ寒いで文句ばかり言っている。

（3）金などというものは、無ければ困るが、あればあったでやっかいなものだ。

（4）子供が小さい間は、病気をしないだろうかちゃんと育つだろうかと心配ばかりしていたが、大きくなれば大きくなったで、受験やら就職やら心配の種はなくならない。

同じ動詞や形容詞を繰り返して使う。対照的なことがらを取り上げて、どちらにしても同じだという場合に使う。例えば、（1）は「自動車はあれば便利だが、なくても思ったほどは困らない」（2）は「父は暑くても寒くても、文句を言っている」（3）は「金はあってもなくても困る」、（4）は「子供は小さい間もきくなってからも心配なものだ」という意味になる。（4）は2度目の「大きく」を省略して「大きくなればなったで」とも言える。「…たら…で」は類義表現。

7 …ば　<前置き>

　後に続く発言がどのような条件でなされるものなのか、前もってその範囲を限定したり、予告や注釈を行う場合に用いる。ある程度固定化の進んだ慣用的な表現。たいていの場合「たら」で言いかえが可能。

a …ば＋依頼・勧め

（1）もし、お差し支えなければ、ご住所とお名前をお聞かせください。

（2）A：今日の説明会はもう終わったんでしょうか。

　　B：はい、3時に終了いたしました。よろしければ、来週の火曜にも説明会がございますが。

（3）よろしければ、もう一杯いかがですか。

聞き手に依頼や勧め・提案をする場合に用いられる慣用的な表現で、相手の都合や気持ちに対する配慮を表す。「あなたの都合や意向に反するものでなければ」という意味で、もし都合が悪かっ

たり、その気がない場合は必ずしもそれに応じなくてもいいという話し手の遠慮を表す丁寧な表現である。

b …ば <観点>

（1）A：本当に行くのかい。
B：うん。でも正直言えば、本当は行きたくないんだ。

（2）50年前と比べれば、日本人もずいぶん背が高くなったと言える。

（3）今は円高なので、国内旅行よりも海外旅行の方が安くつくらしい。考えてみればおかしな話だ。

（4）思えば、事業が成功するまでのこの10年は長い年月だった。

「言う」「思う」「比べる」など、発言や思考、比較を表す動詞を受けて、後に続く発言や判断がどのような観点・立場からなされているのか、前もって予告し、説明する言い方。

（1）（2）は「正直言って／言うと／言ったら」「比べて／比べると／比べたら」、（3）は「考えてみると／みたら」と言いかえることができる。（4）は「改めて思えば」の意味で、これまでのことを感慨をこめて振り返る場合に使われる言い方だが、テ形や「たら」「と」での言いかえは不可能。

ある程度固定化が進んだ慣用表現が多く、この他にも「はっきり言えば」「極端に言えば」「からみれば」「からすれば」などがある。

8 V-ば <勧め>

（1）≪服売り場で≫
A：これなんかどうかなあ。
B：着てみれば?

（2）A：ゆうべから、すごく頭が痛いんだ。
B：そんなに痛いの? 会社休めば?

（3）A：あ、これ間違ってる。
B：教えてあげれば?

上昇調のイントネーションで発音され、聞き手にある行動をするように勧める時に使う。「V-ば」だけで終わる言い方をすると、話し手にとってはどうでもいいことであるという、投げやりな感じがすることが多い。「V-たら」「V-たらどう」で言いかえ可能。くだけた話しことばで使う。

9 …も…ば…も

（1）彼は心臓が悪いくせに酒も飲めばたばこも吸う。

（2）彼は器用な男で料理もできれば裁縫もできる。

（3）勲章なんかもらっても、うれしくもなければ、名誉だとも思わない。

（4）動物が好きな人もいれば、嫌いな人もいる。

（5）人の一生にはいい時もあれば悪い時もある。

（1）～（3）のように類似したことがらを並列的に並べて強調する場合や、（4）（5）のように対照的なことがらを並べて、いろいろな場合があることを表す場合に使う。これらの例文は「酒も飲むしたばこも吸う」のように「…し」を使った表現に言いかえることができる。また、「動物の好きな人がいれば嫌いな人もいる」のように、初めの「も」に「が」が使われることもある。

10 おもえば →【おもえば】

11 …かとおもえば →【かとおもえば】

12 …からいえば →【からいう】1

13 …からすれば →【からする】1

14 …からみれば →【からみる】1

15 さえ…ば →【さえ】2

16 ってば

（1）お父さんってば、早く来てよ。

（2）絶対に私が正しいんだってば。

→【ってば】

17 …といえば →【といえば】

18 …とすれば →【とすれば$_1$】、【とすれば$_2$】

19 …となれば →【となれば】

20 …ともなれば →【ともなれば】

21 …ならば →【なら$_1$】、【なら$_2$】、【なら$_3$】

22 …にいわせれば →【にいわせれば】

23 …にしてみれば →【にしてみれば】

24 …ば…ほど

（1）考えれば考えるほど分からなくなる。

（2）食べれば食べるほど太る。

→【ほど】4b

25 …も…ば

（1）その部品なら1000円も出せば買えるよ。

（2）こんな作業は5分もあれば終わる。

→【も】4d

26 …も…あれば…もある →【も】10

【は…で】

[NはNで]

（1）彼の言うことなど気にせず、君は君で自分が正しいと思ったことをやればいいのだ。

（2）姉はオリンピックで金メダルを取り、妹は妹で、初めて書いた小説が芥川賞を受賞した。

（3）タヌキは若い女に化け、キツネはキツネで立派な侍に変わった。

「XはXで」と同じ名詞をくり返し用いて、他のものと対比しながらXについて述べるのに用いる。

【ばあい】

[Nのばあい]
[Naなばあい]
[A／V ばあい]

1 …ばあい

（1）雨天の場合は順延します。

（2）火事、地震など、非常の場合には、エレベーターを使用せずに階段をご利用下さい。

（3）あの場合にはやむを得なかった。

（4）陸からの救助が困難な場合には、ヘリコプターを利用することになるだろう。

（5）この契約が成立した場合には謝礼をさしあげます。

（6）万一8時になっても私が戻らない場合には警察に連絡して下さい。

起こり得るいろいろな状況の中から、ひとつだけをとりあげて問題にする時に使う。

（1）～（6）は、「…時は」と言いかえられる。しかし、次のように、話し手の個人的な経験に基づく具体的な時間関係を表す文には「場合」は使えない。

（正）私が行った時には会議は始まっていた。

（誤）私が行った場合には会議は始まっていた。

2 …ばあいもある

（1）患者の様態によっては手術できない場合もある。

（2）商品はたくさん用意しておりますが、品切れになる場合もございます。

（3）優秀な学生であっても、希望した学校に入学できない場合もあるし、逆の場合もありうる。

ある状況が起こり得る可能性があることを述べるときに使う。（1）（2）のように、「たいていは大丈夫だが、例外的にだめなこともあるので前もってお知らせしておきます」という文脈で使われることが多い。

（3）は、対照的な場合を例に挙げて、「いろいろな可能性がある」ことを述べている例である。

3 …ばあいをのぞいて

（1）緊急の場合を除いて、非常階段を使用しないで下さい。

（2）非常時の場合を除いてこの門が閉鎖されることはない。

（3）病気やけがなど特別な場合を除いて、再試験は行わない。

ある特別な状況が起きたときを取り上げて、例外規定を述べる時に用いる。後に「…ないでください」「…しない」などが続くことが多い。（1）は「緊急の時だけ、非常階段を使って下さい」、（3）は「病気やけがなど特別なときだけ、再試験をする」という意味になる。「場合以外は」と言うこともある。

4 V-ているばあいではない

（1）今は泣いている場合じゃないよ。

（2）もう議論している場合ではない。行動あるのみだ。

（3）A：入学試験に落ちたら、学校に行かなくてもすむな。
　B：冗談を言っている場合じゃないだろう。少しは勉強したらどうだ。

現在の状態や相手が行っている行動が不適当であることを述べて、現在が緊急事態であることを聞き手に忠告する時に使う。

5 ばあいによっては →【によって】5

【はい】

肯定の応答やあいづちなどに用いる。「はい」に似た表現に、「うん」「ええ」がある。「うん」は、家族間や友人同士など、ごく親しい間柄でくだけた場面や目下の者に向かって言う場合にしか使えない。改まった場面では「はい」や「ええ」が用いられる。否定の場合に使われるものに「いいえ」「ううん」「いや」などがある。

1 はい ＜肯定＞

（1）A：これはあなたの本ですか。
　B：はい、そうです。

（2）A：明日、学校へいきますか。
　B：はい、行きます。

（3）A：おいしいですか。
　B：はい、とてもおいしいです。

（4）A：便利ですか。
　B：はい、便利です。

（5）A：国へ帰るんですか。
　B：はい、そうです。

話し手の判断が正しいか正しくないかを問う疑問文において、相手の判断が正しい場合に答えとして用いる。この場合、「はい、そうです。」は（1）のように名詞を受ける時にしか使えない。

動詞・形容詞を受ける場合には（2）（3）（4）のように同じ動詞・形容詞を繰り返さなければならない。ただし、（5）のように質問が「のですか」「んですか」の時は「はい、そうです。」も使うことができる。

（例）A：これは、あなたの車ではありませんね。
　B1：はい、ちがいます。
　B2：いいえ、わたしのです。

上の例のような否定疑問文では相手の判断が正しい場合には「はい」間違っている場合には「いいえ」が使われる。つまり、「これはあなたの車ではない」が正しい判断であれば、答えはB1「はい、違います。」や「はい、私の車ではありません。」となり、「はい」が使われる。

以上の例でわかるように、否定疑問文に対する答えは、質問者の予想や判断が正しい場合には「はい」、ちがう場合には「いいえ」となり、判断の内容そのものが肯定か否定かには関係がない。実際の会話では、否定疑問文に対して「はい」「いいえ」を使わないで答えることも多い。

2 はい ＜承諾＞

（1）A：行ってくれますね。
　B：はい。

（2）A：いっしょにやりましょう。
　B：はい。

（3）A：これをあっちに持って行ってください。
　B：はい、わかりました。

（4）A：いっしょに食事をしませんか。
　B1：はい、行きましょう。

B2：いや、今日はちょっと。

（5）母：早くおふろに入りなさい。

子：はいはい。

母：「はい」は、一回!

依頼や要求、勧誘などを承諾する時に使う。（4）は、形は疑問文だが正しいか正しくないかを問うものではなく、勧誘なので、承諾する場合には「はい」が使われる。断わる場合に「いいえ」を使うと拒絶する感じが強いので避けられることが多い。（5）のように、依頼や要求に対して「はい」を二回繰り返すのは、いやいや返事をしているようで失礼な印象を与える。

3 はい ＜応答＞

（1）A：山田君。

B：はい。

（2）A：ちょっとおたずねしますが…。

B：はい。

（3）A：あのう。

B：はい。

（4）A：おーい。ちょっと。

A：はい。

よびかけられた時、出席をとるために名前を呼ばれた時などの応答に使う。この場合は「ええ」は使わない。くだけた場面で、呼びかけられた時には、「はあい」や「なに」「なあに」なども使われる。

4 はい ＜あいづち＞

（1）≪電話で≫

A：来週の旅行のことですが…。

B：はい。

A：他の方は皆さんいらっしゃることになったんですが。

B：あ、はい。

A：ええ、それで、Bさんのご都合はどうかと思いまして…。

B：すみません。それがですねえ。急に用事ができてしまいまして、申し訳ないんですが…。

A：だめですか…。

「はい」や「ええ」「うん」は、あいづちとして用いられることが多い。その場合には相手の話を理解している、聞いていることを示しているだけで、相手に同意しているわけではない。

5 はい ＜喚起＞

（1）はい、みなさんこっちを向いて。

（2）はい、みなさん出発しますよ。

（3）はいどうぞ。

（4）はい、お茶。

（5）はい、これでございます。

相手の注意を引きつけるのに使う。この場合、「うん」「ええ」は使えない。

6 はい ＜追認＞

（1）A：おじいさんは、こちらには長くお住まいですか。

B：私ですか。私は、戦前からずっとここに住んでおります。はい。

（2）客：どっちが似合うかしら。

店員：そりゃもう、どちらもお似合いでございます。はい。

自分の発言の最後に、自分の言葉を確認するような感じでつけ加える。古めかしい、あるいはへりくだった感じがする。

【ばいい】

[N／Na なら(ば)いい]
[A-ければいい]
[V-ばいい]

活用語のバ形に「いい」が付いた慣用的な言い方。「ばよい」「ばよろしい」はそのやや改まった言い方。

→【たらいい】、【といい】

1 V-ばいい ＜勧め＞

（1）休みたければ休めばいい。

（2）お金がないのなら、お父さんに借りればいいじゃない。

（3）A：どうすればやせられるでしょうか。

B：食べる量を減らして、たくさん運動すればいいんじゃないですか。

（4）A：何時ごろ行きましょうか。

B：10時までに来てくれればいい。

相手に特定の行動をとるように勧めたり、提案したりする表現。特定のよい結果を得るためにどのような方法・手段をとるのがいいか助言したりそれを求めたりする場合に用いる。「たらいい」と類義的で、だいたい置きかえられるが、「ばいい」には「それさえすれば必要十分」という意味が強い。文脈によっては、話し手にとってはどうでもいいこと、そんなに簡単なことさえ分からないのかといった投げやりなニュアンスをもつ場合がある。助言を求める場合は、（3A）のように「どうすればやせられるか」の形で目的を明示してたずねるか、「どうすればいいか」という疑問文を使う。

2 …ばいい ＜願望＞

（1）この子が男の子ならいいのに。

（2）もうすこし暇ならいいのに。

（3）もう少し給料が高ければいいのだが。

（4）もっと家が広ければいいのになあ。

（5）明日、雨が晴れればいいなあ。

（6）父が生きていればなあ。

（7）順子さんもパーティに出席してくれればいいなあ。

そうなってほしいという話し手の願望を表す。文末は「のだが／のに／(のに)なあ」などを伴うことが多い。現状が希望する状態と異なったり、実現できないような場合には、「そうでなくて残念だ」という気持ちを伴う。（6）のように、「いい」が省略された「…ばなあ」の形もよく使われる。ほとんどの場合「たらいい」で言いかえられる。

3 …ばよかった

（1）親がもっと金持ちならばよかったのに。

（2）体がもっと丈夫ならばよかったのに。
（3）もう10センチ背が高ければよかったのに。
（4）あんな映画、見に行かなければよかった。
（5）A：スキー旅行楽しかったよ。君も来ればよかった。
　　B：僕も行ければよかったと思うよ。残念だった。

実際には起こらなかったり、現状が期待に反するような場合に、それを残念に思ったり、聞き手を非難する気持ちを表す。（4）のように否定形を用いて「なければよかった」という場合は、実際に実行してしまったことを後悔する言い方。文末には「のに」のほか「のだが／のだけれど」などが付くことがある。「たらよかった」もほぼ同義。この用法で「とよかった」も使えないことはないが、「たらよかった」「ばよかった」のほうがよく使われる。自分の行動について言う場合は普通「のに」は用いられない。

（誤）僕も行ければよかったのに。
（正）僕も行ければよかったんだが。

【はいざしらず】

→【いざしらず】

【はおろか】

【Nはおろか】

（1）私は、海外旅行はおろか国内旅行さえ、ほとんど行ったことがない。
（2）吉井さんはアレルギーがひどくて、卵はおろかパンも食べられないそうだ。
（3）この学生には単位は出せません。今学期はレポートはおろか出席さえしていないんです。
（4）発見されたとき、その男の人は住所はおろか名前すら記憶していなかったという。
（5）もし歩いていてピストルを突きつけられたら絶対に逆らわないでお金を渡しなさい。さもないと金はおろか命までなくすことになるよ。
（6）戦争も末期になると、青年はおろか妻子ある中年の男まで戦場に送り込まれた。

「XはおろかYさえ／も／すら…ない」のように否定表現と共に使うことが多い。もちろんのこと、言うまでもなくの意味で、程度の軽いものをXで示し、Yを強調するのに使う。古めかしくかたい文体で使う。話しことばでは「…どころか」を使う。

【ばかり】

1 数量詞＋ばかり

（1）一時間ばかり待ってください。
（2）三日ばかり会社を休んだ。
（3）りんごを三つばかりください。
（4）1000円ばかり貸してくれませんか。

（5）この道を100メートルばかり行くと大きな道路に出ます。
（6）来るのが少しばかり遅すぎたようだ。
（7）ちょっとばかり頭がいいからといってあんなにいばることはないじゃないか。

数量を表す言葉に付いて、だいたいの量を表す。（1）～（5）は、「ほど」でいいかえることができる。日常の話しことばでは「ほど」の方がよく使われる。

現代語では（1）（2）のように時間の長さを表すときには使えるが、時刻・日付には使えない。その場合には「ぐらい」や「ごろ」を使う。

（誤）3時ばかりに来てください。
（正）3時{ぐらい／ごろ}に来てください。
（誤）10月3日ばかりに来てください。
（正）10月3日{ぐらい／ごろ}に来てください。

（3）（4）は、「りんごを三つください」「1000円貸してください」と同じであるが、「ばかり」をつけて数量をはっきり言わないことで表現がやわらかくなっている。（6）（7）のように、「すこし」「わずか」「少々」などにも付く。

2 …ばかり ＜限定＞

話しことばでは、「ばっかり」も使われる。

a N（＋助詞＋）ばかり

（1）このごろ、夜遅くへんな電話ばかりかかってくる。
（2）うちの子はまんがばかり読んでいる。
（3）彼はいつも文句ばかり言っている。
（4）今日は朝から失敗ばかりしている。
（5）6月に入ってから、毎日雨ばかりだ。
（6）子供とばかり遊んでいる。
（7）父は末っ子にばかり甘い。
（8）この店の材料は厳選されたものばかりで、いずれも最高級品だ。

「それだけで他はない」という意味を表し、「同じものだけをたくさん」「同じことを何度もくりかえす」ことを述べる場合に使われる。

（1）～（5）（8）のように名詞の後に付く「ばかり」は、助詞「が」「を」の前に付いて「ばかりが」「ばかりを」となるが、「が」「を」は省かれることが多い。その他の助詞がある場合には、「名詞＋助詞」の後に付いて（6）（7）のように「とばかり」「にばかり」になる。「まで」「より」の後には付かない。また、理由を表す「から」にも付かない。「だけ」「のみ」に似ているが、「何度も繰り返して」「いつも」「すべて」などの含みがある時には、「だけ」や「のみ」を使うことはできない。

（正）うちの子はいい子ばかりだ。
（誤）うちの子はいい子{だけ／のみ}だ。
（正）母は朝から晩まで小言ばかり言っている。

(誤) 母は朝から晩まで小言{だけ／のみ}言っている。

b V-てばかりいる

(1) 彼は寝てばかりいる。
(2) 遊んでばかりいないで、勉強しなさい。
(3) 食べてばかりいると太りますよ。
(4) 母は朝から怒ってばかりいる。

同じことを何度も繰り返したり、いつも同じ状態にあることを話し手が批判的に述べる場合に用いる。「だけ」「のみ」と入れかえることはできない。

c …ばかりで
[Naばかりで]
[A-いばかりで]
[V-るばかりで]

(1) 彼は言うばかりで自分では何もしない。
(2) サウナなんか熱いばかりで、ちっともいいと思わないね。
(3) このごろの野菜はきれいなばかりで味はもうひとつだ。
(4) 忙しいばかりで、ちっとももうからない。

「ばかり」で取り立てられたことだけで、それ以上のことはないという話し手のマイナス評価を表す。後半には、否定表現が続く。

d Nばかりは

(1) そればかりはお許し下さい。
(2) 命ばかりはお助け下さい。
(3) 今度ばかりは許せない。
(4) 他のことは譲歩してもいいが、この条件ばかりはゆずれない。
(5) いつもは厳格な父も、この時ばかりは叱らなかった。

「これ・それ・あれ」や名詞に付いて、「他の事はともかくそれだけは」「少なくともそのときだけは」などの強調を表す。書きことば的なかたい表現。日常の話しことばに使うと古めかしく大げさな感じがする。

3 V-たばかりだ

(1) さっき着いたばかりです。
(2) このあいだ買ったばかりなのに、テレビが壊れてしまった。
(3) まだ3時になったばかりなのに、表はうす暗くなってきた。
(4) 日本に来たばかりのころは、日本語もよく判らなくて本当に困った。
(5) 山田さんは一昨年結婚したばかりなのに、もう離婚を考えているらしい。

動作が完了してから、時間があまりたっていないことを表す。動作の直後でなくても、(5)のように、話し手にとって時間がたっていないと感じる場合にも使える。

4 V-るばかりだ <一方的な変化>

(1) 手術が終わってからも、父の病気は悪くなるばかりでした。
(2) コンピュータが導入されてからも、仕事は増えるばかりでちっとも楽にならない。
(3) 英語も数学も学校を出てからは、忘れていくばかりだ。

悪い方向への一方的な変化を表す。「…する一方だ」と言いかえることができる。

5 V-るばかりだ <準備の完了>

(1) 荷物もみんな用意して、すぐにも出かけるばかりにしてあった。
(2) 部品も全部そろって後は組み立てるばかりという時になって、説明書がないことに気がついた。
(3) 料理もできた。ビールも冷えている。後は、お客の到着を待つばかりだ。
(4) 今はただ祈るばかりだ。

「V-るばかりにしてある」「V-るばかりになっている」の形でよく使われる。(1)〜(3)のように、準備が完了して、いつでも次の行動に移れる状態になっていることを述べる時に使う。また、(4)のように、「すべてをやって、あとは…するだけだ」という意味で使うこともある。

6 …ばかり <比喩>

a …ばかりのN
[A-いばかりのN]
[V-るばかりのN]

(1) 頂上からの景色は輝くばかりの美しさだった。
(2) 船はまばゆいばかりの陽の光を浴びながら進んでいった。
(3) 透き通るばかりの肌の白さに目をうばわれた。
(4) 用意された品々は目を見張るばかりの素晴らしさである。
(5) 雲つくばかりの大男が現れた。

比喩を使って程度がはなはだしいことを表す。慣用的な表現が多く、書きことば的な言い方で、物語などによく使われる。

b V-んばかり

(1) デパートはあふれんばかりの買物客でごったがえしていた。
(2) 彼のスピーチが終わると、われんばかりの拍手がわきおこった。
(3) 山々は赤に黄色に燃えんばかりに輝いている。
(4) お姫様の美しさは輝かんばかりでした。
(5) 泣かんばかりに頼むので、しかたなく引き受けた。
(6) ひさびさの再会を喜んだ祖母は手をひかんばかりにして我々を招きいれた。
(7) 彼女は意外だと言わんばかりに不満気な顔をしていた。
(8) 彼はまるで馬鹿だと言わんばかりの目付きで私の方を見

た。

（9）彼はほとんど返事もせずに、早く帰れと言わんばかりだった。

形は「V-ない」の「ない」をとって「ん」を付ける。

(1)〜(3)は、「...しそうなほどのN」、(4)は「輝いてみえるほど美しかった」という意味で、比喩を使って程度がはなはだしいことを表す。(5)(6)は、「ほとんど、今にも...しそうなようすで」「...していると言ってもよい状態で」という意味を表す。(7)〜(9)は、「...と言わんばかり」の形で使われて、実際にそう言ったわけではないが、態度などから話し手にそのように感じられたことを表す。

「様子・態度・目付き・口調」などの言葉とともに用いられることが多い。

7 ...ばかりに

a ...ばかりに

[Aばかりに]

[V-たばかりに]

（1）働きがないばかりに、妻に馬鹿にされている。

（2）二人は好き合っているのだが、親同士の仲が悪いばかりに、いまだに結婚できずにいる。

（3）彼の言葉を信じたばかりにひどいめにあった。

（4）コンピュータを持っていると言ったばかりに、よけいな仕事まで押しつけられる羽目になってしまった。

まさにその事のせいでという意味。後ろには、その結果悪い状態にとどまったり悪い出来事が生じたりするという内容が続く。

b R-たいばかりに

ほしいばかりに

（1）彼に会いたいばかりに、こんなに遠くまでやって来た。

（2）嫌われたくないばかりに、心にもないお世辞を言ってしまった。

（3）わずかな金がほしいばかりに、人を殺すなんて、なんて馬鹿げたことだろう。

「どうしてもしたい」あるいは「したくない」のでという意味。後ろには、そのためには苦労もいとわない、したくないこともあえてするという内容が続く。

8 V-てばかりもいられない

（1）父が亡くなって一か月が過ぎた。これからの生活を考えると泣いてばかりもいられない。

（2）このごろ体の調子がどうも良くない。かといって、休んでばかりもいられない。

（3）ひとごとだと思って、笑ってばかりもいられない。

（4）よその国のことだと傍観してばかりもいられない。

「V-てばかりはいられない」の形でも使う。「それだけしているわけにはいかない」の意味で、現在の状態について、話し手が「安心していてはいけない」「ゆだんしていてはいけない」と感じてい

ることを表すのに使う。「笑う・泣く・喜ぶ・傍観する・安心する」などの感情や態度を表す言葉と共に使われることが多い。

9 ...とばかりはいえない

（1）一概にマンガが悪いとばかりは言えない。中にはすばらしいものもある。

（2）一流大学を出て、一流企業に勤めているからといって、人間としてりっぱだとばかりはいえない。

「一概に決めつけられない、そうでない場合もある」「一般にそうだとは言えない」という意味。

10 ...とばかりおもっていた

[N/Na　だとばかりおもっていた]

[A/V　とばかりおもっていた]

（1）河田さんは独身だとばかり思っていたが、もうお子さんが二人もあるそうだ。

（2）試験は来週だとばかり思っていたら、今週の金曜日だった。

（3）A：昨日はどうしてパーティーに来なかったんですか。

B：えっ、昨日だったんですか。明日だとばかり思っていました。

「かんちがいしていてそう思いこんでいた」という意味で何かのきっかけで、それまで思い違いをしていたことに話し手が気づいた時に用いる。状況から明らかなときは後ろの部分は省略される。

11 ...とばかり(に)

（1）相手チームの調子が崩れた。彼らはこのときとばかりに攻め込んだ。

（2）「えいっ」とばかり切りつけた。

（3）今がチャンスとばかりに攻めかかった。

→【とばかり】

【ばかりか】

書きことば的なかたい表現。

1 ...ばかりか　...も/...まで

[Nばかりか　...も/...まで]

[Na なばかりか　...も/...まで]

[A/V　ばかりか　...も/...まで]

（1）彼女は、現代語ばかりか古典も読める。

（2）会社の同僚ばかりか家族までが私を馬鹿にしている。

（3）そのニュースが放送されると、日本国内ばかりか遠く海外からも激励の手紙がよせられた。

（4）手術をしても歩けるようにはならないかもしれないと言われていたが、手術後の回復はめざましく、歩けるようになったばかりか軽い運動もこなせるようになった。

（5）最近では、東京や大阪のような大都市ばかりか、中小都市でも道路の渋滞がひどくなっ

てきているらしい。

「…だけでなく、その上に」という意味。まず、程度の軽いものについて述べて、それだけでなくて、さらにそれよりも程度の高いことにも及んでいるという場合に使う。

例えば（1）は、「彼女は、現代語が読めるだけではなくて、それよりももっと難しい古典も読める」という意味になる。（2）は、「会社の同僚だけではなくて、（一番信頼してくれるはずの）家族まで私を馬鹿にしている」という意味。

「V-ないばかりか」の形で使われる時には良くないことについて使われる傾向がある。

（例）彼は自分の失敗を認めないばかりか、相手が悪いなどと言い出す始末だ。

（例）親切に忠告してやったのに、彼は、まじめに聞かないばかりかしまいには怒りだした。

（例）薬を飲んだが、全然きかないばかりか、かえって気分が悪くなってきた。

2 それぱかりか

（1）上田さんは英語が話せる。それぱかりか韓国語もインドネシア語も話せる。

（2）彼はその男に着る物を与えた。それぱかりか、いくらかの金まで持たせてやった。

（3）日本の私立高校には、たいてい制服がある。それぱかりか靴やカバンまで決まっているという学校が多い。

用法は1と同じ。はじめの文で程度の軽いことについて述べて、次にさらにそれよりもっと程度の高いことにも及んでいることを述べる表現。

【ばかりでなく…も】

（1）山田さんは英語ばかりでなく中国語も話せる。

（2）漢字が書けないばかりでなく、ひらがなも書けない。

（3）佐藤さんがイギリスに行くことは、友人ばかりでなく家族でさえも知らなかった。

（4）このアパートは、暑いばかりでなく音もうるさい。

「XばかりでなくYも」の形で使われて、「Xはもちろん、Yも」という意味を表す。「も」以外に「まで」や「さえ」なども使われる。話しことばでは「だけじゃなくて」のほうがよく使われる。

【ばこそ】

［N／Na　であればこそ］
［A-ければこそ］
［V-ばこそ］

（1）すぐれた教師であればこそ、学生からあれほど慕われるのです。

（2）体が健康であればこそ、つらい仕事もやれるのだ。

（3）問題に対する関心が深ければこそ、こんなに長く研究を続けてこられたのだ。

（4）あなたを信頼していればこそ、お願いするのですよ。

（5）家族を愛すればこそ、自分が犠牲になることなどはおそれない。

「ば」に「こそ」が付いたもの。「ほかでもないこの理由で」という意味で、理由を強調するやや古めかしい言い方。文末に「のだ」を伴うことが多く、たいてい理由を表す「から」で置きかえができるが、「から」では理由を強調する意味は失われる。

（例）すぐれた教師だから、学生からあれほど慕われるのです。

類義表現に「からこそ」があるが、「からこそ」は、原因・理由がプラス評価・マイナス評価のどちらのことがらの場合でも使うことができるのに対し、「ばこそ」はマイナス評価のことがらが原因・理由となる場合には使いにくい。

（誤）体が弱ければこそ嫌いなものも無理して食べなければならない。

（正）体が弱いからこそ嫌いなものも無理して食べなければならない。

書きことば的。文章や改まった話しことばで使われる。

→【からこそ】

【はじめ】

1 Nをはじめ（として）…など

（1）日本の伝統芸能としては、歌舞伎をはじめ、能、茶の湯、生け花などが挙げられる。

（2）日本語には外来語が多い。英語をはじめフランス語、ドイツ語、ポルトガル語、オランダ語などさまざまな外国語起源の外来語が使われている。

最初に代表的なものを挙げて、その後に同じような例を並べるのに使う。

2 Nをはじめ（として）…まで

（1）その会議には、歴史学者をはじめ、町の研究家から一般市民にいたるまで、さまざまな人々が参加した。

（2）彼の葬儀には、友人知人を初め、面識のない人までが参列した。

中心的なものからより広い範囲にまで及んでいることを表す。

【はじめて】

［V-て（みて）はじめて］

（1）病気になってはじめて健康のありがたさがわかる。

（2）外国に行って初めて自分の国について何も知らないことに気がついた。

（3）言われてみて初めて、自分がいかに狭量であったかに気がついた。

「あることが起こってはじめて」という意味で、何かを経験した結果、いままで気がつかなかったことや、知っていてもあま

り深く考えなかったことに改めて気づいたことを述べるのに用いる。

【はず】

[Nのはず]
[Naなはず]
[A／V　はず]

1 …はずだ ＜話し手の判断＞

(1) A：山田さんも明日の会議には出席するんですか。
　　B：いや、今週は東京に行くと言っていたから、明日の会議には来ないはずだよ。

(2) あれから4年たったのだから、今年はあの子も卒業のはずだ。

(3) 今はにぎやかなこの辺りも、昔は静かだったはずだ。

(4) A：本当にこのボタンを押せばいいのかい? 押しても動かないよ。
　　B：説明書によるとそれでいいはずなんだけど。変だなあ。

(5) A：あそこにいるの、下田さんじゃありませんか。
　　B：おかしいな。下田さんは昨日ニューヨークに発ったはずだよ。

(6) A：会議は一時からですか。
　　B：ええ、そのはずです。

話し手が、なんらかの根拠に基づいて、当然そうであると考えたことを述べる場合に用いる。判断の根拠は論理的に筋道の追えるものでなければならない。従って、次のような場合には用いることができない。

(誤) めがねが見つからない。またどこかに置き忘れたはずだ。
(正) めがねが見つからない。またどこかに置き忘れたんだ。

(4)(5)のように、現実が話し手の判断と違った場合には、意外・不審の念を表す。

第三者の予定について、「彼は来年帰国するはずです。」とは言えるが、話し手自身の行動については、「はず」は使えない。この場合には「つもり」「V-ようと思う」「…予定だ」を用いる。

(誤) 私は来年帰国するはずです。
(正) 私は来年帰国する予定です。

自分自身の行動であっても、次の例のように、自分の意志で決定できないことや予定の行動と違った場合には使える。

(正) マニュアルを何回も読んだからできるはずなんだけど、どうしてもコンピューターが起動しない。
(正) その旅行には、私も行くはずでしたが、結局行けませんでした。

2 …はずだ ＜納得＞

[Naなはずだ]
[A／V　はずだ]

(1) この部屋、寒いねえ。(窓が開いているのを見つけて)寒いはずだ。窓が開いているよ。

(2) ≪作品を見ながら≫彼が自慢するはずだ。本当にすばらしいできだ。

(3) さっきから道が妙にすいていると思っていたが、すいているはずだ。今日は日曜日だ。

話し手が不審に思っていたことや十分に納得できないでいたことをうまく説明できる事実を見つけて納得する気持ちを表す。

3 V-たはず

(1) おかしなことに、閉めたはずの金庫のカギが開いていた。

(2) A：書類、間違っていたよ。
　　B：えっ、よく確かめたはずなんですけど。すみません。

(3) ちゃんとかばんに入れたはずなのに、家に帰ってみると財布がない。

話し手が当然そうだと思っていたことが現実と違った場合に使われ、話し手の後悔、不審などの気持ちを表す。

4 …はずがない ＜可能性の否定＞

(1) あの温厚な人がそんなひどいことをするはずがない。

(2) かぎがない? そんなはずはない。さっき机の上に置いたんだから。

(3) これは君の部屋にあったんだよ。君が知らないはずはない。

「はずがない」「はずはない」の形で用いられて、「ありえない・不可能だ・おかしい」など話し手の強い疑念を表す。

例えば、(3)は「知らないというのはおかしい。当然知っているはずだ。」という意味になる。

1の用法を用いた「…ないはずだ」は、「…ないだろう」と話し手が思っている場合に使うので、たとえば(1)は「そんなひどいことはしないはずだ」となり、話し手の主張はやや弱くなる。

5 …はずだった

(1) 彼も来るはずだったが、急用ができて来られないそうだ。

(2) 理論上はうまくいくはずだったが、実際にやってみると、うまくいかなかった。

(3) 初めの計画では、道路はもっと北側を通るはずだったのに、いつの間にか変更されてしまった。

「当然そうなると考えていた」という意味で、実際にはそれとは違った結果が出たことを表すのに用いられる。話し手の意外感や失望、後悔などの気持ちが込められることが多い。「はずだったが／のに／けれど」など逆接の形で使われることが多い。

6 …はずではなかった

(1) こんなはずではなかった。もっとうまくいくと思っていたのに。

(2) こんなはずじゃなかったのに。

(3) 彼が来るはずではなかったのに。

多くは「こんなはずではなかった」という

形で使われて、現実が話し手の予測と違って、失望したり後悔したりする気持ちを表す。「…はずではなかったのに」という形で使われることが多い。

【はずみ】

[Nのはずみ　で／に]
[V-たはずみ　で／に]

（1）ころんだはずみに足首を捻挫してしまった。
（2）衝突のはずみで、乗客は車外に放り出された。
（3）このあいだは、もののはずみで「二度とくるな」などと言ってしまったが、本当にそう思っているわけではない。

「ある動作の余勢で」という意味で、予想しないこと、意図しないことが起こることを表すのに使う。（3）の「もののはずみで」は慣用句的な表現。「V-た拍子に」と言いかえられることが多い。

【はたして】

1 はたして…か

（1）説明書の通りに組み立ててみたが、はたしてこれでうまく動くものかどうか自信がない。
（2）この程度の補償金で、はたして被害者は納得するだろうか。
（3）この程度の金額で、はたして彼が承知するだろうか。
（4）はたして、どのチームが優勝するだろうか。
（5）機械には特に悪いところがないとすると、はたして何が故障の原因だったのだろうか。
（6）はたして誰の言っていることが真実なのだろうか。

「ほんとうに…か」という意味。「はたして…か」「はたして…だろうか」「はたして…かどうか」などの形で使われて、話し手が「予想通りにいかないのではないか」と疑いの気持ちを抱いている場合に使う。また、（4）〜（6）のように「いつ／どこ／だれ／なに／どう」などの疑問詞を含んだ疑問文とともに使われて、「結局のところ、本当に」という意味を表す。書きことば的な表現。

2 はたして…した

（1）彼もやって来るのではないかと思っていたところ、はたして現れた。
（2）はたして彼女は合格した。

「思っていたとおり…した」「やはり…した」という意味で、話し手が予想していた通りのことが、実際に起きた場合に用いる。書きことば的。

3 はたして…としても

（1）はたして彼の言うことが事実であったとしても、彼に責任がないということにはならない。

「本当に…だとしても」「本当に…ならば」「たとえ…だとしても」の意味で、仮定であることを強調する。この用法は文語的で、日常の話しことばでは使われない。

【はとわず】

→【をとわず】

【ぱなし】

[R-っぱなし]

動詞の連用形に付く。「R-はなし」の形で使われることもある。

1 R-っぱなし <放任>

（1）ドアを開けっ放しにしないでください。
（2）しまった。ストーブをつけっぱなしで出てきてしまった。
（3）うちの子ときたら、食べたら食べっぱなし、服は脱いだら脱ぎっぱなしで、家の中がちっとも片づかない。

当然するべきことをしないで「そのままにしておく」「そのままでいる」という意味を表す。「V-たまま」とは違って、マイナス評価の意味が含まれることが多い。

2 R-っぱなし <継続>

（1）新幹線はとても混んでいて、東京から大阪まで立ちっぱなしだった。
（2）うちのチームはここの所ずっと負けっぱなしだ。
（3）今日は失敗ばかりで、一日中文句の言われっぱなしだった。

同じことがらや同じ状態がずっと続くという意味を表す。

【はやいか】

[V-るがはやいか]

（1）小学校5年の息子は、ただいまと言うが早いか、もう遊びに行ってしまった。
（2）彼は、そばにあった棒をつかむがはやいか、どろぼうになぐりかかった。

ひとつの動作に続いてすぐに次のことが行われる様子を表す。「…するのとほとんど同時に」「…するとすぐ」の意。

（1）では、「ただいまと言うのと、遊びに出て行くのとどちらが早いかわからないぐらいすぐに」つまり「ただいまと言うのとほとんど同時にもう遊びにいった」という意味になる。書きことば的な表現。

【はんいで】

[Nのはんいで]
[NからNのはんいで]
[Vはんいで]

（1）私にわかる範囲でよければお答えしましょう。
（2）差しつかえない範囲でお答え下さい。
（3）駅から歩いて10分ぐらいの範囲で、いいアパートはありませんか。
（4）今日の午後、花火工場で爆発事故がありました。半径5キロから10キロの範囲で、被害が

あったもようです。

「ある限られた広がり」を表す。

【はんたいに】

1 はんたいに

（1） あの子は、靴を反対にはいている。

（2） 父は酒が一滴も飲めない。反対に母はとても酒に強い。

（3） 彼はどろぼうに飛びかかったが、反対にやられてしまった。

（4） 今学期は、いっしょうけんめい勉強したが、成績は反対にさがってしまった。

「逆に」という意味。（1）のように、「左右、上下」など二つあるものが逆になっている場合や、（2）のように対照的なことがらを述べる場合、（3）（4）のように、普通考えられるのとは、逆の結果になった場合に使う。

2 …と(は)はんたいに

（1） 姉は友だちと騒ぐのが好きだが、私は姉と反対に静かに音楽でも聞いている方が好きだ。

（2） 私の部屋は南むきで陽あたりがいいが、うるさい。それとは反対に妹の部屋は、陽あたりは悪いが静かだ。

（3） 山田さんが晩年いい作品を残したのと反対に、若くして賞をとった石田さんはその後ぱっとしなかった。

（4） 弟が有名になっていくのとは反対に、兄の人気は衰えてきた。

「…とは逆に」という意味。（1）（2）（3）のように、対照的な二つのものを比べたり、（4）のように、反比例して変化していく状態について述べる場合に使う。

【はんめん】

1 …はんめん

[Nであるはんめん]

[Na な／である　はんめん]

[A-いはんめん]

[V-るはんめん]

（1） この薬はよく効く反面、副作用も強い。

（2） 化学繊維は丈夫である反面、火に弱いという欠点がある。

（3） 自動車は便利な反面、交通事故や大気汚染というマイナスの側面も持っている。

（4） 彼は目上に対しては腰が低い反面、目下に対してはいばっている。

（5） おじはがんこ者である反面、涙もろい性格だ。

「…のと反対に」という意味。同じ一つのものごとの中に、反対の性格をもつ二つの面が存在することを表す。

2 そのはんめん(では)

（1） 田中先生はたいへんきびしい方だが、その反面、とてもやさしいところもある。

（2） 加藤さんは仕事が速いので有名だ。しかし、その反面、ミスも多い。

（3） 急激な近代化とそれに伴う経済成長のおかげで、我々の生活は確かに向上した。だが、その反面では、伝統的な固有の文化が失われるという結果をもたらした。

1と同じ意味。（1）のように、「…が／けれど、その反面…」（2）（3）のように「(しかし／だが)その反面(では)…」の形で使う。

【ひいては】

（1） 今回の事件は、一社員の不祥事であるばかりでなく、ひいては会社全体の信用をも失墜させる大きな問題であると言うことができる。

（2） 無謀な森林の伐採は森に住む小動物の命を奪うだけでなく、ひいては地球的規模の自然破壊につながるものである。

前文を受けて、「それが原因となって」「さらにすすんで」という意味を表す。（1）のように「小さく見える問題が実はもっと重大な問題の原因となっている」、（2）のように「比較的小さなことがらが、より大きな問題につながっていく」という文脈で使われる。

【ひかえて】

1 NをNにひかえて ＜時間＞

（1） 試合を十日後に控えて選手たちは練習に余念がない。

（2） 結婚を間近に控えた娘が他の男と遊び回るなんてとんでもない。

（3） 入学試験を目前に控えてあわただしい毎日だ。

「XをYにひかえて」の形で、Xで表されたできごとが間近にさしせまっていることを表す。Yには「間近に・10日後に・数ヵ月後に」など時間を表す語句が使われることが多い。「Yに」を省略して「Xをひかえて」となることもある。（2）のように名詞を修飾するときは「ひかえたN」となる。

2 NをNにひかえて ＜場所＞

（1） 神戸は背後に六甲山をひかえて東西に広がっている。

（2） 彼の別荘は後ろに山をひかえた景色のよい場所にある。

山・湖・海・湾など空間的に広がりのある大きなものがすぐ後ろにある様子を表す。（2）のように名詞を修飾するときは「ひかえたN」となる。

【ひさしぶり】

→【ぶり】2

【ひじょうに】

（1）今日はひじょうに寒い。

（2）非常に結構なお味でした。

（3）その御提案は非常にありがたいのですが、家族ともよく相談しませんと。

程度がはなはだしいことを表す。かたい表現。話しことばでは「とても」「すごく」がよく使われる。

【ひではない】

［Nのひではない］

（1）アラビア語の難しさは英語などの比ではない。

（2）彼は専門的な教育を受けたことはないが、その博識は並の学者の比ではない。

（3）現在でも医学部に入学することは難しい。しかし、当時女性が医者になることの困難さは現代の比ではなかった。

「同等でない、比べ物にならないほど程度が高い」という意味。

【ひとつ】

1 ひとつ…ない

「ない」ことを強調する表現。よく似た表現に「…も…ない」「…として…ない」などがある。頻度については、「一度も／一回も／一ぺんも…ない」が使われる。

a Nひとつ…ない

［Nひとつない］

［Nひとつ V-ない］

（1）雲一つない青空。

（2）しみひとつない美しい肌。

（3）街は清潔で、ちりひとつ落ちていない。

（4）夜の公園には、猫の仔一匹いなかった。

（5）あたりはしーんとして、物音ひとつしない。

（6）彼の意見に誰一人反対しなかった。

（7）昨日から何ひとつ食べていない。

「全然…ない」という意味。（1）（2）のように、「雲／しみが全然ない」ことを述べて、「空の青さ」「肌の美しさ」を強調するのに用いる。また、（3）～（5）のように、動詞といっしょに使われて、「全然V-ない」という意味を表す。「ひとつ」以外に「一匹、一人、一枚」など「一＋助数詞」の形もよく使われる。また、（6）（7）のように「誰ひとり…ない」「何ひとつ…ない」の形で使われて、「誰も…ない」「何も…ない」という意味を表す。

b …ひとつも…ない

［ひとつもない］

［ひとつも　A-くない］

［ひとつも　V-ない］

（1）知った顔はひとつもない。

（2）この料理はひとつもうまくない。

（3）彼の作文には、まちがいはひとつもなかった。

（4）このごろのファッションなんか、ひとつもいいと思わない。

（5）あいつは、君の忠告なんかひとつも覚えてやしないよ。

「全然ない」「全然…ない」ことを強調した言い方。

2 もうひとつ／いまひとつ　…ない

（1）給料はいいが、仕事の内容がもうひとつ気に入らない。

（2）風邪がもうひとつよくならない。

（3）今年のみかんは、甘味がもうひとつ足りない。

（4）今年のみかんは、甘味がもうひとつだ。

「もうひとつ…ない」「今ひとつ…ない」の形で使われて、話し手の期待している程度には至っていないことを表す。「とても悪いというわけではないが、はかばかしくない、満足できない」という意味。（1）は「内容があまり気に入っていない」、（2）は「風邪が完全に治らない」、（3）（4）は「甘味が少し足りない」という意味になる。また（4）の「もうひとつだ」も同じ意味。

3 Nひとつ…できない

（1）近ごろの子供はぞうきんひとつ満足にしぼれない。

（2）女優のくせに、歌ひとつ歌えない。

（3）このごろの若いやつは、挨拶ひとつ満足にできない。

（4）留学してから、もう半年にもなるのに、息子ははがきひとつよこさない。

（5）ビール一杯飲めないようでは、社会にでてから困るだろう。

（6）当時はたいへん貧しく、子供達に着物一枚新しく買ってやれなかった。

本来ならできるはずの簡単なことができないことを強調するのに使う。それ以上のことはもちろんできないことを暗に示して、話し手の不満や批判など否定的な気持ちを表すことが多い。

4 ひとつ

（1）ひとつよろしくお願いしますよ。

（2）ひとつ頼まれてほしいことがあるんだが。

（3）ひとつ頼まれてくれないか。

（4）ここはひとつやってみるか。

（5）ひとつ話にのってみようか。

（6）おひとつどうぞ。

（7）ひとついかがですか。

日常の話しことばで慣用的に用いられる。「ちょっと、ためしに」という意味。（1）～（3）のように、何かを頼む時や、（4）（5）のように、試しに何かをやってみようとする時に使われる。（6）（7）は、食べ物などを人に勧める時に使われる。

【ひとつまちがえば】

（1）出産というのは大変な仕事で、医学の進んだ現在でもひとつまちがえば命にかかわる。

（2）政治家の不用意な発言が続いている。ひとつ間違えば外交

問題にも発展しかねない。

(3) カーレースは、ひとつまちがえば、大事故につながることもある危険な競技である。

(4) ひとつ間違えば大惨事になるところだった。

(5) 乗る予定だった飛行機が墜落した。ひとつ間違えば、私もあの事故で死んでいたと思うとぞっとする。

「ほんの少しの差で」という意味。

(1)(2)(3)のように、ほんの少しの差で大事にいたる可能性があることを表す。「ひとつまちがえば…こともある／かねない」などの形で使われることが多い。

(4)(5)は、ほんの少しの差で大事に至らずにすんだ場合に使われた例である。(4)の「ひとつ間違えば…ところだった」の形は、「実際にはそうならなかったが、もう少しで危なかった」ということを表すときに使う。

【ひととおり】

1 ひととおり

(1) 教科書は一通り読んだが、まだ問題集には手を付けていない。

(2) テニスを始めようと思って、道具は一通り揃えたのだが、忙しくて暇がない。

(3) そんなに上手なわけではないが、お茶もお花も一通りは習った。

「全体についてざっと」「だいたい満足できる程度に」という意味。

2 ひととおりのN

(1) 一通りのことはできるようになった。

(2) この問題は難しくて一通りの説明ではわからない。

(3) 私が合格した時、母は一通りの喜びようではなかった。

(4) みんなが頑張っているのだから、成功しようとすれば、一通りの努力ではだめだ。

「普通のN、なみのN」という意味。多くは「ひととおりのNではない」「ひととおりのNでは、…ない」の形で使われて、「普通の程度ではない」「普通の程度ではできない」などの意味を表す。

3 ひととおりではない

(1) 成功するまでの彼の努力は、一通りではなかった。

(2) 愛用していたワープロが壊れたので、あわてて友だちから借りてきたが、慣れない機械というのは、使いにくいこと一通りではない。

「普通の程度ではない」の意味。(1)は「たいへんな努力をした」、(2)は「たいへん使いにくい」という意味になる。

【ひとり…だけでなく】

[ひとりNだけでなく]

(1) 子供のいじめは、ひとり日本だけでなく世界諸国の問題でもある。

(2) この活動は、ひとり本校だけでなく、広く地域に呼びかけて進めたい。

「単にそれだけでなく」という意味。書きことばで、ややかたい話題で使う。

さらに文語的な表現として「ひとり…のみならず」がある。

【ひとり…のみならず】

[ひとりNのみならず]

(1) 環境汚染の問題は、ひとり我が国のみならず全世界の問題でもある。

(2) このNGOの組織には、ひとりイギリスのみならず、多くの国の人々が参加している。

「ひとり…だけでなく」の、さらに文語的な言い方。

→【ひとり…だけでなく】

【ふう】

1 Nふう

(1) あの寺は中国風だ。

(2) 音楽家だというので、ちょっと変わった人間を想像していたが、やってきたのはサラリーマン風のごく普通の男だった。

(3) 美智子さんは、今風のしゃれた装いでパーティーに現れた。

「そのような様式」「そのようなスタイル」という意味を表す。名詞を修飾するときは「NふうのN」となる。

2 …ふう <様子>

[Na なふう]

[A-いふう]

[V-ている／V-た　ふう]

(1) そんなに嫌がっているふうでもなかった。

(2) 男は何気ないふうを装って近づいて来た。

(3) 久しぶりに会った松井さんは、ずいぶんやつれて、生活にも困っているふうだった。

(4) なんにも知らないくせに知ったふうなことを言うな。

「そのような様子」という意味。

3 …ふう <方法>

a こういうふう

(1) こういうふうにやってごらん。

(2) あの人も、ああいうふうに遊んでばっかりいると、ろくなことにはならないよ。

(3) どういうふうに説明していいのかわからない。

(4) A：きみ、最近太りすぎじゃない?

B：失礼な奴だな。そういうふうに、人の嫌がることをはっきり言うもんじゃないよ。

（５）そういうふうな言い方は失礼だよ。

「こういう」のほかに「そういう／ああいう／どういう」なども用い、特定のやり方や方法を表すときに使う。ナ形容詞の活用をする。「こんなふう、そんなふう、あんなふう、どんなふう」とも言う。

b …というふうに

（１）好きな時間に会社へ行き、好きな時間に帰るというふうにはいかないものだろうか。

（２）ひとり帰り、またひとり帰りというふうにして、だんだん客が少なくなってきた。

（３）今月は京都、来月は奈良というふうに、毎月どこか近くに旅行することにした。

「やり方、方法」や「状態」などについて例を挙げて説明するのに使う。

【ふしがある】

（１）彼はどうも行くのをいやがっているふしがある。

（２）犯人は、その日被害者が家にいることを知っていたと思われるふしがある。

（３）その男の言動には、どことなくあやしいふしがある。

「そのような様子だ」という意味。（１）（２）のように、「本人がはっきりとそう言ったわけではないが、言葉や行動からそのように察せられる」という場合に使う。また、（３）のように、「あやしいところがある」という意味で使う。

【ふそくはない】

（１）相手にとって不足はない。

（２）給料には不足はないが、仕事の内容がもうひとつ気に入らない。

（３）彼は大統領として不足のない人物だ。

「話し手の期待どおりで不満はない」という意味。

【ふと】

1 ふと

（１）彼は映画の広告を見つけて、ふと立ち止まった。

（２）ふと思いついて近所の本屋に寄ってみることにした。

（３）人は死んでしまうとどうなるのだろうなどと妙なことをふと考えた。

（４）普段は何とも思わないのだが、何かの拍子に、忙しいだけのこんな生活がふとむなしくなるときがある。

「何かちょっとした拍子に」「思いがけなく」の意味。（１）のように、特別な理由も目的もなく、ちょっとした思いつきやきっかけで何かをする様子を表す。また、（２）（３）（４）のように「考える、思う、思い出す」や「むなしくなる、さびしくなる」のように心理的な変化を表す表現などといっしょに使われて、なぜかわからないが、何かちょっとした拍子に思いだしたり、気がついたりすることを表す。

2 ふとV-ると

（１）ふと見上げると、空にはぽっかり白い雲が浮かんでいた。

（２）ふと見回すと、まわりには誰もいなくなっていた。

（３）仕事をしていて、ふと気がつくと外はもう暗くなっていた。

「なにげなく…したら」の意味。後ろには、その拍子に何かに気がつくということがらが続く。

3 ふとしたN

（１）長い一生の間には、ふとしたことで、人生が嫌になることがあるものだ。

（２）ふとしたきっかけで、彼とつきあうようになった。

（３）小さいころ、祖母にはずいぶん可愛いがってもらった。今でも、ふとしたひょうしに祖母のことを思い出すことがある。

（４）赤ん坊は、ふとした病気がもとで死んでしまった。

「ささいな原因、理由、きっかけで」という意味。（４）は「死ぬような大きな病気ではなかったのに、死んでしまった」という意味。

【ぶり】

1 …ぶり

［Nぶり］

［R-ぶり］

（１）最近の彼女の活躍ぶりは、みんなが知っている。

（２）東京の電車の混雑ぶりは異常だ。

（３）間違いを指摘された時の、彼のあわてぶりといったらなかった。

（４）彼は飲みっぷりがいいね。

（５）佐藤さんの話しぶりからすると、交渉はあまりうまくいっていないようだ。

「活躍ぶり、混雑ぶり、勉強ぶり」など、動作を表す名詞や動詞の連用形に付いて、その様子やありさまを表す。「食べる、飲む」は、「食べっぷり、飲みっぷり」になる。（４）は、「見ていて気持ちがいいほど豪快に飲む」という意味。

2 …ぶり

（１）10数年ぶりに国に帰った。

（２）国に帰るのは５年ぶりだ。

（３）父の半年ぶりの帰国に、家族みんなが大喜びした。

（４）三日ぶりにふろに入った。

（５）遭難者は18時間ぶりに救出された。

（６）最近、ずっと忙しかったが、今日は久しぶりにゆっくりすごした。

（７）A：下田さん、お元気ですか。

御無沙汰してます。

B：やあ、田中さん。久しぶりですね。

時間の長さを表す表現に付く。「…ぶりに…した」の形で使われることが多く、長い間しなかったことを、もう一度したことを述べるのに使う。(4)のように短い期間を使うこともできるが、その場合には「普段なら毎日ふろに入るのだが、かぜをひいていて入れなかったので三日も入れなかった」というような状況が必要で、話し手にとって長いと感じられる期間でなければ使えない。「ひさしぶりですね」「おひさしぶりです」は、長い間会わなかった相手へのあいさつとして使われる。

【ぶる】

[N／Na　ぶる]

(1) 彼は、通ぶってフランスの上等なワインしか飲まない。

(2) 父は学者ぶって解説を始めた。

(3) あの人は上品ぶってはいるが、たいした家柄の出ではない。

(4) 彼はもったいぶってなかなか教えてくれない。

(5) 三年生になった長女は、先輩ぶって一年生の妹にいろいろ教えたりしている。

「…らしい態度で」という意味。「いかにもたいした…である」というふうに、ふるまう様子を表す。(1)～(3)のように、「本当にはそうでないのに、まるでそうであるかのような態度で」あるいは「たいしたことでもないのに大げさに」など、話し手のマイナス評価を含む場合に使うことが多い。(4)の「もったいぶって」は、慣用的な表現で「気取って、ものものしく振舞う」という意味で、「なかなか教えない／言わない」などといっしょに使う。限られた特定の言葉にしか使えない。

【ぶん】

1 …ぶん

[Nのぶん]
[Vぶん]
[期間を表す名詞＋ぶん]

(1) 甘いものが大好きな弟は、私のぶんのケーキまで食べてしまった。

(2) 心配しなくていいよ。君のぶんはちゃんと残しておいたから。

(3) 子供に食べさせる分まで奪われてしまった。

(4) 来月分の食費まで先に使ってしまった。

(5) 部屋を借りるためには、はじめに家賃三ヶ月分のお金が必要です。

「…の割当／分け前」「そのためのもの」という意味を表す。(4)は「来月使うための食費まで使ってしまった」、(5)は「三ヶ月に相当する金額」という意味。

2 …ぶん(だけ)

[Nのぶん]
[Naなぶん]
[A／V　ぶん]

(1) 1年間の休職の分だけ、仕事がたまっていた。

(2) 外で元気な分、彼は家ではおとなしい。

(3) 食べれば食べたぶん(だけ)太る。

(4) 早く始めれば、その分(だけ)仕事が早く終わる。

(5) 彼を信頼していたぶん(だけ)裏切られたときのショックも大きかった。

「その程度に応じて」という意味。(3)(4)のように、「… V-ば V-たぶんだけ」「… V-ば、そのぶんだけ」の形で使われることが多い。「それだけの量、それに応じた量」を表す。

(3)は「食べれば、食べたその量だけ太る」、(4)は、「早く始めれば、早く始めた時間だけ早くおわる」、(5)は、「彼をたいへん信頼していたので、それだけショックが大きかった」という意味。「だけ」はなくてもよい。

3 このぶんでいくと
このぶんでは

(1) 一年かかって、まだ半分も終わっていない。このぶんでいくと完成するには三年ぐらいかかりそうだ。

(2) このぶんでは徹夜になりそうだ。

(3) このぶんでいくと、仕事は予定より早く終わりそうだ。

「この調子ですすむと」「この早さですすむと」という意味。

4 …ぶんには

[Naなぶんには]
[A／V　ぶんには]

(1) はたで見ているぶんには楽そうだが、自分でやってみるとどんなに大変かがわかる。

(2) 私はいかなる宗教も信じない。しかし、他人が信じるぶんには一向にかまわない。

(3) A：申し訳ありません。会議の始まる時間がいつもより少し遅くなりそうなんですが。

B：遅くなるぶんには、かまわないよ。

「その限りでは」の意味。(1)は、「自分でやらないで見ている限りでは楽そうにみえる」、(2)は「自分は宗教は信じないが、他の人が信じるのはかまわない」、(3)は「早くなるのは困るが、遅くなるのはかまわない」という意味になる。

【べからざる】

[V-るべからざる]

(1) 川端康成は日本の文学史上、欠くべからざる作家だ。

(2) 大臣の地位を利用して、企業から多額の金を受け取るなどは、政治家として許すべからざ

る犯罪行為である。

（3） いかなる理由があったにせよ、警官が一般市民に暴行を加えるなど、あり得べからざる異常事態だ。

「べからざるN」の形で使われる。「べきでないN」の文語形。その行為や事態が「正しくない・望ましくない」ことを述べて「…ことができないN」、「…てはいけないN」などの意味を表す。

（1）は「欠かすことができない、忘れてはいけない人物」、（2）は「許すことができないひどい犯罪行為」、（3）は「起こるはずのない事態、起こってはいけない事態」という意味になる。

どんな動詞でも使えるというわけではなく、（1）～（3）の「欠くべからざる人物」「許すべからざる行為」「あり得べからざる事態」のような慣用的な表現だけが使われる。（3）は「得る」ではなく「得」に付く。かたい書きことば。

【べからず】

［V-るべからず］

（1） 落書きするべからず。

（2） 芝生に入るべからず。

（3） 犬に小便させるべからず。

禁止を表す。「べきでない」の文語形。その行為が「正しくない／望ましくない／よくない」ことを述べて「V-てはいけない」という意味を表す。

かなり強い感じの禁止表現で、看板や掲示等に書かれることが多い。しかし、最近では「芝生に入ってはいけません」「芝生育成中」など、もっとやわらかい感じの表現が使われるようになってきている。

看板や掲示によく使われる禁止表現には、ほかに「…禁止」「V-ることを禁ず」などがあるが、いずれもかなり強い調子の禁止表現である。かたい書きことば。話しことばでは使わない。

【べき】

［N／Na　であるべき］
［A-くあるべき］
［V-るべき］

文語の助動詞「べし」の活用形。現代語の表現では動詞の辞書形に付く。「する」には「するべき」と「すべき」の二つの形が使われる。

1 …べきだ

（1） 学生は勉強す（る）べきだ。

（2） 他人の私生活に干渉す（る）べきではない。

（3） 近頃は小学生まで塾に通っているそうだが、子供はもっと自由に遊ばせるべきだ。

（4） 女性は常に化粧をして美しくあるべきだなどという考えには賛成できない。

（5） 地球的規模で自然破壊が進んでいる。人間は自然に対してもっと謙虚であるべきだ。

（6） 教師：君、成績が良くないね。もっと勉強するべきだね。
学生：すみません。

（7） A：海外研修に行くかどうか迷っているんだ。
B：そりゃ、行くべきだよ。いいチャンスじゃないか。

（8） この仕事はきみがやるべきだ。

（9） 会社の電話で私用の電話をするべきじゃないね。

「…するのが当然だ」「…するのが正しい」「しなければならない」という意味。否定形は「べきではない」で、「…するのはよくない」「…するのは正しくない」「…してはいけない」の意味。

（1）～（5）は、一般的なことがらについて、話し手が意見を述べている例であるが、相手の行為について用いる時には、忠告や勧め・禁止・命令などになる。この表現は、書きことばでも日常の話しことばでもよく使われる。

2 …べき　だった／ではなかった

［V-る／V-ておく　べきだった］

（1） あの時買っておくべきだった。

（2） あんなひどいことを言うべきではなかった。

（3） 君はやっぱりあのときに留学しておくべきだったんだよ。

過去のことがらについて、「ああしておけばよかった」「あんなことをしなければよかった」という意味を表す。

（1）は、「あの時、買っておけばよかった。（実際には買わなかった）」、（2）は「あんなひどいことを言わなければよかった。（ひどいことを言ってしまった）」、（3）は「君はあの時留学しなかったが、留学しておいた方がよかった」という意味になる。話し手が自分自身のことについて述べるときは、後悔や反省の気持ちを表す。この表現は、書きことばでも日常の話しことばでもよく使われる。

3 …べきN

（1） 外交政策について、議論すべきことは多い。

（2） エジプトのピラミッドは、永遠に残すべき人類の遺産である。

（3） エイズは恐るべき速さで世界中に広がっている。

（4） 人は皆死すべき運命を背負っている。

「当然しなければいけないこと」「当然そうなること」という意味。

（1）は「論じなければいけないことがら」、（2）は「残すのが当然の、残さなければいけない人類の遺産」という意味になる。（3）（4）は、慣用的に使われる表現で、それぞれ「たいへんな速さ」「必ず死ぬ運命」という意味である。

書きことば的なかたい表現。

【べく】

［V-るべく］

文語の助動詞「べし」の連用形。書きことば的なかたい表現として現代語でも使われる。動詞の辞書形に付く。「する」は「するべく」と「すべく」の二つの形が使われるが「すべく」のほうがかたい感じがする。

1 …べくV-た

（1） 大学に進むべく上京した。

（2） 速やかに解決すべく努力致し

ます。

（3）しかるべく処置されたい。

「…をするために」「…する事ができるように」という意味。（3）は「適切に処置してください」という意味。書きことば的なかたい表現。

2 V…べくしてV-た

（1）この機械の危険性は以前から何度も指摘されていた。この事故は起こるべくして起こったといえる。

（2）彼が勝ったのは偶然ではない。練習につぐ練習を重ねて、彼は勝つべくして勝ったのだ。

同じ動詞を繰り返して、当然そうなるだろうと予想されていたことが実際におこったという意味を表す。

（1）は「事故が起こるかもしれないと心配していたら、やはり起こった」という意味。（2）は、「彼が勝ったのは偶然や幸運ではなくて、あんなに努力したのだから当然である」という意味になる。

書きことば的なかたい表現。

3 …べくもない

（1）多勢に無勢では勝つべくもない。

（2）優勝は望むべくもない。

（3）突然の母の死を、遠く海外にいた彼は知るべくもなかった。

「…することは、とてもできない」「…はずもない」という意味。かたい文語的な表現で、現在ではあまり使われなくなってきている。

【べし】

[V-るべし]

（1）学生はすべからく勉強に励むべし。

（2）後生おそるべし。

（3）今度の試験は、よほど難しかったらしく、クラスで一番良くできる生徒でも60点しかとれなかった。後は推して知るべしだ。

文語の表現で、現代語では慣用的な表現以外ほとんど使われない。「当然のこととしてしなければいけない」「するのが当然だ」という意味で、命令を表す。

（1）は「すべからく…べし」の形で、「学生は当然しなければいけないこととして、勉強しなさい」という意味。

（2）は「若い人はこれから将来、おおいに成長していく可能性があるので大切にしなければいけない」という意味の慣用句。

（3）の「後は推して知るべしだ」は、慣用表現で、「推量すれば、すぐにわかる」という意味。ここでは「他の学生は、言うまでもなくもっと悪い」という意味になる。

【へた】

ナ形容詞。名詞の前では、「へたなN」となる。

1 へた

a へた

（1）字がへたなので、もっぱらワー

プロを愛用している。

（2）A：日本語がへたで、すみません。

B：へただなんてとんでもない。とてもおじょうずですよ。

（3）父は、へたなくせにゴルフが好きだ。

（4）へたな言いわけはやめなさい。

（5）社長は気むずかしい人だから、へたなことを言って、怒らせないように気をつけたほうがいい。

「上手でない」「まずい」という意味。（1）〜（4）のように、「うまくない、上手でない、技術が高くない」こと。また、（5）のように「あまりよく考えないで言ったり、したりする」こと。

b Nは…がへただ

[NはNがへただ]

[NはV-るのがへただ]

（1）私は計算がへただ。

（2）私は歌を歌うのが下手だ。

（3）山下さんはピアノはうまいが、歌は下手だ。

（4）英語は読む方はなんとかなるが、話すのは下手だ。

（5）A：テニスはやるんだろう?

B：うん、へただけどね。

「うまくできない」「上手ではない」という意味。よく似た表現に「…が苦手だ」がある。「苦手だ」は、あまり好きでないという意味が含まれるが「へただ」にその意味はない。

2 へたに

（1）このごろの機械は複雑だから、故障しても素人がへたにいじらない方がいい。

（2）へたに動かすと爆発するかもしれないので、うかつに手がだせない。

（3）A：うちの娘が反抗期でね。家族と口もきかないんだ。注意した方がいいのかなあ。

B：でも、へたに注意するとよけいに反抗するかもしれないよ。

「充分な注意や配慮をしないで」という意味。うかつに。（1）のように、「うまくいかない可能性が高いから、しないほうがよい」という場合や、（2）（3）のように、「充分に注意や配慮をしてしないと、良くないことが起きる可能性があるから気をつけたほうがいい」という場合に使われる。

3 へたをすると

（1）A：試験はどうだった?

B：それが、あまり良くなかったんだ。へたをすると、卒業できないかもしれないなあ。

（2）風邪のようなありふれた病気でもへたをすると命とりになる

ことがある。

（3）不景気で中小企業の倒産があいついでいる。へたをすると、うちの会社も倒産するかもしれない。

（4）道を歩いていたら、上から植木鉢が落ちてきた。へたをすると大怪我をするところだった。

「悪くすると、ひょっとすると」という意味。（1）〜（3）のように、悪い結果にいたる可能性があるという場合に使う。話し手の心配や不安を表すことが多い。（4）は、「へたをすると… V-るところだった」という形で、「もう少しで悪い結果になるところだったが、助かった」という場合に使う。

【べつだん】

1 べつだん…ない

（1）べつだん変わったことはない。

（2）彼はいつもより口数が少ないようだったが、私はべつだん気にもしなかった。

「特別に／別に…ない」という意味。ややかたい書きことば的な表現。

2 べつだんのN

（1）別段のご配慮をいただきたく存じます。

（2）来賓として招かれて、別段の扱いを受けた。

「特別の」「いつもと違う」という意味。（1）は、非常に改まったかたい表現。

【べつとして】

1 Nはべつとして

（1）中国語は別として、そのほかのアジアの言語となると学習する人が極端に少なくなる。

（2）京都や奈良といった観光地は別として、小さい寺や神社には観光収入はないのが普通だ。

（3）中国での生活が長かった西田さんは別として、うちの会社には他に中国語のできる人はいない。

「…は例外だが」「…は特別だが」という意味を表す。「べつにして」とも言う。

2 …はべつとして

[…かどうかはべつとして]

[疑問詞＋かはべつとして]

（1）将来役に立つかどうかは別として、学生時代にいろいろな分野の勉強をしておくことは、けっして無駄ではない。

（2）実現可能かどうかは別として、この計画は一度検討してみる価値はあると思う。

（3）だれが言ったかは別として、今回のような発言がでてくる背景には根深い偏見が存在すると思われる。

「…については今問題にしないが」という意味を表す。「べつにして」とも言う。

【べつに】

1 べつに…ない

（1）別に変わったことは何もない。

（2）会社の宴会など別に行きたくはないが、断わる適当な理由も見つからないので、しかたなく行くことにした。

（3）今どき洋酒なんか、別に珍しくはないが、海外旅行のおみやげにとわざわざ持ってきてくれた彼の気持ちがうれしい。

（4）あなたなんかいなくても、別に困らないわ。

（5）A：どうかしたの。
　　B：いや、べつに。

「特に…ない」「とりたてて…ない」という意味を表す。（5）のように「…ない」の部分が省略されることもある。

2（…とは）べつに

[Nとはべつに]

[Vのとはべつに]

（1）料金とは別に600円の送料が必要です。

（2）サービス料は別にいただきます。

（3）みんなに配ったのとは別に、君には特別なプレゼントを用意しておいた。

（4）昨日来たのとは別に、もうひとつ小包が来ています。

（5）映画館はすごく込んでいたので、友だちとは別に座ることにした。

（6）彼女は旅館に泊まった私達とは別にとなりの町のホテルに泊まった。

（1）〜（4）は、「…以外に」「…のほかに」、（5）（6）は「…とはなれて」「…とちがう」という意味を表す。

3 Nべつに

（1）クラス別に写真を撮った。

（2）小学校や中学校では男女別に名簿をつくるのをやめようという動きがある。

（3）アンケートの結果を、年齢別に集計した。

（4）調査の結果を国別に見ていくと、中国をはじめとしたアジアの国々の経済成長が著しいことがわかる。

「Nごとに」「Nを基準に」という意味。

【べつにして】

→【べつとして】

【ぽい】

（1）気が短くて怒りっぽい。

（2）将来の計画について熱っぽく語っていた。

→【っぽい】

【ほう】

1 …ほう <方向>

［Nのほう］

［Vほう］

（1）京都の北のほうは冬には雪がずいぶん積もる。

（2）あっちの方へ行ってみましょう。

（3）A：どこに座ろうか。
B：前の方にしようよ。

（4）まっすぐ私の方を見てください。

（5）太陽が沈むほうに向かって鳥が飛んで行った。

（6）A：それで、山下さんはまっすぐ家に帰ると言ったんですね?
B：ええ、そう言いました。でも、山下さんが歩いて行った方には駅もバス停もないんで、おかしいなと思ったんです。

おおよその方向、方角を表す。「東・西・南・北」などの方角や「あっち・こっち・どっち・こちら・そちら・どちら」「前・後・左・右・上・下」など方向を表す名詞に付くことが多い。

2 …ほう <一方>

［Nのほう］

［Na なほう］

［A／V　ほう］

（1）A：どちらになさいますか。
B：じゃ、大きいほうをください。

（2）A：いくらですか。
B：こちらの赤い方が1万円、あちらの方が1万3千円となっております。

（3）どちらでもあなたのお好きな方で結構です。

（4）A：連絡は御自宅と会社とどちらにさしあげましょうか。
B：自宅の方にお願いします。

（5）私の方からお電話します。

（6）A：たいへん申し訳ございませんでした。
B：いや、悪いのはこちらの方です。

（7）妻：悟は学校で問題なくやっているのかしら。
夫：放っておけばいいさ。何かあれば、学校の方から何か言ってくるだろう。

（8）A：パチンコで5千円も負けちゃったよ。
B：君なんか、まだましな方だよ。僕なんか一万円以上負けてるよ。

（9）自分で言うのもなんだが、子供のころ僕は成績のよい方だった。

（10）A：御専門は物理学でしたね。
B：ええ、原子力の方をやっております。

（11）二つの作品のうち先生が手伝った方はさすがに完成度が高い。

二つあるものの一方をさす。（5）（6）は、話し手と聞き手を対比させ、話し手の側を「私の方／こちらの方」、聞き手の側を「あなたの方／そちらの方」で示している。（7）の「学校の方から」は「学校から」と同じ意味だが「我々の側」と「学校の側」を対比させている。また、（9）（10）のように、ばくぜんとある部分、ある方面を指す言い方もある。（9）は、「どちらかというと成績がよかった」の意味。（10）は、二つのものの対比ではなく、「物理学の中で原子力の方面を研究している」という意味。

3 …ほう <比較>

［Nのほう］

［Na なほう］

［A／V　ほう］

a …ほうが…より(も)

（1）飛行機のほうが新幹線より速い。

（2）高いより安い方がいいに決まっている。

（3）新幹線で行く方が飛行機で行くより便利だ。

（4）イタリアへ行くなら、ローマやベニスみたいな観光地より田舎の方がおもしろいよ。

（5）スポーツは見るより自分でやる方が好きだ。

（6）漢字は読むことより書くことの方が難しい。

（7）加藤さんよりも佐藤さんの方が、親切に相談にのってくれる。

（8）彼のけがよりも精神的なショックの方が心配だ。

二つのものを比較して、「…ほうが」で表されるものの程度が高いことを表す。「…ほうが」と「…より(も)」は順番が入れ替わって「…より(も)…のほうが」となることもある。また、文脈から明らかな時には、「…ほうが」か「…よりも」のどちらかが省略されることが多い。

b どちらのほう

（1）A：田中さんと井上さんとでは、どちらのほうが背が高いですか。
B：田中さんの方が背が高いです。

（2）A：コーヒーと紅茶と、どちらのほうがよろしいですか。
B：どちらでも結構です。

二つのことがらを比較して、どちらかを問う時に用いる。「のほう」を除いて「どちら」だけでもかまわない。

4 Vほうがいい <忠告>

（1）僕が話すより、君が直接話す方がいいと思う。

（2）そんなに頭が痛いんだったら

医者に行ったほうがいいよ。

（3） あいつとつきあうのはやめたほうがいい。

（4） A：ときどき胃が痛むんだ。
B：たいしたことはないと思っても、一度医者に行っておく方がいいよ。

（5） 退院したばかりなんだから、あまり無理をしない方がいいと思うよ。

（6） あの人おしゃべりだから、話さない方がいいんじゃない。

よいと思われることを述べて、聞き手に対して忠告やアドバイスをする時に使う。動詞の辞書形・タ形・否定形に付く。

辞書形を使っても、タ形を使ってもそれほど大きな違いはないが、聞き手に強く勧める場合にはタ形を使うことが多い。例えば、現在風邪をひいている人に面と向かって言うような場合には「V-たほうがいい」が使われる。但し、否定形は常に「…ない」の形で用いられ、「…なかったほうがいい」という形は使うことができない。

（正） あの人には話さないほうがいいよ。

（誤） あの人に話さなかったほうがいいよ。

5 …ほうがましだ ＜選択＞

[Nのほうがましだ]

[Na なほうがましだ]

[A-いほうがましだ]

[Vほうがましだ]

（1） A：テストとレポートとどっちがいい?
B：レポートの方がましかな。

（2） どうせやらなくちゃいけないなら、日曜日に働くよりは、金曜日に残業して片づけてしまう方がまだましだ。

（3） あんな男と結婚するくらいなら死んだほうがましだ。

（4） 途中でやめるぐらいなら始めからやらないほうがましだ。

話し手にとって望ましくないことがらを比べて、「どちらかを選ばなければならないなら…のほうがよい」という気の進まない選択を表す。

「…くらいなら」を伴って比較の対象を示すことがある。「…くらいなら」は「…より」と似ているが、そのことがらを話し手がよくないと思っているという含みがある。

6 …ほうがよかった ＜後悔＞

[Nのほうがよかった]

[Na なほうがよかった]

[A／V ほうがよかった]

（1） 人に頼まないで自分でやった方がよかった。

（2） A：髪を切ったんだけど、似合う?
B：えっ、切ったの。長い方がよかったのに。

（3） せっかくの連休だからと思って、ドライブに出たが、車が渋滞していてまったく動かない。こんなことなら、来ない方がよかった。

（4） 少し有名になると仕事がどんどん入ってくるようになったが、苦労のわりには収入は増えない。いっそ、無名のままの方がよかった。

過去のできごとについて、「実際に起ったことよりも、それとは別のことの方が適切だった」という話し手の考えを述べて、話し手の残念に思う気持ちや後悔の気持ちを表す。自分自身の行動について述べると「後悔」を表す表現になり、聞き手や他の人の行動について述べる場合には、話し手の残念な気持ちやがっかりした気持ちを表す表現になる。

【ほうだい】

1 R-(たい)ほうだい

（1） 近所の子供たちは、後片付けもせずに、家の中を散らかし放題に散らかして帰っていった。

（2） 誰も叱らないものだから、子供達はやりたいほうだい部屋の中を散らかしている。

（3） 口の悪い姉は相手の気持ちも考えずいつも言いたい放題だ。

「やる」「する」「言う」などの動詞の連用形に付いて、他者への配慮無しに好きなように振舞うことを表す。話し手のマイナス評価が含まれる。他に慣用的な表現に「勝手放題にする」などがある。

2 R-ほうだい

（1） バイキング料理というのは、同じ料金で食べほうだいの料理のことだ。

（2） ≪ビアホールの広告≫ 2000円で飲み放題。

（3） 病気をしてからは、あんなに好きだった庭いじりもできず、庭も荒れ放題だ。

制限なく自由に出来る様子を表す。「食べる・飲む」などの言葉といっしょに使われることが多い。また、（3）のように「そのことに対して積極的には何もせずに、なるがままに任せておくこと」を表す。

【ほか】

1 …ほか

a …ほか

[Nのほか]

[Na なほか]

[A／V ほか]

（1） 今日のパーティーには、学生のほかに先生方もお呼びしてある。

（2） うちの会社には、田中さんのほかにはロシア語のできる人はいない。

（3） 今回の会議には、学識経験者のほか、銀行、電気メーカーといった企業の人事部長が参加した。

（4） お支払いは、銀行、郵便局のほか、お近くのコンビニエンス

ストアなどでも扱っております。

(5) 今度引っ越したアパートは、ちょっと駅から遠い他はだいたい希望通りだ。

(6) きょうは授業にでる他には特に何も予定はない。

「そのこと以外に」という意味を表す。「ほか」「ほかに」「ほかは」などの形で用いる。

b Nほか

(1) 田中他三名が出席します。

(2) 出演山田太郎他。

代表的な人やものの名前を示すのに用いる。書きことば的なかたい表現で、講演や劇の出演者を紹介する場合などによく使われる。

2 ほかに(は)

(1) A:留守番ありがとう。何か変わったことはありませんでしたか。
B:まちがい電話が一本かかってきただけで、ほかには何も変わったことはありませんでした。

(2) ≪税関で≫
A:何か申告するものはありますか。
B:ウイスキーが5本です。
A:他には?
B:他にはべつに。

(3) ボーイ:コーヒーでございます。他に御用はございませんか。
客:今のところ、特にありません。

「それ以外に」の意味を表す。

3 ほかのN

(1) 石田さんに頼もうと思ったが、忙しそうなので、他の人に頼んだ。

(2) ここがよくわかりません。ほかのところはやさしかったんですが。

(3) A:この店は高すぎるね。
B:そうね。ほか(の店)へ行きましょう。

(4) これはちょっと高すぎますから、他のを見せてくれませんか。

「現在話題としてとりあげられているもの以外のもの、違うもの」の意味を表す。(4)のように、「ほかの物」の意味で「ほかの」という言い方を使うこともある。

4 …ほかはない

[V-るほかはない]

a …ほかはない

(1) 気は進まないが、上司の命令であるので従うほかはない。

(2) だれも代わりに行ってくれる人がいないので、自分で行く他はない。

(3) 体力も気力も限界だ。この勝負はあきらめる他はない。

「望ましくはないが他に方法がないのでやむをえない」という意味を表す。書きことば的で、他に「…ほかすべがない」

「…しか手がない」などもある。話しことばでは「…しかない」「…ほかしかたがない」などが使われる。

b …というほかはない

(1) 十分な装備を持たずに冬山に登るなど、無謀と言うほかはない。

(2) あんな高いところから落ちたのにこの程度のけがですんだのは、幸運だったと言う他はない。

(3) 世界には前世の記憶をもった人がいるという。それが事実だとしたら、ただ不思議と言うほかはない。

「…としか言いようがない」「本当に…だ」という意味を表す。書きことば的なかたい表現。

5 …よりほかに…ない
…よりほかは…ない

(1) 田中さんよりほかに頼れる人はいない。

(2) 入学試験も目前にせまった。ここまでくれば、がんばるより他はない。

→【より】3b、【より】3c

6 ほかならない

a Nにほかならない

(1) 今回の優勝は彼の努力のたまものにほかならない。

(2) 日本における投票率の低さは、政治に対する失望感の現れにほかならない。

(3) このような事故が起きた原因は、利益優先で安全性を軽視してきた結果にほかならない。

「XはYにほかならない」の形で使われて、「Xはそれ以外のものではなくて、まさにYである」「XはY以外のなにものでもない」という意味を表す。書きことば的なかたい表現で日常の話しことばには使わない。

b ほかならないN/ほかならぬN

(1) ほかならない彼の頼みなので、引き受けることにしました。

(2) 他ならない鈴木さんからの御依頼ですから、喜んでお引受けいたしましょう。

(3) ほかならぬ彼の頼みなので、断わるわけにはいかなかった。

(4) うわさ話をしていたところにやって来たのは、ほかならぬ当人だった。

(5) 現在の繁栄をもたらしたのも、自然破壊をもたらしたのも、他ならぬ人間である。

「ほかのものではなく、まさにその」という意味を表す。(1)〜(3)は「ほかのひとならともかく」という含みがあり、「話し手にとって特に大切な人の頼みなので断われない」という文脈でよく使う。(4)(5)はまさにそのものであることを強調するのに用いる。「ほかならない」より「ほかならぬ」の方が多く用いられる。

【ほしい】

「ほしい」には漢字「欲しい」が使われるが、「V-てほしい」はひらがなで書くことの方が多い。

1 Nがほしい

(1) もっと広い家が欲しい。
(2) A：誕生日のプレゼントは何が欲しい?
　　B：そうね。新しい服が欲しいな。
(3) 子供の頃、僕は野球のユニホームが欲しかった。
(4) 今は何も欲しくない。
(5) ≪小説≫ 彼はどうしても金がほしい。そのことを考えると夜もねむれないぐらいだ。

「手に入れたい」「自分のものにしたい」という話し手(疑問文の場合は聞き手)の欲求を表す。「ほしい」は感情を表す形容詞で、文末が言い切りの形で使われる場合には(1)のように、話し手自身の欲求を表すか、(2)のように聞き手の欲求をたずねる場合に限られ、そのままでは、第三者の欲求を表すのには使えない。第三者の欲求を表すときは「...は...をほしがっている」「...がほしいようだ」などの表現を使う。

(正) 妹は人形をほしがっています。
(誤) 妹は人形がほしいです。

但し、(5)のように、視点が自由に移動できる小説の地の文などでは、文末に言い切りの形で使われても問題はない。また、(2)のように相手の欲求を直接たずねることは親しい間柄に限られる。丁寧さが必要な場面では「砂糖がほしいですか。」のような言い方は避けて「砂糖はいかがですか。」のように「ほしい」を使わない方がよい。

2 V-てほしい

a NにV-てほしい

(1) この展覧会には、たくさんの人に来てほしい。
(2) あまり仕事が多いので、だれかに手伝ってほしいと思っている。
(3) 母には、いつまでも元気で長生きしてほしい。
(4) 妻にはいつまでもきれいでいてほしい。
(5) 僕を置いて外国へなんか行かないでほしい。
(6) 子供たちには自分の利益ばかり考えるような人間にだけはなってほしくない。
(7) A：うちの会社にも落度があったかもしれません。
　　B：君にまで、そんなことを言って欲しくないね。

自分以外の人に対する話し手の希望や要求を表す。「...してもらいたい」「その状態でいてもらいたい」という意味で、(1)(2)のように「その人が何かをしてくれること」を望んだり、(3)(4)のように「その人がある状態でいること・ある状態になること」を望んだりしていることを表す場合がある。

否定の形には、「V-ないでほしい」と「V-てほしくない」の二つがある。(5)のように「V-ないでほしい」は、「...しないでください」という依頼の表現としてよく使われる(依頼表現については、3参照)。「V-てほしくない」を使うのは、(6)のように自分の望みを聞き手とは関係なく述べる場合や、聞き手のとった行動に対する非難(7)となる。

b ...がV-てほしい

(1) 寒い冬にはもうあきあきしてきた。早く春がきてほしい。
(2) 早く夏休みが始まってほしい。
(3) これだけ晴天が続くと、農家ならずとも雨が降ってほしいと思わない人はいないだろう。
(4) 彼の愛が永遠に変わらないでほしいと思うのはぜいたくでしょうか。

ある事態が生じることを望んでいるという意味を表す。対象が人間の時には2aのように「Nに」で表されるが、(1)〜(5)のようにある事態が生じることを望む場合には「が」で表される。

3 ほしい(んだけれど)

話し手の欲求・願望を表す「Nがほしい」「V-てほしい」は、状況によって間接的な依頼表現となることがある。「ほしいんですが...」「ほしいんだけど...」というように言いよどむと、遠慮がちな感じが出てやわらかな頼み方になる。

a Nがほしいんですが

(1) 客　：すみません。これがほしいんですが。
　　店員：こちらでございますか。ありがとうございます。
(2) 店員：これなどいかがですか。
　　客　：そうねえ、もうちょっと明るい色のがほしいんだけど。
(3) ≪友だちの家で≫
　　A：水が一杯ほしいんだけど。
　　B：いいよ。ちょっと待って。
(4) ≪おもちゃ屋で≫
　　子供：お母さん、これほしい。
　　母親：ダメ。今日は何も買いません。

「あるものを手にいれたい」という話し手の欲求を述べて、間接的に依頼を表す表現。(1)(2)のように「すみません。Nがほしいんですが/ですけど」がよく使われる。

b V-てほしい(んだけれど)

(1) 客　：プレゼントなので、リボンをかけてほしいんですが。
　　店員：はい、少々お待ちください。
(2) A：今日は早く帰ってきてほしいんだけど。
　　B：うん、わかった。
(3) A：田中さんに来週の予定を教えてあげてほしいんですが。
　　B：ああ、いいですよ。
(4) あしたは出かけないでほしい

んだけど。

（5）君にこの仕事をやってほしいんだが。

（6）君には東京に行ってほしい。

「聞き手にある行動をしてもらいたい」という話し手の願望を述べて、間接的に依頼を表す表現。「しないこと」を依頼する場合には、（4）のように「V-ないでほしい」の形を使う。（5）（6）は男性が使う表現で、高圧的な感じがする。

4 V-させてほしい(んだけれど)

（1）A：来週休ませてほしいんですけど。
　　B：ああ、いいよ。

（2）この件はぼくに任せてほしいんだけど。

（3）私に行かせてほしいんですが。

「(私に)Vさせてほしいんですが／けれど」の形で、話し手がこれから行う行動について許可を求める表現として使われる。

【ほしがる】

[Nをほしがる]

（1）山下さんは新しい車を欲しがっている。

（2）桃子が欲しがっているのは女の子の人形ではなくて、熊のぬいぐるみだ。

（3）人の物を欲しがってはいけない。

（4）当時まだ一年生だった僕は、母の注意をひきたいばかりに、わざと妹のおもちゃをほしがってみせた。

「ほしい」という気持ちを言葉や態度で外に表している様子を述べる場合に用いる。

話し手以外について使われるのが普通で、話し手自身の欲求については「…がほしい」を使う。しかし、（4）のように、自分自身の内面とは関係なくそのような様子をしてみせた場合などには話し手自身の欲求についても「ほしがる」が使われる。

【ほど】

1 数量詞＋ほど ＜概数＞

（1）水を10CCほど入れてください。

（2）修理には一週間ほどかかります。

（3）完成するまでに3時間ほどかかります。

（4）仕事はまだ半分ほど残っている。

（5）A：りんごください。
　　B：いくつですか。
　　A：五つほど。

数量を表す表現に付いて、だいたいの量(概数)を表す。時間の長さ、日数などの概数を表すときにも使うことが出来る。しかし、時刻や日付など、長さを持たない時間表現には使えない。その場合は「ごろ」を使う。

(誤) 3時ほど来て下さい。

(正) 3時ごろ来て下さい。

（5）は、一種の丁寧表現で「五つください」と意味は変わらない。はっきり「五つ」と言わずに概数を示すことで聞き手に選択の余地を残した表現となり、やわらかな感じを与える。

概数を表す「ほど」は「くらい」や「ぐらい」に言いかえることができる。

2 …ほど…ない ＜比較＞

[Nほど…ない]

[Vほど…ない]

a …ほど…ない

（1）今年の夏は去年ほど暑くない。

（2）試験は思っていたほど難しくなかった。

（3）教師の仕事はそばでみているほど楽ではない。

（4）佐藤は今井ほど勤勉な学生ではない。

（5）この地域は大都市近郊ほどは、宅地開発が進んでいない。

「XはYほど…ない」の形で、Yを基準として考えて、XはY以下であるという意味を表す。例えば「XはYほど大きくない」は「XはYより小さい」ということになる。

ただし、「XはYより…」が単に両者を比較しているに過ぎないのに対して、「XはYほど…ない」の文型を使った場合には、「XもYも…であるが、その中で比較すると」という意味を含むことがある。例えば、（1）の例では「今年の夏も暑いが、去年よりましだ」という含みをもつ。

b …ほど…Nはない

（1）試験ほどいやなものはない。

（2）いろんな方が親切にして下さいましたが、あなたほど親身になって下さった方は他にありません。

（3）東京ほど家賃の高いところはない。

（4）これほどすばらしい作品は他にありません。

（5）川口さんほどよく勉強する学生はいない。

（6）子供に先立たれることほどつらいことはない。

「他に並ぶものがない」ことを述べて、「…ほど」で示されたものの程度が一番高いことを表す表現。（1）は「試験は他の何よりもいやなものだ」、（2）は「あなたが一番親切にしてくれた」という意味になる。

3 …ほど ＜程度＞

a …ほど

[Nほど]

[A-いほど]

[V-るほど]

（1）この商品はおもしろいほどよく売れる。

（2）顔も見たくないほどきらいだ。

（3）今日は死ぬほど疲れた。

（4）そのニュースをきいて、彼は飛

び上がるほど驚いた。

（5）東京中を足が棒になるほど歩き回ったが、探していた本は見つからなかった。

（6）医者の話では、胃に親指の先ほどの腫瘍があるという。

（7）それほど言うなら、好きなようにすればいい。

（8）なんの連絡もしてこないから、どれほど心配したかわからない。

動作や状態がどれぐらいかという程度を、比喩や具体的な例を使って表すのに使う。「これ／それ／あれ／どれ」に「ほど」が付いたときは「こんなに／そんなに／あんなに／どんなに」の意味となる。

b …ほどだ

[Na なほどだ]

[A／V　ほどだ]

（1）ずいぶん元気になって、昨日なんか外に散歩にでかけたほどです。

（2）彼は犬がたいへん嫌いだ。道に犬がいれば、わざわざ遠回りするほどだ。

（3）コンサートはたいへんな人気で、立ち見がでるほどだった。

（4）このシャツは着やすいし値段も安いので、とても気に入っている。色違いで3枚も持っているほどだ。

（5）事故後の彼の回復ぶりは、奇跡とも言えるほどだ。

先に述べられたことがらについて、具体的に例を挙げて、どの程度か説明するのに使う。

c …ほどの…ではない

[…ほどのNではない]

[…ほどの　こと／もの　ではない]

（1）医者に行くほどのけがではない。

（2）そんなに深刻に悩むほどの問題ではない。

（3）そんなに怒るほどのことではない。

（4）確かに便利そうな機械だが、20万円も出すほどのものではない。

「…より程度の軽いものである」という意味を表す。たいしたことではない、重大な問題ではないという含みがある。

d …というほどではない

[N／Na　というほどではない]

[A／V　というほどではない]

（1）酒は好きだが、毎日飲まないではいられないというほどじゃない。

（2）英語は少し勉強しましたが、通訳ができるというほどではありません。

（3）数年前から胃を悪くしているが、手術をしなければいけないというほどではない。

（4）A：高級車買ったんだって？
　　B：いや、高級車というほどじゃないけれど。わりといい車なんだ。

程度がそれほど高くないことを表す。先に述べられたことから、一般に予想されることがらを取り上げて、そんなには程度が高くないことを補足説明するような場合に使う。

4 …ほど　<比例変化>

a …ほど

[N／Na　ほど]

[A-いほど]

[V-るほど]

（1）年をとるほど体が弱くなる。

（2）上等のワインは、古くなるほどうまくなる。

（3）駅に近いほど家賃は高くなる。

（4）北へ行くほど寒くなる。

（5）まじめな人ほどストレスがたまる。

（6）健康に自信がある人ほど、病気になかなか気づかないことが多い。

（7）酔うほどに、宴はにぎやかになっていった。

「…ほど」で表されたことがらの程度が高くなるにつれて、もう一方も程度が高くなるという場合に使う。（1）は、「年をとるとだんだん体が弱くなる」、（2）は「ワインは古くなるともっとうまくなる」という意味。

（1）～（4）のように、「…ほど… Naに／A-く／V-ようになる」の形で使われて、一般的なことがらを表すことが多い。（7）の「…ほどに」は、書きことば的な表現。よく似た表現に「…につれて」「…ば…ほど」がある。

b …ば…ほど

[N／Na　であればあるほど]

[A-ければ A-いほど]

[V-ば V-るほど]

（1）食べれば食べるほど太る。

（2）A：どれぐらいのご予算ですか。
　　B：（安ければ）安いほどいいんですが。

（3）活発で優秀な学生であればあるほど、知識を一方的に与えるような授業はつまらなく感じるのだろう。

（4）電気製品というのは、高くなればなるほど、使いにくくなる。

（5）どうしたらいいのか、考えれば考えるほどわからなくなってしまった。

（6）眠ろうとすればするほど眼が冴えてくる。

（7）この説明書は、読めば読むほどわからなくなる。

同じ語をくり返して使い、ひとつのことがらの進行に伴って他のことがらも進行することを表す。「…ば」で表されることに比例してもうひとつのことがらも同じように変化するという意味だが、（4）～（7）のように、一般に予想されるのとは反対

の変化を表す場合にも使われる。

【ほどなく】

[V-てほどなく]
[V-るとほどなく]

（1）祖父が亡くなってほどなく祖母も亡くなった。
（2）広島と長崎に原爆が落とされてほどなく、第二次世界大戦は終結した。
（3）新しい社長が就任すると、ほどなく社内で経営側への非難が始まった。
（4）Z社がパソコンを大幅値下げすると、ほどなく他社もそれに追随して値下げを始めた。

一つの出来事が起こってからあまり長い時間がたたないうちに、という意味。過去のことを述べるのに使われる。書きことば的でかたい表現。「ほどなくして」とも言う。

【ほとんど】

1 ほとんど

（1）この小説はほとんど読んでしまった。
（2）京都の有名な寺にはほとんどいったことがある。
（3）新しいビルは、ほとんど完成している。
（4）彼ほどの成績なら、合格はほとんど確実だ。
（5）地域のスポーツクラブに行ってみたら、ほとんどが年輩の人だったのには驚いた。
（6）このクラスのほとんどが、アジアからの留学生だ。

「だいたい」「おおかた」の意味を表す。述語部分を修飾して、（1）～（3）のように、「全部ではないが、全部に近いこと」や、（4）のように「100％に近いこと」を表す。また、（5）（6）のように、「（Nの）ほとんどが」の形で使われて、「全体のうちで大部分が」という意味で使われる。

2 ほとんど…ない

（1）給料日前でほとんど金がない。
（2）彼は酒はほとんど飲まない。
（3）英語はほとんど読めない。
（4）この仕事を三日で仕上げるのは、ほとんど不可能に近い。
（5）このごろは忙しくて、あれほど好きだったテニスにも、ほとんど行っていない。
（6）今でこそ有名だが、10年ほど前には、彼の名前を知っている人は、ほとんどいなかった。
（7）ほとんど飲まず食わずで、一日中働き続けた。
（8）遭難して三日めには、食糧もほとんどなくなった。

たいへん量が少ない、あるいは頻度が低いという意味を表す。

3 ほとんど…た
[ほとんどV-るところだった]
[ほとんどR-かけた]

（1）子供の頃、チフスでほとんど死にかけたことがある。
（2）横道から飛び出してきた自転車とほとんどぶつかるところだった。
（3）事業は、ほとんどうまくいきかけたのだが、運悪く得意先が倒産してしまい、それからは悪いこと続きだった。

「もう少しというところで、そうなるところだったが、実際にはならなかった」という意味。（1）～（2）のように、「危ないところを助かった」という場合に使うことが多い。

【まい】

五段動詞は辞書形、一段動詞は連用形か辞書形に付く（例：行くまい、話すまい、見まい、見るまい）。「来る」と「する」にはそれぞれ、「くるまい／こまい」「するまい／すまい」という二つの形があるが、辞書形に付く「くるまい」「するまい」の形のほうが一般的である。

動詞以外については、「ない」は「あるまい」となり、「Nではない」「Naではない」「A-くない」はそれぞれ「Nではあるまい」「Naではあるまい」「A-くあるまい」になる。

また、「ます」に付いて「ますまい」となることもある。

1 …まい

a V-まい ＜意志＞

（1）酒はもう二度と飲むまい。
（2）あいつにはもう二度と会うまい。
（3）A：佐々木とけんかしたんだって？
　　B：そうなんだよ。人が親切で言ってるのに聞こうともしないんだ。あいつにはもう何も言うまいと思っているんだ。
（4）二日酔いの間はもう二度と飲みすぎるまいと思うが、ついまた飲み過ぎてしまう。
（5）その時、広子は、二度と田中には会うまいと固く決心した。
（6）母を悲しませまいと思ってそのことは知らせずにおいた。

「…しない」という話し手の否定的な意志を表す。話しことばでは、「V-ないようにしよう」「V-ないつもりだ」が使われる。また（5）のように「…まいと決心する／思う／考える」などの形で他者の「…しない」という意志について述べるのに使う。（6）は、「母を悲しませたくないと思って…」の意味。書きことば的なかたい表現。

b V-まいとする

（1）銃を奪われまいとして争いになった。
（2）夏子は泣くまいとして歯を食いしばった。
（3）家族の者を心配させまいとす

る気持ちから、会社をやめたことは言わずにおいた。

「…ないでおこうとする」という意味。書きことば的なかたい表現。「…まいとして」の場合は「して」を省くこともある。

(例) 銃を奪われまいと争いになった。

2 …まい ＜推量＞

(1) このうれしさは他人にはわかるまい。

(2) 税金を減らすのに反対する人はまずあるまい。

(3) 山田氏の当選はまず間違いあるまい。

(4) 年老いた両親も亡くなって、ふるさとにはもうだれもいなくなってしまった。もう二度と訪れることもあるまい。

(5) こんな話をしてもだれも信じてはくれまいと思って、今まで黙っていたのです。

(6) 顔を見るだけで他人の過去を当てるなんて妙な話だが、これだけ証人がいるのならまんざら嘘でもあるまい。

(7) 他ならぬ松下さんの御依頼ですから、父もまさかいやとは言いますまい。

(8) 子供が初めて下宿した時には、かぜをひいてはいまいか、一人でさびしがっていはしまいかと心配でならなかった。

「…ないだろう」という意味。話し手の推量を表す。(7)のように、話しことばで使われることはまれで、「言わないだろう」「言わないでしょう」を使うのが普通。(5)のように「と思って/と考えて」など引用文中にくるときは話しことばでも用いられる。書きことば的なかたい表現。

3 …でもあるまい

a Nでもあるまい

(1) 仕事を紹介して下さる人もあるが、私ももう70だ。この歳になって、いまさら会社勤めでもあるまい。

(2) 自分から家を出ておきながら、今ごろになって、同居でもあるまい。

不適切、不適当であるという判断を表す。「いまさら/いまごろ、…でもあるまい」の形で使われることが多く、時期が遅すぎて不適当であるということを述べる場合に使う。

b Nでもあるまいし

(1) 子供でもあるまいし、自分のことは自分でしなさい。

(2) 学生でもあるまいし、アルバイトはやめて、きちんと勤めなさい。

(3) 17や18の小娘でもあるまいし、男に振られたぐらいで、いつまでもくよくよするのはやめなさい。

「Nではないのだから」「Nではないはずだから」という意味。後に「…しなさい」

「…してはいけない」など、禁止や命令の形が使われて、忠告したり、批判したりする場合に使われることが多い。「では/じゃあるまいし」の形もある。

c V-ることもあるまい

(1) あんなにひどい言い方をすることもあるまいに。

(2) あの程度のことで、大の大人が泣くこともあるまい。

(3) 電話か手紙で用は足りるのだから、わざわざ行くほどのこともあるまい。

その行動が不適当であるという批判的な判断や、その行動が不必要であるという判断を述べる場合に使う。書きことば的なかたい表現で、話しことばでは「V-ることもないだろう」の方がよく使われる。

4 まいか

a …ではあるまいか

[N/Na (なの)ではあるまいか]

[A/V のではあるまいか]

(1) 彼は若くみえるが、本当はかなりの年輩なのではあるまいか。

(2) 佐藤さんは知らないふりをしているが、全部わかっているのではあるまいか。

(3) 児童の自殺があいついだのには、現在の教育制度に、何か問題があるのではあるまいか。

(4) 他人への無関心が、このような事件を引き起こす一因となったのではあるまいか。

(5) 知識のみを偏重してきたことは、現在の入試制度の大きな欠陥ではあるまいか。

(6) 会社や組織のためにのみ働き続ける生活は、誰よりも本人が一番苦しいのではあるまいか。

「…ではないだろうか」という意味。「Xではあるまいか」は、話し手が「たぶんXだ」と考えていることを表す推量の表現。

名詞、ナ形容詞に付く場合には、「N/Naではあるまいか」と「N/Naなのではあるまいか」の二つの形がある。

(3)～(6)のように、問題提起の部分に使われたり、結論を述べる部分で、聞き手に問いかける形をとりながら、話し手の主張を述べる場合に使うことが多い。主に書きことばで使われるかたい表現。

b V-てくれまいか

V-てもらえまいか

(1) 忙しいからと一度は断わったのだが、なんとかやってもらえまいかと何度も頼まれてしかたなく引き受けた。

(2) A:例のニューヨーク支店の件だが、支店長として、まず君に行ってもらえまいか。
B:かしこまりました。

依頼を表す。男性的なかたい表現で、話しことばでは「V-てくれ/もらえない

だろうか」が使われるのが普通。(1)のように、「…と頼まれた／言われた」の形で引用文中に使われることが多い。

5 V-ようがV-まいが →【よう2】4c

6 V-ようとV-まいと →【よう2】6c

【まえ】

1 Nのまえに

(1) 駅の前に大きなマンションが建った。

(2) 僕の前に田中が座っていた。

(3) 食事の前に手を洗いましょう。

(4) 授業の前に先生のところへ行くように言われた。

空間的あるいは時間的な関係を表す。(1)(2)はNの正面あるいは前方にあること、(3)(4)はNの時点より早いことを表す。

2 V-るまえに

(1) 食事をする前に手を洗いましょう。

(2) 私は、夜寝る前に軽く一杯酒を飲むことにしている。

(3) 大学を卒業する前に、一度ゆっくり仲間と旅行でもしてみたい。

(4) 結婚する前には、大阪の会社に勤めていました。

「XまえにY」の形でXのできごとが起こるより先にYのできごとが起こることを表す。文末の述語のテンスにかかわらず、「…まえに」の動詞には辞書形が用いられる。

(正) 食事をする前に手を洗った。

(誤) 食事をした前に手を洗った。

3 Nをまえに(して)

(1) 国会議員のA氏は記者団を前に終始上機嫌だった。

(2) テーブルの上の書類の山を前に、どうしたらいいのか、途方にくれてしまった。

(3) 試験を前にして、学生たちは緊張していた。

(4) 首相は出発を前に、記者会見を行う予定。

空間的あるいは時間的な関係を表す。(1)(2)は人や物に面していること、(3)(4)はできごとの直前であることを表す。時間的関係を表す場合は「…をひかえて」と言いかえることができる。

【まさか】

1 まさか…ないだろう

(1) 彼には何度も念を押しておいたから、まさか遅れることはないだろう。

(2) いくら強いといっても、相手はまだ小学生だ。まさか大の大人が負けるようなことはないだろう。

(3) まさかそんなことはないと思うが念のためにもう一度調べてみよう。

(4) あんなに何度も練習したのだから、まさか失敗することはあるまい。

(5) A：お金が足りませんが…

B：まさかそんなはずはない。

(6) A：だれが秘密をもらしたんだろう。

B：君、まさか僕を疑っているんじゃないだろうね。

(7) まさか、あなた、あの人と結婚する気じゃないでしょうね。

文末に「ないだろう」「まい」「はずはない」「わけがない」などの否定表現を伴って、「そんなことは実際には起こらない、そんなはずはない」と打ち消す気持ちを表す。また、(6)(7)のように、「まさか…じゃないだろう／でしょうね」の形で使われて、強い疑いを表す。

2 まさか…とはおもわなかった

[まさかNだとはおもわなかった]

[まさかNaだとはおもわなかった]

[まさかAとはおもわなかった]

[まさかVとはおもわなかった]

(1) 山田さんが病気で入院しているとは聞いていたが、まさかこんなに悪いとは思わなかった。

(2) まさか私が優勝できるとは思いませんでした。

(3) まさか彼があんな冗談を本気にするとは思わなかった。

(4) まさか彼がこんなに早く亡くなるなんて誰も想像していなかった。

(5) まさかこんな大惨事になるとは誰も予想していなかった。

(6) A：犯人は彼だったよ。

B：まさか。

「とは思わなかった」「とは知らなかった」などの表現を伴って、予期しないことが生じたことに対する驚きの気持ちを表す。話しことばでは、(6)のように「まさか」だけで使われることも多い。

3 まさか＋否定表現

(1) A：あんな失敗をするなんて、あいつは馬鹿じゃないか。もっときつく言ったほうがいいんじゃないですか。

B：まさか本人に面と向かって「ばか」とも言えないじゃないか。

(2) いくら助けてやりたくても、まさかテストの答えを教えるわけにもいかないし、自力で頑張ってもらうしかない。

可能を表す「V-れる」の否定形や「ともいえない」「わけにもいかない」などの否定表現を伴って、極端な事例を挙げて、実際にはそんなことはできないが、話し手がそうしたいぐらいの気持ちでいることを表す。

4 まさかのN

(1) 健康には自信があるが、家族のことを考えてまさかの時のために保険に入っている。

(2) まさかの場合は、ここに電話し

てください。

「緊急の場合、万一の場合」という意味。

【まさに】

書きことば的なかたい表現で、話しことばに使われると大げさな感じがする。

1 まさに

（1）警察に届けられていたのは、まさに私がなくした書類だった。

（2）その絵は実際の幽霊を描いたものとして有名で、その姿にはまさに鬼気迫るものがある。

（3）≪領収書≫金十万円正に受領致しました。

（4）A：日本政府のはっきりしない態度が、アジア諸国との関係を悪化させているのではないか。

B：まさにそのとおりだ。

（5）この夏、「世界リゾート博」を訪れた人は113万人を超えた。同博宣伝部長のS氏は「晴天続きのまさにリゾート日和でした。」とほくほく顔だった。

「確かに」「本当に」という意味を表す。

2 まさに… V-ようとしている（ところだ）

（1）私が到着した時、会議はまさに始まろうとしているところだった。

（2）≪テレビ中継放送≫今まさに世紀の祭典オリンピックが始まろうとしております。

（3）ハイジャックの犯人をのせた飛行機は警察が包囲する中、今まさに飛び立とうとしている。

（4）彼らが駅に到着した時、列車はまさに動きださんとするところだった。

「今にも行われようとするところだ」「ちょうど、始まるところだ」の意味を表す。かたい言い方では（4）のように「V-んとしている」と言うこともある。

【まじき】

→【あるまじき…だ】

【まして】

1 まして（や）

（1）日本語の勉強を始めて3年になるが、まだ新聞を読むのも難しい。まして古典などはとても読めない。

（2）この辺りは昼でも人通りが少ない。まして夜ともなると、怖くて一人では歩けない。

（3）僕でもできた仕事だ。まして君のような優秀な人間にできないはずはない。

（4）家族の死は常に悲しい。まして、子供の死ともなれば、残された者の嘆きは、いかばかりであろうか。

「Xは…ましてYは…」あるいは「Xでも…ましてYは…」の形でよく使われる。XとXより程度の高いYを比べて、「Xでもそうだから、Yはもっとそうだ、もちろんそうだ」という意味を表す。「ましてや」は書きことば的な、ややかたい表現。

2 Nにもまして

（1）日本の夏は暑い。しかし、暑さにもまして耐えがたいのは、湿度の高さだ。

（2）本当にいい映画だった。映像の美しさはもちろんだが、それにもまして音楽がすばらしかった。

（3）彼はもともとまじめでよく働く人間だが、子どもが生まれてからというもの、以前にもましてよく働くようになった。

（4）何にもましてうれしかったのは、友人の加藤君と10年ぶりに再会できたことだった。

「Xにもまして…なのはYだ」「XにもましてYが…」などの形で用いられ、「Xはもちろん…だが、Yはもっと…」という意味を表す。Xと比較することで、Yの程度の高さを強調する表現。（3）のように、「前にもまして」「以前にもまして」の形で使われると「前よりもいっそう、もっと」の意味となる。（4）の「何にもまして」は、「何よりも一番」「最も」の意味。

【まず】

1 まず

（1）まずはじめに、本日の予定をお知らせいたします。

（2）≪司会者の発言≫次にみなさんのご意見をお伺いしたいと思います。では、まず川口さんからお願いします。

（3）今年の夏は暑いらしいから、ボーナスが入ったら、まずクーラーを買おうと思っている。

（4）日本の年中行事として、まず盆と正月が挙げられる。

（5）その国の文化を知るには、まず言葉からだ。

「最初に」「第一に」の意味を表す。（4）（5）は「他のものはさておき」の意味。

2 まずは

（1）まずは一安心した。

（2）≪手紙≫まずはご報告まで。

（3）≪手紙≫取り急ぎ、まずはお礼まで。

（4）≪手紙≫まずは用件のみにて、失礼いたします。

「完全にではないが、一応は」「充分ではないがとりあえず」という意味を表す。（1）は「まずはほっとした」「まずはよかった」など決まった言い方で「なにはともあれ」「とにかく」などと言いかえられる。（2）～（4）は手紙の結びに使う慣用表現。

3 まず …だろう／…まい

（1）患者：もう、普通の生活に戻っ

ても大丈夫でしょうか。

医者:そうですね。無理さえしなければ、まず大丈夫でしょう。

(2) 予算は十分にあるから、足りなくなることはまずないだろう。

(3) 山田氏の当選はまず間違いあるまい。

(4) この怪我ではまず助かるまい。

(5) この案に反対する人はまずいない。

(6) 彼が一度「だめだ」と言ったら、もう可能性はないと思ってまず間違いない。

「…だろう」「…まい」などと共に用いられて、話し手の推量がかなり確かであることを表す。「まず…まい」は「まず…ないだろう」の意味で、書きことば的なかたい表現。(5)(6)のように「…だろう」を伴わない場合は、さらに強い確信を持った推量が表される。

【また】

1 また

a また ＜繰り返し＞

(1) また、飛行機が落ちたらしい。

(2) 同じ問題をまた間違えた。

(3) A:すみません。来週の金曜日、休ませていただきたいのですが。

B:またですか。先週も休んだでしょう。

(4) A:さようなら、また来てくださいね。

B:有難うございます。また、おじゃまします。

(5) ≪授業の終わりに≫では、また来週。

(6) A:じゃ、また。

B:じゃあね。

同じことが繰り返しておきる様子を表す。(4)〜(6)のように、別れるときの挨拶としても使われる。

b また ＜付加＞

(1) 教科書は、大学生協で購入できる。また、大きな書店でも販売している。

(2) 10月から大手私鉄の運賃が平均20%値上げされる。また、地下鉄、市バスも来年4月に値上げを予定している。

(3) ≪テレビのニュースで≫現在、新幹線は京都神戸間が不通になっております。また、在来線は大阪神戸間が不通となっております。

(4) ≪テレビのニュースで≫天皇皇后両陛下の韓国御訪問は、10月と決まりました。また、首席随行員は渡辺外相が務めます。

先に述べたことがらに関係して、さらに説明や別のことがらを付け加えるときに

使う。

c また ＜列挙＞

(1) 彼は良き父であり、また良き夫でもある。

(2) この本はおもしろく、またためになる。

(3) 喫煙は健康に悪いし、また、周囲の迷惑にもなる。

「その上、それに」という意味。同類のことがらを列挙するのに使う。「また…も」の形で使うことが多い。

d また ＜選択＞

(1) 参加してもよい。また、参加しなくてもよい。

(2) 黒か青のインクで書くこと。また、ワープロの使用も可。

「二つのうちどちらか」という意味。「また…も」の形で使うことが多い。

2 …もまた

[Nもまた]

[Na なのもまた]

[A/V のもまた]

(1) 山でのキャンプ生活は電気もガスもないが、不便なのもまた楽しい。

(2) 暑いのも困るが寒いのもまたたいへんだ。

(3) 晴れた日の散歩は楽しい。しかし、雨にぬれながら歩くのもまた風情があっていいものだ。

(4) 天才といえども、彼もまた人の子だ。うれしいときもあれば悲しいときもある。

「同じように」という意味。(1)〜(3)のように、先に述べられたことと同様であることを表す。(4)は、「天才である彼も、普通の人と同じである」という意味。

3 …また

(1) いったいまたどうしてそんなことを。

(2) どうしてまた、こんなことになったのだろうか。

(3) しかしよくまた、こんなことができたものだ。

(4) これはまたきれいな絵ですね。

「いったい」「どうして」「これは」などとともに使われて、話し手が驚いたり不思議に思っている気持ちを表す。

4 またのN

(1) またのお越しをお待ちしております。

(2) きょうは忙しいので、この話はまたの機会にお願いします。

(3) 彼は医者だが、またの名を北山淳といって有名な小説家でもある。

「この次」「別の」という意味。(1)も(2)も慣用的な固定した表現で、「またの機会/チャンス/とき/日/名」など、いっしょに使える名詞は限られている。(3)の「またの名を…という」は「別の名前は…である」という意味。

5 NまたN

(1) 一行は、山また山の奥地に進んで行った。

（2）残業また残業で休む暇もない。

（3）人また人で歩くこともできない。

同じ名詞を繰り返して、同じ物が連なっている様子や同じことが続く様子を表す。

【まだ】

1 まだ…ない

（1）A：昼ご飯は、もう食べましたか。
　　B：いいえ、まだ食べていません。

（2）A：この本は、もう読みましたか。
　　B：いいえ、まだです。

（3）事故の原因は、まだわかっていない。

（4）子：お母さん、ご飯まだ？
　　母：もうちょっと待ってね。

（5）風邪はまだよくならない。

（6）その時はまだ何が起こったのかわからなかった。

（7）外国には、まだ一度も行ったことがない。

予定されたことが、現在まで行われていない場合や完了していない様子を表す。

「もう…ましたか」という質問に対しての否定の答えは、「いいえ、まだ…ていません」という形を使うことが多い。「いいえ、まだです」とも言える。「いいえ、まだ…ません」とすると「そのつもりはない」という意味に解釈され不適当となる場合がある。

（誤）A：昼ごはんはもう食べましたか。
　　B：いいえ、まだ食べません。

2 まだ ＜過去からの継続＞

（1）A：敏子は何をしているの?
　　B：おねえちゃんは、まだ電話をしているよ。

（2）もう一週間になるのに、父と母はまだけんかをしている。

（3）子どもの時に大きな地震があった。あの時のことは、今でもまだはっきりと覚えている。

（4）今年になっても、日本の経済はまだ低迷を続けている。

（5）A：昔、みんなで温泉に行ったことがあったね。
　　B：ああ、まだおじいさんが生きていたころだね。

（6）昔と違って、60代といってもまだ若い。

（7）9月なのにまだ暑い。

（8）さなえちゃんは偉そうなことを言ってても、まだ子供だねえ。

（9）まだ未成年なのに酒を飲んではいけない。

「まだV-ている」の形で使うことが多く、同じ状態がずっと続いている様子を表す。（5）は、「まだV-ていた」の形で、現在は違うが過去のある時点ではその状態が続いていたということを表す。「今はいないけれど、そのころは生きていた」という意味になる。（7）～（9）は、現在も以前と同じ状態にとどまっていて、当然至るはずの次の段階に達していないことを強調している。（7）は「もう夏も終わって涼しくなっていい頃なのに、そうなっていない」、（8）は「大人に至っていない」、（9）は「お酒がゆるされる年齢に達していない」という意味。

3 まだ ＜未来への継続＞

（1）これから、まだもっと寒くなる。

（2）雨は、まだ二、三日続くだろう。

（3）景気はまだ当分よくならないと思われる。

（4）まだこの株は値上がりする。

（5）まだまだこれからが大変ですよ。

現在の状態がこれからも続く様子を表す。「まだまだ」を使うと、「さらにもっと」「もっともっと」という意味になり、程度がもっと高くなることや、長い時間続くことを表す。（2）のように、「二、三日」「三日」などはっきりした期間を表す言葉がある時には、「まだまだ」は使えない。

4 まだ…ある

（1）開演までには、まだ時間がある。

（2）目的地まで、まだ20キロはある。

（3）食糧はまだ三日分ほど残っている。

（4）まだ他にも話したいことがある。

ものや時間などが残っている様子を表す。

5 まだ ＜経過＞

（1）まだ一時間しかたっていない。

（2）日本にきて、まだ半年だ。

（3）まだ10分ほどしか勉強していないのに、もう眠くなってきた。

（4）震災からまだ一年にしかならないのに、街の復興はめざましい。

（5）もう夕方かとおもったが、まだ3時だ。

時間を表す表現と共に用いて、あるできごとからわずかしか時間がたっていない様子を強調する場合に使う。

6 まだ ＜比較＞

（1）何日もかかって、長いレポートを書かされるよりは、一日ですむ試験の方がまだいい。

（2）家事はみんな嫌いだが、掃除よりも洗濯の方が、まだましだ。

（3）A：ああ、いやだ。試験が5つもある。
　　B：君なんか、まだましな方だよ。僕なんか、11もあるよ。

（4）今度の地震で家も財産もなくしたが、命があっただけ、まだ救われる。

「まだいい」「まだましだ」などの形で使われて、どちらも良くないが、片方より少

しはよいという意味を表す。

【またしても】

（1）またしても空の事故が起こった。

（2）またしてもあいつにしてやられた。

（3）≪高校野球の実況中継で≫平安高校、またしてもホームランを打ちました。

同じことが続けて起きたり繰り返されたりしたことを、話し手が驚きをこめて述べる場合に用いる。（1）（2）のように、悪いできごとについて使うことが多い。「また」を強調した言い方であるが、かたい感じがするので書きことばやテレビ、ラジオなどのニュースや解説などに使われることが多い。日常の話しことばでは「また」のほうがよく使われる。

【または】

［NまたはN］

（1）黒か青のペンまたはえんぴつで書いてください。

（2）13日までに到着するように郵送するか、または、持参してください。

（3）400字詰め原稿用紙に手書き、またはA4の用紙にワープロで打つこと。

二つのうちどちらでもよいことを表す。（1）は「ペンでもいいし、えんぴつでもかまわない」（2）は「郵送するか、持参するか、どちらか」という意味になる。書きことば的な表現で、指示するような場合によく使われる。

【またもや】

（1）またもや、彼が登場した。

（2）またもや人為的なミスによる飛行機事故が起きたことは、看過できない問題である。

（3）またもや、汚職事件が発覚した。

「また、またしても」の意味。同じことが続けておきたことを表す。少し古い感じのする表現で、「また」「またしても」のほうがよく使われる。「またも」とも言う。書きことば的。

【まったく】

1 まったく…ない

（1）きのうのクラスはまったくおもしろくなかった。

（2）彼は家ではまったく勉強をしない。

（3）この一週間全く雨が降っていない。

（4）その選手のフォームは全く文句のつけようのない美しさだ。

（5）そのバイオリニストのアルバムは、デビューアルバムとしては全く申し分のない出来である。

否定の意味を強調するのに用いる。「ぜんぜん」「すこしも」「ちっとも」などよりかたい言い方。「文句のつけようがない」「申し分がない」「非の打ち所がない」などを強めるときには「まったく」以外の表現は使いにくい。

2 まったく

（1）これとこれはまったく同じものです。

（2）それとこれとはまったくちがう話だ。

（3）まったくいやな雨だなあ。

（4）またお金わすれたの？　まったくこまった人ね。

（5）A：うっとうしい天気だね。
　　B：まったくだ。

（6）きのうの演奏は全くすばらしいものだった。

程度を強調するのに用いる。（5）は相手の言ったことに対する肯定の気持ちを強く表すのに使う。

【まで】

1 NからNまで

（1）シンポジウムは1時から3時まで第3会場で行います。

（2）A：大阪から東京までどのくらいかかりますか。
　　B：新幹線なら3時間ぐらいでしょう。

（3）≪ホテルで≫
　　A：シングルでいくらですか。
　　B：シングルのお部屋は、7500円から12000円までとなっております。

（4）教科書の25頁から35頁まで読んでおいてください。

（5）この映画は、子供からお年寄りまでご家族みんなで楽しんで頂けます。

（6）A：昼休みは何時までですか。
　　B：1時までです。

時間や場所・数量を表す名詞などとともに使われて、範囲を表す。起点を言う必要がないときには「Nまで」だけで用いられる。

2 Nまで＜目的地＞

（1）バスに乗らずに駅まで歩いて行くことにした。

（2）公園まで走りましょう。

（3）毎日学校まで歩きます。

（4）川幅が広くて向こう岸まで泳げそうもない。

（5）先週の日曜日は、散歩がてら隣の町まで行ってみた。

（6）A：京都にはどうやって行ったらいいですか。
　　B：そうですねえ。山手線で東京駅まで行って、新幹線に乗るのが一番早いと思いますよ。

（7）わからないことがありましたら、

係までおたずね下さい。

「行く、来る、歩く、走る、泳ぐ」などの動詞とともに使われて、移動の終わる場所を表す。「歩く、走る、泳ぐ」などの動詞は、「に」や「へ」には直接付かないが、「まで」とはいっしょに使うことができる。

（正）公園まで走りましょう。
（誤）公園{に／へ}走りましょう。
（正）毎日学校まで歩きます。
（誤）毎日学校{に／へ}歩きます。
（正）向こう岸まで泳いだ。
（誤）向こう岸{に／へ}泳いだ。

また、次の例でわかるように、「まで」は、続いている動作の終了した場所を示すので、同時に二つ以上の場所をとることはできない。

（正）イタリアではローマとミラノ{に／へ}行った。
（誤）イタリアではローマとミラノまで行った。

（7）は、「係に」と同じ意味であるが、改まった感じがする。

3 …まで <時間>

a Nまで

（1）3時まで勉強します。
（2）きのうは結局朝方まで飲んでいた。
（3）私はなまけもので、日曜日はもちろん普通の日でも、たいてい11時頃まで寝ている。
（4）ついこのあいだまでセーターを着ていたのに、この二三日急に暖かくなった。
（5）祖父は死ぬ直前まで意識がはっきりしていた。

時間を表す名詞に付いて、「まで」で表される時点以前に、ずっと動作や出来事が続いていることを表す。後ろには、動作や状態の継続を表す表現を伴う。出来事の生起を表す表現を伴うことはできない。

（誤）5時まで到着します。
（正）5時までに到着します。

「まで」と「までに」の違いについては、「までに」の項を参照。

b V-るまで

（1）あなたが帰ってくるまで、いつまでも待っています。
（2）私がいいと言うまで目をつぶっていてください。
（3）辻さんは結婚して退職するまで、貿易会社に勤めていたそうだ。
（4）≪医者が患者に≫もう少し暖かくなるまで外出はしないほうがいいでしょう。
（5）佐藤さんが会社を辞めるなんて、昨日山田さんに聞くまで知りませんでした。
（6）肉がやわらかくなるまで、中火で煮ます。

出来事を表す節に付いて、その出来事が起こる以前に同じ状態や動作がずっと続くことを表す。（6）は、手順を説明する時などによく使われる表現で、中火で煮て、肉がやわらかくなった段階で煮る

のを止めるよう指示している。

4 …まで <程度>

a Nまで

（1）近頃は子供ばかりか、いい年をしたおとなまでマンガを読んでいる。
（2）きみまでそんなことを言うのか。
（3）一番信頼していた部下までが、彼を裏切った。
（4）子供にまでばかにされている。
（5）そんなつまらないものまで買うんですか。
（6）落ちぶれた身には、風までが冷たい。
（7）だんだん暗くなって来るのにさがしている家は見つからない。その上、雨まで降ってきた。
（8）今年はいいことばかりだ。新しい家に引っ越したし、子供も生まれた。その上、宝くじまで当たった。
（9）私にも悪い点はあるが、そこまで言われたら、黙ってはいられない。
（10）生活に困って盗みまでするようになった。

「普通考えられる範囲はもちろん、普通では考えられない範囲にまで及んでいること」を話し手が驚きを込めて述べる表現。（1）を例にあげると、「ふつうマンガは子供が読むものであるが、近頃は子供だけではなくて、大人も読んでいる」という意味。（7）は、「暗くなってくるだけでも良くないのに、その上雨も降って来るというもっと悪い状態が重なった」、（8）は、反対に良いことの上にもっと良いことが重なったということを表している。（4）の「子供にまで」のように、「名詞＋助詞＋まで」の形になることもある。

b V-るまでになる

（1）苦労の甲斐あって、やっと日本語で論文が書けるまでになった。
（2）人工飼育されていたひなは、ひとりで餌がとれるまでに成長した。
（3）リハビリの結果、ひじを曲げられるまでになった。

「なる」の他に「成長する・育つ・回復する・進歩する」など変化を表すような動詞とともに使われる。長い時間や労力をかけて、現在の結果・状態にいたったことを表す。「努力して現在の良い結果・状態に到達した」ことを表す場合によく使われる。

c V-るまで(のこと)もない

（1）この程度の風邪なら、医者に行くまでのこともない。うまいものを食べて、一日ぐっすり眠れば治る。
（2）その程度の用事ならわざわざ出向くまでもない。電話でじゅうぶんだ。

（3）皆さんよく御存知のことですから、わざわざ説明するまでもないでしょう。

（4）改めてご紹介するまでもありませんが、山本先生は世界的に有名な建築家でいらっしゃいます。

（5）田中先生は、御専門の物理学は言うまでもなく、平和運動の推進者としてたいへん有名であります。

（6）子供の頃、兄が大事にしていた万年筆を持ちだしてなくしてしまったことがある。後でひどく怒られたことは言うまでもない。

「…する必要がない」という意味。（1）（2）のように、「程度が軽いので…する必要はない／しなくても大丈夫だ」、（3）～（5）のように、「当然のことであるので、…する必要がない」という場合に使う。（6）は、「後でもちろん怒られた」という意味になる。

d …までして

［Nまでして］

［V-てまで］

（1）色々ほしいものはあるが、借金までして買いたいとは思わない。

（2）徹夜までしてがんばったのに、テストでいい点が取れなかった。

（3）彼が自殺までして守りたかった秘密というのは何だろう。

（4）彼は、友だちを騙してまで、出世したいのだろうか。

（5）自然を破壊してまで、山の中に新しい道路をつくる必要はない。

極端なことを示す表現に付いて、「それほどのことをして」という意味を表す。（1）（4）（5）のように、目的のためには手段を選ばないようなやり方を非難する場合に用いる。「…するために、そんな手段をとるのはよくない」「（私は）…するためにそんな手段は使いたくない」という文脈でよく使われる。また、（2）（3）のように「普通以上に努力した」「たいへんな犠牲をはらって目的を達成しようとした」という意味で使う。

5 …までだ

a V-るまで（のこと）だ

（1）父があくまで反対するなら、家を出るまでのことだ。

（2）もし入学試験に失敗しても、私はあきらめない。もう一年がんばるまでのことだ。

「現在の方法がだめでも落胆することはない、別の方法をとる」という話し手の決意を表す。

b V-たまで（のこと）だ

（1）そんなに怒ることはない。本当のことを言ったまでだ。

（2）妻:どうして子供たちに結婚する前の話なんかしたんですか。
夫:聞かれたから答えたまでで、別に深い意味はないよ。

「話し手がそのような行動をしたのは、単にそれだけの理由で他意はない」という意味を表す。

c これ／それ　までだ

（1）いくらお金を貯めても、死んでしまえばそれまでだから、生きているうちに楽しんだ方がいい。

（2）運がよかったと言ってしまえばそれまでだが、彼があの若さで成功したのにはそれなりの理由がある。

（3）もはや、これまでだ。

「V-ば、それまでだ」という形で使われて、「それでおわりだ」という意味を表す。また（3）は慣用句で絶体絶命の窮地に陥ったときに用いる。

6 V-ないまでも

（1）喜びはしないまでも、いやがりはしないだろう。

（2）優勝とは言わないまでも、ベスト4ぐらいはねらいたい。

→【ないまでも】

【までに】

［Nまでに］

［V-るまでに］

（1）レポートは来週の木曜日までに提出して下さい。

（2）何時までに伺えばよろしいですか。

（3）明日までにこの仕事を済ませてしまいたい。

（4）夏休みが終わるまでにこの本を読んでしまいたい。

時間を表す名詞や出来事を表す節に付いて、動作の期限や締切を表す。後ろには動作や作用を表す表現を伴って、その期限以前のある時点に動作や作用が行われることが表される。

「…まで…する」は動作や状態が「ある時点まで」ずっと続くことを表すが、「…までに…する」の方は継続ではなく、ある出来事の生起を表す。したがって、「…までに」の句では後ろに継続を表す表現を用いることができない。

（誤）5時までにここで待っています。

（正）5時までここで待っています。

また、期限を表す句とは別に、手紙などに使われる慣用的な表現で、「参考までに」という句がある。これは「参考のために」「参考になるかもしれませんので」という意味で用いられる。

（例）ご参考までに資料をお送りします。

【まま】

話しことばでは「まんま」とも言う。

1 …ままだ

［Nのままだ］

［Naなままだ］

［A-いままだ］

［V-たままだ］

（1）10年ぶりに会ったが、彼は昔

のままだった。

(2) テーブルの上は、朝出かけた時のままだった。

(3) このあたりは開発もされず、昔と変わらず、不便なままだ。

(4) 小学生の息子に辞書を買ってやったが、あまり使わないのか、いつまでも新しいままだ。

(5) 彼には、去年一万円借りたままだ。

(6) 彼は、先週からずっと会社を休んだままだ。

(7) 母は一時ごろに買物に出かけたままだ。

(8) 桜の木は台風で倒れたままだ。

(9) 新幹線は込んでいて、大阪から東京までずっと立ったままだった。

(10) 彼はずっとうつ向いたままだった。

同じ状態が変わらずに続くことを表す。(1)～(4)のように、名詞、ナ形容詞、イ形容詞に付いて、過去のある時点の状態が現在まで変わらずに続いていることを表す。また、(5)～(10)のように動詞のタ形に付いて、「V-た」で表された動作が完了した後、同じ状態がずっと続いていることを表す。

普通ならば、当然引き続いて行われることがまだ行われていない場合に使われることが多い。例えば、(5)は「借りて、まだ返していない」(6)は「まだ会社にでてこない」ことを表している。

2 …まま(で)

[Nのまま(で)]

[Naなまま(で)]

[A-いまま(で)]

[V-たまま(で)]

(1) 日本のトマトは、煮たりしないで生のまま食べた方がうまい。

(2) 店員:袋にお入れしましょうか。
客　:いや、そのままでけっこうです。

(3) 年をとっても、きれいなままでいたい。

(4) 日本酒はあたためて飲む人が多いが、私は冷たいままで飲むのが好きだ。

(5) 靴をはいたまま部屋に入らないで下さい。

(6) クーラーをつけたまま寝ると風邪をひきますよ。

(7) ストーブを消さないまま学校に来てしまった。

(8) 三日前に家をでたまま行方がわからない。

(9) 急いでいたので、さよならも言わないまま、帰ってきてしまった。

(10) 戦後の混乱で父とはずっと連絡がとれなかった。結局父は、私が結婚したことも知らないまま亡くなった。

「変化せずに同じ状態で」という意味を表す。(1)～(4)のように、現在の状態を変えない、あるいは変わらないこと、(5)～(10)のように動詞のタ形や否定形に付いて、「その状態で…する」という意味を表す。

瞬間的な動作を表す動詞が使われて、その結果が続いた状態で、次の動作や事態が行われるという場合に使う。二つの動詞の主語は同じでなければならない。

(誤) 電車はこんでいて、山田さんは立ったまま、私はすわっていた。

(正) 電車はこんでいて、山田さんは立ったままだったが、私はすわっていた。

(誤) 彼が待っているまま、私は他の人と話していた。

(正) 彼を待たせたまま、私は他の人と話していた。

3 …まま(に)

a V-るまま(に)

(1) 足の向くまま、気の向くまま、ふらりと旅に出た。

(2) 気の向くままに、絵筆をはしらせた。

(3) あなたの思うまま、自由に計画を立ててください。

「なりゆきにまかせて、好きなように」という意味を表す。「足の向くまま」「気の向くまま」など、使われる動詞は多くない。

b V-られるまま(に)

(1) 春の風に誘われるままに、公園を散歩した。

(2) 彼は、上司に命令されるままに行動していただけだ。

(3) 被害者は犯人に要求されるままに金を渡していたようだ。

だれか他の人の意志や状況に従って、言いなりになる様子を表す。「V-られるがままに」の形でも使われる。

c …ままに　なる/する

[V-たままに　なる/する]

(1) 暑いのでドアはあけたままにしておいてください。

(2) 病気はだんだん悪くなってきている。このままにしておいてはいけない。

(3) 家族を失って、彼女は悲しみにうちひしがれている。今は、そっとこのままにしておいた方がいい。

(4) 電気がついたままになっていた。

(5) あの事件以来、ドアはこわれたままになっている。

「変えないで同じ状態が続く/続ける」という意味を表す。(1)～(3)の「V-たままにしておく」「このままにしておく」は、なんらかの理由で、話し手がわざとその状態を変えないでおく、(4)(5)「V-たままになっている」は、そのままの状態で放置されているという意味。

4 V-たままを

(1) 見たままを話してください。

(2) 遠慮なく、思ったままを言ってく

ださい。

（3）田中さんに聞いたままを伝えただけです。

変更を加えずに、その通りにという意味。この他、「感じたまま、見たまま、聞いたまま」などが使われる。

5 …がまま

［V-る／V-られる　がまま］

（1）言われるがままに、はんこを押してしまった。

（2）なぐられても、けられても、彼はされるがままになっていた。

（3）あるがままの姿を見てもらいたい。

慣用的に固定した表現で、変更を加えずに従っている様子を表す。（1）（2）は「V-られるまま（に）」と同じで、（1）は「言われた通りに」、（2）は「されるままになって抵抗しなかった」という意味、（3）は「かざらないそのままの姿を」という意味み。

【まみれ】

［Nまみれ］

（1）子供たちは汗まみれになっても気にせずに遊んでいる。

（2）あの仏像は何年も放っておかれたので、ほこりまみれだ。

（3）犯行現場には血まみれのナイフが残されていた。

汚いものが全面に付いている状態を表す。「Nまみれになる」「Nまみれだ」「Nまみれの」という形で用いる。「汗まみれ」「ほこりまみれ」「血まみれ」「泥まみれ」など、限られた名詞にしか用いない。

【まもなく】

1 まもなく

（1）≪駅のアナウンス≫まもなく急行がまいります。

（2）≪劇場のアナウンス≫まもなく開演です。席のほうにお戻りください。

（3）一学期も終わりに近づき、まもなく楽しい夏休みがやって来る。

次のことが起きるまでわずかの時間しかない様子を表す。「すぐに」よりややあらたまった言い方。

2 V-ると／V-て　まもなく

（1）彼女は結婚してまもなく、夫の海外赴任についてアメリカへ行ってしまった。

（2）病院に運ばれてまもなく、みちこは女のあかちゃんを出産した。

（3）会社をやめてまもなく、青木さんは喫茶店を開業した。

（4）夜があけるとまもなく小鳥たちが鳴き始める。

後ろにも出来事を表す表現を続けて、「はじめのことが起きてから少しして、関連のある、次のことが起こる」という、時間の前後関係を表すのに用いられる。

　よく似た表現に、「V-てすぐ」がある。

「V-てすぐ」は、二つのことがらが引き続いてすぐにおきた場合に使うが、「V-るとまもなく／V-てまもなく」は、それほど切迫しておらず、「少し時間がたって／しばらくしてから次のことがおきる」場合に使う。

【まるで】

1 まるで

（1）今日は風が強くて、まるで台風みたいだ。

（2）あんなつまらないことで怒りだすなんて、まるで子供みたいだ。

（3）彼は、入学試験を受ける友人のことを、まるで自分のことのように心配している。

（4）きのうあんなに大きな事件があったのに、街はまるで何事もなかったかのように平静を取り戻していた。

（5）大事件にもかかわらず、人々はまるで何事もなかったかのごとく振舞っている。

「まるで…ようだ／みたいだ」、「まるで…かのように／かのごとく」という形で使う。ある状態を他の例にたとえたり、二つを比べて「実際には違うが、たいへん近い」ことを表す表現。「らしい」といっしょに使うことは出来ない。

（誤）あの人は、まるで女らしい人です。

（正）あの人は{たいへん／とても}女らしい人です。

2 まるで…ない

（1）私は外国語はまるでだめなんです。

（2）うちの兄弟はまるで似ていない。

（3）いくら仕事ができても、自分の身の回りのことがまるでできないようでは、一人前のおとなとは言えない。

（4）あいつのやり方はまるでなってない。

（5）みんなの話では、ずいぶん嫌な男のように思えたが、実際に会ってみると、聞いていたのとはまるで違っていた。

否定形や否定的な意味を表す表現を伴って、「ぜんぜん…ない」「まったく…ない」という意味を表す。（4）は「ぜんぜんだめだ」という意味。

【まわる】

［R-まわる］

（1）この寒いのに子供達は外を走り回っている。

（2）病人がスイカが食べたいというので、スイカを求めて12月の街を駆けずり回った。

（3）売れっ子ジャーナリストの彼は世界中を飛び回っている。

（4）子供は小犬に追いかけられて、部屋中を逃げまわった。

「動く」「走る」「飛ぶ」「泳ぐ」など移動を表す動詞や、「暴れる」「遊ぶ」「跳ねる」などの動きを表す動詞といっしょに使われて、「あちこち…する」「そのあたりを…する」という意味を表す。

【まんざら】

1 まんざら…でもない
まんざら…ではない

（1）彼のことはまんざら知らないわけでもない。
（2）祖母は、一時期教師をしていたことがあるから、人前でしゃべるのはまんざら素人でもない。
（3）大勢の人の前で歌うのは、まんざら嫌いでもない。
（4）彼女の様子では、まんざら彼が嫌いでもないようだ。
（5）おれもまんざら捨てたものではない。

「必ずしもXというわけでもない」「まったくXでもない」という意味を表す。Xには否定形や否定的な表現がはいる。（3）（4）は、「それほどいやでもない、むしろ好きだ」、（5）は慣用的な表現で、「なかなか良いところがある」という意味。

2 まんざらでもない

（1）子供のことをほめられて彼はまんざらでもないようすだった。
（2）まんざらでもない顔をしていた。
（3）お世辞だとわかっていても、自分が描いた絵をほめられるのはまんざらでもない。
（4）今でこそみんな忘れてしまったが、学生のころの英語の成績はまんざらでもなかった。

「悪くない気持ちだ。むしろ、うれしい」という意味を表す。「まんざらでもない様子／ふう／みたい／ようだ」「まんざらでもない（という）顔をしている」などの形がよく使われる。また、（4）のように、「悪くない。むしろ、かなり良い方である」という意味を表す。

【まんまと】

（1）やつにまんまと騙された。
（2）まんまと、してやられた。
（3）まんまと一杯くわされた。
（4）犯人は、金をだまし取ることにまんまと成功した。

「非常にうまく」「みごとに」の意味。「まんまと」の後には「騙す」「してやる」「一杯くわせる」「忍び込む」など慣用的に固定したものがよく使われる。人の裏をかいたり、騙したりして成功したような場合や、あまりほめられないような手段を使ってうまくいった場合に使われる。

（1）〜（3）のように、「まんまとV-された」の形で使われると、話し手の悔しい気持ちやその手口のみごとさに驚く気持ちが表される。

【みえる】

1 …がみえる
[Nがみえる]
[Nが V-るのがみえる]
[Nが V-ているのがみえる]
[Nが V-るところがみえる]
[Nが V-ているところがみえる]

（1）晴れた日には、ここから富士山がよく見える。
（2）田舎は空気がきれいなので星がよく見える。
（3）この部屋の窓から、電車が通るのがよく見える。
（4）この部屋の窓から、子供達が公園で遊んでいるのが見える。
（5）ちょうどそのとき、裏からだれかが出てくるところが見えました。
（6）子供の頃、私の部屋から、庭の桜の木が見えた。
（7）彼は生まれつき目が見えない。
（8）目が悪いので、めがねがないと遠くの文字は見えない。
（9）黒板の字が小さくて見えません。

特に意識して見ようと思っているわけではないが、「自然に目にはいる」「見ることができる」という意味を表す。「見えない」は、視力に問題があったり、障害物がある、遠すぎるなどの理由で「見ることができない」ことを表す。

「みられる」も「見ることができる」という意味であるが、こちらは単に視覚的に目に映るということではなく、「見ることが許されている」「見る機会がある」などの意味となる。したがって次の例のように、見る機会があるかどうかを問題にしているような場合には、「みえる」を使うことはできない。

（正）A：歌舞伎を見たいんですが、どこへ行けば見られますか。
　　B：そりゃ、歌舞伎座でしょうね。
（誤）歌舞伎を見たいんですが、どこへ行けば見えますか。
（正）大都会では、蝶やとんぼが身近に見られなくなった。
（誤）大都会では、蝶やとんぼが身近に見えなくなった。

2 みえる

a Nがみえる

（1）今学期の彼の成績には、努力の跡が見える。
（2）彼女にはまったく反省の色が見えない。
（3）当時の日記には、当時彼が苦悩していた様子があちこちに見える。
（4）彼が父親を嫌っていることは、言葉の端々に見える。

「そう認められる」「そのことがわかる」「そのように感じられる」という意味を表す。

b …が…みえる
[…が　N／Na　にみえる]
[…が　A-くみえる]
[…が　V-てみえる]

（1）壁のしみが人の形に見える。

（2）あの子は背が高くて、とても小学生には見えない。

（3）父は最近体の調子がいいらしく、前よりずっと元気に見える。

（4）あの人は、実際の年よりずっと若く見える。

（5）みんなに祝福されて、彼の顔はいっそう輝いて見えた。

話し手が見たことから判断して、「そのように思われる」「そう感じられる」という意味を表す。次のc「…そうにみえる」d「…ようにみえる」の形でも使われる。

c …そうにみえる

[Na そうにみえる]

[A-そうにみえる]

[R-そうにみえる]

（1）料理にパセリかなにか緑色のものを添えるとおいしそうに見える。

（2）この人形は今にも動きだしそうに見える。

（3）その日の山本さんは、なんだか寂しそうに見えた。

（4）この仕事ははじめ楽そうに見えたが、やってみるとなかなかたいへんだ。

（5）あいつは一見やさしそうに見えるが冷たいところのある男だ。

（6）このごろの電気製品は、いろいろな機能がついていて一見便利そうに見えるが、実際にはいらないものばかりだ。

話し手が見たことから判断して、「そのように思われる」「そう感じられる」という意味を表す。（4）～（6）のように、「外見はそのように見えるが、本当のことはわからない」「実際はちがう」という意味を表すのに使われることも多い。

d …ようにみえる

[Nのようにみえる]

[Na なようにみえる]

[A-ようにみえる]

[Vようにみえる]

（1）この宝石は猫の目のように見えるところから、キャッツアイという名前がついている。

（2）夏休みの間に、子供たちは急に成長したように見える。

（3）便利なように見えたので買ってみたが、使ってみるとたいしたことはなかった。

（4）彼は賛成しているように見えるが、本当のところはわからない。

（5）男は何も知らないといったが、何かを隠しているように見えた。

話し手が見たことから判断して、「そのように思われる」「そう感じられる」という意味を表す。（1）は「猫の目ににているので」という意味。（3）～（5）のように、「外見はそのように見えるが、本当のことはわからない」「実際はちがう」ことを表

すのにもよく使われる。

e …とみえる

（1）すぐに返事をしないところをみると、佐藤さんはあまり気が進まないとみえる。

（2）その子はおもちゃを買ってもらったのがよほどうれしかったとみえて、寝ている間も離さなかった。

（3）母はたいへん驚いたとみえて、しばらく口をきかなかった。

（4）山田は、まだ飲み足りないとみえて、しきりにもう一軒行こうと誘う。

話し手が見たことから判断して、「そのように感じられる」「そう思われる」という意味を表す。話しことばにも使われるが、どちらかというと書きことば的な表現。話しことばでは、「みたいだ」「らしい」のほうがよく使われる。

f …かにみえる

…かのようにみえる

（1）彼は他人の非難などまったく意に介していないかにみえる。

（2）きのうあんな事件があったのに、街は静かで何ごともなかったかにみえる。

（3）景気の悪化は一応おさまったかにみえるが、まだまだ安心はできない。

（4）その法案は、そのまますんなりと参議院を通過するかにみえたが、僅差で否決されるという意外な結末を迎えた。

「表面的にはそのように感じられる、思われる」という意味を表す。「本当のことはわからないが、表面的にはそのように見える／実際にはそうでない可能性がある」ということを述べる場合に使われる。（4）のように、「かにみえたが」の形で使われた時には、「そのように思われたが、現実には予想と違うことがおきた」という意味。書きことば的なかたい表現。話しことばでは、「ようにみえる」「みたいにみえる」を使う。

3 Nがみえる

（1）あなた、山下さんが見えましたよ。

（2）先週、斎藤さんが挨拶に見えた。

（3）明日のパーティーには、田中さんも見えるはずだ。

（4）A：留守中だれか来ましたか。
B：今日はどなたも見えませんでした。

「来る」の尊敬語。「いらっしゃる」「おいでになる」と同じ。さらに丁寧な言い方に「…がお見えになる」がある。

【みこみ】

1 …みこみがある

[Nのみこみがある]

[V-るみこみがある]

（1）A：先生、この足はもう治らな

いんでしょうか。

B：残念ですが、回復の見込みはほとんどありません。

（2）もう二十日も晴天が続いている。水不足が心配されているが、近いうちに雨が降る見込みはまったくない。

（3）A：このあたりに地下鉄の駅ができるというのは、どの程度見込みのある話なんですか。

B：さあ、どうなんでしょうね。

（4）川口はいつも文句ばかり言っている。あんなやつは、見込みがない。

「その可能性がある」「その予想、予定である」などの意味を表す。名詞を修飾するときは「...見込みのあるN」の形で使われる。（3）のように、文脈から明らかな時には、「みこみがある」だけで使われて、前半は省略される。特に（4）のように、人について「見込みがある／ない」と言うときには、「将来性がある／ない」という意味になる。

2 ...みこみだ

［Nのみこみだ］

［V-るみこみだ］

（1）≪ニュース≫ JR東海道線は、明朝6時には回復する見込みです。

（2）≪新聞記事≫ JR東海道線は、明朝6時には回復の見込み。

（3）台風の影響で新幹線のダイヤはたいへん乱れております。復旧は夜遅くになる見込みです。

（4）≪履歴書≫ ○○年3月31日高校卒業見込み。

「...予定だ」「...見通しだ」という意味。（4）は、履歴書を書くときの決まった表現で、「卒業予定」に同じ。書きことば的なかたい表現。書きことば以外にはアナウンスやニュースで使われることが多い。

3 みこみがたつ

（1）やっと、借金の返済の見込みが立った。

（2）≪アナウンス≫ 先ほど、JR東海道線で脱線事故があったもようです。今のところ、復旧の見込みは立っておりません。

「予定、計画が立つ」という意味。（2）は「いつ復旧するか、まだわからない」という意味。

4 みこみちがいだ／みこみはずれだ

（1）彼には大いに期待していたが、まったくの見込み違いだった。

（2）今年は冷夏で、クーラーなどの電気製品はさっぱり売れなかった。猛暑を期待していたのに、見込みはずれだった。

「みこみちがいだった」「みこみはずれだった」のように夕形で使うことが多く、「予想と違った」「期待通りにならなかった」という意味を表す。「みこみがはずれた」とも言う。

【みこんで】

［...をみこんで］

［Nをみこんで］

［V-るのをみこんで］

（1）君を見込んで頼むのだが、ぜひ今度の仕事に参加してほしい。

（2）君を男と見込んで頼みたいことがある。

（3）完成までに時間がかかる地下鉄工事などは、物価の上昇を見込んで、余裕のある予算を組んでおいた方がよい。

（4）商品には、はじめから売れ残るのを見込んだ値段がつけてある。

「...を期待して」「...を予想して」という意味。（1）（2）のように、その人の能力を高く評価して、りっぱな仕事をしてくれるだろうと期待していることを表す。また、（3）（4）のように「そのことをはじめから計算にいれて」「前もって、予想しておく」こと。

【みせる】

1 ...をみせる

［NがNに...をみせる］

（1）私は友だちにアルバムをみせた。

（2）来月工場に行って、実際に製品を作っているところを見せてもらうことになった。

（3）その子はうまく字が書けるようになったのを母親に見せたくてしかたがないようだった。

（4）家族と離れて元気がなかった彼も、最近やっと笑顔を見せるようになった。

（5）9月に入って、さすがの猛暑も衰えをみせるようになった。

（6）微熱が続いたのであちこちの医者に見せたが、結局原因はわからなかった。

（1）〜（3）は、人にみえるようにするという意味。（4）は、内面の状態や感情などを態度や表情に表すこと。（5）は状態の変化が感じられるという意味。（6）の「医者にみせる」は、医者に診察してもらうことを表す。

2 かおをみせる
すがたをみせる

（1）このごろ彼はちっとも学校に顔を見せない。

（2）久しぶりだね。たまには顔を見せてくれよ。

（3）8時ごろになって、やっと月が雲の晴れ間から顔を見せた。

（4）8時ごろになって、やっと星が姿を見せた。

「人が来る」、あるいは「今まで見えなか

ったものが見える状態になる」という意味を表す。

3 Nが…を…みせる

[Nが…をNaにみせる]
[Nが…をA-くみせる]
[Nが…をV-ようにみせる]

（1）華やかな衣装が彼女を実際より若く見せている。
（2）明るいライトが商品をいっそうきれいに見せている。
（3）ショートカットの髪がいっそう彼女を活発に見せている。
（4）明るい照明が商品を新鮮にみせている。

名詞に付いて、そこで表されるものが原因となって、見る人にそのように感じさせるという意味を表す。

4 …ようにみせる

[Nのようにみせる]
[Naなようにみせる]
[A-いようにみせる]
[Vようにみせる]

（1）犯人は、わざとドアを壊して外部から侵入したように見せている。
（2）出かけたように見せて、実は家の中に隠れていた。
（3）彼は娘の家出をあまり気にしていないように見せてはいるが、本当は心配でたまらないのだ。

実際は違うのに、そう見えるようにしているという意味を表す。

5 V-てみせる →【てみせる】

【みたいだ】

[N/Na/A/V　みたいだ]

おもに話しことばで使う。書くときにも使われるが、かなりくだけた表現で、かたい文や改まった場面では「ようだ」が使われる。「ようだ」を使った慣用的な表現は「みたいだ」で言いかえにくい。

1 …みたい　<比況>

よく似たものを例にあげて、ものごとの状態・性質・形・動作の様子などを表す時に使う。「よう」と同じ。非常によく似ていることを強調する場合には、「まるで/ちょうど…みたい」が使われる。「あたかも」「いかにも」「さながら」は、書きことば的なかたい言い方なので、「みたい」とはいっしょに使わない。

a NみたいなN

（1）この薬は、チョコレートみたいな味がする。
（2）竹下さんって、あの学生みたいな人でしょ?
（3）いい年をして、子供みたいな服を着ないでほしいな。
（4）飛行機みたいな形の雲が浮かんでいる。

「N1みたいなN2」の形で、N2がどのようなものかを、N2に似ている例を挙げて説明するのに使う。

「NのようなN」で言いかえることができる。「NらしいN」と混同する学習者が多いが、「NみたいなN」は、似たものを例に挙げているだけで、N1=N2で

はない。例えば、「男みたいな人」という場合、その人は男のように見えるが、実際は男ではない。それに対して、「男らしい人」は「たいへん男っぽい、男の特徴がきわだった人」の意味で男性に対して使われる表現である。

b …みたいだ

[N/V　みたいだ]

（1）すごい風だ。まるで台風みたいだ。
（2）君ってまるで子供みたいだね。
（3）その地方の方言に慣れるまでは、まるで外国語を聞いているみたいだった。
（4）私が合格するなんてうそみたい。

ものごとの状態・性質・形・動作の様子などについて話し手がどのように感じたかを、わかりやすいよく似たものを例にあげて述べるのに使う。「…ようだ」で言いかえることができる。日常の話しことばで女性が使う場合には（4）のように、文末の「だ」を省くことが多い。「うそみたいだ」は「とても信じられない、たいへん驚いた」という意味。

c …みたいに

[N/A/V　みたいに]

（1）もう9月も半ばなのに、真夏みたいに暑い。
（2）この服は、買って何年にもなるが、新品みたいにきれいだ。
（3）子供みたいにすねるのはやめろよ。
（4）こんなにうまいコーヒーが、一杯100円だなんて、ただみたいに安いね。
（5）私ばかりが悪いみたいに言わないでよ。あなただって悪いんだから。
（6）A：学校ではあまり会わないね。
　　B：おいおい、そんな言い方をしたら、僕が授業をさぼってばかりいるみたいに聞こえるじゃないか。

ものごとの状態・性質・形・動作の様子などについて、よく似たものを例にあげて述べるのに使う。（5）（6）の例は、「本当はそうでないのに」という含みがある。

d …みたいなものだ

[Nみたいなものだ]
[V-たみたいなものだ]

（1）僕の給料なんか、会社の儲けに比べたら、ただみたいなものさ。
（2）≪野球をみながら≫こんなに点差があけば、もう勝ったみたいなものだ。
（3）A：中田さん、店、売ったんだって?
　　B：売ったというか、まあ、取られたみたいなものだ。借金の抵当にはいってたんだそうだよ。

「まだ現実にはそうなっていないが、ほと

んど確実実にそうなる」あるいは「ほとんど同じと言ってよい状態である」という意味を表す。話しことばでは「ものだ」ではなく「もんだ」が使われることが多い。

2 …みたいだ ＜推量＞

（1）誰も彼女の本名を知らないみたいだ。

（2）田中さんは甘いものが嫌いみたいだ。

（3）どうもかぜをひいたみたいだ。

（4）今度発売された辞書は、すごくいいみたいだよ。

（5）何か焦げているみたいだ。へんな匂いがする。

（6）A：あの人誰?
　　B：誰だろう。近所の人じゃないみたいだね。

（7）A：試験はいつあるんだい。
　　B：来週みたいだよ。

（8）A：あの人会社をやめたの?
　　B：みたいだね。

（9）A：小林さんはもうアメリカに行ったのかな?
　　B：ええ、きのう出発したみたいですよ。

（10）A：山本さん怒っていたでしょう?
　　B：うん、すごく怒ってるみたいだった。

（11）そのときの佐々木さんはなんだか怖くて、いつもの彼ではないみたいだった。

話し手の推量を表す。「はっきりと断定はできないが、そのように思う」という意味。話し手が、何かを見たとか、音を聞いた、匂いをかいだなど自分自身の直接経験したことをもとに推論したことを述べる表現。

これに対して、他の人から聞いた話など間接的な情報にもとづいた話し手の推量を表すときには「らしい」が使われ、聞いたことをそのまま報告する場合には「そうだ」が使われる。

（例）山下さんは今日は来ないみたいですね（もう、時間も遅いし）。

（例）山下さんは今日は来ないらしいですよ（直接きいたわけではないが、他の人がそう言っていた）。

（例）山下さんは今日は来ないそうです（山下さんから「行かない」という伝言があった）。

「…みたいだ」と「…みたいだった」の二つはどちらも使える場合が多いが、意味は異なる。次の例のように「V-たみたいだ」は、過去に起きたことがらについて、話し手が話している時点で推量した結果を述べている。

（例）A：田中さんはいつ来たのかな?
　　B：午前中は見かけなかったから、昼から来たみたいですよ。

「V-たみたいだった」は、話し手が過去のある時点でそのように思ったということを表す。

（例）昨日の夜は妙だった。誰か来たみたいだったから、ドアをあけてみたが、だれもいなかった。そんなことが何度もあった。

また、見たままの様態を述べる場合、例えば目の前にケーキがある時に「このケーキはおいしいみたいだ」とは言わない。この場合には「このケーキはおいしそうだ」と言う。

（例）A：これ、新しく買ったテープレコーダーです。
（正）B：便利そうですね。
（誤）B：便利みたいですね。

このときに使われる「そう」は、伝聞の「そう」とは違うので注意が必要である。伝聞の場合には「おいしいそうだ」「便利だそうだ」となる。

3 …みたい ＜例示＞

[NみたいなN]

[Nみたいに]

（1）東京や大阪みたいな大都会には住みたくない。

（2）A：三分間写真の機械って、どんなところにある?
　　B：さあ、デパートみたいなところにはあるんじゃないかな。

（3）何か細くて長い棒みたいな物はありませんか。

（4）佐藤さんみたいに英語が上手になりたい。

（5）今年みたいに暑いと、働くのが本当にいやになる。

（6）君みたいなあわて者、見たことがないよ。

（7）彼みたいに勝手なことばかりしていると、そのうち誰も相手にしなくなる。

例をあげる場合に使う。（1）は、「例えば、東京や大阪などの大都会」、（2）は「例えば、デパートやデパートのような大きな店」という意味。

（5）（6）（7）は例示の形をとっているが、実際には「今年は暑かったので、働くのが本当にいやになった」「君は本当にあわてものだ」「彼は勝手なことばかりしているから、そのうち誰も相手にしなくなる」と同じと考えてよい。丁寧な話しことばでは「…のような／ように」が用いられる。

【みだりに】

（1）みだりに動物にえさを与えないでください。

（2）みだりに他人の部屋に立ち入るべきではない。

（3）新聞と言えども、個人のプライバシーをみだりに公表することはゆるされない。

「必要もないのに」「許可なく」「勝手に」の意味。「みだりに…するな／してはいけない」など、後には人の行動を禁止する表現が続く。日常の話しことばでは、「勝手に…しないでください」がよく使われる。書きことば的なかたい表現。

【みる】

1 …をみる

[Nをみる]

[Vのをみる]

（1）テレビを見るのが好きだ。

（2）窓からぼんやりと雲が流れて行くのを見ていた。

（3）このごろは忙しくて新聞を見るひまもない。

（4）料理の味を見てください。

（5）風呂の湯かげんをみる。

（6）しばらく反響を見てみよう。

（7）機械の調子をみる。

（8）近所のおばさんに子供の面倒をみてもらっている。

（9）もしよかったら、うちの子の勉強を見てもらえませんか。

（10）あの人の言うことを全部本気にしていると馬鹿をみるよ。

（11）あの人は子供の時からずっと辛い目をみてきたのだから、今度こそ幸せになって欲しい。

（12）作品は20年後に完成をみた。

「目でみる」という基本的な意味のほか「舌や手などを使って調べる」「世話をする」などの意味がある。(10)(11)は慣用的な表現でそのような経験をするという意味。(12)は、書きことば的なかたい表現で「長い時間がかかってやっと完成した、成功した」という意味。「医者が患者をみる」という場合には、「診る」という漢字を使う。

2 Nを…みる

[NをA-くみる]

[NがV-るとみる]

（1）試験を甘くみていると失敗しますよ。

（2）政府は今回の事件を重くみて、対策委員会を設置することを決定しました。

（3）警察は、A容疑者にはまだ余罪があるとみて、厳しく追求する構えです。

「…と考えている」「…と推察している」という意味。書きことば的なかたい表現。

3 にみる

（1）最近の新聞の論調にみる経済偏重の傾向は目にあまるものがある。

（2）今回の地震は、近年まれにみる大災害となった。

（3）≪新聞や雑誌などの見出し≫アンケート調査にみる大学生の生活実態と金銭感覚

「…にみられる」という意味。書きことばで使われるかたい表現。

4 …ところをみると

（1）うれしそうな顔をしているところをみると、試験はうまくいったようだ。

（2）いまだに返事がないところを見ると、交渉はうまく行っていないようだ。

（3）平気な顔をしているところをみると、まだ事故のことを知らされていないのだろう。

直接の経験を根拠に、話し手が推量を述べる場合に用いる。文末には「らしい／ようだ／にちがいない」などが使わ

れることが多い。「…ところからみて」という形が使われることもある。

（例）高級車に乗っているところからみて、相当の金持ちらしい。

5 V-てみる →【てみる】

6 …からみると →【からみる】1

【みるからに】

（1）部屋に入ってきたのは、見るからに品の良い中年の女性だった。

（2）このコートは見るからに安物だ。

（3）あの人はいつも見るからに上等そうなものを着ている。

（4）店の奥から、見るからにやさしそうなおばあさんが出てきました。

（5）通夜、葬式と続いて、ふだんは元気な彼も見るからに疲れたようすで座っていた。

「外見から容易に判断できるほど」、「見ただけですぐにわかるほど」という意味。

【むき】

1 Nむき <方向>

（1）南向きの部屋は明るくて暖かい。

（2）右向きに置いてください。

（3）横向きに寝てください。

（4）前向きに検討したいと考えております。

東西南北などの方角や前後左右、上下など方向を表す名詞に付いて、その方向に正面を向けていることを表す。(4)は慣用的な表現の「前向きに」で、「なるべく実現させるように努力する」という意味。

2 Nむき <適性>

（1）女性向きのスポーツにはどんなものがありますか。

（2）この映画は子供向きだ。

（3）この家は部屋数も多く台所も広い。どちらかというと大家族向きだ。

（4）この機械はたいへん性能がよいが、値段も高く大型で一般家庭向きではない。

（5）セールスの仕事には向き不向きがある。

（6）この機械は大きすぎて家庭で使うのには不向きだ。

「Nのためにちょうどよい／Nに適している」という意味。「Nむきでない」の替わりに、「Nに不向きだ」と言うことができる。(5)の「向き不向きがある」は、慣用的表現で、「その人によって、適性があったりなかったりする」という意味。「むけ」との違いについては「むけ」を参照。

3 Vむきもある

（1）君の活躍を快く思わないむきもあるようだから、はでな言動は慎んだ方がいい。

（2）今回の計画については実現を

危ぶむむきもある。

「そういう人達もいる」という意味。(1)は、「快く思わない人もいる」、(2)は「実現は難しいと考えている人もいる」という意味。書きことば的なかたい表現。

4 むきになる

(1) むきになって言い張った。

(2) そんなにむきにならなくてもいいじゃないか。

(3) 彼はいい男だが、仕事の話となるとすぐむきになるので困る。

「たいしたことでもないのに、本気になって怒ったり、激しく主張したりする」意味を表す。(2)は「少し落ちついて、平静になったほうがいい」という意味。

【むく】

(1) 彼は学者としてはすぐれているが、教師にはむかない。

(2) 私は人と接する仕事にむいていると思う。

(3) 私は知らない人に会うのが嫌いなので、セールスの仕事にはむいていません。

(4) この仕事は美智子さんみたいにおしゃれな人に向いていると思うんだけど。

(5) 私に向いた仕事はないでしょうか。

「適性がある」という意味。「(人)が(仕事)にむく」「(仕事)が(人)にむく」のどちらの形でも使う。「むいている」という形でも使える。また、名詞を修飾するときは「NにむいたN」の形がよく使われる。

【むけ】

1 NむけのN

(1) この会社では、子供向けのテレビ番組を作っている。

(2) 小学生向けの辞書は字が大きくて読みやすい。

(3) 輸出むけの製品はサイズが少し大きくなっている。

「N1むけのN2」という形で、N1を対象として作られたN2という意味を表す。(1)の場合は、「子どものために作られた番組」という意味。

よく似た表現に「…むきの…」「…ようの…」がある。「…むき」は「…に適した」という意味。「…ようの」は、「…が使うための、…の時に使うための」という意味で「来客用のスリッパ」「パーティー用バッグ」というように使われる。

2 Nむけに

(1) 当社では、輸出向けに左ハンドルの自動車を早くから生産している。

(2) 最近、中高年むけにスポーツクラブや文化教室を開いている地方自治体が増えている。

(3) Y社では、若い女性むけにアルコール分が少なくカラフルな、缶入りカクテルを開発中である。

「…を対象に／…を対象として」の意味。

【むけて】

[Nにむけて]

(1) 全日空103便は8月十日午前8時に、成田からロンドンに向けて出発した。

(2) 来たるべきオリンピックに向けて準備が着々と進められている。

(3) 新空港建設については、事前に住民に向けての十分な説明がなされなければならない。

(1)のように目的地やめざす方向、(2)のようにめざす将来の目標を表す。また、(3)はその行為の向けられる対象を表す。

【むしろ】

1 むしろ

(1) じゃましようと思っているわけではない。むしろ君たちに協力したいと思っているのだ。

(2) A：総選挙からこっち、景気はよくなりましたか。
B：そうですね。むしろ前より悪くなったんじゃないですか。

(3) 景気はよくなるどころか、むしろ悪くなってきている。

二つのものを比較して、どちらかといえば一方の方がより程度が高いという意味を表す。

2 …より(も)むしろ

[Nより(も)むしろ]

[V-る／V-ている　より(も)むしろ]

(1) お盆のこむ時期には、旅行なんかするよりも、むしろ家でゆっくりしたい。

(2) 大都会よりもむしろ地方の中・小都市で働きたいと考える人が増えてきている。

(3) 円高のせいで、国内旅行よりもむしろ海外へ行く方が安くつくという逆転現象が起こっている。

(4) この点については教師よりもむしろ学生の方がよく知っている。

「XよりもむしろY」の形で使われて、どちらかと言えばYの方が程度が高いことを表す。

(1)(2)のように、単に比較するだけでなく話し手の価値判断が含まれて、「二つのもののうちひとつを選ぶなら、どちらかと言えば後者がよい」という意味を表すことが多い。この場合には、後に、「…するほうがよい」「…したい」「Nがいい／よい」など、話し手の好みや意向を表す表現がくる。

(3)(4)の例は、「一般に考えられるのとは逆に」「期待していたこととは逆に」という含みがあり、「かえって」「逆に」「反対に」などでいいかえることができ

る。

3 V-るぐらいならむしろ

（1）行きたくない大学に無理をして行くぐらいなら、むしろ働きたいと思っている。

（2）こんなに金利の安い時に貯金なんかするぐらいなら、むしろ海外旅行にでも行った方がいい。

（3）あんな奴に援助を受けるぐらいなら、むしろ死を選ぶ。

「XぐらいならY」の形で使われて、話し手にとって、「XよりもYの方が好ましい」「話し手にとってXは望ましいことではないので、Yを選ぶ」という意味を表す。「XくらいならY」と言うこともある。

4 …というよりむしろ…だ

（1）あの人は天才というより、むしろ努力の人です。

（2）今回の出来事は、事故というよりむしろ人災だ。

（3）彼女は美人と言うよりむしろ可愛いという感じだ。

あることがらについての表現や判断の仕方を比較するのに用いる。「Xという言い方、見方もできるが、比較すればYという言い方、見方の方が妥当だ」という意味。

【むやみに】

（1）人の物にむやみにさわらないほうがいい。

（2）山で道に迷ったときはむやみに歩き回らないほうがいい。

（3）たとえ小さな虫でも、むやみに殺してはいけない。

（4）最近、父は年のせいか、むやみに怒る。

結果がどうなるか、あとさきを考えないで何かをする様子を表す。後に「するな」「してはいけない」などの禁止表現や「しない方がよい」「するのはよくない」などがくることが多い。また、（4）は、度をこしている様子を表す。「むやみやたらに」は「むやみに」を強調した表現。「むやみと」の形でも使われる。

【むり】

1 むり

（1）無理を言わないでよ。

（2）無理なことをお願いしてすみません。

（3）若い時とは違って無理がきかない。

「不合理なこと、行きすぎたこと」という意味。（3）は慣用的な表現で、「過重な負担に耐えられない」という意味。

2 …はむりだ

（1）一日に新しい漢字を50も覚えるのは無理だ。

（2）その仕事は子供には無理ですよ。

（3）A：これ、明日までに修理してもらえますか。
B：明日ですか、ちょっと無理ですね。

するのが難しい、たいへん困難だ、不可能だという意味を表す。

3 …にはむりがある

（1）今度の計画には無理がある。

（2）この工事を3か月で完成させるというのには無理がある。

（3）君の考え方には無理があるよ。

実現不可能な点がある、または、理屈にあわない点があるという意味を表す。

4 むりに

（1）A：かばんが壊れちゃった。
B：そんな小さなかばんに無理に詰め込むからだよ。

（2）このスーツケースは、鍵を壊して無理に開けようとするとブザーがなるようになっています。

（3）いやがる友人を無理につれて行った。

（4）行きたくなければ、無理に行くことはない。

（5）彼がいやがっても、無理にでも連れて行くつもりだ。

できないことややりたくないことを強引にやる様子を表す。

5 むりをする

（1）無理をすると体をこわしますよ。

（2）夜遅くまで勉強するのもいいが、試験も近いのに、今無理をして病気にでもなったら大変だよ。

（3）あの会社は不動産取引でかなり無理をしていたようです。

出来ないこと、難しいことを強引にするという意味を表す。

6 …のもむりもない
…のもむり(は)ない

（1）あんなひどいことを言われては、彼が怒るのも無理はない。

（2）うちの子は遊んでばかりいる。あんなに遊んでばかりいては成績が悪いのも無理はない。

（3）A：仕事をする気になれないなあ。
B：こんなに暑くちゃ、無理ないよ。

ことがらを表す表現に続いて、そのことがらが起こるのは当然だという気持ちを表す。当然だと納得するための原因や理由が共に述べられることが多い。（3）のように「…のも」の部分は省略することができる。

【めく】

［Nめく］

（1）少しずつ春めいてきた。

（2）どことなく謎めいた女性がホールの入り口に立っていた。

（3）彼は、皮肉めいた言い方をした。

（4）彼の作り物めいた笑いが、気になった。

名詞に付いて、それが表す要素をもっている、という意味を表す。例えば（1）は少しずつ春のようになってきたということで、冬の終わりごろに使う。使用する名詞は限られている。名詞を修飾する場合は（3）（4）のように「NめいたN」という形になる。

【めぐって】

［Nをめぐって］

（1）憲法の改正をめぐって国会で激しい論議が闘わされている。

（2）彼の自殺をめぐって様々なうわさや憶測が乱れとんだ。

（3）人事をめぐって、社内は険悪な雰囲気となった。

「…に関して」「…について」という意味。あることに関した周辺のことがらも含めて対象としてとりあげるのに用いる。「…について」のように、いろいろな動詞といっしょに使えるわけではない。

（誤）日本の経済をめぐって研究しています。

（正）日本の経済について研究しています。

後に続く動詞は「議論する、議論を闘わす、うわさが流れる、紛糾する」などに限定されており、Nがどうなのかをいろんな人が議論したり、話し合ったりできるものでなければならない。「をめぐり」は、書きことばによく使われる。また名詞を修飾するときには、「NをめぐるN」「NをめぐってのN」の形になる。

（例）政治献金をめぐる疑惑がマスコミに大きくとりあげられている。

（例）父親の遺産をめぐっての争いは、日増しにひどくなっていった。

【めったに】

1 めったに…ない

（1）私は酒はめったに飲まない。

（2）うちの子は丈夫でめったに病気もしない。

（3）人混みは好きではないので、東京や大阪などの大都市にはめったに行かない。

（4）この頃の機械は優秀で故障はめったにない。

（5）わが家はずいぶん田舎にあるので、お客がやって来ることはめったにない。

（6）学生時代の友人とも遠く離れてしまって、めったに会うこともない。

（7）近頃は町中で野生の小動物を見かけるようなこともめったになくなった。

何かをする回数が非常に少ないことを表す。（1）～（3）のように、「めったにV-ない」の形か、（4）（5）のように「…はめったにない」の形で使われることが多い。

「たまに」も頻度が少ないことを表すが、強調する点が違う。例えば、次の例

1、2はどちらも「酒を飲む回数がたいへん少ないこと」を表しているが、（例1）の「めったに…ない」は回数が「少ない」ことを強調している。それに対して、（例2）の「たまに」は頻度は低いが飲むことが「ある」ことを表現している。

（例1）私は酒はめったに飲みません。

（例2）私は酒は嫌いですが、友だちに誘われたときなど、たまには飲むこともあります。

あまり…ない＞ほとんど／めったに…ない＞ぜんぜん／まったく…ないの順に頻度が低くなる。

2 めったな

（1）めったなことで驚かない私も、そのときばかりはさすがにうろたえてしまった。

（2）A：山下さんが盗ったんじゃない?
　　B：しっ。証拠もないのに、めったなことを言うもんじゃないよ。

（3）この機械は丈夫ですから、めったなことでは故障しません。

（4）このことは、めったな人に話してはいけない。

慣用的な表現。「めったなことで（は）…ない」の形で使われて、「よほど特別なことがなければ…ない」という意味を表す。（1）は、「驚くことはほとんどない、たいていのことは平気だ」、（2）は「いいかげんなこと、思慮のないことを言ってはいけない」という意味。

（4）の「めったなN」の形は、あまり使われなくなってきている。ここでは「よほど特別な人以外には話してはいけない。」という意味。

【も】

1 Nも <累加>

a Nも

（1）A：なんだか、すごく疲れました。
　　B：ええ、私もです。

（2）東京へ行くので、帰りに静岡にも寄って来る。

（3）今日も雨だ。

（4）私のアパートは日当りが悪い。そのうえ、風通しも良くない。

（5）今日は風が強いし、雨も降りだしそうだ。

同類のものごとをさらにつけ加えるのに用いる。他に同じ様なものごとのあることが前提とされているが、その存在が単に暗示されているだけの（3）のような場合もある。名詞に直接付くだけでなく、（2）のように「名詞＋助詞」に付くこともある。

b NもNも

（1）セルソさんもイサベラさんもペルーの人です。

（2）山下さんも田中さんも、英語はあまり得意じゃないでしょう。

（3）空港までは電車でもバスでも行ける。

（4）田中さんにも山下さんにも連絡

しておきました。

（5） A：田中さんか森本さんを呼んできてくれない?
B：田中さんも森本さんもまだ出社していないんですけれど。

（6） 雨も降ってきたし、風も強くなってきました。

（7） 金もないし、暇もない。

（8） 猫が好きな人もいるし、嫌いな人もいる。

同類のものごとをならべて取り上げるのに用いる。名詞に直接付くだけでなく、（3）（4）のように「名詞＋助詞」に付くこともある。

2 …も…も <対句的>

a …も…も…ない

[NもNも…ない]
[NaもNaもない]
[A-くもA-くもない]
[R-もR-もしない]

（1） 寒くも暑くもなく、ちょうどいい気候だ。

（2） 成績は上がりも下がりもしない。現状維持だ。

（3） 趣味で音楽をやるのに上手も下手もない。

（4） 今はな、長男も次男もない時代だな。

（5） 最近は男も女もない時代だ。

（6） あまりの強さに手も足もでない（＝どうしようもない）。

（7） 根も葉もない（＝根拠のない）噂をたてられる。

（8） 私は逃げも隠れもしない。文句があったら、いつでも来なさい。

「寒い・暑い」「手・足」など一対になった言葉を取り上げて、それらのどちらでもないという意味を表す。慣用的な表現が多く、さらに固定化したものに「にっちもさっちもいかない（＝どうにもならない）」がある。

（例） 今回の事件はにっちもさっちもいかない状態だ。

b V-るもV-ないもない

（1） A：すみません。十日までにはできそうもありません。
B：何を言ってるんだ。いまさら、できるもできないもないだろう。やってもらわないと困るよ。

（2） A：すみませんでした。許してください。
B：許すも許さないもない。君の責任じゃないんだから。

（3） A：ご主人、単身赴任なさるんですって? 賛成なさったんですか。
B：賛成するもしないもないんですよ。全部一人で決めてしまってから、言うんですから。

（4） A：反対なさるんじゃないかと心配しているんですが。
B：反対するもしないもない。喜んで応援するよ。

同じ動詞を繰り返し用いて「する、しないを問題にしていられる状況ではない」という意味を表す。相手のことばの一部を繰り返して、それを強く否定したり、そんなことを言っては困ると強くたしなめたりするのに使う。

c …もなにもない

（1） 愛もなにもない乾いた心に潤いが戻ってきた。

（2） 政治倫理も何もない政界には、何を言っても無駄だ。

（3） 母　：テレビを消して、手伝ってちょうだい。
子供：だってぇ、今いいところなんだもん。
母　：だってもなにもありません。すぐ来なさい。

（4） A：被害状況をよく調べましてから、救助隊を派遣するかどうか決定したいと考えております。
B：何を言っているんだ。調べるも何もないだろう。これだけけが人が出ているんだから。

（5） A：反対なさるんじゃないかと心配しているんですが。
B：反対するもなにもない。喜んで応援するよ。

否定を強めるのに用いる。（1）（2）は、名詞に付いて、それだけでなくその他のものもないという意味を表し、ないことを強調している。（3）～（5）は、相手の言葉の一部を繰り返して、それを強く否定したり、そんなことを言っては困ると強くたしなめたりするのに使う。「V-るもV-ないもない」と同じ用法。

d …も…も

[V-るも　V-る／V-ない　も]

（1） 行くも止まるも君の心一つです。

（2） 行くも行かないもあなたしだいです。

（3） 成功するもしないも努力しだいだ。

（4） 勝つも負けるも時の運だ。

「行く・行かない」「勝つ・負ける」など一対になった言葉を用い、後に「…しだいだ」「…にかかっている」などの表現を伴って、「どちらにするかは…にかかっている」「どちらになるかは…で決まる」という意味を表す。

3 極端な事例＋も

[N（＋助詞）も]
[V-るのも]

（1） 日本語をはじめて1年になりますが、まだひらがなも書けません。

（2） スミスさんは、かなり難しい漢

字も読めます。

（3）こんな簡単な仕事は子供にもできる。

（4）恐ろしくて、声もでませんでした。

（5）立っていることもできないほど疲れました。

（6）あんな奴は顔を見るのも嫌だ。

（7）最悪の場合も考えておいたほうがよい。

（8）頭が痛いときには、小さな音でさえもがまんできない。

（9）人類は月にまでも行くことができるようになった。

極端な事例をあげて、それよりも程度の小さいことがらについては当然そうであることを暗示する。たとえば、(1)では一番やさしいひらがなも書けないのだから、「それよりも難しいカタカナや漢字は当然書けない」という含みがある。また、(8)～(9)のように「さえ」「まで」などを伴って意味を強調することもある。

4 数量詞＋も

a 数量詞＋も

（1）雨はもう三日も降っています。

（2）大根一本が300円もするなんて…。

（3）反戦デモには十万人もの人が参加した。

（4）いっぺんにビールを20本も飲むなんて、あいつはどうかしているよ。

（5）ほしいけれど、10万円もするなら、買えない。

（6）新しい車を買おうと思って貯金を始めたが、目標までまだ50万円も足りない。

数量の多さや程度の高さを強調するのに用いる。

b 数量詞＋も…ない

（1）泳ぐのは苦手で、ほんの5 mも泳げない。

（2）ここからあそこまで10 mもないだろう。

（3）財布の中には、500円も残っていない。

（4）ベッドに入って10分もたたないうちに寝てしまった。

数量の少なさや程度の低いことを強調して否定の意を強めるのに用いる。程度の高いことを強調する「も-4 a」の用法と紛らわしいので注意を要する。

（例）こんな豪勢な暮らしをしていて、わずか10万円も支払えないのか。（程度小）

（例）学生の身分で月々10万円も支払えるはずがない。（程度大）

c 最小限の数量＋も…ない

（1）客はひとりも来なかった。

（2）彼女のことは一日も忘れたことはない。

（3）外国へは一回も行ったことがない。

（4）失敗は彼が原因だったが、彼

を責めようとする人はひとりもいなかった。

（5）この料理は少しもおいしくない。

「ひとりも」「ひとつも」「一回も」など最小限の量を表す「1」の付く言葉や「すこし」を打ち消しの表現とともに使って、「まったく／ぜんぜん…ない」という意味を表す。

d 数量詞＋も …ば／…たら

（1）この仕事なら、三日もあれば充分だ。

（2）A：テープレコーダーって、いくらぐらいするものですか。

B：そうですねえ、安いものなら、五千円もあれば買えますよ。

（3）もうしばらく待ってください。10分もしたら、先生は戻っていらっしゃると思います。

（4）雨はだんだん小降りになってきた。あと10分もすればきれいに晴れ上がるだろう。

（5）このあたりは、自然が豊かだが、もう10年もたてば、開発されてしまうだろう。

あることがらが成立するのにこの程度の数量があれば十分だということを表す。「ば」のほかに、「たら」や「と」も用いられる。また、文末には「だろう」「でしょう」「と思う」など話し手の推量であることを表す表現がくることが多い。

e 数量詞＋も…か

（1）事故にあってから、救出されるまで1時間もあったでしょうか、夢中だったのでよくわかりません。

（2）A：その魚はどれくらいの大きさでしたか。

B：そうですねえ。50 cmもあったかなあ。

（3）昔、家の庭に大きな木があった。高さは4、5 mもあっただろうか。杉か何かだったと思う。

（4）直径3センチもあろうかという氷の固まりが降ってきた。

「あったでしょうか」「あろうか」などといっしょに使われて、話し手の主観的な判断によるおおよその量を表す。

5 疑問詞＋も

a 疑問詞＋(助詞)＋も

（1）山田さんはいつも本を読んでいる。

（2）だれもが知っている。

（3）どれもみんなすばらしい。

（4）どちらも正しい。

（5）誰も知らない。

（6）このことは誰にも話さないでください。

（7）何も買えない。

（8）この辞書はどれも役にたたない。

（9）どちらも正しくない。

「だれ・なに・どれ・どこ・いつ」などといっしょに使われて、どの場合にも当てはまることを表す。(1)〜(4)のように肯定文に用いられる場合には全面肯定、(5)〜(9)のように否定文に用いられる場合には全面否定を表す。ただし、次の「いくらもある」は、たくさんあること、「いくらもない」は、ほとんどないことを表す。

(例) そんな話はいくらもある。

(例) 財布の中には、いくらも入っていない。

b なん＋助数詞＋も

(1) タイには何人も友だちがいる。

(2) 何回も海外旅行をしたことがある。

(3) 何度もノックしたが、返事がない。

(4) 雨は何日も降り続いた。

(5) 何か月も留守にしたので、庭は荒れ放題だ。

数量や回数などが多い様子を表す。

c なん＋助数詞＋も…ない

(1) この問題が解ける人は何人もいないでしょう。

(2) 私の国では、雨が降る日は一年に何日もない。

(3) すぐに終わります。何分もかかりません。

(4) こんなチャンスは、人生に何度もない。

数量や回数などが少ない様子を表す。ただし、次の(例2)のように数量が多いことを表す場合もあるので注意を要する。

(例1) 試験まで後何日もない。(＝短い間)

(例2) 彼は何ヵ月も姿を見せなかった。(＝長い間)

6 Nも ＜提題＞

(1) 秋も深まって、紅葉が美しい。

(2) 夜もふけた。

(3) 長かった夏休みも終わって、あしたからまた学校が始まります。

(4) 彼にも困ったものだ。

(5) さっきまであんなに泣いていた赤ん坊もようやく寝ました。

(6) 彼のきげんも直って、平和な空気が戻った。

(1)〜(3)のように、季節の変化や、ものごとの始まりやおわりなど、時間が過ぎていくのにともなって変化するようなことがらを、話し手が感慨をこめてとりあげたり、(4)〜(6)のように、他にも同じようなことがあることを暗示することで、表現をやわらげて提示したりする場合に用いる。

7 NもN ＜強調＞

(1) あいつは、うそつきもうそつき、大うそつきだ。

(2) 彼の両親の家は、山奥も山奥、一番近い駅から車で3時間もかかるところにある。

(3) A：佐藤さん、酒飲みなんですって？
B：酒飲みも酒飲み、ものすごい酒飲みだ。

同じ名詞を繰り返して、その程度が普通でないことを強調するのに用いる。

8 NもNなら
NもNだが

(1) 親も親なら子も子だね。

(2) 兄さんも兄さんだが、姉さんだってひどいよ。

(3) わいろをもらう政治家も政治家だが、それを贈る企業も企業だ。

「XもXならYもYだ」などの形で、どちらにも問題があることを非難する気持ちを表す。

9 …もあり…もある
[NでもありNでもある]
[NaでもありNaでもある]
[A-くもありA-くもある]

(1) 彼はこの会社の創始者でもあり、今の社長でもある。

(2) 藤田さんは私の義兄でもあり師でもある。

(3) 彼の言ったことは、心外でもあり不愉快でもある。

(4) 娘の結婚は、嬉しくもありさみしくもある。

「XもありYもある」の形で、XとYの両方であることを表す。

10 …もあれば…もある
[NもあればNもある]
[VこともあればVこともある]

(1) 起きる時間は決まっていない。早く起きることもあれば遅く起きることもある。

(2) 人生、楽もあれば苦もある。

(3) 株価の変動は誰にも分からない。上がることもあれば、下がることもある。

(4) 車に乗っていると、便利な時もあれば、不便な時もある。

(5) 温泉といってもいろいろだ。硫黄が含まれているものもあれば、炭酸が含まれているものもある。

あることがらについてのバリエーションを並べて、いろいろな場合があることを表す。対照的なことがらを並べることが多い。

11 …もV-ない
[NもV-ない]
[R-もしない]

(1) あいつは本当に失礼な奴だ。道であっても、挨拶もしない。

(2) 息子は体のぐあいでも悪いのか、夕食に手もつけない。

(3) あの子は、ほんとうに強情だ。あんなにひどく叱られても、泣きもしない。

(4) 前から気がついていたのか、母は父が会社をやめたと聞いても驚きもしなかった。

(5) うちの猫は魚がきらいで、さしみをやっても見向きもしない。

(6) さわりもしないのに、ガラスのコ

ップが割れてしまった。

(7) 夕方になっても、電気もつけないで、本に熱中していた。

(8) 山田さんは怒ったのか、さよならも言わないで帰ってしまった。

(9) この寒いのに、子供たちは、上着も着ないで、走り回っている。

否定の意を強調するのに用いる。普通なら当然するはずのことをしないので、話し手が驚いたり、あきれたりしている場合に使うことが多い。

12 ...もV-ずに

(1) わたしは深く考えもせず、失礼なことを言ってしまった。

(2) 彼女は食事もとらずに、けが人の看病をしている。

(3) 彼女は、若い女性が興味を持ちそうなことにはいっさい目もくれず、研究に没頭していた。

「...もしないで」の書きことば的な言い方。

→【も】11

13 ...もの／...こと　もV-ない

[V-る　もの／こと　もV-ない]

(1) 寝坊したので、食べるものも食べないであわてて会社へ行った。

(2) 急に雨が降り出したので、買うものも買わないで帰ってきてしまった。

(3) 時間が足りなかったので、言いたいことも十分には言えなかった。

(4) こんな無能な医者では助かる命も助からない。

同じ動詞を繰り返して、「普通なら当然できることもできない」という意味を表す。また、次のような慣用表現もある。

(例) 叔父が急に亡くなったというので、取るものも取りあえず(=大急ぎで)駆けつけた。

【もう$_1$】

1 もう+数量詞

(1) すみません、もう5分ここにいてください。

(2) もう一時間待って、彼が来なかったら先に行く。

(3) もう一人紹介したい人がいる。

(4) もう百円あれば、切符が買える。

(5) もう10ページ読めば、この本は読み終えられる。

(6) もう一回だけテストしてみよう。

(7) もう一度だけ会ってください。

(8) みんなが来てから、もう一回先生に電話してみた。

量などをさらに付け加えるのに使う。たとえば、(4)は、「お金がいくらかあるが、これに加えて百円あれば、切符が買える」という意味。

「あと5分」のように「あと」で言いかえられることが多い。ただし、「あと」の方は、「これが最後の残り」という含みがあるが、「もう」には特にそういう含みがない。回数などについては、それで最後とは言いにくい場合は「あと」ではなく「もう」を使う。たとえば、「みんなが来てからあと一回先生に電話してみた」はやや不自然。

2 もうすこし

a もうすこし／もうちょっと <量>

(1) もう少し、ミルクをください。

(2) もう少しここで過ごしたい。

(3) もう少し待てば、順番が回ってくる。

(4) ゴールまで、もうちょっとだ。

現在の状態から少量の増減か変化があることを表す。「あとすこし」ともいう。また、「もうちょっと」は、「もうすこし」よりくだけた表現で、日常の会話などで使うのが普通。量が多い場合は使えない。

(誤) もうたくさんほしい。

(正) もっとたくさんほしい。

b もうすこし／もうちょっと <程度>

(1) もう少しいい車を買いたい。

(2) 温度はもう少し低くした方がいい。

(3) もう少し大きな声で話したほうがいい。

(4) かれなら、もう少しむずかしい問題もできるだろう。

(5) もうちょっと安いものはありませんか。

属性や状態を表す表現とともに使って、現在の状態よりわずかに程度が高いことを表す。

c もうすこしで　V-そうだった

(1) もう少しでうまくいきそうだったのに、邪魔が入ってしまった。

(2) もう少しで会社に遅れそうになったが、ぎりぎりで間にあった。

(3) もう少しで本当のことを言いそうになったが、何とか我慢した。

(4) 二人はもう少しでけんかしそうになったが、わたしが何とか止めた。

「ある事態が起こる寸前まで行った」という意味。「もう少しで...ところだ」と言いかえられることが多い。くだけた会話などでは「もうちょっとで」も使う。

d もうすこしで　V-るところだった

(1) もう少しでけがするところだった。

(2) ぼんやり歩いていて、もう少しで車にひかれるところだった。

(3) 赤ちゃんはもう少しで寝るところだったのに、電話の音で目をさましてしまった。

(4) 実験はまた失敗したが、本当はもう少しで成功するところだったのだ。

「V-るところだった」を強める言い方。

→【ところだ】2b

【もう$_2$】

1 もう ＜完了＞

（1）今日の仕事はもう全部終わった。

（2）A：今評判になっているあの映画、もう見ましたか。
　　B：ええ、この前の日曜日に見ました。

（3）食事はもうできている。

（4）その問題なら、もう解決している。

（5）彼の娘はもう大学を卒業したそうだ。

（6）駅についたときにもう特急は出てしまっていた。

（7）手紙はもう投函したので、取り返せないんです。

（8）A：すみません、今日はもう閉店ですか。
　　B：いいえ、まだ開いています。

（9）A：この本はもう出ましたか。
　　B：いいえ、まだ出ていません。予定は来週です。

動詞文とともに使って、行為、できごとなどがある時点までに完了したことを示す。完了かどうかを問う疑問文でも「もう」を用いる。完了状態に到っていないときは、平叙文でも、疑問文でも「まだ…ない」を用いる。

2 もう　＋時間／＋年齢

（1）おしゃべりに夢中になっていたら、もう5時だ。

（2）気がついたらもう朝だった。

（3）この子はもう10才だから、十分事故の証人になれる。

（4）こよみの上ではもう春なのに、まだ雪が降っている。

（5）もう夜が明けるのに彼らはまだ話し続けている。

（6）もう8時ですよ。起きなさい、学校に遅れますよ。

時間や年齢を表す表現と共に用いて、すでに十分な時点に至っているということを示す。（1）（2）のように思ったより早くその時点に到達してしまったという気持ちが含まれることがある。

3 もう Na だ／もういい

（1）もうおなかが一杯だ。

（2）今日はもう十分に楽しんだ。

（3）A：お湯はわいていますか。
　　B：ええ、もういいですよ。

（4）A：機械、直ったんですか。
　　B：ええ、これでもういいはずです。

（5）A：ちょっと目を閉じて。1、2、3。
　　B：もういい?
　　A：いいよ。はい、目を開けて。

「一杯だ」「十分だ」などと共に用いて、十分満足すべき状態になっているという意味を表す。「もういい」は基本的に「十分に適当とうな状態になっている」という意味で、いろいろな状況で用いる。文脈によって、「準備ができた」「解決した」などの意味になる。「もういい」の否定的な用法については、もう5b参照。

4 もう…ない

（1）山田さんはもうここにはいません。

（2）この喫茶店はもう営業していない。

（3）疲れて、もう何も考えられなくなった。

（4）交渉のあと、だれももう文句を言わなかった。

（5）かれとは、もうこれ以上話したくない。

（6）わたしは、18才、もう子供ではない。

（7）もう二度とあの人には会わないだろう。

（8）もう誰も信じられないと言って、彼女は泣いていた。

（9）こんな待遇の悪い職場にはもうがまんができない。

（10）さいふの中にはもう100円しか残っていなかったので、家へ帰るのにバスにも乗れなかった。

（11）10万円の値段がついたので、もうこれ以上は上がらないだろうと思った。

ある時点などを限界として、それ以後はない、これ以上はないという意味を表す。

5 もう ＜否定的態度＞

a もう＋否定的表現

（1）こんな退屈な仕事はもうやめたい。

（2）もうあの人の愚痴を聞くのはいやだ。

（3）これ以上歩き続けるのは体力的にもう無理です。

（4）あの人をかばい続けられるのももう限界だ。

（5）戦争をするのは、もうたくさんだ。

（6）こんなまずいものを食べるのはもうたくさんだ。

（7）もういいかげんに妹をいじめるのはやめなさい。

「無理だ」「いやだ」など否定的意味の述語を用いて、これ以上ある状態を続けることができないという意味を表す。「もうたくさんだ」は「限界に達したので、これ以上はいやだ」の意味で、かなり感情的になった時に使うことが多い。また、以後の行動を禁止する（7）のような場合にも使う。

b もういい

（1）A：ほかに出す書類がありますか。
　　B：これでもういいです。

（2）A：チョコレート買いましょうか。

もう$_2$

B：いや、これだけ食料があれば、もういいです。

（3）A：もう一杯いかがですか。

B：いや、もういいです。

（4）A：急なアルバイトさえなかったら、来られたんだけど。

B：言い訳はもういいよ。

（5）A：お母さんの気持ちも考えてみなさい。

B：もういいよ。お説教は聞き飽きたよ。

（6）A：頑張っていたのに、うまく行かなくて残念だったね。

B：もういいんです。何か、ほかの事を考えます。

（7）A：もう一回探しなおせば、みつかるかもしれません。

B：もういいよ。あきらめよう。

基本的に「これで十分だから、これ以上はいらない」という意味。いろいろな状況で使う。（3）は断るときの表現。また、（4）（5）は、「これが限度で、これ以上は受け入れられない」の意味で、話し手の拒否の態度どを表す。いやになったり、うんざりした場合などによく使う。（6）（7）のように、それまで執着していたことをあきらめるという気持ちの表現としても用いる。「もういい」の肯定的な用法は、もう3参照。

6もう＜非難＞

（1）お母さんたら、もう。わたしの友達の悪口を言うのはやめてよ。

（2）もう、あなたったら、こんなやさしい計算もできないの。

（3）山田さんたら、もう、また『お茶入れて』ですって。自分でやればいいのに。

（4）A：あ、また、汚した。

B：もう。

文ぶん頭や文中に挿入して、相手に対する非難の気持ちを示す。くだけた会話でのみ用いる。女性が使うことが多い。非難の気持ちをこめた「(っ)たら」とともに使うことがおおい。

【もうすぐ】

（1）田中さんはもうすぐ来ます。

（2）もうすぐ夏休みですね。

（3）クリスマスまで、もうすぐだ。

（4）桜の花ももうすぐ咲きそうだ。

（5）もうすぐここに30階建てのマンションが建つそうだ。

そのことが起こるまでに今からあまり時間がないことを表す。「すぐ」よりは長い時間。話しことばでよく使われる。

【もかまわず】

［N(に)もかまわず］

［Vの(に)もかまわず］

（1）喜びのあまり、人目もかまわず抱きついた。

（2）役員たちから慎重な対応を求める声が上がっているのもかまわず、社長は新分野への参入を決断した。

（3）世論から厳しい批判を浴びせられているのにも構わず、その議員は再び立候補した。

「…を気にかけないで」という意味を表す。「人目もかまわず」という慣用句的な表現で用いられることが多い。

【もくされている】

［Nともくされている］

（1）今度の競馬では、マックイーンが一番人気と目されている。

（2）彼がその事件の最重要参考人と目されている。

（3）事業の後継者と目されているのは、重役の市川氏だ。

（4）知事選挙で最有力候補と目されているのは、早田氏です。

「とみなされている、そういう評判が立っている」の意味。ただし、「目されている」の場合は、本当はどうなのか、どうなるか、まだわからない場合に用いる。

【もさることながら】

［Nもさることながら］

（1）彼は、大学の成績もさることながら、スポーツ万能で親孝行という申し分のない息子だ。

（2）このドレスは、デザインもさることながら、色使いがすばらしい。

（3）あのレストランは、料理もさることながら、眺めの良さが最も印象的だった。

「XもさることながらY」という形で、「Xもそうであるが、Yはもっとそうである」「Xもそうであるが、さらにYもあげられる」という意味を表す。よいと思われることに使われるのが普通。

【もし】

後に条件表現を伴い、ことがらを仮定的に設定する話し手の態度を表す副詞。文頭で用いられることが多い。類義表現に「かりに」「もしも」がある。「もしも」との違いについては「もしも」を参照。

1もし…たら

（1）もし雨が降ってきたら、洗濯物を取り込んでおいてね。

（2）もしよろしければ、週末、家にいらっしゃいませんか。

（3）もしお暇なら、いっしょにドライブに行きませんか。

（4）もし気が付くのが1秒でも遅かったら大惨事になっていただろう。

「たら」のかわりに「…は／…なら」なども用いる。順接的な仮定条件を伴い「かりにそうならば」という意味を表す。（1）～（3）のように、本当かどうか未定だったり未知のことがらや、（4）のように、事実に反することがらの前に付いて、それを予想的・想像的に述べる場合に用いる。

「かりに」と似ているが、「かりに」は現実には存在しないことがらを想像のうえで仮定的に設定するような場合に用いられる。そのため現実に成立する可能性がある（1）のような事態を述べる場合には不適切である。これに対して「もし」は、話し手に仮定する意識があれば、事実関係とは無関係に使用可能で、（1）のように実際に起こりそうなことがらあっても、（4）のように事実に反することがらでも使うことができる

（誤） かりに雨が降ってきたら、洗濯物を取り込んでおいてね。

2 もし …ても／…としても

（1） 天気予報では曇りですが、もし雨でも遠足は決行します。

（2） 薬で治りそうですが、もし手術をすることになっても、簡単に済みます。

（3） もし泥棒に入られたとしたって、たいして金目になるものはない。

（4） もし入社試験に合格しても、本人に入社の意志がないなら辞退すべきだ。

後に「ても」「としても」「としたって」などの条件節を伴い「仮にそのような状況が成立しても」という意味を表す。「その可能性はあまりないが」という含みがある場合が多い。たいてい「かりに」で置きかえられる。

【もしかしたら】

1 もしかしたら…かもしれない

（1） 仕事の量が減ったから、もしかしたらわたしも日曜日に出かけられるかもしれない。

（2） 今はいい天気だが、すこし雲が出て来たから、もしかしたら雨が降るかもしれない。

（3） この名刺があれば、もしかしたら、彼に面会できるかもしれない。

（4） 彼はここ2、3日大学に出て来ない。もしかしたら彼は病気かもしれない。

（5） もしかしたら、中田さんが知っているかもしれないが、はっきりしたことはまだわからない。

（6） もしかしたら、山川さんがその本をもっているのではないだろうか。

「…かもしれない」「…のではないだろうか」などの推量の表現を伴ってそういうこともありうるという程度の推量の気持ちを表す。話し手が自分の判断にあまり自信をもっていないことも示す。「もしかすると」「もしかして」「ひょっとすると」とも言う。

2 もしかしたら…か

（1） A：あの人、もしかしたら、山本さんじゃないですか。
B：ええ。そうですよ。ご存じですか。

（2） もしかしたら事故にでもあったんじゃない?

（3） もしかしたら今日は雨になるのではないだろうか。

「…か」「じゃない?」など疑問を表す表現を伴って、自分の判断にそれほど自信がないことを表す。「もしかすると」「もしかして」「ひょっとして」とも言う。

【もしくは】

書きことば。「XもしくはY」の形で使われる。公式の文章などによく使われるかたい表現で、日常の話しことばでは使わない。日常の話しことばでは「XかY」が、よく使われる。

1 NもしくはN

（1） 黒もしくは青のインクを使用すること。

（2） お問い合わせは、電話もしくは往復葉書でお願いします。

（3） この施設は、会員もしくはその家族に限り使用できる。

（4） ≪法令≫第84条第2項の規定による命令に違反した者は、これを6ヶ月以下の懲役もしくは禁固または一万円以下の罰金に処する。

「二つのうちのどちらか一方」という意味。XかYのどちらかを選ばせたり、XかYの条件に当てはまっていれば、どちらでもよいということを表したりする。（4）のように、法律用語として使われる時は特別で、「XまたはY」のXがさらに二つに分かれる時に「X aもしくはX b」を使う。「X aもしくはX b、またはY」という関係になる。

2 V-るか、もしくは

（1） 応募書類は、5月十日までに郵送するか、もしくは持参すること。

（2） パンフレットを御希望の方は、葉書で申し込むか、もしくはFAXをご利用下さい。

（3） 受講申し込みは、京都市内にお住まい、もしくは京都市内に通勤なさっている方に限ります。

「二つのうちのどちらか一方」という意味。（1）（2）は「XとYのどちらか一方を選ばせる」ときの言い方。（3）は二つの条件を示して「XかYの条件に当てはまっていれば、どちらでもよい」という意味。この場合両方に当てはまっていてもかまわない。（3）のように動作を表す名詞を受ける場合は、「NもしくはNする」の形を使うこともある。

【もしも】

「もし」をさらに強調した語で、「かりにそうならば」という意味を表す。

1 もしも…たら

（1） もしも家が買えるなら、海辺の洋館がいい。

（2） もしも僕が君の立場だったら、違う行動をとると思う。

（3） もしも私が君ぐらい若ければ世界中を飛びまわっているだろ

う。

（４）もしも地震が起こるのがあと30分遅ければ、被害は甚大なものになっていただろう。

後に「たら／ば／なら」などの条件表現を伴い、事実かどうか未定のことや事実と反対のことを「かりにそうならば」と仮定する意味を表す。

2 もしものN

（１）父にもしものことがあったらどうしよう。

（２）もしもの場合にはすぐ連絡してください。

（３）大地震はそんなにちょくちょく起こるわけではないが、もしもの時のために準備をしておいた方がよい。

「もしも」の後に「時／場合／こと」などの名詞が続き「万一そのような状況になった場合」という意味を表す。「死」「危篤状態」「大災害」など、望ましくない重大な事態の場合に用いいる。（1）は「死」のことを婉曲に言う表現。「万一」もほぼ同義で置きかえ可能。「もし」にはこの用法はない。

【もちまして】

→【もって₂】

【もちろん】

1 もちろん

（１）A：一緒に行きますか。
　　B：もちろん。

（２）A：そこへ行ったら、彼女に会えますか。
　　B：もちろんですよ。

（３）この仕事は、残業が多くなるかもしれません。もちろん、その分の給料はちゃんと支払われます。

（４）A：あの、休日は、きちんと取れるのでしょうか。
　　B：それは、もちろんですよ。

当然のことと受け入れる気持ちを表す。その状況から予想しうることについて、その通りであると強調する表現。また、以下の例のように、先に述べたことについて、留保をつけたりする場合にも使う。

（例）わたしはこの計画に賛成です。もちろん、実行できるかどうかは社長の決定を待たなければなりませんが。

（例）娘は、土曜日の午後はアルバイトをして、友達と喫茶店でおしゃべりをして帰って来ます。もちろん、いつもそうだというわけではありませんが、だいたいそういう習慣になっていたようです。

2 Nはもちろん

（１）彼は、英語はもちろん、ドイツ語も中国語もできる。

（２）彼は、スポーツ万能で、テニスはもちろん、ゴルフもサッカーもうまい。

（３）委員長の高田さんはもちろん、委員会の全メンバーが参加します。

（４）来週のパーティーは、いろいろな国の料理はもちろん、カラオケもディスコもある。

（５）この本は、勉強にはもちろん役に立つし、見るだけでも楽しい。

（６）彼は子供の送り迎えはもちろん、料理もせんたくも家事は何でもやる。

当然そこに入る代表的なものとしてNをとりあげ、その後で同類の他のものを並べあげるのに用いる。「もちろんのこと」という表現もある。

【もって₁】

［Nをもって］

（１）自信をもってがんばってね。

（２）A：しめきりが明日というレポートがみっつもあるんだ。
　　B：余裕をもってやらないからこういうことになるのよ。

（３）わたしは、そのとき確信をもって、こう言ったんです。

（４）これは、自信をもっておすすめできる商品です。

「ものを持つ」「手に持つ」というときの「持つ」という動詞が使われているが、「自信」「確信」など、抽象的な意味の名詞を用いて、それを伴ってという意味を表す。

【もって₂】

1 Nをもって

（１）このレポートをもって、結果報告とする。

（２）この書類をもって、証明書とみなす。

（３）これをもって、挨拶とさせていただきます。

「…によって」の意味。話しことばで議会など公式の場で用いる。書きことばとしても、書類などで用いるかたい表現。「…とみなす」という意味の文とともによく使う。

2 Nをもちまして

（１）本日をもちまして当劇場は閉館いたします。

（２）当店は7時をもちまして閉店させていただきます。

（３）これをもちまして閉会（と）させていただきます。

（４）只今をもちまして受付は締め切らせていただきます。

時間や状況を告げて会などを終わらせるのに用いる。正式なあいさつの場などに限られており、くだけた会話などでは用いられない。「をもって」より丁寧。

【もっと】

（１）もっと大きい声で話してくれませんか。

（２）もっと時間をかければもっといいものができると思います。

(3) 地下鉄が開通すればこのあたりはもっと便利になる。

(4) A：痛むのはこの辺ですか。

B：いや、もっと右です。

(5) A：そのラケット、よく売れてますよ。

B：これよりもっと軽いのはありませんか。

A：あちらの黒いののほうがもっと軽いんですが、あまり軽すぎるのも使いにくいんじゃないでしょうか。

(6) もっと(はっきり)言うと、あの子はやる気がまったくない。

(7) もっと驚いたことには会社でそのことを知らなかったのは私だけだった。

それぞれの程度が今より高いことを表す。(4)のように程度がはかれる名詞(前、後ろ、上、下など)にも付く。話しことば的。

【もっとも】

1 もっとも

(1) レポートは来週提出して下さい。もっとも、はやくできた人は今日出してもかまいません。

(2) この事故では、橋本さんに責任がある。もっとも、相手の村田さんにも落度があったことは否定できない。

(3) 彼は強かったなあ。もっとも、毎日あれだけ練習しているのだから当然か。

先の文の内容について、部分的に訂正するのに用いる。

2 もっとも …が／…けど

(1) あしたから旅行に行きます。もっとも二、三日の旅行ですが。

(2) あのホテルにした方がいいんじゃない。もっとも、私も行ったことがないから、本当にいいかどうかわからないけど。

(3) 彼女がそう言っていました。もっともうそか本当かは分からないけど。

(4) わたしは来年東大へ行きます。もっとも試験に受かればの話ですが。

(5) スポーツをするなら、サッカーが一番面白い。もっとも疲れることは疲れるけど。

前の文の内容を部分的に訂正したり、その内容から聞き手が予想しそうなことを否定したりするのに用いる。「…けど」は話しことば。

【もっぱら】

1 もっぱら

(1) 世間ではもっぱら消費税のことでもちきりだ。

(2) いろいろな酒類があったが、

彼はもっぱら日本酒ばかり飲んでいた。

(3) A：愛読書は何ですか。

B：私はもっぱら推理小説です。

(4) 日曜はもっぱらテレビにゴロ寝です。

「ほとんどそればかり」の意味。

2 もっぱらのN

(1) K監督の新作が面白いともっぱらの評判だ。

(2) 王子の花嫁候補の第一位はあの令嬢だと、もっぱらのうわさだ。

(3) もうすぐ大きな異動があると、社内ではもっぱらのうわさになっている。

「評判」「うわさ」などとともに使って、「みんながそう言っていること」という意味を表す。

【もと】

1 Nのもと(で)

(1) 子供は太陽のもとで思いきりはねまわるのが一番だ。

(2) 彼はすぐれた先生のもとでみっちり基礎を学んだ。

(3) 先生のあたたかい指導のもとで、生徒たちは伸び伸びと自分らしい作品を作り出していった。

(4) 各国の選挙監視団の監視のもとで、建国以来初の民主的な選挙が行われた。

「…の下で」「…の影響の及ぶ範囲で」という意味を表す。名詞を修飾する時は「NのもとでのN」になる。

(例) 選挙監視団の監視のもとでの選挙が行われた。

書きことば的な言い方。また、さらにあらたまって、「Nのもと」と言うことがある。

(例) 各国の選挙監視団の監視のもと、建国以来初の民主的な選挙が行われた。

2 Nのもとに

(1) 両親の了解のもとに3年間の留学が可能になった。

(2) 弁護士立ち会いのもとに当事者間の協議が行われた。

(3) 他分野での対立点は棚上げにするという暗黙の合意のもとに、両者の連携は成り立っている。

「…を条件として」「…の状況において」という意味を表す。書きことば的。

【もどうぜん】

→【どうぜん】2

【もともと】

1 もともと

(1) その本はもともと彼のものだったんだ。だから、彼に返すのは当然のことだ。

(2) 彼は結局裁判で負けたが、もともと彼の主張は根拠が薄いものだった。

(3) 彼はもともと保守系だ。あんな発言をしてもおかしくない。

(4) もともと彼は九州の出身だから、大学を出た後九州の会社に就職してもおかしくない。

(5) もともと(は)別々の国だったが、統一されてひとつの国になった。

(6) あのマンションの敷地はもともと(は)工場だった。

(7) あの歌手はもともと(は)サラリーマンだった。

「本来」の意味。ものごとのはじまりについて述べるのに用いる。ある状況が元の状況とくらべてどうかということをあらためて認識する場合に用いることが多い。「もともとは」という言い方もある。

2 …てもともとだ

(1) 初めからあまり可能性はなかったから、失敗してもともとだ。

(2) 勉強不足だとは思うが、とにかく、試験を受けてみよう。落ちてもともとだ。

(3) 断られてもともとだと思って、思い切って彼女にプロポーズしてみた。

(4) A：先生にいい点をくれるよう頼んでみたけど、できないと言われたよ。
　B：まあ、だめでもともとだね。

「…て」の部分に「だめ」「失敗」などの意味を表すことばを使って、「何もしなかった場合と同じだ」という意味を表す。可能性の薄そうなことをする場合や、挑戦して失敗した場合などに使う。「…てもともとだ」と言うこともある。

【もとより】

1 もとより

(1) そのことはもとより承知しています。

(2) 反対に会うのは、もとよりわかっていたことです。

「はじめから」の意味。「わかっていた」、「そう思っていた」という意味の文とともによく使う。ややあらたまった表現。

2 …はもとより

(1) ワープロはもとより、タイプライターすら使ったことがない。いつも手書きだ。

(2) すしはもとより、すきやきも彼は食べられない。とにかく日本料理はいっさいだめだ。

(3) 胃はもとより肺もやられているのが検査でわかった。

(4) 結果はもとより、その過程も大切だ。

(5) 迎えに行くのはもとより、彼の滞在中一切の世話をしなければならない。

はじめに当然と思われることを出して、「それだけでなく、もっと重要なこと／軽いことも」という意味を表す。

【もの】

漢字の「物」が使われるのは、1の中で具体的な手でつかめるような物体を表す場合で、それ以外は、「もの」とするのが普通。

1 もの <物体>

(1) この部屋にはいろいろな物がある。

(2) 何かすぐ食べられる物があれば、それでいい。

(3) どうぞ、すきなものをとってください。

(4) 赤ちゃんは、動かないものには興味を示さない。

(5) 買いたいものがあるので、帰りにデパートに寄る。

(6) この料理の本の中には、わたしにできるものはひとつもない。

(7) 古い蔵書の中でおもしろいものをみつけた。

(8) この写真は彼女のものだ。

(9) 不思議なものを見たような気がする。

(9) 不思議なものを見たような気がする。

(10) 山のすそに、けむりのようなものが見えた。

物体、または、時間の過程の中で起こること(できごと)とはかかわりなく存在する何かを、特定せず、一般的にとらえるときに使う。

「もの」と「こと」の用法は区別しにくいことが多いが、時間の過程の中で起こることを示すかどうかが基本的な違いとなる。動作やできごとにかかわる場合は「もの」ではなく、「こと」を用いる。たとえば、「話したいものがある」とは言わず、「話したいことがある」とする。同様に、「たいへんなものが起こった」ではなく、「たいへんなことが起こった」とするのが正しい。

2 もの <言葉・知識・作品など>

(1) 子供がものを言うようになった。

(2) あの人はあまりものを知らない。

(3) 学生のころから、ものを書くのがすきだった。

(4) かれとわたしとは、ものの考え方が違う。

(5) 市役所に苦情を持ち込んだら、たまたまもののわかる人がいて、すぐ解決してくれた。

「言う」「見る」「知る」などの動詞とともに用いる。動詞に応じて「言葉」「知識」「作品」などの意味を表す。「ものを言う」は、「話す」の外に、力を発揮するという意味の使い方もある。

(例) 彼の肩書きがものを言う。

(5)の「ものがわかる」は「理解力がある」の意味。

3 Nというもの

a Nというもの

(1) 彼女は愛国心というものをもっていないのだろうか。

(2) わたしは一度も愛情などというものを感じたことがない。

(3) 今まで彼は恐れというものを知らなかった。

「愛情」など抽象的な概念を表す名詞を用いて、それを強調的に示すのに用いる。

b Nというものは…だ

(1) 人間というものは不可解だ。

(2) 男にとって、女というものはいつまでたっても謎だ。

(3) 金というものは、なくても困るし、あり過ぎても困る。

(4) 幸福というものは、あまり続き過ぎると、感じられなくなる。

(5) 時間というものは、だれに対しても平等だ。

「人間」「幸福」などの名詞に付いて、その属性や性質などを、一般化して述べるのに用いる。「…というのは」という表現も使う。(3)(4)のように、動詞文の場合もある。文脈によっては、いろいろな感慨をこめることもある。名詞文の場合は「…とは…だ」に言いかえられる。

4 V-れないものはV-れない

(1) A：これだけお願いしてもだめですか。
　B：いくら頼まれても、できないものはできないんだ。

(2) A：まだわかりませんか。
　B：いくら言われても、わからないものはわからないんだ。

(3) A：本当にあしたまでに仕上がらないんですか。
　B：急がされても、書けないものは書けないんです。

可能を表す「V-れる」の形や「分かる」のような可能の意味を持つ動詞を使う。できないことを強調する表現。「…ても」と共に使うことが多い。

5 …もの／…もん

(1) 借りたお金は返しておきました。もらいっぱなしではいやだもの。

(2) A：展覧会に出品する話は断ったんですか。
　B：ええ。しめきりが早くて。わたし、そんなに速くかけないもの。

(3) わたし、姉ですもの。弟の心配をするのは当たり前でしょう。

(4) A：寝坊したから、会社は休んだの。
　B：これだもん。いやになるよな。

(5) 雪が降ったんだもの。行けるわけないでしょう。

(6) A：もうすこしいたら。
　B：いっぱいやることがあるんだもの。帰らなくちゃ。

(7) A：また、出かけるの。
　B：うん。だって、吉田さんも行くんだもの。

(8) A：どうして抗議しないんだ。
　B：だって仕方がないもの。

(9) A：冷蔵庫を空にしたの、よっちゃんでしょ。
　B：うん、だってお腹すいちゃったんだもん。

くだけた会話中で文末につけて、理由を表す。自分の正当性を主張するために用いることが多い。

「もの」は若い女性や子供が使うことが多い。「もの」のさらにくだけた形が「もん」だが、(年齢層の若い)男女とも使う。(7)〜(9)のように「だって」とともに使うことも多い。「だって」を一緒に使うと、甘えた調子の理由表現になる。子供、若い女性が主として用いる。

【ものか】

[Naなものか]
[A-いものか]
[V-るものか]

1 …ものか／…もんか

(1) A：はさみも持って行く?
　B：そんなもの必要なもんか。

(2) A：藤井さんが一番になったそうね。
　B：そんなことがあるもんか。何かの間違いだろう。

(3) こんな複雑な文章、訳せるものですか。

(4) 誘われたって、だれが行くものか。

(5) あんな人に、頼むもんか。

(6) 誰が人に手渡したりするものですか。

下降調のイントネーションを伴って、強く否定する気持ちを表す。(4)〜(6)は「…しない」という話し手の強い意志を表す。くだけた会話で使う。

「ものか」は普通は男性が用いるが、丁寧体の「ものですか」は、女性が用いる。

2 V-ないものだろうか

(1) もう少し涼しくならないものかなあ。

(2) もう少し分かりやすく書けなかったものか。

(3) 何とかして晩までに青森まで行けないものか考えてみよう。

(4) だれかに協力してもらえないものだろうか。

(5) 2時間の通勤時間を何とか利用できないものかと考えた。

(6) A：彼と話しができないものでしょうか。
　B：何とか方法を考えましょう。

あるできごとの実現を望む話し手の気持ちを表す。(2)「…なかったものか」は、実現しなかったことに対して困惑す

る気持ちが含まれる。また、文末に「(と)考える」を伴う場合は、実現が可能かどうか考えるという意味になる。(6)のようにひかえめな依頼の表現として用いられることもある。

3 どうしたもの(だろう)か

(1) 反対派への説明はどうしたものかね。
(2) 彼らに対する報酬はどうしたものだろうか。
(3) 今後の資金繰りはどうしたものか、少し考えさせてくれ。

どのように行動すべきか分からずに戸惑う気持ちを表す。相手がいる場合は質問の表現としても用いられる。

【ものがある】

[Na-なものがある]
[A-いものがある]
[V-るものがある]

(1) この作品は発想に斬新なものがある。
(2) 彼の潜在能力にはすばらしいものがある。
(3) この文章はまだまだ未熟だが、しかし随所にキラリと光るものがある。
(4) 彼女の企画書は結局通らなかったが、いくつかの点で見るべきものがある。

ある特徴が見られるという意味。(4)の「見るべきもの」は「見る価値のある優れた点」という意味。「ある」の代わりに「見られる」「認められる」なども使われる。

(例) この文章はまだまだ未熟だが、しかし随所にキラリと光るものが見られる。

書きことば的。

【ものだ】

[Na なものだ]
[A-いものだ]
[Vものだ]

1 …ものだ ＜本性＞

(1) 人の心は、なかなかわからないものだ。
(2) 人間は本来自分勝手なものです。
(3) 赤ん坊は泣くものだ。
(4) 金というのはすぐなくなるものだ。
(5) 水は本来低きに流れるものです。
(6) 世間とは冷たいものだ。一時は騒いでもすぐに忘れる。
(7) 人生なんて、はかないものだ。
(8) A：すみません、レポートを書くのを忘れました。
B：学生というのは本来勤勉なものだ。アルバイトばかりしていてはいけないよ。

真理、一般的にいわれていること、本来の性質などについて、ある種の感慨をこめて述べるのに用いる。「本来」とともに使うことも多い。一般的な性質として述べて、訓戒とすることもある。たとえば、(8)は、学生のあるべき態度を述べている。

2 …ものだ ＜感慨＞

a …ものだ

(1) 「ステレオがないと生活できない」とは、今の学生はぜいたくなことを言うものだ。
(2) この校舎も古くなったものだ。
(3) この町も、昔と違ってきれいになったものだ。
(4) 昔のことを思うと、いい世の中になったものだと思う。
(5) あたりを見回して、かれはつくづく遠くへ来たものだと思った。

感慨・詠嘆を表す。

b よく(も)…ものだ

(1) あんなに負債の大きかった会社の再建がよくできたものだ。
(2) こんなむずかしい問題が、よく解けたものだ。
(3) 昔世話になっていた人に、よくもあんな失礼なことができたものだ。
(4) 完成した作品を見ると、みんなよく頑張ったものだと思う。
(5) こんな小さい記事がよく見つけられたものだ。
(6) あんなに不況のときによく就職できたものだと思う。

あるできごと、行為について感心したり、呆れたりする気持ちを表す。この用法では、「よく(も)」がないと不自然な文になることが多い。

3 V-たいものだ

(1) そのお話はぜひうかがいたいものです。
(2) それはぜひ見たいものだ。
(3) 海外へ行かれるときには、わたしも一度、ご一緒したいものです。
(4) 私も彼の好運にあやかりたいものだ。
(5) 今のわたしを、死んだ両親にみてもらいたいものだ。
(6) このまま平和な生活が続いてほしいものだ。

「たい」「ほしい」などの欲求を表す表現とともに使って、その気持ちを強調するのに用いる。

4 V-たものだ

(1) 学生のころはよく貧乏旅行をしたものでした。
(2) 彼は、若い頃は周りの人とよくけんかをしたものだが、今はすっかりおだやかになった。
(3) 小さい頃はよくみんなで近くの森へ遊びに行ったものでした。
(4) そのころは週末になると映画館にいりびたったものでした。
(5) 小学校時代、彼のいたずらには、先生たちが手を焼いたものでした。

過去において、習慣的に行われていた

ことを感慨をこめて回想するのに用いる。

【ものだから】

[N／Na なものだから]
[Aものだから]
[Vものだから]

1 …ものだから

(1) 私の前を走っている人が転んだものだから、それにつまづいて私もころんでしまった。
(2) 「父危篤すぐ帰れ」という電報が来たものだから、あわてて新幹線に飛び乗って帰って来た。
(3) 彼がこの本をあまりに薦めるものだから、つい借りてしまった。
(4) 駅まであまりに遠かったものだから、タクシーに乗ってしまった。
(5) A：昨日は練習に来なかったね。
B：ええ、妹が熱を出したものですから。
(6) 英語が苦手なものですから外国旅行は尻ごみしてしまいます。

原因・理由を表す。「から」に言いかえることができるが、あとに意志表現、命令表現はつけられない。
(誤) 近いものだから、歩こう。
(正) 近いから歩こう。

「事態の程度が激しい、あるいは、重大で、そのせいで何かをしてしまった」ということを述べるのに用いられることが多い。話しことばで使われるのが普通で、くだけた言い方では「もんだから」となる。

2 …おもったものだから

(1) 彼はもう知っていると思ったものだから、伝えませんでした。
(2) 彼女はたぶんいないと思ったものですから、電話しませんでした。
(3) 子供の様子がいつもとは違うと思ったものですから、すぐ病院へ連れて行きました。
(4) 雨が降るといけないと思ったものですから、洗濯ものを取り込んでおきました。
(5) 手紙では間に合わないと思ったものだから、ファックスにしました。

「思ったから」とだいたい同じだが、「思ったものだから」は言い訳めいた感じをあたえる。

【ものではない】

1 V-るものではない

(1) 人の悪口を言うものではない。
(2) 男は人前で泣くものではありません。
(3) 動物をいじめるものではない。

人の行為を表す動詞を受け、「…すべき

ではない」という意味を表す。忠告を与えるような場合に使う。

2 V-たものではない

(1) こんなすっぱいみかん、食べられたもんじゃない。
(2) こんな下手な写真など、人に見せられたものではない。
(3) あいつにまかせたら何をしでかすか分かったものではない。

「できる」「分かる」のような可能を表す動詞を受け、それが「不可能だ」という否定の気持ちを強調するのに用いる。話しことばで使われるのが普通で、くだけた言い方では「もんじゃない」となる。マイナス評価のことがらに使う。

【ものでもない】

1 V-たものでもない

(1) しろうとばかりの劇だが、すぐれたところもあり、そう馬鹿にしたものでもない。
(2) みんな、主任になったばかりの佐々木さんを若すぎて頼りないと言うが、彼の行動力はそう見くびったものでもない。
(3) 年をとったといっても、わたしのテニスの腕はまだまだ捨てたものではない。

「軽視する」という意味を含んだ表現に続き、「そんなに悪くない」という意味を表す。

2 V-ないものでもない

(1) この程度の料理なら、私にも作れないものでもない。
(2) 道は険しいが、気をつけて歩いて行けば行けないものでもない。
(3) 理由次第では、手を貸さないものでもない。
(4) このルートで休みなしに走れば、間に合わぬものでもない。

「できる」ということを、消極的に表す。かたい、やや古めかしい言い方。「V-なくもない」とだいたい同じ。

【ものとおもう】

1 …ものとおもう

(1) そういうことはないものと思うが、一応確かめてみよう。
(2) 母は、子供たちも一緒に行くものと思っている。

話し手が確信していることを表す。

2 …ものとおもっていた

(1) スキーはむずかしいものと思っていたが、やってみたら、簡単だった。
(2) 間違いはもう全部直したものと思っていたら、まだ少しあると言われた。
(3) あしたはストで休みになるものと思っていたから、授業の準備は全然しなかった。
(4) 古典なんて退屈なものと思っ

ていたが、読んでみたら、意外におもしろかった。

（5）吉田さんは来ないものと思って、5人分の食事しか作らなかった。

話し手の思い込みを表す。真実だと思い込んでいたが、実際にはそうではなかったという場合に用いるのが普通。

3 …ものとおもわれる

（1）選挙の結果については明日の夕方には大勢がわかるものと思われる。

（2）この調子の悪さでは、あまりいい結果は期待できないものと思われる。

（3）犯人は東京方面へ逃げたものと思われる。

「と思われる」と同じ意味で、推測の表現として使う。「もの」が入る表現は、ややあらたまった会話や文章で使うのが普通。

【ものとする】

（1）このことは共通の理解を得たものとする。

（2）これで契約が成立したものとする。

「…と見なす」「…と解釈する」という意味を表す。

【ものともせずに】

→【をものともせずに】

【ものなら】

1 …ものなら

（1）できるものなら世界中を旅行してみたい。

（2）もし願いがかなうものなら、この美術館にある絵が全部ほしい。

（3）もし希望通りのことができるものなら、今すぐ引退して、趣味の花作りに打ち込みたい。

（4）こんな職場などやめられるものならやめてしまいたいが、家族がいるから、そうはいかない。

（5）A：今年はスキーに行かないんですか。

B：行けるもんならもう行っているわよ。忙しくてどうしても休みがもらえないの。

（6）やれるものならやってみろ。

実現する可能性の少ないことに関して、「もし実現した場合は」と仮定するのに用いる。可能動詞を使うことが多い。また、同じ動詞をくりかえす場合、実際にはできないことを強調する。（6）は、慣用的表現で、相手に挑戦する言い方。

2 V-ようものなら

（1）そんなことを彼女に言おうものなら、軽蔑されるだろう。

（2）そんな言葉を使おうものなら何と下品な女かと思われるだ

ろう。

（3）最後の試験に遅刻でもしようものなら、僕の一生は狂ってしまうだろう。

（4）彼女は気が短くて、僕がデートにすこしでも遅れでもしようものなら、怒って帰ってしまう。

（5）となりの子供はわがままで、ちょっと注意でもしようものなら、大声で泣き叫ぶ。

やや誇張した条件の述べ方で、「万一そのようなことが起こったら」という意味を表す。後ろには「大変な事態が生じる」という内容を続けるのが普通。

【ものの】

1 …ものの

（1）輸入果物は、高いもののめずらしいらしく、人気があってよく売れている。

（2）新しい登山靴を買ったものの、忙しくてまだ一度も山へ行っていない。

（3）今日中にこの仕事をやりますと言ったものの、とてもできそうにない。

（4）自然の多い郊外に家を買ったものの、休みの日は寝てばかりだ。

（5）次の企画を始めるお金はあるものの、アイデアがなくて困っている。

（6）招待状は出したものの、まだほかの準備は全くできていない。

（7）先月仕事で久しぶりに東京へ行った。大学時代の友人に電話でもかけてみようとは思ったものの、忙しさにまぎれて、つい、そのままにしてしまった。

過去の出来事や現在の状況を述べて、「だがしかし…」と文を続けるのに用いる。後ろには、前に述べられたことから普通に予測されることが起こらない、起こりそうにないという表現が続く。

（1）は「高いから売れないはずだがよく売れる」の意。（3）の「出来　るといったのにむずかしい」など自分の言ったことや、したこと、ある状態に対して、その後の事態に自信が持てない、実現がむずかしいなどの表現が続くことが多い。

2 …とはいうものの

（1）四月とはいうものの風がつめたく、桜もまだだ。

（2）相手は子供とはいうものの、なかなか手ごわい。

（3）「石の上にも三年」とは言うものの、こんなに訓練がきびしくてはやめたくなる。

（4）人間は平等だとはいうものの、この世は不平等なことばかりだ。

「一般的に推測されることがあてはまらない」ことを表す。（1）は「四月はふつうならあたたかく桜の咲く季節だが、今年はそうではない。」の意味。（3）のようにことわざなどに続けて使われることが多い。

3 とはいうものの

（1）大学時代は英文学専攻だった。とはいうものの、英語はほとんどしゃべれない。

（2）車庫付きの家も買ったし、すっかり結婚の準備は整っている。とはいうものの、肝心の結婚相手がまだ見つかっていないのが悩みだ。

前のことがらから予想されることと違う事態が続くことを表す。「それはそうなのだが」「しかし」という意味。

【ものを】

1 …ものを

（1）黙っていればわからないものを、彼はつい白状してしまった。

（2）本来ならば長兄が会社を継ぐはずのものを、その事故のせいで次兄が継ぐことになってしまった。

（3）知らせてくれたら、すぐ手伝いに行ったものを、何も言わないとはみずくさい人だ。

（4）場所が場所なら大事故となるものを、この程度のけがですんでよかったと思いなさい。

「のに」とだいたい同じ意味だが、（1）～（3）のように思わしくない結果が生じたことに対して不満の意をこめて用いられることが多い。

2 …すればいいものを

（1）すぐに医者に行けばいいものを、がまんしていたから、ひどくなってしまったのだ。

（2）そこで引き返せばいいものを、まっすぐ行ったものだから、山に迷い込んでしまった。

（3）そのまま逃げだせばいいものを、うろうろしていたので彼は結局警官に捕まってしまった。

（4）部屋が火につつまれたときすぐ逃げればよかったものを、ペットを助けに行ったばかりに逃げ遅れて死んでしまった。

（5）わたしに話してくれればいいものを、どうして、ひとこと言ってくれなかったんですか。

「…すれば悪い結果にならなかっただろうが、そうしなかったから、よくない結果になってしまった」という意味を表す。恨みや非難の気持ちをこめて使うことが多い。

【もはや】

副詞。「もう」よりもかたい表現。

1 もはや…だ

（1）少し前までは車を持つことが庶民の夢だったが、もはや一家に車二台の時代だ。

（2）資金繰りに走り回ったがついに不渡り手形を出してしまった。もはや会社もこれまでだ。

（3）地球の自然環境の悪化はもはや無視できないところまで来ている。

（4）保守か革新かという論点はもはや時代遅れだ。

これまでの経過を述べて区切りをつけたり、現状はもうここまで来ている、こうなっているということを表す。

2 もはや…ない

（1）この理論が時代遅れになった今、彼から得るものはもはや何もない。

（2）終戦から半世紀もたっている。もはや戦後ではないという人もいる。

（3）彼のスキャンダルがあちこちでうわさになりはじめた。こうなってはもはや手の打ちようがない。

（4）長年彼のうそにだまされてきて、もはやだれ一人として彼を信じる者はなかった。

いままで続いていた事態が、これ以上は続かないという意味を表す。（3）は「こんなにうわさが広がってはもう止める方法はない」という意味。

【もらう】

→【てもらう】

【や$_1$】

1 NやN

（1）机の上には皿や紙コップなどが置いてあった。

（2）バスは中学生や高校生ですぐにいっぱいになった。

（3）その村には米や野菜はあるが、肉はなかなか手に入らない。

ものをならべたてるのに用いる。「XとY」と言った場合はXYの二つだけだが、「XやY」はそれ以外にもなにかあるという含みがある。

2 数量詞＋や＋数量詞

（1）うちの息子は一度外国に出かけると1ヶ月や2ヶ月はなんの連絡もありません。

（2）善人だと言われている人でも、悪いことの一つや二つはしているだろう。

（3）彼女ももうすぐ二十歳なんだから、ボーイフレンドが一人や二人いてもおかしくない。

（4）彼は気前がいいから、5万や10万なら理由を聞かずに貸してくれる。

（5）狭い部屋ですが、一晩や二晩ならがまんできるでしょう。

（6）給料は安いが、子供の一人や二人は育てられる。

（7）国際化の時代なのに外国語の一つや二つできないようでは困ります。

おおよその数をあげて、それがたいした数ではないことを表す。「大丈夫だ」「かまわない」「たいしたことはない」という表現が続く。普通は1、2（一人や二人など）が使われることが多い。

【や$_2$】

1 V-るや

（1）「どうして俺なんか生んだんだ」という兄のことばを聞くや、母は顔を真っ赤にしておこりだした。

（2）「父死す」の電報を受け取るや、すぐさま彼は汽車に飛び乗った。

「…と同時に」「…とすぐに」の意味。古い言い方。書きことば。

2 V-るやいなや

（1）彼はそれを聞くやいなや、ものも言わずに立ち去った。

（2）その薬を飲むやいなや、急に眠気がおそってきた。

（3）開店のドアが開くや否や、客はなだれのように押しよせた。

ひとつの動作に続いてすぐに次のことが行われる様子を表す。「…するかしないかの短い間に」「…するとすぐに」の意味。書きことば。

【やがて】

（1）秋が終わり、やがてきびしい冬がやってきた。

（2）小さな誤解が、やがて取り返しのつかない国際問題に発展することもある。

（3）あの子は心をとざして、だれに対しても反抗的だが、やがてわかる時がくる。今はそっとしておいてやろう。

（4）この小川がやがて大きな河になりそして海にそそぎこむ。

「まもなく」「そのうちに」という意味。「…になる」「…にいたる」のような「自然な変化でそのようなことになった」という意味を表す表現とともに使われる。

【やすい】

[R-やすい]

（1）このペンはとても書きやすい。

（2）先生は気さくで話しやすいが、奥さんはこわそうなので家に遊びに行きにくい。

（3）その町は物価も安く、人も親切で住みやすいところです。

（4）かたかなの「ツ」と「シ」は間違えやすいので気をつけてください。

（5）彼はふとりやすい体質なので、食べすぎないようにしているそうだ。

（6）そのおもちゃは壊れやすくてあぶない。

イ形容詞と同じように活用する。動詞の連用形に付いて、その動作が簡単に出来ること、起こり得ることを表す。性質としてそうなる傾向があるときは、たとえば「恋をしやすい」より「すぐに人を好きになる」のように「すぐに…する」などの表現が使われる。「おこりやすい」「泣きやすい」などは「すぐにおこる、おこりっぽい」「すぐに泣く」のほうが普通。反対の意を表すことばに「…にくい」がある。

【やたらに】

（1）今日はやたらに忙しい一日だった。

（2）最近やたらにのどがかわく。なにか病気かもしれない。

（3）今年の夏はやたらに雨が多い。

（4）彼は、女子学生とみると、やたらに話しかけては嫌われているようだ。

（5）この学校はやたらに規則を変更するので困る。

程度が激しかったり、秩序がない様子を表す。「やたらと」も使う。「むやみやたらに」「めったやたらに」という言い方もある。

【やっと】

1 やっと <期待の実現>

（1）三回試験を受けて、やっと合格した。

（2）テストもやっと終わった。

（3）何日も練習してやっとできるようになった。

（4）やっと、退院できるところまで快復した。

（5）1995年にトンネルはやっと完成した。

（6）きびしく注意したので、孫もやっといたずらをしなくなった。

（7）明日でやっと試験も終わる。

（8）貯金もかなりできた。これでやっと独立できる。

（9）娘も来年はやっと卒業だ。

苦労して、あるいはたいへん時間がかかった後で、話し手が待ち望んでいたことが実現する様子を表す。「やっとV-た」の形で使われることが多い。話し手の「ほっとした気持ち」や「喜び」を表したり、「時間がかかった」「たいへんだった」といった気持ちを表す。

似た表現に「ようやく」「とうとう」「ついに」がある。「とうとう」「ついに」は、話し手にとって望ましいことにも、望ましくないことにも使うことができるが、「やっと」は、話し手が待ち望んでいたことについてしか使えない。

（例）長い間入院していた祖父が｛とうとう／ついに｝亡くなった。

上のような例で「やっと」を使うと話し手が「祖父が死ぬことをずっと待っていた」ということになる。「とうとう／ついに」は、話し手が望んでいたかどうかとは関係がなく、長い時間や経過を経て最後の段階に至ったことを表す中立的な表現である。

また、「やっと」「ようやく」は話し手が待ち望んでいたことが、実現する場合に使われるので、最後まで実現しなかったことを表すことはできない。

(誤) 彼は、{やっと／ようやく}来なかった。

(正) 彼は、{とうとう／ついに}来なかった。

2 やっと <ぎりぎりの状態>

話しことばにも書きことばにも使われる。似た表現に「どうにか」「なんとか」「かろうじて」「からくも」などがある。「どうにか」「なんとか」は話しことば的な表現で、「かろうじて」は書きことば的なややかたい表現。「からくも」はかたい書きことばに使われる。「かろうじて」との違いについて詳しくは「かろうじて1」を参照。

a やっと V-た

(1) タクシーをとばして、やっと約束の時間に間に合った。

(2) 試合は延長戦にもつれこんだが、全力を振り絞ってやっと勝った。

(3) うちの子は先月やっと二才になったばかりだ。

(4) 彼が出発してから、まだやっと三日しかたっていない。

(1)(2)のように、「難しかったが、苦労してなんとかうまくいった」という場合や、(3)(4)のように数量を表す表現とともに使われて、「その数量が精いっぱいで、それ以上ではない」「その数量が少ない」ことを表す。ここでは、(3)は「二才になって間もない(たいへん幼い)」(4)「たった三日だ」という意味。

b やっと V-ている

(1) 退職してからは、国から支払われる年金で、やっと生活している。

(2) 私は太りやすい体質で、ダイエットをしてやっと現在の体重を維持している。

(3) 人工呼吸器を使って、やっと生きている状態だ。

(4) 一面焼け野原で、焼け残った家も、燃え残った柱のおかげで、やっと立っているというありさまだった。

(1)(2)のように、「十分ではないが、苦労しながら現在の状態を保っている」という場合や、(3)(4)のように「(死ぬ／倒れるという)最悪の状態の一歩手前で、なんとか現在の状態を保っている」という場合に使う。

c やっと V-るN

(1) 私の家は、家族5人がやっと暮らせる広さしかない。

(2) 柿の実は、大人が背伸びをしてやっと届くところにあった。

(3) 何年も英語を勉強しているが、やさしい本がやっと読める程度で、新聞なんかとても読めない。

「やっと／なんとか／どうにか…できる程度のN」という意味を表す。「難しいけれども、ぎりぎりなんとかできる」という意味を表す。可能を表す表現といっしょに使われる。

d やっとNだ

(1) 宿題はなかなか終わらない。まだやっと半分だ。

(2) この本はすごく難しくて、なかなか進まない。三時間かかって、やっと5ページだ。

(3) 私の収入は、何もかも全部含めても、やっと10万円だ。

(4) 娘は、まだやっと18才だ。結婚なんかとんでもない。

(5) うちの子は、まだやっと幼稚園だ。

(1)〜(3)のように、数量を表す表現と共に用いて、「たいへん苦労をして、その数量に至った」ことを表す。話し手が、「その数量が、努力の割に少ない」と思っている場合に使う。また、(4)(5)のように年齢や学年などを表す表現と共に用いて、「…にすぎない」「たいへん若い／幼い」という意味を表す。

e やっとのN

(1) 戦争中は毎日食べていくのがやっとの生活だった。

(2) 日常会話がやっとの語学力では、大学の授業を受けるのは難しいだろう。

(3) やっとの思いで、彼女に秘密を打ち明けた。

(4) やっとのことで、一戸建ての家を手にいれた。

「…するのがやっとのN」「Nがやっとの N」の形で使われて、「そうするのが精いっぱいの状態で、それ以上の余裕がない」という意味を表す。また、(3)(4)の「やっとの思いで」「やっとのことで」は慣用的な表現で、「たいへんな苦労や努力をして」という意味。

f Nが／…のが　やっとだ

(1) 家の前の道は、車一台が通るのがやっとだ。

(2) 私の給料では、食べていくのがやっとだ。

(3) 子供の頃は体力がなくて、毎日学校に通うのがやっとだった。

(4) この本はすごく難しくて、なかなか進まない。一日に5ページがやっとだ。

「そうするのが精いっぱいの状態で、それ以上の余裕がない」という意味を表す。

【やなんぞ】

[Nやなんぞ]

(1) 大学の名前やなんぞでぼくを

評価してほしくない。

(2) 不況やなんぞには負けていられない。皆で会社のためにがんばろう。

(3) 塾やなんぞに行っても、やる気がなくちゃだめだ。

(4) たった一度の受賞やなんぞで得意になってはいけないよ。

「…やなにか」という意味だが、否定的にとらえる時に使われる。「やなんか」ともいう。少し古い言い方。

【やむ】

[R-やむ]

(1) 夜中の三時ごろになってやっと赤ん坊は泣きやんだ。

(2) となりの部屋の電話のベルが鳴りやんだ。

(3) 一ヶ月降り続いた雨が降りやんだ後は一面の洪水だった。

「続いていた現象が終わる」の意味。「泣く」「鳴る」「降る」などの限られた自動詞とともに使われる。「降りやむ」は単に「やむ」というのが普通。

【やら】

1 …やら…やら

(1) 来月はレポートやら試験やらでひどく忙しくなりそうだ。

(2) スケート場は子供やらつきそいの母親やらでごったがえしていた。

(3) 日が沈んで、山道は寒いやらこわいやらで小さい子は泣きだしてしまった。

(4) 皆さんにこんなに祝ってもらえるとは恥ずかしいやら、嬉しいやら、なんともお礼の言いようがありません。

(5) きのうは電車で財布をすられるやら傘を忘れるやらでさんざんだった。

「…や…などいろいろ」「…たり…たりして」のようにいくつかの中から並べあげるのに用いる。「いろいろあって大変だ」という意味で使われることが多い。

2 …のやら…のやら

(1) 行きたいのやら行きたくないのやら、あの人の気持ちはどうもよくわからない。

(2) 息子に結婚する気があるのやらないのやら私にはわかりません。

(3) うちの子はいつも部屋にいるけど、勉強しているのやらしていないのやら、まったくわからない。

(4) こんなに辛くては、味がいいのやら悪いのやらさっぱりわからない。

(5) 本人に直接、病名を言っていい(の)やら悪い(の)やら判断がつかない。

(6) 毎日カバンを持って家を出るけど、どこで何をしているのやら。

「二つのうちのどちらかよく分からない」という意味。話し手が判断に困っていたり、話題の主の態度がはっきりしないのを快く思っていないときに使われることが多い。話しことばでは(6)のように後ろの部分の「していないのやらわからない」を略すことも多い。

3 疑問詞…のやら

(1) きのうの昼に何を食べたのやらまったく思い出せない。

(2) お祝いに何をあげていいのやらわからない。

(3) どこにしまったのやらいくらさがしても見つからない。

(4) 彼に会ったのがいつのことやらはっきり覚えていない。

(5) 40年も会っていないのではじめは誰が誰やらさっぱりわからなかった。

「なに、いつ、どこ、だれ、どう…かわからない」の意味。「のやら」の「の」を言わないこともある。(5)の「だれがだれやら」は誰かわからないことを強調する慣用句。ほかに「なにがなにやら」「どれがどれやら」「どこがどこやら」「いつのことやら」などの言い方がある。少し古い表現。

4 疑問詞＋やら

(1) なにやら騒がしいと思ったら、近所が火事だった。

(2) 妻の誕生日がいつやらはっきりおぼえていない。

(3) 会議のあとでどこやら高そうなバーに連れて行かれた。

(4) どうやらやっと事件の解決の糸口が見えてきた。

「なに」「どこ」などの疑問詞に付いて、はっきりそれとは指し示せないことを表す。(1)は「なにか、なんだか」(2)は「いつか」、(3)は「どこか」、(4)は「どうにか」に言いかえられる。

【やる】

→【てやる】

【ゆえ】

古い言い方。書きことば。

1 ゆえ

(1) ゆえあって故郷を捨て、この極寒の地に参りました。

(2) 彼はゆえなく職務を解かれ、失意のうちに亡くなった。

(3) 若い女が故ありげな様子で門のそばにたたずんでいた。

わけ、理由という意味。(1)は文語的な物語のナレーション。(2)は「理由なく仕事を首になり」、(3)は「事情がありそうな様子」という意味。「ゆえあって」「ゆえなく」「ゆえありげ」はいずれも慣用的な表現。

2 Nのゆえに

(1) 貧困のゆえに高等教育を受けられない子供たちがいる。

(2) 政府の無策の故に国内は内乱状態に陥った。

「…が原因で／理由で」という意味。…のため。

3 …がゆえ

(1) 女性であるが故に差別されることがある。

(2) 事が重大であるが故に、報告の遅れが悔やまれる。

(3) 親が放任していたが故に非行に走る若者もいる。

(4) 容易に会えぬが故に会いたさがつのる。

(5) 若さ(が)故の過ちもあるのだ。

普通体の節を受けて、「それが原因／理由となって」という意味を表す。

4 …のはNゆえである

(1) 息子は窃盗、万引きで何度つかまったことか。それでも見捨てないのは子供可愛さゆえである。

(2) 冬山登山は確かに死と隣り合わせだ。だがそれでも行くのは冬山の魅力ゆえである。

「…するのは…だからだ」という意味。困難な状況の中であえて何かをする場合の理由を述べるのに用いられる。

【よう$_1$】

1 R-ようがない

(1) こんなにひどく壊れていては、直しようがない。

(2) あの二人の関係はもう修復しようがない。

(3) ここまで来てしまったからにはもう戻りようがない。

(4) そんなにひどいことをしたのなら、言い訳のしようがないと思う。

「どんな方法をとっても不可能だ」という意味を表す。ほかに可能な手段が何もないような場合に用いる。「修復する」「改善する」などの漢語の動詞では、「漢語＋の＋しようがない」の形をとることもある。

(例) あの二人の関係はもう修復のしようがない。

2 R-ようで(は)

(1) 気の持ちようで何とでもなることだ。

(2) 考えようではサラリーマン生活も悪くはない。

(3) あなたの気持ちの持ちようひとつできまるんだから。

(4) 物は言いようで角が立つ。

(5) 仕事はやりようでいくらでも時間を節約できる。

(6) 馬鹿とはさみは使いよう。

「考え方／やり方によって」という意味。(3)は「R-ようひとつで」のような形で、それだけで後のことが決まるという意味を表す。後半の部分には「どのようにもできる／どうにでもなる」、あるいは「異なる／いろいろだ」などの表現が来る。(6)は「使いようでどうにもなる」の後半

が省略されたもので、ものごとはやり方によってどうにもできるという意味のことわざ。

3 R-ようによっては

(1) 考えようによっては、彼らの人生も幸せだったと言えるのかもしれない。

(2) その仕事はやりようによってはとても素晴らしいものになるだろう。

(3) あの山は、見ようによっては仏像が寝ているように見える。

「考え方／やり方によっては」の意味で、方法や観点によって結果が異なることを言う場合に使う。

【よう$_2$】

[V-よう]

動詞の活用形のひとつで、話し手の意志や推量を表す。「-よう」は一段動詞の連用形に付く(例:見よう、食べよう)。「来る」「する」は「こよう」「しよう」となる。五段動詞の場合は「お段」の音に「-う」をつける(例:行こう、読もう、話そう)。丁寧体は「食べましょう、行きましょう」のように「R-ましょう」となる。

1 V-よう <意向>

意志的な行為を表す動詞を用いて、話し手の行動の意志を表す。また、使用される状況によって、<申し出>、<誘いかけ>、<間接的要求>など、異なる用法をもつ。

　丁寧な言い方では「…しましょう／いたしましょう」などが用いられる。

a V-よう <意志>

(1) 夏休みには海に行こう。

(2) 来年こそはよい成績がとれるように頑張ろう。

(3) 何にもすることないから、テレビでも見ようっと。

(4) はっきり申しましょう。あなたにはこの仕事は無理です。

(5) A：今夜一杯いかがですか。
B：そうですねえ。今日は遠慮しておきましょう。

意志的な行為を表す動詞に用いて、その行為を行おうとする話し手の意志を表す。(3)の「V-ようっと」は、話しことばで用いられる独り言的な言い方。短く「V-よっと」と発音されることもある。

b V-よう <申し出>

(1) 足が痛いのか。おぶってやろう。

(2) 忙しいのなら、手伝ってあげよう。

(3) その荷物、お持ちしましょう。

(4) 切符は私が手配いたしましょう。

(5) 駅までお送りしましょう。

相手のために話し手が何かすることを申し出るのに用いる。相手の利益になる行為を話し手が相手のためにしようとするもの。謙譲表現は(3)～(5)のように「…いたしましょう」や「お…しましょう／いたしましょう」となる。

c V-よう <誘いかけ>

（1）君もいっしょに行こうよ。

（2）一度ゆっくり話し合おう。

（3）今夜は飲み明かそうよ。

（4）お待たせしました。では出かけましょう。

聞き手も自分といっしょに行動するように誘いかけるのに用いる。bの＜申し出＞では、行為を行うのが話し手だけなのに対し、＜誘いかけ＞は、聞き手も話し手と共に行動するよう誘いかける用法である。

d V-よう ＜呼びかけ＞

（1）横断する時は左右の車に注意しよう。

（2）飲酒運転は絶対に避けよう。

（3）食事の前には手を洗いましょう。

（4）動物にいたずらしないようにしましょう。

複数の人々に「…する／しないようにしよう」とある行動をとる(とらない)ように呼びかけるのに用いる。多くの人の目に触れるポスターや、たれ幕などの標語でよく用いられ、人々にそれに従うように呼びかける言い方。

e もらおう／V-てもらおう

（1）ビールをもう一本もらおう。

（2）あんたには死んでもらおう。

（3）ちょっと警察署まで来ていただきましょう。

「(V-て)もらおう／いただこう」の形で、間接的に聞き手に行動を要求するのに用いる。「ビールをください」「死んでくれ」「来てください」のような依頼表現と似ているが、「(V-て)もらおう」のほうが話し手の要求を一方的に押し付けるニュアンスが強い。社会的に上位の人物や、職業上の権威をもつ人物などでないと使いにくい。

2 V-よう ＜推量＞

話し手の推量を表す「だろう」のやや古めかしい言い方。書きことば的。「よかろう／寒かろう」のようにイ形容詞の「A-かろう」もこれと同様の用法である。話しことばでは「だろう(と思う)」「でしょう」などを使う。

a V-よう

（1）場合によっては延期されることもあろう。

（2）この点については次のようなことが言えよう。

（3）午後からは全国的に晴れましょう。

（4）山沿いでは雪になりましょう。

話し手の推量を表す。意志を表さない「ある」「なる」や、「言える」「できる」「考えられる」「あり得る」のような可能の意味を表すものが用いられることが多い。否定形は「V-まい」となる。

書きことば的で、古めかしい言い方。話しことばでは、「だろう」を使う。「V-ましょう」は「V-よう」の丁寧形で、昔の天気予報などで用いられたが、最近では、「でしょう」が使われる。

b V-ようか

（1）結論としては、次のようなことが言えようか。

（2）こんなひどいことをする人間がこの世にあろうか。

（3）こんなに貧しい人達をどうして放っておけようか。

（4）そんな馬鹿げたことがありえましょうか。

「だろうか」の書きことば的表現。疑問や反語を表す。（2）～（4）は反語の例で、「…だろうか。いやそうではない」と解釈できる。普通体が用いられる方が多い。

3 V-ようか ＜意向＞

動詞の意向形「V-よう」に疑問の「か」がついたもので、話し手自身の意志に不確かな部分があったり、聞き手の意向を問うような場合に用いる。基本的な用法は「V-よう」と同様だが、「か」が付くことによって疑い・問いかけの意味が加わっている点が異なる。

a V-ようか ＜意志＞

（1）どうしようか。

（2）昼ご飯は何にしようかな。

（3）行こうか、それともやめておこうか。

（4）私の考えていること、白状しちゃおうか。

（5）こんな仕事やめてしまおうかしら。

（6）これからどうして暮らしていこうか。

話し手がその行為をしようかどうか迷ったり、意志が決まらないでいる状態を表す。「か」以外に「かな」「かしら」が付くこともある。「かな」「かしら」は、独り言的な表現なので、丁寧体と共には用いられにくく、「ましょうかな／ましょうかしら」などとは言わないのが普通。

b V-ようか ＜申し出＞

（1）君の代わりに僕がやろうか。

（2）荷物、僕が持とうか。

（3）何かお手伝いしましょうか。

（4）いいこと教えてあげましょうか。

上がり調子、下がり調子のどちらのイントネーションでも用いるが、上がり調子のときは問いかけの気持ちが強まる。

c V-ようか ＜誘いかけ＞

（1）結婚しようか。

（2）何時に待ち合わせしようか。

（3）どこかで食事しましょうか。

（4）いっしょに海外旅行しましょうか。

聞き手も話し手と一緒に行動しようという誘いかけを問いかけるのに用いる。下がり調子のイントネーションで発せられることが多いが、上がり調子のときは問いかけの気持ちが強まる。

d もらおうか／V-てもらおうか

（1）お茶を一杯もらおうか。

（2）これ、コピーしてもらおうか。

（3）君には、しばらく席をはずしていただきましょうか。

（4）A：もうすぐ、帰ると思います。
　　B：じゃ、ここで待たせてもらいましょうか。

間接的に聞き手に行動を要求するのに用いる。「か」が付くことによって、たった

今、話し手がそのように考えついたという意味やためらいの気持ちが加わるので、それがない場合より一方的な要求の意味が少しやわらげられる。普通、社会的に上位の人物が目下に対して使う。

4 V-ようが

「V-ても」の書きことば的な表現で「どのような行動をとっても／どのような状況であっても」という意味を表す。後ろにはそれにかかわらず成立することがらや決意・要求や「自由だ／勝手だ」などの評価の表現が続く。「V-ようと」とも言いかえられる場合が多いが、「ても」とは言いかえられないことがある。

a V-ようが

（1）どこで何をしようが私の勝手でしょう。
（2）人になんと言われようが、自分の決めたことは実行する。
（3）彼がどうなろうが、私の知ったことではない。

前のことがらに拘束されずに後のことがらが成立することを表す。後半には意志・決意や「自由だ／勝手だ」のような評価の表現が用いられる。

b V-ようが V-ようが

（1）出掛けようが家にいようが、あなたの自由です。
（2）雨が降ろうがやりが降ろうが、試合は決行します。
（3）みんなに笑われようがバカにされようが、気にしない。

正反対、あるいは類似の意味のことがらを重ねて述べ、「何が起こっても／どのようなことをしても」という意味を表す。用法は上のaと同様。

c V-ようが V-まいが

（1）あなたが出席しようがしまいが、私は出席します。
（2）勉強をやろうがやるまいが私の勝手でしょう。
（3）パーティは参加しようがしまいが、皆さんの自由です。

同じ動詞の肯定と否定の意向形が用いられ、「どちらの行動をとったとしても」という意味を表す。「…してもしなくても」のかたい言い方。

5 V-ようじゃないか

（1）一緒に飲もうじゃないか。
（2）みんなでがんばろうじゃないか。
（3）よし、そんなにおれと喧嘩したいのなら、受けて立とうじゃないか。
（4）今夜は、語り明かそうではありませんか。

意志的な行為を表す動詞に付いて、自分の意志を強く表明したり、相手に一緒に行動するよう誘いかけるのに用いる。「V-ようか」よりも相手に対する働きかけの意味が強く、主に男性が用いる。女性は普通「…ましょう」を使う。丁寧な形は「…ようではありませんか／ないですか」となる。

6 V-ようと

「V-ても」の書きことば的な表現で「どのような行動をとっても／どのような状況であっても」という意味を表す。後半にはそれにかかわらず成立することがらや「自由だ／勝手だ」などの評価の表現が続く。「V-ようが」と言いかえできる場合が多いが、「ても」とは言いかえられないことがある。

a V-ようと

（1）なにをしようと私の自由でしょう。
（2）どこへ行こうとあなたの勝手です。
（3）どんなに馬鹿にされようと腹をたてるでもなく彼はひたすら働いている。

前のことがらに拘束されずに後のことがらが成立することを表す。後半には「勝手だ／自由だ／関係ない」といった意味の表現が来る。

b V-ようと V-ようと

（1）努力しようと怠けようと結果がすべてだ。
（2）あなたが泣こうとわめこうと、僕には関係ない。
（3）行こうとやめようと私の勝手だ。
（4）遊ぼうと勉強しようとお好きなようにしてください。
（5）煮て食おうと焼いて食おうとご自由に。
（6）駆け落ちしようと心中しようと勝手にしろ。

正反対、あるいは類似の意味のことがらを重ねて述べ、「何をしてもかまわない／自由だ」といった意味や、どのような行動をとった場合でも、それと無関係に後のことがらが成立することを表す。

c V-ようと V-まいと

（1）行こうと行くまいとあなたの自由だ。
（2）たくさん食べようと食べまいと料金は同じだ。
（3）君が彼女に会おうと会うまいと僕には関係のないことだ。

「…してもしなくても」という意味を表す。

d V-ようとも

（1）皆にどんなに反対されようとも決めたことは実行する。
（2）たとえどんなことが起ころうとも、彼からは一生離れない。
（3）どんなに脅かされようとも、彼は毅然とした態度をくずさなかった。
（4）いかに富に恵まれようとも、精神が貧しくては幸せとは言えない。

「V-ようと」に「も」がついたもので、「V-ても」の書きことば的な言い方。意味・用法は「も」がつかない場合と同様だが、こちらのほうが少し古めかしいニュアンスをもつ。「(たとえ)どんなに／いかに」などを伴うことが多い。

7 V-ようとおもう

（1）お正月には温泉に行こうと思う。
（2）来年はもっと頑張ろうと思う。

（3）今夜は早く寝ようと思っている。

（4）今の仕事を辞めようかと思っている。

（5）外国に住もうとは思わない。

（6）あなたは一生この仕事を続けようと思いますか。

意志的な行為を表す動詞を受けて、話し手の予定や意志を表すのに用いる。疑問文は聞き手の意志を問う表現となる。また、(4)の「かと思う」は、話し手に迷いやためらいがあることを表す。「V-ようと(は)思わない」はそのような意志が話し手にないことを表す。

「つもりだ」と似ているが、「つもりだ」は第三者の意志を表すことができる点で異なる。

(正) 山田さんは留学するつもりだ。

(誤) 山田さんは留学しようと思う。

なお、「V-ると思う」は話し手の意志ではなく推量を表すため、意志を表したい場合は使えず、「V-ようと思う」を使わなければならない。

(誤) 私は東京へ行くと思う。(意志の表現としては誤り)

(正) 私は東京へ行こうと思う。

8 V-ようとする

a V-ようとする <直前>

（1）時計は正午を知らせようとしている。

（2）長かった夏休みもじきに終わろうとしている。

（3）日は地平線の彼方に沈もうとしている。

（4）上り坂にさしかかろうとする所で車がエンストを起こしてしまった。

（5）お風呂に入ろうとしていたところに、電話がかかってきた。

動作や変化が始まったり終わったりする「直前・寸前」という意味を表す。「始まる」「終わる」などの、人間の意志に関わらない無意志的な動詞が使われるのが典型的だが、「V-ようとするところ」のような文型では、意志的な動詞も使われる。無意志的な動詞が使用される場合は、文学や詩的な表現のことが多い。

b V-ようとする <試み>

（1）息子は東大に入ろうとしている。

（2）彼女は25歳になる前に何とか結婚しようとしている。

（3）いくら思い出そうとしても、名前が思い出せない。

（4）棚の上の花びんをとろうとして、足を踏みはずしてしまった。

（5）本人にやろうとする意欲がなければ、いくら言っても無駄です。

（6）寝ようとすればするほど、目がさえてきてしまった。

意志的な行為を表す動詞を受けて、その動作行為を実現しようと努力したり試みたりすることを表す。

c V-ようと(も/は)しない

（1）うちの息子はいくら言っても勉強をしようとしない。

（2）隣の奥さんは私に会っても挨拶ひとつしようとしない。

（3）その患者は食べ物を一切うけつけようとしない。

（4）声をかけても振り向こうともしない。

（5）彼女はこの見合い話をおそらく承諾しようとはしないだろう。

意志的な行為を表す動詞を受け、その動作や行為を行おうとする意志がないことを表す。「も」が間に入った「V-ようともしない」は、「...しようとさえしない」という、否定を強調する言い方。(5)のように「は」が間に入ることもある。

9 V-ようとはおもわなかった

（1）こんなことになろうとは思わなかった。

（2）被害がこれほどまで広がろうとは、専門家も予想しなかった。

（3）息子が、たった一度の受験で司法試験に合格しようとは夢にも思わなかった。

（4）たったの五日で論文が完成しようとは誰一人想像しなかった。

「なる」のような、人間の意志に関わらないことがらを表す無意志的な動詞を受けて、「そのようになるとは予測しなかった」という意味を表す。(3)(4)の「合格しよう」「完成しよう」は、「合格/完成できる」「合格/完成することになる」のような、自然にそうなるという意味を表しており、話し手の意志を表すものではない。後に続く動詞は、「思う」以外には、「予想/想像する」などの動詞が、いつも「-なかった」の形で用いられる。書きことば的。

10 V-ようにも V-れない

（1）頭が痛くて、起きようにも起きられない。

（2）まわりがうるさくて、落ち着いて考えようにも考えられない。

（3）風が強すぎて走ろうにも走れない。

（4）雨が降っているので、外で遊ぼうにも遊べない。

意志的な行為を表す動詞に付いて、「...しようと思ってもできない」という意味を表す。前後には同じ動詞が使われる。そうしたいという強い希望があるにもかかわらず、それを不可能にする状況があるような場合に使われることが多い。

【ようするに】

（1）要するに、日本は官僚型政治だ。

（2）いろいろ理由はあるが、要するに君の考えは甘い。

（3）要するに看護婦さんが足りないのだ。

（4）≪前にいろいろ説明したあとで≫要するに、私が言いたいことはこれに尽きる。

（5）≪相手の話をさえぎって≫要するに、君の考えはお決まりのものだね。

（6）要するに、君は何が言いたいのだ。

これまで述べてきたことを要約して、自分の結論をいう場合や、相手の結論を質問したり、確認するような場合に用いる。個人の意見を含まない自然の成り行きの結果を述べる文での使用には適さない。この場合は「結局」などを使う。書きことば的。

（誤）健闘したが、要するに日本チームは負けてしまった。

（正）健闘したが、結局日本チームは負けてしまった。

【ようだ$_1$】

［Nのようだ］

［A／V　ようだ］

ナ形容詞の活用をし、連用形、連体形は「ように」「ような」となる。

1 …ようだ ＜比況＞

a …ようだ

（1）この雪はまるで綿のようです。

（2）彼女の心は氷のように冷たい。

（3）男は狂ったように走り続けた。

（4）赤ん坊は火がついたように泣き出した。

（5）あたりは、水を打ったように静まりかえっている。

（6）新製品は面白いようによく売れた。

（7）6月が来たばかりなのに真夏のような暑さだ。

（8）会場は割れるような拍手の渦につつまれた。

（9）身を切るような寒さが続いている。

ものごとの状態・性質・形や、動作の様子を、本来はそれと異なる他の何かにたとえて表現するのに使う。同類の似た性質のものごとにたとえる場合だけでなく、全く別の架空のものにたとえる場合もある。名詞や動詞に付くことが多いが、まれに（6）のようにイ形容詞に付くこともある。しかし、ナ形容詞に付くことはない。また、次のように「あたかも」「いかにも」「さながら」「まるで」「ちょうど」などの、たとえの意味を添える副詞を伴うこともある。

（例）町はすっかりさびれてしまって、まるで火が消えたようだ。

（例）家族が一堂に揃い、あたかも盆と正月がいっしょに来たようだ。

慣用的に固定化した表現が多い。慣用的な表現はこのほかに「雲をつかむような話／竹を割ったような性格／血のにじむような努力／手が切れるような新札／飛ぶように売れる／目を皿のようにして探す」などがある。

話しことばでは「みたいだ」をよく使う。また、書きことばでは「ごとし」が使われることもある。

b V-る／V-た　かのようだ

（1）彼はなにも知らなかったかのように振る舞っていた。

（2）父はあらかじめ知っていたかのように、平然としていた。

（3）本当は見たこともないのに、いかにも自分の目で見てきたかのように話す。

（4）極楽にでもいるかのような幸せな気分だ。

（5）犯人は事件のことを初めて聞いたかのような態度をとった。

（6）あたり一面霧に包まれ、まるで別世界にいるかのようだ。

動詞の辞書形、タ形を受け、実際はそうでないのに、そうであるかのように振る舞ったり、感じたりする様子を表す。事実と矛盾したり、仮想的なことがらをたとえに挙げて言う場合が多い。

2 …ような／…ように

a …ように ＜例示＞

（1）あの人のように英語がペラペラ話せたらいいのに。

（2）ニューヨークのように世界中の人々が住む都市では、各国の本格的な料理を味わうことができる。

（3）母親が美人だったように、娘たちもみな美人ぞろいだ。

（4）私が発音するようにあとについて言ってください。

（5）先生がおっしゃったようにお伝えしておきました。

「XようにY」という形で、Yで述べることがらと性質や内容、方法などの面で一致する具体的な人物や事物を例として挙げるのに用いる。（4）は「動作を真似して」という意味、（5）は「とおりに」で言いかえられる。

＜比況＞を表す「ようだ1」が、本来それとは異なる別のことがらを「まるでXのように」とたとえる表現であるのに対し、この用法は、Yと同じ性質や内容をもつものの具体的な例としてXを取り上げる用法である。しかし、この二つの用法は連続しており、はっきりと区別できない場合もある

b …ようなN ＜例示＞

（1）風邪をひいたときは、みかんのようなビタミンCを多く含む果物を食べるといい。

（2）あなたのようなご親切な方にはなかなか出会えません。

（3）これはどこにでもあるようなものではない。

（4）彼はあなたが思っているような人ではない。

（5）このまま放っておくと、取り返しがつかないようなことになりかねない。

（6）これを食べても死ぬようなことはありません。安心してください。

（7）薬を飲んでもよくならないような場合は医者に相談してください。

後続の名詞の表す具体的内容を例として示すのに用いる。例えば「みかんのような果物」では、後続の名詞は前の名詞が表すものより上位の概念を表す。節を

受ける場合は「ような」がなくても文は成り立つが、その有無で意味に違いが生じる。例えば(7)から「ような」を除いて「薬を飲んでもよくならない場合」と言えば、そのような特定の場合だけに限定して言う表現だが、「薬を飲んでもよくならないような場合」と言えば、「これ以外にもいろいろな場合があるが、例えばそのような場合」という意味である。

c …ように <前置き>

(1) ご存じのように、日本は人口密度の高い国です。

(2) あなたがおっしゃっていたように、彼は本当に素敵な方ですね。

(3) すでに述べたようにアフリカの食糧不足は深刻な状況にある。

(4) ことわざにもあるように、外国に行ったらその国の習慣に従って暮らすのが一番である。

(5) あのにこにこした表情が表しているように、彼はとても明るい性格の人です。

前に述べられたことがらや既知の事実と、これから述べることがらが一致するものだということを表す。後で説明を行う場合の前触れをするのに用いる。「とおり」で言いかえができる。

d つぎのように/いかのように

(1) 結果は次のようにまとめることができる。

(2) 中には以下のような意見もあった。

(3) 本稿の結論をまとめれば、次のようになる。

(4) 以下で示すように、我が国の出生率は下がる一方である。

あらかじめ予告しておいてから、後で具体的な内容を示すのに用いる。縦書き文章の中で使うときは「右のように」「左のように」となることもある。

【ようだ$_2$】

[Nのようだ]
[Naなようだ]
[A/V ようだ]

名詞やナ形容詞は「Nの/Naなようだ」のほかに、「N/Naだったようだ」「N/Naじゃないようだ」などの形もある。

1 …ようだ <推量>

(1) あの人はこの大学の学生ではないようだ。

(2) どうやら君の負けのようだね。

(3) 先生はお酒がお好きなようだ。

(4) こちらの方がちょっとおいしいようだ。

(5) どうも風邪を引いてしまったようだ。

(6) あの声は、誰かが外で喧嘩しているようだ。

(7) ざっと見たところ、最低500人は集まっているようだ。

ものごとについて話し手がもつ印象や推量的な判断を表す。ものごとの外見や自分の感覚について「何となくそんな感じがする/そのように見える」というふうに、その印象や外見をとらえて表現するもので、話し手の身体感覚・視覚・聴覚・味覚などといったものを通してとらえられた印象や様子を述べたり、そのような観察を総合して話し手が推量的な判断を述べるような場合に用いる。

すでに述べたことがらを受ける場合は次のように「そのようだ」「そんなようだ」が使われる。

(例) A:雨が降ってきましたね。
B:ええ、そのようですね。

これは、婉曲を表す用法で、「ようだ」を用いないで、「そうですね」といってもよいような例である。このように、「ようだ」は断定を避け相手に対して控えめに表現するときに用いられ、「どうやら」「どうも」「何となく」「何だか」などの副詞を伴うことが多い。くだけた話しことばでは「みたいだ」が用いられる。

2 …ようなきがする
…ようなかんじがする

(1) ちょっと期待を裏切られたような気がする。

(2) もう他に方法はないような気がする。

(3) あまりほめられるとちょっとくすぐったいような感じがする。

(4) 何となく不吉なことが起こるような予感がした。

(5) 運動したら、何だか体が軽くなったような感じだ。

「ような」の後に「気」「感じ」「予感」などの名詞が続いて、「ようだ」で終わる場合とほぼ同様の意味を表す。

3 …ように おもう/かんじる

(1) こちらのほうがお似合いになるように思います。

(2) 心なしか彼の表情が陰ったように思われた。

(3) あの二人はとても仲がいいように見える。

(4) その日の彼は様子がいつもと違うように感じた。

(5) 今年の冬は去年より、少し暖かいように感じられる。

「ように」の後に「おもう」「おもわれる」「みえる」「感じる」など思考や感覚を表す動詞が続き、感覚・印象の内容を述べたり自分の主張を婉曲的に述べたりするのに用いる。

4 …ようでは

(1) こんな問題が解けないようではそれこそ困る。

(2) きみが行かないようでは誰も行くわけがない。

(3) こんなことができないようでは、話にならない。

(4) こんな質問をするようでは、まだまだ勉強がたりない。

「そのような様子では」という意味。後ろに期待に反することがらや、「困る/だめだ」のようなマイナス評価の表現を伴う。

5 …ようで(いて)

（1） 一見やさしいようで、実際やってみると案外むずかしい。

（2） ふだんはおとなしいようでいて、いざとなるとなかなか決断力に富んだ女性です。

（3） 一見、内気で温厚なようだが、実は短気で、喧嘩っぱやい性格の男だ。

「見かけではこのような印象だが」という意味を表す。「一見／見かけは…ようで、実際は…」などとなることが多く、実際の性質は異なっていることを表す。「…ようだが」と言うこともある。

6 …ようでもあり
…ようでもあるし

（1） 僕の言ったことが彼には分かったようでもあり、全く理解していないようでもある。

（2） この会社での30年間は、長かったようでもあり、あっと言う間だったような感じもします。

（3） 彼は本当は結婚したい気持ちがあるようでもあるし、まったくその気がないようでもある。

正反対の内容や、矛盾する内容のことがらを並べ上げて、意味的に対立したり、矛盾する感覚・印象が話し手の中に共存することを表す。「…ようでもあるし」は書きことば的。

7 …ような…ような

（1） そのようなことがあったようななかったような…

（2） 分かったような分からないような中途半端な感じだ。

（3） 悲しいような懐かしいような複雑な気持ちである。

上の6と類似の用法だが、こちらのほうが話しことば的。

8 …ようなら／…ようだったら

（1） この薬を飲んでも熱が下がらないようなら、医者と相談した方がよいでしょう。

（2） 遅れるようだったら、お電話ください。

（3） 明日お天気がよいようでしたら、ハイキングに行きませんか。

「ようだ」の条件を表す形で、「そのような場合は」という意味を表す。書きことばでは、「…ようであれば」も使われる。

【ような$_1$】

（1） 6月が来たばかりなのに真夏のような暑さだ。

（2） 会場は割れるような拍手の渦につつまれた。

→【ようだ$_1$】

【ような$_2$】

（1） ちょっと期待を裏切られたような気がする。

（2） あそこに置いたような置かなかったような、記憶がはっきりしない。

→【ようだ$_2$】

【ように$_1$】

（1） あの人のように英語がペラペラしゃべれるようになりたい。

（2） 私が発音するようにあとについて言って下さい。

→【ようだ$_1$】

【ように$_2$】

（1） こちらのほうがお似合いになるように思われます。

（2） 心なしか彼の表情が陰ったように思われた。

→【ようだ$_2$】

【ように$_3$】

1 V-る／V-ない よう(に)
＜目的＞

（1） 後ろの席の人にも聞こえるように大きな声で話した。

（2） 子供にも読めるよう名前にふりがなをつけた。

（3） 赤ん坊を起こさないようにそっと布団を出た。

（4） 忘れないようにノートにメモしておこう。

前後に動詞を伴い、「そのような状態・状況を成立させるために…する／しないように…する」という意味を表す。「に」は省略されることもある。「ように」の前には、「なる」「できる」など人間の意志に関わらない無意志的な行為を表す動詞や可能を表す「V-れる」、あるいは動詞の否定形など、状態的な意味を表す表現が用いられることが多く、後の節には話し手の意志的な行為を表す動詞が続く。前後の主語は（1）〜（3）のように異なる場合と（4）のように同じ場合がある。

なお、前後の主語が同一で前の動詞も意志的な動作を表す場合は、「ために」を用いるのが普通。

（誤） 息子が家で仕事ができるために父親は家を改築した。（異主語・非意志的）

（正） 息子が家で仕事ができるように父親は家を改築した。（異主語・非意志的）

（正） 家で仕事をするために家を改築した。（同一主語・意志的）

2 V-る／V-ない よう(に)
＜勧告＞

（1） 忘れ物をしないようにしてください。

（2） 時間内に終了するようお願いします。

（3） 風邪をひかないようご注意ください。

（4） 私語は慎むようにしなさい。

（5） 集合時間は守るように。

（6） 授業中はおしゃべりしないように。

聞き手に対する忠告や勧告を表す表

現。後半には「しなさい／してください」や、「お願いします」などの動詞が続くが、省略されて「ように」で終わることもある。また、「ように」の「に」は省略が可能だが、(5)(6)のように「ように」で文が終わる場合は省略されないのが普通。「V-ないように」の形で、否定的な内容の忠告・勧告を表すことが多い。

3 V-る／V-ない　よう(に)

＜祈願＞

(1) 息子が大学に合格できるよう神に祈った。
(2) 現状がさらに改善されるよう期待している。
(3) ≪年賀状≫新しい年が幸い多き年でありますよう祈っております。
(4) ≪病気見舞の手紙≫早く全快なさいますよう、祈念いたしております。
(5) どうか合格できますように。
(6) すべてがうまくいきますよう。
(7) あしたは雨が降りませんように。

自分や他者にとって、望ましいことを祈ったり希望する表現。「ように」の後には「祈る」「祈念する」「念じる」「望む」「願う」「希望する」「期待する」などの動詞が用いられる。(5)(6)のように、「…よう(に)」で終わることもある。その場合は「…ように」の前に丁寧体の表現が用いられるのが普通。スピーチや手紙の締めくくりなどでよく用いられる。

4 V-る／V-ない　よう(に)いう

(1) すぐ家に帰るように言われました。
(2) これからは遅刻しないように注意しておきました。
(3) 戻りましたら、家に電話するようお伝えください。
(4) 隣の人に、ステレオの音量を下げてもらうように頼んだ。

後半に「言う」「伝える」などの伝達を表す動詞を伴い、要求内容を間接的に引用するのに使う。直接的な引用の場合は、次のように「命令や依頼の表現＋と＋伝達の動詞」の形をとる。

(例) 「すぐ帰れ」と言った。
(例) 「ステレオの音量を下げてください」と頼んだ。

5 V-る／V-ない　ようにする

(1) 私は肉を小さく切って、こどもにも食べられるようにした。
(2) 大きな活字を使い、老人にも読みやすいようにする。
(3) できるだけ英会話のテレビを見るようにしている。
(4) 彼女の機嫌を損ねることは言わないようにした。
(5) 試験日には、目覚まし時計を2台セットして寝坊しないようにしよう。
(6) 油ものは食べないようにしている。

行為や状況を成立させることを目指し

て努力する／心掛ける／配慮する、といった意味を表す。(4)〜(6)のように否定形を使った場合は成立させないことを目指して、という意味になる。(3)や(6)の「…ようにしている」は、そうすることを習慣としているという意味。たいていの場合「ように」の前には動詞が用いられるが、(2)のように「V-やすい」が来ることもある。この場合は「読みやすくする」とも言える。

6 V-る／V-ない　ようになる

(1) 日本語が話せるようになりました。
(2) 眼鏡をかければ、黒板の字が見えるようになります。
(3) 赤ちゃんはずいぶん活発に動くようになりました。
(4) 隣の子供は最近きちんとあいさつするようになった。
(5) 注意したら文句を言わないようになった。

動詞の辞書形を受けて、不可能な状態から可能な状態に、あるいは実行されない状態から実行される状態に変化することを表す。(1)のように可能を表す「V-れる」が使われることが多い。(5)のように否定形に続く場合は、実行しない状態への変化を表す。この場合「言わなくなった」とも言える。

【ようやく】

1 ようやく

[ようやく　V-た／V-る]
[ようやくNだ]

(1) 冬の長い夜も終わりに近づき、ようやく東の空が白み始めた。
(2) 降り続いた雨もようやく上がって、陽が差し始めた。
(3) 冬の朝は遅い。7時頃になってようやく陽が昇る。
(4) 子供たちも、ようやく一人前になって、それぞれ独立していった。
(5) 会議も終わる頃になって、彼はようやく現れた。
(6) 水道とガスは、震災から3カ月たって、ようやく復旧した。
(7) 何度も計画を変更して、ようやく社長の了解を得ることができた。
(8) 来年は娘もようやく卒業だ。

(1)〜(3)のように、自然現象について使われて、少しづつ変化してある状態になった場合に使う。また、(4)〜(8)のように、長い時間がかかったり、途中でいろいろなことがあった後に、事態に変化が起きたり、話し手の予想や期待が実現した場合に使う。

話し手にとって望ましい状態になった時に使うことが多いが、話し手が特に待ち望んでいたとは限らない。待ち望んでいたことが実現して「うれしい」「ほっとした」ことを表現したい場合には「やっと」を使うことが多い。

2 ようやく

時間や労力をかけて実現する様子を表す。似た表現に「どうにか」「なんとか」

「やっと」「かろうじて」「からくも」がある。使い分けについては「やっと1」を参照。

a ようやくV-た

(1) タクシーを飛ばして、ようやく時間に間に合った。

(2) 試合は延長戦にもつれこんだが、一点差でようやく勝つことができた。

(3) 何時間にもわたる手術の結果、ようやく命をとりとめた。

「危ないところだったが、…した」という意味を表す。良い結果が得られたことを述べるのに用いる。「悪い事態を避けることができた」という場合には、「かろうじて…なかった」を使う。

(正) {ようやく／やっと／かろうじて} 約束の時間に間に合った。

(誤) 危ないところだったが、{ようやく／やっと} 大事故にはならなかった。

(正) 危ないところだったが、かろうじて大事故にはならなかった。

b ようやくV-ている

(1) 世界は、微妙なかけひきで、ようやく軍事的な均衡を保っている。

(2) 両親から援助を受けて、ようやく生計を立てている。

(3) 病人は、人工呼吸器を使って、ようやく息をしているという状態だ。

「たいへんだが、なんとか…している」という意味を表す。「やっと」を使った場合ほど切迫した感じはない。

c ようやくV-るN

(1) 家と家のすき間は、人一人がようやく通れる広さしかない。

(2) 人に支えてもらって、ようやく歩ける状態だ。

(3) 本人は気にしているが、「ここにある」と言われて、ようやく気が付く程度の傷で、たいしたことはない。

(4) 鍵は、大人が背伸びをして、ようやく手が届く高さに隠してあって、子供にはとることができない。

可能を表す表現といっしょに使われて、「やっと／なんとか／どうにか／かろうじて…できる程度のN」という意味を表す。「難しいけれども、ぎりぎりなんとかできる。」という場合に使う。

【よかった】

1 V-てよかった

(1) あ、雨だ。かさを持ってきてよかった。

(2) 財布、見つかってよかったですね。

(3) 今日はお天気になってよかった。おかげで予定どおり遠足に行ける。

(4) 友達もできたしいろんな経験もできたし、本当に日本に来てよかったと思っている。

(5) あの映画、見に行かなくてよかったよ。全然おもしろくなかったんだって。

動詞の表す行為や出来事が成立したのをいいことだと評価していることを表す。「よかった」は過去の形だが、表しているのは現在の気持ちである。

2 V-ばよかった

a V-ばよかった

(1) しまった。あいつの電話番号をメモしておけばよかった。

(2) あの服、買っておけばよかった。もう売り切れてしまったんだって。

(3) 野菜がしなびている。冷蔵庫に入れておいたらよかった。

(4) 一人で悩んでいないで、もっと早く相談しに来ればよかった。

(5) 田中さんも誘ってあげたらよかったね。

「V-ばよかった」「V-たらよかった」の形で、実際にはしなかったことに関して、すべきだったと後悔する気持ちを表す。

b V-なければよかった

(1) こんな服、買わなければよかった。派手すぎてとても着られない。

(2) こんなごちそうが出るんなら、さっき間食しなければよかった。

(3) あいつ、彼女が結婚することを知らなかったのか。それなら言わなかったらよかった。

(4) きのうはあんなに飲まなければよかった。二日酔いで頭が痛い。

「V-なければよかった」「V-なかったらよかった」の形で、してしまったことに関して、すべきではなかったと後悔する気持ちを表す。

3 V-ばよかったのに

a V-ばよかったのに

(1) 昨日のパーティーにあなたも来ればよかったのに。楽しかったよ。

(2) そんなにやりたくないのなら「いやだ」と言えばよかったのに。

(3) 今日花子も誘ったらよかったのに。あの人このごろ暇だって言ってたよ。

(4) 田中じゃなくて君が立候補したらよかったのに。田中じゃたぶん勝てないよ。

(5) 行きたくなかったのなら、断ればよかったのに。

「V-ばよかったのに」「V-たらよかったのに」の形で、聞き手が実際にはしなかったことに関して、すべきであったと残念がったり非難したりする気持ちを表す。

b V-なければよかったのに

(1) そんなこと言わなければよかったのに。

(2) あんな人に会いに行かなければ

ばよかったのに。

（3）風邪をひいているのなら、スキーなんかしなかったらよかったのに。

「V-なければよかったのに」「V-なかったらよかったのに」の形で、聞き手がしてしまったことに関して、すべきでなかったと残念がったり非難したりする気持ちを表す。

【よかろう】

（1）のんびりしたいのなら、観光地に行くよりは温泉の方がよかろう。

（2）どうせみんな時間どおりには集まらないのだから、少しぐらい遅れて行ってもよかろう。

（3）医者には止められているが、少々ならよかろうと思ってビールを1杯飲んだのが間違いだった。

（4）どうせすぐに戻ってくるんだから、車はここに止めておけばよかろう。

（5）荷物を運ぶのは若い者に任せたらよかろう。

（6）どうしても行きたければアマゾンでもどこでも行くがよかろう。ただし、何が起こっても私は知らないぞ。

「よい」の推量の形で「いいだろう」「かまわないだろう」の意味を表す。（6）のように、「…がよかろう」の形で許可として用いられることもある。話しことばでは若い人はほとんど使わない。

【よぎなくさせる】

→【をよぎなくさせる】

【よぎなくされる】

→【をよぎなくされる】

【よく】

1 よく ＜頻度＞

（1）彼はこの店によく来る。

（2）私は仕事でよく中国へ行くが、まだ一度も万里の長城に行ったことがない。

（3）若い頃はよく一人で貧乏旅行をしたものだ。

頻度が多いことを表す。しばしば、頻繁に。

2 よく ＜程度＞

（1）最近よく眠れなくて困っている。

（2）おやつは手をよく洗ってから食べるのよ。

（3）次の文章をよく読んで問題に答えなさい。

（4）≪試合の後で監督が選手に≫みんな、よくやった。

（5）≪山の頂上まで登った人に≫よくがんばったね。

程度が十分であることを表す。十分に。満足に。また、（4）（5）のように困難なことを満足にやり遂げた努力をほめるのに用いることもある。

3 よく（ぞ）＜感激＞

（1）よくいらっしゃいました。

（2）そんな大事な秘密をよく私に話してくださいました。

（3）本当にみんな、こんな夜遅くまでよく働いてくれたね。ありがとう。

（4）こんなに遠いところまでよくぞいらして下さいました。

大変なことを私のためにわざわざやってくれてうれしいという感激の気持ちを表す。「てくれる」と一緒に用いられることが多い。

4 よく（も）＜驚き＞

（1）おじいさんの子供の頃なんて、よくもそんな古い写真が残っていたね。

（2）田中さん、よくもあんな早い英語を正確に聞き取れるもんだね。

（3）あんな吹雪の中でよくも無事でいられましたね。どうやって寒さをしのいでいたんですか。

困難なことをやったり起こりそうもないことが起こったりしたことに対する驚きを表す。

5 よく（も）＜非難＞

（1）よくもみんなの前で私に恥をかかせてくれたな。

（2）あなた、よくそんな人を傷つけるようなことを平気で言えるものですね。

（3）あいつ、みんなにあれだけ迷惑をかけておいて、よくも平気な顔で出社できたものだ。

（4）あの人、よく毎日同じもの食べて飽きませんね。おなかがいっぱいになれば味なんてどうでもいいんでしょうね。

（5）あいつ、ふられた彼女に毎晩電話して「やり直そう」って言ってるらしいよ。あんな情けないこと、よくやるよ。

（6）A：お前、すこし運動でもしてやせた方がいいんじゃないか。
　　B：よく言うよ。お前だっていつもごろごろして全然体を動かしていないじゃないか。

迷惑なことやひどいこと、非常識なことなどをすることに対して「どうしてそんなことをするのか」という怒りや非難、あきれ、軽蔑の気持ちを表す。「てくれる」と一緒に用いられた場合は、皮肉の表現。（6）は相手の発話に対して「あなたにそんなことを言う資格はない」という非難を表す。（5）（6）は慣用句的で「よく」の形のみ。

【よそに】

1 Nをよそに ＜無視＞

（1） 弟は親の心配をよそに毎晩遅くまで遊んでいる。

（2） 反則をした選手は、観衆のブーイングをよそに、平然と試合を続けた。

（3） 密室政治という悪評をよそに、また密室での決定がなされた。

（4） 周囲の期待をよそに、彼はせっかく入った一流企業を退職し、小さな店をはじめた。

「心配、噂、非難、批判、期待」など人から向けられる感情や評価を表す名詞を用いて、それを無視して、気にしないで、という意味を表す。後半には意志的な動作が続く。

2 Nをよそに ＜無関係＞

（1） 高速道路の渋滞をよそに、私たちはゆうゆうと新幹線で東京に向かった。

（2） 最近結婚した友達は、最近の海外旅行ブームをよそに、奈良へ新婚旅行に出かけた。

（3） 昨今の不景気をよそに、デパートのお歳暮コーナーでは高額のお歳暮に人気が集まっている。

ある状況を表す名詞を用いて、それに関係なく、わずらわされないで、という意味を表す。

【よほど】

話しことばで強めるときには「よっぽど」となる。

1 よほど

a よほど

（1） こんな大邸宅を建てるなんて、よほどの金持ちに違いない。

（2） よっぽどのことがなければ、彼はここには来ません。

（3） あいつはよほど金に困っているらしい。昨日も友達に昼ごはんをおごってもらっていた。

（4） よっぽど疲れていたんだろう。弟は帰ってくるとご飯も食べずに寝てしまった。

（5） その映画、続けて3回も観たって？ よっぽどよかったんだね。

（6） 泣き言を言わない彼女が愚痴をこぼすとは、よほど仕事がつらかったんだろうと思う。

一般的な基準から見て並の程度ではない様子を表す。ことがらの程度を推量して述べる場合に使う。

b …ほうがよほど

（1） 真夏の日本よりインドネシアの方がよっぽど涼しかった。

（2） こんなに狭くて家賃の高い部屋に住むくらいなら、今の古い部屋の方がよっぽどましだ。

（3） 姉より弟の方がよっぽどよく家事を手伝ってくれる。

（4） 入学試験を受ける兄より母の方がよっぽど神経質になっている。

（5） こんなにつらいのなら死んだほうがよほどましだ。

形容詞・動詞が続く。「（Xより）Yのほうがよほど」の形で二つのことがらを比較して、Yの方がはるかに程度が高いことを表す。Yのことがらの方が好ましい場合が多い。ずっと。

2 よほど V-よう

（1） こんなつまらない仕事、よほど辞めようかと思った。

（2） あいつに失礼なことを言われて腹が立ったので、よほど言い返してやろうかと思ったが、大人げないので黙っていた。

（3） 彼の皿の洗い方があまりにも不器用なので、よっぽど自分でやってしまおうと思ったが、我慢して見ていた。

（4） その講演はあんまりつまらなかったので、よっぽど途中で帰ろうと思ったが、誰も席を立たないのでしかたなく最後まで聞いていた。

「と思った」を伴うことが多く、「…しよう」と強く思うという意味。思うだけでできない状況にある場合に用いられ、後に逆接の節が続くことが多い。

【よもや】

［よもや …ないだろう／…まい］

（1） よもや負けるまいと思われていた選手が予選落ちした。

（2） いくらお金に困っているといっても、よもやサラ金に手を出したりはしていないでしょうね。

（3） あんな雪山の遭難ではよもや助かるまいと思っていたが、彼は奇跡的に助かった。

（4） よもやばれることはないだろうと思っていたのに、母は私の嘘を見抜いていた。

推量表現とともに使って、そんなことはまさかありえないだろうと強く否定する気持ちを表す。

【より】

1 …より（も／は）

［N／V より（も／は）］

（1） 今年の冬は昨年よりも寒い。

（2） このシャツの方がさっき見たのより色がきれいだ。

（3） 休みの日は外へ出かけるよりうちでごろごろしている方が好きだ。

（4） 田中さんの送別会は予想していたよりずっと多くの人が集まってくれました。

（5）やらずに後悔するよりは、無理にでもやってみた方がいい。

（6）仕事は思ったよりも大変だった。

（7）事件の背景は、私が考えていたよりも複雑なようだ。

「XよりもYのほうがZ」「YはXよりもZ」の形で、Xが比較の基準を表す。くだけた話しことばでは次のように「よりか」「それよりか」などの形を使うこともある。

（例）レストランよりか居酒屋の方がリラックスできていいんじゃないかな。

（例）今から外食しに行くのもいいけど、それよりか一緒に買い物に行ってうちで作って食べない?

2 …というより

（1）彼は堅実家というよりけちだと言う方が当たっている。

（2）彼女はきれいというよりはむしろ個性的なタイプで、独特のファッション感覚がある。

（3）彼の書いた英文は、できが悪いというより、むしろもう絶望的だと言った方がいいくらいひどい。

（4）あいつは酒を飲むというより流し込むと言った方がいいような飲み方をする。

（5）こんなパーティーは、楽しいというよりも退屈なだけで、一部の人のためのバカ騒ぎとしか思えない。

あることがらについての表現や判断の仕方を比較するのに用いる。「Xという言い方・見方もできるが、比較すればYという言い方・見方の方が妥当だ」という意味。（2）（3）のように「むしろ」と共に使われることも多い。

3 …よりない

a V-るよりない

（1）どうしても大学に通う気が起きないのなら、もう退学するよりないだろう。

（2）文句を言っても仕方がない。とりあえず今できることを一生懸命やるよりない。

（3）こんな不景気なら、どこでもいいから採用してくれるところに就職するよりなさそうだ。

問題がある状況で、そのことをする以外に解決方法はないという意味を表す。「…しかない」「…以外にない」とも言う。

b V-るよりほか（に／は）ない

（1）今さらあれはうそだったとも言えないし、隠しとおすよりほかにない。

（2）雪はだんだん激しくなってきたが、引き返すこともできないし、とにかく山小屋まで歩くよりほかはなかった。

（3）放っておけばあの地域のリゾート開発は進む一方だし、こうなったら反対運動を起こすよりほかにないと思った。

問題のある状況において、そのことをする以外に解決方法はないという意味を表す。「…しかない」「…以外にない」とも言う。

c …よりほかに…ない

[Nよりほかに…ない]

[V-るよりほかに…ない]

（1）その部屋は静かで、時計の音よりほかに何の物音も聞こえなかった。

（2）田中さんよりほかにこの仕事を任せられる人はいない。

（3）あなたよりほかに頼れる人がいないから、忙しいのを承知でお願いしているのです。

（4）せっかくのお休みで天気もいいのに、うちでテレビを見るよりほかにすることはないのですか。

後ろに否定表現を伴って、「それ以外にない」ということを強調するのに用いる。「…しか…ない」「…以外に…ない」とも言う。

d V-るよりしかたがない

（1）お金がないのなら、旅行はあきらめるよりしかたがないね。

（2）自分の失敗は自分で責任を持って始末するよりしかたがない。

（3）終電が出てしまったので、タクシーで帰るよりしかたがなかった。

（4）あさってからスキーに行きたいのなら、さっさとレポートを書いてしまうよりしかたがないでしょう。

その状況を解決するのには、不本意でもそうするしかないという意味を表す。「…ほかしかたがない」「…以外にしかたがない」とも言う。

【よる】

→【によって】、【によらず】、【により】、【によると】、【によれば】

【らしい】

1 Nらしい

a NらしいN

（1）最近は子供らしい子供が少なくなった。

（2）男らしい男ってどんな人のことですか。

（3）あの人は本当に先生らしい先生ですね。

（4）このところ雨らしい雨も降っていない。

同じ名詞を繰り返してその名詞の表すものの中の典型的なものを表す。

b Nらしい

（1）今日は春らしい天気だ。

（2）弱音を吐くなんて君らしくないね。

（3）彼はいかにも芸術家らしく奇

抜なかっこうで現れた。

（4）彼女が選んだ花束はいかにも彼女らしいやさしい色合いだった。

名詞に付き、そのものの典型的な性質がよく表れていることを表す。

2 …らしい

[N／Na／A／V　らしい]

（1）天気予報によると明日は雨らしい。

（2）新しく出たビデオカメラはとても便利らしい。

（3）みんなの噂では、あの人は国では翻訳家としてかなり有名らしい。

（4）彼はどうやら今の会社を辞めて、自分で会社を作るらしい。

（5）兄はどうも試験がうまくいかなかったらしく、帰ってくるなり部屋に閉じ込もってしまった。

（6）その映画は予想以上におもしろかったらしく、彼は何度もパンフレットを読み返していた。

（7）料理はいかにも即席で用意したらしく、インスタントのものがそのまま並んでいた。

文末に付いて、話し手がその内容をかなり確実度の高いことがらであると思っていることを表す。その判断の根拠は外部からの情報や観察可能なことがらなど客観的なものであり、単なる想像ではない。例えば、（1）は、「雨らしい」と判断したのは、天気予報という情報によるものだということ。（5）は、「試験がうまくいかなかったらしい」と判断したのは「帰ってくるなり部屋に閉じ込もってしまった」という状況からだということ。

「みたいだ」「そうだ」との違いについては「みたいだ2」を参照。

【られたい】

→**【せられたい】**

【られる$_1$】

受身を表す。「V-られる」のVが五段活用の動詞の場合は「行く→行かれる」「飲む→飲まれる」のように、辞書形の末尾をア段の音に変えて「れる」をつける。一段活用の場合は、「食べる→食べられる」のように、語幹「食べ」に「られる」をつける。「来る」は「こられる」、「する」は「される」となる。「V-られる」は一段動詞の活用をする。

1 NがV-られる <直接受身>

（1）この地方ではおもに赤ワインが作られている。

（2）木曜日の会議は3時から開かれることになっている。

（3）この辞書は昔から使われているいい辞書だが、最近の外来語などはのっていない。

（4）昨夜、駅前のデパートで1億円相当のネックレスや指輪が盗まれた。

（5）来月発売される車のカタログを手に入れた。

動作や作用を受けたものを主語にして述べるのに用いる。事実の描写文、報道文などで多く使われる。動作主は特定することができないため、文中に示されないのが普通。

2 NがNにV-られる

a NがNに(よって)V-られる

<直接受身>

（1）漫画週刊誌は若いサラリーマンによく読まれている。

（2）その寺院は7世紀に中国から渡来した僧侶によって建てられた。

（3）このあたりの土地はダイオキシンに汚染されている。

（4）地震後、その教会は地域の住民によって再建された。

（5）その展覧会はフォード財団によって支援されている。

動作や作用を受けたものを主語にして述べるのに用いる。事実の描写文、報道文などで多く使われる。動作主は「Nに」あるいは「Nによって」で示される。おもに物(作品、建築物など)が作り出される場合や、あらたまった言い方のときは「によって」が使われる。

b NがN　に／から　V-られる

<直接受身>

（1）おばあさんが犬にかまれた。

（2）その子は母親にしかられて、泣き出した。

（3）彼女は皆にかわいがられて育った。

（4）森さんは知らない人から話しかけられた。

（5）彼は正直なので、だれからも信頼されている。

（6）夜中に騒いだら、近所の人に注意されてしまった。

動作や作用を受けた人を主語にして述べるのに用いる。二者間かんで起こることを動作主以外の人の視点から述べる言い方。動作主は「Nに」で示すが、動作主から感情・情報・言葉などが与えられる行こう為を表すときは「Nから」も使われる。話し手がかかわる行為の場合は、話し手の視点から述べるために受身が使われることが多い。また、一つの文は一人の人の視点から述べられるのが普通。

（誤）夜中に騒いだら、近所の人が注意した。

（正）夜中に騒いだら、近所の人に注意された。

c NがNにV-られる <間接受身>

（1）忙しいときに客に来られて、仕事ができなかった。

（2）A：日曜日はいかがでしたか。

B：家族でハイキングに行ったんですが、途中で雨に降られましてね。

A：それは大変でしたね。

（3）彼は奥さんに逃げられて、すっかり元気をなくしてしまった。

（4）子どもに死なれた親ほどかわいそうなものはない。

ある事態が生じたことで間接的に迷惑をうける人の立場から述べるのに用いる。「客が来る」、「雨が降る」など自動詞の能動文にそれぞれ対応する。動作主は「Nに」で示され、「Nによって」や「Nから」は使えない。

3 NがNにNをV-られる

a NがNにNをV-られる

<所有者受身>

（1）森さんは知らない人に名前をよばれた。

（2）わたしは今朝、電車の中で足をふまれた。

（3）犯人は警官に頭を撃たれて重傷を負った。

（4）先生に発音をほめられて英語が好きになった。

動作や作用を受けたものの所有者を主語にして述べるのに用いる。あるものに対する行為によって、そのものの所有者が迷惑を受けたり戸惑ったりすることを表すのに使う。所有者に属するもの(名前、足、頭など)は「Nを」の形で表す。これらを主語にすると不自然に感じられる場合が多い。

(誤) 私の足がふまれた。

(正) 私は足をふまれた。

話し手の視点から見て歓迎すべきことは「V-てもらった」などの恩恵を表す表現を用いることが多いが、(4)の「ほめる」のように本来プラスの意味を持つ動詞が受身になるときは、「恥ずかしい」「得意だ」など、なんらかの感情の動きが含意される。

b NがNにNをV-られる

<間接受身>

（1）せまい部屋でタバコを吸われると気分が悪くなる。

（2）夜遅くまで会社に残って仕事をされると、電気代がかかって困る。

（3）次々に料理を出されて、とても食べきれなかった。

（4）台所のテーブルの上に宿題を広げられると晩御飯のしたくができないから、はやくどけなさい。

（5）結婚はおめでたいけど、今あなたに会社をやめられるのは痛手だなあ。

ある事態が生じたことから間接的に迷惑をうける人の立場から述べるのに用いる。「(だれかが)タバコを吸う」「(だれかが)仕事をする」など他動詞の能動文に対応して、そのために話し手が困っていることを表す。動作主は「Nに」で示され、「Nによって」や「Nから」は使えない。動作主は示されないことが多い。

【られる$_2$】

（1）大きすぎて穴から出られなくなった。

（2）そんなに早くは起きられない。

可能を表す。

→【れる$_1$】

【れる$_1$】

可能を表す。「V-れる」のVが五段活用の動詞の場合は、「行く→行ける」「飲む→飲める」のように、辞書形の末尾をエ段の音に変えて「る」をつける。一段活用の場合は、「食べる→食べられる」のように、語幹「食べ」に「られる」をつける。「来る」は「こられる」「これる」になる。また、「する」については「できる」を使う。「V-れる」は一段動詞の活用をする。

Vが五段活用の動詞の場合、可能の「V-れる」は受身の「V-られる」と異なる形になる(例えば可能が「飲める・書ける」、受身が「飲まれる・書かれる」)。一方、一段活用の動詞の場合は可能も受身も同形である(例えば、可能も受身も「食べられる」「起きられる」)。しかし、最近の話しことばでは、可能を表す「V-れる」の「ら」を抜かして「食べれる」「起きれる」と言う人が増えている。また、「NがV-れる」ではなく「NをV-れる」という人も増えている。

1 NはNがV-れる

一般に「NはNがV-れる」の文がよく用いられるが、能力・可能性をもつ者を「Nに」で表して、「NにNがV-れる」となることもある。

a NはNがV-れる <能力>

（1）リンさんはなっとうが食べられますか。

（2）かれにできないスポーツはない。

（3）わたしにかれらの指導ができるだろうか。

（4）読めない漢字があったら、そう言ってください。

（5）この本は読み出したら、やめられない。

（6）どうしてもあの先生の名前が思い出せなくて冷や汗をかいた。

（7）朝6時から練習を開始しますので、起きられたら来てください。

能力や技術、あるいは意志の力によって可能であることを表す。

b NはNがV-れる <可能性>

（1）あの店ではいつも珍しいものが食べられる。

（2）仕事場の人はだれでもそのファックスが使用できる。

（3）この動物園では、子供は無料でイルカのショーが見られる。

（4）わたしが直接話せたらいいのですが、あいにく都合が悪いんです。

（5）両親に言えないことでも、友達になら言える。

（6）辞書は図書館で借り出せないので、ひまなときに調べに行くつもりだ。

（7）昨日は答えが聞けなかったので、きょうもう一度たずねてみま

す。

状況や機会によって可能性があることを表す。「見られる」「見える」は類似の表現だが、「見える」は自然に目に入ってくる場合、「見られる」はそういう状況や機会があって可能であるという違いがある。

(正) 昨夜のスポーツニュースはいそがしくて見られなかった。

(誤) 昨夜のスポーツニュースはいそがしくて見えなかった。

(正) ここから白い建物が見えます。

(誤) ここから白い建物が見られます。

「聞ける」「聞こえる」の場合も同様で、「聞こえる」は自然に耳に入ること、「聞ける」はそういう状況や機会があって可能であるということを表す。

(正) 携帯ラジオをもってきたので、どこでも天気予報が聞ける。

(誤) 携帯ラジオをもってきたので、どこでも天気予報が聞こえる。

(正) どこからか鳥の声が聞こえた。

(誤) どこからか鳥の声が聞けた。

視力、聴力は、「見える」「聞こえる」を用いる。

(例) 生まれたばかりの猫の子は目が見えない。

(例) 補聴器をつけたら、耳がよく聞こえるようになった。

2 Nは V-れる <性質>

(1) この野菜はなまでは食べられない。

(2) この泉の水は飲めます。

(3) 悲しい映画かと思ったが、見てみるとけっこう笑える映画だった。

(4) この教室は300人は楽に入れます。

ものの性質として可能なことを表す。

【れる$_{2}$】

(1) 車にはねられて怪我をした。

(2) 表紙に美しい絵が描かれている。

受身を表す。

→**【られる$_{1}$】**

【ろく】

1 ろくなN…ない

(1) こんな安月給ではろくな家に住めない。

(2) 誰もパソコンが使えないのか。まったくこの課にはろくな奴がいないな。

(3) 上司には怒られるし、彼女にはふられるし、ろくなことがない。

(4) A:どうもごちそうさまでした。

B:いいえ、最近ろくなおかまいもできませんで。

満足のいくものではないこと、並以下でわるいことを表す。

2 ろくでもないN

(1) 花子はろくでもない男に夢中になっている。

(2) そんなろくでもない本ばかり読んでいるから、成績が悪くなる

のよ。

(3) A:そんなに仕事がいやなら、早いとこお見合いでもして結婚したらどう。

B:そんなろくでもないこと言わないでよ。

なんの値打ちもないことを表す。くだらない。つまらない。

3 ろくにV-ない

(1) テストも近いというのに、あの子ったらろくに勉強もしないんだから。

(2) あいつは昼間から酒ばかり飲んでろくに仕事もしないくせに、食べるときは人一倍食べる。

(3) せっかく海に来たというのに、彼女はろくに泳ぎもしないで肌を焼いてばかりいた。

(4) ろくに予習しなくたって、あの授業は先生がやさしいから何とかなる。

(5) そんな雑誌、ろくに読まなくてもだいたいどんなことが書いてあるかは見当が付くよ。

満足にしないことを表す。ほとんど…しない、十分に…しない。

【ろくろく】

[ろくろくV-ない]

(1) 電気屋さんで新製品のカタログを山ほどくれたが、どれもろくろく見ないで捨ててしまった。

(2) 兄はろくろく勉強もしないで、すんなり東大に合格してしまった。

(3) 彼女はその手紙をろくろく読みもしないで破り捨ててしまった。

(4) 隣に引っ越してきた人は、うちの前で顔を合わせてもろくろく挨拶もしないんだ。いったいどういうつもりなんだろう。

「ほとんど…しない」「十分に…しない」という意味。しないことに対する否定的な見方を表す。(2)〜(4)のように、「R-もしない」の形で否定の意味を強調することも多い。

【わ…わ】

1 …わ…わ(で)

(1) 昨日は山登りに行ったが、雨に降られるわ道に迷うわで、散々だった。

(2) 今週は試験はあるわレポートの締切は近いわで、寝る間もない。

(3) このごろ忙しくて、もう家事はたまるわ、まともな食事はしないわ……。

(4) あいつは高校生のくせにタバコは吸うわお酒は飲むわ無断外泊はするわ、悪いことばかり

していて親を泣かせている。

良くないことがらが一度に重なって起こるときに、それらを例示的に並べて困った気持ちを強調して表す。後にそのことで大変だ、困ったという内容が続く。

2 V-るわV-るわ

（1）新しくできた水族館に行ったら、人がいるわいるわ、魚なんか全然見えないぐらいの人出だった。

（2）忙しくて新聞がたまるわたまるわ、もう2週間分も読んでいない。

（3）部屋を久しぶりに掃除したら、ごみが出るわ出るわ、段ボール箱にいっぱいになった。

同じ動詞を繰り返して、存在や発生の量や頻度が予想外に多いことへの驚きを表す。後にそのことによって結果的に発生する事態が続くことが多い。

【わけがない】

[N　な／である　わけがない]
[Na なわけがない]
[A／V　わけがない]

（1）あいつが犯人なわけ(が)ないじゃないか。

（2）A：最近元気?
　　B：元気なわけ(が)ないでしょ。彼と仲直りできなくて、もう悲惨な状態なのよ。

（3）北海道で熱帯の植物が育つわけがない。

（4）こんな忙しい時期にスキーに行けるわけがない。

（5）勉強もしないで遊んでばかりいて、試験にパスするわけがないじゃないか。

（6）考えてみれば、彼女が彼に対してそんなひどいことを言うわけがなかった。

そういうことがらが成立する理由・可能性がないという強い主張を表す。話しことばでは「わけない」というように「が」が省略されることが多い。「はずがない」で言いかえられる。

【わけだ】

1 …わけだ <独話型>

[N　な／である　わけだ]
[Na なわけだ]
[A／V　わけだ]

前の発話や文脈が表す事実・状況などから論理的に導き出される結論を述べるのに用いる。話し手・書き手が何かについて説明したり解説したりするような場合に用いられる。

a …わけだ <結論>

（1）イギリスとは時差が8時間あるから、日本が11時ならイギリスは3時なわけだ。

（2）体重を測ったら52キロになっていた。先週は49キロだったから、一週間で3キロも太ってしまったわけだ。

（3）最近円高が進んで、輸入品の値段が下がっている。だから洋書も安くなっているわけだ。

（4）彼女は中国で3年間働いていたので、中国の事情にかなり詳しいわけである。

（5）私は昔から機械類をさわるのが苦手です。だから未だにワープロも使えないわけです。

「X。(だから) Yわけだ」の形で、YがXからの自然な成り行き、必然的に導き出される結論であることを表す。「だから」「から」「ので」などと共に用いられることが多い。

b …わけだ <言いかえ>

（1）彼女の父親は私の母の弟だ。つまり彼女と私はいとこ同士なわけだ。

（2）彼女はフランスの有名なレストランで5年間料理の修行をしたそうだ。つまりプロの料理人であるわけだ。

（3）彼は大学へ行っても部室でギターの練習ばかりしている。要するに講義にはほとんど出ていないわけだが、それでもなぜか単位はきちんと取れているらしい。

（4）父は20年前に運転免許を取っていたが車は持っていなかった。つまり長い間ペーパードライバーだったわけだ。

（5）私はおいしいものを食べている時が一番幸せである。言いかえれば、まずいものを食べることほどいやなことはないわけで、それが強制されたものだとなおさらである。

「X。(つまり) Yわけだ」の形で、XとYは同じことがらを意味しており、XをYで言いかえられることを表す。「つまり」「言いかえれば」「すなわち」「要するに」などとともに用いられることが多い。

c …わけだ <理由>

（1）今年は米のできが良くなかった。冷夏だったわけだ。

（2）彼女は猫を3匹と犬を1匹飼っている。一人暮らしで寂しいわけだ。

（3）姉は休みの度に海外旅行に出かける。日常の空間から脱出したいわけだ。

（4）山田君は就職難を乗り越えて大企業に就職したのに、結局3カ月でやめてしまった。本当にやりたかった音楽関係の仕事をめざすことにしたわけだが、音楽業界も就職はむずかしそうなので、心配している。

「X。Yわけだ」の形で、YがXの原因であるということを表す。「YだからX」と言いかえることもできる。

d …わけだ ＜事実の主張＞

（1） 4人とも車で来るわけだから、うちの前にずらっと4台路上駐車することになるね。

（2） 私は古本屋めぐりが好きで、暇があると古本屋を回っては掘り出し物を探しているわけですが、このごろはいい古本屋が少なくなってきたので残念に思っています。

（3） 私、国際交流関係のボランティア活動はすでに10年近くやってきているわけでして、自慢じゃありませんが、みなさんよりもずっと経験はあるわけです。そういう立場の者としてご提案させていただいているわけです。

（4） ねえ、聞いてくれる。昨日駅前に自転車置いて買い物に行ったんだけど、帰ってきたらなくなってるわけ。あちこち見てみたけど見つからなくて、しょうがないから警察に行ったわけよ。そしたら「鍵かけてなかったんじゃないの」なんて言われちゃって…。

自分が述べることは論理的な根拠のある事実だということを主張・強調するのに用いられる。話しことばでの使用が多く、特に論理的な根拠がない場合でも、終助詞的に多用されることもある。自分の考えを述べて相手を説得するときに用いられることが多い。

この用法は（2）（3）（4）のように、聞き手がその事実を知らなくても用いられることがあり、その場合は「あなたも知っているでしょうが」という意味が含まれて押しつけがましく聞こえることもある。

2 …わけだ ＜対話型＞

相手の発話を受けて、そこから論理的に導き出される結論を述べるのに用いる。その結論を相手に確認する場合と、その結論がすでに事実で、その論理的な裏付けを相手の発話から得て納得する場合がある。

a …わけだ ＜結論＞

［それなら…わけだ］

［それじゃ…わけだ］

［じゃ…わけだ］

（1） A：森さんは8年もフィンランドに留学していたそうですよ。
　　B：へえ、そうなんですか。それならフィンランド語は得意なわけですね。

（2） A：明日から2泊3日で熱海の温泉に行くの。
　　B：へえ、いいわね。じゃ、この間仕事のストレスからは解放されるわけね。

「それなら／それじゃ／じゃ…わけだ」の形で、相手の発話を受けてそこから必然的に導き出される結論であることを表す。

わけだ

b …わけだ ＜言いかえ＞

［つまり…わけだ］

［ようするに…わけだ］

（1） A：この間書いた小説、文学賞がもらえたよ。
　　B：あなたもようやく実力が認められたわけね。

（2） A：田中くん、富士山登山に行くのやめるんだって。帰った次の日がゼミの発表だから準備しなくちゃいけないらしいよ。
　　B：ふうん。要するに体力に自信がないわけね。

「つまり／要するに…わけだ」の形で相手の直前の発話を別の表現で言いかえるのに用いる。

c …わけだ ＜理由＞

（1） A：川本さん、車大きいのに買いかえたらしいよ。
　　B：へえ。子供が生まれて前のが小さくなったわけだな。
　　A：いや、そうじゃなくて、単に新車がほしくなっただけのことらしいけど。

（2） A：ぼく、今度一軒家に引っ越すことにしたんですよ。
　　B：いいですね。でも家賃高いんでしょう。ってことは、お給料、けっこうたくさんもらってるわけですね。
　　A：いや、それほどでもないですけどね。

相手が述べたことの理由や原因を表す。

d …わけだ ＜納得＞

［だから…わけだ］

［それで…わけだ］

［なるほど…わけだ］

［どうりで…わけだ］

（1） A：山本さん、結婚したらしいですよ。
　　B：ああ、そうだったんですか。それで最近いつもきげんがいいわけだな。

（2） A：彼女は3年もアフリカにフィールドワークに行っていたそうですよ。
　　B：そうですか。道理で日本の状況がよくわかっていないわけですね。

（3） A：隣の鈴木さん、退職したらしいよ。
　　B：そうか。だから平日の昼間でも家にいるわけだ。

（4） あ、鍵が違うじゃないか。なんだ。これじゃ、いくらがんばっても開かないわけだ。

（5） 田中さん、一か月で4キロやせようと思ってるんだって。なるほど、毎日昼ご飯を抜いているわけだわ。

「だから／それで／なるほど／道理で…わけだ」の形で用いられることが多い。「X。(だから)Yわけだ」などの形で、なぜYなのか不思議に思っていたが、相手の発話を聞いてその原因・理由となる情報が得られたので「そうか。XだからYなのだ」と納得する気持ちを表している。

自分で納得するので、「わけだ」の後に「ね」などを伴う必要はないが「…わけです」という丁寧な形の場合は、必ず「ね」「な」などが付く。

(1)では「山本さんは最近いつもきげんがいいが、その理由がわからない」という状況で、Aの「結婚したらしい」という情報を得て、「結婚したから最近きげんがいいのだ」と納得したことを表す。(4)は一人の発話だが、「ドアがどうして開かないのかわからない」という状況で、「鍵が違う」ということを発見し、「鍵が違うからドアが開かないのだ」と納得したことを表す。(4)(5)のように、自分で発見したり他人から聞いたりした情報を自分で述べて、それをすでに知っている事実と結び付けて納得を表すという使い方もある。

3 …わけだから

a …わけだから…はとうぜんだ

(1) 小池さんは何年もインドネシア駐在員だったわけだから、インドネシア語が話せるのは当然です。

(2) あの議員は履歴を偽って国民をだましていたわけだから、辞職は当然のことだ。

(3) A：あの人、クビになったんだってよ。
　B：当然よ。会社のお金、何百万も使い込んでるのがばれたわけだから。

「XわけだからYは当然だ」の形で、確実な事実Xを根拠にして、そのXが事実だからYは当然のなりゆきであるということを主張する。

b …わけだから…てもとうぜんだ

(1) 彼女は大学を出てからもう8年も経っているわけだから、結婚していても当然だろう。

(2) 彼は工学部を卒業しているわけだからパソコンが使えても当然なのに、まったく使えないらしい。

(3) これだけ利用者が増えているわけだからもっと安くしても当然なのに、電車やバスの運賃は値上がりする一方だ。

「XわけだからYても当然だ」の形で、確実な事実Xを根拠に考えるとYということがらが事実になってもおかしくないという意味。(2)(3)のように、実際にはYと反対の状況が起こっていて予測と食い違っているという場合に使われることも多い。

4 というわけだ／ってわけだ

(1) イギリスとは時差が8時間あるから、日本が11時ならイギリスは3時(だ)というわけだ。

(2) 彼女の父親は私の母の弟だ。つまり彼女と私はいとこ同士(だ)というわけだ。

(3) A：あしたから温泉に行くんだ。
　B：へえ、いいね。じゃ、仕事のことを忘れて命の洗濯ができるというわけだ。

(4) A：川本さん、車買いかえたらしいよ。
　B：あ、そう。子供が生まれて前のが小さくなったってわけか。

「わけだ1」や「わけだ2」の<結論>、<言いかえ>、<理由>の用法に「という」が結び付いた形。

【わけではない】

1 …わけではない

(1) このレストランはいつも客がいっぱいだが、だからといって特別においしいわけではない。

(2) 私はふだんあんまり料理をしないが、料理が嫌いなわけではない。忙しくてやる暇がないだけなのだ。

(3) 私の部屋は本で埋まっているが、全部を読んだわけではなく、買ってはみたものの開いたことさえないというものも多い。

(4) 来月から英会話を習うことにした。全然話せないわけではないのだが、日頃英語をしゃべる機会がないので、いざというとき口から出てこないのだ。

(5) 娘の外泊をただ黙って見のがしているわけではないが、下手に注意したらかえって反発するので、どうしたものかと考えあぐねている。

(6) 弁解をするわけではありませんが、昨日は会議が長引いてどうしても抜けられなかったのです。

(7) A：イギリスへ行ってしまうんだそうですね。
　B：ええ。でも別に永住するわけじゃありませんし、5年たったらまた帰ってきますよ。

(8) A：今度の日曜日に映画に行きませんか。
　B：日曜ですか。
　A：予定があるんですか。
　B：いえ、予定があるわけではないのですが、その日はうちでゆっくりしたかったので…。

現在の状況や直前の発言から当然導き出されることがらを否定するのに用いる。「だから といって」「別に」「特に」などとともに用いられることが多い。

（1）では「いつも客がいっぱいだ」ということから一般的に「料理がおいしい」ことが結論として導き出されるが、それは違うのだと否定している。「おいしいわけではない」は「料理がおいしいという結論はまちがいだ」という意味で、「料理はおいしくない」という直接的な否定に比べると間接的な否定になるので、婉曲的な表現になる。従って（8）のような場合には、「予定はありませんが」と言うよりも婉曲に断りを言うことができる。「そういうわけではないのですが」とも言える。また、（3）（4）のように「全部・みんな」「全然・まったく」などの語と一緒に用いると、部分否定になり、「少しは読んだ」「少しは話せる」という意味になる。

2 というわけではない
ってわけではない

（1）このレストランはいつも満員だが、だからといって特においしいというわけではない。

（2）私はふだんあまり料理をしないが、料理がきらい（だ）というわけではない。忙しくてやる暇がないだけだ。

（3）A：あした映画に行かない?
B：あした、か。うーん。
A：私とじゃいやだってこと?
B：いや、いや（だ）ってわけじゃないんだけど・・・。

（4）今日は学校へ行く気がしない。雨だから行きたくないというわけではない。ただ何となく今日は何もする気になれないのだ。

「わけではない1」に「という／って」が結び付いた形。（4）の「雨だから行きたくない」のように「XだからY」という論理が同じ文の中に明示されている場合は「わけではない」ではなく「というわけではない」を使う方が普通。

【わけても】

（1）この山は、わけても5月がうつくしい。

（2）そのクラスの学生はみんな日本語がうまいが、わけてもAさんは上達がはやかった。

（3）彼はスポーツ万能だ。わけてもスキーはプロなみだ。

（4）北風が身を切る季節になったが、給料日前の今夜はわけても寒さが身にしみる。

あるものの中でも特に、という意味。「も」がつかない形は現在ではまれ。書きことば。話しことばでは使わない。

【わけにはいかない】

1 V-るわけに(は)いかない

（1）ちょっと熱があるが、今日は大事な会議があるので仕事を休むわけにはいかない。

（2）カラオケに誘われたが、明日から試験なので行くわけにもいかない。

（3）体調を崩した仲間を残して行くわけにもいかず、登山隊はしかたなくそこから下山することになった。

（4）いくらお金をもらっても、お宅の息子さんを不正に入学させるわけにはいきません。

（5）もう30近い娘をいつまでも甘やかしておくわけにもいかないが、かと言って自立できる収入もないのに出て行けと放り出すわけにもいかない。

（6）A：うちで猫を飼っていること、大家さんには内緒にしてもらえませんか。
B：いや、そういうわけにはいきませんよ。契約ではだめなことになっているんですから。それにみんな猫の鳴き声で迷惑しているんですよ。

「そうすることは不可能だ」という意味を表す。単に「できない」という意味ではなく、「一般常識や社会的な通念、過去の経験から考えてできない、してはいけない」ということ。

「私はお酒が飲めない」は、体質的にお酒に弱くて飲めないという意味を表し得るが、「お酒を飲むわけにはいかない」の場合は、体質的に飲めないのではなく、例えば「今日は車で来ているから飲めない」のように飲んではいけないという意味になる。また、（6）の「そういうわけにはいかない」（＝内緒にするわけにはいかない）のように前の文を受けて使うこともある。

2 V-ないわけに(は)いかない

（1）他の人ならともかく、あの上司に飲みに誘われたら付き合わないわけにはいかない。断ると後でどんなめんどうな仕事を押しつけられるかわからないのだから。

（2）実際にはもう彼を採用することに決まっていたが、形式上はめんどうでも試験と面接をしないわけにはいかなかった。

（3）今日は車で来ているのでアルコールを飲むわけにはいかないが、もし先輩に飲めと言われたら飲まないわけにもいかないし、どうしたらいいのだろう。

（4）A：あんなハードな練習、もうやりたくないよ。疲れるだけじゃないか。
B：そういうわけにはいかないだろう。監督に逆らったらレギュラーから降ろされるぞ。

動詞の否定形に接続し「その動作をしないということは不可能だ＝しなければならない」という義務を表す。これも一般常識や社会通念、過去の経験がその義務の理由となる。（4）のように、前の文

や発話を受けて「そういうわけ」(＝やらないわけ)の形でも用いられる。

【わざわざ】

(1) 山田さんはわたしの忘れ物をわざわざうちまでとどけてくれた。
(2) わざわざとどけてくださって、ほんとうにありがとうございました。
(3) かぜだというから、わざわざみかんまで買っておみまいに行ったのに、そのともだちはデートにでかけたと言う。
(4) そんな集まりのためだけにわざわざ東京まで行くのはめんどうだ。
(5) 心配してわざわざ来てあげたんだから、もうすこし感謝しなさいよ。

何かのついでではなく、特にそのことだけのために何かをする、という様子や、義務ではないが好意・善意・心配などからそれをする、という様子を表す。「のだから」「のに」などとともに使うことも多い。

【わずか】

(1) さいふの中に残っていたのはわずか200円だった。
(2) その会議のその日の出席者はわずか5人だった。
(3) 社員わずか300人たらずのその会社がいま大きな注目を集めている。
(4) わずかな日数で大きな仕事をなしとげた。
(5) 飢饉のため、わずかな食糧で暮らしている。
(6) あの会社もわずかに社員8名を残すだけとなった。

うしろに数量を表す表現を伴って、話し手がその数量を少ないと思っていることを表す。また、「わずかに」の形で、量がきわめて少ない様子を表す。たった(の)。

【わたる】

→【にわたって】

【わり】

1 わりと／わりに

(1) わりとおいしいね。
(2) きょうの試験はわりとかんたんだった。
(3) ああ、あの映画? わりにおもしろかったよ。

ある状況から予想されることと比較すれば、という意味。たとえば(2)なら「いつもの試験とくらべて」「むずかしいだろうというみんなの予想に反して」などのような意味あいがある。プラス評価でもマイナス評価でも、基準どおりではないときに使う。かたい文にはあまり使わない。

2 わりに(は)

[Nのわりに]
[Naなわりに]
[A-いわりに]
[Vわりに]

(1) あのレストランは値段のわりにおいしい料理を出す。
(2) このいすは値段が高いわりには、すわりにくい。
(3) あの人は細いわりに力がある。
(4) ひとの作った料理に文句ばっかり言ってるわりにはよく食べるじゃないか。
(5) あまり勉強しなかったわりにはこの前のテストの成績はまあまあだった。
(6) 山田さん、よく勉強したわりにはあまりいい成績とは言えないねえ。

あるものの状態から常識的に予想される基準と比較すれば、という意味。プラス評価でもマイナス評価でも、基準どおりではないときに使う。かたい文にはあまり使わない。

【を…とする】

[NをNとする]

(1) その中学はその生徒を退学処分とするという決定をおこなったようだ。
(2) 我々は、ここに、我々の国を本日より共和制とすることを宣言する。

→【とする2】2a

【を…にひかえて】

[NをNにひかえ(て)]

(1) 試験を来週にひかえ、図書館は毎日おそくまで学生でいっぱいである。
(2) 出産をまぢかにひかえて、その母親ゾウに対する飼育係の人たちの気の使いようはたいへんなものだった。
(3) 首脳会談を5日後にひかえ、事務レベルの協議は最後の詰めにはいっている。

うしろのNには時間を表す名詞がはいる。あることが時間的にせまっている様子を表す。上の例のように、ある緊張感をともなうものごとのときに使うことが多い。書きことば。

【をおいて】

[Nをおいて]

(1) 都市計画について相談するなら、彼をおいて他にはいないだろう。
(2) マスメディアの社会への影響について研究したいのなら、この大学をおいて他にはない。
(3) もし万一母が倒れたら、何をおいてもすぐに病院に駆けつけなければならない。

「…を別にして／のぞいて」の意味。

（3）の「何をおいても」は「どんな状況でも」という意味の慣用句。

【をかぎりに】

［Nをかぎりに］

（1）今日をかぎりに今までのことはきれいさっぱり忘れよう。

（2）明日の大晦日をかぎりにこの店は閉店する。

（3）この会は今回をかぎりに解散することとなりました。

（4）みんなは声を限りに叫んだが、何の返事も返ってこなかった。

「今日」「今回」など時を表す語に付いて、「その時を最後にして」という意味を表す。発話時を含む時を表す語が使われることが多い。（4）は慣用的な言い方で「できるだけ大きな声を出して」の意味。

【をかわきりとして】

→【をかわきりに】

【をかわきりに】

［Nをかわきりに］

（1）彼女は、店長としての成功を皮切りに、どんどん事業を広げ、大実業家になった。

（2）その歌のヒットを皮切りに、彼らはコマーシャル、映画、ミュージカルなどあらゆる分野へ進出していった。

（3）太鼓の合図を皮切りに、祭りの行列が繰り出した。

「それを出発点として」の意味。それ以後盛んになったり、飛躍的に発展する様子を述べるのが普通。「…をかわきりにして」「…をかわきりとして」という形で用いることもある。

【をかわきりにして】

→【をかわきりに】

【をきんじえない】

（1）思いがけない事故で家族を失った方々には同情を禁じえません。

（2）戦場から切々と訴えかける手紙に涙を禁じえない人も多いだろう。

（3）母の死を知らず無邪気に遊んでいる子供にあわれみを禁じえなかった。

（4）この不公平な判決には怒りを禁じえない。

（5）期待はしていなかったが、受賞の知らせにはさすがに喜びを禁じ得なかった。

ある状況に対して、怒りや同情などの感情を感じないではいられないという意味を表す。抑えようとしてもそのような感情をもってしまうというときに使う。かたい書きことば。

【をけいきとして】

［Nをけいきとして］

（1）彼女は大学入学を契機として親元を出た。

（2）彼は就職を契機として生活スタイルをガラリと変えた。

（3）日本は敗戦を契機として国民主権国家へと転換したと言われている。

（4）今回の合併を契機として、我が社は21世紀をリードする企業としてさらに発展してゆかなければならない。

「入学」「就職」など動作を表す名詞に付いて、「何かの出来事がきっかけ・転換点となって」という意味を表す。「…をけいきに」「…をけいきにして」ともいう。

（例）彼女は大学入学を契機に（して）親元を出た。

書きことば。

【をこめて】

［Nをこめて］

（1）母親のために心をこめてセーターを編んだ。

（2）この花を、永遠に変わらぬ愛を込めてあなたに贈ります。

（3）彼女は、望郷の思いを込めてその歌を作ったそうだ。

（4）彼は、長年の恨みを込めて、痛烈な一撃をその男の顔面に食らわせた。

「愛や思いなどの心情をあるものに注いで」という意味を表す。名詞を修飾して「NをこめたN」となることもあるが、「NのこもったN」となることのほうが多い。

（例）子供たちが心を込めた贈り物をした。

（例）子供たちが心のこもった贈り物をした。

「を」のない次のような慣用的な表現もある。

（例）父は丹精込めて育てたその菊をことのほか愛している。

【をして…させる】

［NをしてV-させる］

（1）あのきびしい先生をして「もう教えることは何もない」と言わせたのだから、あなたはたいしたものだよ。

（2）あのわからず屋の親をして「うん」と言わせるには、ちょっとやそっとの作戦ではむりだよ。

（3）あのがんこ者をしてその気にさせたのだから、誠意のたいせつさをわかいあなたに教えられた気がする。

Nにはほとんどの場合ひとを表す名詞が来る。「…に…させる」「…を…させる」とおなじ意味だが、「をして」を使うと、それをさせることがむずかしい相手にそれをさせる、という意味の時が多い。古めかしくかたい言い方。

【をぜんていに】

［Nをぜんていに V］

（1） 彼女は記事にしないことを前提にそのことを記者に話した。

（2） では、そのことを前提に(して)、今後のことを話しあっていきたいと思います。

（3） 政府は、その問題の解決を前提に援助交渉にのぞむ方針をかためたもようである。

あることがらがなされるための条件、それがなされなければ次の段階に進めないような条件をみたした上で、という意味。たとえば(1)では「記事にしないこと」がその条件である。書きことば的。話しことばでは「…をぜんていにして／として」も使う。

【をたよりに】

［Nをたよりに V］

（1） あなたがいなければ、これからわたしは何をたよりに(して)生きていけばいいのですか。

（2） その留学生は、辞書をたよりに、ひとりで「橋のない川」を読みつづけている。

（3） 白いつえだけをたよりに、その人は70年生き、そして死んでいった。

（4） もちまえの行動力だけをたよりに、彼女はバイクで世界中を旅している。

「何かの助けを借りて」「何かに依存して」という意味。話しことばでは「…をたよりにして」「…をたよりとして」とも言う。よく似た表現に「…をたのみにして」「…をたのみとして」がある。

【をちゅうしんに】

［Nをちゅうしんに V］

（1） そのグループは山田さんを中心に作業を進めている。

（2） そのチームはキャプテンを中心によくまとまったいいチームだ。

（3） 太陽系の惑星は太陽を中心としてまわっている。

（4） 台風の影響は、九州地方を中心に西日本全体に広がる見込みです。

（5） このバスは、朝7時台と夕方6時台を中心に多くの便数がある。

「…を中心にして」の意味。あるものを中心においた行為・現象・状態の範囲をしめすときに使う。「…をちゅうしんにして」「…をちゅうしんとして」の形もある。書きことば的。

【をつうじて】

1 Nをつうじて V

（1） その話は山田さんを通じて相手にもつたわっているはずです。

（2） A社はB社を通じてC社とも提携関係にある。

（3） 現地の大使館を通じて外務省にはいった情報によると、死者は少なくとも100人をこえたもようである。

「…を経由して」という意味。なにかを経由して情報を伝えたり関係ができたりするということを述べるときに使う。伝わるのは情報・話・連絡などで、交通手段は使えない。

（誤） この列車はマドリッドをつうじてパリまで行く。

（正） この列車はマドリッド｛を通って／を経由して｝パリまで行く。

書きことば的。「…をとおして」とも言う。

2 Nをつうじて

（1） その国は一年をつうじてあたたかい。

（2） このあたりは四季をつうじて観光客のたえることがない。

（3） その作家は、生涯を通じて、さまざまな形で抑圧されてきた人々を描きつづけた。

時間を表す名詞に付いて、「ある一定の期間とぎれることなくずっと」という意味を表す。書きことば的。「…をとおして」とも言う。

【をとわず】

［Nをとわず］

（1） 彼らは昼夜を問わず作業を続けた。

（2） 意欲のある人なら、年齢や学歴を問わず採用する。

（3） 近ごろは男女を問わず大学院に進学する学生が増えている。

（4） 新空港の設計については、国の内外を問わず広く設計案を募集することとなった。

「それに関係なく」「それを問題にせず」という意味を表す。「昼夜」「男女」など対になった名詞が使われることが多い。次のように「Nはとわず」の形となることもある。

（例） (アルバイトの広告で)販売員募集。性別は問わず。

書きことば的な表現。

【をのぞいて】

［Nをのぞいて(は)］

（1） 山田さんをのぞいて、みんな来ています。

（2） 火曜日をのぞいて(は)だいたいあいています。

（3） その国は、真冬の一時期をのぞいて(は)だいたい温暖な気候だ。

（4） 全体的には、この問題を除いて、ほぼ解決したと言ってよいだろう。

「それを例外として」という意味を表す。書きことば的で、話しことばでは「…をの

ぞけば」や「…のほかは」の方をよく使う。

【をふまえ】

［Nをふまえ(て)V］

(1) いまの山田さんの報告をふまえて話し合っていただきたいと思います。

(2) 前回の議論をふまえて議事を進めます。

(3) そのご提案は、現在我々がおかれている状況をふまえてなされているのでしょうか。

(4) 今回の最終答申は、昨年の中間答申をふまえ、さまざまな角度から議論を重ねたうえで出されたものだ。

あることがらを前提や判断の根拠にしたり考慮に入れたりしたうえで、という意味を表す。かたい、書きことば的表現。

【をもとに】

［Nをもとに(して)］

(1) 実際にあった話をもとにして脚本を書いた。

(2) 人のうわさだけをもとにして人を判断するのはよくない。

(3) この地方に伝わる伝説をもとにして、幻想的な映画を作ってみたい。

(4) 調査団からの報告をもとに救援物資の調達が行われた。

(5) 史実をもとにした作品を書き上げた。

「あるものを材料・ヒント・根拠などにして」という意味を表す。名詞を修飾する時は(5)のように「NをもとにしたN」になる。

【をものともせずに】

［Nをものともせずに］

(1) 彼らのヨットは、嵐をものともせずに、荒海を渡り切った。

(2) ばくだいな借金をものともせずに、彼は社長になることを引き受け、事業を立派に立ち直らせた。

(3) 周囲の批判をものともせずに、彼女は自分の信念を貫き通した。

「厳しい条件を気にせず立ち向かって」という意味。後ろには問題を解決するという意味の表現が続く。書きことば。

【をよぎなくさせる】

［Nをよぎなくさせる］

(1) 台風の襲来が登山計画の変更を余儀なくさせた。

(2) 思いがけないゲリラの反撃が政府軍の撤退を余儀なくさせた。

動作を表す名詞に付いて、「そうせざるを得ない状態にする」という意味を表

す。好ましくない事態を引き起こすことを表す場合に用いる。

【をよぎなくされる】

［Nをよぎなくされる］

(1) 火事で住まいが焼けたため、家探しを余儀なくされた。

(2) 長時間の交渉の結果、妥協を余儀なくされた。

(3) 事業を拡張したが、売り上げ不振のため、撤退を余儀なくされる結果になった。

(4) これ以上の争いをさけるために全員が協力を余儀なくされた。

動作を表す名詞に付いて、「しかたなく、そうしなければならない状況になる」という意味を表す。書きことば。

【んじゃ】

［N／Na　(なん)じゃ］

［A／V　んじゃ］

(1) 雨なんじゃしかたがない。あしたにしよう。

(2) そんなに臆病なんじゃ、どこにも行けないよ。

(3) こんなに暑いんじゃ、きょうの遠足はたいへんだろうね。

(4) こんなにたくさんの人に見られているんじゃ緊張してしまうな。

「(の)では」の話しことば的表現。

→【のでは】

【んじゃない】

1 んじゃない

［N／Na　(なん)じゃない］

［A／V　んじゃない］

(1) あの人、山田さんなんじゃない?

(2) ほら、顔があかくなった。あなた、山田さんが好きなんじゃないの?

(3) それ、いいんじゃない?　悪くないと思うよ。

(4) かぎ?　テーブルの上にあるんじゃない?

(5) 佐藤さん?　もう帰ったんじゃない?

「のではないか」のくだけた形。上昇調のイントネーションで発せられる。(2)のように「んじゃないの」も可能。男性はこのほかに「んじゃないか」も使う。丁寧形は「んじゃありません」

→【ではないか2】

2 V-るんじゃない

(1) そんなところで遊ぶんじゃない。

(2) 電車の中で走るんじゃない!

(3) そんなきたないものを口にいれるんじゃない!

(4) そんな小さい子を突き飛ばすんじゃない!

(5) いじめられて大きな心の傷を

負っている子供に対して、そんなに頭ごなしに「もっと強くなれ」だなんて言うんじゃないよ。

聞き手の行為を禁止する表現。下降調のイントネーションで発せられる。話しことば。男性の方がよく使う。女性は丁寧形の「んじゃありません」を使うことの方が多い。

【んじゃないか】

[N／Na　(なん)じゃないか]
[A／V　んじゃないか]

(1) 明日はひょっとしたら雪なんじゃないか。雪雲が出てきたよ。
(2) あの人、野菜がきらいなんじゃないか。こんなに食べ残しているよ。
(3) あの子、寒いんじゃないかな。くしゃみしてるよ。
(4) 田中さんも来るんじゃないか。鈴木さんがつれてくるって言ってたから。

「(の)ではないか」の話しことば的表現。丁寧形は「んじゃありませんか」

→【じゃないか 2】

【んじゃないだろうか】

[N／Na　(なん)じゃないだろうか]
[A／V　んじゃないだろうか]

(1) こんなことが起きるなんて信じられない。夢(なん)じゃないだろうか。
(2) あの人、ワインの方が好きなんじゃないだろうか。ワインばかり飲んでたよ。
(3) いくら浅い川だといっても、あのへんは深いんじゃないだろうか。
(4) 雪が降っている。故郷ではもうずいぶん積もったんじゃないだろうか。

「(の)ではないだろうか」の話しことば的表現。丁寧形は「んじゃないでしょうか」

→【ではないだろうか】

【んじゃなかったか】

[N／Na　(なん)じゃなかったか]
[A／V　んじゃなかったか]

(1) あの人はもっと有能なんじゃなかったか。
(2) 二度としないと誓ったんじゃなかったか。

「(の)ではなかったか」の話しことば的表現。

→【ではなかったか】2

【んだ】

1 …んだ

[N／Na　なんだ]
[A／V　んだ]

(1) A：どうしたの。元気ないね。
　　B：かぜなんだ。
(2) A：どうしてさっき山田さんとしゃべらなかったの?
　　B：あの人はちょっと苦手なんだ。
(3) やっぱりこれでよかったんだ。
(4) コンセントが抜けてる。だからスイッチを入れてもつかなかったんだよ。

「のだ」の話しことば的表現。丁寧形は「んです」

→【のだ】

2 V-るんだ

(1) かぜなんだから、早く寝るんだ。
(2) さっさと食べるんだ。
(3) 呼ばれたら返事をするんだよ。
(4) いいかい、なるべく早く迎えにくるようにするから、おとなしく待ってるんだよ。
(5) 人質の安全が第一だ。ここは犯人の要求どおりにするんだ。

指示・命令を表す。おもに男性が使う。女性は「早く寝るんです」や「早く寝るの」のように「んです」や「の」を使うことが多い。(3)(4)のように「よ」が付くと命令の調子が弱くなる。

【んだった】

[V-るんだった]

(1) あと10分あれば間に合ったのに。もう少し早く起きるんだったな。
(2) A：ひどい成績だね。
　　B：うん、こんなことになるのなら、もう少し勉強しておくんだった。
(3) あれ?　パンがたりない。もっと買っておくんだったな。
(4) こんな事態になる前に、何か手を打っておくんだった。

「のだった」の話しことば的な形。

→【のだった】

【んだって】

(1) 山田さん、お酒きらいなんだって?
(2) あの店のケーキ、おいしいんだって。

→【って】5

【んだろう】

[N／Na　なんだろう]
[A／V　んだろう]

(1) 子どもたちがたくさん遊んでいる。もう夏休みなんだろう。
(2) A：あの人、酒ばかり飲んでたね。
　　B：よっぽど好きなんだろうね。
(3) 田中さんはずっと笑いっぱなしだ。何がそんなにおかしいんだろう。
(4) A：君も行くんだろう?

B：はい、行くつもりです。

「んだ」と「だろう」が組み合わされた形。

→【のだろう】

【んで】

[N／Na　なんで]

[A／V　んで]

（1）かぜなんで、今日は休みます。

（2）雨が降りそうなんで洗濯はやめときます。

（3）あんまりおいしかったんで、ぜんぶ食べてしまった。

（4）残った仕事はあした必ずかたづけるんで、今日は勘弁してください。

（5）急いで作ったんで、おいしくないかもしれませんよ。

「ので」のくだけた言い方。かなりぞんざいに響くので、目上に対しては使えない。

→【ので】

【んです】

[N／Na　なんです]

[A／V　んです]

（1）A：どうしたんですか。元気がありませんね。

　　B：ちょっとかぜなんです。

（2）A：どうしてさっき山田さんとしゃべらなかったの?

　　B：あの人はちょっと苦手なんです。

（3）A：どうしたの?　退屈?

　　B：いえ、ちょっとねむいんです。

（4）コンセントが抜けています。だからスイッチを入れてもつかなかったんですよ。

「んだ」の丁寧形。「のです」とも言う。

→【のです】

50音順索引

あ

い

う

え

お

か

き

く

け

こ

さ

し

す

せ

そ

た

ち

50音順索引

な

ひ

ふ

へ

ほ

ま

み

む

め

も

を

ん

末尾語逆引き索引

ある

いい

いる

か

から

する

だ

なら

なる

のに

ば

意味・機能別項目索引

著者紹介

グループ・ジャマシイ


砂川　有里子（代表）
筑波大学人文社会科学研究科教授


駒田　聡
京都教育大学教育学部助教授


下田　美津子
神戸松蔭女子学院大学国文学科教授


鈴木　睦
大阪外国語大学外国語学部教授


筒井　佐代
大阪外国語大学外国語学部助教授


蓮沼　昭子
姫路獨協大学外国語学部教授


ベケシュ　アンドレイ
リュブリャーナ大学文学部教授


森本　順子
京都外国語大学外国語学部教授

教師と学習者のための
日本語文型辞典

●編著者　グループ・ジャマシイ

1998年２月２日　第１刷発行
2005年11月22日　第12刷発行

版元　くろしお出版
〒112-0002
東京都文京区小石川3-16-5
TEL.03-5684-3389
FAX.03-5684-4762
E-mail: kyv04312@nifty.com

装丁　小林はる代
組版　オーイ・アート・プリテンティング
印刷　モリモト印刷

ISBN4-87424-154-9　C3081

ISBN4-87424-154-9 C3081 ¥3300E





定価 ＝ 本体価格 3,300円 + 税







NIHONGO

日本語
教師と学習者のための
文型辞典

BUNKEI ZITEN

【グループ・ジャマシイ　編著】
砂川有里子(代表)／駒田聡／下田美津子／鈴木睦
筒井佐代／蓮沼昭子／ベケシュ・アンドレイ／森本順子











くろしお出版